

Muv—Luv Alternative —the guardian of universe—

天秤座の暗黒聖闘士

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

多くの犠牲を出した末、オリジナルハイヴを攻略した白銀武は、因果導体から解き放たれ、元の己の世界へと戻る瞬間、あることを願った。

—もし、もしももう一度機会があるのなら、もう一度この世界へと戻れるのなら…、その時はだれも死なせない、全員護り抜いて見せる。例え自分がヒトじゃなくなっても—

そして別の世界、別の時間軸で、世界を滅ぼす魔獣の軍勢と戦い命を落とした守護神は、死の瞬間に彼の祈りを聞く。

人類を救った英雄と、地球を救った人造の守護神、二人が出会った時、新たな希望が紡ぎだされる—。

# 目次

プロローグ

プロローグ1 終わり、そして始まり

プロローグ2 予兆

第一章 守護神降臨

第1話 邂逅

第2話 飛翔

第3話 戦闘

第4話 改変

第5話 落涙

第6話 救出

第7話 夢

第8話 佐渡島

第9話 病棟にて

第10話 尋問

第11話 錬鉄

第12話 探索

第13話 朝食にて

第14話 皇帝

第15話 母艦

第16話 石版と勾玉

第17話 数式

第18話 予感

第19話 傍観者達

第20話 氷原

338 322 307 289 270 246 227 206 188 172 157 144 130 116 100 86 69 52 37 21 13 1

第21章	深まる謎	353
第22話	予知夢	368
第23話	上映会	386
第24話	祖国復興	405
第25話	消滅	424
エピソード	舞台は移り…	444
第二章	Ischwarzesmarken   大怪獣空中決戦	
プロローグ	Der Anfang	456
第1話	Der Ausbruch des Krieges	
開戦		469
第2話	Kategorie   窮地	486
第3話	Rettung   救出	503
第4話	Isolierung   孤立	519
第5話	Krise   危機	534
第6話	Krieg der Abreibung   消耗戦	
551		
第7話	Trennung   別れ	565
第8話	Das Wachen   目覚め	593
第9話	Advent   降臨	611
第10話	Omen   前兆	640
第11話	Bizarre   猟奇	660
第12話	Alptraum   悪夢	677
第13話	Stasi   国家保安省	696
第14話	Traum   夢	713

# プロローグ プロローグ1 終わり、そして始まり

それは

かたられることのない、かたられるはずのない

もうひとつの

とてもちいさな、とてもおおきな、とてもたいせつな

あいとゆうきと

さいごのきぼうのものがたり

2002年1月2日

その日は世界の全人類にとって、記念すべき日となった。

地球最大のハイヴ、カシユガルオリジナルハイヴの攻略、通称『桜花作戦』―、人類の悲願とも言えるBETAからの地球奪還へ向けた輝かしい一歩が示された特別な日であった。

地球に蔓延るBETAの本丸であるオリジナルハイヴ、その最奥にてBETAを指揮する『あ号標的』、その殲滅に成功すると言う、人類にとって華々しい勝利を手にする事が出来た日であったのだ。

だが……、その戦いの中で失われた命は、決して少なくない。否、生き残った人間の方が少ないと言っても良いだろう。生き残った人間は僅か三人、そのうち一人、00ユニットである鑑純夏は帰還後にその機能を停止し、実質生存者は二人と言っている。

そして、その数少ない生存者の一人である衛士、白銀武もまたこの

世界から『消滅』しようとしていた。

自分を此処まで導いてくれた恩師と、もう一人の桜花作戦の生き残りである少女にみおくられてー。

元々白銀武はこの世界の人間ではない。

既にこの世界のオリジナルの白銀武はBETAに惨殺されており、此処に居る自分あくまで『この世界』の鑑純夏の願いによりこの世界に召喚され、因果導体として活動していた別世界の顔と名前の同じ『別人』に過ぎない。

そして、自分を因果導体としてこの世界に留めていた鑑純夏はもう居ない。ならば、因果導体で無くなった自分はこの世界から消え去り、元の世界へと戻るしかない。

その後世界は『修正』を行うことだろう。『シロガネタケル』という異物が消滅した後、彼に関する一切の記憶、記録を消し去り、彼の居たと言う痕跡全てを消し去ることだろう。

XM3を発案した事実も、そして桜花作戦を勝利に導いたのも全て、自分ではない『誰か』の功績へと変更され、自分がいたと言う事実全ては綺麗さっぱり無くなるだろう。

「アンタは、アンタ達は間違いなくこの世界を救ったのよ……」

恩師の精一杯の称賛の言葉と、

「また、ね……」

少女の別れの言葉を最後に、白銀武は『世界』から、消えた……。消え去る寸前の刹那、武の脳裏に無数のヴィジョンが浮かび上がる。

それは、自分が共に過ごした少女達の姿、共に生き、共に戦い、そして、自分を残して死んでいった少女達の姿――。

鑑純夏、御剣冥夜、珠瀬壬姫、彩峰慧、榊千鶴、鎧衣美琴……。

あの戦乱の世界で共に生き、共に戦い、そして、助ける事が出来なかった少女達の顔が、次から次へと脳裏に浮かんでくる。少女達と過ごした思い出、交わした言葉……、その全てがさながら走馬灯のように蘇ってきた。

だが、その光景の中には自分の記憶に存在しない映像もあった。

見た事の無い光景、記憶にあるはずの無い場面…。だが、何故か武はその光景を“知っていた”。そして、そのヴィジョンを見ている内に、彼は確信した。

これは己の、幾度も幾度もループしていく中で、忘れてしまった自分の記憶である、と…。

世界を渡り、少女と出会い、愛し合い、別れ、そして死ぬ…。何度も何度も繰り返してきたその軌跡の記憶であると…。

武はヴィジョンを全て見た後、呆然と呟いた。ああ、ようやく思い出した、と…。

彼女達を愛していた、純夏だけじゃない、冥夜も、たまも、彩峰も、委員長も、美琴も、皆…。そして守りたかった、皆を、この手で、誰ひとり欠けることなく…。

なのに救えなかった、皆死なせてしまった。彼女達だけではない、恩師も、上官も、戦友も、そして、名もなき多くの兵士達も…。

それらの犠牲で得られたのは、たった30年という死刑執行の猶予期間のみ。これからさらにハイヴの攻略が進み、人類がBETAから解放される可能性も無いわけじゃない。この30年という寿命も延びる可能性がある、だが、その為にまたさらにどれだけ多くの血と涙が流れると言うのか…。

白銀武は悔しさのあまり涙を流す。

力が足りなかった。

武は、心の底から痛感する。

自分には、力が足りなかった。圧倒的な力が。幾万幾億のBETAをモノともしない程の強力な力が…。

知識だけではだめだ、00ユニットや凄ノ皇でもまだ足りない。

自分に力が、BETAをも凌ぐ、自分の愛する少女達を、戦友達を守るほどの力さえあれば…。

だが、それも今になって言っても仕方のない事だ。白銀武はこのまま消える。

この世界から元の世界へと戻り、ただの平凡な学生としての日常に戻るのだ。

…だが、もしも、もしももう一度機会があるのなら、奇跡というモノが、本当にあるのなら…。

…今度こそ、今度こそ彼女達を護り抜く…。たとえば自分が、もはや人間で無くなっても…。

それが、白銀武が世界から消える刹那に願った事だった。

それとは異なる世界、異なる時間軸で…。

そこは一面が炎で包まれていた。建物も、地面も、何もかも全てが燃え上がり、さながら焦熱地獄の如き様相をさらしていた。

コンクリートで造られた建物も、1000年を超える歴史を誇る建造物も、皆等しく燃えている。その場に降り注ぐ雨すらも、燃え上がる炎を消す事は出来ない。

その炎の中、“彼”は空を見上げていた。月の無い漆黒の雲に覆われた空を、何も言わずにジッと睨みつけていた。

雨雲が広がる黒き空、その雲の合間から、何かが姿を現した。

ソレは、シルエツトだけ見るならば鳥、あるいは中生代に生息していた翼竜を思わせるフォルムをしていた。だが、その姿はそんな物とは比較にならない程恐ろしく、おぞましいモノであった。

100メートルはあるであろう蝙蝠の如き翼、羽毛一つ生えていない滑りを帯びたハ虫類の如き皮膚、猛毒をしみ込ませた爪を備えた後ろ脚、矢じりの如き形状の頭部と鮫の如く鋭い牙…。

それは現存する鳥類、否、現存するありとあらゆる生物とも全く異なる、さながら神話に出てくる魔獣か悪魔の如き化け物であった。

そんな“怪獣”が暗雲を突っ切って次々と姿を現す、1、10、100…空を覆う魔獣の群れは最終的に空を覆い尽くす程の数へと膨れ上がる。

その怪獣の視線は唯一つ、“彼”へと注がれていた。幾度も幾度も



自分達の同胞を殺してきた憎き仇敵へ、つい先ほども己達の王たる「邪神」を屠った彼へと…。

空に集いし魔獣の群れに「彼」は、それでも怯むことなく目の前の魔獣達を睨み返す。魔獣は傷を負い、満身創痕の「彼」の姿にまるで歓声を上げるかのように金属を擦り合わせたかのような甲高い鳴き声で騒ぎ始めた。

既に勝利を確信したかのような悪魔の軍勢、これから己の仇敵の肉を食い破り、鬪り殺しにできる事への歓喜に震える鳴き声を聞きながら、「彼」は己の後ろを、己の背後へと一度視線を向ける。

そこにいたのは三人の女性と一人の男子。彼女達はジツと自分の背中を見つめている。

その視線にあるのは悲しみでも、嘆きでも無い。

ただ一つ「信じる」という思い。

「彼」が勝利する事を信じる、「彼」が生きて再び帰ってくる事を信じると言う真摯な、そして確かな思いが言葉が無くても彼に伝わってくる。

その思いを受け止めて、その心を受け止めて「彼」は目の前を飛び交う悪魔の軍勢へと目を戻す。

痺れを切らしたのか一体の悪魔が自分へ向けて襲いかかってくる。その顎で「彼」の肉を食いちぎり、血を啜る為に上空から急降下してきた。

彼は己に襲い掛かる魔獣を冷静に見据えながら……、己の左腕でその魔獣の首を鷲掴みにした。

寸での所で首を掴まれ締め上げられる魔獣は苦しきのあまり絶叫して暴れる、が、「彼」が左手にさらに力を込めた瞬間、骨が押し折れる音と共に沈黙し、ぐったりと項垂れて動かなくなった。

「彼」は左腕で掴んだ魔獣の死骸を投げ捨てる。死骸は燃え盛る炎の中へと放り込まれ、死骸は炎に炙られて段々と炭化し始める。

「彼」は再び空へと視線を戻す。仲間を殺されさらに興奮したのかさらに騒がしく喚きだす巨鳥の群れに、「彼」は唸り声を上げながら睨みつける

『護ってみせる—』

足が一步前へ出る。瞬間、周囲に地震を思わせる地響きが響き渡る。

『この星も、この星で生きる命も全て、必ず—。』

それを合図とするかのように魔獣の群れが彼目がけて殺到する。その数はもはや、数えることすらもできないほどに…。

『たとえこの命がこの戦いで潰えようとも…!!』

自分目がけて襲い来る魔獣の群れ、*“彼”*は魔獣から目を離さずに高らかに咆哮し、魔獣の舞い踊る暗雲渦巻く天蓋へと唯一人飛び立った—。

長い戦いが終わった。

無限とも言うべき魔獣の群れは、既に空には無い。街を覆う炎は雨によつて既に消え、燃え残った鉄骨にコンクリートを野外に晒している。

そんな焼跡の中、*“彼”*はうつ伏せに倒れていた。その身体には無数の傷が刻まれ、腹には大きな穴が貫通し、あちこちの肉が抉りとられ、切り裂かれた傷からは止まることなく血液が流れ出している。傍目から見てももはや手遅れとしか言いようのない、そんな有様であった。

無理も無い、あの魔獣の群れとの戦いの時には、既に*“邪神”*との戦いで腹を貫かれ、右腕を奪われており満身創痍であったのだ。途中人間の援護があったとは言っても奴らを全滅させられたのは奇跡に

近いだろう。

もはや死に逝く身となった「彼」は突如何者かの気配を感じ、薄く  
瞼を開いた。

そこに居たのは自分を見送った人間の男女四人…、否、それだけで  
はない。

男、女、子供、老人…、ありとあらゆる人間が自分を見上げてい  
る。

自分をジツと見上げる彼等の瞳…、そこには己の街を、家を焼かれ、  
家族を奪われたという悲しみも、彼に対する憎しみも欠片も無かつ  
た。

ただ「ありがとう」という感謝の念、そして「彼」が助からないこ  
とへの悲しみの念…。

そんな彼等を「彼」は黙って見下ろしていた。と、群衆の一番前に  
立っていた一人の女性が、「彼」の側へと近付いてくる。

「彼」は彼女の事を知っていた。恐らく、この時代のあらゆる人間  
の中でも、最も「彼」の事をよく知り、彼との絆を結んだのは彼女だ  
けだろう。思えばこうしてしっかりと顔を合わせたのは、4年も前の  
事になるだろうか…。

かつては少女だった彼女も、今ではすっかり大人へと成長してい  
る。そんな彼女の姿を見降ろす「彼」に、彼女はゆつくりと口を開  
く。

彼女はもはや「彼」と意思疎通する事は出来ない。だが今だけは、  
彼女が自分に何を言っているのかが、はつきりと分かる気がした。

—ありがとう、そして、さようなら…、

彼女の言葉に、この場に居る全ての人間の心からの言葉に、「彼」  
はまるで頷くように微かに首を動かした。そして、ゆつくりと瞼を閉  
じると、「彼」はそのまま、二度と動く事は無かった。

意識が遠のいていく中、「彼」は己の命の灯が消えていくのを感じ  
ていた。己の身体が崩れ、段々と細かい粒子となって、大地へ、空へ、  
海へと還っていくのを…。

「それでいい、自分の役目は終わった—」彼は心の奥底で呟いた。

“もはやこの世界に奴等はいない。たとえ再び現れても、その時はまた――”

己自身が呼び出されるだろう、そう呟いた瞬間、真つ暗な暗闇の中で“彼”は誰かの声を聞いた気がした。

“誰だ――?”

彼は瞳を開いて周囲を見渡した。

そこは一面漆黒で彩られた空間、何も見えず、何も聞こえず、何も臭わない、完全なる無を体現したかのような空間であった。

彼の身体もまた黒で塗りつぶされて見る事が出来ない。否、あの世界でもう彼は死んでいるので肉体そのものは既に崩れ去って無くなっており、今此処にあるのは彼の魂だけなのかもしれないが……。

“ならばここが人間の言うところのあの世なのか――?だがたどえそうだとしても何故私は此処に……”

“彼”がそんな疑問を抱いた瞬間……

“……護りたい、救いたい、……を――”

暗闇の中で微かな、だがはつきりと誰かの声が聞こえる。

姿は見えない、だが声だけは“彼”にはつきりと届いている。

“誰だ――?”

“彼”は声の聞こえる方向へと視線を向ける。と、そこには小さな、今にも消えてしまいそうな本当に小さな光の粒が闇の中で微かに光を放っている。

“あれか――?”

“彼”は声が聞こえたであろうそこへ、ゆっくり、ゆっくりと進んでいく。既に肉体は無く、腕も足も無いはずであるのに何故か前へと進む事が出来る。やはり今の自分は魂なのであるだろうか?“彼”はそんな事を考えながら前へと進み、そしてその小さな光のすぐ傍へと、辿りついた。

“……?なんだ……?”

ふと暗闇の中で、武は何か己に近付いてくる気配を感じた。

“あの世界”から消え去った武は、いつの間にかこの暗黒の空間の中を漂っていた。

音も、色も、匂いも、何も無い。ただ黒一色に染め上げられた空間、そこに自分がある事に、武は特に驚きもしなかった。

ここは恐らく虚数空間、恩師香月夕呼が言っていた空間だろう。

辺りは暗い、何も見えない、だが、鍛えられた衛士としての勘が、武に何かがちらに近付いてきている事を告げていた。

“一体何が？この空間に、自分以外の誰かが居るのか？”

自問自答しながら武は油断なく辺りを探る。だが、この暗闇には自分以外何も見えない、何も聞こえない。誰かが近付いてきている姿は何処にもない

“気のせい、なのか―？”

戸惑いながら武が気のせいかと考えた瞬間―。

突如地響きと共に暗黒の空間が揺れ、武の目の前に巨大な “何か” が出現した。

“なっ!?何だ!?”

突如として出現したそれに、武は思わず後ずさった。だが、武の前に立つ巨大なそれは、自分に襲いかかるのでも、叩き潰すのでも無く、ただただ自分を見降ろしているだけだった。

その巨体からすればまるでアリのように小さい白銀武を、ジツと見降ろし、まるでこちらをジツと観察しているかのようであった。

ふと、その巨大な何かは腕らしきものを武へと伸ばして、武に触れるか触れないかのところで腕を止め、そのまま何もせずにジツと動きを止めた。

瞬間、武の脳裏に何かのヴィジョンが流れ込んでくる。急激に流れ込んでくる情報量の多さに武は思わず頭を抱えて地面に膝をついてしまう。

“グッ!?な、何が…!?”

脳裏に浮かぶ光景、そして流れ込んでくる情報…。そのどれもが武の記憶に無い、それどころか “あの世界” と “元の世界” では全く見聞きしたことが無いモノばかりであった。



いモノばかりであった。

地球外生命体BETAの侵略、BETAと人類の戦い、そして敗北、進撃するBETAによって食い荒らされる世界、その中で抗う人間達…。

その抗う人間の中に、この少年の姿があつた。世界を救うため、愛する人達に死んでもらいたくない為にBETAと戦い、抗い、それでも大切なモノを護る事が出来ずに絶望の淵に落とされて、それでもなお戦い続け、幾多の犠牲の果て、人類に勝利をもたらした―。

このヴィジョンは少年の記憶、幾多の絶望を乗り越え、幾多の屍を乗り越えてきた一人の英雄の軌跡―、*彼*は理解すると再び目の前の少年へと視線を落とす。

少年は微動だにせず、*彼*の姿を眺めていた。その視線には目の前の彼への恐怖も敵意も無い。ただ、彼は泣いていた。顔色も、表情も変えず、ただこちらを見上げて涙をこぼしていた。

そして、少年は、*彼*に何かを呟いた。

聞き逃してしまいそうな程に小さな言葉、だが、*彼*は少年の呟いた言葉を確かに聞きとった。

そして、*彼*は少年の言葉に答えるように、高らかに咆哮を張り上げた。

瞬間、虚数空間に眩い白い光が満ち、武と、*彼*の姿を覆い隠していく。そして、光が晴れた時、二人の姿は虚数空間から跡かたも無く消え去っていた。

それは、ひよっとしたら奇跡だったのかもしれない。

幾億、幾兆もの祈りと叫びが、世界を、未来を護りたいという純粋なる願いが起こしたたった一つの奇跡…。

愛する人達を守る為に戦い続けた英雄と、

星とそこに生きる全ての生命を守る為に戦い続けた守護神の

全く異なる世界の二人の運命が、此処に交わった瞬間に、

世界を救うためのオトギバナシが、再び幕を開ける――。



## プロローグ2 予兆

これは、本来ある歴史とは全く別の道を辿った世界…。

冷戦時代にアメリカと肩を並べたソ連が未だに存在し、敗戦によって崩壊した大日本帝国が日本帝国と名を変えて今なお存続し続けているという、本来の歴史と少し違う世界で…。

この世界は今、死の危機に瀕していた。それもこの星のモノではない、BETAという外からの侵略者たちによって…。

1967年、月面サクラボスコで確認された人類に攻撃的な地球外生命体BETAは、1973年にカシユガルへと降り立ち、瞬く間にユーラシア大陸を蹂躪、そして1998年には海を隔てた日本へと上陸し、西日本を壊滅させたうえで佐渡島と横浜にBETAの巣窟たる『ハイヴ』を建設、日本帝国も今や危急存亡の時を迎えていた。

圧倒的物量を誇るBETAの目的は、地球に存在する資源の強奪。地球のありとあらゆる土地を蹂躪し、生物を殺し、そして手に入れた資源をハイヴへと持ち帰り新たなBETAを作り出す…、その繰り返しだ。

無論、人類もただ手をこまねいているわけではない。対BETA戦用に開発された新兵器、『戦術機』を用いて迫りくるBETAの軍勢を迎撃していた。

だが、BETAの圧倒的物量、光線級と呼ばれるBETAの登場による制空権の喪失、そして世界各国が連携出来ず、互いに足をひっぱ合い合いながらバラバラでBETAとの戦争に突入した結果、人類軍は次々と敗北、多くの国々が国土を失い、多くの民が故郷を奪われ、難民として残された国へと散っていった。

そしてBETAは悠々と世界中を蹂躪し、遂にはユーラシア本土に20を超えるハイヴが建設されるに至ってしまった。

宇宙からの侵略者とのいつ終わるとも知らぬ泥沼の戦い…、それは未だ終わることなく世界中で繰り返り広げられていた…。

1998年、太平洋沖…。

戦火に包まれBETAに蹂躪されつつある大地とは異なり、海はいつもと変わらず静かな水面を湛えている。今のところ海上、海中を移動する事が可能なBETAが殆ど存在しないが故であろう。BETAは地中深くを潜行して大陸間を移動するが故、今のところ海洋はBETAの手付かずの領域なのである。あくまで、『今のところは』であるが…。

既に太陽は沈み、空は夜の帳が下ろされて同じく海も墨汁を垂らしたかのような漆黒に染め上げられている。

その漆黒に染められた海の底、光届かぬ深海で、巨大な影がゆつくりと動いていた。

巨大な影は長年の堆積物とサンゴに覆われ、一見すると海に転がっている岩石の一つにしか見えない。

だが、普通の岩石とは違い、その巨大な岩石は何と動いていた。それも潮流や海流に流されて動いているのではなく、それにすら逆らつてさながら一つの巨大な生き物であるかのようにゆつくりゆつくりと移動していたのだ。

本来ならばあり得ない。岩石が、まるで自分の意思を持っているかのように動く事など。この光景を見た者は誰であろうと啞然とするであろう

だが、凄まじい水圧から生身の人間では来る事も適わないこの深海では、それを見咎めるのは深い海の底を泳ぎ回る異形の深海魚しかない。そして、深海魚達もまた移動する岩石を意にも介さず悠々と闇の世界を泳ぎ回っている。

岩石はそのまま海の底をゆつくりと移動し、やがて段々と海面に向けて浮上し始めた。

日本帝国最南端に位置する島、硫黄島。太平洋戦争戦時中、日本軍と米軍との激戦が繰り広げられた南端の島。今ではすっかり戦争の

傷跡は無くなったものの、日本帝国南方の防衛線という事でこの島には帝国軍の駐屯地がおかれ、軍事関係者以外の人間は許可なく立ち入ることは禁じられており、それは帝国本土にBETAが上陸した今も変わってはいない。

帝国本土にハイヴが建設され、帝国陸軍、海軍共にBETAとの戦いで四苦八苦している中、この硫黄島駐屯地は今のところBETAの侵攻は無い。とはいえ何時敵の侵攻があるかも分からず、駐屯する軍は気を緩ませること無く周囲の海域の監視に専念している。

その硫黄島駐屯地の通信室にて、若い駐屯兵、米森良成大尉は壮年の佐官の男、上司である本郷圭介と共にいた。巡視船、あるいは本土からの通信を受け取る、あるいは通信を送る中継としての任務である米森は通信装置の前に座りながら何をすることもなく、本郷は通信室の窓からまるで墨を垂らしたかのように漆黒に染まった海を眺めている。

「巡視船のじまはそろそろ戻る頃か…。やれやれこんなご時世だからかもしれないが、どうにも心配で眼が冴えてしまうよ」

現在硫黄島周辺の領海警備の為、駐屯地の保有する巡視船の一隻、のじまが出向している。何事もなければもう既に領海警備を終えて駐屯地への帰還の途についている頃であろう。が、BETAが跋扈するこの時代、『何事も無く』などという事はほぼあり得ないと考えた方がいい。いつどこで何と遭遇するのか分かったものではないのだから…。

「仕方がありませんよ。今や帝国本土はBETAに侵攻されて風前の灯、いつ滅亡するか……あ」

うっかりと口を滑らしてしまった米森は慌てて口を閉じる。が、本郷は特に起こった様子も無くクツクツと可笑しげに笑い声を洩らすだけであった。

この硫黄島駐屯地ならばまだこの程度のセリフは悪い冗談で済むだろうが、コレが万が一本国、それも帝都辺りで眩こうものなら冗談抜きで命に関わる。

何しろ帝都にて征夷大將軍の警護を任されている『斯衛隊』、そして

帝都守護を任されている『帝都防衛第一師団』は世界トップクラスの衛士を抱える歴戦の部隊、それゆえにプライドも他の部隊と比べて抜きんでて高い。こんな不謹慎なセリフが彼等の耳に入ろうものなら良くて独房入り悪ければそのまま刀の錆になるであろう。

「す、すみません少佐…、不謹慎なことを…」

「構わんよ、聞かなかった事にしておこう。君の気持もよく分かる。私とて度々祖国が滅亡するんじゃないかと考えてしまう事がある。船に乗る時、執務している時、食事している時、果ては寝ている時に夢にまで見る位だ。だから君の事も責められんよ」

「……はっ」

部下の失言を笑って許す本郷。実際彼も米森の気持ちが分からないわけではなかった。否、むしろ痛いほど分かる。

己の生まれ故郷である四国は既にBETAに蹂躪され、あの頃の面影は既に残っていないだろう。僅か一年足らずに日本の約半分を蹂躪しつくした奴らを、あと何年、否、何カ月抑えていられるか…。しかも帝都は横浜ハイヴの目と鼻の先…、誰だつて暗鬱な気分になるであらう。

「まあ本土では謹んでくれよ？流石に斯衛の連中の前で口走りでもしたら庇いきれ……」

そこまで本郷が呟いた瞬間、突如通信機のブザーがけたたましくなり始める。何事かと思いい顔を見合わせる本郷と米森。だが、そのまま放っておくわけにもいかずに米森は通信機を取り上げる。

「こちら硫黄島駐屯地。一体何事か？」

『……緊急回線!!こ、こちら巡視船のじま!!のじま座礁!!』

「なっ、ぎ、座礁だど!?一体どうしたんだ!!何処かの陸地にでも近付いたのか!!」

無線から漏れる声に思わず怒号を上げてしまう米森。背後で眺めていた本郷は何事かと米森を見てくるがそんな事に構っている暇は米森には無かった。

『いえー海上を航行中に突然船底に衝撃が走り、確認したところ何かに乗り上げてしまったようなのです!!』

「馬鹿な!!今太平洋沖を航行しているはずだろう!!水深何千メートルあると思っているんだ!!何処に座礁するようなモノがある!!」

『し、しかし現に…!!現在機関を停止して被害状況を確認中!!』  
「……………」

米森は何と答えたらいいのか分からずに困惑してしまふ。

現在『のじま』が航行しているのは水深が3000メートルはあるであろう大洋のど真ん中、いかに硫黄島に帰還の途についているとは言っても乗り上げるような岩場や陸地があるはずがない。

そんな場所で船舶が座礁など、今の今まで聞いた事がない。

呆然とする米森に対し、本郷は彼から無線機を奪い取ると落ち着いた口調で代わりに通信する。

「乗組員への被害は?」

『現在調査中です!原因が分かり次第直ぐに報告を送ります!!』

「了解した。もしも被害の状況が分かったならばすぐに連絡を。直ぐに救援を送る」

無線が切れると同時に本郷は無線に戻す。その隣で米森は足で地面を鳴らしながら独り言を呟いていた。

「何処かの潜水艦か…?いや、まさか新種のBETAが…」

日本帝国には、数はそこまで多くないとはいえ海軍は潜水艦を保有している。日本以外にもアメリカ、ソ連、欧州連合と言った各国も少なからず潜水艦は保持している。その潜水艦が誤って巡視船の船底に激突した、という可能性も無いわけではない。

だが、他国の潜水艦が領海内に潜入したと言う報告は受けておらず、たとえ本国の潜水艦が軍事訓練で潜水艦を出していたとしてもこの硫黄島駐屯地に報告が来ないはずがない。

ならば海中でも行動できる新種のBETAか?とも考える。BETAの学習能力を考えれば海中を移動できる個体を生み出してしまふことも造作も無いだろう。それが『のじま』に激突したということも考えられないわけではないが…。

「米森君、確かにその可能性が無いわけではないが…。何故BETAは此処に出現したかが不明だ。BETAは現在ユーラシア大陸を

中心に活動している。わざわざ迂回して此処まで来る理由がない」

そうBETAは今ユーラシア、そして日本本国に置いて活動している。仮にBETAだとするのならそのBETAが何故わざわざ日本を迂回するルートを通って遠く離れた硫黄島近海に現れたのか、それが今一つ不明瞭でならない。

現に日本本国にBETAが攻め寄せた折も朝鮮半島から九州へと地下から侵攻するルートを取っている。わざわざ泳いで硫黄島を攻める理由はない。

米森が頭を悩ませていると、再び無線機が鳴りだした。米森は考え事は後回しにして無線機を鷲掴みにして耳に当てる。案の定と言うべきかのじまからの連絡であった。

『こちら巡視船のじま!!座礁の原因が判明しました!!どうやら暗礁に乗り上げてしまった模様です!!』

「暗礁だど?……止むを得ん、そのまま待機。直ぐに救援を送る」

米森は隣に立つ本郷に一度目配せをすると無線で『のじま』に素早く指示を送る。無線が切れると米森は軽く溜息を吐いて本郷へと振り向いた。本郷の表情も先程より少し和らいでいる。

「暗礁、か……。どうやら潜水艦とかではなかったようだ。それは何よりというべきかな」

「とはいえ座礁している事には変わりはありません。至急救援の船を送りましょう。帰還も停止していますからその場から動くことも無いでしょうし」

米森は直ぐに通信機で現在硫黄島に常駐する巡視船乗組員へとのじま救出の指令を飛ばす。こんな真夜中に起こされる連中からすれば迷惑極まりないだろうが、これも緊急事態だから我慢してもらえない。米森は指令を飛ばし終わると通信機から口を離す。

「それにしても、暗礁に乗り上げるとはな……。普通乗り上げる前にソナーとかで気付きそうなもののだが……」

「夜の航海ですから寝ぼけていたんですよ、きつと。こんな真つ暗じゃあ海の中の暗礁があっても気付きませんって」

「ふむ、そうか……」

本郷が何処か納得いかなさそうに一言呟いた瞬間、再び通信機が鳴り始めた。先程通信が来てから20分も経過していない。何事かと顔を見合わせる米森と本郷だが、やむを得ず再び通信機を取る。

「……こちら硫黄島駐屯地……」

『こ、こちら巡視船のしま!!突如船が暗礁から動いて離脱!!』

「何?」

突然の寝耳に水な言葉にのんきに構えていた米森はギョツとする。

「動いただど!?機関を全て停止していたんじゃないのか!!だつたら何故船が動く!!」

『そ、それが……、なんといいですか……』

怒鳴り声を上げる米森に対して無線の向こう側の相手はまるでどう話したらいいかわからないと言った口調で中々返事をしようとしていない。それは言い訳を考えていると言うよりも、あまりにも予想外の事態に遭遇してしまい、どう説明していいやら分からない、とでも言いたげな様子であった。

「なんだ、言いたい事があるならばつきりと言つたらどうだ!!」

いい加減苛立ってきた米森は通信機目がけて怒鳴りつけた。その剣幕に流石に通信機の向こう側の相手も根負けしたのか一度溜息を吐いた後によく返事を返す。

『その……暗礁の方から勝手に動いてしまったような、その……』

「………なんだと?」

あまりにも突拍子の無い言葉に、米森は呆気にとられてしまう。隣で聞いていた本郷も訳が分からないと言いたげな顔をしていた。

ポカンとしている米森の姿に流石に見ていられなくなったのか本郷は彼から再び通信機を拝借すると、おずおずと言った様子で向こう側の相手へと問いかける。

「………すまない久保君、君はさつき、暗礁が動いた、とか言わなかったかね?」

『は、はい。確かに、確かに暗礁が動いたんです。そして、私どもの船からゆつくり離れて………進路を北、硫黄島へと向かっている模様

なのです』

「……………」

もはや何と返事していいか分からず、本郷は無線機を持った腕をだらりと下げる。無線機からはまだ何やら声が聞こえるものの、そんな物は今更本郷にも、そして米森にも届いてはいなかった。

そして、その『暗礁』はひたすら動き、移動し続ける。ゆっくりと、しかし確かに…。

ただひたすら硫黄島を、その先にある日本帝国本島へと向けて…。



# 第一章 守護神降臨

## 第1話 邂逅

「…………ちやくん!!起きてるく!?武ちやくん!!起こしに来たよ!!」

(なんだやかましいな…。この声、純夏か?まったくヒトがゆっくり寝てるつてのに…)

外から響いてくる怒鳴り声とチャイムに強制的に目覚めさせられた白銀武は、億劫そうに薄く瞼を開いた。

開かれた目に飛び込んでくるのは良く見知った自分の部屋の天井、そして窓から漏れてくる眩い日光。武は寝起きには眩しすぎる日光を避けるため、自分の顔まで布団をかぶる。

「ちよつとく!!聞こえてるの武ちやくん!!返事くらいしてよ!!」

「うるっせえなあ…。こんな朝っぱらからギャースカ騒ぎやがって…。ご近所の人達が迷惑すつだろうが…」

外から鳴り響く怒声に武は布団の中で文句を言う。どうもあの幼馴染は無駄に世話焼きな所があり毎朝毎朝通い妻の如く自宅まで自分を起こしに来るのだ。お隣同士で距離も全くとっていいほど離れていないとは言っても、こう毎日起こされ二来るのも段々と鬱陶しくなってくる。もう自分は子供ではないのだからもう起こしに来るな!とは何度も純夏に言ってはいるのだが本人が全く持って聞こうとはしない。仕方無くもう純夏には来るに任せる結果となり、今ではすっかり日常の一部となってしまうている。

だが、今日は何故かやけに純夏の声とチャイムの音を懐かしく感じしてしまう。まるで何年もの間聞いていないかのようで…。それに、純夏の声を聞いていると胸の奥から何か熱いものが沸き上がってくるような感覚を覚える…。

なんだこりや…。武は心の中で首を傾げながらもしつかりと頭まで布団の中に隠れる。

「うぬ〜!!こうなったら最終手段!!武ちゃんのお母さんから貰った鍵で強行突破〜!!」

「だ〜か〜ら〜もつと声のポリウム下げやがれつての…。つーかお袋、何でよりによつてあいつに合い鍵渡しちまったんだ…」

うつらうつらと再び眠気を覚える脳裏で己の母親へと文句を呟きながら武は再び目を閉じる。「早く孫の顔が見たいわ♪」等と寝言をほざいた揚句に『もう未来の奥さんのようなものだから♪』等とまたまた寝言をほざいて純夏に合い鍵を渡して下さりやがった両親にほんの少しばかり恨み事をこぼす。

どの道ドアには「アレ」がしてある。「アレ」でしばらくは時間が稼げるはずだからその間に…。

「…んがー!!鍵を開けたと思つたらドアにチェーンがー!!くのつ、くのおおおお!!」

(クッククック♪純夏さん甘いですよ?僕が何度も何度も同じ手を食うとでも思つたのですか?)

こんなこともあろうかと昨日突貫工事でドアにチェーンをつけて二重ロックにしておいたのだ。いかに怪力馬鹿な幼馴染とはいえアレを破壊するのには骨が折れるはずだ。

外から聞こえる絶叫と打撃音からしてどうやら純夏はドアをこじ開けるのに必死になっているようだ。やれやれこの隙に二度寝を…。ふにっ。

(…ん?何だこの柔らかいのは?)

寝がえりをうった武の腕に何か柔らかい物体が触れた。羽毛入りクッションよりも柔らかいその感触に、武は不思議に思いながら両手で2、3度その物体を握る。

ふにっ、ふにふにっ。

「ん…あ…や…」

と、武の頭上から音、というよりも何か人の喘ぎ声がその柔らかい物体を触るたびに聞こえてくる。だがこの部屋に居る人間は自分だけ、気のせいかと断定してそのまま柔らかい物体を握り続ける、と…。

「た…、武…、やあ…:お願い、だから…、胸は…」

「……………へ？」

突然己の名を呼ばれ、武はポカンとした表情で視線を僅かに上にあげる。

彼の視線の先にあったのは、凜とした美しい女性の顔であった。頬はうつすらと赤らんでおり、透き通った宝石のような美しい瞳は少し潤んでいる。

「……………え？……………え!？」

連れ込んだ覚えも招いた覚えも無い女性の姿にますます訳が分からなくなった武は恐る恐る視線をゆっくり下ろして己の両手が掴んでいるモノを視認する。

武の視線の先にあったのは、武の両手が掴んでいたのは、何故か白い着物一着を着ている女性の胸部、己の幼馴染のモノとは比べ物にならない程豊かに大きく育った胸…。

「……………」

「武……………、わ、私も女性であるから……………、羞恥心はある……………。そ、そなたが求めてくれるのは嬉しいが……………」

顔を羞恥心で真っ赤にし、武から顔を逸らしてゴニョゴニョと蚊が泣くような声で何かを呟く謎の女性……………。朝目が覚めたら目の前で寝ていた見ず知らずの女性……………。今現在目の前で起こっている訳の分からない状況に寝ぼけていた武の意識は完全に覚醒し、頭は混乱したまま何も言えずに目の前の女性を凝視していた。

(……………て、あれ？何でだ？俺、この人の事を知っているような……………)

だが、目の前の女性を見ると、武は何故か彼女の事を知っているような気がしてきた。それも一度か二度すれ違ったと言うような感覚ではなく、ずっと一緒に過ごしてきたような、そしてとても親密だったと言うような記憶と感覚を覚えたのだ。

武は女性をジッと見つめながら、知らず知らずのうちに涙を流し始めた。

彼女の姿を見て感じる懐かしさと、嬉しさに……………。

突如涙を流し始める武に、女性は驚いて目を見開いた。

「武?…」

「…えっと、その、貴女は…」

「突破く!! チェーンぶちぎって侵入成功!! 武ちゃーん!! 起こしに来たよー!!」

武が女性の名前を聞こうとした瞬間、二人の間を漂う空気をぶち壊すような大声が響き渡り、間髪入れずにドタドタと廊下を走る音が響き渡る。そしてその音は、間違いなく武の部屋へと向かって来ている。

その足音に武は蒼褪める。間違いなく純夏はここに来る。それも数秒もしないうちに。そして、部屋に飛び込んできた純夏はこの光景を見たら何と思うだろう。

見ず知らずの着物姿の美人の両胸を鷲掴みにする武…。どうみても不純異性交遊です、本当にありがとうございます。どうも。

「…じゃなくて!! す、すみませんけど一度布団の中に隠れてくれませんか!? ちよつとばかしやばいことになりました…」

「やつほー!! おつはよー!! 武ちゃん起きてるー!!」

「…遅かったー!! てかはええ!! 玄関から部屋到着まで早すぎるわお前!!」

取りあえず布団の中に隠れてもらおうと説得しようとすると同じ時にドアが勢いよく開かれ、満面の笑顔を浮かべた純夏が部屋へと飛び込んできた。チェーンぶち破つてから二階の部屋へとほぼ一瞬で到達した幼馴染に武は今の状況も一瞬忘れて大声で突っ込みを入れる。そんな武の突っ込みに対して純夏はそのあまり膨らんでいない胸を張って自慢げに鼻息を鳴らした。

「ふっふくん! あんなチェーンなんかで私を追い出そうとしても無駄なんだから! それはともかく武ちゃん起きてたんだ!! じゃあ早く着替え…:て…:」

と、純夏の笑顔が一瞬で硬直した。ようやく目の前に広がるいつもと違う朝の情景に気が付いたのだろう。

ベッドに横たわる幼馴染、その側で寝転がっているのは見知らぬ女性、顔は美人、そして胸は自分よりずっと大きい。そしてその大きな胸を…:

……自分の幼馴染の両手は驚掴みにしていた。

プツーン!!

瞬間、純夏の中で何かが切れた…!!

「た・け・る・ちゃ・ん!?」

「い、いやいやいや!!純夏違うんだこの人は…」

「……武、わ、私達はまだ未成年故に…、いや、もうそなたとは結婚できる故問題無い、か…?」

「つて何言ってるんですか冥夜ア!!……て、え……う…」

的外れなことを言う謎の女性につっこみを入れようとした瞬間、武は無意識に呼んだ『冥夜』という名前に呆然としてしまった。

目の前の女性とは初対面のはずだ、精々あつたとしても街で一瞥したとかすれ違つたとかその程度のはず、名前なんて絶対知らないはずだ。それなのになんで…。

「俺、何で……」

「武、そなた、私の名を……」

驚くのは武に『冥夜』と呼ばれた女性も同じであった。とはいってもこちらは武と違って見ず知らずの人間に自分の名前を呼ばれた事ではなく、遠い昔に分かれた親しい友人、あるいは恋人が自分の名前を忘れずにいた事への少なからぬ歡喜を秘めていた。

武の目の前で双眸を潤ませる『冥夜』という名前の女性、何故か知っていた彼女の名前、何故か彼女へと覚える恋慕の想いに武は彼女の顔から眼を離せず、すぐ傍でこちらを見ているであろう純夏も忘れて彼女とジツと見つめ合っていた。

一方、すっかり忘れ去られた鑑純夏は、目の前で不埒なことをした挙句に今はキス出来そうな距離で見ず知らずの女と何やら語り合う幼馴染の姿をガン見させられた結果、怒りのボルテージが急上昇して背後では不動明王様の後光の如き憤怒のオーラが燃え上がっていた。

「……ふくん、そっかあ、もう名前も呼びあう程親密になってるんだア…、それでいっしょにお布団入って…、あ・ま・つ・さ・え!!不純異性行為なんてエえええええ!!」





消去されると香月夕呼は言っていた。なら、自分は又ループしてしまっただのか？またあの地獄へと舞い戻ったのか……？

「……んなわけねえか。そもそもこんな白一色なところ知らないし……ま、まさか、こ、こ、こはあの世なのか!?俺は死んじゃったのかああああ!?!」

突然思い至ったその予測に武は思わず絶叫する。香月夕呼は元の世界に戻るとか何とか言っていたが、実は何らかの手違いで事故が起きて自分は死んでしまったのか、そして此処はあの世なのか!?武は頭を抱えながら地面へと突っ伏した。

世界を救って元の世界に戻るかと思っただけで死んでしまいました、等もはやコントにすらならない。嗚呼何と儂い人生だったのだろうか……、散っていった恋人達よ!!恩師よ!!許してくれ!!と滝のように涙を流す武だった、……と……。

『……いやいや待つてくれないか。一応まだ君は死んでいないはずだ。泣くのはまだ早いと思うが……、まあいい。その様子なら身体に異常はなさそうだな?』

「………え?」

突然背後から響いてきた人の声に武は嘆くのを止めると背後を振り向いた。

まるで脳に直接響いてくるような声であつたがとにかくこの世界に自分以外の人間がいると言うのならそれだけでも武にとって心の支えになる。ひよつとしたらこの世界が何なのか、何で自分が此処に居るのが分かるかもしれない!!そんな期待に胸を弾ませて後ろを振り向いた武は………、

そのままの姿勢で硬直した。

武の背後に居た者、それは彼の期待していた人間ではなく、人間の如く二足歩行で直立している巨大な亀のような姿をした怪物であつた。

怪物のフォルムは二足歩行で2メートル程の大きさである事を除けば全体的に甲羅を背負った亀に似ている。だが、その身体を構成す



るパーツは現存する生物とは似ても似つかぬほど刺々しく、攻撃的な形状をしていた。

背中に背負った甲羅の縁は刃のように鋭く、腕には刃物のように鋭い爪のはえた五本指と、さながら大録の指のように生えたもう一本の長い爪が生えている。その下あごからはまるでセイウチの牙のような長く鋭い牙が二本上向きに生え、鋭い眼光と鋸の歯のような鶏冠と合わせて凶暴さを際立たせている。

人間かと思つて振り向いたら巨大な亀のような怪獣が目の前に居た……、あんまりにも予想外な展開に武は硬直して動く事が出来なかつた。

「……………」

『むっ…どうしたんだそんな顔をして。やはりどこか悪いのか?』

目の前の二足歩行の亀は凶暴な見た目とは裏腹に武の身を気遣う言葉を掛けてくれる。とはいっても口を動かしていない所を見ると脳に直接語りかけているようであるが、どうやら先程武に話しかけてきたのもこの巨大亀であつたようである。が、一方直立する亀を直視してしまつた武は驚愕のあまり眼を真ん丸に見開いて、パクパクと陸に上がった魚の如く口を開閉させて何も言えずに大亀を凝視している。

『…少年?』

武から全く返事が返つてこないことに痺れを切らしたのか、あるいはやはり何か身体に異常があると判断したのか大亀はズイツ、と武へ顔を近づけた。…と、その瞬間。

「お、おあああああああ!!?!!」

目の前に大亀の凶暴そうな面構えが接近してきたからか、今まで硬直していた武は絶叫を上げながら地面に倒れ込んだ。そしてそのままずると尻を引きずりながら大亀から必死に距離を取ろうとする。一方の大亀は武を追いかけようともせず、自分から離れて行く武を呆然と眺めている。

『どうした少年? 一体何を怯えているんだ? 心配しなくても私はキミに危害を加える気は…………』

「ななななななんあ、お、お前何者だ!!し、新種のBETAか何か!？」

若干どもりながら武は目の前の大亀に向かって絶叫する。武の元居た世界でも、あのBETAに侵略されていた世界でも、こんなバカでかい亀のような生物など見たことも無かった。自分の記憶が正しければBETAにもこんな奴はいなかったが、奴等は地球の生物を研究し、次々と新たなBETAを作り出していく。ならば亀のような姿をしたBETAが居ても不思議じゃない。

と、最初は驚愕と混乱もあつてそのように考えてはいたものの、大亀は何時まで経っても武を襲おうとする素振りは見せない。それどころか先程から自分の脳内に語りかけているのはこの大亀のようである。だったらコイツはBETAじゃないのか?じゃあこいつは一体……。

一方の大亀は武の詰問染みた問い掛けを聞いて、まるで何かを考えてるかのように上を向いてグルル…と唸り声を上げる。

『ベータ…、ああ、君の記憶で見たあのレギオンとよく似たアレか…。その答えについては否と言おう。私はBETAではない』

「そ、そうなのか?…って、ちよつと待て、お前、何処かで見た事があるような…」

武は目の前の大亀の姿を眺めている内に、何故か彼(?)の姿を何処かで見たことがあるような気がした。それはあのループの中での記憶ではない、かつて自分が住んでいた、平穏で平和な日常の中での記憶…。

『それはあの虚数空間での話か?それとも私の記憶を視てその映像を…』

「ち、違う違う!!それよりもずっと前に見た事があるんだ!!くつそ何だったかな……」

目の前の大亀の言葉を否定しながら必死で頭の中の記憶を探る武ではあったが、長いループの中で生死を懸けた戦いを続けた結果なのか、ループ前の世界については細かい部分については思い出す事が出来ない。恐らく何処かの本か映画で見たような記憶があるというの

は分かるのだがそれ以上の事が思い出せない。必死に思い出そうと頭を悩ませる武の姿を、大亀は何処か心配そうに眺めていたが、不意に何かを思い出したかのように軽く喉を鳴らす。

『そういえば、自己紹介が遅れたか……。私の名前はガメラ、という。フム、名前というよりも種族名と言った方がいいが、ガメラは私一体のみだからな。これが私の名前と思って欲しい』

「……………何い!？」

武は目の前の大亀が名乗った名前に仰天する。大亀、ガメラの名前を聞いた瞬間、武の脳裏に記憶の奥底に眠っていたとある映像、情報がフラッシュバックする。

…それはかつて白銀武が住んでいた世界、そこで幼馴染の純夏と自分の両親と一緒に観に行った映画の映像と、メインタイトルの名前……。

「が、ガメラ!? ガメラって、ひよっとしてあの怪獣映画のガメラか!？」

『む? 君は私の事を知っているのか?』

「し、知ってるも何も俺特撮ファンだからガメラシリーズとゴジラシリーズは昭和から平成まで網羅して……………ってんな事はいつでもいい!!」

次々と訳の分からない事が立て続けに起こって頭が混乱している武はまるで飛び跳ねるように立ちあがると目の前の『ガメラ』と名乗る直立した大亀に向かって指を突き付けた。

「問題は!! 何故そんな現代日本でゴジラに次いで著名な特撮怪獣のガメラが!! 俺の目の前に居やがるんだ!! つーか何でガメラが俺の視線と同じ高さなんだ!! 本当は90メートルぐらいあるはずだろお前!!」

『…………ゴジラとは何だ? まあそれはともかくとして…………、何故と言われても…………、君が私を呼んだのだろうか? あの暗闇の中で漂いながら…………』

「…………呼んだ? 俺が、アンタを?」

ガメラからの返答に、武は思わずキョトンとしてしまう。呼んだ、

と言われても武自身には目の前の巨大亀を呼んだ記憶は無い。が、ガメラは武に向かって肯定するようにコクリと頷いた。

『ああ、今度こそ護りたい、その為の力が欲しい、と、大分必死そうだったからコレはただ事ではないと気になって向かったのだが。：それで同じ目線だという疑問についてなのだが……』

ガメラは唸り声を上げながらさながら人間が何かを指差すように右腕を武に向かって突き出した。

『それは、私と君が今一つになっているからだろうな』

「へ？ひ、一つになる？それって、どういう……」

ガメラの言葉にますます訳が分からなくなる武。やれ自分がガメラを呼んだだの、やれコイツが自分と一つになっているだのと訳の分からない

『簡単にいえば私と君とは一つの姿に融合しているんだよ。どういう原理でこうなったのかは知らないがああ虚数空間とやらで君に出会った時が切欠とみて間違いないだろう。』

私と融合した君は私と同じ『ガメラ』の姿を得て、この世界へと舞い戻って来たということだろう』

「………??？」

『……ようするに少年、君は私と同じ『ガメラ』となったと言う事だ。此処は君の深層意識の中、君は海底で眠っている状態だ。しかし……もうすぐ目覚めるときが来るだろう』

「……お、俺が……？ガメラに……？」

武は信じられなさそうな表情で己の手を、体中を見回した。どう見ても自分は人間、目の前のガメラと同じ巨大亀の姿ではない。ガメラになったと言われてもどうしても信じられない。とはいえガメラ曰く此処は自分の深層意識の中、いわば心の中のようなので姿形などどうとでもなるのだろうが。

『ちなみにこの大きさは仮の姿だ。本来の大きさでは君を怯えさせてしまうだろうし、誤って踏み潰してしまいかねない。もつとも精神体で死ぬなどという事は無いだろうが……』

なおも続くガメラの説明を、武は黙って聞き流す。とにかく色々分

からない事はあるが、それ以上に自分にとって聞きたい事は他にあった。

「…何となく分かったような分からないような…、まあそれはそれとして、だ…。此処が俺の意識の中だと言うのは良いとして、だったら俺達は今何処の世界のどの時代に居るんだ？…って言っても、分からないか？流石にそれは…」

『いや、大体なら分かる。今私達がいる世界は君がああのBETAとかいう生物と戦っていた世界、年代は…人間の言う年代に換算すれば大体1998年の11月、と言ったところ、か…？』

「…って分かるのか!?っーかお前西暦とかそういうの分かるの!?ガメラなのに!？」

『そういうふうに創られたものだからな、それに君と融合した折に君が見てきた記憶を一通り見せてもらった。多少なりともヒトの知識は学んだつもりだ』

「そ、そうか…、まあそれはそれとして…。」

武はそこで口を閉じると黙って俯いた。その表情には先程まで無かった、何か思いつめているかのような悲愴な雰囲気漂っている。

「そっか…、俺、また戻ってきちゃったか…。ハハ…、何だよ、まだ俺この世界に未練あるのかよ…」

そう自嘲するかのように笑う武。

桜花作戦を成し遂げ、あ号標的を破壊し、人類勝利の第一歩を成し遂げた…。

なのに、それなのに自分は再び、“己の居るべき世界”ではないこの世界へと戻ってきた。

もう因果導体ではないのに、“鑑純夏”はいないのに…。

それでも自分はあの戦場に、あの世界に戻ってきた…。

それは、何故—。

『少年…。』

と、黙りこくっている武に向かってガメラは、静かに声を掛ける。武は黙って背後に立つ巨亀へと顔を向ける。ガメラはゆっくりと口を開いた。

『君は、どうしたい？君はこの世界で、異星の侵略者の前に死の危機に瀕するこの星で、ヒトの姿を捨ててなお、何をしたい？』

「俺は……」

ガメラの問い掛けに武は顔を俯かせてしばし口を閉ぎす。が、やがて顔を上げると、先程とは打って変わった決意に満ちた表情を目の前の守護神に向ける。

「俺は……、護りたい。この世界を、この世界に住む人達を、前の世界で犠牲にしてしまった人達を……!!大好きな人達を今度こそ救いたい……!!その為にもBETAを駆逐する!!誰も犠牲にせずに、一つ残らずハイヴを殲滅して見せる!!」

『愛する女性……、あの少女達か……。あれは、君のつがいか？』

「つがいつて……、もつといい言葉ないのかよ……。ま、いつか……。俺さ、何度もこの世界をループしてたんだ。ある時は突撃級に踏みつぶされて、ある時は戦車級に食われて、ある時はハイヴの反応炉で自爆して……。死んで、生き返って、死んで、生き返って、そんなループを繰り返して続けてようやく、ようやくオリジナルハイヴを落として、人類勝利への道標を作ったんだ……」

『……』

独白するように呟く武の言葉を、ガメラは黙って聞いていた。武は今にも消えてしまいそうな細かい声で続ける。

「でもさ、その戦いで俺は、掛け替えのない人達を失った。まりもちゃん、伊隅大尉、柏木、速瀬中尉、涼宮中尉、委員長、彩峰、たま、美琴、冥夜、純夏……。それで手にできたのは30年って言う人類の死刑執行の猶予期間……。みんなの命を犠牲にして、手にした30年……、無駄じゃないって、みんなの犠牲は無駄なんかじゃないって思ってる、思ってる、けど……。もつと、もつと力さえあれば、もつと違う結末が、みんなが生きて笑いあえる結末が、あつたかもしれないって、思うとっ……」

武の独白は段々と血を吐くような叫びへと変わっていく。表情は苦渋で歪み、唇は強く噛みしめたせいで血が滲んでいる。

ループの記憶を全て思い出し、少女達への想いを思い出した武は心

の底から慟哭し、齒噛みした…。もつと良い結末があつたんじゃないか、彼女達が死なずに済む結末があつたんじゃないだろうか、と…。

だから彼は力を望んだ。たとえ人間で無くなっても、もう彼女達と触れあう事が無くなつたとしても、無数のBETAをなぎ払いハイヴを殲滅できる力が欲しいと…。

武の独白を、慟哭をガメラは黙って聞いていた。そして、武の独白が終わるとガメラは

『だから、力が欲しいと、願つたのか…？』

「…ああ、もう人間で無くなつても構わないから、皆を護り通せる力が欲しい、何万何億のBETAをモノともしない力が欲しいって、消える寸前に願つたんだ…。まさかガメラになるとは思わなかつたけど、な…」

そう苦笑いしながら武はガメラを見上げる。ガメラは黙って武を観察するように見降ろしていたが、やがてゆっくりと頷いた。

『分かった。君の望みも、護りたいものも理解できた。なら、私も出来る限りの力を貸そう』

ガメラが武に告げた言葉、彼と共にBETAと戦うと言う宣言に武は一瞬呆けたような表情へと変わる。

「お前、力を貸してくれるのか…？」

『私は星とそこにいる全ての命を守護するために、星の命であるマナが生み出した存在だ。そしてBETAは母なる星とそこに住まう命を食い散らかす害虫…。私が倒すべき存在に違いは無い。そしてBETAを倒すと言う君の望みと私の目的は一致している。何の不都合がある？』

ガメラの生み出された目的、それはこの地球の生態系の守護、そして生態系を脅かす存在の排除。今ガメラの存在する地球を蹂躪するBETAは、ガメラにとっては排除すべき存在。ならば戦う。人類の為だけではなく、地球に住む全ての命を護る為、この地球に存在するBETAを一匹残らず駆逐する…。それに変わりはない。

ガメラの言葉に武はポカンとしていたが、やがて顔を引き締めると

黙ってコクリと頷いた。

『そういえば、聞き忘れていたな…。君の名前は何と呼べばいい？』  
ガメラに問われた武は、目の前に立つ守護神を、これから己と一緒に戦っていく戦友を見上げると口元に笑みを浮かべながら口を開いた。

「武、白銀武。それが俺の名前だ」

こうして、かつて人類を救った一人の青年と、地球を護った守護神は邂逅した。

シロガネタケルとガメラ、二人の地球を、人類を救うためのおとぎばなしは、こうして幕を開けるのだった。



## 第2話 飛翔

「……成程、よく分かった。つまり『のじま』は何も無い海上で突然環礁に乗り上げ、その環礁は救援要請直後に突如移動、『のじま』から離れて行った、と、こう言いたいのかね？」

「にわかには信じがたい話だと承知しています。ですが、全て事実なのです。大体あそこは水深3000メートルはありますから座礁するはずが無いのです。仮に環礁が潮に流れてきたとしても事前にソナーがキャッチして回避する事が出来るはずなのです!!」

硫黄島駐屯地の第一区画にある一室にて、本郷少佐は目の前に立つまだ二十代後半の男、巡視船『のじま』の乗組員でありあの現場で指揮をとっていた久保大尉から昨夜の座礁事故の状況及びその経緯についての報告を聞いていた。昨夜の座礁事故の詳細を聞く為に呼び出された彼は、憔悴しきった顔で口から泡を飛ばしながら昨夜の事故、そして事故の原因となったと考えられる環礁について事細かに語ってくれた。

久保大尉の説明によると、環礁は大体縦60メートル、横幅45メートルの楕円形、亀の甲羅によく似た形状をしており、突如船底に出現して船に激突したかと思うと、数十分後には『のじま』から勝手に離れて行ったのだと言う。黒潮か何かに流されたのか、とも考えたのだがあれほど巨大な環礁が黒潮で流されるとも考えられず、あの環礁が何だったのか、そもそもあれは環礁だったのか等々不明な点が多い。

久保大尉のありのままの報告に、本郷少佐は少し考え込むように額に手を当てる。

「フム…、確かに船底の傷からして何らかの衝突があったとは考えられるが…、それは本当に環礁だったのかね？例えば…クジラとか。現在数は減っているがシロナガスクジラなんかは30メートルを超える巨体を持つものもいるだろう？それが突然浮上してきて船底に激突したとか…」

「そんなはずはありません!!外へ出た船員も確かに環礁の姿を目撃

しておりますし、あの環礁の直径は約60メートル！シロナガスクジラの二倍はあります!!ソナーで確認した形状だつてクジラや魚類とはかけ離れて……」

「分かった分かった、少し落ち着きたまえ。…まあ君の事だから嘘ではないのだろうが、流石にあまりにも突拍子が無くてね…」

「す、すみません少佐…」

穏やかに宥める上官の言葉に、熱くなっていた久保大尉はすまなさそうに頭を下げる。

本郷として自分の部下である彼の性格は熟知している。到底このような嘘を吐くような人間ではないし、彼以外の乗組員も環礁の姿を目撃している以上、事実には違いないのだろうが…。

「まあとにかく無事でよかつた。取りあえず上には座礁したと伝えておくから……」

「しよ、少佐!!本郷少佐!!失礼いたします!!」

と、本郷の言葉を遮るように勢いよくドアが開かれ、米森大尉が室内へと飛び込んできた。部屋に飛び込んできた時に一度敬礼はしたもののその様子は何やらただ事ではない。

本郷は話をしている時に突然割り込んできた米森の姿を見て眉を顰める。どんな事情があるにせよいきなり上官の部屋にノックもせずに入ってくるのは軍人としてのマナーがなっていないと言わざるを得ない。

「一体どうしたと言うんだね米森君、今私は彼に話を聞いて…」

「それよりも異常事態です!!と、とにかくこちらに来てはいただけないでしょうか!!…折角だ、久保!!ちよつとお前も付き合え!!」

「え!?!ちよ、ちよつと待ってつてオイ!!」

久保は米森に引きずられ、そのまま部屋から連れ出されてしまう。あまりにも直情的な部下の様子に本郷は溜息を吐いた。

「やれやれ…、取りあえず行ってみるか…。もし下らない事なら一時間説教だな…」

本郷は若干疲れた表情で立ちあがるとそのまま二人の後を追って部屋から出て行つた。

米森が久保を連れて行った場所は、駐屯地近くに広がる海岸である。白い砂浜と地平まで広がる大海原……。かの大戦の折りに米軍と帝国軍の血みどろの戦いが繰り広げられたそこは、今となっては夏には海水浴を楽しめ、岩場では年中新鮮な魚が獲れるという硫黄島駐屯兵達にとって随一の憩いの場となっていた。

そんな海岸には、駐屯地に在任しているであろう100名以上の駐屯兵が集合している。駐屯兵達は互いに顔を見合せながら何やら口々に言葉を交わしている。

本郷は兵士達の様子に首を傾げた。今は11月、ここ硫黄島は本国よりは温暖とはいええそれでも今は海水浴のシーズンとは言えない。それ以前にここに集まっている兵士達は見たところ海水浴や釣りに興じに来たようには到底思えないのだ。

「…米森君、一体どうしたと言うんだこれは？一体何で彼等は持ち場を離れてこんな所に集まっているんだ？」

目の前の兵士達の集団を眺めながら本郷は米森を問い詰める。この場に無理やり連れてこられた久保も、米森を問い詰めるように睨みつけている。

そんな彼等の疑問に対して米森は、黙って大海原を指差した。その方角はちょうど、ここに集まった駐屯兵達の視線が向いている方向だった。

本郷と久保は一度顔を見合わせると米森が指差す方向へと視線を向ける、と、次の瞬間その顔は驚愕に歪んだ。

「なあっ!?!」「な、何だあの島は!!」

海岸から約100メートル程の沖、見渡す限り海しか存在しないはずのそこに巨大な浮島らしきものが浮かんでいたのだ。

こんな浮島は昨日まで存在していなかった。それ以上にこんなものが一体いつの間に出現したと言うのか。本郷は弾かれたように米森へと振り返る。

「米森君…!!あれは、あの浮島は一体何だ!?!あんなものは昨日まで存在していなかったはずだ!!」

「警備兵たちが早朝の見回り中、発見したものです。見たところサングラの堆積した浮島か何かのようですが…、何故いきなりあんなものが出てきたのか、何処かから流れてきたのか…、それすらも全く分かりません…」

「……………」

部下の言葉に本郷は頭をかきむしる。昨日は動く環礁、そして今度は突然出現した浮島…。訳の分からない事が幾つも起きて頭が混乱し始める。

一方で同じく米森に此処に連れてこられた久保は、海原に浮かぶ浮島を見て、何かを思い出すかのような難しい表情をしている。そんな彼の様子に米森はふと気が付いた。

「…どうした久保、あの浮島に何か見覚えでもあるのか？」

「い、いや…、まあ、あると言えばあるけど…。…多分俺の勘違いか何かだ、気にしないでくれよ」

米森の問い掛けに久保は作り笑いを浮かべながら応じる。同僚の様子に若干の違和感を覚えながらも米森は、隣に立つ上官へと視線を移動させる。

「とにかく、今はあの浮島の正体を突き止める事が肝心です。ひよつとしたら新種のBETAである可能性も否定できません。少佐、どうか調査の許可を」

米森の言葉を聞いて本郷は一度浮島へと視線を向け、そして米森へと視線を戻すとコクリと頷いた。

「…確かに、な。昨日の環礁の件もある、ひよつとしたら何かとんでもないものかもしれない。よし分かった。上には私が報告しておく。あの浮島の調査を許可する」

「ハッ！直ちに開始します！」

上官から許可を得た米森は敬礼を返すとすぐさま駐屯地に向かって駆け出した。浮島調査の為の準備に向かったであろう彼の背中を眺めながら本郷はやれやれと溜息を吐いた。

「全く元気なことだ、ま、それが彼のいいところ…ん？…どうしたんだ久保大尉？浮かない顔をして…」

ふと隣に立つ久保へと視線を向けると、彼はあの浮島を眺めながら何やら考え込んでいる。その様子が気になった本郷が声を掛けると、久保は髪の毛を掻きむしりながら苦笑いを浮かべた。

「いえ…、ただ、あの浮島の形…、なんだか昨夜発見した環礁に似ている気が…」

「おいおい冗談だろう？ただの空似じゃないのか？まさか環礁がこんな所までながれてきたとでもいうのか？」

部下のおずおずといった風の言葉を本郷は軽く笑い飛ばす。幾らなんでも昨夜激突した環礁がこんな所にまで流れ着くという偶然などあり得ないだろう、そもそもあんなバカでかい代物が潮や波で簡単に流されるはずが無い、と、本郷は内心でそう考えていた。

無論アレが新種のBETAだと言うのなら話は別なのだが…、という一抹の不安も無いわけではないが…。

「そ、そうですね…、気のせいですよね…？ハハハハハ…」

上官の言葉に久保もつられて笑い声を上げる。ただ、その顔にはやはり何処か納得がいかなさそうな表情は消えなかった。

突如硫黄島近海に出現した浮島調査、それには米森大尉以下十三名の駐屯兵によって行われる事となった。午後13時頃、調査用の機材等の準備を終えた米森達調査隊は、調査船『けんぎき』に乗り込むと浮島から約40メートル程の距離に接近、そこからゴムボートに乗って島へと上陸した。

浮島に上陸した米森は一步一步足元を確認するように歩を進める。見たところ一面石ころと岩だらけであり、当たり前だが植物一つ生えていない。本当にただの浮島にしか見えない。そんな事を考えながら辺りを見渡して歩いていると、不意に足元で妙な違和感を感じた。不審に思った米森が足元に視線を下ろすと、そこには周囲の石ころや砂とは明らかに違う、赤味があった奇妙な形の石が顔を出していた。その石が妙に気になった米森は赤い石の周囲の土や砂利を掘り返すと、完全に地面から露出したその石を摘まみ上げた。

「これは……」

米森が拾い上げた物、それはコの字型の奇妙な形状をした赤い石であった。

一方の先端は丸く大きく膨らんでおり、そこには何かを通す為の穴まで作られている。

「勾玉、か……？」

その石の形状に、米森は見覚えがあった。確か己がまだ幼い頃に博物館で見た遺跡からの出土品に、これとよく似た形状の装飾品があった。材質はその当時に見たものとは異なるが、その形状は勾玉そのものであった。

「先輩、先輩もそれを見つけたんですか」

「うおーいきなり声出すんじゃないやねえよ!!……っておい、それ……」

掘り出した勾玉を掲げてじつくりと眺めている時、突然背後から声をかけられた米森は飛び上がらんばかりに驚いて背後を振り向く。そこに居たのは調査チームに配属された己の後輩である士官。米森は声を掛けたのが彼だと知って一度安堵の溜息を吐いたが、彼が両手に持っているブリキ製の箱の中身を見た瞬間、その顔色が変わった。ブリキ缶の中には、米森が発見した勾玉と全く同じ大きさ、形、色合いの勾玉が何個も入っていたのである。

大量の勾玉を見て啞然としている米森に対して、後輩の士官は特に驚いた様子も無く浮島中を見回す。

「これだけじゃありません。まだあちこちから見つかってますよ。まるで、見つけてくれて言ってるかのように」

「……見たところ勾玉みたいだな。明らかに自然にできたものじゃない」

「ですね。ですけど……、何でこんなものがこんなに散らばって……」  
どの勾玉も寸分違わず全く同じ形状をしている。それからしてどう考えても自然にできたものとは考えにくい。勾玉と言えば古代の古墳で権力者の遺体と一緒に棺から出土するものだと言う事は米森達の記憶にもある。だが、それが何でこんな浮島に散らばっているのか……。米森は勾玉を掌で弄びながら一人考える。

「おい!!ちよつとこつちに来てくれ!!」

と、突然浮島の中央、周囲よりも幾分か盛り上がりつつ小高い山のようになっている場所から、調査隊員の声が聞こえてくる。米森は後輩に目配せすると、すぐさま小山の上つていく。小山の山頂では調査隊のメンバー三人が固まって何やら言葉を交わしている。

「どうした?何か見つけたのか?」

「は、はい!その、地面から、こんなものが……」

米森達に気が付いた隊員の一人が慌てて姿勢を正すと地面へと視線を向けた。彼の視線に釣られてそちらへと視線を向ける米森と後輩の士官。

彼等が視線の先にある地面、そこにはまるで板のような長方形の岩が地面に埋まっていた。どうやら地面からつき出ているのはまだほんの一部であり、殆どの部分は地面の奥深くに埋もれているようである。

「…掘ってみよう」

「ハッ!ではすぐに機材を用意します!」

米森の指示を受けた調査隊員はすぐさま採掘の為の準備を開始した。

### 硫黄島SIDE

その頃硫黄島駐屯地指令室では、本郷少佐と久保大尉、そして数名の兵士が調査船から送られてきた例の浮島のデータに目を通していった。

「縦長60メートル横幅45メートル……何だってこんなものが突然……」

「しかもあの環礁からは、勾玉に酷似した形状の多数の金属が見つかったとの事です。本当にアレは一体……」

送られてきた計測結果によるとあの浮島は縦約60メートル、横幅約45メートルの楕円形で、その形状はさながら亀の甲羅のようである事、また、浮島からは赤色の金属でできた勾玉らしきものが複数発

掘され、さらに浮島の中央から何やら石板らしきものが発見された為、現在採掘中との報告も受けている。

「どうやらBETAではないようだがただの浮島とも思えない、これはひよつとしたら古墳か何かか？」と考える本郷、その一方、久保は手元の資料と浮島の写真を、幾度も幾度も見返している。その顔には、信じられなさそうな表情がありありと浮かんでいる。

「……この形、この大きさ……、似てる、あの環礁と、そっくりだ……」  
彼がポツリと呟いたその一言は、その場の誰にも聞き咎められる事は無かった。

#### 調査隊SIDE

浮島中央で行われた石板の発掘は、およそ3時間以上かけて行われた。

最終的に5、6メートル程地面を掘り進めると、埋もれていた石板の全貌がようやく明らかとなった。

掘り返された石板、それにはまるでどぐろをまいたような蛇のような八の字型の文様と、何やら文字らしきものが刻まれていた。文字の形状は何処となく英語のアルファベットに似通ってはいたものの、それを除けば何と書かれているのか皆目見当が付かない。少なくとも現在文明圏では用いられていない文体である事には間違いなかった。

調査隊は掘り起こした石板の写真を撮影、あるいはスケッチをするのとそれを発掘された勾玉と一緒に硫黄島駐屯地へと送り、掘り起こした石板を引き上げるためのヘリコプターの準備を駐屯地へと要請する。そして、米森と後輩の士官はヘリの到着を待ちながら、目の前に立つ巨大な石板をジッと見上げていた。

「じつやらの浮島は、何かの遺跡か古墳のようですね。やれやれこれだけの勾玉を見つけて、ついでにこんなものを発見したのは僕の生涯初ですね……。でもこれが遺跡だとしたら、コレはもう軍人の管轄じゃありませんね」

「全くだ。としたなら後の仕事は俺たちじゃ無くて学者さん方のお



仕事になるだろうな。BETA共のせいで遺跡やら寺やらが根こそぎブツ壊されちまったからやつこさん方も暇で暇でしょうがなかっただろうし、張り切るだろうぜ？」

「違い無い違い無い」

そんな冗談を交わしながら二人は笑い声を上げる。

調査した限りではこの浮島は何らかの遺跡か何かであるようだ、と二人は判断していた。とは言え何故そんな物が突然硫黄島近海に出現したか、という点については未だ不明ではあるが…。

米森は目の前の石板を見上げながら、そつと石板に手を触れてそこに描かれた謎の文字をなぞる。相変わらず石板には何と書かれているかは分からない。BETA侵攻以前だったならこういう古代文字とかに関する書籍やらがあつたのだろうが、今ではさっぱりそんな物は見かけない。大半がBETAの侵攻で失われたと言うのもあるのだろうか…。

そんな事を考えながら石板を撫でる米森であった。…が、

「……ん？」

突然米森は顔を顰めると何か違和感を感じたかのようにしきりに石板を撫でまわし、さらにまるで隣の部屋の物音を聞くかのように石板へ耳を押し当てた。

「……先輩？どうしたんですか？」

「…いや、なんかこの石板から、鼓動みたいな音が聞こえないか？それに……コレ、熱い……？」

「え……？」

米森の言葉に、後輩の隊員も釣られて石板に手を当て、耳を押し当てる。

確かに米森の言うとおり、石板からはまるでヒトの体温と同じような温かさを感じ、さらに、石板からはまるで心臓の鼓動のような、はたまた波の音のような奇妙な音が聞こえてくる。それは石板からではなく、もつと奥の、それこそこの浮島の奥底から聞こえてくるかのような…。

「……な、何なんですかコレ……？ただの石板じゃありませんよ……？」

「……分かん。一体こいつは、いや、そもそもこの浮島は何なんだ……?」

米森は石板から耳を離すと、眉を顰めながら石板の模様を凝視する。

と、次の瞬間、何の前触れも無く石板の中央に亀裂が走った。

「なっ!?」「ええッ!?」

突如ひび割れる石板を見て二人は思わず後ろへ下がる。と同時に石板の亀裂は段々と石板全体に広がり、やがて石板は爆発するように粉々に砕け散ってしまった。

「お、おおお!? な、何が起こってやがるんだこりゃあ!?」

「せ、せせせ先輩何かしたんですか!? こ、これどうすれば……」

「し、知らん!! 俺は何もやって無い……!?」

互いにパニックに陥る米森と後輩士官。だが、異変はこれだけでは終わらなかった。石板が粉々に崩れ落ちると同時に、まるで地震でも起きたかのように浮島全体がグラグラと揺れ始めたのである。

「な、なあ!? こ、今度は地震ですか!?」

「し、知らん!! とにかく此処は危険だ!! 脱出するぞ!!」

パニック状態の後輩を叱咤して穴から這い上がる米森、後輩士官もその後を追いかける。

振動で崩れ落ちてくる砂利や石に足を取られながらも、何とか穴から這い出た二人、どうにか脱出できた二人は走って浮島の上陸に使ったゴムボートへと向かおうとするが……

「うおお!! こ、今度は何だ!!」「島が、島が崩れて……!!」

さらに振動が大きくなって浮島そのものが段々と崩れ始めたのだ。海へと押し流される土砂と石、それと一緒に米森と後輩の士官、そして島に残っていた調査隊のメンバー達も海中へと投げ出されてしまったのだ。

「うおおおおあああああ!!」「なああああ!! お、落ち……」

そして二人は海へと叩きこまれ、2、3メートル程の深さにまで沈んでしまう。

米森はこんな所で死んでなるものかと必死に海面に出ようとする、

が、次の瞬間腕と足の動きが止まってしまった。彼の目の前に、信じられない物があつたのだ。

それは、巨大な目……。ほんの一瞬だけであつたものの、直径二メートルはあるであろう巨大な眼球が、確かに米森の前を横切つたのだ。目の錯覚でも何でもないそれに、驚愕のあまり動けなくなっている米森。だが、沈んでいた身体は段々と海面に向かつて浮き上がっていく、米森自身も息苦しきを感じて必死に足と腕を動かして海面への上っていく。

「……ブハッ!!ハア……ハア……、な、何だつたんだアレは一体……」

「せ、先輩……大丈夫ですか……?ぼ、僕より遅いから心配しましたよ……?」

「あ、アア悪い。海の中で変な物見ちまつて……?!?」

海面に出て一息ついていた米森は、ふと視線を前へと向けた瞬間愕然としてしまう。

浮島が、先程までそこにあつた浮島がその場から完全に消えてしまつていたのだ。何処にもすぐそこに島があつたと言う痕跡は無い。島は文字通り、跡形も無く蜃気楼のように姿を消してしまつたのである。あまりの事に米森と側に居た部下は愕然として、救援の船が来るまでそのまま動く事が出来ずにいたのだつた。

### 硫黄島SIDE

一方硫黄島駐屯地にて、指令室にて報告を待つていた本郷達は、モニターの画面に映る浮島を眺めている。

ようやく石板の採掘が終わつたと言う報告を聞いた本郷は、石板の回収の為にヘリコプターを向かわせるよう指示を出し、今はのんびりと部下の報告を待っている。

「しかし、どうやらあの浮島はどうやら何かの遺跡のようだな。多分今の今まで海の底にあつたものが何らかの理由で地上に出てきたと言つたところだろうな」

「ですが最近この近海で地震が起きたという報告もありませんし、

干潮で潮が引いているわけでもありません。そもそもあの地点の海底にはあのような盛り上がりは無かったですねが…」

「ふーむ…、そこが私にも気になってる所なんだがな…」

本郷は部下の言葉を聞きながら首を傾げる。確かにあそこの海底には、あの浮島のような極端な隆起があるという報告を今の今まで聞いた事は無かった。

さらにここ最近地殻変動があったという報告も聞いた事が無いし、部下の言葉通り地震も干潮も起きている様子は無い。ならあんな巨大な浮島が一体何処から来たと言うのか…。頭を悩ませる本郷であったが、その時隣でモニターを眺めていた久保が、ポツリとこんな事を呟いた。

「もしかして…、あの浮島は昨夜の環礁なのでは…?」

「…何?」

突然突拍子の無い言葉を呟いた部下に、本郷は啞然としてしまう。しかし久保はふざけた様子も無く真剣な表情で本郷の方に顔を向ける。

「はい。あの環礁の形状も亀の甲羅によく似た楕円形、しかも大きさも昨夜目測とソナーで確認した物と一致していますし…」

「フォーム…。だがそれにしたって、だ…。環礁など普通なら動かん代物、しかも小さいものなら兎も角何故こんなバカでかい代物がこの硫黄島まで…」

「そ、そこまでは何とも…」

本郷の最もな問いに流石に久保も口を閉ざしてしまう。

正直久保自身も、あの浮島が昨夜の環礁と同じ物だとして、何故そんな物がこの硫黄島まで流れてきたのか、という事については皆目見当が付かないのだ。

こればかりは後々地質学者を本土から呼んで調査してもらおうしかないのだが…。

「まあいい、とにかく事の次第は本国に報告しておこう。最もやつこさんはBETAの相手に手いっぱい浮島の一つや二つ気にとめている暇はないだろ…。」

と、にこやかに笑いながらモニターを眺めていた本郷の表情が、突如驚愕に歪んだ。本郷だけではない。久保も含んだ指令室に居る人間全てが、モニターを見て一斉に唾然とした表情を浮かべたのだ。

モニターに映し出された浮島、それが突如として眩い黄金の光を放ち始めたのである。黄金の光は浮島に積み重なった岩と岩の隙間から洩れるように放たれ、次の瞬間、まるで爆発するかのよう浮島は跡形も無く崩れ去り、海上から完全に姿を消してしまったのだ。

「……馬鹿な！一体何がどうなつて……」

突然光を放つたと思つたら姿を消してしまつた浮島……。あまりの超常現象に本郷、いや、この場に居る誰も頭も全く付いていけない。だが、超常現象はこれだけではおさまらなかつた。

「……!? な、何だこれは!!」

誰が叫んだのか、そんな怒鳴り声が指令室に木霊する。最もそれは、この場に居る全員が言いたかつた事であろうセリフだ。何しろ彼等は、モニターで先程よりもさらに信じられない光景を目撃したのだから。

その光景とは……………

「そ、空飛ぶ……………亀の甲羅、だと……………?」

突如浮島の消滅した海面からジェットのように火を吹きながら舞い上がる巨大な亀の甲羅の姿であつた。

海上から舞い上がった亀の甲羅は、しばらくはグラグラふらついて不安定にその場に浮いていただけであつたが、次の瞬間にはグルグルとまるでコマのように回転を始め、最後はまるで空飛ぶ円盤のように高速回転をしながら、その場から飛び去っていつてしまった。

指令室の一同は、目の前で起きたあまりにも奇想天外な出来事に、

しばし呆然と言葉も忘れて立ちつくしていた。

やがて、ハツと気が付いた一人の兵士が例の亀の甲羅の進路を予測したところ、まっすぐ横浜へと向かう事が判明し、駐屯地でひと騒動起きたのは、また別の話である…。

## ガメラSIDE

『うおおおお!!つとと…。また変な方向に行きそうになっちまった…。存外飛ぶのも難しいな…』

『仕方が無い。人間の体の構造と私の身体の構造とは、全く異なるからな。まあ要は慣れだ。慣れれば水の中を泳ぐのと何ら変わらず飛ぶ事が出来るだろう』

『そんなもんか…?つておおおおおおおお落ちる落ちる落ちるううううう!!…あぶねく、海に真つ逆さまに落ちるかと思ったく…』

そして硫黄島から飛び立った空飛ぶ亀の甲羅、ことガメラは、なれない回転飛行にあっちへふらふらこつちへふらふらと見当違いの方向へ飛んでいきそうになったり果ては海の中へと突っ込みそうになったりしながらも何とか横浜目指して飛んでいた。

ガメラ、もといガメラの身体を得てこの世界に舞い降りた白銀武は、元は人間である。当たり前だがガメラと人間とは身体の構造が根本から異なり、ご覧の通り飛ぶ事にすら四苦八苦している始末である。

本来のガメラの人格も精神内で武にアドバイスを送る事しか出来ず、直接身体を動かしてサポートする事は出来ない。こんな状態でハイクにつっこんだら無事にBETAと戦えるのか…。武も『ガメラ』も不安になってしまう。

『やれやれ弱った…。君が言った通りだとしたら速く助けなければ時間が無い…。飛行の練習している時間も無しにぶっつけ本番か…』

『それはしゃーないわ。もうこうなったらこのまま飛んで慣れるしか…。お?段々と慣れてきた、かも?』

武の言うとおりの回転飛行するガメラは未だふらつきながらもなん

とかまっすぐ海面すれすれを飛べるようにはなっている。まだまだ不安定ではあるものの、これならいずれ本来のガメラと同じ程度には飛べるようになるだろう。

『…まあいい。このまままっすぐ行けば君達の言うヨコハマ、という場所に到着するだろう。武、君はそこで…』

『ああ、まずは横浜ハイヴをぶっ潰す。そして…』

この世界の純夏を、救いだすー！。

### 第3話 戦闘

日本帝国帝都、東京―。

1998年、日本に上陸したBETAにより蹂躪されたかつての帝都、京都に変わり日本帝国の新たな首都、政威大將軍の新たな御膝元となった都市。だが、その新たな帝都の命運も、移転から半年も経たないうちに風前の灯となっていた。

西日本を蹂躪し、旧帝都京都を壊滅させたBETAの大軍勢は、佐渡島、横浜へと己が巢であるハイヴを建設、帝国の領土の約半分、関東から西方面一帯は魑魅魍魎の跋扈する草一本生えぬ荒野へととなり果てたのだった。

無論帝国としてBETAの侵攻をただ指をくわえて見ていたわけではない。帝国は国土を侵略するBETAに対して戦術歩行戦闘機、通称『戦術機』をもって対抗、迎撃を試みた。

しかし、敵は無限の物量を誇るBETA、途切れることなく出現する魑魅魍魎の軍勢の前に帝国軍は押しつぶされ、結局本土にBETAの巢を二つ造らせる事を許す事となってしまった。

今では建造されたばかりの横浜ハイヴから次々と出現するBETAを横浜駐屯地に駐屯する国連軍と共に間引いて帝都への侵攻を妨害する程度の事しか出来ず、根本であるハイヴの攻略には何時まで経っても着手する事が出来ない有様であった。

目の前に全ての元凶があるにもかかわらず、それを取り除く事はおろか、触れることすらできない…。帝国にて生き残った全ての臣民、そしてそれを束ねる政威大將軍はその事実と明日をもしれぬ我が身を嘆き、齒噛みしていた。

そんな恐怖と屈辱の日々が今日、粉々に砕け散ると言う事を知らずに……。

帝都東京、帝国斯衛軍本営にて……。



政威大將軍守護を任とする帝国斯衛軍がBETA侵攻から帝都を守護するために置かれた基地、そこにある大型のモニターが幾つも設置されている一室。

そこは帝国内へと造られた横浜ハイヴと佐渡島ハイヴ、そしてそこから湧き出てくるBETAを独自に監視するために設置されたモニター室。10人以上の職員によつて24時間体制でBETAを監視し続けるそこに、斯衛軍の物とは異なる日本帝国陸軍専用の軍服を纏う眉間から左ほほへとまっすぐに走る傷跡が特徴的な壮年の男がジツと帝都へと建設を許してしまつたBETA共の巣窟の映像をただ黙つて眺めていた。

彼の名前は帝国陸軍中佐、巖谷榮二。かつて帝国斯衛軍専用戦術機『瑞鶴』開発に置いて大きな役割を担つた伝説的な衛士であり、今でもなお帝国陸軍内においてその戦術機操縦技術においては右に出る者はいないとも言われている人物である。

斯衛軍でも無い彼が今この場にいる理由、それは瑞鶴に替わる帝国斯衛軍専用戦術機の開発のためであつた。

瑞鶴は第1・5世代機、いかにパイロットの腕が反映される戦術機といえど第2世代、第3世代戦術機との性能差に関しては如何ともしがたいものがある。故に斯衛軍では至急瑞鶴に替わる第3世代機の開発が急がれており、今回巖谷中佐が陸軍から招かれたのも、かつて帝国斯衛軍専用機開発に貢献したと言う功績を買われたが故であつた。

そして1998年、斯衛軍専用第三世代機『武御雷』の試作機が完成、その後の京都防衛線において国産第3世代機『不知火』を上回る戦果を上げる事となつた。

だが、武御雷は不知火を上回る性能と圧倒的な近接戦闘能力とは引き換えに、その整備性と生産性は瑞鶴と比較してより劣悪な物となつてしまい、今回巖谷中佐が斯衛軍本営を訪れたのも、上層部とそれを協議する為でもあつた。

とはいえ斯衛軍からすれば高性能ならば少々の整備性や生産性の悪さなど関係無いとの考えらしいが…。幾ら必要経費といつても限

度があるだろうにと、巖谷中佐は深々と溜息を吐いた。

そもそも折角第2世代機の陽炎、第3世代機の不知火という瑞鶴をも上回る性能の機体がありながら、斯衛軍の連中は変なプライドを持って今となっては旧式の瑞鶴にこだわっていた…。余計なプライドなど持たずに最新鋭機に機体変更していれば京都防衛戦でもあれほどの死者を出さずに済んだかもしれないものを…。巖谷中佐は心の中で愚痴を呟く。

武御雷の事だけではない、今現在祖国日本帝国を襲う驚異の事を考えると嫌がおうにも暗鬱とした気分になってしまう。

今や敵BETAの本拠地であるハイヴは、帝都の目と鼻の先にある。これはもはや喉元に短刀を突き付けられているのと同じ事であり、今は国連軍、帝国軍との合同による間引きによってハイヴ内のBETAの数を間引いて凌いではいるものの、これも所詮は応急処置のようなもの、いつまで続くかは分からない。

今や帝国では新帝都東京を放棄して仙台へと移転する計画すらも立てている始末、帝国臣民だけでなく、帝国陸軍、上層部、果ては勇壮を旨とするこの帝国斯衛軍内部にさえも帝国の滅亡を予感する者が出てきているのが現実だ。

もつとも今のこの状況を見れば無理も無い話であり、巖谷中佐も彼等を責める気にはなれない。無論、自身の目の前でそのような話をしたならば不謹慎であると叱責はするが…。

それ以上に彼が心を痛めているのはそのBETAとの戦争に駆り出され、戦場に散っていく数多くの若者達のことである。BETAの侵攻に伴い徴兵年齢が引き下げられ、今ではもはや20にも満たない少女達まで戦場へと送られる事となってしまった。

この身は将軍殿下と日本帝国臣民を護る盾となり戦場の露と消えたと覚悟を決めた自分達日本帝国軍人ならばともかく、まだ未来のある、これからこの国の未来を背負って立って行かなければならない若者達をその未来を容赦なく摘み取ってしまう死に場所へと送らねばならないという現実には、常々己自身歯噛みをしていた。それはこの場に居る誰もが、否、帝国軍全員そして彼等が主と仰ぐ政威大將軍殿下

もきつと自らと同じ気持ちを抱いているであろう。

かの九州でのBETA上陸阻止作戦でも、旧帝都京都防衛戦においても、己達の力不足で多くの若者達の命を散らせてしまった。京都防衛線には、まだ年端も行かぬ己の親友の娘も参戦していた。幸い命は助かったものの、多くの学友たちの死を目の当たりにした結果、今でも癒える事の無い深い心の傷を負ってしまう事となった。

巖谷中佐は疲れ切ったように溜息を吐いた。どうにも最近はやがタイプな思考ばかりが浮かんで仕方が無い。

もう陸軍本部に戻るか…、と、モニター室を後にしようとした瞬間…。

「はい、こちら帝国斯衛軍…、…何ですって!!横濱目がけて未確認飛行物体が接近中!!」

突然周囲に響き渡った職員の大声にその場から立ち去ろうとした巖谷中佐も思わず足を止めてしまう。見ると周囲の職員もモニターを見ながら何やらざわついており、どうもただ事ではない様子であった。

「…何事だ!!一体何があった!!」

「ツハ!!硫黄島沖より横濱目がけて飛行物体らしきものが高速で接近中との報告が硫黄島駐屯地からの報告が入りました!!現に対空レーダーにもそれらしき物体が確認されていますが、航空機かどうかは不明です!!」

「!?飛行物体だど…?帝国領土に迷い込んだ何処かの国の飛行機か何かか…?…映像は出ないのか!？」

「只今解析中です!!」

慌ただしく飛行物体の映像解析へと移る職員達、彼等を眺めながら巖谷中佐は難しい表情で左ほほの傷跡を撫でる。

BETAによって航空兵力を無力化された現在でも、他国への移動、物資の輸送と言った役割で航空機を用いる国は多い。無論ハイヴ上空、あるいはBETA活動領域での航行は危険極まりないものの、海と海とに隔てられた国家、あるいは島国との間を行き来するには未だに用いられている。

しかしそれにしても突然航空機が出現すると言うのは不自然だ。硫黄島所有の輸送用航空機かヘリかとも考えたが、それなら先方から陸軍あたりへそれだと連絡が行くはず、未確認飛行物体だ何だと言ってくるはずが無い。

ではどこぞの国の戦闘機か何かか、それもあり得ない。今何処の国もそんな物を飛ばしている余裕は無いはず。戦術機が主流の現代でそんな物を造る国等今では何処にも無い。精々が物資輸送用の航空機程度だろうがそれでもこちらにフラフラ迷い込むことなど考えられない。

ならば飛行能力を得た新種のBETAか？だがユーラシアを拠点に活動しているBETAがわざわざ硫黄島経由で、しかも硫黄島に特に被害も与えずにまつすぐここに来るだろうか？、それに飛行能力を持つBETAが存在するのならば既に確認されているはず…。

頭の中で考えうる限りのありとあらゆる可能性を考える物の、さっぱり答えは出ない。

眉を顰めてまるで闘犬の如く唸り声を上げる巖谷中佐。と、突然その耳に現場職員の素っ頓狂な声が聞こえてきた。

「い、巖谷中佐!!え、映像が………ええ!?な、何だこれは!」

「どうした!!一体何が映って………なあっ!!」

突然素っ頓狂な声を上げた部下に釣られてモニターに表示された映像を見た巖谷中佐、瞬間、彼は部下と同じく映像に写されたソレの姿に思わず絶句してしまった。

モニターに映されているのは一面の大海原、その上に広がる空の上に、あまりにも信じがたいモノが映っていたのだ。

それは、蒼い光を放ちながら高速で回転して飛行する謎の物体、まるでどこぞのSF小説に出てくる空飛ぶ円盤の如き飛行物体であった。

いや、現在進行形で宇宙生物に攻め込まれている現状、正直宇宙人等うんざりするほど見飽きているのだが、流石に豪胆な巖谷中佐も空飛ぶ円盤は生涯一度も見た事が無く、モニターを眺めている職員達と同様啞然とした表情で空飛ぶ円盤を凝視していた。

「こ、これは……、火の玉、か……？」

「いえ、むしろ、空飛ぶ、円盤かと……。あの、どう、報告すれば……？」

「お、俺に聞くな……。いや、これは、上になんて言ったらいいんだ……？」

正直に空飛ぶ円盤が攻めてきました、等というわけにもいかず、巖谷中佐は途方に暮れるのであった。

## 国連軍SIDE

『ちくしょおおお!!この虫けら共があああ!!ミンチにしてやらアアアア!!』

『クソツ!!これだけ潰したと言うのにまだ出てくるか!!全く物量だけは本当に大したものだな!!』

『た、隊長!!こんな状況でそんなのんきなっ!!』

ここは横浜ハイヴ。佐渡島ハイヴに続いて日本本土に建設を許してしまったBETAの巣窟の一つ。中には数万数十万にも及ぶBETAがひしめき合い、内部へと侵入してくる侵入者をその圧倒的な物量に任せて押しつぶしている、まさに鉄壁の要塞である。

その人間の手の及ばぬ魔境とも呼べる世界、その入り口ともいえるそこで、三機の人型のロボットが迫りくる無数のBETAへ向かって銃弾を叩き込んでいた。

国連軍の所有する戦術機の一つであるF-15Cイーグル。それがその人型ロボットの正式名称であった。

彼等は国連軍の兵士、その任務はただ一つ、横浜ハイヴ内から湧き出てくるBETAの間引きである。

元々ハイヴのBETA収容数には限界がある。故に生み出されたBETAの個体数がハイヴの許容量を越えてしまった場合、BETAは新たな場所で己達の住処たるハイヴを作り出す。無論その進路上に存在するもの全てを喰い尽くして、だ。

己の進行を阻む者、阻まぬ者区別無く喰らい、蹂躪していくその様

はまさに蛮行と称するに相応しい。このような行為を人類が黙って見ているわけも無く、過去幾多のBETAへの対抗策を考案し、打ち出してきた。その成果の一つがこの戦術歩行戦闘機、すなわち『戦術機』である。

光線属種によって制空権を奪われた人類が手にしたBETAを倒す為の刃であり盾。立体的な高速機動性、多様な併走を利用できる汎用性、継続的な戦闘力を実現した対BETA戦における人類の切り札。だが、それでもなお敵の数の暴力には抗えず、世界各国で人類は敗北、遂には世界中に20以上のハイヴを建造させる羽目となってしまった。

ハイヴには数十万を越える多数のBETAが生息しておりこの完成したばかりの横浜ハイヴでさえ、未だに攻略できずにいる。今日本帝国に出来る事といえば、ハイヴがこれ以上建造されぬよう、帝国軍と極東国連軍の合同でハイヴ内のBETAを間引く事のみであった。

このF-15C三機もまたその『間引き作業』を行っていたのであるが、予想以上に多数出現したBETAの軍勢に既に押しつぶされる瀬戸際となっていた。

『クソツ!!こりゃ本気でヤバいな!!止むを得ん!!すぐに撤退を…』

『た、隊長!!間に合いません!!このままじゃ突撃級にひき潰される!!』

『ガタガタ騒ぐな!!死にたくなかったら黙って逃げろ!!』

跳躍ユニットを吹かしてその場から離脱するF-15C三機、だが、突撃級の突進する速度はBETAの中でも最速の時速170km。いかに機動性重視の第二世代機であろうともジリジリと距離を詰められていく。

『す、すみません隊長!駐屯地より連絡が!!何やら未確認飛行物体が接近中だとか…』

『未確認飛行物体だど!?そんな物どうでもいいわ阿呆!!こちとらそれどころじゃ…』

何やら余計なことを抜かす部下に怒鳴り声を張り上げるF-15Cパイロットであったが、その叱責は最後まで紡がれる事は無かつ

た。

突然彼等の頭上が陰り、それと同時にジェット噴射を思わせる音が聞こえてくる。しかもそれは、段々とこちらに近付いてきているのだ。

『……へ?』

一体何が、と思わず頭上を見上げる衛士達。瞬間、彼等の顔は一気に驚愕に歪んだ。

空に浮かんでいるのは巨大な円盤のような物体、しかもそれはまるで扇風機か何かのように青白い光を放ちながらグルグルと高速回転している。

突然出現した空飛ぶ円盤、その姿に咄然としていた衛士達であったが、すぐさまハツと我に返る。今自分達はBETAから撤退している最中、このままでは突進してくる突撃級に踏みつぶされる:!!慌てて再度跳躍ユニットをふかそうとするが、もう既に突撃級の群れはすぐそこまで迫って来ており、もはや間に合わない。

やられる—!!この場に居る三人の衛士の誰もが死を予感した。

が、突撃級の突進が、彼ら三人に襲いかかる事は無かった。

それもそのはずである。空中を浮遊していた巨大な空飛ぶ円盤?らしき物体が、突如として回転を停止するや否や、侵攻するBETAの軍勢の頭上目がけて落下してきたのである。

円盤?が落下した瞬間、落下地点を中心に地面が割れた。

否、割れたどころの話ではない。大地そのものの地盤がその質量に耐えられず粉碎され、  
“大地が裏返ったのだ”。

『グツ!』

『ばッ!!じ、地震か何かかよ!?!』

『ち、畜生!!戦術機の、バランスが!!』

円盤?の墜落によって発生した振動に、戦術機もバランスを崩して地面へと墜落してしまう。コクピット内で警告音が鳴り響く物の衛士達はそんな物を気にしている余裕などもはや無かった。

破碎された岩盤は次々とBETAの軍勢を飲み込み、全てを物いわぬ軀へと変えていく。そこには己達を踏みつぶそうとしていた突撃

級の群れも居た。不幸中の幸いというべきか己達は何とか距離を離していたおかげでBETAとの心中だけは免れたようだ。最も振動と共に飛んできた瓦礫のせいで愛機には多少なりともダメージを負ってしまったが、それでも連中に喰われるよりはマシだったと言わざるを得ないだろう。

円盤らしき物体が墜落した場所からは朦々と土煙が立ち上り、まるで煙幕か何かのように衛士達の視界を遮っている。

戦術機の脚部を起動させて何とか立ち上がり、噴煙へと目を凝らす。一体何が、一体何が落ちてきたのか…。

新手のBETAか、米国の新兵器か、それとも……………。  
その瞬間だった…。

『グルルルアアアアアアアアオオオオオオオンンンンン!!!』

咆哮が、世界そのものを揺るがすかのような大咆哮が戦場に響き渡った…!!

天地そのものがひっくり返りそうな裂帛の大咆哮、それと同時に煙が晴れ、姿を覆い隠していたソレが、遂に姿を現した。

その姿は巨大で、二足歩行をしているところを除けば現実に存在するハ虫類、亀に酷似していた。身体を覆う甲羅と甲羅から飛び出した首に両腕両足、まさに亀そのものと言っても良いだろう。

だが、現実世界の亀とは違い、そいつは人間と同じく二本の脚で大地に立ち、口にはまるで伝承に出てくる鬼の如く鋭い牙が一对剥き出しに生えており、そして何よりデカイ!!現在この世界で確認されたBETAを除くありとあらゆる生物をも上回る程巨大な背丈…!!目測では100メートル近くはあるであろうそんな巨体を持つ生物等、この場に居る衛士達は知らない…!!唯一BETAの要塞級がコイツと比肩しうるだろうが、この怪獣にはBETAにはない何らかの知性、そして生命力とも言えるであろう躍動を感じるのだ。

怪獣は唸り声を上げながら一歩前へと足を踏み出す。と同時に生き残ったBETAの群れの中から幾筋もの閃光が怪獣へと照射された。

光線属種のレーザー照射、かつて人類の制空権を一瞬で奪い去った



悪魔の閃光が、怪獣の巨大な体軀へと次々と突き刺さっていく。

(ん？レーザーで攻撃されている…？アレはBETAではないのか…？)

光線属種の攻撃を受ける巨大な怪獣、その姿を見て国連軍の兵士達はふとそんな事を考える。

光線属種のBETAのレーザーは驚異的な射程と威力、そして絶対に外すことなど無いと言ってもいい程の命中率を誇っている。だが、同時に何故か死体などを除く他の味方BETAを誤射する事も絶対に無いのだ。

故に衛士は光線属種を掃討する時は『味方を誤射しない』という点を逆手にとり、他のBETAを盾にして接近して叩くと言う戦術を基本としている。

この巨大な怪獣は光線属種からの攻撃を受けている。味方は絶対に誤射しない光線属種の攻撃を受けていると言う事は、この巨大な亀型の怪獣は少なくともBETAではないと言う事になる。かといって人類の味方と決まったわけでもないが…。

巨大な亀目がけて照射される無数のレーザー。ただの一撃で戦術機をも溶解させる死の閃光が次々と巨亀へと叩きつけられる。

その数は数十、否、数百にすら及ぶだろう。地上に展開された全光線級及び重光線級から発射される光の奔流、超高空から爆撃を仕掛ける爆撃機すらも撃ち落とし、一気に人類から制空権を奪い去った閃光の槍の一斉射撃、それをかわす事も出来ずにただ受け止める巨亀、その姿を見た誰もが、巨亀の死を確信した。

だが、レーザーの雨がやんだ瞬間、彼等の表情は驚愕に歪むこととなった。

巨亀は、命中したものを全てを溶解させ、消滅させるレーザーを立て続けに浴びていたはずの巨亀は、まるで何とも無いかのように平然とその場に立っていたのである。

レーザーの豪雨を受け止めきった巨亀は、目の前の虫けらの集団を

睥睨しながらその剣山の如き牙が並ぶ口を開き、大きく息を吸い込み始める。

急激に巨亀の口内へと吸い込まれていく膨大な量の空気、その影響で空気の流れに乱れが生じ、巨亀の周囲でさながら竜巻でも起きたかのような突風が吹き荒れ始める。

レーザーのエネルギーが充填完了し、再び全光線属種のレーザーが放たれようとしたその瞬間……!!

『ゴアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

咆哮と共に巨亀の口内から、太陽と見紛うばかりの灼熱の火球がBETAの軍勢目がけて発射された。

火球はそのままBETAの軍勢のど真ん中へと着弾、そのまま空気を引き裂くかのような爆音と共に爆発し、紅蓮の炎で地上全体を一瞬で燃やし尽くす。

その業火は地表を覆い尽くすBETAを次々と飲み込んでいき、その肉を、その細胞を、果てはその原子に至るまで燃やし尽くし、その場に存在していたと言う痕跡すらも残しはしない。

そして、炎が晴れた時、地表に展開していた3万ものBETAの軍勢はどこにも存在していなかった。小型、大型問わず一匹残さず焼き尽くされ、地面には彼等の残骸とも言える黒い燃えカスのみが、炎がくすぶる地上に残されているのみであった。

一瞬で消え去ったBETAの軍勢、今の今まで自分達を苦しめていた蟲共が一撃で消し飛ぶ様を真近で目撃した国連軍の衛士達は、今まで撤退しようとしていた事を忘れて啞然としていた。そんな彼等を尻目にBETAを始末した巨大怪獣は、まるで勝ち鬨を上げるかのようになり再び大地を揺らす咆哮を轟かせるのであった。

カメラSIDE

『グルルルルル……』

目の前で炎上する無数のBETA、己がずっと待ち望んでいたその光景を巨大な亀の姿の怪獣、カメラは何の感慨も無く眺めている。数

万の群れで襲いかかって来たBETAの軍勢は今、己の放った烈火炎『ハイ・プラズマ』によつて一瞬で焼き尽くされ、跡形も無く消し炭となつていく。

プラズマ火球、体内で造り出し、貯蔵されているプラズマエネルギーと酸素を喉のチャンバーに置いて融合・圧縮する事によつて強力な電離作用が発生、凝縮されたエネルギーを火球として発射すると言ふ超放電現象。万物を瞬時に炎上させるガメラの象徴ともいえる技である。そして、そのプラズマ火球を熱エネルギー、あるいは酸素の吸収によつてさらに強化、通常の120%以上の出力で標的へと発射するのがハイ・プラズマである。

その破壊力は凄まじく、ただの一撃で敵怪獣を吹き飛ばし、進化すれば街の広範囲を根こそぎ焼き尽くす事も可能なレベルにまで達する。

今のガメラはまだ目覚めたばかりであり、エネルギー不足と進化が進んでいないという理由から、ハイ・プラズマも自力のみでは軍団規模のBETAを根こそぎ吹き飛ばせるほどの威力は今はまだ引き出す事は出来ない。それがこうして奴等を一網打尽に出来る理由、それは皮肉にもガメラを攻撃していた光線属種BETAのお陰であった。

ガメラのエネルギーは熱。炎、石油、核エネルギー等の熱を発する物質を己のエネルギーへと変換する事が出来る。そして、それは光線級の発射するレーザーすらも例外ではない。照射されたレーザーはガメラの身体へと命中した瞬間に吸収され、ことごとくガメラのエネルギーにされてしまう。そしてそのエネルギーはプラズマ変換炉でプラズマエネルギーへと変換され、火球を精製するのに用いられるのだ。

このような特性から結果的に光線級や重光線級ではガメラを傷つける事は適わない。これがかのΓ標的こと超光線級の高出力光線であったのなら『今のガメラ』に手傷の一つを与えることも出来たかもしれない。が、生憎とそのBETAが出現するのは今より三年後の未来の話、この横浜ハイヴ、否、世界中どここのハイヴにも存在しない。



『かかってこい虫けら共!!俺が全部焼き殺して踏み潰してやるよ!!!』

『グルルオオオオアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオンンンンン!!!』

ガメラは大气が割かれんばかりの咆哮と共に口から灼熱の砲弾、プラズマ火球をBETAの先鋒、突撃級の群れ目掛けて3発連続で発射した。

灼熱の炎の塊は3発共に突撃級の群れの先頭へと命中、と同時に爆発し、灼熱の炎と爆風を辺りに撒き散らす。

万物を原子ごと焼きつくす炎には、例え頑丈な甲殻を持つ突撃級といえども耐え切れずに爆散、最前列は灰も残さずに塵となり、最後尾の突撃級もその高温を浴びて瞬時に絶命、粉々の肉片となった末に爆風で後方へと吹き飛ばされた。

粉碎された突撃級の破片はそのまま後方の戦車級と要撃級の群れに向かって飛んでいく。戦車級はそのまま破片の下敷き、あるいは肉片が激突してミンチとなり、要撃級も飛んでくる甲殻の破片や肉片に激突してしまい急停止、さらに最前列が突然停止した結果、後列の光線級及び要塞級は急停止させられてしまう。

『ゴオオオオオオアアアアアアアアアア!!!』

進軍を妨害されて停止したBETAの軍勢に、ガメラが咆哮と共に迫る。突撃級の肉片から生き延びた戦車級を踏みにじり、要撃級は己の爪で、牙で、足で切り裂き、噛み砕き、踏みつけて全て鬺り殺す。性懲りも無く光線級、重光線級はガメラ目がけてレーザーを照射してくるが、結局ガメラに新たな火球の燃料を与えるだけの結果となり、再度発射されたプラズマ火球三連射で全光線属種は消し炭と化した。

残るは己に最も近い巨体を誇る大型BETA、要塞級。先端の鋭利な十本足で緩慢に動きながら己に迫る巨体が、合計3体。ガメラへと接近した要塞級の集団は、目の前のガメラ目がけて触手の先端に生えた鋭い衝角を叩きつけてくる。衝角は強酸性の体液をまき散らし、ガメラの身体に次々と突き刺さる。衝角の硬度はダイヤモンドを上回り、さらに体液は戦術機のコクピットすらも容易く溶解させる。前の

ループにおける佐渡島ハイヴ攻略戦、『甲21号作戦』において、武と同じA―01隊員であった柏木晴子がこの衝角の餌食となつて非業の最期を遂げている。

そんな衛士にとつて、戦術機にとつて致命の一撃とも言えるそれが、次々とガメラの身体に突き刺さる。

モース硬度15というダイヤモンドすらも遥かに上回る硬度の衝角はガメラの皮膚を切り裂き、撒き散らされた強酸性の体液が傷口を焼き、肉を溶かしていく。

だが、ガメラは動かない。痛みに呻く声も上げない。まるで、衝角を叩きつけられた痛みそのものを感じていないかのように…。

『……こんなものか?』

ガメラは唸り声を上げながら自分の腕に刺さつた衝角の一本を鷲掴みにする。鋭利な衝角がガメラの掌に食い込むが、ガメラはそれに構わずさらに力強く、まるで衝角そのものを握りつぶそうとするかのように強く握りしめる。

『こんな程度の一撃で…!!柏木は…!!死んだのかああああ!!』

ガメラは怒りの咆哮を上げながら握りしめた触手を思い切り振りあげた。瞬間、要塞級は空へと一瞬フワツと舞い上がると次の瞬間には地面に思い切り叩きつけられた。固い岩盤に思い切り叩きつけられた要塞級は、その身を砕かれ、大地に紫色の大輪の花を咲かせる。残る二体の要塞級は急ぎ触手を収納しようとする、が…。

『グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

その前にガメラは己に突き刺さつた触手全てを鷲掴みにすると、力任せに触手を要塞級から引き千切つた…!!触手を根元から引き千切られた要塞級二体は、胴体から紫色の血を垂れ流しながらも身体をよろめかせる。ガメラはその隙を見逃さない。先程引き千切つた鋭い衝角の生えた要塞級の触手二本、それを力任せに一頭目の要塞級の頭部目掛けて振り下ろした。

ダイヤモンドを上回る硬度の衝角は、あっさりと要塞級の頭部をズタズタに引き裂き、瞬時に絶命させる。ガメラは触手を投げ捨てると最後の要塞級へと接近、その頭部を鷲掴みにすると凄まじい握力でそ

のまま握りつぶした。

頭部を潰され、そのまま地面へと崩れ落ちる要塞級。その巨体を見下ろしながら、ガメラは左手にべっとり付いた紫色の血液をふるい落とす。

『柏木……』

そして思い出す、前のループで出会い、そして共に戦った彼女の事を。飄々として掴みどころのない性格だけど、本当は誰よりも仲間思いで、そして己の兄弟の事を大事に思っていた少女の事を……。

『大丈夫だ、お前も、お前の弟達も死なせない……。全部、BETAは全部俺がぶっ潰す……!!』

そして、すぐに前を向く。そこには既に先程全滅させたBETAをさらに上回る数の軍勢が出現しようとしている。

休んでいる暇は無い、ガメラは直ぐに戦闘態勢に入る。まだこの程度ではハイヴ内のBETAは空にならない。

ハイヴの中にはまだ純夏が、それからもしかしたらこの世界の白銀武もまた生き残っているかもしれない。マナの流れを読み取ることで彼女達の居場所が分かると己の中の『ガメラ』は言うものの、それでも下手に内部でプラズマ火球をぶっ放そうものなら彼女達まで巻き添えにしかねない。

故にハイヴ内では火球は使用できない。だがただでさえ今の身体に完全に馴染んでいないというのにこの上最大の武器であるプラズマ火球を封じた状態で彼女達を救出できるかどうかという……、正直ガメラも難しいと考えている。

ならば何とかハイヴ内のBETAを根こそぎ引きずり出し、一匹残らず殲滅するしかない。幸い地上に展開している連中を片っ端から潰していれば勝手に向こうから出て来てくれる。既に光線属種のレーザーが自身の脅威でない以上、もはや奴らなど敵ではない。

ならばもはや恐れることなど何も無い……!!ただ目の前の敵を一気に殲滅するのみ……!!

ガメラは雄たけびを上げながら両足を引っ込めるとジェット噴射で空へと舞い上がる。





## 第4話 改変

国連太平洋方面第1軍・横浜国連軍暫定基地。

横浜に建設されたハイヴへの対処の為に横浜沿岸部に急遽建設された国連軍の軍事施設。

そこにあるとある一室にて、国連軍の制服の上に科学者か医者が着るような白衣を羽織った一人の女性が一人書類が山積みされたデスクに向かい書類に何やら数式らしきものを書き込んだりブツブツ吹きながら書類をグシャリと丸めてゴミ箱へと放り込んだりしている。その眉間には彼女の妖艶さすら感じさせる美貌には似合わない程深い皺が寄っており、今の彼女が大層不機嫌であると言う事を如実に示している。

女性の名前は香月夕呼。この横浜暫定基地の副指令にして、BETAとのコミュニケーション方法を模索するプロジェクト、オルタネイティブ4の最高責任者である物理学者である。

オルタネイティブ4、地球外生命体BETAとのコミュニケーションを図る為の計画、オルタネイティブ計画の第4計画。その骨子は量子電導脳を搭載した非炭素系疑似生命体『00ユニット』によるBETAとのコミュニケーション及び情報入手である。

元々オルタネイティブ計画とは、当時火星で発見された生命体、歴史上初めて発見された地球外生命体とのコンタクト、交流を図る事を目的として設置された12人の世界的権威による特務機関「デイグニファイド12」が起源である。しかし、次第にBETAの正体が人類に敵対的な生命体であると言う事が判明し、研究は世界的規模へと発展、1966年にオルタネイティブ第一計画が発動された。

しかしながらオルタネイティブ1はさしたる成果もあげられぬまま1968年破棄、続く第二計画ではBETAを鹵獲してコミュニケーションを試みるものの、結果的に判明したのはBETAが地球上の生物と同じ炭素系生物だと言うことのみ、続くソ連主導の第三計画では人工ESP発現体によるBETAの思考リーディングが行われたものの、それで判明した事は『BETAには思考が存在する事』と

『BETAは人間を生命体とみなしていない事』の二つだけであった。そして第三計画の成果を摂取して発動されたオルタネイティブ4ではあったが、その現状ははっきり言って芳しく無く、責任者の夕呼もそれが原因で苛立っているのだ。

その理由はただ一つ、計画の骨子である00ユニット、その中枢とも言える量子電導脳が中々完成しないのだ。

量子電導脳、それ一つで半導体150億個分とも言える驚異的な情報処理能力を持つ量子コンピューターは、夕呼自身が編み出した理論、『因果律量子論』に基づいて設計される代物であるのだが、その量子電導脳を構築するための理論が、未だに完成しない。否、理論自体は完成しているはずなのに量子電導脳を構築するまでには至らないのだ。理論そのものが間違っているのか、それともこの理論だけでは足りないのか不明だが、とにかく夕呼が編み出した理論では量子電導脳を構築する事が出来ないのだ。

このままでは00ユニットはいつまでたっても完成せず、オルタネイティブ4は国連決議の名の下に破棄される事となってしまう……。焦りと苛立ちに夕呼は歯ぎしりをしながら目の前の紙に羅列された数式を睨みつける。

と、突然ドアを規則正しくノックする音が聞こえてくる。夕呼は苛立たしげにドアへと視線を向けると「……誰？」と感情を込めずに問いかける。

『香月博士、お忙しいところすみません。失礼してもよろしいでしょうか?』

「……ん、いいわよ。入ってきなさい」

夕呼の許可が出てドアが開かれると、国連軍の軍服を着たポーランド人の女性、国連軍臨時中尉にして夕呼付きの秘書であるイリーナ・ピアティフが部屋へと入ってくる。

「……ん、何か報告?」

「はい、硫黄島駐屯地より緊急回線が入りました。硫黄島沿岸で未確認飛行物体が出現、横浜目がけて飛行中との事です」

「未確認飛行物体?……ふーん、あっそう。そんなのそつちで勝手

に処理しといて」

己の秘書の報告を夕呼は興味無さそうに聞き流して、要件は終わったとばかりに手をひらひらと振る。イリーナ臨時中尉はそんな上司の姿に特に機嫌を悪くした様子も無く、軽く一礼をするとそのまま夕呼の研究室から出て行った。

ドアが閉まる音が響くと同時に夕呼は疲れ切った顔で深々と溜息を吐いた。

「…飛行物体？こっちは今それどころじゃないのよ。ったく…、高々半導体150億個を手のひらサイズに収めるってだけなのに…、何でこんな手間取る羽目になるんだか…」

天才天才と持て囃されながらもその程度の理論も構築できない事に夕呼は苦々しげに顔を歪める。横浜にハイヴを建設された以上もはや猶予など無いに等しい。帝国軍、斯衛軍、国連軍の三軍が何とか外から漏れてくるBERTAを間引いてはいるものの、何時までもそんな事が続けられるはずが無い。それだけではない、首都撤退の際に一方的に日米安保を破棄した米国が事此処に至って共闘を打診している。

あの国が何の得も無しに協力してくるとは思えない…。恐らく例の新型爆弾の公開実験でも行おうと目論んでいるのだろう。大戦末期にベルリンに原爆を落とした時のように横浜ハイヴに新型爆弾を投下し、その威力実験と大国への示威行為でもするつもりなのだろう。

そして新型爆弾によってハイヴが無事殲滅させられたのならばオルタネイティブ計画を強引に第5計画へと移行させて…………。

「…あく!!もーダメダメ!!考えれば考える程ネガティブな発想ばかり浮かんでくるわ!!これじゃあ理論もクソも浮かばないわよったく!!もう何でもいいからこのネガティブな思考もろとも横浜ハイヴを纏めて吹っ飛ばして…………『ドオオオオオオオオオオオン!!!』っておおおおお!!」

イライラが遂に頂点に達した夕呼が机に山と積まれた書類をぶちまけながら立ちあがった瞬間、突如爆弾が炸裂したかのような爆音が

響き渡り、思わず身体をよろめかせて床に尻もちをついてしまった。「なっ、い、一体何が起こったって言うのよ!!……まさかテロ!? オルタネイティブ5派工作員の……!?……でもだからといってこんな分かりやすい……」

動揺していたのもつかの間、夕呼はすぐ冷静さを取り戻すと先程の爆発の原因を探って脳をフル回転させ始める。テロか、何かの事故か、はたまた横浜ハイヴから溢れたBETAの襲撃か……!!

……と、突然ドアの向こう側からバタバタと誰かが走ってくる音が研究室へと近付いてきたかと思うと、ドアが勢いよく開かれた。そこに居たのは先程未確認飛行物体が横浜に接近中と夕呼に報告したイリーナ臨時中尉。今の彼女は先程とは一転して額に汗して呼吸を荒げ、いかにも全力疾走してここまで来たと言った風体であった。

そんな彼女の様子に夕呼の眼差しが厳しくなる。やはりこの基地は何者かの襲撃にあったのか……。BETAであれ工作員であれ何でこのタイミングに……!!

そう考えた夕呼、だったが……天才的な頭脳を持つ彼女の予想は外れていた。盛大に外れていた。

「こ、香月博士!!緊急事態です!!横浜ハイヴに巨大生物出現!!地表上のBETAを次々と殲滅中!!」

「………なんですと?」

予想外の報告に、あまりにも予想の斜め上の報告に思わず啞然としてしまう夕呼であった。

白銀武、鑑純夏SIDE

ガメラ復活から遡り、横浜ハイヴが建設開始された頃の横浜市内にて……

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「す、純夏頑張れっ!!絶対、絶対俺達だけでも生き延びるんだ!!」

BETAの襲撃によって瓦礫の山と化した街並み、人気等全く無い廃墟の中を少年と少女が互いに息を切らしながら必死に駆け抜けて

いた。

二人共歳はまだ15歳程度、このような時世でなければ中学を卒業して高校へと入学している頃であろうの年齢だ。少年はゼイゼイと息を切らしながらも少女の腕を引っ張って瓦礫と瓦礫の隙間を縫って走り続ける。

少年の名前は白銀武、少女の名前は鑑純夏。二人共この街で共に生まれ、育った幼馴染であった。

二人が生まれた頃には既にBETAの脅威は未だ日本にまで及んでいなかった。それゆえ二人は横浜で平穏な毎日を送っていた。

娯楽の少ない世界であったが、それでも二人にとっては平凡な、それでも平和な日常を送れるだけでも幸せだった。通う学校で教えられる科目が変わっても、それでもこの平穏な時間が続くと信じていた、信じていたのだ……。

あの時、BETAの日本上陸の知らせを聞くまでは……。

九州から上陸したBETAは帝国軍の必死の抵抗にもかかわらず日本本土を蹂躪、九州全土に続いて四国、本州に上陸、ついには日本帝国首都、京都までもがBETAの圧倒的物量の前に陥落し、佐渡島にBETAの巢、ハイヴを作らせる事を許してしまうこととなった。崩れ去っていく平穏な日常、迫りくる危機、いつ来るかもしれないBETAの軍勢に怯える日々……。奴等の通り過ぎた後には文字通り草木一本残らない、人間は一人残らず殺される……。学校、新聞、テレビで幾度となく言われ続けた事……。

もしもBETAがこの街に押し寄せたのなら、間違いなく自分達は殺される。あのでかい戦術機に乗って戦う衛士ですらも殺されているのだ、戦うすべを持たない自分達等、それこそ虫けらの如く殺されるに決まっている……。

父も、母も、友達も、先生も、自分に今まで優しくしてくれた多くの人達も……。

…そして、幼い頃からずっと自分の側にいた純夏も……!!

…ふぎけるな!!そんな事があってたまるか!!

自分の大切な“日常”を、あんな訳の分からない宇宙人どもに壊されてたまるか!!

純夏は俺が守る、どんな事があっても、必ず守って見せる…!!

日に日に刻々と迫る異形の群れの足音を無意識に感じながらも、白銀武はそう心に誓ったのだった。

…そしてついに、BETAの軍勢が横浜付近に接近中との知らせが入った。武と純夏は互いの両親と共に、陸軍の避難用トラックに乗り込んで安全な場所まで疎開する事となった。

トラックの荷台に乗せられた武と純夏は、遠ざかっていく我が家を見慣れた街並みをジツと名残惜しそうに眺めていた。

…次に戻る時には、この家が、この景色が、残っているとも限らないのだから…。

己の記憶に、網膜に刻み込むかのようにただただ目の前の風景を見つめ続ける…。

…が、次の瞬間…!!

突如轟音とともにトラックが横転し、トラックに乗っていた武達は外へと投げ出された。

コンクリートの地面に投げ出され、受け身も取れずに地面に叩きつけられた武と純夏、痛みをこらえて地面から立ちあがった二人は……、

………恐怖と驚愕のあまり硬直した。

彼等の目の前に広がっていたのは…、道路に派手に横転し、乗車席が破壊されたトラック、そして……逃げ惑う人達へと襲いかかるBETAの群れだった。

それからは武と純夏は無我夢中で逃げた。何とか生存していた武と純夏の両親の六人で、BETAに見つからぬよう、瓦礫に隠れたり奴等の入ってこれない裏路地に潜り込んだりしながら逃げ続けた。

その途中で武と純夏は両親とはぐれた。BETAに発見された時

困役を買って出て、一人、二人といなくなり、最後には自分達だけになつてしまつていた。

『帝国軍の基地で会おう』と最後に笑顔を浮かべていたが、武と純夏には分かつていた。

父と母は、初めから死ぬつもりだったと言う事を…。

自分の命よりも、我が子を生かす為に己の命をBETAに投げ出したのだと言う事を…。

故に武と純夏は走りながらも泣いた。息を切らしながら、何度も瓦礫に足をとられて転びながら、体中傷だらけになりながらも泣いて泣いて泣きまくつた。

もう自分達を愛してくれた両親はいない。自分達の家も、学校も、公園も、何もかもがBETAによつて破壊され尽くされた。己の愛した日常は、もう二度と帰つてこない…!!

愛する者を失つた悲しみと、大切な故郷を根こそぎ奪い尽くしたBETAへの憎しみのあまり、武は唇を食いちぎらんばかりに噛みしめる。噛み切られた唇から血が伝うが、今の武はそんな事を気にしている余裕などない。

絶対に、絶対に死なない!!絶対に純夏を死なせない!!絶対に二人で生き延びる!!そして衛士になつて、必ず皆の仇をとつてやる!!

その信念が、執念が、何の訓練も施されていないただの少年、白銀武をここまで突き動かして、ここまで生き残らせたのだった。

一方武と一緒に逃げのびた鑑純夏も、武に手をひかれてどうにか此処まで逃げのびてきた。だが、元々そこまで体力の無い純夏は、もはや限界に近く、走るどころか歩くのさえもままならなさそうである。

そして、遂に体力の限界が来た純夏は瓦礫の陰で倒れ込むと、隣の壁に寄りかかりながらゼイゼイと息を切らしていた。流石に無理をさせてしまったと感じた武は足を止めて純夏の隣へと膝を下ろした。

「…大丈夫か、純夏」

「う、うん…大丈夫、だよ?武ちゃん…、ハア…、ハア…」

壁に寄りかかりながら呼吸を整える純夏、武はその姿を心配するような表情で眺めている。

武のその表情に、純夏の心の中から申し訳ないという思いが沸き上がって来る。

「ごめ、んね…？武、ちゃん…。私、体力無くってさ…。あはは…」  
「気にすんな…。今は少し休もう…。体力回復したらまた逃げて…。帝国軍の陣地に逃げ込めば…」

「ううん…。逃げるのは武ちゃんだけでいい…。私の事は、置いて行って…」

「……なっ!？」

純夏の口から出たセリフに武は思わずギョツとした。だが純夏は何処か諦めに満ちた笑顔でゆっくりと首を左右に振る。

「私、もう駄目だよ…。これ以上武ちゃんと居ても武ちゃんの足手纏いにしかならない。武ちゃん、お願いだから武ちゃんだけでも逃げて、生き延びて…。武ちゃんが生きてさえいてくれたら、私、それでいいから…」

「っ…馬鹿な事言うんじゃねえ!!そんな事言われてハイそうですかってお前を見捨てられるわけねえだろうが!!お前まで、お前まで失うなんて、俺は絶対にゴメンなんだよ!!」

自分を犠牲にしてまで武を逃がそうとする純夏の言葉に、武は激昂する。純夏の両肩を鷲掴みにすると怒気に満ちた視線で純夏を睨みつける。今まで共に過ごして来て見た事が無い程の怒りに満ちた武の形相に純夏は少なからず怯えを抱いてしまう。しかし純夏も武の命を護りたいと言う思いからか、震えながらも首を左右に振って了承しようとしめない。

「で、でも、私なんか連れて行ったら武ちゃんも一緒に…」

「うるせえっ!!グタグタ文句言うな!!絶対に二人で生き延びるんだ!!お前一人だけ勝手に死ぬなんて絶対に許さねえからな!!」

純夏の言葉を遮るように絶叫する武。BETAに発見されるとかそんな事を気にしていられない。両親や親しい人達を失ったと言うのにこれ以上純夏まで失ってたまるか…!!

そんな思いを込めて、武は純夏へと言い聞かせる。

「生き延びるんだ…!!俺と、一緒に…!!そして親父と、お袋と、皆の



仇をとるんだ…!!」

「かた、き…う？」

「俺は衛士になる…!!生き延びて絶対に衛士になってやる…!!そして、そしてあのクソBETA共を絶対に駆逐してやる…!!俺達の街を、俺達の故郷を侵略した事を、絶対後悔させてやる…!!」

だからお前も生きろ!!生きる事を絶対に諦めるんじゃねえ!!俺達は、俺達は昔からずっと一緒だっただろ!」

「武、ちゃん…」

武の絶叫に、まるで泣き叫ぶかのような声に純夏は言葉が出なかった。見れば、武の眼は今まで泣いていたせいで赤く腫れあがっており、頬には涙の跡がくつきりと残っている。

今日一日で、彼も全てを失ってしまった。今まで過ごしてきた家も、街も、己を愛してくれた家族までも、BETAによって悉く奪われてしまった…。彼の心も悲しみでズタズタなはずなのだ。

それなのに、自分と同じくらい辛いはずなのに、武は生きる事を諦めないで自分を護ってここまで逃げてくれた。それだけじゃない、自分の父と母も自分達を犠牲にしてまで純夏を逃がしてくれた…。それなのに、それなのに自分は勝手に諦めて…。

純夏は目から溢れそうになる涙を拭いとると、よろよると地面から危なげに立ちあがる。

突然立ち上がった純夏に流石の武も驚き慌ててしまう。

「お、オイ純夏！お前大丈夫なのかよ!?疲れてたんじゃ…」

「ううん、もう、大丈夫だから…。武ちゃん、逃げよう！何時までもこんな所いるわけにもいかないし、それに、それに私だって生きたい、武ちゃんと、一緒に生きて行きたいんだもん…!!」

「純夏…」

生気の蘇った純夏の顔を見て、武は少し驚いた様子を見せていたが、すぐに満面の笑顔を浮かべると純夏の右手を力強く握りしめる。

「そうか…。じゃあ逃げるぞ純夏！どんな事があっても帝国軍陣地に辿りつくんだ！」

「うん…!!あ、もしも武ちゃんが衛士になるんだったら、私も衛士に

なる！武ちゃんピンチになったら私が守ってあげちゃうんだから！」

「はあ？お前が？止めとけ止めとけ！お前なんざ戦術機乗る前に落第するのが落ちだって！！寧ろ足手纏いになるから食堂で飯でも作ってた方があってるんじゃないのか？」

「むゝ！ひ、ひっどくい！！武ちゃんのバカバカバカ！！絶対衛士になつて見返してあげちゃうんだからく！！」

「言いやがったなコイツく！！やれるものならやって見やがれてんだ！！……その前に、この街をとつと脱出するぞ！！」

「へ？う、うん！！」

そして武と純夏は再び路地裏を走りだした。瓦礫をよじ登り、隙間を潜り抜けてBETAの目を掻い潜りながら進んでいく。途中何度か闘士級、戦車級といった小型種に発見させそうになったものの、瓦礫に、廃墟に、果ては大型BETAの死体の影に隠れて何とかやり過ぎた。

死んでたまるか…、絶対生き延びる…。

その執念が二人の折れそうな気力を支えていた。痛みと疲労でガタガタの身体を動かしていた。

やがて二人が辿りついたのは、かつて両親と共によく買い物に来ていた商店街のアーケード……、否、アーケード『だった』場所であった。

既に立ち並ぶ商店はBETAによって破壊され、見る影も無い。地面や壁には真っ赤な液体がべつとりと塗りたくられ、その近くには、人間の身体の一部『だった』肉片が無残に散らばっている。

あまりにも無残な光景に、武は思わず吐き気をもよおしてしまう。隣の純夏もショックを受けているのか目を真ん丸に見開いて口を押さえている。

だが、何時までもこんな所に留まっていられない。いつまたBETAが此処に来るか分かったものではない。このアーケードさえ抜ければ避難するはずだった帝国軍の基地まであと少し、たとえ目の前に広がる光景に嫌悪感を感じたとしても行かないわけにはいかない

のだ。

武は覚悟を決めると左手に握りしめた純夏の掌を、改めてギュツと握りしめる。

あれからずっと握り続けた純夏の手は、すっかり汗でビシヨビシヨになって滑りやすくなっている。強く手を握りしめられた純夏は、一度武へと視線を向けた後、再び目の前のアーケードへと視線を向ける。自分の手を離さない様にしっかりと握りしめている武の手を強く強く握り返しながら…。

「よし…、行くぞ純夏」

「うん、武ちゃん…」

その言葉を合図に、二人は走りだした。脇にも後ろにも目もくれず、アーケードを全速力で駆け抜ける。

途中で瓦礫につまづきそうになった、ガラスや釘を踏みつけた、人間の死体らしきものも踏みつぶした…。

だがそれでも足を止めない、止めるわけにはいかない、もしも止めれば自分達もこの死体と同じ死体になる。たとえ靴がボロボロになっても、素足にガラスが刺さっても、足を止める事は出来ないのだ。息を切らし、服を汗でびしょ濡れにしながら全力疾走する二人…。やがて二人の前にアーケードの出口が見えてくる。

それを見た二人の顔は明るくなる。これで助かる、ここを抜ければ……。

その瞬間、武の意識が突如遠のいて行く、掴んでいたはずの純夏の腕を手放して、地面へと倒れ込んでいく。

「……………え……………」

遠ざかる意識の中、白銀武が最後に見たものは…………。

自分をジツと見降ろす兵士級BETAの姿であった。

「……けるちゃん、武ちゃん!!起きて!!」

どれほど意識を失っていたであろうか、突如として耳に飛び込んできた純夏の叫び声と何度も身体を揺さぶられる感覚に、武はゆっくりと目を開いた。

目の開いてすぐに飛び込んできたのは、いつも見慣れた純夏の顔。ただ何時も朝起こされていた時とは違ってその表情は何故か焦燥に駆られているかのようであった。

「すみ、か……、お前、無事だったの、か……?それじゃあ、ここは、帝国軍の……!?!」

一瞬自分達が帝国軍によって救助されたと安堵した瞬間、純夏の頭の上の天井を見てギョツとした。

天井は得体のしれない鋳物か金属のような物質でできており、少なくとも武の知っている住宅、建物の天井では無い。

「……まさか!?!」

武は未だ頭痛のする頭を押さえながら跳び起きて周囲を見渡す。

そこは小学校の教室程度の広さの、まるで洞窟のような空間だった。だが壁も床も天井も、石や岩石ではなく見た事の無いガラスか鋳石のような物質で造られており、明らかに普通の洞窟ではない。

よくよく見ると自分以外にも何人か人間がいる。皆自分と同じくボロボロな服装をしており、今自分達が此処にいる事に混乱しているようだ。

「純夏……、この洞窟って、まさか……」

ある予感に思い至った武が恐る恐る背後の住処に問いかけようとした瞬間……

「ひ、ひぎゃあああああ!!!!」「た、助けてくれええええ!!!!」  
突然凄まじい絶叫が迸り、武と純夏は弾かれたように絶叫が聞こえた方向へと視線を向けた。

そこで見たものは、二人の男性が二体の兵士級に驚掴みにされ、何処かへと引きずられて行く姿であった。二人共傷だらけではあったものの体格も良く力も強そうであった。

そんな二人が必死で暴れているにもかかわらず、兵士級は特に答え



巢ならBETAは何万何十万居るか知れたものじゃない…!!

もはや逃げ切れない…。万事休すか…。

一瞬武の心を絶望が覆い尽くす、だが、胸の中で啜り泣く純夏を見た瞬間、武は己の心を叱咤する。

“ふざけるな!!まだ終わってなんかいない!!まだ、まだ諦めてたまるかよ!!”

武は純夏を安心させるように背中を撫でながら、改めて心の底から決意する。

…どんな事があっても、純夏だけは絶対に守る、生かして見せる、と。

あれから三日程時間が経過した。もはやこの監獄には武と純夏以外人間はいない。皆一人残らず連れて行かれるか、逃げ出そうとして喰われるか、あるいは絶望のあまり自害してしまった人間も居る。兵士級は死んだ人間の死骸もまた、回収して何処かへと運んで行った。何に使うかは分からない、知りたくも無い。

とにかくこうして監獄にいる人間は武と純夏だけとなった。この三日間食事水分も全く摂っておらず、二人共衰弱しきっていた。この状態ではBETAに抵抗する事は愚か、逃げることもままならないであろう。

武は心の中で歯噛みしていた。結局何も有効な作戦は浮かばなかった…、ただただ日に日に減っていく人間の姿を眺めている事しか出来なかった…。

もう残されているのは俺と純夏だけ…。このままじゃ、純夏は…。

武は己の無力さに歯噛みしてしまう。そんな彼の姿を、純夏は何処か悲しげに見つめていた。

と、突然牢獄の入り口から何度も見てきた白い異形、兵士級BETAが姿を現した。

その何処か人に似たおぞましい姿を見て武は歯噛みする、遂に自分

達の番が来たか、と。

兵士級はジツと純夏に、その何を考えているのかすらも分からない視線を向けている。己がターゲットにされた純夏は恐怖で震えながら後ろへと後ずさる。

だが、背後にはあの無機質な壁しか無く、すぐに追い詰められてしまう。もはや逃げ場も無く迫ってくる兵士級から目を放せずガタガタと震える純夏…。

このままでは純夏はあの化け物に何処かへ連れて行かれる…、今まで連れ去られた人達がだれも帰ってこなかったところをみると、無事に帰れるはずが無い…。

そんな、そんな所に彼女を連れていかれてたまるか!!

「くっそおおおお!!純夏に、純夏に近寄るんじゃねええ!!」

純夏へと接近しようとする兵士級を食い止めようと、武は兵士級の人間に似た上半身を羽交い絞めにする。だが、すぐにその細身の身体からは信じられない程の怪力で振りほどかれ、揚句に拳によつて無造作に殴り飛ばされて壁へと激突した。

「がっ……………はあ……………!!」

「た、武ちゃん!!」

まるで鉄の砲弾が激突したかのような衝撃と硬質な岩盤へと思いつき叩きつけられた激痛のあまり、武は絶叫を上げることすらも出来ずに地面に倒れて悶絶する。壁からずり落ちた武は全身を襲う激痛に悶え苦しんでおり、とてもすぐには立ちあがる事が出来そうにない。

一方兵士級は標的を己の邪魔をした武へと変える。このまま殺すのか、あるいは彼を先に実験材料とするのか…、いずれにせよ無事では済まない事は確かだ。

「た、武ちゃん!!に、逃げてえ!!」

「がっ……………く……………るな……………すみ……………か……………お……………まえ……………この……………すぎ、に……………」

「嫌っ!いやあ!!武ちゃんを、武ちゃんを見殺しになんてできない!!私を置いて行かないでよオ!!」

「無茶……いくなよ……せめて……お前、だけでも……ゴハア!!」  
まるで重度の結核患者の如く口から血を吐き、肋骨が何本も押し折れて激痛の走る胸部を庇いながら、武は生まれたての小鹿のように足をガタガタと震わせて、壁に寄りかかりながら立ちあがり、目の前の兵士級を挑戦的に睨みつけ、獯猛に笑う。

タダでは殺されてやらない、喰われそうになっても徹底的に抵抗して、最悪首だけになってでも奴の首を食いちぎってやる…!!

だが、兵士級は何の感情も無く、目の前の『障害』を排除せんとその腕をゆつくりと武へと伸ばす。常人以上の筋力を誇る腕だ、それに掴まれればもはや逃げ切れまい。その巨大に裂けた口に生えそろった頑丈な歯で、粉みじんに噛み砕かれてしまうだろう。

武が喰われる、あの商店街に転がっていた死体のように、自分の両親と同じように無残に喰われて、ただの死体になってしまう…!!

「お願い!!誰か、誰か武ちゃんを助けてええええ!!」

純夏の悲鳴と嘆きに満ちた絶叫が牢獄に響き渡る。だがそれも無駄なことだった。此処にいる人間は純夏と武の二人だけ。たとえもう一人人間がいたとしても、兵士級を殺すどころか傷一つつけることすらできないだろう。まして純夏は戦闘訓練も受けていない女子、武も先程の一撃で満身創痍…。

もはや希望は無い、武はこのまま無残に殺され、純夏も人体実験で身体をバラバラにされる……、本来ならば、そうなるはずであった。……だが、次の瞬間、武と純夏の僅かな希望が、繋がった。

『ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

突如轟音と共に牢獄の天井が崩れ出し、巨大な黒い『何か』が兵士級の醜い身体を押しつぶした。兵士級は何一つ抵抗する事も出来ず、紫色の汚らしい体液をまき散らしてモノ言わぬ肉塊と化した。

「え……?」

兵士級に殺されそうになっていた武、そして武が殺されそうになるのを目の当たりにしていた純夏は、兵士級が殺されて、武の命が救われたと言う事が理解できずに口をポカンと開けて呆然としていた。

武の目の前にあるのは押し花の如く潰されて臓物と血を撒き散ら





## 第5話 落涙

横濱国連軍暫定基地、オルタネイティブ第4計画及び横濱ハイヴ攻略の為に横浜沿岸部に設置された軍事施設であり、基地から一步外に出たならばそこは既に戦場といつてもいい程の最前線に置かれている。それゆえに仮設とはいっても本来の軍事拠点としての基地よりもより大規模かつ最新鋭の設備、防備を備えており、たとえば数万のBETAが押し寄せてきたとしても抑えきることが可能、とまで言われる程の堅牢さを誇っている。最も実際にそのような事態になったとしたならば、それは横濱ハイヴのBETAの間引きが追いつかなくなった時、即ち横濱基地そのものを放棄する時であり、そうなれば国連は直ちにオルタネイティブ4から米国主導の第五計画へと移行する考えなのであるが…。

故に早急に横濱ハイヴを叩かねばならないのだが、ハイヴの圧倒的とも言える物量差の前にはたとえ国連軍、帝国軍、斯衛軍の三軍合同による侵攻作戦でもハイヴの中核である反応炉に到達するまでには至らず、結局ハイヴから溢れ出るBETA共を間引くと言う焼け石に水な軍事行為を延々と繰り返す事となっている。

そんなとき、日米安保条約を破棄して日本から撤退したはずのアメリカが、横濱ハイヴ攻略作戦への協力を打診してきた。日本が危うくなるで見ると見るや一方的に条約を破棄して早々に軍を引き上げた事を棚に上げて何をぬけぬけと…、と帝国軍や国連軍にはアメリカのこの参戦発言に関して不満や嫌悪感を抱く者も少なく無く、真の目的はアメリカが極秘裏に開発した新型爆弾の威力実験の為、等という予想を立てている者もいる。

最も帝国軍に斯衛軍、国連軍共に兵力には余裕が無い今、BETAからの侵略によるダメージが実質、ゼロであり、兵力戦術機共に潤沢なアメリカ軍が参戦してくれるのは純粹に戦力を増やす意味ではありがたいことであり、両国ともにアメリカの提案を受け入れる方向で話を進めているのが現実であった。

これでオルタネイティブ4も白紙で終わるのか…、この時国連軍と

帝国軍ではそのような話題まで出てくる始末であった。

そう、この時は……。

横浜国連軍暫定基地内、モニタールーム

24時間体制で横浜ハイヴを監視し、横浜ハイヴ内でのBETAの間引き作戦を行う国連所属軍へと指令を送るいわば指令室とも言える場所。無論スタッフも頭脳のみならずいかなる状況においても冷静に状況分析、判断を行えるえりすぐりの人材をそろえており、たとえ基地にBETAの大軍勢が押し寄せるような事態になったとしても冷静さを失わないであろう胆力の持ち主たちである。とはいえそれはこの基地に所属する大半の人間にも言える事であり、それこそ衛士となったばかりの新人でも無い限り、並大抵のことでは動じる事のない精神力が備わっている。最もそうでなければ文字通り地獄同然の戦場では到底生き残る事が出来ない為、『必要に迫られて』備えさせられた、とも言えるのだが…。

故にこのモニタールームにいる人間は大概の事では動揺、混乱することなど無い、無いはずだった……、のだが……。

「み、未確認生物飛行開始!!きや、脚部からジェット噴射らしきものを吹き出して飛行しています!!」

「そんな事は見れば分かる!!というか何なんだコイツは!!空は飛ぶわ火を噴くわ!!新種のBETAか何かなのか!!」

「そんなこと前触れも無く突然出現したのですから分かるわけ無いでしょう!?!?!きよ、巨大生物飛行しながら地上のBETAに攻撃開始!!光線属種が反撃していますが巨大生物には効果が無い模様です!!」

「クソツ!!本当にどういう身体してやがるんだ!!仮にも戦術機を消し飛ばすレーザーだぞ?!それが当たったんだぞ!!無傷だなんてあり得ないだろうが!!」

「そんな事私に聞かないでください!!」

……現在、現場は多いに混乱していた。オペレーターもそれ以外の

スタッフも、大声で何事か騒ぎたてており、モニタールームはさながら暴動でも起きたかのような喧騒と怒声に包まれている。

それも仕方が無いだろう、何故なら、今日の前のモニターにはこの場にいる全ての人間の想像を遥かに超える出来事が展開されているのだから…。

モニターに映し出されている光景は、一面紅蓮の炎で覆い尽くされた横浜の大地と、灼熱の炎に炙られ炭化していく地上を埋め尽くしていた無数のBETAの群れ、そして……、

『グルアアアアアアアオオオオオオンンンンン!!!』

その地獄を生み出した、突如出現した巨大な「怪獣」の姿であった。

その怪獣は一見すると直立した亀のような姿をしているものの、その80メートルはあるであろう巨体は現存するありとあらゆる亀、否、ありとあらゆる生物ではあり得ない程巨大かつ異様であり、さらにはその巨体に反して手足を引っ込めることで空を飛びまわり、口からは灼熱の火球を吐いてありとあらゆるものを焼きはらっていく…、

怪獣はその巨体と灼熱の炎、そして飛行能力を生かして地上に出現するBETAを次々と、まるで親の仇か何かのように焼き払い、踏み潰している。無論BETAも殺されるがままではなく、光線属種は次々とレーザーを怪獣に照射し、突撃級、要撃級といったBETAの軍勢は数の暴力で怪獣を押しつぶそうと殺到する。

だが、戦術機すら一撃で蒸発させ、人類から制空権を瞬く間に奪い去った忌々しいレーザーは何故か怪獣に火傷一つ負わせることも適わず、進撃するBETAの大群はある者は火球で消し飛ばされ、またある者はその巨体に踏みつぶされ、なぎ払われる尾ですり潰されていく…。

かつて幾多の英霊が辛酸を舐めながら散っていったであろう雲霞の如きBETAの大群、それがたった一つの、たった一体の強大な力の前に呆気なく崩れ、屈していく…。そのあまりにもフィクション染みた光景にはこの場の全ての人間は呆気にとられ、混乱する以外に無かった。

「なんなんだこの怪物は……！コイツもまた、我々人類と敵対する存在だと言うのか……!?!」

戦慄した表情でそう呟くのは横浜国連軍暫定基地司令、バウル・ラダビノツド准将。国連軍からオルタネイティブ4監査の為に派遣された士官であり、かつてインド亜大陸においてBETAとの激戦を戦い抜き、生き抜いてきた猛者である。

そんな歴戦の勇者とも言える彼でさえ、モニターに映る光景には流石に度肝を抜かれていた。今まで幾度もBETAと干戈を交え、幾度も同胞を見送り続けてきたが故に、BETAの数を頼みとした突撃戦法、光線属種の恐ろしさについては骨身に染み込む程理解している。それが目の前の巨大な亀の如き怪獣には通じず、逆にその強大な「個」の前に次々とBETAが蹂躪されていく……、その光景は彼自身BETAに深い憎悪を持つが故に爽快でもありながら、逆に恐ろしくもあつたのだ。

一方ラダビノツド司令の隣で無言でモニターを眺める白衣の女史、オルタネイティブ4最高責任者の香月夕呼は、モニタールームの他の面々のように混乱も何もしておらず、いつも通り平静な態度でモニターを眺めている。

否、今の彼女は決して『いつも通り』ではない。とはいっても混乱や恐怖といった感情ではない、モニターに映る炎獄の光景を見ながら彼女は全く逆の感情を抱いていたのだ。

彼女は『晒っていた』。満面の笑顔で晒っていた。まるでどこぞの童話かおとぎ話に出てくる魔女のような幼い子供が間違ひなくトラウマを抱くような嬉々とした笑顔を浮かべていたのである……！

もしも周囲に誰も居なかったのなら、きっと彼女は盛大に爆笑した事であろう、誰彼はばかることなく基地中に響く程の晒い声を響かせた事であろう。それほどまでに彼女は歓喜していた、否、寧ろ「ハイ」になっていたと言うべきだろうか。

「……香月博士、〴〵機嫌そうなところを失礼するが……」

ラダビノツド司令は夕呼の悪魔的な笑顔に若干引きながら彼女に質問をする。立場上の上司であるラダビノツド司令の声を聞いて、夕

呼は満面の笑みを浮かべたままラダビノツド司令の方を向く。

「あら、いかがでしたしました司令？ 私に何か御用向きでも…」

「いや……用という程の事でも無いのだがな……。BETAが次々掃討されてご機嫌なのは分かるのだがあの怪獣はまだ味方と決まったわけではあるまい？ 今はBETAを敵と見なしているがもしも横浜ハイヴのBETAが片付いたら今度は我々に牙を剥く可能性もあるのだぞ？」

ラダビノツド司令が警戒しているのはそれであった。あの怪獣は見たところBETAと敵対しているようではあるが、まだこちらの味方と決まったわけではない。仮にBETAではなくこの地球上の生命であったとしても、人類と意思疎通できるか否か、あるいは人類にとって無害な存在か否かは別の問題だ。

仮にあれが自分達に牙を？ こうものならこの横浜仮設基地のみの兵力では到底勝てるとは思えない。何しろあのレーザーや要塞級の衝角の一撃すらも耐え切る頑丈さだ。人類の現在持ちうる兵器のみでは傷をつけることすら難しいだろう。

そんな彼の不安を聞いた夕呼は何やらおかしそうにククツと笑い声を上げる。その様子もその魔女の如き表情のせいで何やら悪だくみをしているようにしか見えない。

そんな彼女を眺めるラダビノツド司令は、笑われて気分を害するよりもまるで彼女が何かよからぬ事をたくらんでいるかのようで少しばかり不気味に思えてしまった。

「…、香月博士？」

「ククツ……。申し訳ありませんわ司令。確かに司令の心配はごもっともでしょうけど、私の予想が正しければあの巨大生物はこの横浜仮設基地を襲ってくる事は無いかと思えますわ」

「むう…、それは根拠がある事なのか？ 先程届いた硫黄島からの報告によれば、奴は硫黄島近海から出現したらしいが、それ以外は何一つ分かっていないのだぞ？」

「もちろんです。まあ確かにアレに関しては分からない事があり過ぎますのでこれは完全な予測なのですが、根拠は二つあります」

夕呼は自信ありげに言いながら人差し指をピンと立てた。

「まず第一にあの怪獣、仮称でアンノウンとしておきますが、アンノウンは光線属種からのレーザー攻撃を受けています。連中の習性から言って、光線属種が他のBETAを攻撃する事はあり得ないと言ってもいいでしょう。既に生命活動を停止して死骸となったBETAや『あの時』のイレギュラーな事例を除けば光線属種が同族を誤射した事は一度たりともありません。この時点でアンノウンがBETAとは異なる生命体だと言う事が説明できます」

「ふむ…、それで二つ目は？」

「二つ目はアンノウンの行動です。アンノウンはすぐ近くに戦術機があると言うのにもかかわらず彼等を見捨ててBETAを攻撃していません。それ以前にBETA同様人間を攻撃する意思があると言うのなら横浜ハイヴを攻める前に進路上にあるこの横浜仮設基地を攻めてもいいはず、ですがアンノウンは仮設基地を見捨てて横浜ハイヴへ直接乗り込んだ…。この事から見てアンノウンは人類に敵対する意思は無い、あるいは人類そのもの等眼中に無くBETAのみを殲滅対象と見ている可能性が高いと考えられます」

「成程……、ならばあのアンノウンはそのまま放置するつもりかね？博士」

夕呼の意見を聞いたラダビノッド司令はそれでもまだ何処か釈然としない面持ちで夕呼に問いかける。なにせあの怪獣、仮称アンノウンは何の前触れも無く出現した未知の存在、その正体も生態もそもそも何処から来たのかも全く不明なのだ。いかに天才的頭脳を誇る香月夕呼の言葉であってもそう簡単には鵜呑みにする事はできない。

夕呼もラダビノッド司令の考えは重々承知の上であるものの、そんな上司の言葉に対して肩を竦めて頷いた。

「その方が賢明だと思いますわ、司令。アレの攻撃目標は現状BETAのみ、我々が攻撃しても得はありませんし、寧ろアレを敵に回す事になって無用な損害を負う事になりかねません。ここはひとまず静観するべきでしょう」

「承知した。……基地に待機中の全軍に通達!!これよりあの巨大生

物の仮称をアンノウンとし、指示があるまでアンノウンへの攻撃は禁止する!! うろたえている暇は無い!! 急げ!!」

「りよ、了解!!」

夕呼の返答にラダビノツド司令もようやく腹を決め、モニタールーム全体に響き渡るような声でスタツフへと指示を飛ばす。混乱していたオペレーターも歴戦の兵の怒声を聞いて一気に正気を取り戻すと互いに指示を出し合って基地内及び現在戦場と化している横浜ハイヴ近辺へと出撃している部隊へとラダビノツド司令の指示を伝達する。

瞬時に元の平静さを取り戻すモニタールーム、夕呼はその様子を満足そうに眺めている、と、彼女は何かを思い出したかのようにポンと手を打つと再びラダビノツド司令へと視線を向ける。

「そういうえば、確かアレは硫黄島から飛来したという報告を受けましたね」

「うむ、何でも硫黄島には環礁のような姿で流れ着いたらしい。そしてそこで発掘作業を行ったところ、何やら文字らしきものが刻まれた石板らしきものと勾玉らしい奇妙な金属片が多数発掘されたらしい。残念ながら石板は粉々になってしまったらしいが、写真やスケッチは取つてあるとの事だ」

硫黄島駐屯地からの報告は帝国軍、斯衛軍だけでなく横浜に置かれた仮設基地にも送られていた。なにしろ仮設基地は硫黄島沿岸から飛び立った飛行物体の進路上に位置しており、もしも飛行物体がBE TA同様人類にとって敵対的な存在だった場合、真っ先に襲撃される可能性が大きかったからである。…実際は杞憂で終わったが。

ラダビノツド司令の返答を聞いた夕呼は、興味深げに指を顎に当てる。

「石板…、勾玉…。ひよつとしたらアレに関して何か分かるかもしれませんね…。直ぐにその勾玉と石板の写真かスケッチを硫黄島から取り寄せて頂けるでしょうか?」

「ふむ、それは可能ではあるが…、それだけで奴の事が分かるのかね?」



「まだ何とも言えませんが、何らかの手掛かりにはなる可能性があります。生憎と私は考古学は専門外ですが大学の知り合いに任せてみようかと」

「成程……、だがまずはコレがどうなるかを見届けてから、になりそうだがな……」

そう呟くとラダビノッド司令は再びモニターへと視線を戻す。夕呼もまた釣られてモニターの方へと向くと、既に戦いは終わりつつあった。

アンノウンには目立った外傷は無し、一方BETA側に残された兵力は要塞級一体のみ、増援が来ない所を見るとどうやら既に横浜ハイヴ内のBETAはあれ一体を残して全滅したようである。

要塞級は最後の悪あがきとばかりに強酸性の体液をまき散らす衝角をアンノウン目掛けて叩きつけようとする。……が、遅すぎた。

要塞級の目の前へと突進したアンノウンはその勢いのままに要塞級の頭部を力任せに引き千切った……！頭部を失った要塞級はしばらく棒立ちしていたものの、やがて引き千切られた首から大量の血をまき散らしながら地面に横倒しとなってそのまま動かなくなった。

アンノウンは要塞級が死亡した事を見届けると右手で握りしめた要塞級の頭部を投げ捨てて、高らかに勝利の咆哮を上げながら横浜ハイヴに向かって歩き始めた。

「地上に展開中のBETA、全滅……。……アンノウンが横浜ハイヴ目掛けて進行を開始しました！」

「増援は！」

「出現予兆無し!!横浜ハイヴ内のBETAは全滅した模様!!」

「油断するな、監視を続行しろ!!」

「り、了解！」

ラダビノッド司令の一喝で再度モニターを中止するオペレーター達。

そこに広がるのは何も存在しない荒野。辺りには炭化したBETAの死骸が転がり、所々では未だに焰が燻っている。

そして、何の生命も存在せぬその荒野を、アンノウンは地響きを立

てながら進んでいた。

ただ一路、横浜ハイヴを目指して……。

ガメラSIDE

『グルルルルル……』

横浜ハイヴから次々と湧き出てきたBETAを一掃したガメラは、遂に横浜ハイヴ内部へと足を進め始めた。地上にはもはや焼け焦げて炭化したBETA『だった』モノの死骸しか残っておらず、もはや小型級一体すらも残されていない。

どうやら横浜ハイヴのBETAは見たところ全滅したようである。それでもガメラは油断することなく目を動かしながら、ハイヴ地下へと続く穴へと足を踏み入れていった。

横浜ハイヴは未だにモニュメントも50メートルにも届かぬ建設途中のハイヴであり、本来の歴史では破壊された時期には既にフェイズ2にまで成長していたのだが、今回は攻略した時期が遥かに早かった為、大体フェイズ1・5というレベルでしかない。

それでもハイヴの中は広大、この迷路のような内部から人間二人を発見するのは、正直骨といってもいいだろう。

洞窟のような横抗を見回しながら、ガメラは進む。どうやらハイヴのBETAは無事一掃できたらしい。大型種どころか小型種も見当たらない。

ならば先へ急ぐ為にも此処は飛んだほうがいいだろう、ガメラは脚部を甲羅に引っ込めてジェットを噴射するとそのまま横抗内部を移動し始めた。

『なあガメラ、どうだ？まだハイヴに生存者は……』

『待ってくれ、マナの流れを探って見る………。……………中央最深部に幾つかの生命反応がある。だが、これは……。』

『……ああ、そいつらは“もう死んでいる”と言っていい。多分ソレじゃない』

ガメラ、白銀武は脳内でオリジナルのガメラ、この身体の元となったガメラと会話しながら飛行する。

オリジナルのガメラが感じたハイヴ深奥で感じ取った生命反応、それはかつて人間だったもの、今ではBETAによる苛烈な実験によって脳髓のみにされ、それでもなお“生かされ続けている”人間だった者達…。本当ならばこのまま生かしておいても彼等にとつては苦痛でしかないだろう、いつその事殺してやった方が彼等の為なのかもしれない。

だが……。

『……すまないガメラ、他の生命反応を探ってくれ』

『……了解した。だが、いいのか？あのまま生かしておいても彼等は……』

『……00ユニット、純夏がもし、助かったのなら……代わりがいる、だろ……？』

『……そうか、正直好かん。ヒトの魂を機械へと移す。いかに必要なこととはいえそれは生命への冒瀆だ。……最も、状況が状況ゆえに仕方が無いのかもしれないが……』

武の脳内でオリジナルのガメラは不満げに呟く。地球の意思により生まれ、地球に住まう命を守護することを使命とする守護神からすれば、生物の魂を好き勝手に弄り回すと言うのはあまり気持ちのいいものではないのだろう。

00ユニット。オルタネイティブ4の中核となる存在であり、その正体は人間の魂を機械へと移植させた存在、いわば“人間の魂を持つロボット”と言える存在なのだ。

BETAは人類を、否、この世に存在する炭素系生命体を生物と見なしではない。故に夕呼は非炭素系疑似生命体を作り出し、BETAの思考リーディング、コミュニケーションによる情報収集を行う事を発案したのである。

そもそも香月夕呼が己自身の直属部隊A-01を保持しているのは、元々00ユニットとしての素質の高い人間の中から00ユニットにふさわしい者を選別するために他ならず、かの隊の任務が過酷であり、損耗率が高いのもその“選別”の一環に過ぎないのだ。

以前のループではこの横浜ハイヴで鹵獲され、脳髓のみとなって保

存されていたこの世界の鑑純夏が00ユニットへと改造されることとなってしまうが、もしもこの段階で鑑純夏が救出された場合、00ユニットの素体となる人間が居なくなってしまう、下手をすれば己の知る少女達の誰か、若しくはA-01部隊の誰かが00ユニットとなる為の犠牲になってしまう可能性があるのだ。

：それだけはさせない、彼女達を救うため、自分はヒトを捨てて再びこの世界に舞い降りた。彼女達を犠牲にしては本末転倒もいところだ。

だから武は反応炉と脳髓となつて囚われている人間達をあえて放置した。もしもその中で生き延びているのがいたとしたなら、ひよつとしたら00ユニットの素材として夕呼が「選ぶ」かもしれない。本人からすれば苦痛かもしれないし、武自身からしてもなんとも外道な判断だと心の中で自嘲する。

…だけど、それでも……。

『それでも俺は……護りたいんだよ……』

『……………』

武の悲痛な声にオリジナルのガメラは何も言わない。彼の苦痛も、苦悩も、武と一体となつている今ではダイレクトに伝わってくる。だから分かる。彼がどれほど苦しんできたのかも、そしてこの選択にどれほど罪悪感を感じているのかも…。

故にオリジナルガメラも何も言わず、残された生命反応を探知し続ける。せめて彼の望み通り、残された命だけでも救いだす為に……。

それ以後ガメラは黙つてハイヴの横抗を飛行し続けた。速度は落としているもののそれでもマッハ1近くはある。それでも見えるのは同じ風景のみ。桜花作戦で一度ハイヴ内部を見ているとはいえ、あまりのただっ広さにガメラも心の底であきれ果てていた。

一方、脳内のオリジナルガメラからは何の返事も無い。あまりの広さになかなか見つからないのか少々手間取っているようだ。

武の心に僅かに不安が生まれる。もしかして、もしかしてだが間に合わなかったのではないのか……。ガメラがなかなか見つけれられないのは、もう既にこの世界の武も純夏も、BETAに殺されているか、

脳髓のみにされてしまっているからなんじゃあないのか…。

僅かに心に浮かんだ不安は段々と大きくなり、武は遂に我慢できなくなつて沈黙しているオリジナルガメラへと声をかけた。

『なあ……、ガメラ……』

『……見つけたぞ、武！生命反応が二つ、先程の脳髓のみの物とは違う生きているものの反応だ。此処から約20キロメートル先から感じた！』

『……何!?ほ、本当か!?』

オリジナルガメラからの返答に武の声音が明るくなる。一瞬死んでしまったのかと考えてしまった二人が生きていた…!!それだけでも今の武にとつては朗報だった。

『ああ、だが少々急いだ方がよさそうだ。マナの反応からしてどうやら二人共衰弱しているようだ…。命には別条なさそうだが……』

『了解!!此処をまつすぐでいいんだな!!』

ガメラは一声吠えると脚部のジェットの出力を上げ、オリジナルガメラの告げた場所へと急行する。

速度は既にマツハ一を超えており、目的の地点まではそこまで時間もかけずに到着する事が出来るだろう。それでもガメラははやる気持ちを抑える事が出来なかった。前の世界では出来なかった事が、この世界の純夏と己自身を救うと言う事が出来る…!!

『待つてろ純夏…!!この世界の俺…!!』

咆哮を上げながら横抗内を飛行するガメラ。相も変らぬ広大な岩肌のみを光景を横目に流しながら飛行し続けていると、やがて広大なホールのような空間へとたどり着く。

80メートルはある巨体も小さく見える程巨大な空間をガメラは飛行しながらぐるりと見回す、と、突然ガメラの脳内でオリジナルガメラの声が響き渡る。

『武!そのホールの一番右端!変色している壁の部分だ!!そこに二つの生命のマナを感じた!だが急げ!すぐ近くに小型BETAらしきモノがいる!!』

『何だ?!ツクソ!!此処で全ておじゃんになされてたまるか!!』

ガメラはすぐさま右へと方向転換すると、オリジナルガメラの言うとおりに一部青く変色している岩盤へ向けて突進する。

そして岩盤から約100メートル手前で着地すると、前方へとスライディングしながら右腕を岩盤目がけて振り下ろした。

『グルアアアアアアアアアア!!』

勢いに任せて振り下ろされた爪は岩盤を破壊し、偽装された岩肌をそのまま削ぎ落していき、やがて岩盤に隠されていたものがガメラの目の前に姿を現した。

そこはまるで部屋のような空間、一種の牢獄のような役割をしていた部屋のようである。恐らく捕獲した人類をこの内部に押し込めていたのだろう。そこには一人の少年と一人の少女がこちらを呆然と眺めている。よくよく見ると少年のすぐ近くには岩盤に押しつぶされた人間大の肉片らしきものが転がっている。ただ、その血液は人間の持つ赤色のモノではなく、毒々しい紫色をしていた。

恐らくこいつは例の小型BETA、そのサイズからして兵士級だろう。先程岩盤を引っぺがした時に落石に巻き込まれて押しつぶされたに違いない。最も、そんな物はもうガメラの眼中には入っていなかった。

『すみ、か……』

ガメラの視界にあったモノ、それは自分をジッと見つめる少年と少女の姿であった。

ガメラは二人を知っている。特に、少年についてはこの世の誰よりもよく知っていると言ってもいいだろう。何故なら、他ならぬ“自身”なのだから…。

全身が土で汚れ、あちこちに傷を負ってはいるものの、その顔は人間だった頃の己とそっくり、瓜二つだった。

少女もまた、薄汚れ擦り傷だらけではあったが、その顔も、赤い髪の毛も、髪の毛を束ねる大きな黄色いリボンも、かつて己が生まれ育った世界での彼女のものと同じだった。

かつて元の世界で共に過ごした記憶、そしてループしてきたこの世界で出会い、愛し合い、戦い、別れた記憶……、それがガメラの、武

の脳裏へと次々と蘇り、ガメラの瞳から涙が溢れ出してくる。

間違いない、間違いようが無い。この二人こそ、この世界の白銀武と鑑純夏。この世界に戻って来た時、どんな事があっても救いたいと、救ってみせると決めていた存在……。

生きている、二人共生きている……。二人共傷を負っており、特に白銀武の傷は先程の兵士級にやられたらしく相当酷い……。直ぐに此処から救い出さなくてはならないだろう。

だが、だが今はほんの少しだけ、彼女達を救いだせた事を喜びたい。

『グルアアアアアアアアアアオオオオオンンンン!!!』

牢獄中に、否、ホール中にガメラの咆哮が轟き渡る。咆哮を上げるガメラの双眸からは一筋の、ほんの一筋の涙が頬を伝い落ちて行った。

## 第6話 救出

突如姿を現した巨大な怪獣、その姿に武も純夏も呆然としていた。自分を殺そうとしたBETAは、怪獣が出現した瞬間に降って来た瓦礫で押しつぶされて、既に絶命している。下敷きにされた死体からは紫色の毒々しい血が溢れ出て、武の足元にまで迫ってくる。

その毒々しい色合いとあのBETAの血と言うだけで武の背筋にはうすら寒いモノが走る。とはいえ後ろに逃れようとしようにも背後には壁があつてこれ以上上下がる事が出来ず、かといって立ちあがろうとすると先程BETAに殴打された腹部に激痛が走って立っていることすらも出来なくなる。これは骨でも数本押し折れたか？と心の中で吐き捨てながら、武は改めて目の前の巨大怪獣へと視線を移す。

怪獣の姿は、要塞級すらも上回る凄まじく巨大な体躯と二足歩行、そして口元に巨大な二本の牙が剥き出しになっていると言う点を除けば、武と純夏がよく知っている亀に酷似した姿をしている。岩壁を破壊して出現した怪獣は、武と純夏の姿を見るや否や辺り一帯へと響き渡る程の巨大な咆哮を高らかに張り上げた。

大地を揺るがすかの如く響き渡る咆哮。だが、その咆哮をすぐ近くで聞いていた武と純夏には、その怪獣の恐ろしい叫び声が、まるで自分達を救出できたことへの歓喜が入り混じっているような気がしてならなかった。

怪獣は咆哮を止めると、ゆっくりと巨大な手を、まるで岩肌か何かのようにごつごつした掌を武に向かって差し出して来る。まるで、『乗れ』と言っているかのように…。

「た、武ちゃん……」

恐る恐る武の側へと近寄って来た純夏、だが、その視線はチラチラと怪獣の方へと向けられる。怪獣は特に武と純夏へと襲いかかる様子も無く、黙って掌を二人に差し出している。気のせいかその瞳には、優しい表情が浮かんでいるような気がした。

「お前……、乗れって言っているのか……？」



武は弱弱しげに、胸を押さえながら怪獣に問いかける。すると怪獣は、「そうだ」とでもいうかのようにはっきり声を上げながら首をゆっくり上下にうごかした。どうやら見た目に反してBETAと違い自分達の言葉が理解できるらしい。あのBETA共と違って自分達を見ても襲いかかる様子も無く、それどころか見たところ自分達を助けてくれようとしているようだ。

まだ完全に信用しているわけではないが、それでもこんな所に何時までも居て飢え死にするか、あるいは生き残っているかもしれないBETAに殺されるよりかはマシのはずだ。帝国軍や国連軍だつていつ救出に来てくれるか分かったものではない。武はすぐさま腹を決める。

「純夏……、こいつに乗って、此処から脱出しよう……。コイツ、俺達を助けてくれようとするみたいだから……」

「で、でも……、本当に大丈夫なの？」

「馬鹿！迷ってる暇なんかねえだろ！こんな穴倉に何時までも居て飢え死にするわけにもいかねえだろ！心配しなくても俺が守つて……ガハア!!」

「……!?た、武ちゃん!?武ちゃん!!しっかりして!!」

『グルルルル!!』

突如血を吐いて地面に倒れ伏す武、いきなり吐血した武に純夏は慌てて彼に駆け寄り、怪獣も驚いたかのような唸り声を上げて腕を引っ込める。苦しそうにせき込むたびに、武の口から真っ赤な鮮血が吐き出され、地面が赤く染まっていく。血を吐いて苦しむ幼馴染の姿に純夏はどうしたらいいか分からず彼の背中をさする事くらいしか出来ない。そして武と純夏を助けたようにした怪獣も、何もする事が出来ずに二人の姿をジッと見ている事しか出来なかった。

ガメラSIDE

目の前で血を吐き、倒れ伏したこの世界の白銀武。早くこの場から二人を連れ出そうと二人に手を差し伸べていたガメラは目の前で起

きた事実には咄嗟に反応が出来なかった。

口元を血で濡らしながら苦しげに呻き声を上げる白銀武。そんな彼に縋りついて、泣きながら背中をさする鑑純夏……。そんな光景をただ見る事しか出来ないガメラは悔しげに唸り声を上げる。

『クソッ！やっぱりの兵士級に攻撃されたのか!!口から血を吐いたってことは内臓にダメージが……。どちらにせよ不味い!!』

BETAの小型種である兵士級は人間程度の大きさであり、戦術機や強化外骨格装備ならば恐れるまでも無い相手ではあるものの、その力と俊敏性は生身の人間を軽く凌駕する。人間の頭部すらも易々と噛み砕く顎の力もさることながら、その体軀から見れば細めな腕も、人間程度ならば殴り殺せるほどの筋力を秘めている。そんなもので腹部を殴られれば肋骨が押し折れるどころか、下手をすれば内臓の一つ二つは衝撃で破裂してもおかしくはない。

見たところ武は兵士級に腹部を殴打されたようだが、口から血を吐いたと言う事は内臓にまでダメージがいつている可能性が高い。一刻も早く治療が必要だが、こんな場所では治療など出来るはずが無い。それ以前にガメラは人間の傷を治す能力など持つてはいない。確かに他の生物を凌駕する自然治癒能力を持つて入るものの、他者を治療する能力など『今のガメラ』は知らない。

ならば地上の帝国軍基地か国連軍基地まで彼等連れて行くしかないのだが、此処は横浜ハイヴでもかなりの深部、ジェット飛行でも果たして間に合うかどうか……。『……どうすりゃいいんだ……!!』

『落ち着くんだ武。まだ彼を助ける手段はある』

『……!?ガメラ!?!』

悩むガメラの脳裏に響く声、オリジナルガメラの声にガメラ、白銀武はハツとした様子で耳を傾ける。

『い、今……。コイツを助ける手段があるって……』

『ああ。彼に君自身のマナを分け与えれば、彼の傷を癒す事が出来るだろう。欠損した身体の一部を戻す事や生命活動を停止した命を蘇生するには莫大なマナが必要だが、この程度ならば僅かな量で済む

はずだ』

『マナをツ!?、そんなことできるのかよ!?』

オリジナルガメラの思いもよらぬ返答に武は思わず驚愕してしま  
う。

マナ、地球の生態系を保つエネルギーとも言える存在であり、ガメ  
ラそのものを構成するとされているエネルギー。そもそもガメラと  
は、超古代文明アトランティスが造り出した亀の甲羅を模した器に地  
球がマナを注ぎ込む事によって誕生した存在であり、地球の生態系そ  
のものを守護する防御システム、いわゆる地球が生み出した生体兵器  
のような存在だと言われている。

マナは地球の環境、生態系を維持し続けるエネルギーであり、人類  
による環境破壊が進んで地球上のマナが減少した事により地球上で  
さまざまな異変が発生する事となった。そのマナを、ガメラ自身の身  
体にある者をほんの僅かとはいえ生身の人間に与えると言う事に武  
自身は少なからず大丈夫なのか不安を感じてしまう。

そんな彼の様子を理解したのかオリジナルガメラは何やら考え込  
む。

『……フム、不安か。…武、君は私の戦いについて知っていると言っ  
ていた。なら、私とフェニックスとの戦いを覚えているか?』

『ふえ、フェニックス? 何だその怪獣? 俺そんな物知らないんだけ  
ど……』

オリジナルガメラの問い掛けに武は頭に疑問符を浮かべる。武は  
元の世界にいた頃ガメラ、ゴジラと言った特撮系の映画は大隊網羅し  
ているつもりだった。だがフェニックスなどと言う名前の怪獣など  
少なくともガメラシリーズでは聞いた事が無い。

武の返事にオリジナルガメラは考えるようにグルル…と唸る。

『成程、確かにこの名前ならば分からないか…。ならば柳星張、ある  
いは奴が融合対象に選んだ少女が付けた名前、イリスと言う名前は  
知っているか?』

『!?いい、イリス!?、そりゃあ知ってるけど……もしかしてそのフェ  
ニックスって言うのは……』

『ああ、君がイリスと呼んでいるアレの本当の名前だ。少なくともかつてはそう呼ばれていた』

オリジナルガメラの口(?)から明かされた映画では全く分からなかった意外な真実に武は思わず啞然としてしまう。

イリス、通称柳星張、あるいはギャオス変異体。

ガメラ3におけるガメラの敵となる怪獣であり、その名の通り超古代文明が生み出したガメラの宿敵とも言える怪獣、ギャオスが何らかの理由で突然変異して誕生した怪獣……らしい。

突然変異とは言ってもコウモリや翼竜を模した姿のギャオスに対し、イリスはまるで人間のような二足歩行の姿にタコやイカのような触手が生えたような姿をしており、とてもではないがギャオスと同じ存在だとは初見では誰も思わないだろう。昭和シリーズに出てきた怪獣、バイラスのリメイク版と言った方がまだ説得力があるかもしれない。

劇中ではガメラを憎む少女、比良坂綾奈の憎悪、そして彼女が住んでいた村の住民を糧として成長、やがて巨大な怪獣と化してガメラと激突する事となり、結局倒される事となったわけであるが…。

よくよく考えればイリスと言うのは綾奈が自分の飼い猫の名前からつけた物であり、あの怪獣本来の名前ではなかったはず、ならばあの怪獣にもガメラやギャオスのように本来の名前があっても不思議ではない…。とは言えまさかフェニックスなどと言う名前だとは流石に知らなかったが…。

『詳しい事は後で話すが、私が奴と融合されそうになった少女、確かにアヤナといったか…、彼女を救いだした時、彼女は心肺停止状態、完全に死亡している状態だった。そして、彼女を救いに来た少年もまた、フェニックスに吹き飛ばされた衝撃で、死亡していた…』

『……オイ、俺そんな事初めて知ったぞ?』

確かに劇中で心臓マッサージを受けていたところから多分心停止はしていたんだろうなく、とは思っていたがまさか本当に死んでいるとは予想していなかった。ついでにもう一人の少年、守部龍成も単に気絶していただけだと思っていたが…。まあよく考えればイリ

スのあのバカでかい触手で吹っ飛ばされて無事でいられる方が可笑しいのだが…。

『故に私は自分のマナを彼女達に分け与えて、蘇生させた。成功するかどうかは分からなかったが、無事彼女達を救う事が出来たということだ』

『…じゃあ！俺のマナをこの武に与えれば…』

『…治癒させる事が出来るはずだ。とはいえこれは私もあの時一度しか試した事はない。いかに全ての命の源であるマナでも万能ではない。失敗する可能性もありうる』

『…それでもやるしかねえ!!コイツを、この世界の“白銀武”をこんな所で死なせるわけにはいかねえんだよ!!』

オリジナルガメラの忠告にも怯まずにガメラ、白銀武は目の前で苦しむ『この世界の』武をジツと見据える。

この世界の純夏は目の前で武がBETAによって惨殺される姿を目の前で目撃し、さらに自らもBETAによって延々と凌辱させられた揚句に脳髄を残して全身を解体され、『人間ですら無くなるという運命を辿っている。今回はぎりぎりBETAの殲滅が間に合い、純夏が殺されるような事は無かったものの、ここで白銀武が死んでしまえば純夏は悲しみと苦しみに苛まれる事になるだろう。そうなったら前の世界の結末と何ら変わらない。

…そんな事はさせるか!!たとえどんな事があっても二人一緒に助けて見せる!!

そんな決意を秘めて、ガメラは唸り声を上げながら二人を見据える。

血を吐きながら苦しげに顔を歪める白銀武…。かつての己と同じ存在をジツと見つめながら、ガメラは己の体内のマナへと意識を向けると、その一欠片を己から切り離して、白銀武の身体へと送り込んだ。

「グッ……うう……、ん……」

「…た、武ちゃん？武ちゃん!？」

ガメラのマナを受け取った白銀武は、しばらく苦しげな表情で呻き声を上げていた。が、段々と表情が安らいでいくと、そのまま目を閉

じて意識を手放した。そんな彼の様子に側にいた純夏は必死に身体を揺すって起こそうとするが、白銀武はうっとおしそうに顔を歪めるだけで目を覚まそうとはしない。そんな彼の姿に純夏はさらに困惑し、焦ってしまふ。

一方白銀武にマナを与えたガメラは、そんな一部始終をただ黙って眺めていた。己に出来る事をした以上、後は見守るしかないのだが、当の白銀武はマナを送りこまれた瞬間に昏倒してしまい、ガメラは少なからず動揺していた。

『…おい、大丈夫、なのか…？なんだか寝込んでしまったけど…』

『傷は癒えている。単に疲労で寝込んでいるだけだろう。直ぐに目を覚ます』

『そ、そうか…？ならとつと此処から脱出しないと…』

ガメラは再度牢獄へと掌を差し入れる。再び差し出された巨大な手に純夏は一瞬怯えて眠っている白銀武を引きずって後ろに逃げようとする。が、こちらに襲い掛かることなく黙って見つめながら手を差し伸べるガメラの姿に、段々と警戒心が薄れてきたのか恐る恐ると言った様子でガメラへと近寄った。そんな彼女の姿をガメラは黙って眺めている。

「えつと…、カメ、さん…？私と、武ちゃんを、本当に助けにきてくれたの…？」

恐る恐るガメラに問いかける純夏。武は助けにくれようとしていたとは言っていたが、それでもまだ純夏は目の前の巨獣に対する恐れは少なからず存在している為、まだ信用する事が出来ないのだ。

純夏の問い掛けに対してガメラは、武の問いにそうしたようにゆっくりと首を上下に動かすと、純夏を急かすように掌を僅かに純夏の前へと動かした。ガメラの反応を黙って見ていた純夏はやがてコクリと頷くとぐったりと横たわった武の肩を必死に持ち上げて背負おうとする。だが所詮は少女の腕力、完全に意識を失っている武の身体を持ち上げる事はおろか引きずって動かすことすら容易ではない。

「う…！！う…！！お、重い！！た、武ちゃんお願いだから起きて…！！折角カメさんが助けてくれるって言ってるのに…！！ワキャ!？」

顔を真っ赤にして武を引きずりながら大声で文句を言う純夏、そこまでされているのに起きる気配の無い白銀武……。見ていられなくなったガメラはもう片方の手を隙間から突っ込むと鋭い爪を白銀武の服に引っ掛けて持ち上げ、そのまま自分の掌の上へと落とした。

落とされた衝撃に若干顔を歪ませるも目を覚ます様子も無く寝息を立て始める白銀武。そこまで高い場所から落としていないとはいえコレでも目を覚まさない白銀武の姿にガメラはかつての自分の姿を見ているようで呆れてしまう。

「え、えつと、ありがとう、ごさい、ます…?」

一方武のガメラの掌へとひっぱりあげようとしていた純夏は、突如助け船を出してくれた目の前の怪物に呆然としながらもお礼を言う。彼女のお礼にガメラはグルル…と唸り声で返事を返すと純夏に掌に乗るよう催促するかのように掌を揺する。純夏は少し慌てながらもガメラのまるで岩肌のようにゴツゴツした固い掌へとよじ登り、掌で眠っている武のすぐ傍へと移動した。

二人を掌に乗せたガメラはそのまま監獄から二三歩離れると脚部からジェットを噴射して宙へと浮き上がった。

「わ、わきゃあ!?そ、空、空飛んでる!」

ガメラが突如ジェットを噴射して空へと浮き上がった事で純夏は仰天して隣で寝ている武へとしがみつく。が、それでも武は目を覚ます様子はない。ガメラは二人を落とさない様に掌にもう片方の手を重ねて蓋をすると、そのまま出口を目指して飛行を開始する。もちろん二人を振り落とさない様に速度は抑えている。

それでも空を飛ぶ事が初めての体験である純夏はガメラの手の中でキヤーキヤーと騒がしい声を上げており、そんな彼女の様子にガメラは呆れながらも無事二人を救出できたことにホッとしていた。

『ふう……どうなる事かと思っただけど、存外何とかなったな』

『ああ……ところで武、その二人はどこまで連れていくつもりだ?』  
『ん?取りあえず国連軍基地か帝国軍基地まで連れていくつもりだけど……それがどうかしたのか?』

オリジナルガメラの問い掛けにガメラ、白銀武は心の中で首を傾げ

ながら返答する。武の返答を聞いたオリジナルガメラは、しばらく沈黙をしていたが、やがて歯切れの悪い口調で再び語り始めた。

『…武、これは私の意見なのだが、今はまだその基地へと向かうべきではないと思う』

『ええ!? なんでさ!?』

『…君は今完全にガメラとなつていて事を忘れたのか? ただでさえBETAの脅威に怯えていた人間達からすれば、常軌を逸した巨体を誇るガメラもまた敵か味方かも分からない巨大生物に過ぎない。下手をすれば彼等から攻撃を受ける可能性もありうる。攻撃された事については私にも覚えがある』

『……!!』

オリジナルガメラの言葉に武もハツとする。

今の武は人間の姿を捨て、80メートルの巨体を持つ怪獣、ガメラと化している。

そんな巨体を持つ生物が現れば人々はどうなるか…。間違いなくパニックを起こして逃げ惑うだろうし軍隊ともなれば攻撃して排除しようとしてくるだろう。いかにこちらに人類を害する意思が無かるうとも向こう側にはそれを伝える事は出来ないのだから…。

実際オリジナルガメラもそのせいで人間から攻撃を受け、完全に成長しきつていないギャオスを取り逃がしてしまった事もある。

『だ、大丈夫だって!! 幾らなんでもガメラが高々戦術機の攻撃程度で……』

『君は大丈夫だろうが、君の掌に居る二人は大丈夫じゃあないだろう?』

『……』

必死に反論しようとするガメラ、武であつたがオリジナルガメラの反論にまたも沈黙する事となる。確かにガメラは熱への耐性を持ち、人類の殆どの重火器では傷を負うことすらない。だが、今ガメラの手の中にいる二人、白銀武と鑑純夏は生身の人間である。当然のことながら普通の人間が重火器の砲撃に耐えられるはずが無い。いかに自分の身体を盾にしようとも、二人に流れ弾が一発も当たらないとは限ら



ないのだ。

『だ、だったら帝都……』

『君の記憶が正しければそこを警護をしている軍がいたはずだが？』

『……あ』

帝都には政威大將軍を警護する帝国斯衛軍がいる。当然ガメラが帝都に向かえば將軍と帝都守護の為に前線に出てくる事であろう。無論彼等もガメラ排除の為の攻撃を行ってくる可能性は充分あり得るだろう。どうあがいても勾玉を持たない人間とは意志の疎通が不可能なのであるから……。

『……八方塞がりじゃねえか……。どうすりゃいいんだ……？』

ハイヴ内を飛行しながら呆然と言葉を吐き出すガメラ。だが此処にはガメラと救出した二人以外に生物はおらず、それ以前にガメラの口から吐き出される言葉は人間にはただの唸り声や咆哮にしか聞こえないのだ。

故に彼の悩みの問い掛けは、無意味な唸り声となって虚空へと響き渡るのみであった。

横浜暫定基地SIDE

「アンノウン横浜ハイヴ潜入から1時間経過、未だに出現する様子はありません」

「後続BETA出現する予兆無し。横浜ハイヴ内のBETAはアンノウンによって殲滅された模様です」

「よし、今はハイヴの監視を続行しろ。アンノウンか、あるいはまだ生存しているBETAが再度ハイヴから出現するかもしれん。決して油断はするな」

その頃横浜暫定基地のモニタールームで、アンノウンことガメラが横浜ハイヴのBETAを殲滅してハイヴ内へと侵入していく様子の一部始終を目撃していたラダビノツド司令は、モニタールームスタッフへと指示を飛ばしながらモニターに映された横浜ハイヴの画像を注視する。

突如出現した巨大な亀型怪獣、BETAへと攻撃は仕掛けていたも

の未だに人類の敵なのか味方なのか不明なままである。副司令であり天才的頭脳の持ち主である夕呼は人類と敵対する心配はないと言っているものの、それでもまだ安心する事は出来ない。

何しろ相手は空を自由自在に飛び回り、その口から吐かれる火球は何千ものBETAを一瞬で焼き尽くし、さらにあの光線属種のレーザーすらも通用しない驚異的な防御能力を備えているのだ。そんな圧倒的な力を持つ生命体がもしも人類と敵対するような事があれば……、考えただけで彼の背筋に冷たいモノが走る。

一方の副指令、香月夕呼はモニター内で繰り広げられていたアンノウンとBETAの戦闘、否、もはやアンノウンによる一方的なまでの虐殺劇ともいえる光景をまるで極上の映画かオペラでも見ているかのように実に楽しそうな笑みを浮かべながら観賞していた。

夕呼からすれば己の研究にとっては目の上のたんこぶとも言える存在である横浜ハイヴを勝手に破壊してくれているのだからこれ程ありがたい事はないのだ。最もそれはここ横浜暫定基地全員の職員にとって同じ思いなのであるが……。精々損をするのは参戦にかこつけて横浜ハイヴにG弾を叩き落とそうと画策していた米国位なものであろう。

この事を知ったオルタネイティブ5派の連中がどんな顔をする事やら：想像するだけで夕呼の顔にまるでチェシヤ猫の如き不気味な笑みが浮かんでくる。

そして、アンノウンが横浜ハイヴ潜入から約一時間半が経過した。何時まで経っても何の変化も無い為いい加減研究室に戻ろうかと夕呼も考え始めた時……。

「…!!横浜ハイヴよりアンノウン出現!!」

「何ッ!?」「……」

横浜ハイヴへと侵入していたアンノウンが再び地上へと姿を現したのだ。両足からジェットを噴射して飛行していたアンノウンは、地表へ飛び出すや否やジェット噴射を止めて甲羅に引っ込めていた足を体外に出し、そのまま地面へと着地した。

瞬間アンノウンが着地した衝撃とアンノウン自体の重量によって

横浜ハイヴ全体に地震が起きたかのような揺れが発生、アンノウンを中心に地面が陥没してしまった。

アンノウンはそれに構わず地響きを響かせながらゆっくりと移動を開始する。よく見ると両掌を上下に重ねており、まるで何かを落とさない様に運んでいるかのようなようである。

「アンノウンの進路は！」

「アンノウンの進路予測……!!こ、このまま移動を続けければアンノウンはここ横浜暫定基地に到達の模様です!!」

「何ツ!?つく!やはり奴は人類と敵対する存在なのか!!」

アンノウンが此処、横浜暫定基地へと向かって来ている…。何が目的かは分からないが万が一基地に攻撃を仕掛けるつもりならば、何としても阻止しなければならぬ!!20万以上のBETAを殲滅した戦力だ、正直横浜基地の戦力をつぎ込んでも足止めにはならぬいかもしれないが、それでもやらないわけにはいかない!!

「…暫定基地所属の全軍に伝達!!直ちに戦闘態勢をとりアンノウンを撃退せよ!!奴をこの基地に近づけてはならぬ!!」

「落ち着いて下さい司令、まだアンノウンがこの基地を攻撃してくると決まったわけではありませんわ?」

直ちに横浜暫定基地に接近中のアンノウンの撃退の命を飛ばそうとするラダビノッド司令、が、隣で同じくモニターを眺めていた副司令、香月夕呼はそれに対して待ったをかけた。その顔は先程と変わらず余裕ありげな笑みを浮かべており、他の人間と同じような『焦り』や『恐怖』と言った感情は見受けられなかった。

「し、しかしだな香月博士!現にアンノウンはこうしてこちらに進撃を…」

「こちらを攻撃する意思があるのならとつくの昔にあの火球で既に基地を灰にしていますわ。それ以前にこの基地は横浜ハイヴに向かう進路上にあるのですから既に攻撃されてもおかしくないはずですよ?」

夕呼の言うとおりにアンノウンはこちらに歩いて接近してきてはいるものの、一向にあの火球を吐いてくる気配は無い。射程距離外なの

かそもそも攻撃する意思が無いからなのかは不明ではあるが…。とはいえこの横浜暫定基地の指揮の一切を任されているラダノビッド司令からすればそう簡単に警戒心を解くわけにはいかず、万が一という可能性も考えなくてはならない。

「むう……。し、しかし万が一ということもあるのだぞ香月博士…。もしも奴が気まぐれでこちらを攻撃するか…。あるいは攻撃ではないとしても海へと帰還するためにこの基地を通り過ぎようとしてきたらどうするつもりだ…?」

「…心配性ですわね司令は。まあそうでなくては国連基地司令は務まりませんけど…。一応既に基地前方に軍を配備しているのですから取りあえず様子を見てはいかがでしょう……」

「し、司令！副司令！アンノウン防衛戦の一キロ手前で停止！そのまま動く様子はありません!!」

オペレーターの怒鳴り声にラダノビッド司令と夕呼は再度モニターへと視線を戻した。

モニターに映されていたのは、要塞級をもしのぐ巨体を持つアンノウン。それは目の前に立ち並ぶ国連軍をただ黙って見下ろしているが、特に攻撃を仕掛けようとする気配は無い。

と、突然アンノウン膝を曲げてゆっくりと地面にかがみ込む。謎の動作にラダノビッド司令もオペレーターも何をするつもりか!?!と身構えた。だがアンノウンはこちらの反応に構わず、片手を地面へとゆっくり降ろした。

そして、地面へと降ろされたアンノウンの掌の上に乗っているもの、それを見た瞬間にモニタールームにいた殆どの人間が目丸くしてしまった。ラダノビッド司令と夕呼もまた、あまりにも予想外だったのか目を剥いて驚いている。

何故ならアンノウンの掌に乗っていたのは……。紛れも無く生きている人間の少年と少女であったのだ。

カメラSLIDE

『グルルルル…』

二人を送り届けに来たガメラの目前には国連所属の戦術機がこちらを向いてズラリと並んでいる。戦術機だけではない、戦車に強化外骨格兵、空には軍用ヘリまで飛んでいる。

結局ガメラは国連軍の基地にまで来てしまった。まさか二人を自分と一緒に連れて行くわけにもいかないし、それに長い幽閉生活で少なからず衰弱している二人への治療も必要だ。これ以上の治療が来ない以上、彼らの身柄は帝国軍か国連軍に預ける以外に無いだろう。無論かなりのリスクは背負う事になるが…。

国連軍基地にしたのは単純に見知った人間が国連軍に多いからであり深い意味は無いのであるが、やはりと言うべきか基地の前には軍が並んでおりこちらを威嚇している。

これ以上接近しようものならまず間違いなく軍の攻撃を受ける。ガメラは大丈夫だろうが掌の中の二人にもしも流れ弾が命中したらまずいし、かといってこちらが応戦するわけにもいかない…。

ならば此処で二人を置いて行くしかない。二人共横浜ハイヴからの生存者、そこまで悪い扱いは受ける事は無いだろう。…多少尋問らしい事はされるかもしれないし、己の恩師でもあるあの副司令に目をつけられる可能性は極大であろうが…。

ガメラは一抹の不安を覚えながらもゆっくりと地面にかがみこみ、二人を乗せた掌を地面へと降ろす。掌に乗っていた純夏は、しばらくは周囲の光景をキョロキョロと見回していたが、恐る恐ると言った感じでガメラの掌から飛び降りた。

一方白銀武もいつの間にか目を覚ましていたようであり、頭を押さえてふらつきながらもガメラの掌から降りていった。

二人が手から降りるのを見届けたガメラは、そのままゆっくりと立ち上がると武と純夏、そして背後に控える国連軍に背を向けてそのまま去っていくとした。

「ま、待って!!」

が、突然背後から聞こえた純夏の声に、思わずガメラの脚が止まってしまう。ゆっくり顔だけ振り向くと、そこには白銀武と鑑純夏が必死な表情で己を見上げていた。

「あ、ありがとう！カメさん!!武ちゃんと私を助けてくれて、本当にありがとう！」

「お前がいなかったら、俺と純夏はあいつ等に殺されていた…!!だから、ありがとう、ガメラ!!」

『……………』

必死に大声で己に呼びかけるこの世界の白銀武と鑑純夏。本来ならばBETAに殺されるはずの運命を逃れる事が出来た二人を、ガメラはジツと見つめていた。

やがてガメラは二人に返事をするかのように高らかな咆哮を上げると、四肢と頭部と尾を甲羅の中へと引き込み、引つ込めた四肢から猛烈な勢いでジェット噴射を放ちながら空高くへと舞い上がったいくと、そのまま高速回転をしながら空の彼方へと飛び去っていった……。

『何とか一件落着、か…』

ガメラは飛行しながらそう呟く。一時はどうなる事かと思っただがどうか二人を救出する事が出来た。事前に横浜ハイヴも攻略できた為、これで『明星作戦』も行われる事は無いだろうし、横浜にG弾が落ちる事も無くなったはずだ。

『なら……………次だ』

ガメラは回転飛行の速度を上げて、目的地を目指す。次の標的は佐渡島ハイヴ、通称、甲二十一号標的。

日本帝国へのBETA侵攻の折、初めて建設を許してしまったハイヴであり、横浜ハイヴの存在もあり未だに帝国軍が攻め居ることも出来ずにいたBETAの巣窟の一つ。

もう誰も犠牲は出さない。ハイヴは全て自分が破壊する…!!その決意を胸に、ガメラはただ一直線に佐渡島へと向かうのだった。

『そういえばさっきこの世界の俺がガメラ、とか言ってた気がした

けど……。ま、気のせいか……』

## 第7話 夢

「ガハツ!!ゲホツゲホツ!!」

「た、武ちゃんすっかりして!!死んじやだよ!!」

「ば……馬鹿純夏……。縁起でも……。ねえことを……。ゲホツガハア!!」

泣き叫ぶ純夏の目の前で、武は盛大に吐血する。口から吐き出された鮮血は地面に広がる毒々しい紫色のBETAの血と混ざり、より毒々しい色合いへと変えていく。口全体に広がる血の味に辟易としながらも、武は激痛の走る胸を鷲掴みにしながら必死に苦しみに耐える。

あの時、目の前の亀のような怪獣に手を差し伸べられた瞬間、武はこれで自分も純夏も脱出できる、助かるかもしれないという希望が生まれた。だが、それによってほんの僅か気が緩んだ瞬間、突如臓腑を刃物で抉られるかのような激痛と呼吸が出来ない息苦しさに襲われ、盛大に地面に血を吐く事となってしまったのだ。

怪獣に救出される前に武が兵士級に殴り飛ばされた時、殴られた衝撃で武の肋骨は粉々に砕けた挙句、その破片の一部が肺に突き刺さる重傷を負っていたのである。

無論命にかかわる危険な状態であり、すぐにでも病院似て手術を受けなければならぬ状態である。だが、此処は横浜ハイヴ深奥の監獄、当然医者も看護師も居るはずも無い。居るのは医療技術も知識も持たない純夏と到底治療など出来るとは思えない巨大な怪獣だけである。

血を吐いて苦しむ武の姿を見て、純夏は泣きながら背中をさすってくる。そんな事をしたところで痛みは欠片も和らぎはしないが、それでも純夏を心配させないように、必死に作り笑いを浮かべて見せる。そんな二人を、怪獣は黙って見つめていた。武と純夏にはあの巨大な怪獣が何を考えているのかは分からない。

だが、いくらなんでもこればかりはあいつでもどうにもならないだろう。折角助けに来てくれたというのに己がこの様ではどうしよう



もない……。武は自嘲するかのようなひきつった笑みを口に浮かべた。

もう自分は助からない、このままここで死ぬだろう。けどせめて、せめて純夏だけでもここから脱出させて……。武がそんなことを考えて純夏に声を掛けようとした。その瞬間……。

『グルアアアアアアアオオオオオンンンン!!』

突然怪獣が高らかに咆哮を上げた。監獄どころかホール全体に響き渡るほどの音響に純夏は反射的に両手で耳を塞いでしまう。一方武は両腕を動かす元気もなく、地面に倒れ伏しそうになりながらも轟渡る大音量に耐えていた。

「クツソ……!!うるせえんだよ……!!吠えるんならもう少し声を小さく……!?!」

蚊の鳴くような声で咆哮する怪獣へと愚痴を呟く武、だったが次の瞬間、武の表情が驚愕に歪んだ。

怪獣が咆哮した直後、武は身体の中に何か温かいモノが入ってくるような感覚を覚え、それと同時に胸部に走っていた激痛が急激に引き始めたのだ。まるで傷そのものが急激に消えていくかのように……。

(な……なんだ……?痛みが、痛みが消えていく……?息も普通にできるよ……うになってるし、それに……なんだか体が、温かい……?)

武は急速に治癒されていく己の体に、それだけではなく己の体がまるで赤子のころに母に抱かれている時のような優しく、温かい温もりにも包まれていくことに困惑していた。

しかし、その疑問も瞬時に頭から霧散することとなる。段々と武の体から力が抜け、瞼が重くなり、急速に眠気が襲ってきたのだ。

重症な身体にマナを送り込まれて治癒させた影響か、吐血して血が足りなくなっていたのか武は突然襲いかかってきた眠気に逆らう事が出来ずに再び地面へと倒れ伏すこととなった。

「……た、武ちゃん!?武ちゃん!!め……き……して……」

(純夏……、ああ……くそ……駄目だ……ねむ……)

薄れていく意識の中、武の耳元で幼馴染の叫び声が最後まで響いていた……。

そして、そのまま武の意識は闇へと落ちて行つた……。

## 純夏SIDE

「た、武ちゃん…？武ちゃん!!お願い起きて!!目を覚ましてよ武ちゃん!!」

突然地面に倒れ伏した武に、純夏は必死に呼びかける。だが、幾ら体をゆすつても、大声で呼びかけても、武は一向に眼を覚ます様子が無い。

「う……、嘘……、嘘だよ武ちゃん……。お、お願いだから目を覚まして!!私を置いていかないでよお!!」

幼いころからずっと傍に居てくれた大切な幼馴染を、ここまでずつと命を張ってBETAから自分を守りぬいてくれた想い人を、こんなわけのわからない場所で、BETAの穴倉なんかで失いたくない…!!

幸い胸は上下に動き、口や鼻から息が漏れているところをみるとまだ死んではないようである。だが、急いで医者に診せないと本当に死んでしまうかもしれない…!!なんとか武を連れてここから逃げ出さないと……!!

でもどうやって、武を連れて逃げるにはどうすれば……と純夏は頭を悩ませる。

『グルルルルル……』

と、突然彼女達を見守っていた怪獣が唸り声を上げながらその巨大な掌を差し出してくる。先程と同じく、乗れと言っているかのように差し出された掌に茫然とした純夏は、恐る恐る顔を上げて目の前の怪獣を見上げる。

「えつと…、カメ、さん…？私と、武ちゃんを、本当に助けに来てくれたの…？」

純夏の問い掛けに怪獣は黙ってコクリと頷いた。いや、ひよつとしたらそう見えただけなのかもしれないが、純夏には彼(?)が己の言葉に反応したように見えたのだ。

純夏は考える。どのみちこのままでは自分達はここで飢え死にす

るしかない。帝国軍もいつここに来てくれるかわからない以上、今は目の前に居るこの怪獣を信じるしかない…。

純夏はすぐさま武の肩を担いで怪獣の掌へと乗ろうとする、が、ただの女子でしかなく、何日も水一滴飲んでいない体力的に弱り切った彼女が男子である武をそう簡単に持ち上げられるはずもなく、肩に担いだ瞬間、武の体重が純夏の体にのしかかり、結局純夏は地面へと崩れ落ちてしまう羽目になった。なんとか武の下から抜け出した純夏は今度は武を引きずっていこうとするが、やはり少女の腕力だからか容易には動かない。

「う〜!!う〜!!お、重〜い!!た、武ちゃんお願いだから起きて〜!!折角カメさんが助けてくれるって言ってるのに………ウキヤ!?!」

それでもどうにかして怪獣の掌までたどり着こうと武を引っ張る純夏。と、突然怪獣が破壊された壁の隙間からもう一本の腕を突っ込んで、その鋭い爪を武の服に引っかけて持ち上げた。怪獣は爪の先でぶら下げた武を己の掌まで移動させると、そのまま手の上にポトリと落とす。怪獣の掌に落とされた武は、一瞬顔を歪ませるが直ぐに元の表情に戻ると再度寝息を立て始める。

「え、えつと………ありがとうございます……?」

どうやら中々武を動かせない己を助けてくれたらしい怪獣に、純夏は動揺しながらもお礼を言う。一方怪獣も純夏の言葉に反応してかまるで頷くように首を上下に動かした。

武が怪獣の掌に乗ったことから、純夏も怪獣の巨大な手をよじ登って、その上に座り込む。怪獣の掌は先程まで純夏たちがいた牢獄の床のようにゴツゴツとして硬かったが、岩や鉱石とは違い、まるで温かい肌の温もりを感じる。純夏は膝をついたまま眠っている武のそばへと近寄ると、そのまま座り込んで彼の寝顔をジッと見守る。

「武ちゃん……」

声をかけても武は目覚める様子はない。寝息を立てているところから見て死んではいないようだがそれでももしもという一抹の不安は覚えてしまうのだ。

あれだけの血を吐いた上にあそこまで激痛で苦しんでいたのだ。

何らかの拍子で死んでしまってもおかしくないのではないか……。そんな考えが純夏の脳裏にあった。

と、純夏と武が乗った掌が、牢獄にぽっかり空いた穴から引き抜かれる。相変わらず監獄と同じ薄暗かったものの、ホールは目の前の怪獣が小さく見えてしまうほどに広大であり、純夏もその広大さには茫然とするしかなかった。

と、突然ジェット噴射を思わせるような爆音が純夏の真下から響き始める。何かと違って己が乗っている怪獣へと視線を向ける純夏。……すると。

「う、うわきゃああああああ!!」

突如怪獣の巨体が宙へと浮上し、純夏は驚きのあまり奇声を上げる。怪獣は浮上した巨体を横倒しにし、そのままハイヴの出口へ向けて飛行を開始した。むろん、純夏と武を落とさないように気を使いなから……。

「え、ええええええええええ!?わ、私飛んでる!?飛んじやつてる!?!」

そして、怪獣の掌に乗っていた純夏は、もはや目の前でグースカと眠りこけている武を気にする余裕もなく、驚愕のあまり絶叫を上げるしかなかった。そして眠りこける武は、そんな彼女の絶叫が聞こえた様子もなく、安らかな寝顔で眠り続けるのであった。

## 武SIDE

その街はただ紅く燃えていた。

全てが赤く燃えている。建物も、地面も、人も、すべて等しく燃えている……。

聖書に記されたソドム、ゴモラの街の如く、街の全てが灼熱の炎に抱き包まれている――。

地獄、そう形容せざるを得ないこの世界。生きる生物など居るはずもないこの世界に、巨大な影がたたずんでいる。

それは80メートルを超える巨体を持つ“怪獣”であった。亀に

酷似した甲羅を背負い、二本の太く逞しい足で大地を踏みしめながら、**“怪獣”**は何かを待ちうけるかのように漆黒の暗雲に包まれた空をジツと睨みつけている。

やがて、墨をぶちまけたかのような漆黒の雲を切り裂いて**“それは姿を現した。”**

それは、フォルムだけならば現存する鳥類、あるいは人類が生まれる遙か古代に生息していた翼竜に酷似している。だが、その巨体は既存のそれらとは比べ物にならない程大きく、そして恐ろしい…。

蝙蝠の如き皮膜の張られた翼は150メートルを超え、耳まで裂けた口にはまるで剃刀の如く鋭い牙が一片の隙間もなく生えている…。その表皮はまるで爬虫類の如く滑らかな皮膚で覆われ、通常鳥が有しているはずの羽毛は一本たりとも生えていない。

それはさながら、ありとあらゆる生物のおぞましい部分をかけ合わせたかのような、そんな怪物であった。たとえるのなら、アラビアンナイトに謳われる巨鳥ロック鳥か、あるいはヨーロッパの伝承に伝わる飛竜、ワイバーンとでも言うべきであろうか…。

そんな異形の『怪鳥』が、巨大な翼をはためかせながら眼下に広がる焦熱地獄、そこに立つ巨亀を睥睨し、甲高い金属音にも似た絶叫を張り上げる。

『ギャオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

そして、それに答えるかのように、巨亀もまた高らかに咆哮する。

『グルアアアアアアアアアアアオオオオオオオオンンンン!!!』

咆哮と共に巨亀の口内から紅く迸る灼熱の火球が、怪鳥の口内から眩い黄色の閃光が互い目がけて放たれた—。

最後の希望　ガメラ　時の揺り籠に託す　禍の影　ギヤオス  
と共に目覚めん

「……!!!」

「わきやつ!? た、武ちゃん!?!」

武が目を覚ますと同時に飛び起きた。隣で純夏が仰天する悲鳴が

聞こえたが、今の武にはそんな事を気にしている余裕はなかった。

「ハア……ハア……、夢、か……。何だったんだよさつき。夢は……」  
眠っている間に見ていた夢……、燃え上がる街で二頭の怪物が戦う光景と、まるで予言のような謎の言葉……。何が何なのか武には全く分からない。

だが、あの争いあう二頭の怪物のうち一頭、それは間違いなく自分達の前に現れたあの亀に似た巨大な……。

「……って此処どこ!？」

と、自分があの牢獄ではない場所に居る事によろやく気がついた武はキョロキョロと周りを見渡した。

周囲は真っ暗であり隣に座る純夏以外何も見えない。己が座っている床は先程の牢獄と同じくゴツゴツとして硬く、されど岩石や鉱物にはない不思議な温もりを感じる。

己のすぐ傍で純夏が心配そうに自分を見ている。どうやら彼女には何の怪我もないようであり、武はほっと息を吐いた。

「た、武ちゃん!!起きちゃって大丈夫なの!?!さつきまでずっと寝込んでいたのに……」

「ずっと寝込んでたって俺だけ寝てたんだ……、ま、いいか。ああ、全然大丈夫だ純夏!何故だか知らねえけどさつきまであった痛みも息苦しさもすっかり無くなってるんだ!!」

元気そうな笑顔でそういう武の言葉に嘘はない。眠る前までは激痛が走っていた胸も、呼吸が出来なかった肺も今では何ともない。それだけではなくずっと牢獄に閉じ込められ、食料や水すらも与えられずに何日間も過ごしたにもかかわらず、そうとは感じられない程の力が体中に宿っている……。どうしてこうなったのかは分からないが、今の武の体中の傷は完治していたのだ。

「そ、それより純夏、此処は何処だ?あの穴倉じゃあないみたいだけど……」

「う、うん!武ちゃんと私を助けたカメさんが私達を運んでくれているの!で、此処はカメさんの掌の上で、真っ暗なのはカメさんが両手を重ねているからなんだよ!」

「か、カメさんって……あいつの、事が……」

かすかに聞こえるジェット音と僅かな振動に揺られながら、武は思い出した。

突如監獄の壁を突き破って現れた巨大な亀の姿をした怪獣……。今まで見てきたBETAとは違う、何らかの知性や感情、そして雄大な生命力すらも感じさせる巨体を……。

それと同時に脳裏に夢で見た映像が蘇ってくる。燃え上がる街、そこで対峙する巨大な亀のような怪獣と巨大な鳥の如き怪獣……。

(あの怪獣は……こいつだったのか……)

己の頭上を覆う黒い岩のような天井、純夏が言うのなら怪獣の掌を見上げながら武は思う。そのまま頭上をジッと見上げていると、ふと夢の中で聞いたあの予言の如き言葉が脳裏に浮かんでくる。

「最後の希望 ガメラ、時の揺り籠に託す。禍の影、ギャオスと共に目覚めん」……

「……え？武ちゃん、何それ？」

何気なくつぶやいたその言葉に純夏が不思議そうな顔で反応してくる。こちらをジッと見ている純夏に武は恥ずかしそうに頬を掻きながら顔を背ける。

「いや、さ……なんだか寝ている時にこいつによく似たでかい亀みたいな怪獣とでかい鳥みたいな怪獣が戦っている夢を見てき、目が覚める寸前にこんな言葉が聞こえて、さ……」

「ふうん……、ガメラ、ギャオスって何かの名前かな……？」

「そうなんだろうけど分からねえよ。大体今まであんな夢なんて見たこともないし……ってうおおおおお!!」

「きゃああ!?ゆ、揺れてる!!じ、地震かな武ちゃん!!」

「そ、そんなこと知るか!!とにかく何かに掴まれ純夏!!……ってコラ!!俺に抱きつくくんじゃねえ!!」

先程見た夢について語っていた武だったが、突然襲ってきた大きな揺れに二人の会話は中断された。その大きな揺れに怯えた純夏が武に抱きつき、武は恥ずかしさのあまり絶叫を上げた。幸いなことに揺れは一瞬であり、武と純夏は揺れが収まってからも不安そうに視線を

巡らしていたが、やがて安どした様子でほっと溜息を吐いた。

「……ハアア〜!!な、何だったんだよあの揺れ……、ていうか純夏、もう揺れ収まったからいい加減離れろっての!」

「むっ!ちよ、ちよつとひどいよ武ちゃん!私本当に怖かったんだから〜!!」

「全くお前って奴は肝が据わってるんだか憶病なんだかわからない  
ていうか……ん?」

いい加減揺れも収まったために己にしがみ付いていた純夏を無理やり引きはがした武は、突然頭上を覆っていた巨大な掌がどかさされている事に気付き、隣で何やら大声を上げる純かを無視してふと空を見上げた。

それは満天の星空と、闇夜で煌々と輝く三日月であった。それは紛れもなく地上でなければ見れない夜空であり、武達が無事に地上へと戻ってきたという事実でもあった。

武は弾かれるように視線をあちこちに巡らして、衝動的にかつて己の家があつたであろう場所を探す。が、見えるのは何もない荒野か、あるいはBETAに踏みつぶされ、跡形もなく破壊された廃墟の街並みのみ。かつて己が過ごした家どころか、街すらも見分けることが出来ない。

よしんば己の住んでいた家の場所が分かつたとしても、もはやどうにもならない。己の家と街は、あの時己の両親と純夏の両親、それ以上にあの街に住んでいた多くの人々とともにBETAに踏みつぶされ、跡形も無くなってしまったのだから……。その事を思い出した武は顔を悲痛に歪めて唇を思いきり噛み締める。そんな武を、純夏は悲しげに見つめている。

「……武ちゃん……」

肩を震わせている幼馴染に、純夏は恐る恐る声をかける。彼女も同じくBETAの襲撃によって家族と家を失った。立場的にいえば武と同じといえよう。だが、それ以上に純夏は武の心の支えになりたかった。あの横浜でBETAから逃げ回っていた時、捕らえられて監獄に放り込まれていた時、武はずっと純夏の心の支えでいてくれた。



だから今度は自分が、武を、大好きな幼馴染を支えてあげたい…。そう願ったのだ。

純夏は武の肩に優しく手を置いた。すると武は一瞬ちらりと純夏の方へと視線を向けると、直ぐに腕で顔を拭うと純夏を元氣付けるように笑顔で振り向いた。が、その目じりには涙が僅かに残っており、笑顔もまるで無理やり浮かべているかのようできこちない。

「ったくなんて顔してんだよ純夏！俺はもう大丈夫、本当にもう大丈夫だからお前も元氣出せっての！」

「……うん」

武の言葉に純夏は黙って頷いた。武もまた純夏に心配をかけたくない、己と同じ位悲惨な目にあつた彼女を支えてやりたいと思っっている。

己も純夏もこうして運良く生き延びたものの、両親も家もない以上どうやって生きるかは分からない。とりあえず帝国陸軍基地か国連軍基地に助けを求めくらいしかできないだろうが、果たして取り合ってくれるかどうか……。

(……それでも、それでも純夏だけは守っていかなくちゃ、な……) だがたとえどのような状況であれ、どのような環境に落とされようとも、この妙なところで強がりや意地っ張りな泣き虫の幼馴染だけは守りぬいて見せる…。心の中で武は改めてそう誓う。

それから暫く二人は黙ったままであった。怪物が一步一步を進めるたびに重々しい地響きとともに僅かな振動が二人に伝わってくる。純夏もこの程度の振動ならば平氣のようであり、武の傍で黙って座りながら、荒廃した横浜の街を眺めている。

一体どれだけの人間が犠牲になったのだろう…。武は茫然とそう考える。

何百何千もの人たちが死に、結果的に自分たち二人が生き残った、生き残ってしまった…。

単に運が良かったのか、それともが運命というものなのかは知らないが、こうやって生き延びたのなら、俺は、俺が、やらなくちゃいけない事は……。

と、突然怪獣の歩みが停止する。武と純夏はハツとした面持ちで自分達を横浜ハイヴから救い出した巨獣を見上げる。怪獣は一度掌の武と純夏を見降ろして首を動かすと、ゆっくりと膝を折り曲げて掌を地面に下ろす。

「え!?お、お前何をして……お、おい純夏!あれ!!」  
「ど、どうしたの武ちゃ……!!」

突然地面に下ろされた武と純夏が怪獣とは逆方向へと向いた瞬間、二人は驚きのあまり目を見開いた。

目の前に広がる戦闘車両と戦術機の集団、カラーリングから見て国連軍横浜暫定基地所属の軍のものだ。

何故目の前に国連軍が居るのか……。自分達の救助?否。横浜ハイヴ攻略のため?否。

：恐らく目の前の怪獣から基地を守るためなのだろう。あるいは、怪獣に手傷を負わせて撃退するか……。

武と純夏は弾かれるように体を屈める目の前の怪獣へと視線を向ける。怪獣は唸り声を上げながら首を動かして国連軍を指し示す。自分の手から下りて国連軍に保護してもらえ、とでも言っているかのように……。

武と純夏は暫く躊躇していたが、やがて二人とも互いに頷きあい、怪獣の掌から飛び降りた。

二人が掌から下りるのを見届けた怪獣はゆっくりと起き上がり、そのまま二人に背を向けて去っていくとする。もはや用は済んだと言わんばかりに地響きを響かせながら二人から遠ざかっていく。

「ま、待って!!」

と、純夏が遠ざかっていく怪獣の背中に向かって叫んだ。足を止めた怪獣は体勢はそのままに首だけを純夏と武に向けて背中越しに二人に視線を送る。武と純夏は自分を見据える怪獣の視線を受けとめながら、精一杯の大声を張り上げる。

「あ、ありがとう!カメさん!!武ちゃん!私を助けてくれて、本当にありがとう!!」

「お前がいなかったら俺と純夏はあいつらに殺されていた……!!だから」

ら、ありがとう、……ガメラ!!」

武は怪獣の名を、夢で『最後の希望』と語られていたその名前を叫ぶ。紛れもなく、彼は己達を救った希望であったから、そして、彼こそが人類たちを照らしてくれる最後の希望になってくれると信じたから…。

純夏と武の叫びに怪獣は、ガメラは……。

『グルアアアアアアアアアオオオオオオオオオオンンンン!!!!』

まるで二人の言葉に答えるように、天に向かって高らかに咆哮する。するとガメラの両腕、両足そして頭部が甲羅へと引き込まれ、甲羅に空いた穴から猛烈なまでのジェットが噴射される。

ジェット噴射によって浮きあがった巨大な甲羅は、空高くまで舞い上がるとまるで風車の如く高速で回転を始め、空の彼方へと飛び去って行った。

武と純夏は空へと去っていく怪獣の姿をただただ眺め続けていた。またいつか会いたい、そんな思いを互いに抱きながら……。

#### 国連軍SIDE

「まさか横浜ハイヴに生存者がいたとは……、いやそれだけならまだしもアンノウンが彼らを救出してくるとは、な……。」

「流石にハイヴ内にまだ生存者がいたという事についてはだれも予想してもいなかったでしょうね。かくいう私も、ですが……」

アンノウンの掌に乗っていた少年と少女、彼らが横浜ハイヴ内にてBETAに捕獲されていた『捕虜』であり、横浜ハイヴに侵入したアンノウンによって救出された、という報告を受けたバウル・ラダビノツド司令と香月夕呼副司令は、片や何やら複雑な面持ちで、片や素晴らしいおもちゃを手に入れた子供のような満面の笑みを浮かべながら空へと飛び去っていくアンノウンをモニター越しに眺めている。

「でもこれではつきりしましたわ。あのアンノウンは少なくとも人間と敵対する存在ではない、むしろハイヴ内に捕獲されていた生存者を救出するところから見て、人間に味方する存在である可能性が高いと思われれますわ。そして、間違いなくBETAと敵対しているという

事も……」

「ふむ……、確かにこの光景を見せつけられたら博士の言う事も尤もだと思えてならんな……。とはいえならば何故アンノウンは我々人類の味方をするのか、そもそもアンノウンはどこから来たのか、いかなる生物なのか……等々と未だに謎が多いのだが……」

「勿論、その謎についても解明したいと思っておりますわ。そのためにも司令、硫黄島から『例の物』を至急お願いいたしますわね」

「……む、承知した。帝国軍と一悶着あるだろうが……まあ善処しよう」

にこやかな笑みを浮かべる夕呼にラダビノツド司令は軽く溜息を吐いて了承する。

現在国連軍と日本帝国軍はあまり仲が良いとはいえない状況だ。そもそも国連自体が米国の隠れ蓑として利用されているのもあり、オルタネイティブ4の最高責任者として国連軍に所属する夕呼もまた、帝国軍および帝国斯衛軍からは『女狐』だのと陰口を叩かれており、あまり評判が良いとはいえない。

そんな彼女が帝国軍所属である硫黄島駐屯地に勾玉と石板のスケッチ及び写真を研究のために渡してほしいと要請しても……素直に渡してくれるかは微妙なところだ。とはいえ今のところアンノウンに関係があると思われるものはそれしかないものであり、アンノウンの謎を解き明かすためにも勾玉と石板の写真を手に入れる必要があったのだ。

司令には色々苦勞をかけるだろうがこれもまた人類勝利の一環、頑張っていたくほかは無いだろう。

「それにしても博士、アンノウンはこれから何処に向かうと考える？もし仮にBETAを殲滅するとするのなら……」

「ええ、おそらくは佐渡島、その次は鉄原、ブラゴエスチエンスク、ウランバートル……そして最終目的地は……カシユガルでしょうね」

「……オリジナルハイヴ、か……。だがいかにアンノウンといえどもあの物量に対抗できるのかどうか……」

「それはまだ何とも……。ですがこちらからすれば帝国内のハイヴに

帝国近辺のハイヴさえ片づいてくれれば上々ですが…」

ラダビノッド司令の疑念は夕呼も理解できる。確かにアンノウンは単騎で横浜ハイヴ内のBETA殲滅に成功した。だが、ハイヴ内のBETAの量はフェイズが上がるごとに増大していく傾向にある。今回殲滅した横浜ハイヴのフェイズは1、あるいは1.5といったところ、佐渡島もまた同程度であろう。だが、現在大陸に存在するハイヴの殆どはフェイズ2を超えるものばかり、特に地球上初めて確認されたハイヴ、カシユガルオリジナルハイヴは既にフェイズ6にまで成長を遂げ、内部のBETAの数量は中、大型のみでも1000万越え、小型種ならば計測不能なレベルにまで増大していると予想されている。ならばたとえアンノウンといえども一筋縄ではいかないのだろうか…。いや、それ以前にアンノウンの出現を知った米国やソ連がいかな行動を起こすのか…。

「……全くもって予想がつかん…。実に頭が痛いよ…」

「あら、予想可能なことばかりでは面白くありませんわ？ 予測不能な事態、しかもそれが私達にとって、人類にとってプラスになる事態でしたなら私は大歓迎ですよ？」

「そ、そうか……。まあ博士ならばそうなのだろうな……。ハハハ……」

こちらの不安を余所に実に愉快そうな笑顔を浮かべる夕呼に、流石に百戦錬磨のラダビノッド司令も引きつった笑顔を浮かべるしかなかった。実際形式上上司である自分でも一体彼女が何を考えているのかというのが時々分からなくなる。

## 第8話 佐渡島

佐渡島…。

新潟県近海にぽつりと浮かぶその孤島は、江戸時代においては日本有数の金の産出地として幕府の重要な財源とされ、また過去に多くの罪人が流された流刑の地としても知られている。

だが、今の帝国に住まうほとんどの人間にとつて、佐渡島の名を聞いて思い出すものは、佐渡金山でもかつてこの島で保護していたトキでもないだろう。

1998年初頭、九州北部から上陸したBETAの軍勢によって、帝国領土に初めて建設を許してしまったハイヴ、通称『甲21号目標』ことH21佐渡島ハイヴ。

建設からまだ一年も経過していないという事から未だにハイヴの規模はフェイズにして1・5程度、大陸のハイヴに比べればまだまだ小型のハイヴである。

しかし、それでもハイヴ内から湧き出る無尽蔵ともいえるBETAの物量により、現在の帝国軍の総力をもってしても奪還は困難とされている難攻不落の要塞であり、さらに同年に横浜にH22横浜ハイヴが建設されたことにより帝国軍、国連軍合同によつても奪還は絶望的という見解まで出されていた。

……そう、今日になるまでは…。

かつては緑に覆われた山々と、少なからず人々が生活を営む街もあったであろう佐渡島だが、今の島には人間を含む生命どころか、山や丘といった凹凸すら存在しない平坦な寒々しい荒野と化していた。

その生命すらも存在しえない死の世界を我が物顔で這いまわるBETAの群れ、そしてBETAの手によつて島の中央に着々と建立しつつある金属質の異質な輝きを放つ侵略者の牙城、佐渡島ハイヴモ

ニユメントの姿に、一瞬ここが日本帝国領土、否それどころか地球ですらなくどこか別の惑星なのではないかという錯覚すら抱かせてしまう。

だが、この光景は今の世界では珍しいものではない。BETAの跋扈するユーラシア大陸では佐渡島や横浜どころではない、さらに巨大なハイヴのモニユメントが立ち並び、数えることすらできぬほどのBETAが大地を喰らい、命を貪っているのである。

そして今も、大型小型入り混じったBETAの軍勢は、佐渡島に残された「資源」を探し求め、地上を這いまわっていた。

…が、その時は突然訪れた。

突然何かを発見したかのように光線級と重光線級、俗に光線属種と呼ばれるBETAが自らの頭上に広がる空へとまるで巨大な目玉のようなレーザー照射粘膜を向けた。しかし、その反応はあまりにも遅い、遅すぎた。

突如何の前触れもなく、BETAの頭上から灼熱の火球が三発、密集したBETAの集団目掛けて降り注いだのだ。灼熱の業火は地上を這うBETAの集団へと次々と着弾、岩盤ごとBETAを粉々に砕き、死体も残さずに炎上させる。地上で密集していたことが仇となり、一発の火球で1000を超える数のBETAが消し炭と化していく。だが、それだけでは終わらなかった

天空を覆い隠す暗雲を切り裂き、先程を上回る量の火球が地上のBETA目掛けて雨の如く降り注ぐ。灼熱の炎の砲弾はまるで隕石のように地上に降り注ぎ、地表に存在するBETA全てをその痕跡すらも残さずに次々と焼き払い、粉碎していく。

次々と数を減らしていくBETA……。無論BETAも黙って大人しく蹂躪されているわけではなかった。BETAの中で唯一対空戦力を持つBETA、光線級と重光線級が火球の発射地点を的確に補足し、航空機をも一撃で撃墜可能な高出力レーザーを矢継ぎ早に空目掛けて発射している。

…しかし、灼熱の豪雨は止まらない、否、収まるどころかさらに激しく、さらに多量に火球は大地目掛けて突き刺さり、ついにはBETA







瞬間、ガメラが先程まで立っていた地面が弾け、そこから火山から噴出する溶岩の如く何かが地上に飛び出してくる。

それは中型、小型と入り混じったBETAの集団だった。偶然か必然かは分からないが地上のBETAに気を取られているガメラの足元から忍び寄り、一斉にその巨体に取りつこうとしたのであろう。が、ガメラは地中から感知した僅かな振動によって地中からのBETAの侵攻を察知、空へと逃れることによって結局BETAの目論見は空振りに終わった。

地上を這いまわるBETAをあざ笑うかのように天空を悠然と飛行するガメラ、それを撃ち落とそうと地上に展開された光線属種BETAは一斉にガメラ目掛けてレーザーを照射する。その眼球の如き照射機関から放たれた膨大な熱量の閃光は次々とガメラへと突き刺さるが、元より熱をエネルギーとするガメラがその程度のレーザーで撃ち落とされるはずもなく、航空機をも一撃で撃ち落とすレーザーを連続で照射されてもなお、ガメラは何事もなかったかのように悠々と飛行しており、その表皮には火傷一つ見当たらない。

『ゴアアアアアアアアアアア!!!』

と、ガメラは突然眼下のBETAの群れめがけて急降下する。光線属種のレーザー照射がさらに激しさを増すが、そんなものはもはや気にも留めていない。

ガメラは地上のBETAに急降下しながら真つ赤に裂けた口から灼熱の火炎、プラズマ火球を三発連続で発射する。碌に狙いもつけずに発射した火球であったが、BETAの群れが大量に密集していたこともあり三発共にBETAの集団に着弾、そのまま連鎖爆発を引き起こして一瞬のうちに万を超えるBETAを屠り去っていく。

ガメラは地上から百メートルの高さで飛行しながらプラズマ火球で地上を這いまわるBETAを次々と爆撃していく。元々光線属種以外のBETAは飛行する敵を攻撃する手段を保有しておらず、さらに密集して地上に展開していたことが仇となって着弾した火球の余波に巻き込まれ、地上のBETAは次々と粉微塵に砕け、炎上し、跡形もなく消滅していく。

地上戦において恐らくガメラの最大の脅威となるであろう要塞級も、流星に空を飛ぶ敵には如何ともしがたく火球の直撃を受け、あるいは炎を浴びて細胞諸共消し炭となるしかない。

紅蓮の火球が大地を抉り、爆発し、炎上する……。守護神の炎が幾度となくBETAへと降り注ぎ続けた結果、地上は再び生命の存在しない焼け野原と化しつつあった。生き残ったBETAは頑丈な甲殻によりある程度熱に耐性のある突撃級が少々と、後方でガメラを狙撃していた光線属種のみ。それ以外のBETAは火球の直撃、あるいは爆発の余波と炎を浴びてほぼ全滅している。相も変わらずハイヴからのBETAの出現は止まる様子はない。が、その数は侵攻開始直後から比べると段々と少なくなりつつある。いかに圧倒的物量を誇るとはいえ、ハイヴ内のBETAは無限ではない。こうも出てくる度に火球で吹き飛ばされ続ければ流星にハイヴ内に残存するBETAの総量も減少する。事実ガメラの度重なる攻撃によって、佐渡島ハイヴ内のBETAは段々と枯渇しつつあった。

攻めるのならば今……!!これを好機と見てとったガメラは、ジェット噴射を止めて甲羅から脚を引き出し、再度焼き尽くされた大地へと降り立った。

一万トンを超える質量が大地に足をつけた瞬間、すさまじい地響きとともにガメラを中心に巨大なクレーターが出現する。それに伴い発生した地震により、地上に展開しようとしていたBETAの軍勢は次々とその脚を停止する。後方の集団は巻き込まれずに済んだもののそれが結果的に仇となり、最前列で急停止した突撃級、あるいは戦車級へと次々衝突、あるいは押しつぶし、さながら渋滞でも起こしたかのような前進も後退も出来ない有り様となってしまった。もつともBETAに『後退する』という思考回路があるかどうかはふめいではあるが。

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

急停止したBETAの群れにガメラが雄叫びを上げながら迫る。巨獣は身動き一つできない虫けらへとその脚を振り下ろし、尾で薙ぎ

払い、火球を放って薙ぎ払っていく。

BETAも反撃する。同胞の死体を乗り越え、あるいは盾としてガメラに迫る。光線属種もレーザーの燃料となるG元素が完全に枯渇するまでありつただけのレーザーをガメラ目掛けて叩きこむ。

だが、無駄だった。接近するBETAは踏みつぶされ、あるいはその前に火球で焼き払われる。レーザーは傷を負わせるところかその熱エネルギーそのものをプラズマ火球のエネルギーへと変換され、さらにBETAへの被害を拡大させるという悪循環が続いている。

劣勢、圧倒的なまでに劣勢だった。恐らく地球上におけるBETAにとつて初だろう。己の砦であり、領域でもあるハイヴにおいて劣勢に陥るといふのは。

無論人類によつて撃退されてこともあつた。侵攻する軍勢が全滅したことなど数え切れなだらう。だが、それはあくまでも『局地的な勝利』だった。

他を圧倒する物量、光線属種という最強の対空兵力を持つBETAは、たとえ幾度進行を阻まれようとも最終的にはその物量で全て押しつぶしていく。いかに侵攻を止めようが、BETAの製造施設であり本拠地であるハイヴそのものを叩き潰さない限り、BETAの侵攻が止むことはない。

実際1978年に行われた『パレオゴス作戦』を始め、ハイヴを攻略する作戦は少なからず行われている。

だが、結果はどれも失敗。『かつてのループ』においても初めて成功したのが1999年に行われた明星作戦、それも米国が極秘開発した最新型爆弾、『G弾』を二発使用し、味方に膨大な犠牲を出した結果ようやく攻略できたという有り様である。

そのような事でもない限りハイヴ内でBETAが劣勢に陥ることなどあり得ない。それが今までの常識であつた。

それが今、この場で完全に覆されている。圧倒的な数の有利も、レーザーによる最強の対空兵器も、何もかもが目の前の怪獣には通用しない。BETAはガメラに一矢報いることもできず、ただただ蹂躪されていく事しか出来ない。

そうこうしているうちについて光線属種のレーザー攻撃が途絶える。度重なるレーザー照射の末に燃料用のG元素が尽き、『弾切れ』を起こしたのだ。光線級、重光線級共にG元素補給のためにハイヴ内へと戻ろうとするが、そんなものを見逃すガメラではない。撤退する背後からプラズマ火球を叩きつけられ一匹残らず灰にされる。

もはやBETAに勝機はない。ハイヴ内のBETAも残り少なく、これ以上の増援は確実に望めない。ハイヴの陥落が時間の問題なのは、誰の目が見ても明らかだ。だが、BETAは後退も撤退もしない。目の前の障害をなんとしても退け、粉碎するためにもただただひたすらに前進する事しか出来ない。…そして、一匹残らずガメラによって物言わぬ肉塊、毒々しい紫の染み、あるいは焼き尽くされて灰も残らず消滅するという未来しか彼らには残されていなかった。

地上のBETAを一掃したガメラは、眼前のモニュメントを見降ろした。

まだフェイズ2にもなっていない佐渡島ハイヴのモニュメントの高さは、未だ30メートル程度。プラズマ火球の一撃で破壊することが出来るだろう。だが、ガメラの目的はモニュメントの破壊ではない。本命はその真下にある。

『グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

ガメラの口内から発射された火球は、モニュメントの頂上へと衝突すると同時にその天蓋を爆発四散させてまるで虫歯のような穴を空ける。と、ガメラは再び脚部からジェットを噴射してその穴の中へと飛び込んだ。

穴の底へと落下するかのように飛行するガメラは、落下しながら猛烈な勢いで空気を吸引し始める。ジェット噴射の勢いで穴の底へと落ち続けるガメラ、その視線の先にあるのは、ハイヴの最下層、地の底に広がる広大な空間、そしてその中央に設置された青白く輝く無機質で巨大な楕円形の物体…。

あれこそがこの佐渡島ハイヴの心臓部、反応炉こと頭脳級BETA。もつともBETAと判明するのは今から三年後のことで、この当時には単なるBETAのエネルギー補給機程度の認識しか持たれて



業火燃え盛る地獄の釜で、ガメラはその咆哮を高らかに轟かせる。

そこに込められた思いは、勝利への歓喜か、怨敵への宣戦布告か――。

ガメラSIDE

『……終わった』

炎の中、ハイヴ最深部を覆い尽くして燃え盛る炎の中、ガメラは、ガメラの中の『白銀武』はまるで溜息でも吐くかのように、その声に僅かに安堵の色を滲ませながら呟いた。

流星に眠りから覚めて直ぐにハイヴを二つ攻略するのは、ガメラになつたばかりの身体では少々しんどかった。どうにか横浜でのBE T A殲滅戦で今の身体に慣れてきたので、いざ佐渡島ハイヴ攻略に挑んだわけだが、予想以上に体力を使ってしまった。

記憶にある佐渡島ハイヴよりも規模がかなり小さかったとはいえ、それでもハイヴはハイヴ、湧き出るBE T Aを殲滅し、こうして反応炉を破壊することが出来たものの、やはり連続でハイヴを二つするのは無理があつたのか、少なからず身体は疲労しているし、傷も負つていた。

それでもどうにかして帝国の二つのハイヴを攻略出来たことが、運命を変えることが出来た。その事に『武』は少なからず安堵していた。

「伊隅大尉……。柏木……」

燃え上がる炎を浴びながら、『武』は己がガメラとなる前の記憶を、己が仲間達と共にこの島で戦っていた記憶を、その戦いの中で失ってしまった大切なヒト達の事を思い浮かべる。

佐渡島ハイヴ、かつて己がガメラとなる前に、A―01伊隅戦乙女中隊の一員として仲間達と共に攻略に挑んだハイヴ。

帝国軍、斯衛軍、国連軍の三軍共同で行われた佐渡島ハイヴ攻略作戦、『甲21号作戦』。

結果として言えば作戦は成功した。ハイヴを佐渡島諸共消滅させることにより、BE T A

の本土上陸は阻止され、帝国に迫る脅威は回避された。

だが、その為に支払った代償は決して安いものではない、三軍共に数え切れないほどの人間が犠牲となり、『武』の所属していたA-01もまた、隊長である伊隅みちる大尉、柏木晴子少尉の二名の隊員がその尊い命を散らすこととなってしまった。

今回攻略した佐渡島ハイヴは『甲21号作戦』が行われた時期よりも3年早かったことからか『武』の記憶にある佐渡島ハイヴよりも遥かに小規模ではあるものの、それでも難なくBETAと反応炉の殲滅に成功することが出来た事は『武』にとって何よりも喜ばしかった。

佐渡島ハイヴが殲滅された以上『甲21号作戦』は行われることはない。此処で犠牲になるはずの伊隅みちる大尉、柏木晴子少尉も、そして名もなき多くの衛士たちの命もまた救われる…。

己は過去を変えた、死すべき運命であつた恩人と、大切な人たちの運命を変えることが出来たのだ。

『…まあ、オリジナルハイヴ潰すまでは気が抜けないけど、さ……』

此処まで破壊したハイヴは皆ことごとくフェイズ2にも満たない小規模なものである。大陸に存在するハイヴは佐渡島、横浜よりも遥かに大規模なフェイズ2を超える代物ばかりだ。この程度でダウンしては到底オリジナルハイヴを攻略することなど夢のまた夢だろう。

どのみちまずは帝国近隣のハイヴを潰していき、最後にオリジナルハイヴを攻略するというのが『武』の計画であるのだが…。

それでも今くらいは喜んでいいだろう。大切な人達の運命を変えられることが出来たのだから…。

『…武、少しいいか?』

『ん?どうしたんだガメラ』

かつての仲間達の事を思い浮かべながらハイヴを陥落させたことへの充足感に浸っていると、『武』、ガメラの脳内から別の声、この身体の本래の主ともいえるオリジナルガメラの声が響いてきた。

『君の体力や傷の具合を見たのだが、ハイヴの攻略は今日はここまですておいたほうがいいだろう。海で身体を休め、傷を癒してから



次に移るべきだ』

『……そうだな、俺も慣れない身体で動いたせいなのか疲れたし、今日はこれくらいにしておくかな…』

オリジナルガメラの言うとおり、ガメラの身体には細かいながらもBETAによって大量の傷を負っている。幸いなことにどれも命に関わるものでも戦闘に支障が出るものでもなかったためにこれまで放っておいたものの、それでも治しておくに越したことはない。

それにやはり身体には疲労が残っている。どのみち帝国のハイヴもBETAも一掃した以上、再び日本にBETAが上陸するまでは時間が稼げるはずだからそこまで焦る必要もない。

ガメラも少し考えると了承するように僅かに頷く。

『分かった。んで、傷治すにはどれくらい休んだらいい？まさか一カ月なんて言わないよ、な？』

『いや、この程度の傷と疲労ならば一日二日海の底で眠れば完治するだろう。流石に腕や足が千切れたとなるともう少しかかるが…』

『ならよし！じゃあさっさと行くか！』

オリジナルガメラの返答を聞いたガメラは甲羅に四肢を引き込むと、そこから強烈なジェットを噴射してハイヴの縦抗から地上に浮上、やがて地上から100メートルの高さまで到達するとまるで空飛ぶ円盤のように回転しながら海に向かって飛び立っていった。

『ん……？？そう言えば……』

日本海に向かって飛行するガメラ、『武』はふとある事を思い出す。横浜ハイヴと佐渡島ハイヴを陥落させ、この世界の白銀武と鑑純夏を救出に成功して浮かれていたため、かれの記憶からすっかり忘れられていた事があったのだ。

『例の公式とX M 3、どうなるんだ……？？』

ガメラこと『武』が思い出した事、それはかつての世界で己が考案した最新型戦術機OS、通称X M 3、そしてオルタネイティブ4の骨子たる量子電導脳を構築するための公式の書かれた論文についてであった。

X M 3は『武』が元の世界で好んで遊んでいたゲームの操作方法を

戦術機操作に応用して開発されたOS、当然この世界の白銀武では考え付くはずもない。

ひよつとしたら他の誰かが考え付く可能性も無きにしも非ずだが、一度目のループでだれも開発しなかったところをみるとこれははっきりいって期待できない。やはり己が発案しなければ無理だろうか。

二つ目の公式についてだが、これも武が横浜基地副指令である香月夕呼の力で一時的に元の世界、…正確には元の世界に酷似した並行世界へと移動し、その世界の夕呼から譲ってもらったもの。これも己がいなければ入手は無理。

一応論文の中身は己もパラパラめくる程度に見たものの正直言っただけの数字の羅列にしか見えさっぱり理解できない。やはり己のような凡才には天才の考えは理解できないか、とガメラは軽く溜息を吐く。

見ての通り今の己はガメラ、怪獣だ。人間と会話して己の意思を伝えることはできないし、夕呼の研究の手伝いをするのも当然不可能。……正直いってこのままいったらオルタネイティブ4は暗礁に乗り上げるんじゃないだろうか……、心の中で不安を覚えてしまう。

『……………ま、いいか。要は俺が地球のハイヴ全部ぶっ潰せばいい話だし』

が、直ぐに思い直す。己の知識を使えないのなら、己の力でハイヴを全部破壊してしまえばいい話…、そうすればX M 3も00ユニットも無用の長物になるはず……、そうガメラは思い至った。

そもそもオルタネイティブ計画はBETAに対抗するための計画であるから、この地球上からBETAを全滅させてしまえばもはや計画そのものを続ける必要がなくなる。

その結果として政治的ないざこざがあればこれ起きる可能性もあるだろうが、たとえばそうなたとしてもはやガメラとなった『武』には関係のないこと、人間同士でいざこざをやりたいのならば好きにやればいい。己はただ地球にはびこる害虫共を駆除するだけだ。

人間じゃなくなってガメラになった以上もう政治やら何やらに巻き込まれるのは正直ごめんである。

そんなことを考えながら飛行しているうちに、ガメラは佐渡島と日本列島からは大分離れた場所まで来ていた。ガメラは回転を停止して両腕と頭部を甲羅から出すと、脚部のジェットの勢いのまま海面から海中へと飛び込み、そのまま潜水していく。

海の中に入った瞬間、ガメラの全身を冷たい水が包み込み、戦いの中で熱せられていた身体を冷やしていく。その心地よさを感じながらガメラは光の届く海面から、光届かぬ深淵、海底へと沈んでいった。

『……あ、でもG弾どうするか……。まさかアメリカに攻め込むわけにもいかないし、やっぱりハイヴ全部破壊して使わせないようにするのが得策か……。?』

## 第9話 病棟にて

国連軍横浜暫定基地モニタールーム。

元来は基地間近に存在するBETAの根城、横浜ハイヴの状況及びBETAの動向を監視することが主であるそのモニターには、横浜ハイヴではなく全く別の場所の光景が映し出されている。

そこは一面灼熱の炎で覆われた大地、先程までは蟻の這い出る隙間すらない程のBETAの軍勢で覆い尽くされていた孤島。日本帝国が初めて本土に建設を許してしまったハイヴであり、その後横浜ハイヴの建設によって攻略そのものを絶望視された場所…。

その名を佐渡島ハイヴ、通称『甲21号標的』。そこが今燃えている。灼熱の業火が大地を焼き尽くし、まるで異星の如き不毛の大地を一瞬のうちに罪人を責め苛む焦熱地獄の如き世界へと変貌させていく。先程まで地上を這いまわっていたBETAは一匹残らず炎に呑まれ、その身を炭も残らず焼き尽くされてこの地上から姿を消していた。

そして、その生物すらも存在できぬ灼熱地獄にただ一つ屹立する巨影があった。

その姿は両足で立ちあがった亀のような姿をしている。が、その山の如き体躯は80メートルを越え、太く逞しい両腕両足には触れれば如何なるものも切り裂くであろう鋭利な爪が生え、その裂けた口元からは長く鋭い二対の牙がむき出しになっている。大地を覆い尽くす業火の中で立つその巨体は、まるで地獄に住まい死者を責め苛む鬼か悪魔の如く恐ろしく、荒々しいものであった。

その「怪獣」は燃え盛る灼熱の大地を一步一步地響きを響かせながら進んでいく。その視線の先にあるのは、この灼熱の地獄の中で唯一燃え残っている建造物、佐渡島ハイヴモニュメント。金属質な輝きを放つ歪な形状をしたそれへと接近した怪獣は、何の前触れもなくモニュメントの天井へ向かって火球を叩きつけた。

瞬間、火球が直撃したモニュメントは轟音と共に大爆発を起こす。原形を留めぬほどに砕け散ったモニュメント、その真下には地の底ま



トだけであつた。

「………」

モニターに映し出された光景、例の怪獣、仮称アンノウンによる佐渡島ハイヴにおけるBETAとの戦闘、否、もはや戦闘とも呼べない一方的な虐殺(ジェノサイド)と焦土と化していく佐渡島の光景に、誰ひとりとして声が出なかつた。自分たち人類が幾度攻略を試みようともハイヴの中核たる反応炉の破壊どころかBETAの圧倒的物量という壁とレーザーという対空砲火の前に接近することすらも許されなかつたハイヴが、たった一つの強大な力の前に圧倒され、屈服され、殲滅されていく……。幾多の英霊を犠牲としてそれでもなお攻略できなかったハイヴの陥落を目の当たりにし、モニター室の面々は喜びも悲嘆も憤りもなく、ただただ啞然とする以外になかつた。

一方夕呼は他の面々とは違いモニターに映る映像を眺めながらクツクツと喉を鳴らして笑っている。それはさながら今すぐにも爆笑してしまうのを堪えているかのようにあり、モニターに移された地獄が、さながら極上の喜劇の場面であるかのような反応であつた。

「……BETAの生体反応およびハイヴの内部の様子は……?分かる範囲でいい」

夕呼の隣で同じくモニターを見守っていたラダビノツド司令は、彼女の輝くような笑顔に引きながらもオペレーターに問いかける。オペレーターはチラリと背後の司令と副司令へと視線を向けると、一拍置いて口を開く。

「……地表に展開したBETAの生体反応は無し、地中およびハイヴ内部に残存している可能性もありますが……ほぼ全滅したと思われます。ハイヴおよび最深部の反応炉については不明。現在佐渡島の地表の殆どが高温の炎に覆われているので戦術機でも接近が難しいかと……」

「……成程、分かつた。それで、アンノウンの行方は……?」

「アンノウンは佐渡島から日本海へ向けて飛行中、このままの進路

をとれば……あ、アンノウン日本海に落下!!」

「な、何!」

オペレーターの上げた大声にラダビノツド司令は思わず身体を乗り出した。見ると、軍事衛星から送られてくる映像、そこには辺り一面の大海原と、その大海原に没していく巨大な亀の甲羅が映し出されていたのだ。

何の前触れもなく海面に落ち、沈んでいく怪獣……、その場に居た人間は黙ってそれを見ている事しか出来ない。

「海面から10メートル、50メートル、100、120………目標の反応、ロストしました。アンノウン補足できません……」

「………そうか、ご苦労だった……」

オペレーターの報告を聞いたラダビノツド司令は何所か疲れ切った表情で溜息を吐くと、隣で変わらず満面の笑顔を浮かべている副司令へと視線を向ける。

「………香月博士、少しよろしいかな?」

「あら?…どうなさいましたの司令?…どうやらお疲れのようですねども、少し休まれてはいかがですか?」

声を掛けられた夕呼は笑みを崩さぬままラダビノツド司令へと視線を向ける。彼女にしては珍しく司令を心配するかのような言葉を掛けてくるところをみると相当機嫌が良いようだ。

「………ああ、ありがとう、心配はいらない。それよりも、だ。日本海に沈んでしまったアンノウンについてなのだが……」

「アンノウンの生死に関することでしたならば、恐らくアンノウンは死んではいないと思われれますわ。第一、あれほどのレーザーが直撃して火傷一つ負っていないところから見てもそう簡単に死ぬ生命力であるはずがありませんわ」

「な、成程……。言っていることは確かにもつともだが、ならアンノウンは何故日本海の底へ……?」

「恐らくエネルギーの回復のため、あるいは戦闘で受けた傷を癒すためでしょうね。硫黄島近海で目覚めてから一日も経過していない間にハイヴで二連戦、たとえばBETAから受けた傷が浅くとも肉体的

には相応に疲労していたとしてもおかしくはありませんわ？海の底で眠りながら消耗した体力を回復し、次のハイヴ攻略に備えるつもりなのかもしれませんね」

いかにアンノウンが頑強な身体と圧倒的なパワーを持っているようにも、数十万ものBETAを相手に連戦を繰り広げれば流石に消耗は免れられない。恐らく日本海の底に沈んだのも海底で休息して体力を回復し、次なる戦いへと備えるためであると夕呼は推測した。

アンノウンの狙いが地球上のハイヴの破壊であるとするなら、次はユーラシア大陸に点在するハイヴを直指すことは間違いない。だが、ユーラシア大陸に存在するハイヴは全て日本帝国に存在したハイヴのフェイズを上回るフェイズ2以上、横浜、佐渡島のとぎとは比べ物にならない程の激しい戦いとなることだろう。ならばこれからの戦いのためにも身体を休め、傷を癒し、体力を回復させておくのが定石だ。わざわざ海底深く潜った理由は不明だが、元々あの怪獣は硫黄島近海で発見されたとのことだから恐らく出身地は海なのだろう。ならば己の生まれた場所である海の底に潜って回復を図ることは何もおかしいところはないだろう。

夕呼の推測にラダビノツド司令は納得したのかしていないのかわからない表情で頷いた。

「それはそれとして、だ。横浜ハイヴの件なのだが…」

「そうですね、明日にでも調査隊を編成して横浜ハイヴの調査に向かわせては。佐渡島の反応炉は見たところ破壊されたようですが横浜ハイヴの反応炉はまだ健在な可能性がありますわ。ならば調査隊を向かわせれば何かを見つけることが出来る可能性もあり得ます」

横浜ハイヴのBETAはどうやらアンノウンによって完全に一掃されたらしく、今のところはハイヴから地上にBETAが出てくる様子は無い。とはいえハイヴの内部は非常に広大であるためにまだハイヴ内部のどこかにはアンノウンの襲撃を逃れて生き残ったBETAが存在しうる可能性もあり、さらにアンノウンはハイヴ内に囚われた人質を救出することが優先だったためか、見たところ横浜ハイヴ中核の反応炉には手をつけていないようでもあった。



故に夕呼は早期のうちに横浜ハイヴへと調査隊を派遣し、残存BETAの一掃および横浜ハイヴ内部の調査を行う事を提案した。アンウンによって光線属種を含むBETAが全滅、あるいは激滅した今ならばハイヴの攻略もそこまで難しいものでもないはずだろうし、もしかしたら無傷の反応炉を手に入れられる可能性もありうるのだ。それでなくともハイヴ内部に関するさらなる情報を入手できるのは大きく、その調査のためだけでも調査隊を派遣する理由にはなるだろう。

彼女の提案にラダビノツド司令は頷いた。

「無論調査隊は派遣する。早ければ明日にでも出撃が出来るだろう。……まあ問題は帝国と米国にどう説明するか、だが……」

「そこは私の専門外ですので司令にお任せいたしますわ♪では私は研究が残っておりますので……。ああそれと例の件もお忘れなく♪」

「う、うむ……。承知した……」

にこやかな、それでいてどこか凄味を感じさせる笑顔にラダビノツド司令は少々顔をこわばらせながら頷いた。夕呼は上司の反応に満足した様子で頷くとそのままモニタールームの扉から出ようとする。と……。

「……ん？アンタは……」

「あ、こ、香月副司令！こちらにいらつしやると聞いたものですから……」

ドアを開けた夕呼の目の前、そこには赤十字の腕章をつけた国連軍専用BDUを着た衛生兵らしき女性がこちらもドアを開けてモニタールームに入ろうとしていたのか棒立ちしていた。

女性、国連軍所属の衛生兵穂村愛美はドアが開いた瞬間目の前に己の上司、実質この基地の最高権力者ともいえる人物が立っているのを見て、慌てて直立不動の姿勢で敬礼する。

一方夕呼はドアを開けた瞬間目の前にいた愛美に対して、僅かに眉を上げただけで特に気にした様子もない。

「ん、いいわよ別に。で、私に何か？」

「は、ハイ。横浜ハイヴから救出された生存者の二人が目覚まし

ましたので報告に上がったのですが……」

「……へえ……そう……」

愛美からの報告を受けた瞬間、夕呼の唇がっり上がり、もしも幼い子供が一目見ようものなら瞬時に泣きだすであろう不気味で奇怪な笑顔が浮かんだ。そんな夕呼の笑みを真正面から見てしまった愛美は一瞬に顔を引きつらせて身体をガタガタと震わせ始める。

「……で、話とかはできそうかしら？」

「ハ、ははははははハイ!! 幸い命にかかわるような障害や傷は負ってはいませんので問題はないかと思われます!!」

「了解したわ。その二人の尋問に関しては私と伊隅と……そうね、ピアティフも連れて行こうかしら……。その三人でやるわ。ああそれから部屋に呼ばなくても結構よ。自分でそっちに行かせてもらうから。怪我人に無理させるわけにはいかないしねえ?」

「りよ、了解しましたあ!!」

悲鳴のように叫びながら敬礼した愛美は、まるで逃げ出すかのよう  
にその場から走り去って行った。脱兎の如く走り去っていく彼女の  
後姿に夕呼は心底可笑しげにクツクツと笑い声を上げている。

「ああ、いい、いいわねえ……。こんな心底晒ったのは何時ぶりかし  
らねえ……。うふふふふふ♪ああ楽し過ぎて狂っちゃいそうだわア  
!!」

まるでどこぞの童話で出てくる魔女の如く、否、もはや魔女そのもの  
のといっても過言ではない笑い声を上げる夕呼。その余りにも不気  
味極まりない姿に通りがかった人間は例外なく全て、顔を引きつらせ  
ながら見て見ぬふりをして通り過ぎて行ったという……。

## 武SIDE

夢を見ていた。今自分の鑄る世界とは全く違う、どこか騒がしいけ  
ど温かい世界の夢を――。

そこは、今まで自分が過ごした世界ではない。そしてこれがすべて  
夢であるという事。分かる事はただそれだけであった。

純夏がいて、己の両親が生きていて、何よりあの忌々しいBETA

が影の形も有りはしない―。

自分と純夏はただの学生で、一緒に高校に通い、同年代の友人たちと共に学び、遊び、そしてふぎけ合う毎日を送っていた。

眼鏡が特徴的な規律にうるさい少女、榊千鶴。

常に何を考えているのかも分からず時折学校を無断欠席する一匹狼な少女、彩峰慧

気弱であがり症な性格ながら実は努力家な一面も持っている小柄な少女、珠瀬壬姫。

能天気な性格で度々父親に連れ去られて学校を欠席する親友、鎧衣尊人。

自分達の担任である教師、神宮寺まりもに彼女とは腐れ縁らしき物理教師、香月夕呼…。

彼ら彼女らと共に過ごす毎日…、それが夢を見ている武にとって、何よりも眩しく、羨ましく感じられる光景だった。

現実の世界ではもはや見ることも、味わう事も出来ない光景。変わり映えもしないけれど、だからこそ尊い日常…。

何故こんな夢を見るのか、何故今まで見たこともないようなこんな映像が、まるで現実とその世界に居るかのように見れ、感じられるのか…。

分からない、何も分からない…。武には未だ分からなかった…。

「……………」

ふと夢から覚め、うつすらと目を空けた武。その視界に飛び込んできたのは全く見覚えのない真っ白な天井であった。

「…ああそうか、俺、純夏と一緒に国連軍に……………」

暫くボーっと天井を眺めていた武は、段々と自分が何故ここに居るのかを思い出し始めた。

あの時、自分と純夏がああのような巨大な怪獣に救出された後、自分たち二人はその場に居た国連軍兵士に必死に事情を説明し、国連軍に保護してもらったこととなった。と、その瞬間に緊張の糸が切れ

たのか、傷が治癒していても身体の疲労までは治っていないからなのか武はその場で意識を失ってしまったのだ。その後の事はさっぱり記憶にないものの、天井を見る限りBETAの巣でないことは間違いない。恐らくは横浜にある国連軍の基地、その一室なのだろうか…。

ぼんやりとした頭で考えながら、武は頭だけを動かして視線を左側へと動かした。

そこには己の寝ているものとは別にもう一つベッドがあり、そこには赤い髪の毛と黄色い大きなリボンが特徴的な少女、鑑純夏が穏やかな寝息を立てて寝入っていた。あまりにも暢気なその寝顔に、武は呆れると同時に安堵した。

何であれ純夏が無事ならそれでいい。寝息を立てているのなら生きている事は間違いない。武はホッと溜息を吐くとゆつくりとベッドから上体を起こした。

長い間寝ていたからなのか起きようとして身体を動かそうとすると身体の節々が強張って上手く動かない。上体を起こすだけでも一苦労だ。なんとか身体を起こすと己の左腕に点滴用の針と管が繋がっているのが見て取れた。そして隣に眠る純夏の腕にもまた同じく点滴の管が繋がれている。

今自分達が寝ている場所は白い壁で覆われた病院の一室のような雰囲気の一部屋であった。否、もしかしたら本当に病院の一室なのかもしれない。どうやら国連軍の兵士の人達が倒れた自分と純夏を此処に連れてきてくれたようだ。

「……うう、ん……たけ、る、ちゃん……？」

と、隣のベッドから純夏のうなされ、呻くような声が聞こえてくる。ふと武がそちらへ顔を向けると、先程まで寝息を立てていた純夏が大きく欠伸をして目を両手で擦っているのが見えた。

「よ、純夏おはよう」

「う……ん、武ちゃん……？此処、どこかな……。私、武ちゃんが倒れた時に、いきなり、眠くなっちゃって……」

寝ぼけながら話す純夏曰く、どうやら純夏も武と同じく国連軍に保

護されることとなった際に突然意識を失ってしまったようである。彼女も武同様張りつめていた緊張が緩んだのか、あるいは疲労がピークに達していたようである。

「…よく分からねえけど此処はどこかの病室みたいだな。あの国連軍の人達が俺達を此処まで連れてきて治療してくれたみたいだ」

「そっか……。じゃあ、会ったらお礼言わなきゃね……。ふわ〜あく〜」

のんきに大きな欠伸をする純夏に、武は呆れたように笑みを浮かべる、が、次の瞬間に己の腹から鳴る音を聞くや否や顔を僅かに曇らせた。

(……にしても、腹減ったなあ……)

自分と同じくベッドから身体を起こす純夏を眺めながら、武は空腹を訴える腹を押さえながらそう呟く。

それも無理はない。純夏と一緒にBETAから必死に逃げ回り、その後BETAに捕らえられてからはあの怪獣に救出されるまで何日も飲まず食わずで監禁されていたのだ。いかに点滴が栄養を補給してくれているとはいえ、空腹が満たされるわけではない。

何でもいいからとにかく飲み食いたい……。せめて、せめて水だけでも欲しい……。武の頭は一瞬で食欲によって埋め尽くされる……。

「うう〜……。た、武ちゃん。お、お腹すいちゃったよ〜」

そしてそれは隣の純夏も同じな様子であった。起き上ったはいいものの、こちらにも腹部を押さえながらまるで地獄の餓鬼の如く餓えた表情で武を見ている。かく言う武も空腹のせいで口から溢れそうになる唾液を必死に飲み込みながらなんとか喉の渴きを潤す有り様だ。

(チクシヨ〜!!折角命助かったのに飢え死になんて笑えねえぞ〜!!ああ、頼むから誰か食べ物を……。……というかいつまでも此処で寝てないで食い物を探しに行くしか……)

ついにはベッドから降りて食料を探しにでも行こうかとも考え始める武。と、その時、突然部屋のドアが二回ノックされて開かれた。

部屋に入ってきたのは眼鏡をかけて髪をお下げに結った軍服姿の女性だった。腕に赤十字の腕章をつけているところからどうやら衛

生兵らしい女性はベッドから上体を起こしている武と純夏を見ると  
パアツと表情を明るくした。

「あら、二人とも目が覚めたようね。よかった。二人とも何の前触  
れもなく突然倒れたみたいだから…。ああそれよりも何か食べられ  
そう？ちようど食事持ってきたんだけど…」

「……!!いい、いただきます!!」「ご、ご飯?!食べたいです!!」

「……え、あ、だ、大丈夫そうだね?うん、良かった……」

食事と聞いた瞬間に顔色を変え、まるで餓えた獣の如く目を光らせ  
て身を乗り出してくる武と純夏。そんな二人の鬼気迫る姿に衛生兵、  
穂村愛美は顔を少し引きつらせながらも見たところ元気そうな二人  
の姿に安堵するのだった。

「……で、こういう状況になっている、と…」

「は、ハイ…。なんでもハイヴ内で何日も飲まず食わずだったそう  
ですので…」

その後二人の居る病棟を訪れた香月夕呼は、目の前で必死に食事を  
がつつく二人の姿を半ば呆れた様子で眺めている。そのすぐ後ろに  
は国連軍専用の軍服を着た女性二人が二人揃って何がどうなってい  
るのか分からないと言いたげな顔をしている。

「……それで、彼らがあの横浜ハイヴの生存者で間違いないのか?」

「は、はい…。それに関しては間違いありませんが……」

夕呼の後ろに立っていた女性のうち、赤味がかった短髪が特徴的な  
女性がいぶかしげに眉をひそめながら愛美に問いかける。

彼女の名は伊隅みちる。香月夕呼直属の特殊部隊、A-01連隊第  
9中隊、通称伊隅ヴァルキリーズこと伊隅戦乙女中隊の中隊長であ  
り、階級は大尉。その隣の金髪の女性は夕呼専属のオペレーター、イ  
リーナ・ピアティフ臨時中尉。

上官である夕呼の命によって共に横浜ハイヴからアンノウンに  
よって救出された少年少女の尋問に同席することとなった二人は、最  
初こそ横浜ハイヴからの生存者都の尋問という事で少なからず気を

張っていたものの、目の前で必死に食事をがつつく二人の姿に完全に毒気を抜かれた様子であった。そんな己の部下達の様子に夕呼は可笑しそうにクツクツと含み笑いをする。

「ククツ、二人とも中々面白いリアクション出来るじゃない?…んじやあ、お食事している二人には悪いけど……」

「は、ハイッ。二人とも、食事しているところ悪いんだけど……」

「ハムツ、アグツ……、ふへ?えつとどうかしたんですか?」

「ムグツ、ゴクツ……、あれ、この人達、何時の間に……」

「貴方達が食事に夢中になつてるときにこつそり、ね。ま、それはいいとして……、ん?どうしたのよそこの坊や、そんなボケーつとした顔をして」

夕呼の言葉に純夏はキョトンとして武へと視線を向ける。

夕呼の言うとおり、武はポカンと口を空けたまま茫然と夕呼を凝視していた。それはまるで死んだ人間と突然再会したかのような反応であったが、当の夕呼は目の前の少年とは全く面識もなく、背後の部下二人と衛生兵からまるで問い詰められるような視線を向けられても、お手上げとばかりに肩を竦めて首を振る事しか出来ない。

「あ、あの……、武ちゃん?どうしたのボーつとしちゃつて……」

少しばかり重くなった空気に耐えられなくなったのか、純夏が恐る恐る武に話しかける。と、突然武はハツとして一瞬純夏の方へと振り向くと、改めて夕呼へと向き直る。だが、その顔は先ほどとは違ってまるで夕呼を見ながら何か昔の記憶を思い出そうとしているかのようであった。

「?一体どうしたの坊や。私の顔に何か付いてる?そ・れ・と・も、お姉さんにみとれちゃつてるのかな?」

「え!?ち、ちちち違いますよ!!えつと……その、な、なんていうか……」

ニンマリと意地悪げな笑顔を浮かべながら武をからかってくる夕呼に、武は必死に頭を振って否定しながら、所在なげに視線を左右に巡らせる。暫く口ごもっていた武は夕呼に向かって恐る恐るといった様子で口を開く。

「え、えつと……、何所かであった事ってありましたっけ……？」

「ん？何？そんなかわいい彼女がいるのにナンパ？浮気は駄目よ？」

「な!?武ちゃん!？」

「ち、違う!!違うっての!!お、俺は別にこの人に見とれていたんじやなくて、ただ何所かで見たような感覚がしただけでそれで気になっただけだつて!!イヤこれ本当!!本当だからベッドの上に立つな!!その拳引つ込めろ!!」

夕呼の一言に激昂しベッドの上に仁王立ちする純夏、そして今にも自分に殴りかかろうとしている幼馴染をベッドに横たわりながらも必死に説得する武の姿に、夕呼はさも可笑しげにニヤニヤと笑いながら眺めている。

「クッククックク〜♪初々しいわね〜お二人さん♪私好みね♪ま、このまま痴話げんかが始まったら尋問どころじゃなさそうだし………。度々ご苦労だけど、ちよつと二人を宥めてもらえるかしら？」

「は、はあ………。す、純夏ちゃん落ち着いて。ベッドから立ち上がるのは危ないしそれに武君もああ言ってるし、ね？」

完全に観客気分な夕呼の命令（お願い）に、愛美は軽く溜息を吐きながら烈火の如く怒り狂う純夏を宥めに入るのであった。



## 第10話 尋問

「ハア…ハア…、まったく、変な勘違い起こすんじゃないやねえよ馬鹿純夏…。何時もいつも早とちりしやがって…、そのせいで俺がどれだけ苦労してきたか分かっているのかよ…」

「うう…！で、でも武ちゃんだって、武ちゃんだって誤解されるような事言っただからお相子だよ…!!」

「クツクツク♪いやゝ熱いわね。中々面白いものを見せてもらったわよお二人さん♪どうせならまりにも見せてあげたかったわ」

(…何でかしら…。あの二人を見ていると昔の自分と正樹を思い出すのは…)

あれから十数分後、愛美になだめられて何とか純夏の怒りは収まったものの、未だに純夏は不満げな表情で武を睨んでおり、対する武も身に覚えのない(本人主観)純夏の怒りにこちらも不満そうに眉をかめている。一方夕呼は二人の痴話喧嘩をニヤニヤと面白そうな表情で鑑賞し、みちるはどこか懐かしげな表情を浮かべている。

自分達の痴話喧嘩を面白おかしく観戦されていた事にようやく気がついた武と純夏はお互い恥ずかしそうに顔を赤らめながら黙りこんでしまう。

「さて、と、じゃあ収まったところで自己紹介といきましょうか。私の名前は香月夕呼。ここ横浜暫定基地の副司令って肩書きの、しがない物理学者よ」

「では私も。私は国連軍第11軍大尉の伊隅みちるとい。よろしく頼む」

「私は香月博士付きのオペレーターであるイリーナ・ピアティフ。地位は中尉です」

「あ…、か、鑑純夏っていいです！こ、この度は私と武ちゃんを助けてくれた上に治療までしてくれて本当にありがとうございます！ほ、ほら武ちゃんも…武ちゃん？」

国連軍基地の副司令という事実上この基地のナンバー2とも言える人間が目の前に居る事に純夏はガチガチに緊張しながら挨拶とお

礼を言うと、後ろから武を小突いて夕呼に挨拶させるよう促す、が…。

「香月、夕呼…？ゆうこ、せんせい…？」

武は先程同様呆けた表情で、何事か眩きながら夕呼の顔をジツと見つめている。先程と同じ彼の様子に純夏は怒るよりも先にただ事ではないという不安と危機感を覚えてしまう。

「た、武ちゃんどうしたの!? まだどこか痛むの!? ねえ!! 武ちゃんつてば!!」

「す、純夏ちゃん落ち着いて！武君の怪我自体は大したことないはずだから!!」

焦りから武に詰め寄ろうとベッドから乗り出そうとする純夏とそんな彼女を必死で押しとどめようとする愛美。そんな二人の騒ぎ声に武はまるで夢から覚めたようにハツとすると弾かれたように純夏へと顔を向ける。

「…あ、す、純夏…？わ、悪い…。副指令の名前聞いて、ちょっと驚いてさ…」

「ん？私の名前？そんなに珍しいものかしらねえ香月つて名字…。」

自身も何故こうなったのか分からないと言いたげな表情で眩く武に、夕呼は不思議そうに首を傾けている。事実夕呼も目の前の少年には面識がない。映像で救出される彼の姿を見たことを除けば一度足りとして武に出会ったことはないと言断言できる。それはどうやら目の前の少年も同じであるようだが。

「…あ、お、俺…：じゃなくて！わ、私の名前は白銀武つていいいます！こ、この度は自分達を助けていただいてお礼の言葉もなく…。」

「はいはいはい落ち着いて。そんな畏まってテンパらなくていいわよ坊や。てか一人称も普通に俺、で構わないわよ。そんなこと気にする人間なんてこの場に居ないし。少なくとも私は気にしない」

夕呼に押しとどめられた武は羞恥心に顔を赤らめて俯いてしまう。そんな武の姿を純夏は何所か不満そうに眺めている。

「ま、いいわ。で、私達が貴方達がここに来た理由なんだけど…：まあ端的に言えば貴方達を尋問するためね」

「じ、尋問!？」

夕呼の『尋問』という言葉聞いた武と純夏は瞬時にギョツと目を剥いて夕呼を凝視する。その顔に浮かぶのは輝くばかりの素敵な笑顔。100人が見れば100人すべてが見惚れるであろう絶世の美貌……のはずなのだが、武と純夏にはその笑顔がまるで自分達をどう料理してやろうかと舌なめずりをしている魔女か悪魔のように見えてならず、見惚れるどころか蛇に睨まれた蛙の如くガタガタと身体を震わせる事しか出来なかった。

「ふえっ!?!じ、尋問って!?わ、私たち何も悪い事してません!!」

「じ、尋問ってあれだよな!?ムチ打ちとか何とかで拷問して無理やり吐かせるとかって……」

「いやいや、そんなことしないから。つーかゴーモンっていつの時代よ?仮にも国連軍が保護したあんた達にそんなことやるわけないでしょうが」

東ドイツに昔あった国家保安省じゃああるまいし…、と小さい声でブツブツとつぶやく夕呼。どうやら目の前の副司令は自分達を拷問するつもりはないらしい事が分かったため、二人はホッと胸をなでおろした。

「そ、そっか…、よかった……」

「……その代わり自白剤はあるけど」

「じ、自白剤!?!な、なんスかその不穩極まりない単語は!!」

「試してみる?私はヤツたことないんだけど打った瞬間に恍惚とした気分になって自分の秘密を洗いざらいベラベラと……」

「こ、香月博士……、そこまでしておいたほうが…。二人とも完全に怯えてしまっていますので……」

イリーナはニヤニヤと魔女そのものといってもいい不気味な笑顔を浮かべながらノリノリで二人を脅す上司の姿に冷や汗をかきながら彼女を止める。見ると武と純夏はまるでこの世のものではない何かを見たかのような怯えきった表情でガタガタ震えている。特に純夏など今にも泣き出してしまいそうである。

「いやすまないな…。そんなに怯えなくていい。副司令はどうにも

他人をからかう事が大好きな困った性格でな、ああいう悪辣な冗談を口にしては人が驚いたり怯えたりするのを眺めて楽しむのが日常茶飯事なんだ。私達も何回被害にあった事か……」

「ちよつと伊隅。アンタ随分と人の事ボロクソに言ってくれるじゃない。これでもご近所からは明るくて優しい夕呼お姉ちゃんって評判だったのよ？」

「……随分と寛大なご近所だったのですね、それとも目が節穴か……。ま、そういうわけだから怯えなくていい。誰も拷問したり自白剤打ったりなどというどこぞの共産国家の情報機関のようなことはしないさ。私達はただ君達からハイヴに連れて行かれた時の状況と覚えている限りのハイヴ内部の構造、そして君達を救出した怪獣について君達の知っている情報を聞きたいだけだ」

「そ、そうなんですか……。ああビビった……」

「副司令さんの顔、すっごく怖かったから本当にゴーモンされるのかと思っちゃいました……。それならそうって早く言ってくればよかったのに……」

「……どんだけ怖がってたのよ……。ちよつぴり傷つくわよ？私」

一応比喩という意味で魔女だの女狐だの揶揄されて、他人に煙たがられ、嫌われることに関しては既に慣れっこのはずであった夕呼も、流石に目の前の少年少女に本物の魔女か化け物の如く見られて怖がられた事に事に関しては少しばかり傷ついているようであり、顔を顰めている。そんな上司の様子に肩を竦めながらみちるは武と純夏に話を続ける。

「……まあ尋問という言い方が悪かったのかもしれないが、簡単な事情聴取とでも思ってくれればいい。では、早速だが始めさせてもらっても構わないか？」

「は、はい……。俺達が話せる事なら……。いいよな、純夏？」

「うん、私も大丈夫だよ武ちゃん」

「……ちよつとちよつと当事者抜きで話進めないでよ。良いけど。じゃあ早速第一の質問なんだけど……」

勝手に話を進める部下と武と純夏に夕呼は少々不満げに眉を顰め

ながら二人への尋問を開始する。彼女の背後ではイリーナが懐から小型の録音機を取り出し、夕呼と武、純夏との間の会話の記録をしている。

「まず、貴方達がハイヴに連れて行かれた経緯について、よ。一体どのような状況でBETAに捕らえられたのか……、覚えている限りでいいから話して」

「あ、はい……ええと、それは……」

夕呼の問い掛けを聞いた武は背後の純夏に向かって一度目配せすると、何かを思いつめたかのような表情をしながらゆつくりと口を開いた。

「……俺達、家族と一緒に避難しようとしていたんです。街にBETAが迫ってきているから危険だつて、直ぐに避難しろつて帝国軍からの伝達があつて。それで、帝国軍の用意したトラックに乗つて街の人たちと一緒に避難しようとしたんです、けど……、そこを、BETAに襲撃されて、トラックが横倒しになって、次々と人が食われて……」

「何とか私と武ちゃん、武ちゃんと私のお父さんとお母さんだけでBETAから逃げていたんですけど、途中でお父さんとお母さんと、離れ離れになっちゃつて……、それから武ちゃんと一緒に逃げていたんですけど……、途中、商店街のアーケードで、BETAに、襲われて……」

押し倒されたトラックと次々とBETAに殺されていく人々、跡形もない廃墟と化した自分達の故郷と自ら囿となった両親の最後の姿……。話をしているうちに、あの時、BETAから逃げ回っていたときに目の当たりにした光景が、脳裏に張り付いて消えずにいる光景が次々とフラッシュバックしてくる。

その光景を思い返していくうちに、段々と二人の顔は暗鬱なものへと変わっていく。大切な人を、故郷を失った苦しみと悲しみ、そしてそれら全ての元凶であるBETAへの怒りが武と純夏の脳裏を覆い尽くしていく。そんな二人の変化に気付いたのか気付いていないのか、夕呼は無表情で二人をジッと眺めている。

「成程、ね……、そのアーケードで貴方達はBETAに襲われて、ハ

イヴに連れて行かれた、と……。どうしてもは知らないけれど殺されなかつたのは奇跡に近いわね」

「そう、ですね……。俺も、そう思います……」

「そ。それじゃあ次の質問だけ……、貴方達がBETAに連れて行かれた場所についてだけ……、どんなところだったかしら？」

「どんなところ、と言われても……」

続く夕呼の質問、自分達が連れて行かれたハイヴの中について問われると純夏は眉を顰めながら自分達が幽閉されていたあの洞窟のような牢獄の記憶を思い返す。

「……えっと、まるで牢屋みたいな場所、でした……。広さは、学校の教室くらいあって、壁も床も天井も、ゴツゴツの石でできていて……。私と武ちゃん以外にもたくさん人が押し込められていて……」

「ふうん……。貴方達以外にもBETAにつれてこられた人間が、ねえ……。なら、何故生存者が貴方達二人だけなのかしら？他の生存者はまだその牢獄とやらの中に居るの？」

「それは、その……」

他の生存者、夕呼の口から出たその単語を聞いた瞬間、純夏は悲しげな表情で顔を俯かせる。彼女の脳裏には自分達を除くBETAに捕らえられた人間達の末路が生々しい記憶として次々と浮かび上がってきており、夕呼の問い掛けにも直ぐに答えられそうもない。

そんな純夏の姿を見た武は、彼女に代わって口を開いた。

「……いません。牢獄に閉じ込められていた俺達以外の人間は、BETAにどこかに連れて行かれるか、それに逆らって抵抗したり逃げ出そうとした人達は、全員殺されてしまいました。最後に俺達がBETAに連れて行かれそうになったんですけど、そこで……」

「あ、あのおっきな亀さんに助けてもらったんです……。もし、もしあと少し遅れていたら、た、武ちゃんは、武ちゃんは……」

「……っっておい！な、何突然泣き出してるんだお前は！俺はちゃんと此処でピンピンしてるっての！！五体満足で生きてるから！！」

純夏は牢獄で今にも兵士級に殺されそうになっていた武の姿を思い出したのか、ついに涙をボロボロと溢して泣き出してしまう。何の

前触れもなく泣き出した純夏に流石に武も焦って必死に声をかけて慰めようとするが、中々泣きやむ様子はない。結局純夏を慰めるのは愛美にまかせて、尋問は武一人で行うこととなった。

「……なんか、すいません。コイツ、昔から泣き虫で……」

「別にいいわよ。ただの民間人が文字通り死ぬような目にあっただし。しかも目の前で幼馴染、もとい恋人をBETAに殺されそうになったのよ？トラウマなんてレベルじゃないと思うわよ？」

「んな!?こゝ、恋人つて俺と純夏はそんなのじゃ……」

「違うの?」

「違います!!」

「……いや、すぐ傍に彼女がいるのにそこまで強く否定することはないだろう?当の彼女は聞いてないようだが……。ああ、何故だ……君を見ていると正樹の事を思い出して仕方がない……」

純夏との関係について再度からかう夕呼と必死に純夏とはただの幼馴染であると絶叫する武、そしてそんな武を見て何か過去の記憶を思い出したのか、武の事をじと目で睨みつけるみちる……。一人会話に参加しないイリーナは、(これ、全部録音されてるんですけどね……)と頭の隅で思いながら夕呼の背後で会話の録音を続けている。

「クッククック♪中々弄り甲斐があつて楽しいわねえ。まあそれはともかくとして……中々いい話を聞かせてもらつたわ。これで貴方達が何故生け捕りにされたかが大体予測できるわね」

武と純夏、そしてみちるの反応をニヤニヤ笑いながら楽しんでいた夕呼は瞬時に意地悪げな笑みを引つ込めると冷静な視線を武、そして泣きやんだ純夏へと巡らせる。

「恐らく貴方達が捕らえられていた牢獄は捕虜収容の部屋だったんでしょうね。外で発見、捕獲した人間を一時的に収容しておく場所だったんでしょうね」

「え……で、でもBETAつて目につく人間は全部殺すような残酷な異星人なんじゃあ……。なんで私達を捕獲なんて……」

純夏と武の知識では、BETAは人類のみならずありとあらゆる地球上の生命体を残らず食い殺していく凶暴な化け物、という印象だっ

た。目にした人間は老若男女問わずに轢殺する異星からの侵略者……。それはこの二人だけではなくこの世界の人類の大半がBETAに対して抱いているイメージであろう。

そんな彼らの疑問を聞いていた夕呼は先程と変わらない表情で、目の前の二人にとって衝撃的な事実を口にした。

「そりゃあもち……人体実験のためでしょうね」

「なっ!?」「じ、人体実験!?!」

夕呼の口から放たれた衝撃的な言葉に武と純夏は愕然とする。一方、みちる、イリーナ、そして衛生兵の愛美は二人とは対照的に驚いた様子はない。だが、どの顔にも何所か不愉快そうな、あるいは悲痛な色が浮かんでいる。

武と純夏の反応に夕呼は予想通りと言いたげに肩を竦める。

「あるいは人類の生態解明のため、とでもいいましようか? 恐らくBETAが貴方達を捕獲したのは、自分達の巢であるハイヴで貴方達人間を研究するためだったのでしょうか。まあ、どんな手段かは知る由もないから想像するしかないんだけど、恐らく私たち人類からすれば碌なものじゃない事は確かだね。

人体解剖、あるいは人体に何らかの物質を注入してその変化を観察する……、貴方達も理科や化学の授業でカエルやマウスにやったアレを、人間にやっているんでしょうね」

「なっ!? お、俺達は実験動物かなんかだっけって言うのかよ!!」

夕呼の淡々とした説明に武は怒号を上げて拳をベッドに叩きつける。純夏はショックのあまり目を見開いて両手で口元を押さええている。

もしも夕呼の話が本当だとすれば、牢獄からBETAに連れて行かれた人達は……。想像するだけでも吐き気がこみ上げてくる。そして、もしもあの怪獣が自分達を助けてくれるのが、ほんの一瞬でも遅かったのなら……、想像するのも恐ろしい。恐らく武は純夏の前でBETAに殺され、純夏はその「実験」とやらの材料にされたに違いない。

二人とも考えるだけで背筋が凍りつくような思いだった。



「相手はこの星とは別の場所から来た宇宙人、地球人、というより地球の生命体とは物の考え方が違うのよ。実際最近の研究結果ではBETAは人間の事を生命体として見ていないって結果が出ているしね…。私たち人間はマウスやカエルと同じ……。否、それどころかそんじよそこらの石ころか土くれ程度にしか見られていないのかもかもしれないわね、連中からすれば、の話だけど」

二人の反応を冷静かつ冷徹な視線で眺めながら、夕呼は淡々と語り続ける。

BETAが人類を生命体として見ていない……。これは夕呼が主導で進めているオルタネイティブ4の前身、オルタネイティブ3においてBETAには思考というものが存在するという事実と共に判明した事である。最も何故地球上の生命体と同じく炭素系生物であるBETAがなぜ人類を生命体とみなしていないのかという事に関しては未だに不明なのだが。

最もそんなことはBETAに両親や友人、果ては自らの故郷を奪われた二人にとつてはいつでもいいことであり、むしろ人間を実験ネズミの如く弄ぶBETAへの怒りと憎しみで腸が煮えくりかえりそうであった。

「胸糞悪い話を聞かされて気分が最悪なところ悪いんだけど……。まだ質問は終わってないわよ。安心しなさい、これでラストにするつもりだから」

「……はい」「……」

夕呼に話を振られた二人は、何所か複雑な表情を浮かべながら夕呼へと向き直る。二人の心情を知ってか知らずか、夕呼は先程と変わらぬ調子で最後の質問を口にする。

「最後の質問は……。貴方達を救ったあの亀に似た姿の巨大な怪獣についてよ。私達は仮称でアンノウンって呼んでいるけど。あの生物に救出された状況と、あの生物について知っている事について話してもらえないかしら？何でもいいわよ」

「アンノウン……。亀のような怪獣って、ガメラの事だよ、武ちゃん？」

「……あ、ああ、まあそうなんだろうけど……」

「……ん？ガメラ？それってあの怪獣の名前？もしかして貴方達がつけたのかしら？」

純夏の呟いた『ガメラ』という名前に興味を持ったのか夕呼はズイツと身を乗り出してくる。獲物を発見した鷹のような鋭い眼光に気おされながら、武と純夏はコクコクと何度も頷いた。

「え、えっとハイ!!た、武ちゃんが名前を付けて…ね！武ちゃん!!」  
「お、俺に振るな馬鹿!!……えーっと、ですね、な、名前をつけたというかなんというか……。ふ、副司令には流石に信じがたい話なのかもしれないけど……」

「な〜に改まっちゃってるのよ。何でもいって言ったのはこっちよ？遠慮なく話さないっての。それとも、ホントに自白剤打っちゃおうかしら？」

そう呟く夕呼の顔に、再びあの笑みが、まるでおとぎ話に出てくる魔女のような不気味な頬笑みが浮かんでくる。それを真正面から見ってしまった武の顔は恐怖のあまり一気に引きつる。

「か、かかかかか勘弁してくださいそれだけは!!言います!!言いますから!!ええとですね、夢で見たんですよ!!夢で!!夢の中あの怪獣がガメラだって言ってたんです!!」

「「「………夢?」」」

武の口から飛び出した言葉に夕呼だけではなくその場に居た純夏以外の人間はポカンとしてしまう。周囲の人間の反応に武は「だから言いたくなかったんだよ……」といやそうに顔を顰めながら呟き、純夏もそんな武の姿を何も言わずに眺めているしかなかった。かく言う純夏も武の話には半信半疑であったのだから……。

「……俺、ハイヴで助けられたときに死にかけてたんです…。兵士級を純夏から引きはがそうとしたときに腹殴られて…。留め刺されそうになったときにあいつ、ガメラに助けられたんですけれど……。内臓を潰されたのか肋骨がへし折れたのかわかりませんが、体中に激痛が走って、口から血を吐いて、死にそうになっただんです……」

「……兵士級に、か……。よく生き延びたものだな……」

武の告白にみちるは僅かに驚いたような声を上げる。

兵士級はBETAの中でもさほど強い部類ではない。戦術機どころか対戦車用のライフルさえあれば歩兵でも対処できるレベルである。が、それはあくまでも武装していればの話。万が一一生身であった場合にはたとえ一対一でも到底人間のかなう相手ではない。

腕力は人間どころかゴリラすらも上回り、その巨大な顎の咬筋力は人間の頭部をややすくと噛み砕く。決して侮れない敵なのである。

そんな敵に殴られて、生きているどころか何事もなかったかのようにピンピンしているとは、どれだけ運が良いのかとみちるは感心していた。

「あれ？おかしいわね…。白銀君と鑑さんの身体を検査したけど……、重傷とかそういうのは一切なかったはずだけど…？」

と、話を聞いていた愛美がふと何かを思い出したように呟いた。その表情は何か腑に落ちないと言いたげに眉が顰められている。

「…それってどういう事かしら？」

「あ、はい…。既に申し上げたと思うのですが、二人を保護したときに一応身体に何か異常がないかを検査したんですけど、栄養失調と脱水症状以外は全くと言っていいほど異常がなかったんです。勿論兵士級に殴られたような傷は身体の何処にも無かったのですが…」

「…どういふことだ？奴らの腕力で殴られれば強化装備を装着した衛士でも無事では済まないはず……。…いや、確か君は死にそうになったと言っていたな？少なくとも内臓破裂か肋骨骨折はしているはずだが……」

みちるはブツブツと何かを呟きながら疑念のこもった視線を武へと投げかける。見るとみちるだけではなく夕呼、イリーナ、そして愛美までもが疑いの視線を武へと向けてきている。武は反射的に背後の純夏へと視線を向けるが純夏は怯えた様子でブルブルと首を振るだけで武の弁護をしてくれる様子はない。

孤立無援の状況に泣きそうになりながら、武は重々しく溜息を吐いた。

「そ、それが……。俺にも分かんないんです……。なんだかガメラ、

…あの怪獣がでかい声で咆えた瞬間に身体の痛みも消えて息苦しさも無くなつてそれで眠くなつて……、で、目が覚めたら痛みも何も消えていたんです……」

武は精一杯言葉を探しながら自分が助かった状況を説明する。とはいえ武自身にとつてもあまりにも信じがたいことであり、目の前の副司令含む国連軍の方々に理解してもらえるのかどうかについてはあまりにも自信が持てなかった。

何しろ突然眠くなつて眠つてしまい、目が覚めたら何故か傷が治っていた、などと言われても大概の人は信用しないだろう。お前の体はトカゲのしっぽか何かかと馬鹿にされるのが落ちであろう。

とはいえ武としても実際そうなのだからそれ以外言いようがないので、もはやあとは目の前の副司令が信じてくれるのを祈るしかない。武は両手を強く握りしめて夕呼へと視線を向ける。

夕呼はまるで武の心の底を見透かすかのようにジツと冷たい視線を向けてくる。絶対零度の如く冷たい視線を武は負けじとばかりに睨み返す……。

そして睨み合いを開始してから数十秒程時間が経過する、と、夕呼はフウ……と軽く溜息を吐きながら何処となく不機嫌そうな表情で眉を顰めた。

「……ま、いいわ。とりあえずそういう事にしといてあげましょう」

「え!?!、信じてくれるんですか!?!」

「んなわけないでしょうが。そんな寝てたら重傷が治ってましたなんてどこのファンタジーよ。つつつてもアンタはどう見ても嘘言っているように見えないし……、ま、そういう事にしといてあげるわ」

「………はあく……!!よ、よかつた……」「ふう………。し、心臓が止まるかと思つたよ……」

夕呼の不承不承な様子 of 返事に武は気が抜けたかのように大きく息を吐き、純夏も内心気が気でなかったのか心底ホツとした様子である。そんな二人の姿を夕呼はムスツとした表情で睨みつけており、そんな上司の姿にみちるとイリーナは如何したものかとはかりに顔を

見合わせている。

「……で、それとこれとあんたが見た夢っていうのはどういう関係があるのかしら？」

「あ、は、ハイ……。俺が突然睡魔に襲われて眠っている時、なんですけれど……」

そして武は己の見た夢の内容を話し始めた。

見たこともない燃える街。

そこに立つあの亀のような巨大な怪獣。

……そしてその怪獣を迎え撃つかのように空から舞い降りる巨大な鳥、あるいは蝙蝠のような化け物……。

「それで、夢の最後でこんな言葉が聞こえてきたんです……。

『最後の希望　ガメラ　時の揺り籠に託す

禍の影　ギャオスと共に目覚める』って……」

武は話し終わると疲れたように息を吐いた。己の知っている事はすべて話した。あとは目の前の夕呼がどう判断するか……。

病室は静まり返っている。この場に居る誰一人として一言も口を開かない。そんな中で夕呼は、顎に手を添えて何事かを考えている。

「最後の希望、ね……。にわかには信じがたい話なんだけど……。

……まあいつまでも名前がアンノウンってわけにもいかないし、ガメラって名前だけは貰っておくわ」

やがて口を開いた夕呼は、ただ一言そう呟くと椅子から立ち上がる。それを合図としたようにイリーナは録音機のスイッチを切る。

夕呼はそれを確認するとそのまま武と純夏に背を向ける。

「じゃ、とりあえず今日はこれまでにしておこうかしら。邪魔して悪かったわね二人とも。……ああその前にもう一つだけ、いいかしら？」

ふと何かを思い出したかのように夕呼は振り返った。

「貴方達、あの怪獣、ガメラの事、敵か味方、どっちだと思う……？」

夕呼の口から出た最後の問い掛け、それに対する武と純夏の答えは、既に決まっている。

「敵じゃない、と思います。少なくとも俺は、そう信じています。あ

いつは俺達を助けて、BETAを全滅させてくれた。だから、きつと…」

「私も。ガメラさんは武ちゃんと私を助けてくれたから…。だから、だからきつと私たちの、人類の味方だって思います。敵なんかじゃありません！」

「…っそ、分かったわ」

二人のまっすぐな目を見て、嘘偽りなど欠片も感じさせない言葉を聞いた夕呼はフツと穏やかな笑みを浮かべると白衣を翻してそのまま病室から出て行った。彼女の後ろに立っていたみちるとイリーナも後に続いて病室から外へと出ていった。

夕呼SIDE

「副司令、あれでよかったですか？」

「ええ、あれでいいわ今日のところは。そこそこ面白い話も聞けたし、ね」

廊下を歩きながら夕呼は上機嫌な笑みを浮かべている。久しく見た事のない上官の笑顔にみちるは喜ぶべきか喜ばざるべきか複雑な表情を浮かべている。それは隣のイリーナも同じであった。

「ところでピアティフ？会話の録音は…」

「全て記録済みですが…、これは司令に？」

「ええ、そのあとは削除しておいていいわ。ま、漏れたところでどれだけの人間が信じるかはあやしいところだけどね」

「了解しました」

夕呼の指示に淀みなく返答するイリーナ。いつも通りの反応に夕呼は満足げにうす笑いを浮かべながら廊下を歩く。

「さて、と…。明日からは横浜ハイヴの調査が始まるわね…。果たして何がある事やら楽しみでならないわ。お土産期待してるわよ伊隅？」

「ご期待に添えるようにしておきましょう。出撃するメンバーはどうしますか？」

「そうね…。ヴァルキリーズはアンタと…。宗像でいいかしらね？」

あとエインプエリアズとベルセルクスのメンバーも数人いればいいでしょ？ま、誰を選ぶかはあんた達に任せるからそこはよろしく」

「了解」

夕呼の言葉にみちるは敬礼しながら返答する。それを聞きながら夕呼はまるで子供のように楽しげな笑顔を浮かべる。

「フフ、年甲斐もなくワクワクしてきたわねえ♪予測できない展開に予測できない未来……。カメラ！そして二人の生存者！どれも私の頭脳では想定外だったわア！これからどうやってこの世界の歯車が狂っていくのか……。やっぱり人生、何が起きるか分からないものねえ…!!」

嬉しげに、楽しげに童女のように笑う副司令。……。最も傍目から見れば何とも不気味な姿であったことには違いないが……。

そして、高笑いする副指令の背後で、部下二人が実に居心地悪そうに、身体を小さくしていたのは秘密である。

## 第11話 鍊鉄

日本列島とユーラシア大陸の間に広がる広大な海、日本海。その海面から2000メートル以上の深さに広がる海底。

地上に溢れる日の光は届かず、一寸先には文字通り漆黒の闇が広がる深淵の世界。地面は細かい砂とゴツゴツした石で覆われ、その闇の中を異形に深海魚が身体の部位を点滅させ、獲物を探して泳ぎまわっており、闇の中で光り輝くそれはさながら夜空に輝く星か、蛍が飛びまわっているかのような幻想的な光景であった。

その、一面砂と石の平野が広がる暗黒の世界の中にただ一つだけ、まるで山でもできているかのように大きく盛り上がっている影が地面に横たわっている。

それは遠目から見たら、いや、この暗黒の世界ではたとえ多少近寄って見たとしてもただの岩か何かにはしか見えないだろう。しかし、もしもそのすぐ近くに、触れられるほど近くに寄ってそれをよく見、触れる事が出来たとするのなら、これは岩や環礁のような生命をもたない無機質な存在でないと気付くはずだ。その生命の脈動、巨体から深く重く鳴り響いてくる寝息から、この巨影が岩等ではなく一体の巨大な生物だと、誰もが理解することだろう。

この巨大な生物こそ地球の守護神である大怪獣ガメラ。つい先ほど地球の生命を貪る外宇宙からの侵略者、BETAの巣たるハイヴを幾千幾万のBETA諸共打ち崩したガメラは、戦いの疲労と受けた傷を癒すために、全ての生命の生まれ故郷たる深い深い海の底でこうして眠りながら身体を癒している。

日本列島のBETA、ハイヴは一掃したものの、まだユーラシアには20を越えるハイヴが存在している。それら全てを一掃するとなれば今まで以上に激しい戦いとなる事は間違いない。だからこそ今のうちに先程の戦いで受けた傷を癒し、次なる戦いに備えて体力を回復させなければならぬ。

とはいえBETAから受けた傷そのものは殆どかすり傷も同然であり問題なく完治しており、戦いで失われた体力も徐々に回復しつつ



ある。

ガメラの目覚め、次なる戦いのはときは、刻一刻と近づきつつあった。

そこは、何本もの桜の並木が立ち並ぶ小高い丘の上だった。

だが、植えられている桜には花はない。葉も一枚たりとも生えていない。どう見ても枯れ木としか言いようのない貧相な木々である。

そしてその枯れ果てた桜並木が立ち並ぶ丘、丘から広がる風景もまた、桜の木同様寒々しく荒れ果てた荒野も同然の世界……、生命の息吹など到底感じる事の出来ない文字通り死の世界が広がっていた。

そして、その枯れた桜の一本に寄りかかるように座る白い学生服の青年が一人、その横で彼に寄り添うかのように立ち、眼下の荒野を見下ろす二足歩行の巨大な亀のような生物が一頭……。

学生服の青年、現在の『ガメラ』である白銀武と二足歩行する亀、彼と融合している怪獣ガメラ本人、通称オリジナルガメラは、お互い何をするでもなく荒野の彼方を眺めている。

この世界は『ガメラ』の深層意識の中、彼の心の中に作り出された世界。現実世界での肉体が眠りについたとき、ガメラ、すなわち『白銀武』の意識はこの心の中に描かれた寒々しい荒野へと送られる。

この世界は彼の心が描いた世界。彼とオリジナルガメラ以外生物は何も存在せず、ただ枯れ果てた桜並木と、草木一つ生えぬ荒野が広がるのみである。

そんな世界を武は何とも言えない表情で眺めている。その顔に浮かんでいるのは懐かしさか、悲しみか、あるいは怒りか……、もしくはそれら全ての感情がない交ぜになったような、そんな複雑な表情をしている。

「随分様変わりしてるな、前は白一色で何もなかったのに……」

『……ここは君の意識の中。君の心の在り方次第でどのようにも変わっていくものだ。この場所が君の心に刻まれるほど、君にとって印象に残る場所だった、という事だろう』

「……だろうな。ああ、俺も此処はよく覚えている」

オリジナルカメラの言葉を聞きながら、武はかつての記憶を思い出  
す。

荒れ果てた荒野、かつては美しい桜並木が並んでいた此処は、BE  
TAの襲撃と明星作戦において米軍が投下した二発のG弾の影響に  
よって、今や草木一本生えぬ荒野となり果てた。

それでもここに残された桜並木、立ち枯れも同然な桜の木は武の、  
かつてのA-01の戦友達にとっての心の支えであった。

オルタネイティブ4の実働部隊として表に出る事が出来ず、戦死者  
として墓標を作ることすら許されぬA-01のメンバー達にとって、  
この桜は過酷な任務の中で命を落としていった英霊を弔う、ただ一つ  
の墓標でもあった。

伊隅みちる、柏木晴子、速瀬水月、涼宮遙、榊千鶴、彩峰慧、鎧衣  
美琴、珠瀬壬姫、御剣冥夜、そして……鑑純夏。

その遺体も、名も残さずに人類へ勝利をもたらす為の鎧となって文  
字通り桜花の如く散って行った仲間達……。その魂が眠る墓標が、この  
もはや花を咲かすこともない桜の木なのである。

無論此処は武の心の中、本物ではないし何よりまだ彼女達は死んで  
いない。何より本物ならばすぐ近くに横浜基地があるはずだという  
のに、この世界にはそれが無い。

それでもその桜並木、眼下の荒涼とした光景は、武の脳裏に焼きつ  
いたあの光景に限りなく良く似ていた。

「にしても……、この枯れた桜まで再現しなくてもいいだろうに  
……」

『それは君の心次第だ。君の心次第でこの桜は花をつけ、満開の花  
を咲かすだろう。この世界は君の心が描いた世界、君の心次第で如何  
様にも様変わりしていく』

「フーン……、ならハイヴを一個ずつ潰していけば、そのうち花は咲  
くのかね?」

『さて、それはどうかな。もしかしたら一個潰すたびに一つの木が  
花をつけるかもしれないし、カシユガルにあるというオリジナルハイ  
ヴとやらを破壊しなければ咲かないかもしれない……。なんにせよ、君

次第だ』

「……そっか」

ガメラの言葉にそっけなく答えながら武は頭を上げて頭上に広がる空を見上げる。

何処までも広がる青空には、まるで綿飴のような白い雲があちこちに浮かんでいる。雲は空を流れて何所へともなく自由に流れ、消えていく……。

そんな空をボーッと眺めていた武の心に、ふと一つの疑問がわいた。

「……なあ、ガメラ」

『どうした？武』

「人間ってさ……、死んだらどうなるのかな……」

武の口にした言葉、それはこの世の人間ならば誰も答えられぬであろう事、問われれば誰もが口を閉ざすであろう疑問……。

死んだ人間は一体どうなるのか……

多くの哲学者、宗教家はその答えを得ようと挑み、悩み、断念したのであろう疑問を口にした武は、そのままポツリポツリと言葉を続ける。

「……前のループでさ、大尉と中尉が最後に言っていたんだ……。自分達は桜の木の下に居るって……。委員長も、彩峰も、たまも、美琴も、遺書にそんなことを書いていた……」

……そんなはずないんだよな、皆の身体はBETAとの戦いで欠片も残っていないし、もし幽霊なんてのが居たとしても俺には見えないし……。ああ、でもただ一度、一度だけ夢に出てきたっけ……。まりもちゃんも大尉も、居なくなつた人達が皆元気そうな姿で……」

そう、それはあの時、BETAの横浜基地襲撃後に武が見た夢……。そこには彼女達が、死んでいった戦友が、恩師が居た。戦いの中で失ってきた、大切な人達が笑顔で立っていた……。

彼女達は笑顔で、「白銀はもう大丈夫だ」と言っていた。もう自分が居なくても大丈夫だと……。そして、最後に自分に激励を送り、その瞬間に目が覚めた。

あれはただの夢、己の心が生み出した幻想にすぎない……。そう思っ  
てしまえばそれまでだった。赤の他人に話せばそう言われるに違  
ないだろう。だが、もしかしたら、もしかしたら本当に死んだ彼女達  
が己を激励するために……。そんな予感が武の中にあっただのだ。

武の問いを聞いたガメラは頭を僅かに空に向けて、グルル……。と低  
いうなり声を上げる。

『フム、それについては少々話は長くなるが……。武、君はマナとは  
どのようなものか知っているか？』

「……マナ？そりゃあこの世界の『俺』を助けるときに聞いたことと元  
の世界で見た映画の知識だけけど……。地球の生命力みたいなもの  
で、お前のエネルギー、だろ？」

『……まあそうだな。そして既に言ってると思うがマナとは私だけ  
が持つものではない。この星に生きとし生けるもの、全てが等しくそ  
の身にマナを宿している。それは人も例外ではない』

ポカンとした顔でこちらを見上げる武に向かって、ガメラはゆっく  
りと語りだす。

マナとは地球が宿すエネルギーであると同時に、ありとあらゆる生  
命の源でもある。この世のあらゆる生物はその身にマナを宿してこ  
の世に産まれ、生き、死ぬ……。生物の死と共にマナは母なる大地へと  
還り、次なる生命の源となる……。ヒトもまた例外ではなく、この生  
命の循環の中にある、とオリジナルガメラは語る。

『人、というより生きとし生けるものは全て、その身が滅び、死を迎  
えるとその命はマナとなり、地球へと還っていく……。その後大地へと  
還ったマナは新たに誕生する生命の源となることもあれば、大地、空  
とこの世を偏在することもある。』

なれば彼女達の死したのちも桜の木の下で君達を見守る、というの  
も間違いではないだろう。彼女達のマナ、人間が言うところの魂は確  
かにこの世に在り、桜の木、あるいは君達のすぐ傍で、君達の戦いを  
見守り続けて居たのだろうから……。』

「……そうか……」

オリジナルガメラの話聞きながら武は、どこか遠くを見るような

目で青空を見上げる。

マナという概念は、あくまでガメラが存在した世界に存在したものの、この世界にも存在するかどうかは分からない。故に死んだ人間が死後何処に行くかも武には知りようがない。

魂とやらがあるのなら何処にも行かず消滅するのもかもしれないし、ひよつとしたら天国、あるいは地獄に行くのかもしれない。

故に彼女達が死後、自分達の事を見守っていてくれたのかどうかも分からない。何より今自分が居るのはあの時よりも過去の時代、己の恩師や戦友達は誰一人として死んではいない以上はつきり言うてどうでもいいことだろう。

……だが、それでも……。

「……あの時、桜花作戦での勝利を、見届けてくれていたのかな……」

そう考えずにはいられない。そしてもしも見届けてくれたのなら、多くの仲間達を犠牲として生き残ってしまった自分を、どのように見て、どのように評しているのか…。

「……存外、あの世で怒り狂ってたかもな……。部下を、仲間を死なせやがって、なんて……。…同じ場所に居る委員長と彩峰の親父さんによ、下手すりゃ呪い殺されそうだよな…」

『そんなことは、無いと思うが……。君は、君達はよくやったと…』  
「……いいさ、俺は英雄なんて柄じゃないし。それに……罵られて当然のこと、したんだからな……」

『……………』

自嘲するかのように笑う武を、オリジナルガメラは黙って見下ろしている。

彼は知っている、目の前の青年がかつて人類を勝利へと導いたことを。

その結果として多くの命を救い、代償として多くの命が失われたことを。

そしてその失われた命の中に、青年が愛し、守りたかった者達が含まれていることも…。

武と同化し、武の記憶を垣間見た守護神は、彼の味わった苦惱、絶望、悲嘆を残らず知っている。そして、彼の心に残された深い、深い傷跡も……。

と、突然荒野と桜並木がまるで蜃気楼か霧が晴れるかのように揺らぎ、消え去っていく。

それは現実世界の己の傷が完全に癒えた証、己が目覚め、再び戦場に立つ時が来たという予兆であった。

その予兆に武もオリジナルガメラも特に驚いた様子もない。見ると二人の身体も徐々に薄くなりつつあった。

『……傷も癒えた。そろそろ目覚めるときだ、武……』

「ああ、そうみたいだな。…皆への償いは、BETAとハイヴを潰して晴らす……!」

武の力強い返答と共に、深層意識の風景は真っ白に塗りつぶされて消えうせた……。

光届かぬ海底、その砂地に横たわるガメラの巨体。眠りについて死んだように動かずにいた巨体が突如、僅かに振動を起こす。

漆黒のキャンバスを悠々と泳ぎまわっていた深海魚達は突然の振動にビクツと一瞬動きを止め、すぐさま散り散りになってその場から逃げ去っていく。

そして、周囲に漂っていた蛍火の如き光の点滅が消え、真にその場が漆黒の世界へと染め上げられた瞬間、閉じられていたガメラの双眸がゆっくりと開かれ、辺りを見回すかのように眼球を動かしながら腹這いに寝そべっていた巨体を太い四肢を立てて起き上らせる。

傷を癒し、体力を完全に回復させた守護神は漆黒の帳で覆われた周囲を一度見回すと両手両足を砂地に叩きつけて身体を浮かせ、そのまま両手両足を掻きながら水面に向かって泳ぎ始めた。

80メートルの巨体が動き、その巨体を支える腕と足がやたらめつたらに振り回されるたびに海流が乱れて海水が渦を巻く。だがガメラは意に介さず両腕で水を掻き分けて海面に向かって上昇していく。最初は日の光も届かず辺り一面闇に包まれていた海底であったが、上

昇していくにつれて段々と頭上から淡く、微かながら光が届き始める。

500メートル、400メートル、300メートルと海面へと段々と上昇していくガメラ。そして、海面まであと100メートルという地点まで到達した瞬間、後ろ脚を甲羅へと引き込み、ジェットを噴射して一気に海面へと上昇する。それからは一瞬、高出力のジェットによって1秒も経たないうちに一気に海面を突破して海上に飛び出した。ガメラは飛び出した勢いそのまま空高く上昇し、ついには上空300メートルにまで到達すると、今度は頭部と両腕を甲羅に引き込んで両腕の穴からジェットを噴き出しながら高速で回転し始める。

やがて空飛ぶ円盤のようなシルエットとなったガメラはそのまま一直線に空を漂う雲を切り裂きながら一直線に飛翔する。

：向かうは朝鮮半島、通称甲20号標のこと、H20鉄原ハイヴ…。

横浜国連軍暫定基地SIDE

「日本海沖でアンノウン出現!!両腕両脚部からジェットらしきものを噴射して飛行中!!」

横浜、佐渡島両ハイヴを陥落させた後に日本海に沈んでいたガメラの出現、突如送られたその知らせに横浜暫定基地は騒然となった。

海底に没してから丸一日姿を現さなかった亀に似た巨大怪獣の出現に、モニタールームではスタッフが慌ただしく走り回っている。正面のモニターには監視衛星から送られた高速回転する空飛ぶ円盤、日本海から姿を現したガメラの姿が映されている。

モニターングを担当するオペレーターの切羽詰まった声に、定位置でモニターを眺めていた夕呼は少し不満そうに眉を寄せる。

「アンノウンじゃないわよ、今のあの怪獣の名前はガメラよガ・メラ!そういう名前にするって昨日言ったばかりでしょうが」

「す、すみません……。……ガメラは西北西に進路をとって飛行しています!このままいけば………」

「……鉄原に到達する、か……」

オペレーターの言葉を引き継ぐように夕呼の隣に立つラダビノツド司令はポツリと眩き、モニターに映されているガメラに喜ぶべきか警戒すべきか分からず複雑な表情を浮かべながら眺めている。

一方の夕呼はまるで映画を観賞する子供のような何とも楽しげな表情でモニターを眺めている。ガメラの再出現に関しても予想通りと言わんばかりで特に驚いた様子はない。

「……香月博士、どうやらアンノウンは……ガメラですよ司令」……が、ガメラは博士の予想通り再出現したが、やはり奴の目的はハイヴの殲滅……」

「でしようね。鉄原の次はブラゴエスチエンスクか、あるいは重慶か……まだ行先は分かりませんが、ハイヴの目的はBETAとハイヴの殲滅……、それに間違いはないでしょうね」

「ではやはり奴は人類の敵ではない……のか……?」

「そこまではまだ何とも……。単に後回しにしているのか人類は眼中にないのか……、とにかく今のところは人類に危険はない、としか言いようがありませんね」

夕呼は肩を竦めながらそう返事をする。先日の横浜ハイヴからの生存者二人との尋問で、白銀武と鑑純夏はガメラは人類の敵ではなく味方であると言っていた。確かにガメラは人類に攻撃の意思を向けないだけではなくわざわざBETAを殲滅したのちに横浜ハイヴから生存者二人を救出している。夕呼もガメラはどちらかといえば人類の味方寄りであろうと内心では考えている。……断定するには資料が少なすぎるが。

「……それにしても香月博士、その、正式に決定した今言うのもあれなんだがな、ガメラという名前なのだが……」

「あら、生存者の一人が見つけた名前なのですからけれど、ご不満ですか？ 私は呼びやすいから気に入っているのですけれど?」

夕呼は武と純夏への尋問ののち、アンノウンと仮称されていた巨大怪獣を正式にガメラと名付ける事を基地中に伝達した。それに対する横浜基地所属の職員及び衛士達の反応は賛否両論であった。少々



安直過ぎないか、という意見から呼びやすい、あるいはしつくりくるという意見まで様々であった。

とはいえオルタネイティブ4最高責任者である香月夕呼の決定であるため結局巨大怪獣の名称はガメラで決定された。それでもまだ日が浅いため、未だにガメラをアンノウンと呼ぶ人間も多いが…。ラダビノツド司令もまたその一人である。

「いや…不満という訳ではないが…その、なんだ、カメラっぽくないかね？その名前は…」

「だからガメラ、なんじゃないですか？そもそも名前をつけたのは私ではなくて生存者の白銀武ですので私に言われても困りますわ？」

「……まあ、そうだな、うん。分かった、もう何も言わん」

ニヤニヤとさながらチエシヤ猫のような笑顔を浮かべる夕呼にラダビノツド司令は疲れたように溜息を吐きながらモニターに向き直る。元より名前云々よりもあの怪獣が人類の敵となるか否かを見極めることこそが彼にとっては重要なのだ。もうすでにあの怪獣の存在は日本帝国だけでなくアメリカ、ソ連、欧州連合にも知れ渡っていることだろう。ハイヴを破壊する未知の巨大生物に対していかなる手段を講じてくるのか……。静観か、それとも排除に動くか……。未だに読めない。

ガメラ自身に關しても現段階で不明な点が多すぎる。あれが一体どこから来たのか、いかなる生物なのか、否、それ以前にあれば地球の生命体なのか…等々、国連軍内部でもあれこれと意見が噴出している。

そもそもガメラそのものが両手両足からジェットを噴き出して飛行し、口から火球を吐く巨大な亀という本来地球に存在する生命体としてはあり得ない生体構造をしているのだ。地球外生命体であると疑われても無理のない話である。

今のところ手がかりはガメラの背中から発掘されたあの石板と勾玉しかないのだから。

「…そうそう香月博士、例の碑文と勾玉の資料だが、どうにか碑文のスケッチと写真、勾玉に關しては二つ提供して貰えた。既にピアティ

フ中尉に渡して博士の私室に届けてある」

「あら、ありがとうございますございます司令。それでは「コレ」が終わり次第すぐにでも戻らせていただきますわ」

「コレ…？コレとは一体……」

ラダビノツド司令が夕呼に問い返そうとした時……。

「ガメラ、鉄原ハイヴ上空に到達！……光線属種からのレーザー照射を浴びながらハイヴめがけて降下中!!」

オペレーターの叫び声にラダビノツド司令は弾かれるようにモニターへと向き直る。モニターに映し出されていたのは無数のレーザー照射を浴びながら、地面に向けて降下しているガメラの姿であった。ただの一撃で戦術機を蒸発させるレーザーを文字通り数え切れないほどその体軀に照射されているにもかかわらず、ガメラは全く意に介した様子はない。むしろ逆にレーザー目掛けて突進するかのごとく脚部から噴き出すジェットの流れが増していく。

さらにガメラは急降下しながら地上めがけて火球を6発連続で発射する。レーザーの弾幕をすり抜け、雲を割って地上へ、地上に展開するBETAに向かって落ちていく火球。何者の妨害もなく地上へと落下、着弾した瞬間に次々と爆炎が噴き上がる。灼熱の炎が地上を覆い尽くしていくさまに、ガメラはまるで歓喜の雄叫びを上げるかのごとく咆哮を上げた。

その映像に茫然とする一同の中、ガメラと同じく歓喜の笑みを浮かべる夕呼。

それはまるで極上の喜劇か映画を見たかのような、否、たとえそうであっても彼女は此処までの歓喜は覚えまい……。それほどまでに輝かしい笑顔を彼女は浮かべていた。

「……始まった♪フフ、やっぱりこれは最後まで見届けないとねえ……。私のため、人類のために頑張って頂戴ね、最後の希望♪さん♪」  
ついに地上へと降り立ったガメラの映像を眺めながら、夕呼はその異名通りまるで魔女の如き笑顔で含み笑いをするのであった。

ガメラSIDE

脚部のジェット噴射を止め、脚を引き出しながらガメラは地面へと降り立った。

両足が大地へと着地した瞬間、地上のむき出しとなった岩盤は轟音と共に碎き割られ、地上から巻き上がった膨大な砂煙が辺り一面へと巻き上がる。

『グルオオオオオオオアアアアアアアアアオオオオオオンンンンンンン!!!』

その砂煙を引き裂くかのように裂帛の咆哮を猛らせるガメラ。咆哮と共に生じた音圧と烈風によって砂煙は吹き飛ばされると、ガメラの降り立った地上の姿が明らかとなる。

そこは佐渡島と同じ、雑草一つ生えぬ不毛の大地。遙か彼方には金属のような輝きを放つ幾何学的な形状の建造物が一つのみ、それを除いて地上には起伏一つ見当たらない。

そして、その起伏一つない地上には、この星のモノではない異形の実生命体が無数に跋扈している。

まるで異星の如き光景、しかしここは紛れもなく地球であった。朝鮮半島中部の鉄原郡、それが今や異形の生命体、BETAの巣であるハイヴが建設され生物が一匹たりとも存在できぬ世界となり果てたその場所の名前であった。

その鉄原の荒涼とした大地の、所々で火の手が上がっている。炎はその場に居たBETAを無差別に焼き尽くし、その悉くを炭へと変えていく。

ガメラが急降下中に発射した六発のプラズマ火球、碌に狙いもつけずに発射したがゆえに相当数撃ちもらしたBETAも存在している。そしてそのBETAの軍勢は、突然の襲撃者であるガメラ目掛けて一斉に突撃を開始する。

ガメラは迫りくるBETAの軍勢を、そして辺りに広がる不毛の荒野へと視線を巡らせる。

『……いつ見ても嫌な光景だ。命の息吹を欠片も感じない。早く奴らをこの地上から駆逐しなくてはならんな……』

『ガメラ』の脳内でオリジナルガメラが痛ましげに唸り声を上げる。

「BETAが通り過ぎた地には、文字通り草木一本残らない。ましてハイヴが建設された地では、数十キロにわたって植生は全滅してしまう。無論そんな地では新たな命は芽吹くことは無く、ただ寒々しい風の吹きわたる荒野と化してしまう。」

地上の生命を根こそぎ狩りつくし、命の芽吹く土壌すらも死の大地へと変える……、地球の守護者たるガメラにとってこれらのBETAの蛮行は決して許容できるものではなく、許しがたいものでしかないのだ。

『……落ちつけよガメラ、俺だって腹は立っている。だけども、たった一つだけ、一つだけだけどいいことがあるじゃないかよ……』

一方悲憤するオリジナルガメラに対してガメラの主人格たる『シロガネタケル』は落ち着いている様子であり、オリジナルガメラを宥める声も何所か落ち着いている。だがそれに反してガメラの表情は、まるで極上の獲物を見つけた肉食獣か人を喰らおうとする悪鬼か何かのような喜びに満ちた笑みを浮かべている。万が一にも心臓の弱い人間がその顔を見ようものならその巨体から放たれる迫力と共に即心停止を起こすであろう恐ろしい笑みを浮かべているのだ。

『……いいことだと、君は一体何を……』

『だってそうじゃないか。こんなただっ広い荒野なら、人っ子ひとりいない場所なら……』

ガメラの口か徐々にゆっくりと開かれる。その口内には溢れんばかりの業火がほとぼしり、周囲の酸素を燃料としながら徐々に徐々にその勢いを増していつている。

……そして、BETAとの距離が後数百メートルにまで狭まった、その瞬間……!!

『誰に気を使うことなく、誰も巻き込むことなく、思いっきりBETA共をぶち殺せるじゃないか!!』

怒りの轟咆と共に、守護神の憤怒が解き放たれたー!!

チャージされたプラズマ火球、ハイ・プラズマが轟音と共にBETAの群れに着弾、と同時に大爆発を起こし、辺りへと灼熱の炎を撒き散らす。

着弾地点はまるで隕石でも落ちたかのように地面がえぐり取られ、その場に存在していたであろうBETAの痕跡など欠片も残されてはいない。その余波を浴びたBETAも一匹残らず炭化しており、無事なものなど何一つとして存在していない。

寒々しい荒涼とした大地は一瞬で生きとし生けるものを等しく焼き殺す焦熱地獄へと変貌を遂げる。その地獄にただ一つ立つ巨影、さながら地獄の鬼の如くはたまた悪鬼を踏みつぶす明王の如く背に炎を従えて屹立するガメラ。

その眼光ははるか先に建つ鉄原ハイヴモニュメントを射抜くかのように睨みつけている。

既に地上に出現しているBETAは一掃できた、が、未だにハイヴ内部には20万を越える数のBETAが存在している。それら全てを排除してハイヴ最奥の反応炉を破壊しなければハイヴを攻略できないのだ。

既にハイヴからは大型小型入り混じって何千何万ものBETAが溢れ出して業火に覆われた大地へと展開し始めている。

無論灼熱の炎に焙られて流石のBETAも無事でいられるはずもなく、ある個体は脚部を焼かれ、ある個体は腹部を焙られ火傷を負い、中には全身火達磨となつて焼死するBETAすらいる始末である。しかしそれでもBETAは止まらない。幾体の同胞が焼け死のうとも、いかなる傷を負おうとも気にも留めた様子すらもなくガメラめがけて突き進む。

目の前の敵を屠るために――。

己らの害悪たる「災害」を消し去るために――。

ガメラ目掛けて無数の閃光が突き刺さる。光線属種のレーザー照射が開始されたのだ。

光線級、そしてさらに高出力の重光線級のレーザーの一斉照射……。おおよそ地球で起きる「災害への対処」として最も効果的と判断されたBETA最大の武器、だが……。

『グルルルルルルル……』

レーザーを照射されながら、ガメラは立っていた。やせ我慢では決

してない。戦術機どころか戦艦すらも一撃で蒸発させるであろう重光線級のレーザーすらも、ガメラには決定打どころか火傷一つ負わせることすらできないのだ。

レーザーによる援護を受けながら、進撃するBETAの群れ。大地を覆う炎に焼かれ、幾体ものBETAが犠牲となるものの、それでもどうにかガメラの前へと到達する。…が。

グシャツ。

次の瞬間、押し花のように紫色の染みと化した。

近づくたびに踏みつぶされ、尾で薙ぎ払われ、小型、中型のBETAは抵抗することすらできずに塵殺される。突撃級のダイヤモンドより硬い甲殻も、要撃級の両腕も全く役に立たずにゴミのように潰されていく…。残されるのは後方で被害を免れた光線属種と、その巨体故に炎の被害が少なかった要塞級のみである。

無論、ガメラがこれらを見逃すはずもない。

『グルオオオオオオオオアアアアアアアアアア!!』

咆哮と共に発射されるプラズマ火球、合計三発。それが生き残った要塞級、光線属種の集団へと激突、と同時に轟音を響かせて大爆発を引き起こす。

爆発、炎上、それに巻き込まれて碎け、焼き尽くされるBETAの群れ。よしんば生き延びたとしても今度はガメラによって踏まれ、潰され、引き裂かれ、噛み砕かれるという末路が待っていた……。

再び無音の静寂に包まれる焦土、そして燃え盛る大地をまるで何事もなかったかのようにモニUMENTに向けて進撃するガメラ。だが前進を再開したガメラの前方に再度ハイヴからBETAの大軍勢が出現し、その進撃を阻もうと突撃を敢行する…。

だが、ガメラの前進は止まらない。前に立ちはだかる虫けらを踏みつぶし、焼き払い、全滅させながら一步一步ハイヴへと接近していく。ガメラの猛攻、その圧倒的なまでの火力の前にBETAの群れは徐々にその数を減らしていく。いかにBETAの根城であるハイヴといえども収容できるBETAの数には限りがある。この調子ではいずれハイヴ内のBETAは枯渇し、心臓部である反応炉を守るモノは何

一つ無くなるであろう。

それでもBETAは突撃を止めない。ただ目の前の“障害”へ向けて最後の一兵となったとしても突撃し続ける。それ以外に無い。それ以外の戦術をとることが、今の“BETAにはできない。他に戦術らしいことと言えればガメラの足元から奇襲を仕掛ける程度のもの。

無論人類との戦いではそれで充分であった。事実BETA大戦初期からBETAはその圧倒的物量と光線属種による制空権制圧にモノを言わせたごり押しで幾度も人類の反撃を退け、圧殺し、蹂躪している。

未だG弾も凄乃皇も存在しない人類相手ならば、文字通りこの戦術ともとれぬ物量作戦のみで充分であった。…そう、人類が相手だったならば…。

『グルオオオオオオアアアアアアアアオオオオオオンンンンンン!!!』

地球の憤怒そのもの、荒ぶる守護神の前には幾千幾万のBETAの群れも、もはや蟻の群れも同然だった。ガメラを敵に回した時点で、彼らの運命は既に決定されたも同然だったのだ。

1998年12月2日 H20 鉄原ハイヴ、陥落

その翌日12月3日 H19 ブラゴエスチェンスクハイヴ、陥落

ブラゴエスチェンスクハイヴ陥落後、ガメラは樺太近海の海底へ潜

水、そのまま消息を絶った。

## 第12話 探索

ガメラによる鉄原ハイヴ殲滅、その一部始終をモニター越しで見せつけられたラダビノッド司令及びモニタールームのスタッフ一同は誰一人として口を開けずにいる。

改めて見せつけられる圧倒的なまでの暴力、そして破壊。それによって蹂躪されるBETAの軍勢…。横浜、佐渡島で既に目にしてきた光景ではあったものの、それでもあの圧倒的物量が瞬く間に踏みつぶされていく様には爽快感よりも衝撃を受けざるを得ない。

一方同じくガメラによるBETA蹂躪劇を観賞していた副司令、香月夕呼はなんとも清々しげな、まるで名作のオペラか映画でも見終わったかのようなご満悦な笑みを浮かべている。

「んっんっ♪やっぱり頭がすつきりするわねっ♪あの憎たらしいBETAが次々ぶっ潰されていくのを見るのってもう最高ねっ♪どうせならワインと摘みでも欲しかったわっ…、んっそこは残念ねえ…」  
「っ、香月副司令…。これは映画やオペラではないのだが…。頼むからもう少し真面目にしてくれないか…？」

愉快そうに鼻歌を歌いながら炎上する鉄原ハイヴを見物する夕呼に、ラダビノッド司令は顔を引きつらせながら彼女を嗜める。こちらははいたって真面目に仕事をしているというのにかに副司令とはいえ、いや副司令という責任ある立場だからこそただ一人映画か何かを観賞しているかのような姿でいるのは控えてほしいと彼女に訴えるも、夕呼はラダビノッド司令の言葉を特に気にした様子もなくいたってご機嫌な微笑を浮かべている。

「まあまあ司令、そんなに気を張らなくてもよろしいじゃありませんか？こちらは高みの見物で、何よりにつきBETAが虐殺されてハイヴが殲滅される一部始終を見れる…、最高じゃありません？」

「むう…、ま、まあ言いたいことは分かるが…、やはり軍の規律というものが、な…」

悪びれた様子もなくニコニコ笑いながらそう返事を返してくる夕呼にラダビノッド司令も口ごもってしまふ。元より彼女が軍の規律



やら規則やらを気にするような殊勝な正確でないことは彼自身よく分かっており、それに何より彼自身、目の前の光景に興奮と歓喜を少なからず覚えているのは確かであった。

彼の故郷であるインドは、オリジナルハイヴからヒマラヤを越えて南進してきたBETAによって蹂躪された揚句、H13ポパールハイヴを建設されて完全にBETAの支配下に治められてしまっている。生き残ったインドの同胞達は難民となって未だにBETAの支配の及んでいない地へと逃げのび、あるいはラダビノツド司令のように他国の軍へと志願して入隊している者もいる。

彼らの願いは二つ。BETAの駆逐による祖国インドへの帰還と祖国の復興……。今の今まで夢物語であると半ば諦めかけていた。

だが目の前の映像、BETAの大軍を薙ぎ払い、鉄原ハイヴを陥落させていくガメラの雄姿を見ているうちに、かの存在ならあるいは：という希望が心の中で芽生えてくる。

もしもガメラが人類の敵でないのなら、人類の味方となりうる存在だとしたら、この地球からBETAを根絶して自分達の故国を、インドをBETAから解放してくれるのではないだろうか……。そんな希望すらも抱いてしまう。

例の横浜ハイヴから救出された少年が呟いていた言葉『最後の希望』……。もしかしたらそれは事実なのかもしれない……。かの存在こそ人類の、この星の最後に残された希望そのものなのかも……。そんなことを燃え上がる鉄原ハイヴの映像に釘付けになりながら考えるラダビノツド司令。とはいえまだ出現してから日が浅く、人類の味方であると即決するのは時期尚早ではあるが……。

「……さて、それでは私も研究室に戻ることにいたしますわ。何か変わったことがございましたら何時でも呼んでください、司令♪」

そんな上司の内心を知ってか知らずか夕呼はラダビノツド司令にそう告げると彼の横を通り過ぎてそのままモニタールームの外へと出ていく。

心なしか研究室へ向かう足取りは軽い。頭も何時になくスッキリして気分が良い。歌でも一つ歌いたくなる気分だ。

今日また一つハイヴが破壊された。BETA大戦史上でもこんな短期間でハイヴが三つ陥落するのは初めての事だ。そしてガメラのBETAとハイヴの殲滅戦はこれからも続くだろう。その過程で大陸のハイヴが潰されていけば、それだけBETAの侵攻が妨げられ、日本帝国の復興および軍備の再編成のための時間が稼げる事となる。無論自分の研究の時間も然り、ではあるが…。

「…ま、やりすぎて全部つぶされたらオルタネイティヴ計画そのものが意味無くなっちゃうんだけど…。まあそれはそれでめでたしめでたしって事で…」

元より香月夕呼にとってオルタネイティヴ4など単なる過程、手段にすぎない。本来の目的は地球上からのBETAの駆逐。その為にはBETAの生態、及びハイヴの情報が必要であったために00ユニット開発のためにオルタネイティヴ4を指揮しているにすぎない。この地球上からガメラの手でBETAが消えてなくなるのならばもう00ユニットも、否、オルタネイティヴ計画そのものすらも不要となる。…むしろ理論上全世界のコンピュータのハッキングすらも可能な演算能力を持つ00ユニットなど新たな争いの元、ただのお荷物にすらもなりかねない。故に夕呼自身もし仮にBETA大戦が終わったならば00ユニットおよび量子電導脳本体及び開発データの廃棄すらも念頭に入れている。

…最も、未だに攻略されたハイヴは3つ。大陸にはまだ19ものハイヴが残されているためまだ人類の勝利を確信するには早すぎるだろう。ガメラが戦いの途中で斃れる事も念頭に入れながらこれから戦略を立てていく必要がある。無論、量子電導脳の研究も並行に進めながら、であるが…。

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか自分の研究室の前へとたどり着いていた。ドアを開けて室内へと入る夕呼。研究室は相変わらず乱雑に散らかっており研究机には大量の資料やプリント用紙が山のように積まれており、少しでも動かせば一気に崩れそう。そんな散らかった机の上に見覚えのない茶封筒と小包が置かれている。

「コレみたい、ね」

夕呼は後ろ手でドアを閉めるとツカツカと研究机に近づいてまず茶封筒の封を切り、中身を取り出した。

茶封筒の中に入っていたのは二つ、一つ目は幾何学模様の描かれた石板らしきものが撮影された写真、もう一つは写真と同じ石板らしきものの詳細なスケッチである。夕呼は写真とスケッチをまるで脳に覚えこませているかのように暫くジッと眺めると、今度は小包へと手を伸ばした。

包み紙を破き箱を開けると、箱の中には二つのかぎ状にまがった赤黒い石が入っている。石の片方は丸く膨らんでまるで糸でも通す為に作られたかのような穴があげられている。その形状は夕呼もよく知っている、勾玉そのものであった。

「これが、ねえ……。成程、見たところ一般的な勾玉に使われるメノウやコハクじやあ無いみたいだけど……」

夕呼は勾玉を一つ指で摘まむと、天井の蛍光灯に翳してみる。この勾玉は見たところ一般的な勾玉の材料であるメノウやヒスイとは全く違う材質のようである。とはいえ実際にどのような材質かは鑑定してみないと判断しようがないが。

「……コレについても何が書いてあるか私にはわからないし……。少なくとも現代で使われている文字じゃないわよねえ……。ならさっそく……」

写真とスケッチに描かれた石板の文字も夕呼にははつきりいつて専門外、此処はその手の専門家に頼もうかとデスク上の電話に手を伸ばそうとする。と、まるでそれを見計らったかのように突然電話からコール音が鳴りだした。

電話しようとした矢先に電話がかかってきたことに流石に夕呼も手を止めて眉を顰めるもそのまま放っておくわけにもいかずに受話器を持ち上げて耳に当てる。

「……はい、もしもし」

『香月博士、突然申し訳ありません。緊急のご用件があつて電話させていたいただいたのですが……』

電話をしてきたのは己の部下であるオペレーターのイリーナ・ピアティフ臨時中尉であった。己の部下の声を聞いた夕呼は先程までの不機嫌そうな表情を緩めながら軽く溜息を吐きだす。

「あら、どうしたのよ緊急の用件ってのは。大方横浜ハイヴ跡の調査の事でしようけど…」

現在ガメラによって殲滅されたH22横浜ハイヴの内部調査が国連軍によって行われている。国連軍によって編成された調査隊の中には香月夕呼直属のA-01部隊の隊員もまた参加している。

夕呼の予想ではハイヴの内部構造そのものはガメラによって破壊されずにほぼ無傷なのではないかと考えている。実際あの横浜ハイヴ殲滅戦においてガメラは佐渡島や鉄原の時のようにハイヴのモニメントを破壊して反応炉を破壊するという手法を取らず、わざわざ横抗からハイヴ内部へと侵入して生存者二人を救出している。もしも佐渡島や鉄原よろしく反応炉を破壊したら二人が軟禁されていた場所にもよるがあの規模の爆発だ。下手をしたら彼らも巻き込まれていた可能性もある。

だがガメラはそうしなかった。彼らを救出したのちも特に横浜ハイヴには手を出さずに佐渡島ハイヴの殲滅に向かっていた。仮に反応炉が無事だとしても何故反応炉破壊よりも生存者救出を優先したか、そして生存者を救出したのちも何故反応炉に手を出さなかったのか……。正直疑問だらけではあるものの仮にハイヴのBETAが殲滅されているのならば早急にハイヴの内部を調査し、反応炉の有無、そしてハイヴのより詳しい内部構造のデータを入手するべきのと考えから今回の調査隊が組まれた。

無論内部にはガメラが討ち漏らしたBETAも残っている可能性があるため調査隊は戦術機を乗りこなすベテラン衛士を主としているが。

現在暫定基地ではガメラの監視以外に調査隊の指揮も同時に行っており、恐らくイリーナの連絡とは調査隊に関する事なのだろうか、あるいは鉄原ハイヴを殲滅したガメラに何らかの動きでもあったのだろうと夕呼は予想しながらイリーナからの返事を待った。

『それも有りますがガメラの動向についてはです。……鉄原ハイヴを殲滅したハイヴが北へと進路をとって飛行を開始しました。このままいけばH19ブラゴエスチエンスクハイヴへ到達するとの予測が入り……』

「……へえ、そうなの」

が、受話器から聞こえたイリーナの言葉を聞いた瞬間、夕呼の顔に妖艶な、それでいて不気味な頬笑みが浮かんだ。本人からすれば嬉しさを精一杯表現した笑顔のつもりなのだろうが、第三者から見ればそれはまるで魔女を通り越して悪魔か妖怪変化の如く見えてしまうだろう。

恐ろしげな笑顔で笑う夕呼は、そのまま受話器の向こう側の部下へ向けて返事を返す。

「分かったわ、ちよつと野暮用すませてから直ぐモニタールームに戻るわよ。ああそうそうピアティフ、夕食とコーヒーの準備よろしく♪」

『は？、香月博士？夕食とコーヒーって……』

「だって今夜は徹夜になりそうじゃない？栄養とカフェインの補給は必須でしょ？フフっ、まさかまたハイヴが潰される様子を観れるなんて、今から年甲斐もなくワクワクしてきたわねえ♪」

『は、はあ……。まだガメラがブラゴエスチエンスクに向かうと決まったわけではないんですけれども……。ああそれから硫黄島駐屯地から送られたあの……』

「もう確認したわ。今から私の知り合いに調査依頼するつもりよ。それが終わってから直ぐそっち戻るからね。じゃ」

言うだけの事を言い終わった夕呼はそのまま受話器を一度置くと、一拍置いて持ち上げて、電話機に電話番号を入力する。電話番号入力後、数秒間受話器からコール音が響いてきたのちに電話が繋がった。

「……ああ草薙先生ですか？私です、夕呼ですよ香月夕呼。……覚えてくださって光栄ですわ。……ああ世間話じゃないんですよ、ちよつと先生に頼みたい事があって……」

## 国連軍横浜ハイヴ跡探索部隊SIDE

同じ頃、ガメラによってBETAを殲滅されてガラ空きとなった横浜ハイヴにて……。

「ヴァルキリー1よりヴァルキリー3、及びエインフェリアズ及びベルセルクスに伝達。これより我らは横浜ハイヴ内部に潜入し、その調査を行う。ハイヴ内部のBETAはガメラによって掃討されたものと思われるがまだ生き残りが内部で生存しているとも限らん。気を引き締めてかかるぞ！」

「ヴァルキリー3、了解」

「エインフェリア4、了解」

「エインフェリア5、了解しました」

「ベルセルク6、了解……」

「ベルセルク7、了解ツス。……けどなんか拍子抜けツスねえ……。ガメラにBETA皆殺しにされた後のハイヴの調査って、まるで火事場泥棒っぽい、みたいな？つーか戦術機出さなくても良くね？なんて考えちゃったり……」

ハイヴ内部への入り口に立ち並ぶのは6機の国連軍所属の戦術機、日本初の国産の第三世代機 “不知火”。

実戦配備されて未だに日の浅い最新鋭の戦術機を駆るのは横浜国連軍基地副司令、香月夕呼直属の特殊部隊、オルタネイティヴ計画第一戦術戦闘攻撃部隊、通称特殊任務部隊A-01の面々である。

彼ら彼女らはオルタネイティヴ4完遂のため、それに特化した作戦のみを遂行する専任即応の特殊部隊であり、元来国連軍が関与できない作戦であろうともそれがオルタネイティヴ4完遂に必要とあらば香月夕呼の持つ権威による超法規的措置によって派遣されるのだ。

今回の作戦は横浜基地主導であり、任務の内容はガメラによってBETAを殲滅されて空になったハイヴ内部の調査であるために全軍は派遣されずにA-01所属の各中隊から6人の隊員を選別して派遣している。最も、ガメラのハイヴ強襲から生き延びているBETAが残っている可能性もあるため、油断は禁物であるが。

「ベルセルク7、気を抜くな。先程も言ったが生き残りのBETAがハイヴ内部で生存している可能性も少くない。下手をすれば要塞級のような大物まで出る可能性もある。それにハイヴ内部は複雑に入り組んでいる。……迷子になっても助けてはやれんぞ？」

「ちよつ、伊隅隊長冷たつ！冷たすぎるツスよ！可愛い部下なんすからもう少し優しくしてくれたっていいじゃないスカ姉御!!」

「誰が姉御だ！それに貴様は私の部下ではなく火渡中隊長の部下だろうが！戦死ならともかく迷子になったとしても私の知ったことではない！なりたくなければ黙って私についてこい！良いな？」

「……りよ、了解ツス」

みちるは軽く溜息を吐きながらも一時的に己が率いる事となるメンバーを見回す。

計5人、その殆どが最近入ったばかりの新人だ。出撃の経歴は今のところ殆どない。精々横浜ハイヴから湧き出てくる間引き作業に従事した程度か…。

思えば自分もまた、こんな時期があつたものだ…、とみちるは昔を思い出すようにどこか遠くを見るような目つきをする。あの頃は自分もまだ未熟で、多くの同輩達に囲まれてそこそこ楽しくやっていたな、と…。

本来A―01は連隊規模を誇っていたものの、度重なる過酷な任務と横浜ハイヴのBETA間引き作戦によって数多くの隊員が殉職、現在では坂口昂星少佐率いる第三大隊、通称ヴァルハラ大隊指揮下の第七中隊、通称「デリング中隊」、第八中隊、通称「火渡狂戦士中隊（ベルセルクス）」、第九中隊、通称「伊隅戦乙女中隊（ヴァルキリーズ）」、そして元第二大隊指揮下の第六中隊、通称「防人不死兵中隊（エインフェリアズ）」が残るのみである。

かつてみちると同期であつた隊員達も、既に英霊となつて桜の木の下で眠っている。こうして中隊を率いる身分である自分もまた、そしてこの場に居る隊員達も、一体いついかなる事態で死ぬかも分からない。それがA―01というもの、否、戦術機を駆る衛士というものなのだ。

常在戦場、常に気を引き締めてかかるべし。それが衛士としての基本だ。

「……無駄話は終わりだ。行くぞ、時間は無駄にできないからな」  
そう言ってみちるは目の前に空いた巨大な空洞へと足を踏み出した。戦術機が2、30機は纏めて入れるであろうその巨大な穴は通称『門(ゲート)』と呼ばれ、横浜ハイヴ内部へと通じるトンネルであり、本来はBETAがハイヴと地上を行き来する際に用いられるものである。

横浜ハイヴの規模はフェイズ1から2の中間といったところ、地球上に存在するハイヴの中でも最も小さいし、そこまで構造も複雑ではないだろうが、それでも目の前の門を見れば内部が相当に広大であろう事はおうにも理解できる。

みちるは自身の乗機である不知火の跳躍ユニットを吹かし、門の内側へと侵入する。そのあとを追うかのように5機の不知火も門へと飛び込んだ。

門から侵入したハイヴの内部、それは予想通り、否、予想以上に広大な規模であった。

文字通り地面をくり抜いて掘りぬかれたその巨大な回廊は、体高15メートル以上はある戦術機がまるで小人か何かに見えるであろうほどの広さを誇り、このハイヴが兵士級から要塞級までの20万を越えるBETAを收容していたという事を否でも実感させられた。

この規模でもハイヴの中ではまだ最小の部類なのだから、地球上最大のハイヴであるカシユガルオリジナルハイヴとなったら一体どれほどの規模となるのやら……。この場にいる衛士達には想像することもできなかった。

気を取り直したみちるを含むA-01隊員はそのままトンネルの奥へ奥へと歩き始める。無論、薄暗い闇の中に潜んでいるかもしれないBETAに警戒をしながら……。

奥へ奥へと歩いて行くうちに入出口である門から降り注いでいた日光が段々と遠のいていく。そして同時に段々と周囲の闇が濃く



なっていく。侵入から約10分経過した頃にはもはや辺り一帯が完全に漆黒の帳に覆われていた。

戦術機には高性能な暗視機能が装備されているためにたとえ暗がりであったとしても行動に支障は出ない。元よりハイヴの中心部は奥へまっすぐ進めばいずれ到達するはずであるため迷いようがないのだが…。

みちるは前進しながらも油断なく辺りの暗がりへと視線を動かす。ここまでは順調に來れてはいるがここはハイヴ、いつ何時BETAが飛び出してくるか分かったものではない。

元よりカメラが殲滅したのはハイヴから外へと飛び出してきた個体のみ。まだ奥には、特にハイヴの心臓部にあたる反応炉にはまだ相当量のBETAが残っている可能性もあるのだ。

一応横浜ハイヴにはみちる達A-01以外にも国連軍の別部隊が潜入することとなっているが、彼らが潜入するのは別の門からだ。故に道中での援護はまず期待できない。己の身は己で守るしかないのだ。

周囲に目を配りながら慎重に前進するA-01隊員6名。何処までも続くかのような長い回廊を進んでいくと、突然ガラッと広大に開けた空間へと到着した。

「……、……は……」

突然先程の通路などよりも遥かに広い空間に出たことにヴァルキリー3は戸惑いを隠せない声を上げている。それは他のメンバーも同じであり遙か彼方に存在するであろう天井、端から端まで到底見渡すことが出来ない空間を見回している。

一方みちるはその巨大な空間を見回しながら、己達が今立つ場所がどこなのかを把握していた。

「…恐らく此処は広場(ホール)だな。地中を横に走る横抗同士を繋ぐ中継地点としての役割を備えている。フェイズ2以降のハイヴには良く見られる特徴だ」

「…っという事はもうすでに横浜ハイヴはフェイズ2に…!?!」

まだハイヴが建設されてそこまで間が空いていないというのに既

にフェイズ1から2へと規模が増している…、あまりにも早いハイヴの建設速度にA-01の隊員達は騒然となっている。だがみちるは冷静に広場全体へ視線を巡らせると、首を左右に振る。

「いや、そうではないだろう。もしもフェイズ2になっているのなら横坑は半径2 kmにまで達しているだろうしハイヴ内の構造もさらに複雑化しているはずだ。恐らくはまだ1と2の中間といったところだろう。フェイズ1より成長しているがまだフェイズ2とまではいかない規模…、といったところか」

「な、成程……」

上司である夕呼曰く、横浜ハイヴは未だにフェイズ2レベルには到達していないとのことであり、精々1と2の中間程度でしかないとのことだ。

その根拠としては、横浜ハイヴ周囲に空けられている門の数が大陸に存在するフェイズ2のハイヴの門よりも少ないこと、そして本来フェイズ2のハイヴが完成した時点で半径50 km以内の植生が全滅するのだが横浜ハイヴの場合絶滅しているのは半径20 km内であり、そこから外の植生は僅かではあるがまだ生きている。故にまだハイヴはフェイズ2までは言っていないのではないか、というのが司令部の考えであるらしい。

「話は以上だ。行くぞ」

みちるはすっぱりと会話を打ち切るとだだっ広い広場の向こう側、さらに奥へと続く穴へと向かっていく。隊長の後に続き、残る隊員達も彼女の後に続いて探索を再開した。

穴の先にはまた先程と同じ岩肌がむき出しとなった何所まで続くか分からないトンネルが続いている。A-01隊員は残存BETAが居ないか警戒しながら先へ先へと進んでいく。

此処までの進路は順調だ。要塞級どころか兵士級一匹にすらも出会っておらず、弾薬も一発たりとも消耗していない。当然戦術機にはダメージ一つなく整備を終えて出撃した時と同じ、傷一つない。

あまりにも楽な行軍、あまりにも順調に進む任務…、その事実にもちるは思わず苦笑してしまう。

A―01に配属されてから今日まで、己の人生はBETAとの戦いに次ぐ戦いといつても良かった。佐渡島防衛線、横浜防衛線、そして横浜ハイヴから次から次へと湧き出てくるBETAの間引き…。数え切れないほどBETAを殺し、幾人もの仲間を、戦友を見送る中で、いつの間にか中隊一つを任せられるようになってしまった。

部下達の命を背負い、己の指揮一つが部下の命を左右するという重圧、出撃するたびにみちるの双肩にそれらが重くのしかかってくる…。それでもやらなければならぬ…。この国を、人類を、何よりも愛する家族と愛する男を護りたいから…。

だが、今はそれが無い。BETAが存在しないから、あるいは部下が死ぬことがないからなのか、端からはそうは見えないかもしれないが、今のみちるには少なからず余裕があった。仮にもハイヴに潜入しているというのにこんな気持ちになるのは彼女自身からしても不思議ではあった。

「ガメラ、か…。」

みちるの脳裏に浮かぶのは横浜ハイヴに巣食うBETAを次々と薙ぎ払い、二人の生存者を救出したあの巨大な怪獣の姿、生存者の一人が「最後の希望」と呼んだあの存在の名前…。

彼女達が出撃する前、日本海から再びガメラが出現し、鉄原ハイヴを強襲したとのことだ。夕呼の言うとおり、あの怪獣は人類など眼中に無く、ただハイヴを叩き潰すことのみが目的のようである。

「…もしかしたら、アレは本当に人類の希望になる存在なのかもしれないな…。」

ポツリと呟いた一言、それはある種の確信があったのかもしれないし、あるいはそうであって欲しいという彼女なりの願いだったのかもしれない。そんなことを呟く自分に自嘲していると、地上にて指揮を執っているCPからの通信が入る。

『こちらCP、ヴァルキリー1現在の状況の説明を』

「こちらヴァルキリー1。現在敵との交戦もなく順調に進軍中。このままいけばさほど時間もかからずに中心部に到達するはずだ」

『了解しました。ですけど何だか拍子抜けですね。本当なら国連帝

国合同で攻めるはずのハイヴがこうも簡単に落ちてしまおうんですから』

向こう側で疲れたように溜息を吐くCP将校。恐らく彼女も己と同じ心境なのだろう。

何百何千もの死傷者を出す消耗戦を行ってBETAを間引くのがやつとで、ましてハイヴを攻略するとなれば確実に万を越える死者が出る事を覚悟していた。

だからこそまさかハイヴ深部まで無傷で侵入できる日がこようとは完全に予想していなかったのだろう。

そんなCP将校の心中を知ってみちるは面白そうにクスクスと笑い声を上げる。

「まあいいじゃないか。どっちにしる日本からハイヴが消えたことはめでたい事実だ。部下にも死人が出ずに済むしむしろガメラには感謝したいくらいだ。そうだろう?」

『……まあそうですねですが。ああそういういえばそのガメラについてなのですが、既に鉄原ハイヴを殲滅、次なる目標H19ブラゴエスチエンスクハイヴに向けて飛行中とのことですよ』

「ほう……速いな。ならこちらも急がなければならないな……。最深部に到達したら追って連絡する」

『了解しました、では』

通信が切られるとみちるは笑みを崩さずに未だに暗がりにも包まれて奥が見えない先へと視線を向けると、その場に居るA-01隊員達へと通信を繋げる。

「ヴァルキリーズ及びエインフェリアズ、ベルセルクス隊員諸君、先程CPより連絡が入った。鉄原が落ちたそうだ。勿論ガメラによって、な」

「!?!?!?!?!」

みちるの言葉に隊員達は驚きが隠せない様子であった。ガメラが日本海から鉄原に向け飛び立ったのは知っていた、恐らく鉄原ハイヴを殲滅するのだろうという事も分かつてはいた。だが、まさかこんなにも早く殲滅してしまうとは……。

隊員達の予想通りな反応にみちるは可笑しそうにクツクツと含み笑いを漏らした。

「奴は現在ブラゴエスチエンスクへ向かっているらしい。急ぐぞ、奴が次のハイヴを落とす前にこの調査をとつと片付けるぞ！」

「「……りよ、了解!!」」

「……おお!?ちよ、ちよつと待つツス!!置いていかないで欲しいツス!!」

先行するみちるの不知火を追いかけて四機、そして僅かに遅れてベルセルク7の不知火も先へと急ぐ。

だが、進めども進めどもくり抜かれた岩壁と先に広がる暗闇しか見えない。しかし、みちるは構わずに進む。この先を進んでいけばハイヴの中心部へと辿り着く…。そんな確信がみちるにはあったのだ。

そして広場から出発してから約30分後……。

「……ここか……」

突然トンネルが途切れ、目の前に巨大な、何処まで続くか分からない程の巨大な穴が広がっている。天井も吹き抜けとなっており、あまりの高さに確かに存在するはずの天井すらも見る事が出来ない。

直径100メートル以上はあるであろう底の見えない穴…。間違はなくここがハイヴの中心、反応炉が存在する主縦坑（メインシャフト）と見て間違いないだろう。

「ここ、ですか……」

「ああ。……CP、こちらヴァルキリー1、こちらヴァルキリー1。ハイヴ中心と思われる縦坑に到着した。調査の為に降下する」

『こちらCP、了解しました。ヴァルキリー1、注意して調査をしてください。まだ反応炉周囲には生存しているBETAが残っているかもしれません』

「了解した。此処まで来てヘマをするような醜態は見せられんな」

CPからの激励に苦笑いを浮かべながらみちるは背後の部下達へと振り向いた。

「これよりハイヴ深奥へと降下する。いいか、これからが正念場だ。

間違っても転落して地面に激突するようなヘマはするなよ!! そんなアホらしいことして死んでみろ!! 私が直々に首根っこ掴んで地獄から引きずり戻すからな!!」

「了解!!」

不知火6機は一斉に中央の縦坑に向かって飛び降りた。期待の腰部に取り付けられた跳躍ユニットを吹かして落下の速度を調整しながら穴の下へ下へと降下していく。

この時のために推進剤は殆ど使用せずに横坑を移動してきた。その為に跳躍ユニットを思う存分噴かすことが出来る。不知火6機は速度を上げてハイヴの底に向かって降下していく。

主縦坑は予想以上に深く、中々底が見えない。もうすでに落下から2、3分は経過しているというのに未だに反応炉どころか地面そのものが見えてこない。

「……想像以上に深いな……。本当にこれがフェイズ2じゃないのか……?」

予想以上の深度にみちるも舌打ちをする。過去のデータが正しければフェイズ1、あるいは2でも主縦坑はさほど深度は無く、戦術機の跳躍ユニットを使えば3、4分程度で地底に到達できるとのことだった。だがこの主縦坑は少なくとも落下から6分以上は経過しているのに未だに底は見えない。これはもはやフェイズ3、否、下手をすればフェイズ4にまで達している可能性もあり得る。

「だが……、外のモニュメントと横坑の規模は精々がフェイズ1・5程度……。何故主縦坑のみが……」

外観との差異にみちるは頭を悩ませる。そして、落下から10数分経過、ようやくハイヴの底、地面らしきものが見えてきた。

先程の広場とは比べ物にならないほど広大な地下空間。まるでどこぞのSF小説に出てくる地下王国か何かのようであった。そして、地底に広がる巨大空間の中央に存在するのは、所々青白く発光する巨大な岩のような物体……。

みちるは確信した。あれこそがハイヴの心臓部である反応炉……!! BETAにエネルギーを供給する装置であると……!!

「……反応炉を確認した!!総員、着陸用意!!周囲に残党のBETAが存在しないか用心しろ!!」

「「了解!!」」

跳躍ユニットで機体を浮かし、落下の衝撃そのものを緩和しながらゆつくりと地面に向けて降下する。機体の脚部が地面についた瞬間、その衝撃で機体が僅かに振動するものの、それ以外は特に問題もなく地面へと着陸することが出来た。残る隊員達の機体も無事に着陸できたようである。

「CP、こちらヴァルキリー1。主縦坑最深部大広間に到着。反応炉らしき物体を発見した。直ぐに映像を送る」

『こちらCP。了解しました。お疲れ様ですヴァルキリー1。早速ですが大広間内部の探索と調査をお願いしますか。もしかしたら生き残りのBETAが存在するかもしれません。発見次第排除を』

「了解した。……聞いての通りだ。早急に探索に入れ。休みに入りたい奴もいるだろうがBETAとの戦闘に比べれば格段に楽だろうから対して疲れてもいないだろう?」

「え……、いいじゃないツスカ少し休ませてもらっても……」そうかそうか休みたいか。ならば他が作業していたのにお前だけ休んでいたらと火渡大尉に伝えなくてはな?」……喜んで仕事させていただきませ、ハイ。元気一杯です、ハイ」

みちるににこやかな笑顔で恫喝されたベルセルク7は顔を引きつらせながらコクコクと頷いた。残る隊員達はそんな二人に呆れたような視線、あるいは引きつった表情で眺めながら黙って大広間へと散っていく。

大広間は反応炉を中心として相当な面積がある。反応炉も要塞級の数倍はあろうかという程の巨大さではあるモノの、それすらもちっぽけに見えてしまうほどの広大な面積を誇っている。

「……全く、これでは全て見て回るのも骨が折れそうだな……」

あと2、3人ほど追加してもらおうように要請すればよかったかな……などと考えてみちるは思わず苦笑する。反応炉の画像については既にCPに送り終わった。ならば次はもう少し接近して調べてみるか

……、とみちるは反応炉へと近づこうとした。が、次の瞬間……、

『た、大尉！伊隅大尉！』

突然エインフェリア4からの通信が入ってくる。網膜投射で映されたその顔は、驚愕のあまり啞然としているようであった。

「どうしたエインフェリア4、まさか残党のBETAが残っていたのか？」

『ち、違います!!そ、その、私はエインフェリア5と一緒に別エリアの調査をしていたのですが、そ、そこでとんでもないものを見つけて……!!』

「とんでもないモノ？一体何だそれは」

『と、とにかく見てください！画像送りますから！』

するとエインフェリア4の顔が消え、何所か大広間の別エリアらしき空間の画像が浮かび上がる。一見すると辺り一面奇妙な岩だらけ、このハイヴ内でも特に珍しい光景でもない場所に見えた。が……。

「……なんだ、この光っているのは」

良く見ると上方に何やら青白い光を放つ何かが複数存在している。まるで目の前の反応炉と良く似た光を放つそれが妙に気になったみちるは画像をさらに拡大させる。

拡大された青白い光、それはよくよく見れば地面から天井に向かって繋がっている細い糸、あるいは柱のような奇妙な物体であった。良く見ると一部分だけが太く膨らみ、その部分だけが淡い青の燐光を放っているようであった。

拡大してみたものの、これでも青く発光している部分の正体が全く分からない。みちるは発光部分の画像のみをさらに拡大して、その正体を確かめようとした。

「………!!?!!、これはっ!!」

が、拡大された画像を見た瞬間、みちるは驚愕のあまり目を見開いた。それほどまでに衝撃的だった。拡大された画像に映されたもの、エインフェリア4から送られた画像、その正体が……。

それはさながら試験管のような、あるいはガラスケースのような内部が透明な『容器』であった。内部に満たされた溶液の影響か、ある



いはそれ自体が光を放つ性質なのか、容器は青白く光を放っている。  
……そして、その青白い容器の内部に収納されていたものとは  
……。

「人間の、脳だと……!?!」

紛れもなく、見間違えようもない、『生きている』人間の脳髓だった  
のだ……。

## 第13話 朝食にて

日本帝国。幕末の頃から元来の日本とは別の歴史を歩んできたこの国には、帝国独自ともいえる階級、制度が数多く存在している。

まず首都であるが、これは大政奉還後の明治維新の後に東京への遷都は行われず、首都は1000年の歴史を誇る京都へと据え置かれたままとなっていた。が、BETAの日本襲来によって急遽首都機能を東京へと移転、京都陥落後は正式に東京が首都となされた。

次にこの国の元首であるが、元来の日本では天皇が日本の元首であり象徴とされるのに対し、こちらでは皇帝がそれとされている。とはいえ名前は違うものの皇帝の権限は天皇とそう大して変わりはない。そして皇帝に代わって執政を行う機関は帝国議会とその上に立つ上位執政機関である元枢府、そして元枢府の長である政威大將軍である。

政威大將軍とは皇帝から任命される国事全権総代の称号であり、大政奉還の後に元枢府を設置した有力武家、煌武院、斑鳩、斉御司、九條、崇宰の五大武家、通称五摂家の当主衆から任命されるのが伝統となっている。

元来は帝国議会をまとめる元枢府の長としての役割だけではなく、帝国軍の総司令官としての役割も兼任した文字通り日本の国事行為全てを司る最高権威であったのだが、1945年の第二次世界大戦での敗戦を機にその権限は大幅に制限、縮小され、さらに1998年の日本本土へのBETA来襲の折には殆ど名誉職、お飾りといっても過言ではない程の扱いとなっていた。

そして現在、BETAの襲撃によって1000年の都、帝都京都が陥落し、第一帝都東京へと遷都、それから間もなくBETAが佐渡島に続き横浜にもハイヴを建設、帝国はBETAの脅威が迫った東京を捨て、仙台へと首都機能の移転を開始。第二の帝都の陥落もまたそう遠い話ではない、そんな悲観的な意見が官民間わず囁かれていた。

そう、硫黄島から飛来したあの大怪獣、ガメラによって横浜ハイヴと佐渡島ハイヴを駆逐され、日本本土からBETAの脅威が去る、あ

の時までは……。

突如横浜に出現したガメラは、BETAの圧倒的な数の暴力にすら屈せず、逆にその巨体と口から吐き出す火球をもつて一瞬でBETAの大軍を殲滅、ハイヴ内に生存していた生存者二人を救出したのである。

しかもそのすぐ後に日本帝国に建設された第二のハイヴ、佐渡島ハイヴを強襲、BETA殲滅の後に反応炉を破壊し佐渡島ハイヴを陥落させ、日本帝国をBETAの脅威から解放したのだ。

BETA侵攻からあまりにも早すぎる帝国の解放……。幾千幾万もの同胞が、戦友が犠牲となり、英霊となってもなお陥落させることが叶わなかったハイヴが二つも、こうもあっさり陥落させられる……。日本帝国に住まう全ての臣民からすればまるで夢か幻でも見ているかのように到底信じられないような出来事である。

軍人、民間人、上と下の区別なく日本帝国の全ての国民は、己らと故国がBETAの脅威から救われたという実感すらも無く、今はただ突如として出現した新たな脅威とも帝国の救世主ともとれる怪獣、ガメラの雄々しくも恐ろしい姿に茫然とするしかなかった……。

#### 日本帝国第一首都、東京。

かつて江戸幕府がおかれ、当時世界一ともいわれるほどの人口を誇った都市。大政奉還により幕府の天下が終焉を迎え、明治となって東京と改められてからも、産業、工業の中心地として帝国を支え続けてきた。

此処こそが今やBETAに蹂躪され跡形も無くなった京都に代わる日本帝国の新たな首都であり、日本帝国を統べる政威大將軍の新たな御座所である。

まだ首都機能を移転して間もない新都の中央、東京ドームが軽く3、4は入るであろう広大な敷地内に、政威大將軍の座する新・帝都城は存在する。

まるで平安時代の貴族の邸宅のような、はたまた江戸時代に存在し



その焦熱の煉獄に仁王立ちし、天に向けて高らかな咆哮を上げる巨獣、ガメラの姿であった…。

此処はソ連と中国との国境近くに位置する都市、ブラゴエスチェンスク。そこに建立されたBETAの居城、甲19号目標ことH19ブラゴエスチェンスクハイヴ。

BETAによって大地を削られ、掘り進められた結果フェイズ3にまで巨大化した空からの侵略者たちの居城。その巨大さはつい数日前まで帝国国内に存在していた佐渡島、横浜両ハイヴとは比べ物にならない。

当然内部に収容されているBETAの量も桁違いであり、現状衰退しているとはいえ米国と並ぶ二大大国のひとつであるソ連でも単独では攻略不能、精々これ以上BETAの侵攻が進まぬようにハイヴから漏れ出てくるBETAを間引くのが関の山であった。

そのハイヴが燃えている。モニメントも、地表のBETAも、大地に存在するもの全てが区別なく燃え上がり、大地を紅蓮へと染め上げている…。

それを成した者こそ、かの亀の如き姿の怪獣、ガメラ…。その巨体が産み出すパワーと口から吐き出す火球をもって、立ちふさがるBETAを次々と薙ぎ払い、焼き尽くしていく…。それはまるで地獄の鬼か、悪魔の如き姿であった。

悠陽は手元のリモコンを操作して、モニターの電源を切ると、深く吐息を吐きだしながら椅子の背もたれに凭れかかる。

横浜、佐渡島の陥落から2日と経過せずに、H20鉄原ハイヴに続いてH19ブラゴエスチェンスクハイヴまでもがガメラの手によって陥落した。たった三日で4のハイヴが陥落…。それは今までの世界の常識では、人類の兵力では絶対にあり得ないと断言できる事であっただろう。

だがそれを今、現実はこの目で見た悠陽は認めざるを得なかった。全てが現実であり、事実であるという事を…。

無論かの怪獣への感謝もあった。ガメラが横浜ハイヴ殲滅後、横浜ハイヴで生き残っていた二人の生存者を救出したという事も既に

知っている。故にあの怪獣が恐らくは人類に敵対する存在ではないのではないか、という思いとたった二人とはいえ己の治める国の民を救い出してくれたことへの少なからぬ感謝の念も抱いている。

だがそれ以上に、それ以上に彼女の心にあつたのは己の無力さ、人類のあまりの弱さであつた。

カシユガルへの落下から一度たりともBETAの侵攻を止められず、BETAの拠点であるハイヴをただの一つも潰すことが出来ずにただ闇雲に犠牲を増やしている人類の弱さ、無力さ、そしてそんな人類が一致団結すべき危急存亡の時であるにもかかわらず、未だに互いの国の利益やら権益やらを巡って相争い、骨肉の争いを続ける人類の醜さ、愚かさを悠陽は目の前の蹂躪劇を見ながら嫌というほどに思い知っていたのだ。

「……本当に、度し難いものですね……。私達人類というものは……」

己が主君の自嘲するかのような口振りに、月詠中尉は諫めの言葉も何も言わず黙って彼女の話を聞いている。肯定も否定も無い。あるいは彼女自身も主君と同じ思いなのか……。

己につき従ってくれている臣下にいらぬ心配をかけてしまったと感じたのか悠陽は一度月詠中尉へと振り向くと「心配ありません……。大丈夫ですよ」と弱弱しく笑みを見せる。

「……月詠、横浜ハイヴの二人の生存者に関する情報については……」  
唐突に月詠中尉に話題を振る悠陽。ガメラによって救出された二人の生存者、現在は国連軍横浜暫定基地に保護されているその二人に関して、悠陽は月詠中尉に頼んで内密に調査をしてもらっていた。

それ以外にも横浜ハイヴの生存者、あるいは横浜のBETA襲撃から生き延びた人間についても調査をしてもらっている。それはBETAの横浜強襲の際に何もできなかったことへの彼女の罪悪感故か、それともせめて生きている人間の消息を知らねばならないという政威大將軍の責務故か、あるいはその両方なのか……。

「は、元横浜在住の白銀武と鑑純夏の二名、両名共に15歳。両者とも

に父親は光菱関連の工場に勤務、母親は専業主婦のごく一般的な家庭の出身です。恐らく特殊な訓練も何も受けていないものと思われま  
す」

「……と、言う事は、二人が生き延びたのは……」

「偶然、あるいは奇跡としか言いようがありません。それ以外の横浜ハイヴに連行された人間に関しては未だ調査中ですが、……残念ながら生存に関しては絶望的かと……」

「……そうですか」

月詠中尉の淀みない返答に悠陽は視線を落としながらただ一言返事を返す。

恐らく生存者の家族に関しても報告がないところから予想すると既にBETAの手にかかっているのだろう……。

救われ、生き延びても今まで彼と彼女を愛してくれた両親はいない……。恐らく頼れるのは地獄から救われ、生き延びたお互い二人のみ……。BETAの脅威は去ったとしても未だに将来の展望も見えないことだろう。だが、例えそうだったとしても……。

「たった二人、でも……生きていてくれてよかった……。本当に……」  
「御意……」

瞳を閉じ、涙を溢す悠陽。たった二人でも生き延びてくれた、生きていてくれたことへの喜びと感謝にただただ涙を流す彼女に、月詠中尉もただ黙礼するしかなかった。

せめて、せめて生き延びた二人の人生に、幸があつてほしい、己と、そして生き別れた己の妹と同年であろう二人には、どうか幸せになつてほしい……。立场上武と純夏に出会う事も叶わない悠陽は、顔も知らぬ二人の為に心の中でただただ祈るのみだった。

と、突然ドアを向こう側からノックする音が聞こえてくる。悠陽は双眸を開き、涙を軽く拭うとチラリと背後の月詠中尉へと視線を向ける。月詠中尉は何所か緊張した面持ちで既に視線をドアのほうへと向けている。

「……どうぞ」

「し、失礼します殿下……」

ドアを開け一度敬礼したのちに室内に入ってきたのは黄色い軍服の斯衛軍の兵士。良く見るとその手には黒塗りの盆のようなものももち、盆の上には白い手紙らしき封筒が載せられている。

「いかがでした。殿下はお疲れでいらっしやる。用件は早めに済ませろ」

何処となく不機嫌そうに兵士を睨む月詠中尉。碌でもない事を言おうものならそのまま切って捨てかねない程剣呑な雰囲気である。もはや慣れたとはいえ己の側近の態度に悠陽も苦笑せざるを得ない。「も、申し訳ありません！で、殿下への言伝を預かっておりまして……」

「私への？」

悠陽は軽く首をかしげる。己自身に対して手紙など実に珍しい。たまに幼いころに引き離されることとなった『かの者』の近況を報告する手紙も何通か届くものの、基本的に『かの者』は表では隠された存在であるが故に手紙も此処まで仰々しく渡されることは無い。

「…拝見する。……こ、これは!!」

封筒を見た瞬間、月詠中尉の表情が豹変する。直ぐに兵士から手紙を受けとると一度手紙を押し頂くように掲げたのち悠陽へと差し出した。

「…殿下、こちらを」

「……!!」

月詠中尉が差し出した封筒、そこに描かれた紋様を見た瞬間に悠陽の表情も豹変し、弾かれるように椅子から立ち上がる。

封筒の表面、そこに描かれているのは金色の、菊の花を象った紋様。この紋を見た瞬間、悠陽はこの手紙が誰より送られたものなのかという事を理解できた。

悠陽は月詠中尉から封筒を受け取り、一度封筒を頭上に掲げると封筒から手紙を取り出し、黙って書面に視線を走らせる。

月詠中尉は緊張の面持ちで悠陽を見つめる。何しろその手紙の送り主は、例えば己達斯衛軍、否、例えば日本帝国を統括する政威大將軍であろうとも逆らうことなどできないであろう人物なのだから…。



手紙を読み終え、顔を上げる悠陽。その表情は緊張からか引き締められており、さながら今から戦場に赴こうとでもするかのような鋭い気配を帯びている。

「…月詠、あのお方が直ぐに参れと。仕度を」

「……はっー」

主君の静かな、それでいて凜とした声に月詠中尉もまた頭を下げ、応じるのであった。

## 武、純夏SIDE

「はふうく……、じよ、ジョギングって結構疲れるね武ちゃん…」

「何言ってるんだか。あの瓦礫の中を逃げ回るのに比べたら何てことねえだろうが」

「あ、あの時は必死だったもん。比べるのが間違いだと思うけど」  
処変わって此処は横浜暫定基地の一角に存在するグラウンド場。主に新兵の教練、兵士達が身体を鍛える場として使われるそこに、横浜ハイヴから救出され、基地内で保護されることとなった白銀武と鑑純夏が地べたに座り込んで呼吸を整えている。

二人とも先程までジョギングでグラウンドを10周していたために体中汗にまみれており、着ている黒シャツも汗で身体に張り付いている。

あの尋問の翌日、健康及び身体上の問題は特にないという事で二人は自由に身体を動かすことを許可され、このグラウンドでジョギングしたり鉄棒をやったりしながら身体を動かし、鍛えている。

武は強くなって衛士となり、純夏を護れるほど強くなるために、純夏も武の傍に居たいが故に本来あまり運動が得意でないにもかかわらず身体を鍛えているのだ。

「でも、やっぱり暫く寝たきりだったから最初は結構きつかったな。歩くのだったで一苦労だったぜ」

「体中骨がバキバキいってたもんね。間接だって凝り固まっちゃってて動かなかったもん」

「それ単純にお前の運動不足じゃねえのか？」

「む！誰が運動不足かこのー！最近私だって体鍛えてるんだもん！！」

武の冷やかしに純夏は頬を膨らませて腕をぶんぶん振り回す。先程疲れて息を切らせていたのとは一転して元気そうな彼女の姿に、武は思わず笑みをこぼす。

己の中にはまだ、あの横浜での惨劇、ハイヴでBETAに捕らえられた時の記憶と心の傷は生々しく残っている、それは純夏だって同じだろう。

それでも彼女はこうやって元気そうに振舞って、自分を必死に元気づけようとしてくれている。なら、己もまた彼女の事を護ってやれるように強くなりたい…。彼女の元気な姿を見るたびに、武は心の底からそう思えるのだ。

武の笑顔を見て純夏も怒る気が失せてしまったのかこちらもクスクスと笑いだす。そうして二人は地面に座ったまま互いに笑いあっていた、のだが…。

「コラー！！貴様ら！！そんなところで訓練サボってイチヤつくんじやない！！衛士としての心構えがなつとらんぞ！！」

「うえっ!!」

突如背後から響き渡った雷のような怒声に二人は飛び跳ねるように立ち上がって直立不動の姿勢をとる。二人の表情からは先程までの笑顔は消え、驚愕と恐怖が顔に張り付いている。

改めて思い出したが此処は国連軍の基地、そのグラウンドで地面に座り込んで談笑するなど幾らなんでも不謹慎極まりなかったか…？下手したらこのまま基地から叩きだされるんじゃないやあ…!!二人はそんなことを考えながら急いで背後を振り向いて頭を下げる。

「す、すみません!!さ、流石に不謹慎でしたよね本当に申し訳ありません!!ほ、ほら武ちゃん!!」

「お、おおおおおごめんなさい！俺達はたまたまここを運動でつか…わせて…:…?」

背後に居た人物に頭を下げ、必死に謝罪する純夏と武。此処を追い出されたらまず行き場は無い、せめて追い出されないように謝らない

と…!!と必死に言葉を選んで謝罪の言葉をマシンガンか何かのようにベラベラと繰り返して続ける。

…のだが先程の怒声はさっぱり降ってこず、逆に何やらおかしそうな笑い声が頭上から響いてくる。不審に思った武と純夏は恐る恐る顔を上げる。

顔を上げた二人の前に立っていたのは国連軍専用のBDUを着ている栗色の髪の毛をした女性だった。可笑しそうにニコニコ笑うその顔は、まるでいたずらが成功した子供のようでもあり、その瞳には優しい光が浮かんでいる。

彼女は国連軍の人間であり、武と純夏にとっては既に顔見知りの存在でもあった。

「な、何だまりもちや…じゃなかった神宮寺軍曹…、お、脅かさないで下さいよ〜」

「フフっ♪ごめんごめん。二人とも仲良さそうだからつかつかいかいなくなっちゃってね」

「も…、いきなり怒鳴られるから心臓止まっちゃうかと思いましたよ。っていうか武ちゃん。軍曹さんにまりもちちゃんってまた言おうとしたでしょ〜?」

安心した様子で脱力して大きく溜息を吐く武と純夏の姿に、二人を怒鳴りつけた女性、国連軍衛士訓練学校教官、神宮寺まりも軍曹は面白そうに笑いながら謝った。

元々彼女は帝国陸軍の大尉ではあったものの、その腕を見込まれて国連軍の衛士養成学校の教官へと就任することとなった。最も現在はBETAの襲撃によって訓練学校は崩壊、此処横浜暫定基地で訓練兵達の指導を行っている。

その指導たるや彼女に教えを受けた教え子曰く『鬼軍曹』のもつぱらの評判であり、事実彼女の訓練兵達への指導、訓練はただただ苛烈、過酷としか言いようのない代物であり、如何なる訓練兵であろうとも根を上げる事は必至なレベルである。

最もこれ程過酷な訓練を課すのは己の教え子達に戦場で死んでほしくないという一心からであり、本来の彼女は生徒思いな優しい性

格である。

その証拠に彼女は、命は取り留めたものの両親と故郷を失い、ただ二人取り残されることとなってしまった武と純夏の事を気にかけて、出会って間もないにもかかわらず時折二人の話し相手になったり勉強を教えたりと親身になって接してくれているのである。

そんな彼女を武と純夏も慕っており、特に武はしばしば彼女を『まりもちゃん』という愛称で呼んでしまう事もある。最もその度に純夏から注意されてしまうのだが…。

「うう…、悪い悪い、どうも最近変な夢ばかり見るもんだからその影響で…」

「それって私と武ちゃんが軍曹さんの教え子になってるっていうの？だからって『まりもちゃん』は無いと思うよ？まりもちゃんは…」  
「あ、あはは…、ま、まあまあ鑑さん…、私は気にしてないし怒っていないから、ね？」

純夏のセリフに何を思ったのかまりもは少しばかり顔を引きつらせている。純夏からすれば単純にお世話になっている人、それも自分達よりも年上な人に失礼なことを言っただけな程度だったのかもしれないが…。

「そ、そう言えば軍曹は何でこんな処に？今日は訓練兵の訓練とかないんですか？」

何やら不穏な雰囲気を感じ取った武はすぐさま話題を変える。よく考えるとまりもはこの時間帯には既に訓練生達の指導を始めている頃である。ならこのグラウンドに居るのもおかしくは無い…：はずなのだがグラウンドには自分達とまりも以外の人影が見当たらない。

そんな彼の質問に対してまりもは困った様な表情を浮かべながらフカブカと溜息を吐きだした。

「…ああ、それ、ね…」。例の怪物がハイヴを陥落させた事件があったでしょ？その影響で、ね。まああの子達にもたまには骨休めも必要だろうし…：…って！コレ私が言っていたって事は内緒でお願いね？」

まりもは慌てて人差し指を立てて二人に口止めをする。教え子達の前ではあえて鬼軍曹として接しながらも実際は彼ら彼女らの事を誰よりも気にかけているのである。教官としてそれを表に出すようなことはしないが…。

「まあそれで私が来た理由、なんだけど…。香月副指令と一緒に朝食でもどうかつて。…全く、いくら訓練がないからってこっちは暇じゃあないってのに……」

そう言つてブツブツと己の上司であるはずの夕呼への文句を言い始めるまりも。彼女いわく、夕呼と自分はお互い同級生の腐れ縁であり、国連軍基地の教官を務める事となったのもその縁があったからとのことらしい。無論、彼女の腕と実績も買われたのは言うまでも無いが…。

最も二人はそんなことよりも仮にもこの基地のナンバー2である夕呼に朝食に誘われたという事に対して戸惑っていた。

「お、俺達が？い、一体なんで…」

「そこは分からないんだけどね、恐らく貴方達が横浜ハイヴからの生還者、つていうのもあるんじゃないかしら。…たまにどうでもいいことに興味持つからね…。はあ…」

「く、苦勞してるんですね軍曹さん……」

「まあ、古い付き合いだからもう慣れたんだけどね…。ま、いいわ。それじゃあ二人とも行きましようか。まあまずはその汗まみれの服を着替えてから、だけど」

「は、はいー」「む、そう言えばなんだか体が冷えてきたような…。まりもに促された二人は地面から立ち上がると彼女の後ろからついていく。

その後武と純夏は自分達が入院している病室へと一旦戻り、服を着替え終えるとまりもに案内されて横浜暫定基地内部にあるPX（食堂兼任の基地内売店）へと向かう事になった。

「……にしてもさ、俺達何時まであの病室に居られるのかね……」

「ちよっ！い、いきなりなんなのさ武ちゃん!!」

歩きながらポツリと不謹慎なセリフを呟く武に純夏は仰天した様

子で大声を上げる。が、武はそんな彼女の反応を気にした様子も無く話を続ける。

「いやだってさ、何時までも病室に泊まるわけにはいかないだろ？俺達。この基地だってBETAとの戦いで負傷した人とか結構いるだろうしそれに何より俺達国連軍とは何の縁も無い部外者だし……。……もし叩きだされたらどうするよ？家もう潰れてるぞ？」

「あ、あう……」

純夏も思わず頭を抱えてしまう。

確かに武の言うとおおり、もしもこの基地から叩きだされたら自分達には帰る家がない。

引き取ってくれる親戚もいない以上これから先下手したら瓦礫にまぎれて乞食、ならぬホームレス暮らしかも……。そんな不安にみちた暗い表情を浮かべる二人をまりもは慌てて慰めようとする。

「ま、まあまあ二人とも!!貴方達がどうなるかはこれから決まると思うけど、少なくとも悪いようにはならないはずよ!?!うん、大丈夫だから……ね!?!」

「……冷や汗流れてますよ？軍曹」……ちよつと不安になっちゃいます、はい……」

今後の己達の処遇に若干の不安を感じながら、武と純夏は軽く溜息を吐くのだった。

横浜暫定基地PX、平たく言えば基地職員専用の食堂は、ただ食事の為だけではなく前線で戦う衛士達にとっては何よりの憩いの場でもあった。

料理に使われる食材は物資不足を反映して合成食材ではあるものの、料理している人間の腕が良いからか衛士達の評判もいい。

とはいえつい最近まで病院食のみを食べていた二人にとつては始めて訪れる場所であり、食堂の広大さにキョロキョロとあちこちを見回している。そんな二人をほほえまじげに眺めながら、まりもは食堂をキョロキョロ見回して待ち人を探す。と、突然何処からか大声が三人に向かって響いてくる。

「ちよつとちよつとまりもとそこの二人。私ならここに居るじやないのよ！さつきと来なさいっての〜！」

声の主は三人を朝食に誘った横浜暫定基地副司令、香月夕呼のものであった。夕呼は食堂のちょうど中央にある四人用の席で腕を組んでこちらを眺めている。一見すると待たされて不機嫌そうな顔をしているように見えるがその目を見るとようやく楽しみにしていた料理が着たかのように輝いており、少しばかり不穏な雰囲気を感じられる。最も、それに気が付いているのは誰もいないようであったが…。

待ち人を見つけた三人はそのまま夕呼の座っているテーブルの空いてる席へと座る。武と純夏は夕呼と向かい合って隣同士、まりもは夕呼の隣といった具合である。

「お待たせして申し訳ありません香月博士。二人の服を着替えさせるのに時間がかかってしまったので…」

「クッククク♪まあいいわよ。私は怒ってないし。それにしても二人とも朝から運動？ん〜感心感心。身体を動かすのはいいことよ？私も最近研究室籠りっぱなしで運動不足になりがちでね〜、ちよつとは運動したほうが良いのかしらねえ…」

まりもの謝罪に気にした様子も無く、夕呼は頬に手を当てながら『研究室に籠りっぱなし』という割にはシミ一つない整った美貌に笑みを浮かべる。

本来ならば多くの人が見惚れるであろう美しい頬笑み、にもかかわらず彼女がやると何やら悪だくみをしている魔女か何かのように見えてしまうのが不思議である。

「ま、まあいいでしょう…。それよりも二人とも、注文はそのメニューから…」

「ああ朝食の注文ならもうしてあるからいいわ。あと少しで来るはずよ。」

「……あ、ありがとうございます、副司令…」

妙な夕呼の気使いに少しばかり不信感を抱きながらも軽く頭を下げるまりも。

彼女とそこそこ付き合いの長い己の経験からして、夕呼が妙に親切

な時には何がしか裏があると考えてもいい、というかそれ以外考えられなかった。

実際注文した料理も一体何なのやら……、流石に目の前の二人相手に同行するとは考えづらいが……。

「あ、あの…、副司令さん…」

「ん？何？そんな畏まった言い方しないでいいわよ？何なら親しみやすく『夕呼お姉ちゃん♪』って呼んでもいいわよ？あ、でも間違っても『おばさん』はNGだから。…んなことほざいた連中は一人残らずブチコロス事に決めてるのよねえ…」

と、突然純夏が夕呼に向かっておずおずと口を開く。それに対して夕呼は何とも気楽な調子で応じる。何故か最後に不穏なセリフとほんの僅かだが殺気がこもっていたが…。すぐ傍でそれを感じていたまりもの顔が少しばかり蒼褪めている。

純夏はそんな夕呼の様子に気付いたのか気付いていないのか少し緊張しているかのように一度深呼吸をすると、思いきって口を開いた。

「あ、あの！私と武ちゃん、何時まであの病室に居れるんでしょうか！」

「……はい？」

あまりに予想外のセリフに夕呼は思わずポカンとしてしまう。一方彼女のすぐ近くに座っていた武とまりもは啞然とした様子で口をあんぐりと開けている。が、純夏はそんな周囲の反応など構わずに続ける。

「わ、私と武ちゃん、両親も親戚もいなくてっ、知り合いももう全員BETAに食べられちゃったからっ！も、もう行くところがないんです！あ、あの病室を、基地を追い出されたらもう私達ホームレスになるしかないから！だ、だから……」

「OKOK…。まあ落ち着きなさいっての…。言いたいことは大体分かっちゃったから」

それこそ戦術機の突撃砲に搭載されたチェーンガンの如く捲し立てる純夏を夕呼はやんわりと宥めて落ち着かせると、頭痛でも抑える



かのように額に手を当てて軽く溜息を吐く。

「どうやら純夏は怪我が治った瞬間に武共々この基地から叩きだされるんじゃないかと不安がっているようである。それは横の武も同じであろう。」

夕呼としては彼ら二人を外に放り出す気などさらさらない。元より人員の欲しい横浜基地であるのだが、それ以上に彼女は、武と純夏の二人には「まだ何かがある」と直感的に感じていたが故である。

「…まあ確かに、二人が健康になった以上病室は引き払ってもらえないわねえ…。病室は、ね?」

夕呼の思わせぶりな台詞に一瞬武と純夏はギョツとして、まりもも夕呼のあんまりな言い様に眉を顰めて睨みつける。が、夕呼はそんな視線も気にした様子も無くニコニコとご機嫌な笑顔を崩さずに話を続ける。

「話は最後まで聞きなさいっての。幸いと言っちゃなんだけどこの基地にもそれなりに空き部屋があるから、そこでよければ住んでもいいわよ?病室で相部屋じゃ何かと不満でしょ?ちゃんと個室にしてあげるわよ」

「…ええ!」「ほ、本当ですか!?!」

上げて落とすかのような夕呼のセリフに武と純夏は思わず仰天してしまう。まりもも目を剥いて啞然としている中で夕呼は三人の反応にクスクスと可笑しくてたまらない様子で含み笑いをしている。

「…なんて顔してるのよ。あいにくと助けた人間を放り出すほど私は人間腐ってないのよ。…ま、流石にただ飯食わせる気は無いけれど二人の仕事に関してはそのうち、って処かしらね…」

「……いあ、ありがとうございます副司令さん!」

「ほ、本当に、本当に助かります!このご恩は必ず……」

「だくかくらくもういいっての!…ほらほらまりももいつまでもボクっとしてないで。もう食事来たわよ」

見ると既に白い割烹着を着た少女が、両手に何やら料理が乗ったお盆を乗せて立っている。少女は「失礼します」と軽く一礼をすると手際よく盆に乗った料理をテーブルへと置いていく。そして全ての料

理をテーブルに乗せ終わると再び一礼をして厨房へと戻っていった。  
「さあさあ三人とも、今日はお姉さん奮発して奢ってあげちゃうわよ♪存分に召し上がりなさいな♪」

文字通りキラキラと輝くような笑顔でそうのたまう夕呼。……で、あつたのだが、テーブルに乗せられた料理を目の当たりにしたまりも、武、純夏の表情はそれとは真逆に完全に硬直していた。

「……あの、香月副司令」

「あらどうしたのまりも？いつも通りでいいわよ？どうせ聞いているのなんてその二人だけなんだし」

「……じゃあ夕呼、一つ聞きたいことがあるんだけど……」

「ん？何？」

「何でテーブルに乗ってる料理がキムチしかないのよ!!しかも何だか私のだけ他と比べてやけに量が多いんだけど!？」

そう、テーブルに乗っている料理はどれもこれもキムチを材料としたキムチ料理だったのである。無論この時代のキムチは合成食材ではあるもののその辛さは本物と同様、否、物によっては本物すらも上回る辛さの代物まで出ているという話だ。

そんなキムチがどつきりと使われた文字通り真っ赤な料理が三人の目の前に並んでいたのである。しかもまりもの目の前にあるのは大盛りのキムチ鍋…、まるで地獄の血の池か何かのような真っ赤なスープの表面には溶岩か何かのように泡が噴き出している。そんなものを目の前に出されたら誰だって文句は言いたくなるだろう。ましてやまりもは辛い物が苦手、カレー程度ならまだしもキムチとなったら到底食べられたものではない。

が、夕呼はそんな彼女の怒鳴り声に対してどこ吹く風といった表情で首を傾げた。

「ん？…まりもキムチ鍋嫌いだっけ？他にあるのといつてもキムチ焼き肉、キムチ丼、キムチチャーハンにキムチ……」

「つてメニューキムチばかりじゃないのよ!!辛い嫌いなのにコレ何の嫌がらせよ?!夕呼、アンタ私に恨みでもあるつていうの!?!」

文字通りキムチ一色としか言いようのないメニューにまりもはテーブルを殴りつけて絶叫する。その拍子で飛び散ったキムチ鍋のスープがテーブルに落ち、ジュツとまるで何か焼焦げ焦げするような音を出して煙を上げる。その様を見た武と純夏はギョツとして己の皿をキムチ鍋から出来る限り遠ざけた。

ちなみに武の料理はキムチ焼き肉定食、純夏はキムチチャーハン。同じくキムチ料理ではあったもののそれでもまりものモノよりかはマシそうではある。

まりもの怒鳴り声に耳を塞ぎながら夕呼はやれやれと言いたげに唇を吊り上げる。

「キムチだけじゃないわよ。ボルシチもあつたのよ?でも食事に来る全員が全員ボルシチ頼むもんだから材料無くなっちゃって、残念だけどキムチ料理以外ないのよね。おばちゃんも困ってたわ」

「ちよつ、ボルシチだけ?!私の好物の豚角煮定食は!?!」

「それ今日お休み。だって今日は戦勝記念日だし」

「せ、戦勝記念日?そ、そんなのありましたっけ?...知ってるか純夏?」

「う、ううん、何も知らないけど.....」

夕呼のセリフに武と純夏はキョトンとした表情で互いを見合うつと、まりもに問いかけるように視線を向ける。が、まりも自身夕呼の言葉に覚えがないらしく無言で首をブルブルと振り回すだけであつた。

「何?知らないの?ま、貴方達二人はベッドの上だっただろうから知らないけど、つい昨日再びガメラが出現したのよ。ハイヴを再びぶつ潰す為に、ね」

「.....!?!」

三人の反応に呆れた様子で語る夕呼の言葉に、武と純夏が反応を示した。

ガメラが再び出現した、しかもハイヴを潰す為に...!!自分達をハイヴから救い出してくれたあの怪物が...!!それを聞いただけで二人は、

特に武は興奮を隠しきれなかった。

「ほ、本当ですかっ!!」

「本当本当。日本海から再出現したガメラはH20鉄原ハイヴとH19ブラゴエスチエンスクハイヴを殲滅、その後今度はオホーツク海付近に姿を消したわ。」

ね、戦勝記念日でしょ? なんせハイヴが二つも落ちたんだから♪しかも鉄原は日本近隣だから暫くはBETAの侵攻は収まるでしょう? うんうんめでたいめでたい♪」

夕呼はにこやかな笑顔で肩を竦める。確かにハイヴは殲滅されたのだろうが人類が落としたわけではないのだから『戦勝』ではないのではないか、とまりもは心の中で突っ込んだ。

最も武と純夏にとってそんなことはどうでもよかった。ただガメラがハイヴを破壊してくれたことが、BETAの人類侵略の拠点を破壊してくれたという事が何よりも嬉しかった。

…あの夢は正しかった、あの怪獣は人類の味方で、希望なんだ…。歓喜の表情を浮かべる武と純夏に夕呼は面白そうな笑顔を、対してまりもは何処となく複雑そうな表情を浮かべている。

「…それで夕呼、カメラが鉄原とブラゴエスチエンスクのハイヴ落としたことがめでたいのは分かったけど…、それとこのキムチまみれで僅かにボルシチのメニューと如何関わりがあるってのよ…」

おずおずと夕呼に問いかけるまりも。確かにカメラがハイヴを二つ破壊したことは喜ばしきことかもしれないが、それとこの真っ赤な食卓については全く説明がつかない。何が悲しくて記念日にこんな罰ゲーム同然な料理を喰わなければならんのか、とまりもは恨めしげに夕呼を睨みつける。が、夕呼はそんな親友の心境を知ってか知らずかキョトンとした顔で首を傾げる。

「ん? 分からない? じゃあまりも、アンタ鉄原ってどこにあるかわかるかしら?」

「はあ? そりゃあ鉄原は朝鮮領でブラゴエスチエンスクはソ連………って夕呼…!! ま、まさかアンタ!？」

夕呼の質問に何気なく答えていたまりもは、突如何かに気がついた

様子で夕呼を目が飛び出さんばかりに形相で睨みつける。そんなまじりの豹変ぶりに夕呼はまるでどこぞの物語で出てくるしゃべる猫のような意地悪げな笑顔を浮かべた。

「そうそう♪本日はぶっ潰されたハイヴのあった国土で食べられていた料理でメニューを統一して貰うようにおばちゃんに頼んだのよ♪で、朝鮮の料理といえばキムチ、ソ連といえばボルシチで決まりでしょ？特に辛いモノ好きの朝鮮人は年がら年中キムチ食ってるって言うじゃない？極寒地に住むロシア人はボルシチ飲んで身体温めるっていう事も聞いたわよ？」

「いやいやいやいやちよつと待ちなさいよ夕呼!!アンタ、まさか朝鮮人がキムチしか食べないとか、ロシア人はボルシチが主食だなんて事本気で信じてる訳じゃないでしょうねえ!」

あんまりにもアレな理由に思わずまじりは夕呼に突っ込みを入れる。武と純夏も先程までの興奮も完全に吹っ飛び、唾然とした表情で夕呼を眺めている。

確かに朝鮮の人間はキムチを主食同然に食べているだろう、ボルシチはロシア料理だから今のソ連でもよく食されているのは分かる。だが幾らそうだからってそれしかメニューに並べないのどのなのだろうか。まさか夕呼は朝鮮人はキムチしか食わない、ロシア人はボルシチしか食わない偏食人種だとかそんな事を考えてるんじゃないやなからうか、でなかったら単純に嫌がらせでもしたかったのか!?そんなことまで考えてしまう。

そんなまじりもの怒りっぷりに夕呼は少しばかりキョトンとすると……、

「……違うの?」

「絶対違うわボケェ!!」

何やら色々と間違っている夕呼のどんちんかんな思考に対して三人は絶叫を上げる。

いや思考程度ならまだいいとしておいてもそんな間違った認識のせいでこんな罰ゲームも同然な食事を喰わされる羽目になるこちらの身にもなつて欲しい、と三人は言外に訴える。夕呼は顎に指を添え

ながら『そうだったのね…。知らなかったわ〜』等と小声で呟いている。…どうやら本当に知らなかったようである。

「……ま、いいわその事に関しては。『『いいのかよ!!』』で、まあ食べながらでいいんだけど、ね。その二人……」

三人の突っ込みを無視して夕呼は目の前の二人へと話を向ける。隣のまりもは目の前で赤い湯気を上げるキムチ鍋を眺めながら涙目になっており、その有り様には訓練兵達から恐れられる鬼教官の面影は微塵も感じられなかった。

そんな親友の愉快な姿に口元をにやつかせながら、夕呼は武と純夏に向かって一言、問いかけた。

「カメラに関する情報、知りたくない…?」

## 第14話 皇帝

日本帝国帝都城。新帝都東京の中央に存在する政威大將軍率いる元枢府が執政を行う国会議事堂に並ぶ政の拠点であり、政威大將軍が住まう居城でもある。

だが、厳密にはこの城の主は政威大將軍ではない。そもそも政威大將軍とは朝廷と敵対する蝦夷を追討する征夷大將軍を起源とし、それが鎌倉時代には武家の最高権力者の関する称号へと変化したのである。

やがて時を下り明治、大政奉還の後に江戸幕府は解体され、大大徳川將軍家に継承された征夷大將軍の地位は消滅した。その後帝国議會が維新の元勳達により設立され、さらにその後には議會を統括する元枢府が、同じく維新に関わった五つの上位武家、通称五摂家によって設立されることとなり、征夷大將軍は『政威』大將軍と名を改め、元枢府を、ひいては日本帝国議會の国事の一切を取り仕切る最高権威の称号へと変化したのであった。

すなわち政威大將軍とはこの国の『真の』元首、主ではない。あくまで本来の主より権威と官職を賜り、預けられているだけにすぎないのである。この帝都城もまた然り。この城の主がほかに居るといふのは、この国に住まう誰もが良く知っている事実なのであった…。

帝都城の奥、たとえ武家の最高位である五摂家であっても滅多なことでは近づくことすら許されぬであろうそこに存在する一段高い上座と一段低い下座に分かれた謁見の間。その部屋には政威大將軍煌武院悠陽と彼女の側近たる帝国斯衛軍中尉月詠真耶の二人が、謁見の間の入り口に近い下座の席にて黙したまま座している。

本来ならばあり得ないだろう、今となつては名目上の地位へと成り果てたとはいえ、武家の最高位であり日本の国事と統帥権の全てを司る政威大將軍が、家臣の座である下座に座ることなど…。だが、この扱いには悠陽も、彼女に苛烈なまでの忠誠心を持つ月詠中尉ですらも不平不満を何一つ表情に表すことなく、むしろこの場に居るといふ緊

張に身体と顔を強張らせながら、ただただジツと何かを、否、誰かを待ち続けている。

何時までも続くかと思われた静寂。だが、それはこの部屋へと近づいてくる何者かの足音によって終わりを告げた。

一步一步謁見の間へと近づいてくる足音が耳に入った瞬間、悠陽と月詠中尉は両手を畳につけ、深々と背中を折り曲げるといふ所謂『土下座』の姿勢をとった。

やがて、足音が止まると謁見の間の上座に設けられている襖が開かれ、閉じられる音の後に、何者かが畳の上を摺るように歩き、腰を下ろした事が音と気配で悠陽に伝わってきた。

「双方、面を上げてください」

次の瞬間、悠陽と月詠中尉に向けて何者かの許しの声が聞こえてきた。

頭を上げる許しを得た悠陽と月詠中尉はゆっくりと頭を上げ、姿勢を正して正面を見る。

上座に座る先程の声の主、それはまだ幼さの残った顔立ちの、黒一色の冠束帯を身に纏った一人の少年だった。

優しい笑みを浮かべたその顔はまるで少女のように可愛らしく清らかであり、さながら野に咲く花を思わせる。だが、それ以上に彼を際立たせるのは、彼の纏う清浄で、それでいて侵し難い神聖さをも感じさせる空気であった。

少年は下座に坐す悠陽へと視線を向けるとクスツとまるで花が咲くかのような頬笑みを浮かべる。

「久しぶりですね悠陽、最後に会話したのは確か……、横浜にハイヴが建立された頃でしたでしょうか……?」

「はい。お久しぶりでございます、皇帝陛下」

頬笑みを浮かべる少年へ、悠陽は表情を和らげながらも再度深々と礼をする。

そう、この少年こそがこの日本帝国の真の元首であり、約2000年以上もの間この国の元首として統治してきた皇族の当主たる、日本帝国第126代目今上皇帝であった。



皇帝という名称が公式に使用されるようになったのは政威大將軍という官職が成立し、帝国が正式に日本帝国という名称に決定されたのと同じく明治時代の事である。が、皇帝の一族は代々、大王、帝等と呼び名を変えながらも平安、奈良、飛鳥時代を遡り、遙か神話の時代より日本という国の元首としてこの国の歴史を、民を見守りその平穩を祈願し続けてきた存在なのである。その王家としての歴史はこの世界のどの王朝よりも古く、そして長い。そして第一次世界大戦後に殆どの帝政国家が崩壊していく中で、『皇帝』という地位を現代まで保ち続けている唯一の存在なのである。

今でこそ憲法によつて国事、統帥権を内閣、そして政威大將軍へと預けて政の表舞台から退いているものの、その日本の元首としての権威、威光は今もなお日本帝国に、帝国の民に息づいているのである。そしてそれは日本帝国の最高権力者たる政威大將軍とても変わりはない。いかに権威を、権力を得ようともそれは皇帝より賜りし物、將軍とは皇帝に従い、仕える臣下にすぎないのである。

故に彼女もその分を守り、目の前の幼き帝へと頭を垂れる。そんな彼女に皇帝は呆れたような笑みを浮かべている。

「相変わらず生真面目ですね悠陽は。本当にそこだけは昔と変わりません…。…。ところで冥夜とは最近連絡はとれているのですか？」

「……!!そ、それは…。」

皇帝のあまりにも予想外な問い掛けに悠陽は思わず顔を強張らせ、何も言えずに顔を俯かせてしまう。

悠陽の反応に何かを悟った皇帝は重々しく溜息を吐きながら今度是不機嫌そうな表情で悠陽をジッと睨みつける。

「……やはりそうでしたか。全く、そなた達は離れ離れとはいえ双子の姉妹でしように…。碌に連絡一つとつてもいないとは、そんなにそなたの家の掟とは大事なものののですか？」

良いですか、確かに冥夜はそなたとは双子故に御剣家へと養子に送られはしましたが、そなたにとつては何よりも代えがたい唯一血の繋がった姉妹でありましょう？それを高々家の掟だの何だのという理由で手紙すらも送らぬとは何事ですか？」

「……………」

皇帝の静かな、だが確かに心に響く言葉を悠陽は頭を垂れ、ただ黙って聞いている。

確かに皇帝の言う事は尤もだ。自分は唯一この世に残された肉親である妹にすらも何も出来ずにいる。手紙を送るくらい容易いことであるというのに、今となっては彼女との思い出はあの人形くらいしか残ってはいない…。

煌武院冥夜、否、今の名前は御剣冥夜。本来は煌武院悠陽の双子の妹であり、由緒正しい五摂家の血筋を引く娘である。だが、悠陽と双子の姉妹として生まれた彼女は、家を分かたつ忌み子とされ、幼い頃には煌武院家の遠縁にあたる御剣家へと養子に送られることとなった。冥夜という名前も、悠陽の「影」という意味合いを含めて与えられた名前であるのだ。

皇帝の言うとおりの馬鹿馬鹿しいしきたりといえはしきたりだろう。だが、武家として古い家であればある程、そのような古くからのしきたりが重んじられる。まして煌武院家は五摂家という武家の頂点。それだけ格式ある家柄だからこそ古からの掟が重くみられる。それは時に、個人の人生よりも…。

悠陽本人は、唯一の肉親である冥夜の事を愛していた。帝都陥落の折も真つ先に彼女の行方を確かめさせたし、月詠中尉の従姉妹である月詠真那中尉には彼女の部下共々冥夜の護衛を命じさせている。だが、彼女への手紙は一度も送った事がない。ただ月詠真那中尉から送られる冥夜の近況報告を読み、聞くだけであり、彼女には手紙を一通たりとも送った事がないのだ。

家の掟など問題ではない。その気になればそんな物は政威大將軍の権威でどうとでもなるだろう。だが、それでも送らない、否、彼女には送ることが出来ないのだ…。

冥夜が、己の妹が自分を恨んでいないか、憎んでいないか…、それが何よりも気になって…。そしてもしも己を憎んでいたのならば、どう詫びればいいのか分からなくて…。

皇帝の言葉をきっかけに、心の中で苦しみ悩む悠陽…。そんな主を

見かねて、月詠中尉は身を乗り出した。

「……お、恐れながら陛下!! 殿下もまた冥夜様の事を常々お氣にかけておられて…!!」

「いかに気に掛けようともそれが相手に伝わらねば意味もありますまい。そのようなことは幼き子供でも分かる事ですよ、真耶」

「……!!」

悠陽を庇う言葉すらも皇帝にばつさり切り捨てられ、月詠中尉は沈黙してしまふ。

元来ならば己の主である悠陽が侮辱、愚弄されようものならば彼女も黙っていないだろう。もしも面前に居ようものなら一人残らず刀の錆に変えているに違いない。だが、今日の前に座る少年に対してはそれをしない、否、出来ない。

なぜなら彼もまた彼女が忠誠を誓い、忠義を果たすべき存在だからである。

武家であり、帝国斯衛軍であり、政威大將軍に仕える身であるが故に…。

そもそも斯衛軍の本来の役目は皇帝に仕え、その御身を守護するというものである。元来は禁裏を護り、帝の身を脅かす敵を討ち果たすことこそが斯衛軍の使命であり本懐。それは政威大將軍に仕える現代であっても変わることは無い。

そんな本来仕えるべき主の言葉に悠陽の側近である月詠中尉も流石に反論できず、ガクリと肩を落として頭を垂らすしかなかった。意気消沈してしまっている二人の姿に幼帝はやれやれと言わんばかりに溜息を吐く。

「聞くところによると冥夜もそなたの贈る物を悉く拒んでいるようですし…、全く姉妹揃って不器用というか何というか…」

……まあいいでしょう。本当に冥夜の事を忘れていたというのなら本題を置いて説教の一つ二つするつもりでしたが、どうやらそうでもないようですし……、今回は許します」

「……ありがたき幸せに御座います、陛下……」

「ありがたき幸せ、ではありません! 全く武家というのはどこもか

しこも妙な習慣やら仕来たりやらに囚われて……。特に貴方達五撰家ときたら、煌武院と斑鳩、崇宰以外の二家は未だに当主も決められずに跡目争いなどをやっている始末……。この前とて斉御司と九條の者達が戦死した当主に代わる跡目について朕に意見を伺いに来ました。が……。つい先日まで未曾有の国難が迫ってきて国が滅びる瀬戸際だ。というのに、実に余裕なものだと常々感心していたのですよ？」

「……、と皇帝は若干皮肉混じりにブツブツと愚痴を呟いている。

未だ12の幼い身とはいえ一国の元首たる皇帝からすれば、帝国がBETAに侵攻され、国内に二つのハイヴを建造されるという未曾有の危機に陥っているのにもかかわらず、元枢府の要であり斯衛軍と武家を束ねる五撰家の内の二家が暢気にお跡目争いなどをしていいる事が何よりも不満なようである。不満げに頬を膨らませて眉を顰めるその顔は、年相応に愛らしさすらも感じてしまう。その姿に悠陽も月詠中尉もポカンとしている。

やがてこちらをじつと眺めている二人に気がついた皇帝は、僅かに頬を赤らめながら二、三度咳払いをする。

「し、失礼しました、今日はそなた達に愚痴をこぼす為に呼んだわけではないというのに……。まあそれはまたの機会という事で本題に入らせていただきますしう。」

「真耶、すみませんが外してもらえますか？」

「……陛下の仰せとあらば……」

皇帝の申し出に月詠中尉は頭を垂れて答えると己の仕える主へと一度頭を下げ、そのまま謁見の間の外へと出て行った。その姿を見送ると皇帝は再び悠陽へと視線を向け直す。

「さて、それでは話の続きなのですが……」

朕がそなたを呼んだ理由、それは帝国をBETAの脅威から解放したあの怪獣……。ガメラについてです」

「……」

皇帝の口から出たガメラの名、それを聞いた悠陽は表情を引き締め、て姿勢を正す。皇帝は悠陽をジツと見据えながらゆつくりと口を開

き、問いかけた。

「そなたはどう思いますか？かの怪獣について。突如として硫黄島から出現し、瞬く間に帝国のBETAとハイヴを殲滅したあの者に對して……。そなたがどう思っているのかを……。是非聞いてみたいのです」

「私が……。ですか？」

己の主の問い掛けに悠陽は少し戸惑いながらも悠陽は心の中で思考する。

あの怪獣について己がどう思うか……。それはあの怪獣が帝国の、ひいては人類の敵であるか味方であるか、という事について聞いているのだろうか……。

それとも、あの怪獣についての正体について何か心当たりがあるかどうかという事であろうか……。

「……恐れながら陛下、それはあの怪獣の正体の事でしょうか、それとも、あの怪獣が人類の敵となるか否かについてでしょうか……」

悠陽は恐る恐ると言った様子で皇帝に問いかける。と、皇帝は指を顎に当てて何かを考えるような仕草をする。

「ふむ……。正体はそなたどこるかこの世界の誰もが掴めていますまい？でしたらそなたがあの怪獣についてどう思っているか、というのを聞かせてもらえませぬか？無論、あの怪獣が敵か味方か、についてもかまいませんよ？」

「……御意」

皇帝の返答を聞いた悠陽は一度瞳を閉じて考える。

あの怪獣は己から見て何なのだろうか……。敵か、それとも味方か……。

本当のところは分からない、何せ相手が何を思い、何を望んでハイヴを、BETAを滅ぼしているのかすらさえも分からないのだから……。だからこれはただの己の希望にすぎない、そうであって欲しいというただの願いかもしれない……。

ややあつて悠陽は瞳を開くと、ゆつくりと口を開く。

「……恐れながら、あの怪獣は我々の、否、人類の味方かと……。あの怪

獣は、ガメラはハイヴから生存者を二人助けだしました。ですから決して人間に敵対する存在ではないかと……」

「そうですか……」

悠陽の言葉を聞いた皇帝は、ただ一言そう答える。その表情は何処となく彼女の言葉に安心しているかのようであり、嬉しそうに微笑んでいる。

こちらをジツと見据える悠陽の視線に、皇帝はただただ嬉しそうにクスクスと笑っている。

「そうですか……。良かった、そなたならそう言うと思っていましたよ」

「陛下……?」

己の言葉に微笑む主を不思議そうに眺める悠陽。皇帝はそれを特に気にした様子も無くにただにこやかに笑っている。

「朕もあの者は人類の敵ではない、と信じております、否、確信していると言ったところでしょうか。未だにあれが何者なのかも分かりませぬが、それでもあれは我が国の民を救ってくれた……。故に朕はあの者は人類の敵ではない、むしろこの星の希望となってくれるのかもしれないぬと……。そう思うのですよ……」

「御意……」

どこか遠くを見るような目つきでそう呟く皇帝、悠陽は己の主の呟く言葉にただ頭を下げて応じるのだった。

## 横浜暫定基地SIDE

同じ頃、国連軍横浜暫定基地PX食堂にて。

「ガメラに、ついて……。ふ、副司令はガメラについて何か知ってるんですか!?!」

突然夕呼からガメラについて知りたくないか、と問われた武は眼を剥いて夕呼へと詰め寄った。その隣の純夏も真剣な表情で夕呼をジツと見ている。一方のまりもは横目で夕呼を見ながらも目の前のキムチ鍋へとチラチラ視線を移しながら今にも泣きそうな表情をし

ている。

そして、二人の視線を浴びながら楽しげにニヤニヤと笑う夕呼は、武の質問を聞き終えるとゆっくりと口を開いた。

「いいえ、今はまだ何にも」

「「……………はあ!？」」

夕呼のあつさりとした返答に武、純夏、そして先程までキムチ鍋とにらめっこをしていたまりもまでもが仰天して大声を上げる。それはそうだろう、ガメラについて知りたくないか、と言った本人がガメラの事など何も知らないと答えたのだから誰だつて訳が分からなくなるはずだ。

一方夕呼は大声に耳を塞ぎながらもニヤニヤと余裕ありげな笑みは隠さない。

「ちよつとく、突然大声出さないでよく。鼓膜破れちゃつたらどうするのよ。心配しなくていいわよ。言ったでしょ? 『今はまだ』つて」

「?そ、それつてどういう事ですか?」

夕呼の言葉に純夏は頭に疑問符を浮かべながら問いかけると、夕呼はクツクツと含み笑いをしながら答え始める。

「つまり、私はこれからあの怪獣についての研究、調査も並列してやっていくつて事よ。ま、本来の研究の合間、つて事になりそうだけど」

「……………あ、そういうえば副司令さんつてBETAをやつつける武器を作つてるんでしたっけ?」

「……………少々訂正したい箇所はあるけど、ま、その通りよ。極秘事項だから詳細は言えないけど、人類を勝利に導く計画つて処ね。前はどうか分からなかったけどガメラのおかげでどうにか軌道に乗りそうだわ」

夕呼はご機嫌そうに笑いながらコーヒーを啜る。彼女の前の皿には三切れの卵サンドととろけたチーズと太い合成ソーセイジの挟まったホットドッグが一つ…。

「……………つてちよつと待ちなさいよ夕呼!!何で貴女だけボルシチでもキ

ムチでもないメニューなのよ!!不公平でしょうが!!」

と、隣に座っていたまりもが今更夕呼のメニューに気がついたのかテーブルに拳を叩きつけて激昂する。再びキムチ鍋のスープがテーブルに飛び散ったために武、純夏は勿論のこと夕呼も優雅にコーヒを飲みながら皿をテーブルから遠ざける。

「んっふっふっ♪これも特権って奴よ♪キムチもボルシチも昨日たっぷりご賞味させていただいたから朝食くらいは違うのにしないかねえ?大体まりも、量ならアンタのキムチ鍋のほうが多いじゃない?」「冗談じゃないわよ!!ただでさえ辛い物苦手なのにこれだけの量を食べつくせなんてどういう拷問よ!!今すぐ交換して!!」

「いや〜よく。コレ食べながらアンタがキムチ鍋ヒイヒイ泣きながら食べるの見るのが今日の目的なんだから。あ、ついでにその鍋に入ってるキムチの辛さ、その二人のより数倍上だから♪」

「やっぱり嫌がらせか!!ふっぎけんじゃないわよ夕呼!!アンタ私に嫌がらせして楽しむ事しか能にないのかこの性悪!!」

激昂のあまりまるで猛獣の如き絶叫をPX中に響き渡らせるまりも。そんな彼女の抗議も罵声もどこ吹く風と言った様子でサンドイツチをパクつきながら武と純夏への話を続ける。

「…で、何の話だったかしら?ああそうそうガメラの情報ね。まあ私にも研究があるんだけど幸い私の知り合いにも何人か考古学とか生物学とかの専門家が居るから彼らに頼んでガメラの調査をしてもらってる訳よ。それでもし何かが分かったら貴方達に真っ先に一つ残さず伝えてあげようと思うんだけど…どう?」

「…いい、いいんですか?そんなこと」「どうせ公表する話もあるしね。それに貴方達には“知る権利”がある。何の問題も無いわ」

ニコニコと人のいい笑顔を浮かべながら答える夕呼。その左手にはサンドイツチとホットドッグの乗った皿をもち、右手に持った卵サンドをパクつき、さらにその横では赤鬼の如く怒り狂うまりもがなおも怒声を張り上げていたが…。

目の前で繰り広げられる何とも言えない光景に武も純夏も顔を引



きつらせていたが、やはり何はともあれガメラに関する情報が貰えるのならば有難いことに変わりない。

「……あ、ありがとうございます副司令。どうかその時はお願いします……」

「や、やっぱりガメラについて知りたいですから、ハイ……」

「フフツ♪素直な子って好きよ？まあ料金については後払いつて事で決まりね♪」

「てくおらああああああ!!!私を無視するな夕呼オオオオオオオオオオオ!!!」

無事話を終えた三人の傍でまりもは、さながらどこぞの大怪獣か何かの如き怒号を未だに張り上げるのであった。無論三人、どころかPXに存在する人間すべては彼女の姿に見て見ぬふりをしていただけが……。

「……ん？処で二人とも、全然箸進んでないじゃない？それそこまで辛くは無いですよ……」

「あ、あはは……、まあそうなんですけどね……」

「流石に朝から、辛い物はちよつと……」

「ん〜そう？まあ流石に朝から辛い物は無いかな〜。安心なさいって。もう朝鮮はクリアしたから次の『記念日』にはキムチは無いわよ。だからさあ食べた食べた♪」

「うう〜、二人ともお願い私の鍋も食べて〜」

「何一転して涙目になってお願いしてるのよまりも……」

「ごめんなさい、無理っす」

「非力な私を許してください……」

「ヒドツ!!」

こうしていつにもまして賑やかに、朝食の時間は過ぎていくのだった。

「……け、結局あの激辛鍋喰わされた……」

「あうう……、し、舌がヒリヒリするよ……。しかも副司令さんだけ食わずにニヤニヤしていたし……」

「ご、ゴメンね二人とも……。どうしても、どうしても辛い物は駄目だったから……。うぐっ、の、喉が痛い……」

結局あの後汗と涙を滝のように流してキムチ鍋を食べるまりもを放っておくことが出来ず、最終的に武と純夏の二人も一緒にキムチ鍋を食べる事となった。だがキムチ鍋の辛さは二人の想像以上であり、その規格外の辛さのせいで三人の喉はヒリヒリ痛み、舌には味覚が殆ど残っていない。

流星に夕呼も悪いと思ったのか、はたまた十分楽しめて満足したからなのか三人に合成オレンジジュースと合成アイスクリームを奢ってくれたものの正直味覚など消し飛んでいるためにオレンジジュースはただの氷水を飲んでるようにしか感じず、アイスクリームなどバニラの甘さが全く感じられずに単に雪か何かを舐めているようではあったが……。

「でも軍曹さんって辛いのが苦手だったんですね……。なんか意外です」

「だな、何だか衛士の皆さんから鬼軍曹とかなんとか言われてるけど全然そういう風には見えないな」

「鬼軍曹、ねえ……。まあそう言われるほどビシビシやってたって自覚はあるんだけど」

常日頃衛士や訓練兵達から恐れられる神宮寺まりもという人物像と、今日の前に居る優しいお姉さんと言った風情のまりもとのギャップに武と純夏は改めて意外さを覚える。そんな二人の「鬼軍曹」発言には、流星にまりもも苦笑いするしかない。よもや此処まで有名になっっているとは己自身も予想してはいなかった。

まりもとて好き好んで訓練生に苛烈な教練を行っているわけでは

ない。全ては生徒達に生き延びて欲しいがため。本当は己の教え子達には衛士になどなつて欲しくは無い。教え子達には生き死にを掛けた戦場などに行かず、己のやりたい事を好きにだけやって幸せな一生を送つて欲しい…。それがまりもの本当の願いなのである。

だが、今の日本は危急存亡の時でありどうしたとしても子供達の年齢が一定以上になれば訓練兵となり、やがてBETAが跋扈する戦場へと送られる羽目になる。

ならばせめて、せめて彼らには強くなつてもらいたい。あの絶望の戦場から生き延びる強さを、決して犬死になどしない、生きる事を諦めない強さを心に抱いて欲しい…。だからこそ彼女はあえて教え子達へと鞭を振るうのである。

「ふう……でもさ、鉄原とブラゴエスチエンスクのハイヴが無くなつたつて事は、暫くは日本にBETAが押し寄せてくることも無いってことだよな？それって確かにラツキーじゃん？」

「そうだね！もう街を壊されたり人を殺されることも無いし、衛士の人達だつて戦場に行かなくて済むんだもん！武ちゃんの言うとおりがメラさんつてきつと正義のヒーローなんだよ！」

「……………」

まりもの表情から何かを察したのか武と純夏の話はガメラによつて破壊されたハイヴ二つへと移る。新しくハイヴ二つが陥落したこと、それを成したのが己達を助けてくれた怪物であるという事にはしやぎ、嬉しそうに会話する二人…。そんな二人をジツと見つめるまりもの表情は、何処となく冴えない。まるで何かを悲しむような、痛みをこらえるかのような苦しそうな表情で二人を見ている。

「…あの、神宮寺軍曹？聞いていますか？」

「……………え？」

そのせいだからか、いつの間にかこちらへと視線を向けている二人に気がつかなかつた。武と純夏は己の顔を心配そうに見ている。どうやら何かこちらに言っていたらしいがまりものは己の考えに没頭していたからなのか全く気がつかなかつた。

「え？あ、その……………」  
「ごめんさい、何て言ったのかしら？聞こえ

なかったわ…」

まりもは慌てて笑顔を作りながら大丈夫だと手を振ってアピールする。だが、武と純夏はそれでも心配そうにこちらを見ている。

やがて純夏がおずおずとまりもに向かって口を開いた。

「えつと……、軍曹さんは、ガメラさんの事どう思ってるのかなって……。日本をBETAから解放してくれたし、私達を助けてくれたし、お父さんお母さんの仇もとってくれたし……。私と武ちゃんはヒーローだって思ってるんですけど……」

純夏の問い掛けを聞いたまりもは、一度目を伏せる。その表情は先程と同じく、悲しげで、苦しげで、まるで何かを思いつめているかのようであった。

純夏は心の中で、もしかしていけない事を質問しちゃったんだろうか、軍曹を傷つけてしまったんだろうか、と考え始める。が、まりもは直ぐに顔を上げて二人に笑顔を向けた。

が、その顔は先程とは違ってどこか寂しげであった。

「ガメラ、か……。そうね、私もガメラが日本を救ってくれた事については感謝している、かな……。もう教え子を戦場に送ることもそんなに無くなるだろうし、何よりこれ以上人が死んで行くのを見なくて済むから……」。

……。でも、それ以上にね、私はガメラが羨ましい。羨ましくつてたまらなかったな……」

「え……」

寂しげな表情で笑うまりもの言葉に、武と純夏も茫然とする。

羨ましい、まりもはガメラの事が羨ましいと言った。何故そんな事を、と武と純夏は視線で問いかける。するとまりもはどこか遠くを見るような視線でポツリポツリと語り始める。

「私にもガメラみたいな力があつたら、ハイヴなんてひと捻りで叩き潰せるような力があつたら、教え子達を失わずに済んだかもしれない、戦場で、たくさん部下達を、死なせずに済んだかもしれない……ね。」

それから少し悲しくて、空しかった。あんなに多くの犠牲を出して

も、私の戦友達や教え子達が何十人何百人英霊になっても落とすことが出来なかったハイヴを、たった一頭で、ああも簡単に陥落させて……。私達の戦いつて、仲間達の犠牲って一体何だったんだろうって……。ひよっとしたら、単なる犬死にだったんじゃないかって考えちゃって……。

フツツ、ゴメンなさい。こんなこと、教官である私が言っちゃ駄目よね？」

弱弱しく笑うまりも、その目じりにはほんの僅かだが涙が浮かんでいる。

彼女の告白に、純夏も武も何も言う事が出来なかった。確かにガメラは圧倒的な力でハイヴを叩き潰した、自分達を救い出して、日本を崩壊の危機から救い出した。

だが、ガメラが出現する以前にも、この国からBETAの脅威を消し去ろうと多くの兵士が、衛士が戦い続けていた。帝国軍、斯衛軍、そして今二人が身を寄せる国連軍も……。

全ての人達が命をかけて戦った。国を、故郷を護ろうとその命を盾とし、剣としてBETAという宇宙からの侵略者と戦いぬいたのだ。その中にはきつと、まりもの戦友や教え子達もいただろう。

だが、それでもBETAの進撃は止められず、結果的に旧帝都京都は崩壊し、佐渡島と横浜、二か所にハイヴを建設される結果となった。帝国と国連軍はこれ以上のハイヴの増加を食い止めるため、横浜ハイヴにて消耗覚悟の定期的なBETAの間引きを行わざるを得なくなり、その結果として衛士の数はどんどん減少していく結果となった。

己達の力では精々間引きが精一杯、それほどの物量を誇るBETAの本拠たるハイヴを、僅か一日で二つ殲滅してのけたガメラ……。あまりの力の差にまりもも自信を無くしていた。最もそれはまりもだけではなく、この日本帝国において軍の士官を務める者達は皆、同じような思いは少なからず抱いているのだ。

強大なる力への畏怖と憧れ、そして矮小なる己らへの劣等感……。それがまりもの中で渦巻き、結果として散って行った英霊達の死は無駄死になのであるのかというセリフとなって飛び出したのだ。

そんなまりもの姿を見ながら、武は…、

「犬死につて…、そんなことは無いと思います、俺は」

まりもの言葉を否定するように、そう呟いた。その瞳には、偽りのない確固とした意思が宿っている。彼の言葉にポカンと口を空けるまりものに、武は構わず言葉を続ける。

「だって、帝国軍や国連軍の人達が戦ってくれていなかったら、俺達はずっと早くに死んでいたと思います。ガメラに助けられずにとつくにBETAの餌になっていたかもしれません。確かにハイヴは造られて、日本の半分は壊滅状態になってしまったけど…。

それでも、俺達がこうして生きているのも、皆帝国軍や国連軍の人達が命を掛けて戦ってくれたからなんです。決して、決して無駄死になんかじゃありません！」

「私も、武ちゃんの言うとおりだと思います！軍人の人達は皆必死になって、日本を護るために、私達を護るために戦ってくれたんですから、その戦いは絶対に無駄なんかじゃありません！ガメラさんだって、ガメラさんだって帝国軍や国連軍の人達が必死に頑張っていたから私達を、日本を助けに来てくれたんですよ、きつと！」

「白銀、君…、鑑さん…」

親も、友人も、故郷も失いたった二人だけ残った少年少女の言葉を、まりものは茫然と聞いていた。

決して無駄なんかじゃない、自分の戦友達、教え子達、そして己達を残してくれた先人たちの犠牲は決して無駄なものなんかじゃない。犬死になんかでは決してない。二人の言い放った言葉が、まりもの心の中に深く深く響き渡る。

その時、無意識に彼女の頬を涙が一筋伝い落ちた。無意識だったかなのか、まりものは涙を流しながらも茫然と立ち尽くしている。

「あ、えつと、神宮寺軍曹…？な、涙…。」

「え、えつと！へ、変なこと言っちゃいました!?ご、ごめんなさい軍曹さん!!」

「えっ…あ」

二人の慌てる言葉にようやく己が泣いていた事に気がついたまり

もは急いで袖で涙をぬぐい取った。まりもにはその涙が不思議と不快に感じなかった。むしろ逆に……。

「え、ええと軍曹殿!?お、俺もしかして失礼なことを言ってしまったか!?ほ、本当に申し訳ありませんこの通りです!!」

「ごめんなさい!武ちゃんか私かわかりませんがごめんなさい!このお詫びはちゃんとしますから……」

「あ、あの落ち着いて?べ、別に怒ってる訳じゃあないんだから、ね?頭を上げてくれない?」

仕舞には土下座しかねないまでに頭を下げる二人をまりもはやんわりと押しとどめる。その口元には何時も武と純夏に向けている優しげな笑みが浮かんでいる。

恐る恐る顔を上げた二人に向かって、まりもは安心させるようににつこりとほほ笑んだ。

「私は貴方達の言った事に怒ってなんかいないわ。むしろ…、嬉しかったのよ」

「嬉しかった…んですか…?」  
「ええ」

貴方達があの子達の、あの人達の死が無駄じゃないって、犬死にじゃないって言ってくれたことが、ね……。

己の心の中でまりもはポツリとそう呟いた。

夕呼SIDE

一方朝食を終え研究室へと戻った夕呼は、そこで昨日の横浜ハイヴ跡の調査結果についての報告を受けていた。

「ふうん……大広間に反応炉と、人間の物らしき脳髓が、ね……。……それってまだ生きてるの?」

「現在調査中です、が、いざれ結果が出るかと。最も、脳髓のままでは生きていても仕方がないでしょうけど、ね……」

興味深げな笑みを浮かべて調査資料及びハイヴ内部の写真へと目を通す夕呼。そんな彼女と言葉を交わしているのは目深に帽子をかぶり、眼鏡をかけた長身の男性である。着用している国連軍軍服の襟

章の形状から、階級は少佐であることが分かる。

資料から視線を上げた夕呼は、目の前の国連軍少佐らしき男に向かってニヤリと笑みを向けた。

「ええ、確かに脳髓だけじゃあ意味無いかもねえ…。脳髓だけじゃ、ね…。まあそれはそれとして、新入りの隊員達の調子はどうかしら？ 昂星サン？」

「ふう…。その呼び方は親しみがあって好きなのですが、どうか公然では『坂口少佐』あるいは大隊長と呼んでくださるとうれしいですね？ 強制はしませんか？」

「安心なさいっての、ちゃんと公私は使い分けるわよ。今この場には私と貴方しかいないんだし、問題無いじゃない」

「フフ、確かに」

左官服の男、A-01所属ヴァルハラ大隊隊長兼、デリング中隊隊長坂口昂星は夕呼の言葉に帽子の縁をつかんでクスリと笑みを浮かべる。そんな彼の笑みに答えるかのように、夕呼もニヤリと唇を吊り上げる。

「……で、新人たちの出来はどうだったかしら？」

「初めての实戦、と言っても実際にBETAとの戦いは無かったのですが、伊隅大尉の報告とモニターで見た限りでは……。まだまだ原石、と言ったところででしょうか？ 実際にBETAと戦えば一気に化ける可能性もありますか？」

「あらそれは困ったわねえ…。研磨しようにももう日本にはBETAは居ないしこれから大陸のハイヴも減っていく予定だし……。困ったわね、このままじゃ新人の実践演習が出来ないじゃない」

「そこはJIVES、あるいは模擬戦でどうにかしていけば問題無いでしょうね。火渡君辺りがゴネそうですけれど、まあ問題は無いでしょう」

坂口少佐はそう言って軽く肩を竦める。カメラによって日本帝国内のハイヴはすべて破壊され、さらに日本最寄りのハイヴである鉄原も陥落した以上、これからA-01部隊にBETA、ハイヴ関連の任務はほぼ無いと予想できる。いかに香月夕呼直属で超法規的権限を



持つとはいえ、日本から離れて別の国で活動するともなればそれ相應の手續きが必要になる。現状夕呼にはそこまで面倒な手續きをしてでも他国のハイヴを攻めるつもりは無い。他国のハイヴの殲滅は、ガメラにでもやらせておけばいい。今は兵力を温存し、手に入れた時間と素材を有効利用させてもらうだけだ。

「ま、暫くは私の小間使いやガードマンっぽい事をしてもらうわ。今までに比べたら退屈な任務になるだろうけど、よろしくお願いね？」

「ハイ、承知いたしましたレディー。如何様にもお申し付けを」

本物の執事であるかのように恭しく頭を下げる坂口少佐、そんな彼に「頼りにしてるわよ執事さん（バトラー）」と笑いかけながら夕呼は再度手に持った資料へと視線を落とす。

「ああ…、それにしてもいいものねえ。自分の思い通りに、自分にとっていい方に事が進むっていう事は…」

まるで童女のようにご機嫌に笑う己の上官の姿に、坂口少佐は恭しく頭を下げるのであった。



ばかりの裂帛の咆哮を張り上げている。

まるで地獄で罪人を裁く閻魔王の如き恐ろしく、そして猛々しい巨体……。かの存在こそこの地獄を作り出した張本人……。生命の源たるマナより生みだされた地球の守護神たる大怪獣、ガメラだった。

鉄原、ブラゴエスチエンスクと二つのハイヴを立て続けに破壊したガメラはオホーツク海海底にて休息と傷の治療のために丸一日眠りについていて。やがて眠りから覚めたガメラは、次なる攻撃目標としてウランバートルハイヴ、そしてウランバートルハイヴの最も近くに存在するクラスノヤルスクハイヴの二つに定め、行動を開始した。

一応今のガメラの戦力ならば、『最後の手段』を使わずにハイヴを三つ以上潰すことも可能といえば可能である。だが、大陸に存在するハイヴは移動距離が日本の横浜、佐渡島等とは比較にならない程長距離であり、下手をすれば移動のためのジェット噴射のみで相応のエネルギーを喰ってしまう可能性もある。勿論休息する海域を攻略するハイヴの近くにしたりとそれなりの対策はしているものの、今のところガメラが破壊できるハイヴは規模の大きさにもよるがフェイズ2と3ならば基本的に二つのみ、4を越えるならば一つずつが限界となる可能性がある。

BETAの地球侵略の拠点である地球最大のハイヴ、H1カシユガルオリジナルハイヴともなればフェイズ6、今はシロガネタケルがループした時期の三年前であるからそれよりも規模は小さい可能性もあるがそれでも今まで攻略したハイヴとは比べ物にならない規模になるのは間違いない。到底他のハイヴのついでで攻略できるような代物ではない。

だからこそまずは足元から削り取る。オリジナルハイヴ以外のハイヴとBETAを殲滅してオリジナルハイヴを完全に丸裸にする。オリジナルハイヴでのBETAとの最終決戦はそれからだ。

そして今、ガメラはハイヴとBETA殲滅のためにウランバートルの大地へと降り立っている。

上空からプラズマ火球を発射して地上のBETAを一掃、その後地上戦と空中戦を切り替えながら地上に湧き出てくるBETAを火球

で、その巨体に任せた肉弾戦で焼き払い、叩き潰していく…計四回に渡るハイヴ攻略戦においてガメラが常々用いていた戦術でもってBETAを圧倒する。

元々BETAの対空戦力は光線属種によるレーザー照射以外存在しない。だが、現存の光線属種のレーザーではガメラの持つ耐熱性を貫くことが出来ず、むしろ逆に熱をエネルギーとするガメラへとさらなるエネルギーを与える結果となってしまう…。

すなわち現状において空中戦はガメラにとってはBETAに対する最も有効な戦法であり、上手くいけばBETAに何もさせる事無く一方的に殲滅することすらも可能なのだ。

とはいえジェット噴射からのプラズマ火球爆撃はそれ相応にエネルギーを消耗すること、そして空中からの爆撃のみでは全てのBETAを殲滅しきれないのもあるために地上戦と空中戦を切り替えつつBETAを殲滅していく。

無論BETAもただ黙って殲滅されているわけではない。人類に用いた数に任せた物量戦法、光線属種による対空砲火だけではなく、地面、あるいは倒壊した建物からの奇襲すらも行って、目の前の『障害』へと対処しようとする。

…が、無駄だった。数を頼みの戦法は圧倒的な『力』によって押しつぶされ、空飛ぶ航空機すらも正確無比に打ち抜き、焼き尽くして墜するレーザーはガメラの身体を貫くことはかなわず、地面からの奇襲すらも即座に空中へと離脱、あるいは回転飛行で張り付いたBETAを無理矢理振り払うと言った行為で無力化されてしまう始末であり、今のBETAは目の前の怪獣に手も足も出ないような始末であった。

そもそもBETAには戦術というものが無いわけではないのだ。地球に降り立ちカシユガルへとハイヴを築いたばかりの頃は、BETAには光線属種というものは存在せず、空からの攻撃への対処法は存在しなかった。だがそれは僅か二週間後、BETAを指揮する上位存在、重頭脳級によって既存の光線属種を改良して製造された光線級、重光線級の二種のBETAによりこの優位は覆されることとなった。

圧倒的なまでの物量に加え、レーザーという絶対必中の対空兵器まで得てしまったBETAにより、瞬く間に人類は劣勢に陥る羽目となつてしまったのだ。

このあまりにも迅速としか言いようのない航空兵力の無力化の要因は、BETAが独自に持つ情報伝達能力、そして学習能力にあった。

BETAがある対象と戦闘、BETAの言うところの災害、障害と遭遇し、その戦闘、戦術データをハイヴへと持ち帰った場合、そのデータはハイヴ内部の反応炉を介してオリジナルハイヴの重頭脳級へと送られる。重頭脳級はその『災害』のデータの整理及び対処法を分析したのちにそれを世界中のハイヴへと伝達する。それに要する時間は約19日、光線属種の製造による航空戦力の対処もまたこの手段で航空戦力への情報を得ていたが故であり、最悪人類の保持する兵力、兵器、戦術すらも学習してしまう可能性もあるのだ。

現にBETA大戦初期にはただ単純に数でこり押ししていたものが、大戦中期には歩兵より高機動車、装甲車よりも戦車、さらに無人兵器では搭載コンピューターの機能がより高いモノをというふうな攻撃優先度をつけ始め、今では無人機よりも人間が搭乗する機体を優先し攻撃するようになっていく。

そして武がループする以前のこの世界では、横浜基地の動力源として利用されていた頭脳級BETA、所謂反応炉から入手した情報を元に、佐渡島ハイヴ攻略後の横浜基地防衛戦においてBETAは陽動、兵力の温存、死角からの奇襲といった明らかに戦術としか思えない行動をとり、仕舞には高性能爆弾S-11の起爆装置のみを正確に破壊するという今までの常識では考えられない行動をとるまでに「学習」していたのである。

これこそがBETAが人類を圧倒し続ける要因であり、未だに人類がBETA相手に劣勢に立たされている要因である。未だに人類に対して戦術らしい戦術も使わず、数の暴力で押し続ける戦法に終始しているのはあくまで『今の人類』、あるいは地球上の生命相手にはこれで十分、あるいはコレが一番有効な戦術であると重頭脳級が判断しているからにすぎないのだ。

だが、ならばこの状況は一体どういう事なのか。BETAは持てる手段の限りを尽くしてガメラを排除せんと挑みかかるも次々と潰され、灰にされ、あつという間に姿を消していく…。今のBETAはまるで燃え盛る火の海に次々と飛び込む蟲の集団、あるいは荒れ狂う大河に向けて突進するネズミの群れか何かのような様相である。

これにはガメラの圧倒的戦闘能力と防御能力も勿論ではあるが、何よりも目の前の“災害”に対する情報整理、そして対処法の分析のための時間、そして情報量の不足があった。

そもそもガメラの最初のハイヴ攻略戦、横浜ハイヴ殲滅戦ではガメラの手によりほぼ全てのBETAが根こそぎ滅ぼされ、重頭脳級はガメラに関する情報を殆ど得る事が出来なかった。

そして何よりガメラの進撃速度はBETAの、重頭脳級の予想を遥かに超えていた。横浜ハイヴのBETA殲滅後は佐渡島ハイヴをBETAごと撃滅、さらにその二日後には鉄原、ブラゴエスチエンスクの二つのハイヴを立て続けに落とされ、さらにそれから二日も経たないうちに今度はウランバートルハイヴまで陥落させられそうになっている…。

こうも立て続けにBETAとハイヴを破壊され、さらに送られてくるはずの情報もガメラが反応炉を粉微塵に破壊してしまうがために碌に入手できない。その上ガメラに対抗するための新型BETAの開発発にもそれ相応の時間がかかりその間に次々とハイヴが陥落させられてしまう…。結局現状でBETAは持ちうる手段でガメラと戦う以外にはなかった。

物量で押し、時には奇襲をかけ、目の前の障害を確実に討ち滅ぼさんと襲いくるBETA…。だが脆い、弱い、足りない…。目の前の障害を越えた天災…。地球そのものが産み出した守護神を排除するには、明らかにこの場に存在するBETAでは役者不足でしかなかったのだ…。

『グルアアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』  
咆哮と共に発射される地獄の炎、万物を焼き尽くすプラズマ火球がBETAの集団へと突き刺さり、爆発炎上する。

大地に広がる炎がより拡大し、より広範囲の廃墟を、そこで這い回るBETAを焼き払い、大地を覆いし穢れを浄化していく。

瞬時にハイヴ周囲の大地はガメラ以外の生命の棲まぬ焼け野原へと姿を変える。だが、その焼け野原へと再度ハイヴから、そして隣接するハイヴから進軍してきたのであろう増援のBETAが展開し、覆い尽くしていく。

だがそれもまた、目の前の守護神、否、BETAにとっては破壊神ともいえる巨神の灼熱の吐息の前に灰と化し、跡形もなく消えていく運命にあつたのだ。

やがて地上のBETAの出現が途絶え、辺りは燃え盛る炎が弾ける音のみが響き渡る静寂の大地と化す。だが、ガメラの行動はまだ終わらない。

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

高らかな咆哮と共に脚部からジェットを噴射して空へと舞い上がったガメラはウランバートルハイヴのモニュメントの中央に空いた穴めがけて急降下する。

モニュメント上部には警護の為の光線属種が数十体も存在し、ガメラ目掛けてレーザーを乱射してくるものの、ガメラは意に介した様子もなく逆にお返しとばかりに放った火球で光線属種の群れをモニュメント諸共吹き飛ばす。

光線属種ごと纏めて砕け散り、ポツカリと巨大な大穴を広げるモニュメント、その巨大な大穴に飛び込んだガメラは地の底めがけて落下しながら体内で生成したプラズマエネルギーを口内で吸入した酸素と合成、チャージをし始める。

ハイヴの主縦坑を落下していくガメラ。やがて彼の巨大な両眼はハイヴの奥底、そこで青白く輝く巨岩のような物体、ハイヴの心臓部である反応炉を確認した。

そして、反応炉がガメラの視界に入った瞬間には既に、ガメラの口内のプラズマエネルギーは限界にまでチャージを完了していた。

『グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

咆哮と共に放たれた最大出力のプラズマ火球、ハイ・プラズマはま

るで宇宙から落下する隕石の如くハイヴの奥底へと激突、反応炉を巻き込んで大爆発を引き起こしたのだ。

万象全てを焼き払う炎は反応炉が設置された大広間のみならず縦坑から地上まで噴き上がり、まるで火山が爆発したかのような様相と化している。そして、モニュメント跡から噴き上がる炎と共に、大地に大きく口を空けた大穴から巨大な影が一つ飛び出してきた。

影の正体はガメラ。その身体からは膨大な炎を直に浴びた結果体中から煙が出ているものの、その身体には傷一つない。むしろ炎を浴びてより闘志が増しているかのようにその双眸は爛々と炎のように輝いている。

燃え上がるハイヴから100メートル上空に達したガメラは、ハイヴ諸共炎上するウランバートルの廃墟を睥睨し、高らかに空へ向けて勝利の咆哮を上げる。

雷鳴の如き咆哮は炎上する大地から、モンゴルに広がる寒々しい荒野へと鳴り響いていく。それはまるで、かつてモンゴルの遊牧民達が信仰した蒼き狼の遠吠えの如きであった。

1998年12月5日 H18 ウランバートルハイヴ、陥落。ブラゴエスチエンスクの陥落から僅か一日後の出来事であった。

そしてガメラは、ウランバートルから西北へとジェットを吹かして飛び去っていく。

目指す先にある目標は、H15 クラスノヤルスクハイヴ。ハイヴの規模はフェイズ3・5。未だに4には達していないがそれでも今までガメラが殲滅したハイヴよりも規模が巨大であり、内部に存在するBETAの総数もまた、今までのハイヴを遥かに上回る。

しかしそれでもガメラには緊張は無い、むしろ余裕と言ってもいいくらいであった。

此処までハイヴを5つ、何の障害も困難も無く潰してのけた。いかに今までのハイヴより規模が大きいといえどもBETAに後れをとることは無いだろう。ガメラの、シロガネタケルの心の中にはそんな考えがあった。



油断、あるいは慢心…、それは命を掛ける戦場において抱くのは危険ともいえる思考ではあったが、今までのBETAであつたならば、何万何十万来ようともガメラには傷一つ付けられず、少々慢心、油断があろうとも問題無くハイヴを叩き潰すこともできるだろう。それだけの力がガメラには、今のタケルにはあつた。

事実、ウランバートルと同じ状況であつたのならば、クラスノヤルスクハイヴがどれほど巨大で、内包するBETAがどれほど莫大であろうとも難なく殲滅できたであろう。

……同じ状況であつたのならば、の話であつたが……。

『……吹雪が吹いてきた、もうここはソ連領内、か……』

地上から8000メートル以上の地点を飛行するガメラは吹き荒れる突風と風に混ざって飛んでくる雪、雹、霰をその巨体に浴びながらグルル…、と唸り声を上げる。

クラスノヤルスクハイヴが存在するのはシベリア中部、極寒の地であるソ連領内である。無論ガメラはこの程度の寒さなど物ともしないし、いざ戦闘となつてもコンデイション的には問題は無いだろう。

『……ま、いつも通りいくかな?』

『そう連中を甘く見ない方が良いと思うが……』

脳内にて楽観的な事を呟くガメラ、タケルに対してもう一つの言葉、本来のガメラであるオリジナルガメラは軽く嗜める。

『……なんだよガメラ、さっきのハイヴだつて存外簡単に潰せだし、この調子なら次も何とかなるんじゃないのか?』

『そう願いたい、な。君の記憶の中のBETAに関する情報を見たが、連中の学習能力は相当なものだ。確かにBETAは一匹残さず殲滅し、反応炉は横浜以外潰してはあるが、事ここに至つては連中も何らかの手を打ってくる可能性がある。あまり楽観はするべきじゃない』

『……まあそうだけど、さ……つてちよつと待て』

半分聞き流していたタケルだったが、突如オリジナルガメラが呟いた一言を聞いた瞬間、彼の表情と口調が一変した。そしてタケルはオリジナルガメラへ向かって震える口調で恐る恐る問いかけた。

『ガメラ、お前、俺の記憶を見たとか言ったよな……？って、言う事はだ、あ、あの記憶も見たのかよ……？』

『あの記憶？あの記憶とはなんだ？』

タケルの問い掛けにオリジナルガメラは本当に訳が分からなさそうな口調で逆に聞き返す。タケルは深々と溜息を吐きながらどう説明したものか分からずに口籠っている。

『えつと……、その、だな……、俺が、純夏、冥夜達と……俺が居た世界とこの世界で、その、夜に、裸で抱き合って、だな……ああもう言わせんじゃねえ恥ずかしい!!』

口に出すのも恥ずかしいのか全く要領を得ない単語の羅列の末については逆切れしたのか絶叫まで張り上げるタケル、そんな彼の言葉を聞いたオリジナルガメラはグルル……と唸りながら何やら考えている様子だったが、ついにタケルの言いたいことが分かったのかポン、と手を叩いた。

『夜？……ああ、生殖行為か、それなら君の記憶が流れ込んだ折にチラリと見たがそれがどうし……『何勝手に人の恥ずかしい記憶見てやがるんだ!!忘れろ!!あれに関しては絶対忘れろ!!そしてもう二度と見るな!!』……何を突然怒る。生殖行為は生物が子孫を残す為に行う当然の営み、特別恥ずかしがるものではあるまい?』

『ぐう……』

思い人達との初夜その他諸々の記憶を覗かれた事に激昂するタケルだったが、当のオリジナルガメラは何故己が怒鳴られたのか本気で分からない様子で、不思議そうにタケルへと問い返してくる。文字通り暖簾に腕押し、糠に釘な反応にタケルも押し黙ってしまう。

『……そういやコイツ怪物だった。だったら人間の持つてる羞恥心なんてまず持つちやいなんだろうな……、下手したらプライバシーなんかも知らないんじゃないやあ……。……と、とにかくあの記憶は俺達人間にとつちや隠しておきたい記憶なの!!見られたら恥ずかしい物なの

!!だから忘れろ!!そして二度と見るなお願いします!!』

『??:ふむ、君がそう言うならばそうしよう。しかし人間とはおかしなものだ。他の生物が持ちえない多種多様な感情、前の世界でもそうだったが実に興味深い:』

タケルの怒鳴り声に不思議そうに同意しながらブツブツと何やら呟くオリジナルガメラに、タケルはこれからの先行きに少々不安を感じ始めた。

どうやらオリジナルガメラ本人からすれば悪気は無く、単にこの世界の情報、ハイヴ、BETAについてタケルの記憶を探って調べようとした程度なのだろうが、結果として己の情事の記憶まで覗かれたのだからいい気分ではない、というか己の記憶を勝手に覗き見られて喜ぶ奴等この世に居るはずがない。

『ハイヴでの戦いが終わったら勝手に人の記憶見ると釘刺しとかないと:』

ガメラ、タケルは苦虫を噛み潰したかのような表情で飛行しながら心の中でそう決意するのだった。

その後二人は一言も発せず次なる目的地へ向けて飛行を続けていると、突然雲を切り裂いて無数の閃光がガメラに向かって突き刺さった。光線を照射されたガメラは眼球を動かして己の真下、地上の風景などにも見通すことが出来ない暗雲へと視線を向ける。

先程の光線、あれは間違いなく光線属種のレーザー照射であった。ならば此処は既に:。

『タケル、無数のBETAの気配を感じる。ハイヴに到着したぞ』  
『:ようやくか。せめてBETAぶち殺してこのストレスを発散させるか:!!』

オリジナルガメラの声を聞いた瞬間、タケル、ガメラの眼光が妖しく輝き、瞬時に地上めがけて急降下していく。

重力とジェット噴射によって漆黒の暗雲と吹き荒れる豪風を引き裂いて、地上に降り注ぐ雪よりも早く大地へと落下していくガメラ。そのガメラを撃ち落とさんと地上の光線属種は何十何百ものレーザーの弾幕で迎え撃つ。

一撃一撃が航空機を、降下する戦術機をも穿ち、貫き、撃ち抜く一撃必殺の死の閃光、それが弾幕の如く放たれるという悪夢の如き状況……。いかに精強で豪胆な衛士であろうとも確実に死を覚悟するであろう状況……。

だが、ガメラの落下は止まらない。幾十幾百の光の槍を受けようともそれがどうしたと言わんばかりに意にも介さず大地目掛けて急降下していく。

6000メートル、5000メートル、4000メートルと急激に降下していくガメラ、が、降下していくごとに彼へと突き刺さるレーザーの数は段々と増していく。だが、いかに戦術機を一撃で蒸発させるレーザーでも、強力な耐熱性をもつガメラの肉体は貫くどころか火傷一つ負わせることも出来ず、彼の進撃を止める事が出来ない。

そして、ついに高度3000メートルにまで到達、雲の壁を突破してようやく己の降り立つ大地の光景が視界に入る。

そこは吹雪の吹き荒れる広大な銀世界。辺り一面が雪に埋もれた荒野であり、何処までも平坦な純白の世界が広がっている。

その純白の世界を我が物顔で歩き回る大小様々な無数の異形、BETA。文字通り大地を埋め尽くさんばかりの膨大な数の侵略者の群れはこちらへ向けて降下してくる獲物を今か今かと待ち構えている。

そしてその平坦な銀世界の中央に聳え立つ鈍く輝く金属でできているかのような歪な建造物。これこそがクラスノヤルスクハイヴのモニュメント。その高さは今まで攻略したハイヴのそれとは比較にならない程巨大であり、高さはおよそ150メートル以上にまで達している。

一面に広がる下界の光景を睥睨したガメラは高らかな轟咆を張り上げながら、その耳まで裂けた巨大な口から火球を5発、眼下に広がる地獄へ向けて発射した。

5発の火球は寒々とした大地に広がるBETAの大軍勢に向けて落下、そして着弾と共に大爆発を起こし、雪と蟲のみの大地に5輪の大輪の紅い華を咲かせる。

その光景を見たガメラは降下しながらさらにプラズマ火球を大地

目掛けて乱射する。

ほぼ狙いも碌に付けずに発射される火球、だったが火球地上に展開された何万という数のBETAへと次々と着弾していき、数百ものBETAを消し炭へと変えていく。BETA側もそれに応戦するかのよう光線属種が次々とレーザーで迎撃するものの、相も変わらず効果が無い。火球は大地に広がるBETAだけではなくBETAの居城たるハイヴモニュメントにまで降り注ぐ。モニュメントは火球が命中した瞬間に大爆発を起こして砕け散り、まるで金属のような光沢を放つ破片を火の粉と共に大地に撒き散らしていく。

やがて、ガメラが地上へと降り立った時、地上の姿は一変していた。一面雪が降り積もった寒々しい銀世界は無数の炎が立ち上る灼熱地獄へと変貌し、そこを動きまわっていた何万ものBETAは一匹残らず灰となり、この世界に動くものは何一つとして見当たらない。

地上に展開していたBETAは全滅した。だが、まだ終わっていない。直ぐに地上の同胞が全滅したことを感知し、第二軍、第三軍のBETAが押し寄せてくるだろう。

だが恐れは無い。不安など微塵も感じない。ガメラには既にこの戦いの勝敗は見えている。いかに虫けらが何十何百群れようとも巨大な象を倒すことが出来ないように、BETAが何千何万集おうともガメラを倒すことなど出来はしない。

ガメラの視線の先に立つハイヴのモニュメント、否、もはや火球で爆砕されて半壊し、もはやモニュメントとも呼べない有り様となった瓦礫の山、その真下に空いた穴から新たなBETAの軍勢が沸き出してくる。その見るもおぞましい、大抵の人間ならばパニックを起こすであろうその光景に、ガメラはまるで類稀なる御馳走を見つけた猛獣かのように牙を剥き出しながら歓喜の咆哮を張り上げる。

これから始まるのは戦いではない。  
ただ一方的な虐殺だ。

目の前に群がる虫けらどもを踏みつぶし、噛み砕き、引き裂き、焼き殺す…、血と炎の宴に過ぎない。

さあ殺そう、その血を存分に啜りつくそう。

その光景こそが、己の待ち望んだものだったのだから……!!

『グルオオオオオオオオアアアアアアアアオオオオオオンンンン!!』

大地を揺るがす咆哮と共に放たれる一発の火球、それこそがこの北方の大地、クラスノヤルスクにおける殲滅戦の開始を告げる号砲となった……!!

処変わって此処は国連軍横浜暫定基地モニタールーム。

国連軍および帝国軍所有の軍事衛星によつてガメラの動向を24時間監視し続けているそのモニターには、現在クラスノヤルスクハイヴにて戦闘中のガメラの姿が映し出されている。

この場の職員は皆既にウランバートルハイヴの陥落も目の当たりにしている。故に皆次なるハイヴ、クラスノヤルスクが陥落するとう事を信じて疑っていない。

これまでもガメラは、硫黄島で覚醒してから現在まで何ら苦戦すること無くハイヴを5つ陥落させている。故に今回もそうなるだろう、確かに規模は今までのハイヴより巨大だがそれでもガメラなら陥落させてしまう事だろうと、この場に居る人間全員がそう考えていた。

それは稀代の天才である物理学者、香月夕呼も同じである。無論少なからず不安要素は抱いてはいるものの、それを含めたとしてもガメラならば勝利できると確信を抱いていた。

「……クラスノヤルスクハイヴからBETAの増援が出現！総数はおよそ10万以上と思われます!!」

「いよいよ、ね」

オペレーターターの報告通りクラスノヤルスクの大地の彼方此方に空けられているハイヴへの出入り口から、まるで水が湧き出るかのようになげき切れないほどのBETAの大軍勢が出現する。それを目視したガメラはまるでそれに歓喜するかのごとく雄叫びを上げ、夕呼もまた楽しそうな笑顔で唇を舐めた。

これから始まる一方的なまでの虐殺劇、それを想像するだけでも夕

呼は恍惚とした笑みを押さえる事が出来なかった。

「んふふ♪明日の朝食はジンギスカンとボルシチになりそうねえ♪あの3人が喜ぶ顔が目に見えるようだわア♪」

「……………」

楽しそうな笑みを浮かべながらそんな事をのたまう夕呼を横目で眺めながら、横浜暫定基地司令にして彼女の上司であるラダビノツド司令はつい昨日多数寄せられた衛士及び基地スタッフの苦情を思い出しながら、彼女に気付かれないようにそっと溜息を吐いた。

ガメラSIDE

結局、戦いはウランバートルと同様一方的なまでの試合展開で進んだ。

否、もはやこれは戦いと言っていないのかすらも分からない。むしろ一方的な大量虐殺と言った言葉のほうが適切なような気がしてならないだろう。

BETAは必死にガメラに抗った。レーザーを撃ち、数に任せて突撃し、足元から奇襲をかける…、今持ちうるすべての手段を用いてガメラへと抗ったのだ。

だがそれはすべて無駄に終わった。レーザーはガメラに傷を負わせること無く逆に熱を食料とするガメラのエネルギーとなり、数をそろえた突進もガメラのプラズマ火球、踏みつけ、尾の薙ぎ払いによって一掃され、奇襲は寸前で宙へと逃れられて失敗し、地上に出現したところをプラズマ火球で一網打尽にされる始末…。

やがて地上は紅蓮に燃える炎の花が咲き誇る炎獄と化し、そこにはガメラ一頭のみが炎の海の中でまるで巖の如き巨体を晒していた。そこにはもうBETAは居ない。地上を這いまわっていたBETAも、その後次々と出現していたBETAも残らずこの炎の餌食となり、焼かれて灰と化している。

立ち上がる炎は大地を覆い、降り注ぐ雪すらも地面に到達すること無く空中で次々と蒸発していく。炎に彩られた真紅の大地でガメラは高らかに勝利の咆哮を張り上げると、脚部を甲羅に引き込んで空高

く飛翔する。

そしてハイヴモニユメントの上部に穿たれた巨大な穴に向けて一気に降下してハイヴ内部へと侵入する。約1000メートルを越える深度の主縦坑を脚部のジェットを噴射しながら下降し、やがてハイヴの中枢、大広間の中央に鎮座する反応炉を発見した瞬間にガメラは反応炉めがけてハイ・プラズマを発射、ただの一撃で反応炉は砕け散り、大広間は地獄の炎に包まれる…。

『グルアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオンンンンン  
!!!!』

灼熱の炎に包まれた大広間で、ガメラは高らかに咆哮を張り上げながらただ一人勝利に酔う。炎に包まれた命無き地の底の光景、今回を入れれば6度目にした光景に、ガメラはただただ酔っていた。

だからだろうか、ガメラは気がつかなかった。

今この場に近づいてくる巨大なソレの気配を…。

『ふう…ようやく終わったな…。少々でかくなっても案外なんかなるもんだな、ハイヴ攻略も』

『基本的な戦い方は変わらないからな。奇襲を避け、火球と格闘戦で押しつづす、これだけだ。所詮連中も圧倒的数と光線属種のレーザーに任せた物量作戦しか行えない。まあ君の記憶によれば学習能力もあるらしいが、な…』

『ああ、純夏が調整された時に記憶を盗み見られて、な…。ってそういや00ユニットの問題点があつたな…。どうやって伝えようか…。』  
地の底に広がる灼熱地獄でガメラ、タケルはグルル…、と唸り声を上げて考え込む。

前のループにおける横浜基地防衛戦、その時にBETAは陽動、戦力の温存と言った今までBETA大戦時には見られなかった行動を行い、拳銃精密機器であるはずのS-11の起爆装置のみを破壊してのける芸当までやってのけた。

これは00ユニット、鑑純夏の調整時に反応炉を通じてその記憶を読みとったからとされており、これをどうにかしない限りよしんば0



0ユニットが完成したとしてもさらに人類を窮地に追い込む結果になりかねない。とはいえ怪獣であるが故に人間との意思疎通はできず、唯一出来るとしたなら交信機であるオリハルコンの勾玉をもった「巫女」しかいないのだが…。

『そんな人間が果たしている事か…。いるわけないよなあ…。ハア…。』

『…やはりその00ユニットとやらが完成する前に私達の手でオリジナルハイヴを殲滅するしかあるまい…。まあいい、今日はこれくらいにしてそろそろ帰還するでしょう。武、次は…。』

オリジナルカメラがタケルに帰還するように提案した、その時…。

『!?』

『な、なんだこの揺れは!?』

突如として大広間全体に激震が走った。まるで局地的に大地震が起きたかのような超振動、カメラはあまりにも突然の事に動けずにと視線を巡らすしかなかった。

驚くべきことはそれだけではない、その振動は段々と、カメラのいる大広間へ向かって接近して来ているのだ。

段々と炎の渦巻く大広間へと接近しつつある震源、カメラは息をのんで大広間で待ち構える。そして…。

炎に包まれた大広間の岩壁をぶち抜き、それは姿を現した。

それはさながら人間がトンネルを掘る際に使用する掘削用ドリル、あるいはバフンウニの口に良く似た形状の巨大な円形の物体であった。それは、間違いなく何らかの生物の頭部、あるいは口とも言うべき部位だった。

だが、驚くべきことはそれではない。信じられないのはその大きさだ。その巨大な口は目測でも約170メートル、カメラの裕に二倍以上はある。頭部の、あるいは身体の直径のみでこれ程の巨大さを誇る生物などこの地球上の歴史でも存在しえないだろう。

これが身体の一部位とするならば、全長は一体どれほどになるだろうか…。数百メートル、あるいは一キロメートルを越えるかもしれない…。

そんな人智を越えた超巨大生物がハイヴの大広間をぶち破り、まるでガメラが子が見えるほどの巨体を震わせながら、大広間へと姿を現した。目測で一キロメートルを越えるであろうその芋虫の如き形状の巨体は、大広間中に広がる炎をもともせずガメラを見降ろしている。

ガメラは、否、タケルはその超巨大生物を知っていた。だからこそ彼は驚愕していた。何故、何故奴が此処に…!!今の今まで姿形も見せなかつたというのに…!!

タケルがこの怪物を目撃したのは二度、一度目のループではBETAの集団との戦いの最中に、二度目のループでは桜花作戦の時、中枢へと向かう途中で何の前触れも無く出現した。

恐らくこの世界の人類すべてがこの怪物を知らないだろう。これこそが地面の遥か底で無数のBETAを運搬し、BETAの進撃の要ともなっているという事を……。

これこそが直径176メートル、全長約1800メートルという規格外の巨体を誇る全BETA中史上最大のBETA…。

母艦級の威容であった。

母艦級という名称はタケルがループした桜花作戦以降に命名された名称、故にタケルはその名前を知らず、ただ単に未確認大型種BETAとしか呼ぶしかない。

しかし名前がどうであれこのBETAが規格外の巨体を誇る事、そしてその体内に無数のBETAを搭載しているには変わらない。

突然の母艦級の出現、あまりに予想外の事態にガメラは少なからず動揺していた。

…しかし、それも僅かな間であった。

『グルルアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオンンンンンン!!!』  
一転してまるでその巨体に挑みかかるかのように高らかに勇ましく咆哮を張り上げるガメラ。確かに相手は己より遥かに巨大、大ききも、純粋な力の差も歴然だろう。

だがそれがどうした？高々その程度で戦意を喪失してこの先BETA

TAと戦っていいのか？

この化け物は恐らく他にも、オリジナルハイヴにすらも存在するかもしれない。ならばコイツ一頭ごときに怯んでいるようでは、到底オリジナルハイヴを落とすことなど叶わない。

ならば奴は此処で叩き潰す…!!これから先に進むためにも…!!

ガメラの咆哮を合図としたかのように、母艦級はその巨体からは想像もできない速度でガメラめがけて突進してくる。瞬時にジェット噴射で回避したガメラは瞬時にその巨大な芋虫の如き巨体へとプラズマ火球を三発叩きこむ。

万物を瞬時に燃焼させる火球は逸れる事無く母艦級へと命中、爆発炎上する。

…だが、母艦級は死なない、確かに命中した箇所は炎上し、肉は爆発によって抉れているもののまるで何事も無かったかのようにその巨体を蠢かしている。

“…：…やっぱり肉の厚さが桁違い、か…”

ガメラ、タケルはプラズマ火球に耐えきった母艦級に驚いた様子も無く空を飛びながらその巨体をじつと観察する。

母艦級の体表を覆う表皮の硬度は要塞級すらも遥かに凌ぎ、大和級戦艦の主砲にすら耐えきる程の耐久力を有している。それ以上にその巨体に比例して硬質な表皮の内側には分厚い肉の層が連なっているため、例え表皮を突破しても内臓部までダメージが届かず、致命傷を与える事が出来ないのだ。

ガメラもその巨体から高々火球2、3発程度では沈まないとは予想しては居たが、まさか何事も無かったかのように動き回るとは思いもしなかった。

こうなってしまうってはまともにダメージを与えるにはハイ・プラズマの一撃か、あるいは…。

そんなことをガメラが考えていると突然母艦級が地面に穴を掘って潜り始める。その巨大な頭部が文字通り削岩機の役割を果たしてその巨体を瞬時に地面へと沈めていく。

ガメラは瞬時に火球を母艦級めがけて叩きこむものの、やはり母艦

級は意にも介さず、その1800メートルの巨体はあっという間に地面の底へと消えていった。

『グルルルルル……』

逃げたのか、と大広間中へと視線を巡らせるガメラ。だが、母艦級が地底を移動する巨大な振動は遠ざかる気配を見せず、その気配は地面の底から段々と上の層に向かって登っていく。巨体に反して驚くべき移動速度、恐らくこれが今の今まで母艦級が発見されることなかった理由なのだろう。

と、何かに気がついたガメラは瞬時に天井へと視線を向ける。だがその瞬間、ガメラの頭上の天井が割れ、そこから母艦級の巨大な頭部が何の前触れも無く飛び出してきた。その削岩機を思わせる巨大な口に無数についている牙はギチギチと蠢いて今にもガメラを噛み砕こうとしているかのようなのである。万が一にもその牙に触れようものならいかに強固なガメラの甲羅でもひとたまりもないであろう。

ガメラは脚部のジェットを噴射して急いでその場から逃れ、炎が燃え盛る大地へと不時着する。目標を失った母艦級はそのまま地面に向かって突進、再び大地を抉りぬきながらその身を地中へと埋めていった。

凄まじい潜行速度と言わざるを得ない。これでは人間が長年発見することが出来ないはずだ。もしかしたらこの地球上には母艦級以外にも人類が観測できていないBETAが存在するのかもしれない。……あまり考えたくない事ではあるが。だが今はそんなことよりもこの化け物を何とかしなくてはならない。

母艦級が地面を侵攻する時、決まって周囲に地震が発生する。どうやって己の居場所を感知しているかは分からないがこちらの居場所は奴に判明しているとみて間違いは無いだろう。

……ならば、次に出現するのは……。

『グルオオオオオオオオアアアアアアアア!!』

今己の立つ地面から飛翔し、その巨体を宙へと踊らせるガメラ。と、同時にガメラの立っていた大地が陥没し、そこから母艦級の巨体が飛び出してくる。またも獲物を逃した母艦級はその巨大な胴体を

蠢めかせて円筒状の頭部を振り回している。

それをチャンスと見たガメラは母艦級の巨大な頭部、そして削岩機の如き口へ向けてプラズマ火球を2発連続で発射した。いかに強硬な外皮で覆われようとも頭部ならば幾分か脆いはず…!!そう判断しての攻撃であった。

火球は頭部、そして口へと命中した。流石の母艦級も口に火球を叩きつけられて平気と言う訳にもいかず、名状しがたい絶叫を張り上げながら身体をくねらせている。

チャンスとばかりにガメラは母艦級へと襲いかかる、が、直ぐに地面へと潜って姿をかくしてしまう。

ガメラはいらただしげに唸り声を上げる。二つのハイヴの殲滅と数十万ものBETAとの戦闘で、今の己の体力は限界に近付いている。プラズマ火球も後何発撃てるか分からない。だが、こうも地面に隠れられ続けたら攻撃もできずどうしようもない。

……こうなれば、とガメラは決意すると飛行状態でその場に待機し、ジツと何かを待ち始める。

すると数秒後、突如ガメラの真下の地面が爆音と共に破碎し、母艦級の巨大な顎がガメラを食いちぎらんと襲いかかってきた。見ると母艦級の口は先程の火球で大きく抉られ、肉は焦げ、歯は砕け散り、一部は炭化しているところもある。

その恨みを晴らさんとばかりに巨体を躍らせこちらへと襲いかかる母艦級、だがガメラはその巨体の届かない高さにまで身体を上昇させて突進を回避する。

母艦級は巨体がガメラに届かないと見るや、再度地底へと身体を沈め、その巨体を移動させ始める。今度はガメラに届く範囲から攻撃を仕掛けようというのだろうか。

“……それでいい”

ガメラは母艦級の巨体が地面に消えるのを見届けるとハイヴの主縦坑から出口に向けて一気に飛翔する。母艦級が移動する振動もまた、ガメラを追いかけるかのように主縦坑を登っていく。

これこそがガメラの狙い。外皮の硬度以前に相手は地底を潜行し

て攻撃することを得意としている。元々攻撃の為の能力ではないの  
だろうが、いずれにしても地面に潜られてはこちらの攻撃が相手に命  
中することは無い。

ならば一度奴を地面から引きずり出して、そこを叩く。幸いこちら  
の攻撃が全く通用しないわけではない。だから地上で戦えば少な  
からず有利になるはず：!!ガメラ、タケルは脳裏でそんな予測を立てな  
がら地上へ向けて飛翔し続ける。

やがてモニュメントの残骸にぽっかりと空いた巨大な穴からガメ  
ラは再度地上へと飛び出した。相も変わらず炎の立ち上る焼け野原  
の大地に、ガメラはゆつくりと脚をつける。

重々しい地響きと共に地面に足をつけたガメラは己の飛び出して  
きたハイヴモニュメントへと鋭い視線を向けた。：瞬間、周囲に地震  
の如き揺れと地響きが響き渡り、ガメラのすぐ傍の地面がまるで薄氷  
が砕けたかのようにひび割れ、そして爆発するかのように粉微塵に砕  
け散り、そこから母艦級が、まるで天に上る竜か何かの如くに姿を現  
した。

『グルオオオオオオオオオオアアアアアアアアアアア!!!』

姿を現した巨蟲へと高らかな咆哮を張り上げるガメラ、と、母艦級  
は今度はガメラに突進するのでもなく、その削岩機の如き巨大な口を  
大きく開いて、そこから一本一本がガメラの巨体すらも貫きかねない  
程巨大な牙が並んだ円筒形の第二の口を出現させた。

『……………!?!?』

突然の母艦級の行動に一瞬驚くガメラであったが次の瞬間その表  
情はさらなる驚愕に染められる事となる。母艦級の口内から何千、何  
万ものBETAがまるで蟻のように這い出てきたのである。それも  
小型種、光線属種だけではない。突撃級、要撃級、そして巨大な要塞  
級までもが混ざっている。それを見たガメラは心の中で悪態をつい  
た。

“……………そうだった、こいつは腹の中にBETAを大量に飼って居や  
がるんだった：!!”

母艦級の本来の役割は地底を掘り進んで別地点へとBETAを輸

送すること。大深度地下でのBETA侵攻にはこの超巨大なBETAが関わっており、体内に無数のBETAを収納できるのもこの役割故である。

通常ならば何千何万ものBETAもものともしないガメラ、だが、今は状況が悪い。

普通のBETAだけならともかくその背後には規格外の巨体の母艦級が控えている。いかにBETAが味方を攻撃しない性質とはいえ、これだけの巨体を誇っているのなら下手をしたら多少の犠牲を無視してでもこちらを攻撃しかねない…。

そうこうしているうちにBETAの集団がこちらめがけて津波の如く押し寄せてくる。流石にこれ程の数を地上で相手にしてはいらぬガメラは空高くへと飛翔して逃れる。

空へと逃げたガメラへ向けて光線属種のレーザーが襲いかかるが元々通用しないためにガメラはそれを無視、むしろ火球のエネルギー補給の為に積極的に命中していく。

『グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

高らかな咆哮と共に地上めがけて火球を乱射するガメラ。光線属種以外に対空攻撃手段をもたないBETAは無抵抗のままにガメラの火球の爆撃を受け粉微塵に吹き飛ばされていく。だがBETAの群れは絶えない。次から次へと母艦級の口からBETAが吐き出されて中々数が減る様子が無い。

一方の母艦級はBETAを吐きだすのみで何もする様子が無い。これはそれ以外に何もする気が無いのか、それともガメラが疲れて地上に降りてくるのを待っているのか…。

どちらにせよこのままではジリ貧で体力を無駄に消耗するだけだ。母艦級本体を叩こうにも一発二発のプラズマ火球ではどうしようもない。…：ならば、とれる一手は一つ。

「一か八か、だー!!」

ガメラは咆哮を張り上げながら急降下、群がるBETAを風圧とジェット噴射で振り払いながら口を大きく開けている母艦級へと一直線に向かっていく。





引き裂かれ、絶命した。そして嘖き上がる爆炎から飛び出す影が一つ…。

『グルオオオオオオオオアアアアアアアアアア!!!』

高らかに勝利の咆哮を上げながら天空高く舞い上がるガメラ、だが、いつまでも母艦級を葬った余韻に浸っては居られない。ガメラの眼光は、大地を這い回る虫けらへと向けられている。

ガメラの攻撃と母艦級が暴れまわった余波で相当数のBETAが死んでいるとはいえ、未だに大地には数万ものBETAが生き残っている。これを野放しにはしておけない。

放っておけばまた別の地でハイヴを建設させられるかもしれないし、何よりオリジナルハイヴに情報を送られても面倒なことになる。

…連中はここで一気に殲滅する。ガメラの口から火の粉が溢れる。

この瞬間、この大地を再度埋め尽くしていたBETAの運命は決定した。

ただ守護神の暴威の前に蹂躪されるという運命が…。

1998年12月6日 H15クラスノヤルスクハイヴ、陥落

同時にハイヴにて新種の超大型BETA出現、ガメラによつて殲滅されたこの個体は、後に“母艦級”と命名。

また、ガメラはハイヴおよび母艦級撃滅の後に日本海沖に向かって飛行、その後海底に没し消息不明となる。

## 第16話 石版と勾玉

白銀武はまた、夢を見ていた。

あの時と同じ、この世界とは全く違う世界の夢を…。

BETAのいない平穏な日常、平穏な世界。そこにある己の部屋で彼、*「武」*は目を覚ました。最も朝の弱い武の事、そこから蒲団をかぶって二度寝し、結局母親か純夏に無理矢理起こしてもらう事となる。

そこからいつも通り学校に行き、授業を受け、友人達と何でもない会話をし、家に帰り、眠る。時折友人とゲーセンやらコンビニやらに寄ったりすることはあるものの、平凡で平穏な、それこそ戦術機に乗ってBETAと殺し合う事などフィクションでしかないであろう日常…。

それが今日もまた始まると夢の中の武も夢を見ている武も信じて疑わなかったことだろう。

…：…そう、目を覚まして寝がえりをうった瞬間に、目の前に美少女が添い寝しているというぶつとんだ光景を目の当たりにしなければ…。ついでにその光景を己を起こしに来た幼馴染に目撃され、激昂した幼馴染の手によってお空に輝く一番星にされなければ…。

結局純夏と揉めに揉めた末にあの美少女は幻覚、あるいは幽霊の類であったと結論付けられた。一度部屋から離れた時に謎の美少女は忽然と跡形も無く消えていたし。

幻覚や幽霊にしてはやけに温もりや感触が現実的ではあったものの、それも寝起きだったからだろうと武は半ば無理矢理結論付けた。大体武はあんな美少女と面識は無い。もし面識があったのならばまづ間違いなく脳裏に記憶が残っているはずだ。それが無いという事はあの美少女は現実の人間ではない。幽霊という事で間違いないのではないか。武の強引な説得に純夏も半信半疑ながらとりあえず信じてくれたようであった。

こうして朝っぱらに武の横で添い寝していた幽霊騒動については

こうして決着がついた。……決着がついた、はずだった。

学校での朝礼で担任の神宮寺まりもから転校生が来るという話が出た。

もう卒業間近なこんな時期に転校生とは珍しいなく、だの物好きな奴もいたもんだ、等とぼんやり考えていた武、だったのだが、まりもに呼ばれて教室に入ってきた転校生の姿を見た瞬間、驚愕のあまりに椅子から転げ落ちそうになってしまった。

教壇の横に立つ転校生の姿、添い寝していた時の白い襦袢ではなく、椋高校の制服を着て、何やら刀らしきものを携えてはいたものの、その顔は見間違えようも無く、間違いなく今朝己の隣で添い寝していたあの謎の美少女その人だったのである。

美少女、御剣冥夜という名の少女は教壇でのあいさつを終えると武へと近寄り……、

『そなたに感謝を』

『昨日は、夢心地であった。一晩中そなたの温もりを感じていられたのだから……』

等という爆弾発言をかましてくださったのだ。その結果「武」が純夏の拳によつて再度宙を舞う羽目になったのは言うまでも無い……。

こうして「白銀武」の平穏な日常は崩れ去った。

とはいっても別にBETAとの戦いよろしく何かと命懸けの戦いをするわけではない。

ただその日を境に「武」の周囲に少女達が、それも傍目から見れば美少女としか言いようのない少女達が集まってくるようになったのである。

鑑純夏、御剣冥夜、榊千鶴、彩峰慧、珠瀬壬姫……。彼女達と触れあい、時にはぶつかり合い、やがて、「武」は少女達の内の一人と愛し合い、結ばれる事となる……。

……夢にしてはやけにリアルな夢、まるで夢を見ている本人が本当に目の前の光景を体験しているかのようである。とはいえどそれだけリアルでも所詮は夢、夢を見ている武が目の中の「武」と同じ感覚を味わう訳でもないし、目が覚めてしまえばこの光景も直ぐに消え去つ



やまだあり得ないし、というか今の俺達はただの幼友達って感じで……」

まりもの発言に純夏は顔を真っ赤にしてそれこそ基地中に響き渡るような絶叫を張り上げる。両腕をブンブン振り回して大声を張り上げる純夏に流石に百戦錬磨の神宮寺まりもも怯んで顔を引きつらせてしまう。その隣で武が何か言っているが純夏の声にかき消されてまりもには届かない。が、すぐ隣の純夏ががっくりと肩を落としているところから見て、どうやら彼が空気の読めない事を言ったことは確かかなようである。

「……ま、まあいいわ。とりあえず早く行きましょう……。夕呼……。もとい香月副指令が待ってるから……」

「そ、そうっすね……。もうキムチじやなきやいいんですけど……」

「どうせなら普通のご飯とお味噌汁が良いです……。うう……」

「……だ、大丈夫よ……。昨日殲滅されたのはウランバートルとクラスノヤルスク……。モンゴルとロシア……。き、キムチは無いはず……」

2日前のキムチ尽くしのメニューを思い出し、一気に沈んだ表情へと変わる武と純夏、そんな二人を励ましながらもまりもは心の中で『ロシアとモンゴルの料理に辛いのが無かったわよねえ!』と必死に頭を巡らすのであった。

その後三人は無言で廊下を歩き続け、気が付いたらPXの入り口前まで来ていた。入口からこっさり中をのぞくと、やはりというべきか何というべきか夕呼が先日と同じ席で腕を組みながら待っている。少々不安ではあるもののこのまま此処で棒立ちしているわけにもいかず、逃げようものなら夕呼に何をされるか分かったものではない。

「……行きましようか」

「は、ハイ……」

「何事もありませんように……」

三人は決心してPXへのドアを開ける。PXの席は夕呼の座っている席を除いて全部埋まっており、衛士やスタッフが談笑しながら食事をしている。よくよく見るとテーブルの上には何やら鉄の鍋らし

きものが置かれてあり、皆はその上に合成肉や合成野菜を乗せて焼き、焼き上がったそれを手元のたれに漬けて食べている。

「…朝から焼き肉、なのか…？まあ確かにうまそうだけど…」

「すごく美味しそうだね…。で、でも私達が食べるのって…」

「ゴクツ…：…、ハツ！いけないいけない…。ま、まだ油断はできないわ…。ひよつとしたらとんでもない代物が出るかもしれないし…」

夕呼の待つ席へと歩きながらテーブルで焼かれる肉の匂いに唾を飲む三人。

朝っぱらから焼き肉というのもどうかと思うがそれでもこの香ばしい匂いは空きっ腹にはたまらない。モンゴルとロシアのハイヴが陥落したというのに何故焼き肉なのかは知らないが、この食欲をそそる香りの前にはどうでも良くなってくる。最もあの夕呼が素直に三人が喜ぶメニューを出してくるかは微妙であったが…。

夕呼の座る席は、きつちりと三人分の椅子が空いている。良く見るとテーブルの中央には周囲のテーブルと同じく熱せられた鍋が置かれている。その形状はどことなく帽子に見えなくもない。

「おはようお二人さん♪どうやら元氣そうねえ？お姉さん安心したわよ？」

にこやかな笑顔で武と純夏を出迎える夕呼。だが先日のキムチ尽くしの料理のせいで、三人から見れば彼女の笑顔が何故か不穏なものに映って仕方がないのだ。

「お、おはようございます香月副司令…。あ、あの…今日の朝食は何なんでしょう？昨日みたいなキムチはご勘弁を…」

「ん？…ああアレは今日無いから安心なさいって。あのメニュー衛士達からも不評だったみたいでうちの司令に抗議文が大量に寄せられたそうよ？で、この食堂の料理長も『もうしばらくキムチだけは作らないからね!!』ってすっごい怒っててね。ん、やっぱりキムチだけってのは不評だったかな…」

「いや、そりゃそうですよ副司令さん。うう…、な、何だか思い出しただけで口に辛みが…」

あの激辛キムチ鍋の味を思い出したのか純夏の目が涙目になる。

同じく夕呼の隣に座るまりもの顔も真つ青に青ざめていた。

「そ、それで夕呼! きよ、今日のメニューって一体何!? 確かモンゴルとロシアの料理には辛いものなんて無かったはずだけど…」

「はいはい落ち着きなさいってまりも。って言うか三人とも、今日の朝食見て分からない? 食堂に居る人間全員が食べてるじゃない?」

「え?」

夕呼の言葉に武と純夏は食堂中を見回す。テーブルに座っている人間が食べているもの、それは焼き肉。それは分かるが…。

「えっと…、今日の朝ご飯って…、焼き肉ですか?」

「ん〜…、残念! 確かに焼き肉だけど名前が違うわよ? 良く見なさいよ、鍋の形が普通の鍋と違うでしょ?」

「え? 確かに帽子みたいな形をしていますけどこれが何か?」

武の問い掛けに夕呼はニコニコ笑いながらパチンと指をはじく。するとそれが合図だったのか厨房からウエイトレスの少女が大きな皿をもって武達の座る席へと走り寄ってくる。

一度『失礼します!』と頭を下げた少女は合成肉や合成野菜がふんだんに載せられた皿をテーブルに置くと再び頭を下げて厨房へと下がっていく。その後ろ姿を見送った夕呼は皿の上に載せられた合成肉を一枚取り、それを鍋の上へと乗せて焙り始める。

「フフツ♪じゃあまりにも質問。この肉は何の肉でしょうか? 当然合成食品だけである動物の肉により味を似せているものなのよね〜。さあ何?」

「ええ!? ん〜…と、鶏肉じゃあないような気がするし…、ぶ、豚か牛、かしらね…」

「ノンノンノン、は・ず・れ! これは合成羊肉よ。まあ牛肉と豚肉と鶏肉が主流だから分からないのも分かるけどね〜」

「ひ、羊〜!? ってちよつと待って。羊肉で焼き肉、変な形の鍋…:…つてこれ、もしかして…:…」

夕呼の返答にまりもは今日の朝食が何か気がついたようで、夕呼へと視線を向ける。一方鼻歌を歌いながら鍋の上に次々と肉やら野菜

やらを乗つけていた夕呼は改めてまりもに視線を向けるとニヤツと笑みを浮かべる。

「そつ！今日の朝食はジンギスカンよ。やっぱりモンゴル料理と言ったらジンギスカンで決まりでしょ？多分次ガメラが攻略するのはウランバートルだって中りつけて合成羊肉買い集めておいて正解だったわ。ああついでにロシア料理って事でボルシチもあるんだけどそれは今日さっぱりみたいね」

「お、おお、あ、朝からジンギスカンって豪勢ですな〜…」

「うわ〜武ちゃん、このお肉合成品だけどすごく美味しそうだよ…」

「……こんな朝っぱらから何でこんな重たい物食わせるのやら…。まあ激辛キムチよりかマシかな…」

目の前で焼き上がる肉と野菜に目を輝かせる武と純夏、そして朝から鍋という重い物を喰わせる親友に少々文句を言うまりも、そんな三者三様な態度に夕呼は鍋でグ剤を焼きながらクツクツと笑い声を上げている。

「さーてと、まだ焼き上がるまで時間かかるけど今日はお祝い以外に二人に話があるのよ。実はね、つい昨日の話だけどガメラについてのある調査結果が入ってね…」

「が、ガメラの!?!それ本当ですか!?!」

夕呼の言葉に武と純夏は思わず身を乗り出した。夕呼の隣に座るまりもも興味ありげな視線でこちらを見ている。三人の視線を浴びながら夕呼はご機嫌そうに鍋の上の具材を炙っている。

「本当も本当よ。ま、詳しい話は後でするんだけどガメラの背中から発見された石板と勾玉の分析結果がようやく出てね、まあ折角だから二人に教えてあげようって思ったんだけど……どう？教えてほしいなら食事の後に私の研究室にご招待するけど？」

「え、ええ!?!そ、それはまあ願ったりかなったりですけど、でも、いいんですか？勝手に研究室なんかお邪魔して…」

純夏は恐る恐ると言った感じで夕呼に問いかける。基地副司令の研究室と言うからには、恐らく他者に見られては困るような書類やら何やらがあるに違いない。まあ恐らく彼女の事だからそういうどう



しても見られたく無い物は金庫やら何やらに隠しているんだろうがそれでも己の私室に自分達二人を入れて大丈夫なのだろうか、と少なからず心配になってしまう。

そんな彼女の問い掛けに対して、夕呼は余裕のある表情を崩さない。

「フフ、問題ないわよ。どうせ中には貴方達が見ても訳が分からない書類しかないし、それに、貴方達はそんなスパイまがいなことなんてしないでしょ？」

「す、スパイって…！そんなことしません！ハイ！絶対に！なっ、純夏！」

「え？う、は、はい！私も副司令さんから聞いたことは絶対に外に漏らしません！ゴーモンされてもしゃべりませんから!!」

「いや別に貴方達に話すことは誰かに話そうが関係ないんだけど。どっちも発表することだし…。ま、そう言う訳だから貴方達を私の研究室に入れるのは問題ないって判断したの。勝手に侵入するならまだしも私が直々に招き入れたんなら問題ないでしょ？」

夕呼はニヤニヤと面白そうに笑いながら焼き上がった具材を次々と己の皿に取り分けていく。確かに夕呼の言うとおり、二人が勝手に忍び込むならまだしも、部屋の主が態々招き入れてくれるのならば全く問題は無いだろう。

そう判断した武と純夏は互いに見合うと夕呼に向かって一礼する。

「あ、ありがとうございます。本当に何から何まで…」

「こ、このお礼はいつかちゃんとしめますから！」

「フフツ、別にいいわよ。言ったでしょ？お礼は後払いつて。返す時にきつちりと返してもらうから安心なさいな。ま、それはそれとしてもう焼き上がってるからいい加減食べましょうか？残したら京塚のおばちゃんに何言われるか分からないし」

「は、ハイ！じゃあいただきます！」

「い、いただきます！うわー…、合成肉なのにおいしそう…」

「はあ…、朝っぱらからカロリー高そうなのを…。まいつか…。いただきます」

話を終えた四人は鍋の上で焼き上がった合成肉や合成野菜を各々たれにつけて口に頬張る。確かに合成食材であるが故に本物程の味わいは無いものの、それでもこの香ばしい香りと口にあふれる肉汁の味わいは他には代えがたい。武と純夏は勿論のこと、最初は朝っぱらから焼き肉を食らう事に難色を示していたまりももまた今では夢中になって箸を動かしている。そんな三人を横目で見ながら、夕呼もまた久しぶりの焼き肉に舌鼓を打つのであった。

「……そう言えばどうでもいいけど夕呼、確かジンギスカンってモンゴルじゃなくて日本の料理じゃなかったかしら？」

「……ハイ？」

「いや私の聞いた話だとジンギスカンって確か北海道辺りで生まれた料理でモンゴルとは名前以外関係ないはずなんだけど……」

「……………」

「……もしかして知らなかったの？」

「サーテアタラシイグザイヤキマシヨウカー」

「……知らなかったのね」

「知らなかったんですね」

「見たいですね」

PXでの朝食を終えた武と純夏は夕呼に連れられて彼女の研究室へと歩いていった。ちなみにまりもは朝食の後に訓練兵達の教練があつたため三人と別れている。

二人の先に立って歩く夕呼の後ろをついて歩く武と純夏は、歩きながらひそひそと蚊の鳴くような声で会話をしていた。

（ね、ねえ武ちゃん……、副司令さんの研究室って、ど、どういふのかな……？）

（そんなの分からねえよ……。でも何かの研究者だって言ってたからひよっとしたら色々あつたりしてな。例えば人体模型とか生き物の標本とか……。下手したらヒトの脳みそとかもあつたりしてな）

(ん、んも〜!!武ちゃんったら変な事言わないでよ!!そんな学校の理科室や病院じゃないんだから……)

「……………ちよつと、二人とも聞いているの?」

「……………ヒイ!」

ひそひそ話している最中に突然夕呼の声が掛けられたため、武と純夏は仰天してその場で飛び上がる。一方の夕呼はそんな二人が何をやってるのか分からないのか訝しげな視線を送っている。

「な、なななななんでしょう副司令さん!?お、俺達何も言ってますよ!」

「いや、もう研究室着いたって言うてるんだけどね。何?何か面白い事でも話してたの?だったらお姉さんにも聞かせてくれないかなあ?」

そう優しげな笑顔と優しげな声音で二人に問いかける夕呼、だが二人はその笑顔と口調から何だか訳の分からない凄味を感じ、威圧されていた。まるで首に刃物を押しつけられて自白を強要されているかのような、さらに言えばもし言わなかったら己達の身体や命が……、等々不吉かつ不穏なイメージが次々と二人の頭に浮かんでくる。

「い、いいいい言います!!いや、副司令の研究室ってどういう部屋なのかな〜って!!純夏と話してたんですよ!!なんか恐竜の化石とか人体模型とかあったりするのかな〜って!!なつ、純夏!」

「う、ううううん!そうです!お魚さんやカエルさんの解剖された標本とかが置かれてたらどうしようとかそんな事を武ちゃんと話してて……」

「OK OK、もういいわ……。……あのさ、私初対面の時に物理学者って話したと思うんだけど。考古学者でも生物学者でもないんだからそんなもの置いてあるわけないじゃないのよ……はあ……」

黙っていたら命にかかわると本能的に察した武と純夏は洗いざらい話していた事全てを夕呼に自白する。最も夕呼はもう少し面白い話題を想像していたのか少し拍子抜けしたような顔で溜息を吐いているが……。

「えつと……、怒ってないんですか?」

「怒ってないわ、呆れてるだけよ。全く……、安心なさいって。どうせ部屋の中なんて見たところで貴方達からすればつまらない物ばかりだから」

そう言いながら夕呼はドアのロックを解除して、研究室へと二人を招き入れる。

夕呼の研究室、それは二人が予想していたモノとは全く違っていた。

部屋にあるのはパソコン、電話が乗せられたデスクと三台の本棚のみであり、女性の部屋にありがちな華美な装飾やら置物などは全くと言っていいほどに無い。本棚に治められているのは何十何百という分厚い本で、背表紙には日本語以外にも英語、ドイツ語で書かれたものがあり、二人には何て書いてあるか読む事が出来ない。

そしてそれ以上に驚くべきなのは床に積まれた山のような紙の束。二人の背丈すらも越えるほどの高さまであるその紙束の山が幾つも聳え立っているのだ。

ほんの少しでも揺らせば崩れてきそうな紙の林の間を夕呼は慣れた様子ですり抜けていき、デスクの近くの椅子へ座ると二人へ向かって手招きをする。

良く見るとデスクの前には二つのパイプ椅子が置かれている。どうやら夕呼は最初から二人を研究室に招く予定だったようである。二人は紙の山にうっかり触れて崩さないように用心しながらデスクの前まで移動し、パイプ椅子にゆっくりと腰掛けた。

椅子に座っても茫然と紙の山を見上げる二人に夕呼はクスリと笑いながら肩を竦める。

「如何かしら？ 私の研究室は、ご覧のとおり殺風景な部屋でしょ？」

「……いや、別の意味で刺激的な部屋ツスね。うん、ぶったまげました」

「わ、私も……、色々な意味で驚いちゃいました……」

「そう、それは何よりだわ。さてと、じゃあ早速本題に入るんだけど……」

二人の反応に満足げな笑みを浮かべながら夕呼はデスクの引き出しから一枚のプリント用紙と透明な小箱を取り出して二人の前に差し出す。プリント用紙には何かのスケッチらしき幾何学模様と文字らしきものが描かれており、透明な小箱の中には赤黒い色をした鉤状の石、勾玉が収納されている。

いきなり差し出されたそれを見て戸惑う二人に夕呼は説明を始める。

「今から一週間前、ガメラによって横浜ハイヴが陥落させられて貴方達が保護された日、ガメラは此処から遙か南端の島、硫黄島沖で発見されたのよ。その時のガメラは体表に大量の堆積物が張り付いて、さながら巨大な環礁のような姿をしていたらしいわ。」

硫黄島警護の部隊は突如出現した環礁の調査を行い、結果として発見されたのがこの勾玉とスケッチに書かれている石板だったのよ」

夕呼の説明を聞いた武と純夏は再度目の前のスケッチと勾玉に目を落とす。

スケッチはまるで二匹の蛇が絡み合っているかのような図柄の中に、何やらアルファベットに似た文字が書かれており、二人には読み解く事が出来ない。もう一つの勾玉は形状そのものは勾玉そのものではあるものの、材質については全く分からない。メノウでもヒスイでもコハクでもない、一見するとただの石にも見えてしまうその赤黒い物質は、蛍光灯の光を跳ね返して鈍い光沢を放っている。

「生憎石板はガメラ覚醒と同時に砕けてしまったんだけど、幸い写真とスケッチが何枚か残っていたからね、司令の伝手で研究の為に硫黄島駐屯地から分けてもらったってわけよ」

「そう、ですか……。あの、副司令、さん、このスケッチには、なんて書いてあるんですか……？」

武がおおぞと夕呼に問いかけると、夕呼は顎に指を当てながらフム、と軽く頷くと椅子から立ち上がって部屋の端へと歩いていく。見るとそこには湯気を出すコーヒーマーカーらしきものがあり、コーヒーマーカーの出口の下にはコーヒーマーカーらしき液体が満ちた透明なビーカーが置かれている。

夕呼はコップにコーヒーを注ぎながら、そのまま話を続ける。

「この文字の解読については、流石に私でも出来なかったわ。この言語は現在世界で使われているあらゆる言語とも異なっていてね、私じゃ到底手に負えなかったわ。だから私の知り合いの先生にちよつと頼んでね、軽く解読して貰ったのよ。……ああ二人ともコーヒーはどうかしら?」

「え、あ、大丈夫です」

「わ、私も……。苦いの苦手ですから……」

二人の返答に夕呼はそ、と一言だけ答えると椅子に戻ってコップになみなみと注がれたコーヒーを一口啜る。

「で、その先生の話によると、この石板に書かれていた文字は古代北欧、アイルランドで使用されていたルーン文字に酷似しているって結果が出たの。ルーン文字って知ってるかしら?」

「えっと……はい。確か物語の魔法使いが使っていた文字だったような……」

「そうね、それで間違いは無いわ。当時ケルト文明の僧侶、ドルイドって言うんだけど、彼らが占いや技師議を行う時に使っていたって話があるわ。」

で、その先生曰くこの石板の文字はそのルーン文字と良く似た形状をしていたらしいのよ。それで、現実に存在するルーン文字と当てはめて解読してくれたってわけ」

「か、解読できたんですか!?!」

「ええ、現存する文字と同じのが結構あったから割と簡単らしかったわよ」

夕呼は引き出しからも一枚のプリント用紙を取り出すと武と純夏に差し出した。それを受け取った武と純夏はそのプリント用紙へと視線を落とす。プリント用紙には先程の石板のスケッチに書かれていた文字らしきものと、それを約したものである日本語の文章が記されている。だが、その訳文を見た瞬間、武と純夏の表情が変わった

「最後の希望 ガメラ、時の揺り籠に託す。禍の影 ギャオスと共に目覚めん……!?こ、これって……!!」

「あ、あの時武ちゃんが言っていた、夢で出てきた言葉と同じ、だよね…!？」

そう、そこに記されていた言葉はあの時、武と純夏が病室で夕呼に尋問された時、武津が呟いていた言葉そのものであったのだ。当然二人はこんな石板も、勾玉も今の今まで見た事がない、よしんばあったとしてこんな文字を解読できるはずがない。

一言一句全く同じであり、とてもではないが偶然の一致とは思えない。困惑する二人を夕呼はジッと眺めながらコーヒーカップを傾けている。

「その様子だと本当にこの文章について知らないみたいね…。私だって最初は驚いたわよ？あの時間聞いたセリフと一元一句全く同じな言葉がこんな石板に書かれてるんだから。全くどうなってるのかしらね…。まさか貴方エスパーとかじゃないわよね？」

「ち、ちち、違いますよ!!本当に夢で見ただけなんですって!でかい鳥みたいな怪獣とガメラが戦っていて最後に『最後の希望 ガメラ』がどーのこーのつて言葉が流れるんですよ!ああ全く、ガメラに助けられてからずっと変な夢ばかり見て仕方がない…」

「ま、まあまあ武ちゃん落ち着いて、ね?私は武ちゃんが超能力者なんかじゃないって知ってるから…」

いらただしげに悪態をつく武を宥める純夏、そんな二人を夕呼は疑わしげな目で眺めていたが、やがて諦めた様子で軽く溜息を吐きだした。

「ま、それについては後でみっちり聞くとして…、私分からないのは石板の碑文だけじゃなくて、この勾玉もそうなのよ」

そう言っただけで夕呼は透明な小箱から勾玉を取り出して二人に見えるように掲げる。赤黒い色彩のそれは一見するとただの石でできた勾玉に過ぎない。だが、何故か武にはその勾玉がただの石だとはどうしても思えないのだ。理由は分からない。だが、ただ直感でそうだと感じるのだ。

一方純夏は夕呼が掲げる勾玉をただ不思議そうに眺めている。こちらはただ単純にこの勾玉が何故特別なのかが気になるだけのように

である。

そんな二人の視線に夕呼は特に気にした様子も無く話を続ける。

「この勾玉は似たようなものが100以上、ガメラの背中から採掘されたんだけどね…。実は現在地球上に存在する物質で、この勾玉と同じ物質は存在しないのよ」

「へ…?」

「地球上に存在しないって、それってどういう…」

夕呼の言葉に武と純夏は訳が分からずに聞き返すと、夕呼はまるでお手上げと言わんばかりに肩を竦める。

「そのままの意味よ。勾玉って形状から恐らく日本の古墳時代のもとの関係があるんじゃないかとは考えられるんだけど、この勾玉に使用されている金属の成分は、分析の結果地球上に存在するあらゆる物質とも異なる全く未知のものだと判明したのよ。

で、BETA由来の物質じゃないか、という線で分析してみたんだけど、現在確認されているBETA由来の物質にも、これと同じものは一つも無かったのよ。まあすなわち、この勾玉は現在この地球上に存在するあらゆる物質とも異なる全く未知の金属で作られてるってわけ」

「……………」

地球上のものでもBETA由来のものでもない謎の物質でできた勾玉…。武も純夏も少なからず驚いてはいた。何かあると思っていた武はともかく、純夏からすればただの赤黒い石にしか見えないそれが実はまだ地上で誰も見つけた事がない未知の金属であったとは思わなかった。

「最も、全く手掛かりがないわけじゃあないのよ。かなり眉唾物な話なんだけれどね、過去の文献の中にコレに良く似た鉱石について書かれているのがあったのよ」

「え? そうなんですか?」

純夏の言葉に夕呼は軽く頷いた。

「ええ。ギリシャの哲学者、プラトンの書いたテイマイオスって本の記述なんだけれどね、この鉱石と良く似た色、性質のオリハルコ



ンって鉱石の話が出てくるのよ。貴方達知ってる?」

「……お、おりは……いえ、すみません……。俺知らな……」

「あーそれって確かアトランティスで使われていた金属の事ですよね! 紅くてこの世の如何なる物質よりも硬いって言う!!」

「そうそうそれぞれ、良くフィクションとかで出てくるから結構有名なのよね」

純夏の元気のいい返事に夕呼は、ご機嫌そうに笑っている。が、武は純夏の口にしたとある単語に反応する。

「……ってちよつとまで純夏、アトランティスって言ったら確か……」

「アトランティス」という単語を口にした純夏に思わず問いかける武。と、純夏に代わって夕呼が口を開いた。

「二万二千年も前に突如として海底深くに水没してしまっただけで、上を上回る高度な文明を誇っていたらしいけど、突如起きた大津波によって一夜にして滅亡したとされているわ」

「……で、でもそれって伝説、フィクションじゃないんですか? そんな、海底に沈んだ都市なんて……、本当に実在するんですか?」

アトランティス大陸。大西洋にかつて存在したとされている伝説の大陸。

海の神ポセイドンを祭り、そこに住まう人々は神の恩恵を受けて栄華と繁栄を極めていたという。

しかし、その強大な軍事力を持って世界の覇権を握ろうとした結果、ゼウスの怒りに触れて大津波に吞まれ、一夜にして海底深くに没してしまっただけという。

以上がプラトンの記述したティマイオス、クリティウス二冊の書籍に記されたアトランティス大陸の詳細であり、その中にはアトランティスにて使用された幻の金属、オレイカルコス、すなわちオリハルコンについての記述もある。

最も僅か一夜で大陸が海底へ没するという事など通常では到底考えられないという事実から、現代ではアトランティスは伝説、あるいは災害で滅んだ都市国家を元にした作り話という説が主流であり、専

らオカルト扱いされている。到底物理学者である香月夕呼が語るような代物ではない。

が、夕呼は武の疑わしげな視線に特に気にした様子も無く、コーヒーを一口啜ると再度口を開く。

「フィクシオン、ねえ…。そうとも限らないわよ？ シュリーマンに発見されたトロイアだって昔はフィクシオン扱いされていたし、聖書に書かれたノアの大洪水にしても、遙か昔にそれに似た大災害が起きていたって言う証拠があるわ。神話、伝説って言うのはある程度史実も入り混じっているものなのよ。…まあ流石にある程度誇張はあるかもしれないけれどね。すなわちアトランティス文明が存在した可能性も、一夜で洪水によって滅亡した文明が存在する可能性も完全には否定できないのよ」

「……」

夕呼のセリフに武と純夏は何も言えずにいる。

確かにかつて伝説、空想とされていた文明、遺跡が後の時代に現実に遺跡として発見される実例は存在する。だからと言つて一夜で海底に沈んだ伝説の超古代文明などというものをそう易々と信じる人間は居ないと思うが…。

「あ、でも確かアトランティスって大西洋にあつた文明ですよ？ でもカメラが見つかったのは硫黄島近海だから…太平洋、ですよ？」

「そうね。でも知ってるかしら？ 沈んだ文明の伝承は何もアトランティスだけじゃないのよ？ 太平洋のムー、インド洋のレムリア。そして沖縄には海の果てにある楽園ニライカナイの伝承も残されている。太平洋にあつたとある文明が何らかの形でギリシャに伝わり、アトランティスの伝説が生まれたとしても何の不思議も無いでしょう？」

夕呼の言うとおり、一夜にして海底に沈んだ文明は、何も大西洋のアトランティスに限った話ではない。

太平洋にかつて存在したとされる大陸、ムー。かつてインド、アフリカ間に存在したとされている大陸、レムリア。それ以外にも世界中には海の底へと沈没した文明、あるいは大陸の伝承が数多く存在して

いる。

それらのどれがオリジナルかは不明ではあるが、もしも仮に海へと沈んだ文明が存在するとしたら、その話が世界各地へと伝えられた結果、アトランティスなどの海へと沈んだ文明の伝承へと発展していった可能性はある。

「んー…。なんとなく分かった様な分からないような…。でもですよ副司令、もしも仮にその勾玉がアトランティスのものだったとして、それがガメラとどう関係があるんですか？」

武は率直に夕呼に問いかける。その横では純夏も武に同意するかのようにココココと頷いている。そんな二人を横目で見ながら、夕呼は「あくまでこれは私の予想なんだけど…」

と断りを入れて口を開く。

「あの怪獣、ガメラはアトランティスに生息していた…、否、アトランティスが“生み出した”怪獣なんじゃないかって思うのよ」

「え…？」

「生み、出された…？」

夕呼の言葉に武と純夏も咄然としている。夕呼の言葉が衝撃的だったのか、あるいはあまりにも突拍子がなかったからなのかは不明であるが二人とも口と目を丸くして夕呼をジッと凝視している。そんな二人の様子に夕呼は特に気にも留めずにコーヒーを啜る。

「要するにガメラって言うのは古代アトランティスが人工的に生み出した生物、平たく言えば生物兵器の類なんじゃないかって言うのが私の予想なのよ。約80メートルの巨体、両手両足からジェットを噴射して飛行、さらにはBETAを集団ごと焼き払う火球とか、ガメラには地球上で自然発生した生物では到底あり得ない特徴ばかりなのよ。」

あの巨体はともかくとして、ジェット噴射と火球に関して言えば敵を倒す、すなわち戦闘の為に備わっているとしか考えられない。とするならばガメラは自然の進化で誕生した生物ではなく、誰かが何らかの目的の為に生み出した生物、と考えられるわね」

「何らかの目的…、そ、それって…。」

「そのヒントは既に此処に書かれてるし、貴方も言っているはずよ？白銀」

夕呼はそう言ってプリント用紙に書かれた石板の訳、その後半部をゆっくりとなぞる。

「禍の影 ギャオスと共に目覚める」。夕呼の指し示す文章にはそう書かれていた。

「禍の影、ギャオス……」

「貴方の夢に出てきた鳥、だっただかしらね……。それがもしもギャオスだとしたなら、ガメラはそれに対抗するために生み出された可能性があるわ」

「禍の影……、コレって一体……」

「さあ…、そこまでは私にも…。ただ一つ言える事があるとすれば……」

この世界に何かが起こきようとしている。BETAとは違う何かがある。夕呼はまるで独り言を呟くようにそう呟いた。

## 第17話 数式

東京、帝都城禁裏。全権代行である政威大將軍が政務をおこなう表御殿とは異なり、日本帝国元首たる皇帝が住まい日々の生活及び国事行為を行う場所。公の式典以外では滅多な事では禁裏から出る事は無い皇帝の為に、禁裏には皇帝が何不自由なく生活するための設備が整っている。

とはいえBETA侵攻による軍事予算増大による予算削減により、現在ではそれらも必要最低限なレベルにまで抑えられてしまっている。コレに関してはBETA侵攻による国民の困窮、財政の逼迫を慮った皇帝自身の意向でもあったのだが。

「……とはいえ、これでも所詮はスズメの涙程度の節約にしかありませんが」

そして現在禁裏の一室にて一人朝食をとる皇帝。その傍にはまだ若い皇帝の補佐を務める初老の侍従長が控えている。膳に並んでいる料理は一見すると豪華そうに見えるものの、それらは全て合成食材。かつて帝都が京都であった頃には天然食材で作られた物を食していたのだが、BETAの侵攻によって日本本土の半分が破壊された結果、稲を始めとした農作物のみならず肉類魚介類等の食糧の生産量は大幅に激減、結果的に日本国民の食材は天然食材から天然食材を模した合成食材へと様変わりしていった。

それ故に皇帝は帝都移転の後に『民が困窮しているというのに己だけ天然食材を口にするわけにはいかない』という理由で禁裏での己の食事は全て合成食材とするように命じたのである。

栄養価自体は天然食材と変わらないものの、味は天然食材には大幅に劣る。その為軍、政府の上層部の人間には未だに天然食材を食している人間もいる。最もBETA侵攻によって天然食材の生産ラインが壊滅状態となった今では、そんな人間は上層部でも殆ど居ないのだが…。

禁裏には一流の料理人が付いており、よしんば合成食材であろうと

もそこそのレベルにまで味は引き上げられている。それでも天然食材には遠く及ばないものの、国の緊急事態であるために贅沢は言つてはいられない。

現在は帝国を脅かしていたハイヴとBETAはガメラによって殲滅され、日本列島近辺のハイヴもガメラによって次々と殲滅されているため、ひとまずBETAの脅威は去り、帝国にもある程度の時間的余裕が出来ている。それでも帝国の食料自給率が回復するには数年はかかるだろうし、帝国軍再編成やら戦術機開発やらで相応の予算は絞り取られることになるだろうからもうしばらくは合成食材で我慢することになるだろうが…。

皇帝にとつてはそれでも構わない。元々三食全てを合成食材とするよう命じたのは己であり、むしろ己の食事は十分食べられるように調理されてから出されている為に他と比べれば恵まれている方だろう。

彼が不満に感じているのは……

「……城内省も一体何を考えているのでしょうか…。この予算も足りない時世に斯衛軍専用の第三代機を量産させようなどは…。素直に不知火を使えばいいでしょうに……」

「斯衛は皇帝陛下と將軍殿下、ひいては帝都と帝国の民草を守護する刃、故にそれ相応の機体をという要請があったもので…。先の京都防衛戦におきましては試作機が一定の戦果を上げましたものですから…」

「そんな話はもう何遍も聞きました…!!朕が言っているのは予算の話です!BETAの脅威は去ったとはいえ帝国の財政状況は何時になく厳しい、民草も重税と徴兵で苦しみに喘いでいる状況ですよ!!確かにBETAとの戦いにはより性能の高い戦術機が必要でしょう、それは分かりますがただでさえ不知火の量産に四苦八苦している状況だというのにこの上新型の戦術機を生産する余裕があるというのですか!?!」

「で、ですが斯衛軍の新型機開発につきましては92年の飛鳥計画にて決定しておりましたので…。それに正式配備に關しましては後2

年はかかる模様との事で……」

「それについても知っています!!全く……城内省も斯衛軍も予算についての考えがないのでしょうか…。下手をしたら帝国はBETAではなく予算不足で滅亡するのでは…考え過ぎですか…」

幼いながらも世の政に聡い皇帝の愚痴に侍従長はただ冷や汗を流すしかない。

確かに城内省、というよりも帝国斯衛軍は予算に関する考え方が若干、というよりもかなり甘い。

初期の斯衛専用機瑞鶴にしても撃震に多少無理な強化改造をしてしまった結果、整備性と生産性が犠牲となっている。さらにそこから家柄ごとに異なるチューニングがされる為にただでさえ高い生産コストがより高額なものとなっている。恐らく新型機、通称『武御雷』にも同様のチューニングがなされる事は間違いない。ならばコストも瑞鶴とは比較にならないレベルにまで跳ね上がる事は想像に難くないだろう。整備性、生産性に至ってはもう言うには及ばない。

確かに斯衛軍は優秀な衛士、整備士が揃えられ、予算についても内閣から独立している城内省の権限である程度確保できであろうが、それでも流石に限度がある。日本には不知火という世界初の第三代機が存在するのだから第三代機が欲しければそれを使えばいい話である。にも拘らず予算に余裕がないこの状況で斯衛専用の第三代機を欲しがるとするのは流石に贅沢と言われても仕方がないだろう。

もしもこの発言が斯衛軍の連中に知れたら一体どうなる事であろうか。他はともかく己達が政威大將軍以上に守護すべき主である皇陛下が斯衛軍に対して不平不満を漏らしていたなどと知ろうものなら驚天動地の騒ぎになるかもしれない。斯衛全軍揃って謝罪やら言い訳の為に禁裏まで押し掛けてくるのではなからうか。実権そのものは將軍に譲渡してはいるものの、皇帝の権威は、日本帝国元首としての威光は未だに健在であるのだから。

「…まあいいでしょう。幸い帝国内と帝国周辺からはBETAの脅威は消えつつあります。議会もこれ幸いと各地の復興、軍備の再編に乗

り出すでしょう。榊首相ならばそこは上手くやってくれるに違いありません。：最も、お飾りな朕には関係のない話かもしれませんが」「陛下……………」

食事を終えてごちそうさま、と手を合わせながら自嘲するかのよう  
に呟く皇帝に、侍従長は沈黙している。いかに権威があろうとも国の  
政に直接介入できるほどの力は無い。国の行く末を憂えても何も出  
来ないという無念さ、それが理解できるが故に……

侍従長の視線に気がついた皇帝は大丈夫ですよ、と安心させるよう  
に笑顔を向ける。

「まあ予算に関しては朕でもどうしようもない事、悠陽と榊首相に任  
せるしかありませんまい……。朕の気がかりはやはり、ガメラの事です  
ね」

ガメラの名を口にした瞬間、皇帝の表情が一変する。先程までの憂  
いは一切消え去り、幼いながらも一国の元首、上に立つ者のみが持ち  
うる威厳と雰囲気は漂う顔へと変わる。

己が主の変化に侍従長も姿勢を正す。皇帝はそんな彼に構わず話  
始める。

「ウランバートルとクラスノヤルスクのハイヴを殲滅し、日本海付  
近で消息を絶つ……。いつも通りと言えはいつも通りです、が……」

「……例の新種の超大型BETAの事でしようか？」

「それもあります。ですが、それ以上に気になるのは……」

皇帝は両手の指を交差させて、何かを考えるかのように深くと息を  
吐き出す。

「かの怪獣が何者なのか、何が目的なのか、ですな……。手掛かりたる  
石板、勾玉の分析はしていても何も掴めてはいないのですから」

ガメラ出現から既に1週間が経過しようとしている。その間、日本  
帝国ではかの怪獣が何なのか、地球の生命体だとするならば一体どこ  
から来たのか、という議論があちこちで沸き上がっていた。

体表、あるいは血液でも採集して分析できればいいのだが、現状ガ  
メラはBETAとの戦闘以外では深度数千メートルもの深海で眠っ  
ている為それは叶わない。



現状かの怪獣の手掛かりは怪獣の背中で発見された数百にも及ぶ勾玉と石板以外には存在しない。

石板に描かれた文字に関しては、石板の文字は北欧で用いられた古代ルーン文字に良く似た文体であり、最後の希望 ガメラ、時の揺り籠に託す。禍の影 ギャオスと共に目覚める」と書かれている事、また勾玉に関してはその成分を分析した結果、この地球上に存在する物質、そしてBETA由来の物質とも全く異なる未知の金属である事、現状判明したのはこの二つのみである。

碑文の意味するものは一体何なのか。最後の希望とは？禍の影、ギャオスとは一体何なのか？未だに議論には決着はついていない。

「フム……。あの人なら何かを掴んでいるかもしれないね……」

と、皇帝は何かに思い至った様子で立ち上がると広間からさつさと出て行く。侍従長も皇帝につき従う形で彼の後ろについていく。

「陛下、いかがなされましたか？」

「いえ、ひよつとしたら彼女ならガメラについて何かを掴んでるかもしれませんが。……ああ態々こちらに呼び出さなくても構いません。彼女も研究で忙しいでしょうし、折角電話と言う手段があるのですからそれを用いなくては損でしょう？」

「……陛下の仰せのままに」

皇帝の問い掛けに侍従長は頭を下げながらそう答える。そんな彼の反応に構わず皇帝は年相応な笑顔でクスクスと笑っている。

「フフツ、それにしても話すのは久しぶりですね、元気にしているでしょうか香月博士は」

横浜の女狐、あるいは魔女と呼ばれ、同じ日本人でありながらも日本帝国から鼻つまみ者扱いされている国連軍横浜暫定基地所属の天才物理学者。その名を呟きながら皇帝は侍従長と共に己が私室へと向かうのであった。

## 横浜基地SIDE

その頃、国連軍横浜暫定基地の香月夕呼の研究室で、ガメラに関する

る情報を夕呼から聞く為に、例え国連軍所属の人間でもめつたに立ち  
いる事が許されない研究室を訪れた武と純夏は、夕呼の口から放たれ  
た言葉に茫然としていた。

「この世界で、何かが起きようとしている…？そ、それって一体何が  
…」

「それに関しては私もまだ分からないわ。未だにガメラに関しては  
謎が多すぎるし、ギャオスって言うのが何なのかも掴めていない。  
さっきのアトランティス云々ってのも私の予想に過ぎないしね。  
……ただ」

夕呼は片手に持ったカップを傾け、コーヒーを啜るとポツリと呟い  
た。

「それらしい予兆なら、無いわけじゃあないわよ」

「…え？予兆って？」

「ん、貴方達は知らないかしらねえ…。ちょうどBETAが旧帝  
都の京都付近まで侵攻してきた時の話なんだけど……ちよつと  
待つて、確かそれに関する資料があつたはずなんだけど…」

と、突然夕呼はコーヒーを一気に飲み干すと周囲に散らばった書類  
を漁り始めた。どうやら先程言った「予兆」とやらに関する資料を  
探しているようではあつたが何しろ何千何万もある紙の山からたつ  
た一枚かそこらであろう資料を探し出すなど不可能とは言わないが  
相当に困難であることは間違いないであろう。ついでにあれでもな  
いこれでもない紙をポイポイやたらめつたらに投げつけるたびに、  
それが武や純夏、ついには今にも崩れそうな資料の山にまで命中して  
グラリと揺れる為、武と純夏からすれば恐ろしい事この上ない。

「こ、香月副司令!!ちよ、ちよつとあまり紙を投げるのは……」

「ちよつと黙ってて!あー全く、こうまで貯めこんじゃうと何処に  
何があつたのか分からなくて仕方がない…。これは一度いるものと  
いらぬ物とに分けて処分するしかないかしら…？ええつとこれ  
もないあれでも……!?!」

武の制止の訴えも碌に聞かずにポイポイプリント用紙を放り投げ  
る夕呼、だが、その投げた資料の一つが武の背後に立つ巨大な紙の山

に激突した瞬間、ついに限界を迎えた紙の山はまるで雪崩の如く武と純夏に向かつて崩れ始めたのだ。

「う、うおおおおおおお!!だ、だから言わんこっちゃないいいいい!!!」

「た、たたたたた武ちゃん他のも崩れてき……ムギョア!!!」

「ちよ、ちよちよちよ何でこうなるのよ!!こういうのはまりも役目であって私の役目じゃ……ギャン!!!」

一つの山の崩壊に連鎖するかのようにならぬ以外の紙の山も一気に崩れ出してくる。膨大な紙の雨に武と純夏、ついでに全ての元凶である夕呼は纏めて一緒に呑みこまれる羽目になるのだった。

「あ……畜生、死ぬかと思った……」

「あうう……あ、頭にたんこぶが出来ちやつてる……」

「あーあ……結局ますます分かんなくなっちゃったわねえ……。きちんと整理整頓したはずなんだけど……。本気でいらぬ資料選別して捨てたほうがいいかしら……」

そして紙の山全てが崩れ去り、先程より比較にならない程の散らかり様となった香月夕呼の研究室……。武とは疲れ果てた様子で床に座り込み、純夏は癩が出来た頭を押さえて涙目になり、夕呼は疲れ切った様子でコーヒを啜っている。結局夕呼が探していた資料は見つからず、この部屋の散らかり様に夕呼も探すのをあきらめられたらしい。

「……あの、副司令さん……。片づけしますか？」

「……別にいいわよ。どうせ見たって何が何だか分かんないでしょうし……。……っち、これでもないわね……。机に置いてあったはずなのに何処にやったのかしら……」

「そ、そうですか……」

純夏の申し出をどうでも良さそうな口調で断る夕呼。そう言いながらも彼女は床に散らばった紙の山から何かを探している。その口ぶりから武と純夏に見せようとした資料で無い事は確かなようだが

…。そんな夕呼の返答に武はほんの少しだけ周りに散らばった資料の中身に興味が生じ、適当な一枚を手に取ると軽く目を通して見る。

「……………」

「うわあ…………、何コレ…。何がなんだかさっぱり分からない…」

隣で見ていた純夏の言うとおり、目の前の資料には何やらアルファベットと数字と何かの記号が適当に書きなぐられているだけのようであり、到底一人には理解できないような代物であった。なるほどこれなら夕呼が己達を研究室に通したのも分かる。こんなもの自分達どころか並の学者でも解読できないだろう。

武は床に散らばっている他の資料にも目を走らせるが、どれもこれもがただの数字の羅列にしか見えず、到底己には理解できないような代物ばかりであった。

「……………あれ?…」

だが、とある資料を目にした瞬間、武の表情が一変した。そこに書いてあったのは意味不明な図式と数字と記号の羅列、今までのもの同様、武には理解不能な代物のはずだった、だが…。

「ねえ武ちゃん、副司令さんが一度部屋を片付けるから終わったらまた来てって…………武ちゃん?…」

「あら、それ私が研究してるものの数式じゃない、ちようど探してたのよ。何処に行ったかと思っただけ……………」

純夏と夕呼の互いに異なる反応を耳にしながら、武は構わず手に持つ資料をパラパラと捲っていく。

ただの数字の羅列、意味不明な図式、だが、だが武は何故か、これを見た事があった。見た記憶が確かにあったのだ。

そう、それは今朝、夢で見た記憶…。目の前の夕呼と同姓同名で、全く同じ顔の物理教師が黒板に書き殴っていたあの……………。

「……………これ…………知ってる」

「え?…」

「た、武ちゃん?…」

茫然とした武の声に夕呼は眉を上げて反応し、純夏はポカンとしている。と、次の瞬間、武は弾かれるように顔を上げると夕呼へと顔を

向け、叫んだ。

「俺、この数式を、この図を見た事がある……！これ、俺の夢の中で、夢の中の物理の授業で出てきた物と一緒に……！」

「……………なんですと？」

武の発言に夕呼は何を言ってるんだこいつは、と言わんばかりの形相で武を見ている。純夏はただ一人訳が分からないと言いたげな顔で武と夕呼を交互に見ていた。

ただ一人武は数式を見ながらブツブツと何かを呟いている。

「……………そうだ、この式だ……。確かこの式にでつかくバツテンを書いてこの式はもう古いとか何とかいって此処に新しい数式を書き始めて……………、うん、うん、何か知らないけど覚えてる……………うん……………」

「た、武ちゃん、どうしちやったの……？な、何か悪いものでも食べ……」

「少し黙っててもらえるかしら？鑑」

心配そうに顔を寄せてくる純夏を押さえて数式を見ながらブツブツつぶやく武へと顔を寄せる夕呼。その表情は何時になく真剣であり、常々武と純夏に見せていたおチャラけた雰囲気は微塵にも感じられない。

夕呼は武に近寄るや否や両肩を鷲掴みにして己の方へと無理やり向けさせた。

「白銀、その夢とかいうのについて、少し詳しく話してもらえないかしら」

ガシリと肩を鷲掴みにされ、その感触でようやく我に返った武は反射的に論文から顔を上げ、その瞬間こちらを殺気のこもった視線で睨みつける夕呼の顔を直視する羽目となった。

いつもとは違う何やら鬼気迫る眼光でこちらを射抜いてくる夕呼に武は若干引きながらも、恐る恐ると言った風に口を開いた。

もしも嘘をついたら己の命にかかわる……、冗談抜きでそう思えてしまふ状況であったがために武は必死に己の見てきたあの奇妙な夢の内容を思い出す。

「えっと、ですね……。俺がガメラに助けられてから見るようになった夢なんですけど……。この世界とは全く違う世界で、俺と純夏も両親

と一緒に暮らしてて、BETAなんて影も形も無い平和な世界で普通の学生として暮らしてたんですけど……」

「……それで？」

「……で、俺と純夏が通っている高校で、神宮寺軍曹と香月副指令は教師をしていて、副司令は物理学の担当だったんですけど、授業の最中にこれと全く同じ公式を黒板に書き始めて……」

「……それで!？」

「……で、何だか訳が分からない事をごちやごちや言った後に……ちようどこの式の部分に大きくバツテンを書いてその隣に何か式を書き始めて、『これからは半導体を何億も並べる必要がないのよ!!』とか『これは論文にまとめないと!!』とか言って教室から飛び出して……てうお!？」

話している最中に突然夕呼につき飛ばされて尻もちをつく武、突然の夕呼の行動に文句も言えずに啞然とする武であったがそんな彼に構わず夕呼は立ち上がると紙の山であふれかえる研究室を何やらブツブツ呟きながら歩き回る。通行を遮る紙の束は蹴り飛ばし投げ捨てて、時折掴み取った資料をパラパラ捲ってはそれも投げ捨てると言った風であり、完全に武と純夏は視界に入っていない、己の世界へと埋没している様子であった。

はたから見れば完全な奇行、さながら夢遊病患者にすらも見える行動をとる夕呼に武と純夏は顔を見合わせる。が、何時までもこうしているわけにもいかず、とりあえず聞こえないかもしれないが話しかけてみるに越したことは無い。

そう言う訳で武は恐る恐ると言った感じで夕呼に向かって声を掛けようとする。

「あの、副司令……」

「白銀……!？」

が、武が夕呼に声を掛けようとした瞬間、夕呼が先程よりも険しい形相、もはや魔女というよりも悪魔と言った方が相応しいんじゃないかと思うほどである。

夕呼は何やら紙と鉛筆を握りしめながら紙の山を掻き分けて武に

近寄ると、そのままキス出来てしまう程の距離で顔を突き合わせた。普通ならばこんな真近で美人の顔を拝めて興奮するところなのだが、今の夕呼の顔はあまりにも恐ろしく欲情できる余地などありはしない。一方の純夏も普通ならば武が他の女性と此処まで接近していたのならば嫉妬しているはずなのだが、今の状況は夕呼の顔と雰囲気気が恐ろしすぎて嫉妬の気持ちなど沸き上がってこない、むしろ武が夕呼に喰われるんじゃないかと本気で怯えている程だった。

そして、当の夕呼は武の眼をジツと射抜くように睨みつけながら、地の底から響くような声で問い詰め始める。

「…白銀、その夢に出てきた公式、覚えてるかしら?」

「……は、ははははハイ…!!な、何だか記憶にはつきり残ってて…」

「……夢の中の私が駄目出して修正したところも!」

「は、ハイハイハイハイ!!で、でもほんの途中までしか覚えていないので……「書いて」……は?」

夕呼の問いかけにただただ首をガクガク動かしていると突然目の前に紙と鉛筆を差し込まれる。ふと夕呼の顔を見上げるとその表情は何時になく鬼気迫っている、まるでようやく天国へと昇る一筋の蜘蛛の糸を見つけた地獄の亡者の如き顔をした。

いつもの夕呼らしくない余裕のない表情に武が茫然としていると夕呼は部屋全体に響き渡らんばかりの絶叫を張り上げた。

「覚えている限りでいいわ!!その内容を一つ残らず此処に書いて!!今すぐ!!」

「い、イエッサー…!!ええつと確かまずは……」

夕呼に怒鳴られるがままに紙へと鉛筆を走らせ始める武。だったがいかに記憶に残っていたとしても元々見えていて訳の分からない数式であり、ただただ意味も分からないままに己の頭に映像として映っている物をそのまま紙にまる写しするしかない。それはさながら読む事も訳す事も出来ない古代エジプトのヒエログリフをただひたすらノートに写すような徒労にしか思えない。

武自身本当にこれであっているのだろうかと疑問を抱いてしまうが隣で夕呼がこちらを恐ろしい目つきで睨みつけている為、筆を止め

るわけにもいかずに必死に夢の中の授業の記憶を思い出し続けるのであった。

そして、その何とも不毛な作業を続けて10分以上が経過した頃であらうか…。

「……ふ、ごめんなさい香月副司令…。正直これ以上は無理です…。文字通り精根尽き果てた様子の白銀武は、片手をブルブル震わせながら必死に脳みそから引きずり出した記憶を頼りに書きあげたメモを夕呼へと差し出す。

正直に言わせてもらおうのならば、このメモでも記憶の中で夕呼が書いた内容のまだ半分もいってはいない。まだまだ他に羅列されていた内容はある筈なのだが何しろそこから先は記憶がおぼろげではつきりとは思いつき出せないのだ。しかも肝心の夕呼は教室から勝手に出ていってしまったし…。

「ああ、クソ。頭がいてえ…。何で夢の内容を必死こいて思い出さなきゃならないんだよ……」

「た、武ちゃん大丈夫？も、もう病室戻ろうか…？」

「待て待て、まずは副指令に聞いてから、だ…。あのか、香月副司令、よろしいでしょう……か……？」

夕呼にもう帰っていいか、と聞こうとした瞬間、武の表情、そして全身が硬直した。

武が書いたメモ、その数式をジツと食い入るように見ながら夕呼は「ワラツていた」。

まるで餓えた獣が極上の餌を見つけたように、何日も水を飲んでいなかった人間が砂漠の中にオアシスを見つけたかのように、否、もはやそれ以上と言っているほどの歓喜の表情で笑っていたのだった。二人からすればとてつもなく不気味で奇怪な笑顔にしか見えなかったが…。

「あ、あの……副司令、さん…？」





そう言つて軽く投げキッスを送ってくる。どうやら何時になくご機嫌な様子の方呼に武は少し顔を赤らめながら軽く頭を下げると紙の山を掻き分け掻き分け自動ドアを開けて研究室から廊下へと出た。そのあとに続いて純夏も出てくるが、その顔は先程とは違つて何やら不機嫌そうであつた。

「あー……つたく香月副司令つて本当に分からない人だなく。何だか感情の浮き沈みが激しいというかなんというか……、学者つてのは変人が多いつて聞くけどあの人もそのたぐいなのかね……。なあ純夏？」

「……そうだね、フンツ！」

「……ておい、何膨れ面してるんだよ純夏……」

不機嫌そうにそっぽを向く純夏は、ツーンとしたまま武を無視している。つい先ほど武が夕呼の投げキッスを受けて顔を真っ赤にしていた事に対して焼きもちを焼いているのだが、武には何故純夏が怒つていのか分ならず、ただどうしたものかと悩んでいる。……と。

「ん？君達は……。こんなところで何をしているんだ？此処は関係者以外立ち入り禁止のはずだが……」

「……あーい、伊隅大尉！」「ふえっ！こ、こんにちはです!!」

突然曲がり角から一人の女性士官が武と純夏の前に姿を現した。彼女の名前は伊隅みちる。夕呼と一緒に病室で二人の尋問を行った一人であり、二人とはすっかり顔なじみとなつていた。が、流石に国連軍の士官に変な態度をとるわけにはいかない為、武はもちろん膨れ面の純夏も姿勢を正す。

そんな二人の様子にみちるはおかしそうに笑みを漏らす。

「フツ、そんなに畏まらなくてもいい。もう知らない仲ではないのだからな。ところでなぜ君達が此処に。察するに香月副指令に呼ばれた、か？」

「あ、ハイ！ガメラに関する情報が手に入ったつて事で……。でもなんだか研究があるつて言つて外に出されてしまったんですが……」

「……………成程、そうなつてしまつたら暫くは研究室にこもりっぱなしだ。呼ばれでもしない限りあの研究室には入れないだろう……。処で君達はもう病室に戻るのだろうか？折角だから送つていこうか？幸

「い今日は非番だからな」

「え？じゃ、じゃああの、お、お願いします…」

武と純夏が軽く頭を下げるとみちるはフツと優しく微笑み、「こつちだ」と先頭に立って歩き出した。武と純夏も彼女の後ろについて歩き出す。そして三人は歩きながら、互いに話し始めた。

「ところで、今日の朝食はどうだった？朝っぱらからジんギスカンなど驚いただろう？」

「はい。ちよつと驚いちゃいましたけどすごく美味しかったです！

……ふ、二日前のキムチ一色のあれよりかは……」

「ああ、あれか……。副指令がPXの人間に金を握らせて無理矢理メニューを変えたんだったな……。私は激辛焼き肉キムチ定食朝鮮風味、等とか言う代物にしたが……。いかん、口に辛みが……」

みちるは以前興味本位で食した激辛料理の味を思い出したのか眉を歪めて口元を押さえている。いかに歴戦の軍人とはいえ激辛料理の辛みには対抗できないらしい。その姿を見た純夏はまりもの姿を思い出してクスリと笑みを浮かべた。そんな彼女の反応にみちるはムツとした表情をする。

「……む？何か私はおかしなことを言ったか？」

「い、いえそうじゃなくて……。なんか軍曹さんと似てるなって。軍曹さんも辛いのが苦手で激辛キムチ鍋を涙目になって食べてましたから」

「軍曹さん……？ああ神宮寺軍曹か……。まさかあの人が、な……」

純夏の言葉にみちるは若干驚いたように目を見開いた。涙目でキムチ鍋を食べるまりもの姿など、普段の鬼軍曹ぶりからは到底想像が出来なかったのだろう。

「えつと、そんなに意外ですか？何か俺達にはいつも優しくしてくれますから普通にいい人だと思っただけ……」

「……いや、君の言う事は正しい。軍曹は本当は優しい人なんだ。ただな、訓練兵時代のあの人は文字通り『鬼』のように厳しかったからな。だから少々意外に感じただけさ」

「へー……。何だか想像できませんね……」

三人はそんな談笑を交わしながら基地の廊下を歩いていった。

そんな何気ない会話をしていた武の頭に、ふと夕呼の言葉が思い出された。結局あの時うやむやになってしまったが、どうしても夕呼の言った「予兆」というものが気になる。

旧帝都にBETAが侵攻した時ならばそこまで古い話ではない。ひよっとしたらみちるは何か知っているかもしれない。そう考えた武はおずおずとみちるに声をかける。

「あの…、大尉、一つ聞きたい事があるんですが…」

「ん？何だ？私が知ってる事なら答えるが…」

みちるの返答を聞いた武は一拍置くと思いきって問いを投げかける。

「あの、前に京都にBETAが侵攻してきた時、何か変わった事とかありませんでしたか？何だか、BETA以外の怪獣とかが出てきた、とか…」

「変わった事、だと？いきなり何だその質問は？」

唐突な武の質問にみちるは眉を顰める。旧帝都防衛戦には確かに国連軍に所属している己も参加している。だが何故そんな事を突然己に聞きたがるのか。若干疑念を含んだ視線を武に送る。幾多の修羅場を潜り抜けてきた軍人の眼力に若干怯むものの、武はどうか口を開く。

「え、えっと…、その、ですね…、香月副指令がBETAが京都に進撃してきた時に、変な事が起きたって言ってまして…」

「成程な、副指令が言ったのか…。フム、変わった事、か…、まあ一つあると言えばあるのだが…」

顎に指を当てて考え込んでいたみちるは、何かに思い当たったのか複雑そうな表情を浮かべている。それはまるで話すべきなのか話すべきでないのか迷っているかのようにであった。

「…もしかして機密事項、とか？」

「いや、機密ではないのだがな、私も人伝で聞いた話でにわかには信じがたい話なんだが…、聞きたいか？」

みちるが二人に問いかけると武と純夏は揃って頷く。二人の反応

を見たみちるはまるで呆れたかのように軽く溜息を吐いた。

「……分かった。だが少々話は長くなる。此処では何だし場所を移すでしょうか」

そう告げてくるみちるに、二人は再度頷くのだった。

夕呼SIDE

「あと少し……あと少しよ……」

そして三人が病室に戻っている頃、誰もいなくなった研究室で夕呼は一心不乱にプリント用紙へとペンを走らせていた。その足元には既にインクが無くなり使い物にならなくなったペンが何本も転がっており、彼女の指先はインクによつて真っ黒に汚れている。だが、今の彼女はそんな事を気にしている暇は無い。

白銀武が書いたメモ、夢の中の“自分”が書いたとされている数式の一部、それを見た瞬間、己の脳に弾けんばかりの衝撃が走った。

まるで長年探していた迷路の出口までの道順を解き明かしたかのような、難解なパズルの重要なピースをようやくはめ込む事が出来たかのような、そんな感覚を……

そこから先はまるで解けかかっているパズルを解いていくかのよう、己の脳の中で次々と理論と数式が組み上がっていく。長年悩み苦しんでいた難問が嘘であるかのような爽快感に夕呼は半分夢心地な気分になりながらも、狂ったようにプリント用紙へと向かっているのだ。

「成る、成るわ……!!これで、これで量子電導脳を構成する理論が完成する……!!オルタネイティヴ4も完遂できる……!!そうすれば……」

人類は……この戦いに勝利できる……!!半ば狂気にみちた笑い声を上げながら、夕呼はプリント用紙に数式、図式を書きなぐる作業を続けるのであった。恐らく今の彼女の耳には何の雑音も入らないであろう。例え基地に爆弾が落ちようとも、耳元で怒鳴り声をあげられようとも。

……直ぐ近くの電話機がけたたましくコール音を鳴らしているよう

とせ。

## 第18話 予感

みちるに連れられて武と純夏がついた場所、そこはつい先程夕呼とまりもと一緒に朝食を食べたPXであった。己達が食事をした時にはジンギスカンを食べる客でゴった返していた食堂は、既に朝食の時間は終わっている為か殆ど人は残っていない。

入室したみちる、武、純夏の三人は窓際の一番隅の席に移動し、席に座る。

「さて、まず何か飲み物でもどうだ？何、折角だから私が奢ろう」

「ええ!?そ、そこまでしてもらって悪いです!」

「遠慮するな、話は長くなるし私もちようど何か飲みたかったところだ。メニューにある物を何でも注文するといい。：言っておくがアルコールは駄目だぞ?」

申し訳なきような顔をする純夏を安心させるようにウインクするみちる。結局彼女の言葉に甘えて武は合成コーラ、純夏は合成オレンジジュースを注文し、二人の注文を聞いたみちるはウエイトレスを呼ぶと武と純夏の注文したコーラとオレンジジュースに加えて、〃いつもの栄養ドリンク〃とかいう代物をウエイターに注文する。みちるの注文を聞いたウエイトレスは少しばかり顔を引き攣らせながらも一礼するとそのままカウンターへ戻っていく。

遠ざかっていくウエイトレスの後姿を見送った純夏はチラリとドリンクのメニューを見た瞬間、キョトンとした表情を浮かべる。

「あれ?大尉さん、さつき大尉さんが注文した栄養ドリンクってメニューの何処にもないんですけど…」

「ん?あああれか。あれはもともとPXの購買で売られている代物なのだがな、個人的にお気に入りなものだから無理を言っただけで私限定で特別に食堂でも出してもらっているんだ」

「へえ、栄養ドリンクって話ですけど…美味いですか?」

「ああ美味いぞ。一度飲めば癖になる。何なら私が奢ろうか?」

何ともご機嫌そうな顔で笑うみちる、そんな彼女の笑顔に武と純夏は、そんなにおいしいのなら飲んでみようか、と考えてしまう。

その軽率な考えが後々後悔につながると知らずに…。

「まあそれに関しては何にしておこう。さて、それでは早速始めるが…」

みちるは一度口を閉じると目の前の二人へと視線を送る。先程まで浮かべていた笑顔から一転した真剣な眼差しに武と純夏は思わず身構えた。

「まず君達に質問だ。君達はBETAとはどういうものなのかを知っているか？」

「へ…？」

「BETAがどういう存在か、ですか…？それと今日のお話とどう関係が…」

「あると言えばある。とりあえず君達が知っているBETAについての知識を聞かせて貰えないか？」

唐突なみちるの問い掛けに武と純夏もポカンとするが、みちるの表情と発言から今回の話に関して無関係な話ではないという事だけは二人にも理解はできた。その為二人は己の知っているBETAに関する数少ない知識を思い返す。

「えっと…、宇宙から来た侵略者…？宇宙人、みたいなもので世界中に“ハイヴ”って名前の巣を作って人を沢山殺して世界を侵略している…、これであつてるよね…、武ちゃん？」

「ん…、確か副司令が人間を生命体を認識していないとかいった気がするけど…」

どうにか数少ない知識からBETAの情報を思い返し、代わる代わる発言した武と純夏はみちるの反応をじつと窺う。それはまるで教師の反応を伺う生徒か何かのようであった。

一方二人の返答を聞いたみちるは、特に喜ぶ様子も怒る様子もなく、ただ何かに納得した様子で軽く頷いた。

「…ま、そんなものだろう。とはいえ君達の言っている事もあながち間違いではない。しかしそれだけではまだ知識不足であるのも確かだ。話をする前にまず、BETAに関する基礎的な知識について教えるでしょう」



そう言ってみちるは椅子の背もたれにもたれかかると、武と純夏に己の知っているBETAに関する事項についてポツリポツリと語り始めた。

「まずBETAの正式名称は“人類に敵対的な地球外起源種”英語に訳すと“Beings of the Extra Terrestrial origins which is Adversary of human race”コレの頭文字を略してBETAという。

奴らは大型、中型、小型でそれぞれ七種類、いや、先日発見された超大型種も含めたら八種類に分類されている。光線級、重光線級、突撃級、要撃級、要塞級、戦車級、闘士級、兵士級、といった具合にだ。此処までいいいか？」

みちるの問い掛けに武と純夏はコクリと頷いた。二人の反応を見たみちるは説明を再開する。

「奴らが何故月、そして地球に侵攻してきたかは不明だ。コミュニケーションが現状不可能である以上奴らの本当の目的を知る術は今のところ存在はしない。が、それでも現在までに判明した事項は幾つも存在する。

まず第一に奴らは地球上の生命体同様炭素系生命体である事。かつてBETAの死骸を回収、そしてBETAを生け捕りにして入手した情報だが、奴らには消化器官、呼吸器官等の通常生物が生命維持に用いるはずの臓器が存在しない、が、その体細胞体組織を分析した結果、奴らは地球上の生命と同じ炭素系生命体であることが判明している。

そして第二だが、これは先程君が言ったのと同じ事なのだが“BETAは炭素系生命体を生命体とみなしてはいない”。まあ某国の研究結果によるものなのだが……」

みちるがそこまで説明した時、彼女の話を黙々と聞いていた武はふと違和感を感じた。

みちるの説明ではBETAは地球上の生物と同じ炭素系生命体なのだという。だが、それと同時にBETAは人類を含む炭素系生命体

を生命体だとはみなしていないとも言っている。

幾らなんでもおかしい。もしもそれが本当だとするならば、BETAは地球上の生命体だけではなく他ならぬ己自身すらも生命体とみなしていないのではないのか？そんな疑問が武の脳裏へと沸き上がってきた。

「あの…、一つ質問いいでしょうか？」

「む？何かな？」

おずおずと手を上げて質問の許可を求めてくる武に、みちるは特に気分を害した様子も無く応じる。みちるから許可をもらった武は早速先程抱いた疑問を口に出す。

「えっと、確かBETAは炭素生命体なんですよね？」

「ああ、研究結果によってそれは間違いないと証明されている」

「それでBETAは炭素生命体を生命とみなしていないんですよね？」

「そうだが……ああなるほど、君の聞きたい事が分かった」

武の質問を聞き、それに返答していたみちるはやがて彼が何を言いたいのか合点がいったのか軽く頷くと、みちるは武へと逆に質問を投げかけた。

「君はこう言いたいんだろう？『BETAは自分の事も生命体とみなしていないのですか？』と」

「…！は、はい！だって可笑しいじゃないですか！自分達も炭素系生物だって言うのに炭素系生物を生物だって認めないって、それじゃあまるで……」

「自分達も生物じゃないと言ってるようだ、か？確かに君の言うとおりだ。そのことについては未だに世界中で議論的になっていてな、香月副司令もまだ掴めては居ないらしい。……と、来たな」

と、突然みちるは言葉を切ると、二人とは別の方向へと視線を向けた。釣られて二人もそちらを見ると、何時の間そこに居たのかみちるが飲み物を注文したウェイトレスが合成飲料の入ったコップ二つと何やらこげ茶色のいかにも不味そうな液体が並々と注がれたコップが乗せられたお盆を持って立っていた。

「あの、ご注文のお飲物をお持ちしましたが…」

「ああすまない、合成コーラは彼に、オレンジジュースは彼女の注文だ。私のは…」

「コレですね？承知しています。ではごゆっくり」

ウェイトレスは手際よく三人に飲み物を配り終えると一礼してそのまま厨房へと戻っていく。武の目の前にはコーラ、純夏の目の前にはオレンジジュース、そしてみちるの目の前にはあの正体不明の茶色い液体の注がれたコップが置かれている。

武と純夏にはその正体は分からない。だがただ一目見ただけで明らかに「不味い」代物であるという事だけは理解できる。少なくとも決して美味しいものではないだろう。

だがみちるはその液体を見て待ちくたびれたと言わんばかりの笑顔を浮かべている。まさか彼女にはあれがおいしそうに見えるのだろうか？というかもしかして彼女の注文した栄養ドリンクというのは……。

「あ、あの…、伊隅大尉…、その、その飲み物って……」

「ん？ああこれか。これは先程私が注文した栄養ドリンクだ。見て分からないか？」

武と純夏が予感したとおり、みちるの前におかれたそれは例の栄養ドリンクとやらに間違いのないようだ。見て分からないかと言われたが二人にはそれがどうしても栄養ドリンクとは思えない。むしろ泥水と呼んだ方が適切かもしれない。

が、みちるはその泥水の如き液体を実に美味しそうに飲んでいる。そんな彼女を見て武と純夏は思わずどん引きしてしまった。

「……う？なんだ？そんなに美味しそうか？飲みたいなら話が終わってから私が奢ってあげると……」

「いいいいいいいいえ結構です!!そこまで大尉にお金を使わせてしまったら申し訳ありません!!な！な！純夏!」

「は、ははははははい!!私と武ちゃんはジュースだけで十分ですから!!」

「フフツ、遠慮するな。いや正直言うとな、この栄養ドリンクが美味

いかいとうと周りの人間は全員どん引きするんだ。しかもこれを飲むのは実質私以外居なくて少しきびしかったところなんだ。安物だからそこまで高くないし気にしなくていいぞ?」

二人がこちらを凝視しているのを栄養ドリンクを欲しがっていると勘違いしたみちるの発言に、武と純夏は冷や汗を流しながら先程一瞬でも飲んでみようかななどと考えてしまった事を内心後悔し始めていた。

でもひよつとしたら見た目はあれだけど実際はコーラやラムネよろしく美味しかったりして:!?等と心の中で僅かに希望は抱いていた。紙のように薄っぺらい希望ではあったが…。

「おっと、話がそれたな。まあそう言う訳でBETAが何故炭素系生物を生命体とみなしていないかは現状不明だ。コミュニケーションも現段階では不可能だと言ってもいい。

ただBETAは一切同士討ちをしない。己達が炭素系生命体、すなわち自分達の認識からすれば人類と同じ「生命体ではない存在」なものにも拘らず、BETAと人類を区別、認識し、絶対に同士討ちを起こすようなことはしない。現にBETAの一種である光線属種のレーザーは絶対に味方を誤射しないという事がBETA大戦初期から判明していたからな。…最も死体の場合はこの限りではないがな」

そこまで話したみちるは長話で少し疲れたのか椅子に凭れかかると例の栄養ドリンクをストローで一口啜る。

武と純夏もみちるが口を閉じたので己達も目の前の飲み物をストローで啜る。合成飲料とはいってもそこそこの飲料と同じ味には近づけている代物である為、特別美味しくは無いものの二人は不味いとは感じなかった。

ただ、武と純夏は気になっていた。此処まで話したBETAの特徴に関する話は確かに驚く事や己達の知らない事もあったが、それと京都防衛戦で起こった「予兆」というものとの関係があるのか…。

「あの…、BETAについては良く分かったんですけど、それと京都防衛戦の時に起きた事と何か関係があるのですか?」

やがて我慢できなくなったのか純夏がおずおずと手を上げてみちに質問する。栄養ドリンクを啜っていたみちるはチラリと純夏へ視線を送るとストローから口を放して少し困った表情でフウ…と軽く溜息を吐きだした。

「…前置きが長くなっちゃった。すまないな説明が下手で。…まあつまりBETAにはそういう性質が存在し、基本的に同士討ちはしないというのが常識だったという訳だ。…あの時まではな」

「あの時…？」

純夏の言葉にみちるは軽く頷くと両手の指を交差させてゆっくりと当時の事を思い返すように語り始めた。

「1998年、北九州から上陸したBETAはその圧倒的な物量による戦力で瞬く間九州、四国、中国地方を制圧、ついに旧首都、京都まで迫っていた。

無論帝国軍もこのまま手をこまねいていたわけではない。斯衛軍、国連軍、そして在日米軍との共同で帝都に防衛ラインを張り、BETAを迎撃する体制をとることとなった。

今回の話はその防衛ラインの一つ、奈良で起きた出来事についてだ」

淡々と語られるみちるの話を、武と純夏は黙って聞いていた。みちるは話を続ける。

「当時奈良にもBETAの大集団が押し寄せていた。無論帝国軍も奈良防衛の為に一部兵力を割いて防衛に当てたが…、結果は惨敗。結局BETAが奈良に侵入するのを止められなかった。

此処を突破されれば今度は東日本へのBETAの侵攻を許すことになる…。帝国軍はやむを得ず当時京都に置かれた防衛戦力の一部を奈良へと派遣する事となった。…最も派遣されたのは戦術機甲部隊一個大隊、奈良を蹂躪しつつあるBETAの大軍勢を相手にするには到底足りなかった」

「そ、それじゃあその部隊は…全滅…？」

BETAの物量は驚異的なものだ。津波のように押し寄せる軍勢の前では生半可な数の兵力など一瞬のうちに押し潰されてしまう。

それは対BETA戦用に製造された戦術機もまた同じこと。

京都防衛戦については己達も新聞、そして父母たちの話で知っていた。

日本1000年の都である首都京都の陥落……。帝国軍と斯衛軍、そして国連軍が敗退したというニュースに、西日本から横浜へと避難してきた何万もの人々の姿に武と純夏、そして今は亡き両親達は心の底から絶望的な気分、次は自分達の番だという憂鬱を抱いていたものだった。

だからこそ二人は、みちるの話に出てきた戦術機甲大隊は全滅したと確信していた。

勝ったはずがない、よしんばそこでBETAの群れをいったん退けたとしても、再度襲撃してきた軍勢に一人残らず押しつぶされたのだろう……。そんな悲観的な予想が二人の心に浮かんでいた。

だが、次の瞬間飛び出したみちるの言葉は、二人のその予想を完全に打ち砕いた。

「いや、逆だ。派遣された戦術機大隊は帰還した。死傷者0で、な」「……ええ!」「う、嘘……」

戦術機大隊帰還、それも死傷者0……。みちるの口から飛び出したその意外すぎる一言に武と純夏は仰天して身を乗り出してしまう。そんな二人に苦笑いを浮かべながらみちるは両手でこちらに詰め寄る二人を制止する。

「本当だ。私も初めて知った時は嘘じゃないかと疑ったものだ。一時期戦線から逃亡したのかとも疑われたが事実は違った。彼らは本当に生き延びたんだ、あの過酷極まりない戦場に派遣されて、な」

「ど、どうやって生き延びたんですか!?!…あ!派遣された戦術機大隊が滅茶苦茶強かったとか……」

「当時錬度の高い戦術機甲部隊はほぼ全て首都防衛に送られていた。よしんば彼らがそれ相応の実力を持っていたとしてもその時奈良に迫っていたBETAはおよそ10万以上……。とてもではないが無傷では済まない。しかも、だ、大隊の戦術機は殆ど損傷しておらず、さらに弾薬も殆ど消費されていない。いわばほぼ出撃当時と同じ状態

で帰還した。

「何故か分かるか？」

みちるの問い掛けに武と純夏は言葉に詰まってしまう。

「弾薬を一切消耗せず、機体に何の損傷も受けずにBETAの大軍を撃破する…。いくら軍人ではない二人でもそんな事は絶対不可能であるということぐらい分かる。」

仮に敵と戦わずに逃亡したというのならばまだ損耗がない事に関しては理解できるが、敵前逃亡に関してはみちるが否定している。

「ならば、一体全体何をやったのか…。武と純夏には想像がつかなかった。」

一方二人の悩む様子を栄養ドリンクを啜りながら眺めていたみちるは、そろそろ種明かしをしようと口からストローを放し、二人に答えを告げる。

「答えは簡単だ。彼らは戦っていないかったんだ。BETAとはただの一度も」

「……へ？」「た、戦って、ない？や、やっぱり逃げたんで……」

「逃げてはいない。……簡単にいえばな、BETAとの戦いに向かったはずが戦うはずのBETAが全て居なくなってしまった、ということだ」

みちるの言葉に武と純夏は全くもって訳が分からないと言いたげに首を傾げている。

BETAが全ていなくなった？つまり軍ではなくBETAの方が逃げ出したという事なのか？だが今まで世界中の国家を蹂躪、崩壊へと追いやった程の物量を持つBETAが逃げ出すというのも到底考えられないが…。武と純夏は困惑にみちた視線をみちるへと向ける。みちるは二人の視線を受けとめながら、重々しい溜息を吐きだした。

「私達も、というより帝国軍も信じられなかった。故にその戦術機甲大隊の隊員達には敵前逃亡の疑いまで掛けられたらしい。…まあ当然だが。」

だが、隊員の一人が戦術機搭載のビデオカメラに、当時の戦場の様

相を撮影していたんだ。それが決定的な証拠となり、彼らの疑いは晴れる事となった。

……が、その映像を見た人間は全員唾然とした。かく言う私もな、国連軍の特権を使ってその映像を見たのだが、あまりにも現実味が無いものだからこれは合成なんじゃないのか、と疑ったものだ」

まるで独り言でも呟くかのように言葉を吐き出すみちる。彼女の話を聞いていた武と純夏は、仮にも国連軍の大尉であるみちるがそこまで言う映像の内容が少なからず気になった。

恐らくその映像にあつたのが例の「予兆」、あるいはそれに関係する事に違いない、そう考えた武は眉根を寄せるみちるに恐る恐る問いかける。

「その……その映像の内容って……」

武の問い掛けにみちるは一度武へと視線を向けるとストローに口をつける。が、いつの間に飲みつくしてしまったのかコップは空になっていった。みちるは軽く溜息を吐くと再びウェイトレスを呼んでドリンクのお代わりを注文する。空のコップを持って厨房へと戻るウェイトレスの背中を眺めていたみちるは、再度武と純夏へと視線を向け直すと映像で見たその「事実」を口に出した。

「……BETA同士の、殺し合いだ」

「……!?」「こ、殺し合い!? BETA同士が!?!」

ああ、とみちるは重々しく頷いた。その表情は映像の内容を思い出しているからなのか若干険しい。

「何が起きたのかは全く分からないが、数十体のBETAが同類であるはずのBETAに狂ったかのように襲いかかっていたんだ。ある突撃級は小型種を次々と轢殺し、ある要塞級は触手を振り回して中型小型を踏みつぶし、本来味方を誤射しないはずの光線属種もレーザーを同胞であるはずのBETAに向けて照射していた……、文字通りの地獄絵図が繰り広げられていた。

襲われている側のBETAは完全に無抵抗だった。碌に反撃も出さず、いや、この場合はしなかったが正しいか？ 碌に反撃もせずには無抵抗に狂ったBETAの群れに殺されていった……。



やがて無抵抗だったBETAは皆殺しにされ、残されたBETA共は今度は互いに互いを殺し合つて……、全滅した。まるで自殺でもするかのようにな」

そこまで話し終えたみちるは、まるで苦虫でも噛み潰したかのような表情で黙りこむ。そんな彼女の雰囲気は武と純夏も同じく黙らざるを得ない。無論、みちるが語った事実に対する衝撃も少なからずあつたのだろうか。

「……あ、あの……、お代り、お持ちいたしました……」

と、突然三人のすぐ近くから何者かの声が聞こえてきたため、三人は同時に声の聞こえた方向へと振り向く。そこには何時の間にか先程みちるの空のコップを持って行ったウェイトレスが飲み物を載せたお盆を持ちながら困惑の表情でこちらを眺めている。

「……ん、すまないな。そこに置いておいてくれ」

「は、ハッ！で、では失礼します！」

ウェイトレスはドリンクをテーブルに置くとみちるに一度敬礼してそそくさと逃げるように厨房へと戻っていった。そんな彼女の後姿を眺めながらみちるは新しいドリンクへと口をつける。それをただ黙って眺めていた武と純夏もお互いの手元にあつたドリンクを一口飲んだ。

飲み物を口にして気分的に少しばかり楽になった為、純夏はみちるに先程の話に対する疑問を口にする。

「えっと、大尉さん……。さっきBETAが互いに殺し合つたって聞きましたけど……。でもBETAって同士討ちをしないんじゃないか……」

「それについても私にはさっぱりだ。確かにBETAには学習能力は存在する。奴らが時折予測不可能な行動をとる事についてもはや軍にとつて驚くべき事じゃあない。だが……、BETA同士同士討ちなど今の今まで聞いた事がない。確かにBETAがBETAを殺すという事例がないわけではないがそれは全て軍の作戦等によって引き起こされたもの、いわば事故のようなものだ。BETAが己の意思で行った事ではない。」

……だが、あの映像のものは違った。あの映像のBETAは間違

なく、己の意思で味方を攻撃していた。あんな事例は私も見た事がないし、恐らく今の今まで目撃した人間など誰一人として居ないはずだ」

みちるは険しい表情を崩さずに、武と純夏への話を続ける。

「…研究者の話では、一部のBETAに何らかの異常があったのではないか、という説がある。何らかのウイルス、毒、あるいは電磁波か何かを受けてBETAが暴走したのではないか、という話だ。…最も回収したBETAの死骸には異常が見受けられず、真相は闇の中なのだがな。……ただ」

みちるは一度口を閉じるとまるで何かを考えるように顎に手を当てて目を伏せる。が、直ぐに顔を上げて武と純夏へと顔を向ける。

「後に判明した事だが、例の大隊がBETAと遭遇した地点と同様に、BETAが突然謎の同士討ちを始めた、という場所が奈良に複数存在することが判明した。その場所を詳しく調査したところ、BETAが突然同士討ちを始めたのは、ある村落から半径2、3kmの範囲内とのことだった。結果その場所だけはBETAの手が及ばずに済んだ訳なんだがな。当然国連軍と帝国軍はすぐさま調査に入ろうとしたらしい、が、当時は国内に二つハイヴが作られそれどころじゃなかったからな、結局後回しにされていたわけだ」

そこまで話し終えたみちるはフウ…、と息を吐き出すと栄養ドリンクをストローで啜って一息つく。話を聞いていた武と純夏はみちるの語った「異変」の内容に少なからず啞然としている。

本来ならあり得ないはずのBETA同士の殺し合い、しかもそれが特定の土地で起きている…。確かにこれは異常ともいえるだろう。何らかの異変が起きていると考えてもおかしくは無いだろう。

しかしそれとガメラ、そして例の碑文にあった「ギャオス」とどう関係があるのか。ガメラが出現したのは例の異変の後、京都が陥落して日本にハイヴが二つ建設されてからだ。異変が起きた頃にはまだガメラは海の底に居たはず…。

みちるの話も聞いても未だに謎だらけ、到底己達では分かりかねない。唯一何らかの手がかりをつかんでいるであろう夕呼も研究室に

籠ってしまっているし、これ以上はどうしようもない。

後は例の異変が起きたとされている村落の名前…、それ位なものだろう。それでも何らかの手がかりになるかもしれないが…。

「えっと、その、村落の名前って、分かります？」

「…ん？ああ、確か名前は…。」

南明日香村、とか言ったな…。

武の問い掛けに、みちるはそう答えた。

夕呼SIDE

その頃武と純夏が部屋から出ていき、夕呼以外誰もいなくなった散らかり放題の研究室。二人が去った後夕呼は鬼気迫る勢いで周囲に存在する紙という紙に数式やら記号やらを書きなぐる作業をただひたすら繰り返していた。片手にはペンを、もう片手には己の書いた理論と、白銀武が夢で見たという書きかけの理論の書かれたメモ用紙を握りしめながら。

そして、作業開始から3時間後…。

「zzzzzzzz…ん、むにやむにや…クフフフ…勝った、わあ…グウ…」

相も変わらず床に紙きれが散乱している研究室、その奥のデスクに香月夕呼は上体を投げ出すように突っ伏して、大いびきをかいて眠っている。時折妙な寝言やら笑い声を出しながらにまりと笑みを浮かべるものの、直ぐに寝息へと変わってしまう。

無理もない。彼女はオルタネイティヴ4の要、量子電導脳構築の理論を完成させるために、文字通り寝る間すらも惜しんできた。睡眠時間が3時間を下回るのは当たり前、下手をすれば丸々一週間一睡もすることなく理論完成の為の研究を強行するというかのフランス皇帝すらも蒼褪めるほどの激務をこなしていたのだ。

そんな彼女が今は達成感に満ち満ちた表情で寝息を立てている。コレが意味する事は一つしかない。

ピリリッ ピリリッ ピリリッ

デスクの上で山と積まれた紙を枕代わりにする夕呼、そんな彼女の

耳に電話のコール音が響いてくる。夕呼は暫くむず痒そうに頭を小刻みに動かしていたが、やがてうつすらと双眸を開ける。

「……ん、ああああああ……、寝ちやったわね……。こここのころ寝てなかったから数式完成と同時にぼったりと……って数式は!? よ、涎とか垂れてないわよね!!」

起きた瞬間は虚ろな目をしていた夕呼は、瞬時に目を見開くと己が枕としていた用紙の束へと視線を落とす。そこに書かれているのは己がようやく完成させた量子電導脳構築の為の数式、ようやく掴めたほんの僅かな、だが確実なヒントを元に導きだした人類勝利の為の切り札を創り上げる為のカギとなりうる代物なのだ。

それに万が一涎で持たれていたらどうしようもない。夕呼は急いでプリント用紙をパラパラとめくって確認する。

「……よし、何ともないわね。良かったわ……。数式完成と同時に今までの疲労やら何やらが一気に押し寄せてきて一気に夢の中に一直線だったわねえ。いったいどれくらい寝てたのかしら……」

夕呼は何気なしに壁に掛けてある時計へと視線を向ける。が、見てみるとまだ30分程度しか経ってはいない。未だに眠気は残っており夕呼は目じりを擦りながら大あくびをする。と、ようやく先程からけたたましくコール音を鳴らす電話機に気がついた。

「……ん? 何電話? 私もうゆっくりに寝たいんだけど……」

折角の睡眠を邪魔されて不機嫌そうに顔を顰めながら夕呼は受話器を取り上げ、耳に当てる。

「はい、もしもし国連軍横浜暫定基地副司令香月夕呼ですが……：ああ、これは陛下! お久しぶりですわ!」

だが受話器を耳に当て、電話の向こう側の相手の声を聞いた瞬間、夕呼の表情は先程とは一転して明るくなる。まるで久しぶりに遠くに離れた友人と話をするかのような喜色満面の笑みで談笑している。

「……はい、はい、それは申し訳ありません。何分研究で忙しかったものですから。でもおかげでようやく完成いたしましたわ。……本当ですよ? 理論は完成して後は実践あるのみ、ついでに色々と材料が居るのですが、まあそれもたまり見つけられましたからね……」

ニコニコと笑いながら会話する夕呼、表裏も無い屈託のない笑顔は  
いかに彼女と親しい間柄の人間であつてもそうは見える事が出来ない  
だろう。話している内容に関しては少々不穏なものもあるのだが。

「…はい、その折にはまた陛下のお手を煩わせる事になるかもしれない  
ませんが…はい、はい、こちらこそよろしくお願いいたしますわ。  
…………え？寝不足？…………そうですね、最近寝たのは一週間ほど前  
…………まあまあ陛下、無理しすぎだと言われてもそうしなければな  
らない理由がこちらにありますので、そうお怒りにならないでくださ  
い。はい、もうすぐにも休ませていただきますので。…………ありがた  
き幸せに御座いますわ、それでは、おやすみなさいませ」

受話器の向こう側から通話が切られると、夕呼は受話器を電話機に  
戻してから大あくびをする。どうやら電話中は必死に眠気を押さえ  
ていたようであり、両目は眠そうに半開きとなっている。

「…………ん、そうね。陛下のお言葉に甘えて寝かせて貰おうかしら…  
えーと、仮眠室仮眠室…」

虚ろな目つきで椅子から立ち上がり、ふらふらと歩きだす夕呼。地  
面に散らばったプリント類を次々と踏みつぶし、時折躓いて転びそう  
になるものの直ぐに何事も無かったかのように歩き始め、やがて出入  
り口とは反対側の紙の山に半分埋もれている扉の前へと辿り着いた。

そこが夕呼が寝室として使用している仮眠室。ここ最近では睡眠  
を研究室で済ましてしまっているせいで長らく使っていないせいで  
御覧の通りドアは紙の山に埋もれ、これをどかさなければ中に入れな  
いのだが…………。

「…………メンドい。此处で寝よ」

即断即決、デスクに戻ると椅子の背もたれを倒し、そこに凭れて目  
を閉じると気持ちよさそうに寝息を立て始めた。長らく寝てなかつ  
た為に疲労が限界に達していたというのもあるが、今の彼女はようや  
く一仕事達成できた達成感と安堵でこれ以上ないほどに満ちていた。  
だからであろうか、今の彼女の寝顔は何とも幸せそうであった。

その後彼女は丸々8時間以上眠り続けたのだが、その結果彼女は現  
在一番の“楽しみ”を見逃す羽目になってしまったのは、別の話。

## 第19話 傍観者達

横浜暫定基地、モニタールーム。かつては近隣の横浜ハイヴ及び佐渡島ハイヴにおけるBETAの動向監視を主としていたが、日本に存在していた二つのハイヴが消滅した現在は突如出現した巨大怪獣、ガメラの監視が主な任務となっている。

とはいえ監視と言ってもハイヴ殲滅の時以外、ガメラは殆ど深度1000メートル以上の海底に潜っており、監視しようにもその姿を見る事はほぼ不可能と言ってもいい。精々ガメラが潜った地点から現在ガメラが眠っているであろう地点を推測する事しか出来ない。

現状ガメラは人類に敵対的な様子は無く、人類の生存域に侵攻する素振りを見せていないものの、それでもその戦力が万が一敵へと回ろうものなら脅威であることには間違いない。それ故にモニタールームは24時間体制でガメラを監視しているのだ。

「……で、香月博士は現在睡眠中、と？」

「は、暫くゆつくり眠りたいから誰も起こさないで欲しい、とおっしゃっていましたので……。如何いたしましょう、司令」

そのモニタールームにおいて、ラダビノツド司令とピアティフ中尉はこの場に居ない夕呼についてそんな会話を交わしていた。

量子電導脳構築に必須である数式の完成…、オルタネイティヴ4完遂において必須ともいえるそれがついに完成したという事実にはラダビノツド司令も喜びを隠せなかった。

ガメラの出現という嬉しい誤算も重なり、これで人類の勝利にまた一歩近づいた、己と己の同胞達が故郷へ凱旋するのもきつと夢ではなという希望が心に沸々と沸き上がっていた。それは目の前のピアティフ中尉も同じであろう。

で、肝心の夕呼なのだが、現在研究室で仮眠をとっているとのこと、起きたら連絡するため起きるまでは誰も研究室に近づかないで欲しい、とピアティフ中尉を介して伝言してきたのである。

もうすぐ彼女の大好きな「イベント」が始まるかもしれないという時に…、どうしたものとラダビノツド司令は溜息を吐く。

彼女は量子電導脳開発の研究の為にここ最近一睡もしていない。その疲労も既に限界に来ているはずだろう。正直言つてラダビノツド司令も彼女を無理矢理にでも休ませなければならぬと考えていたところだったのだ。

ならばこれは好機、数式も完成した事だし彼女には今日一日ゆっくり休んでもらったほうがいい。これから映る“イベント”に関しては録画して彼女に送ればいい。ラダビノツド司令はそう判断して軽く頷いた。

「……仕方がない。彼女も疲れているのだろうし、今日はゆっくりと休ませるべきだろう。映像は後で録画したものを送るとしよう。……そして、明日の食事は」

「中華ですね、すでにPXに伝えてあります」

「うむ、それでいい。さて……」

ピアティフ中尉と言葉を交わしたラダビノツド司令は視線をモニターへと移す。

そこは何処とも分からない空の上、高度はおよそ8000メートルにも達するだろう。

地上の景色は真っ白な雲海に隠れ、その真上にはサファイアブルー一色の青空が広がっている。

その生身の人間では到底見る事も叶わぬであろう世界を飛行する影が一つ、甲高いジェット音を響かせながら高速回転して飛行する、さながら空飛ぶ円盤のような飛行物体がマツハを越える速度で飛行していた。

普通の人間ならばやれ宇宙人の襲撃だのスクープだのと仰天するであろう光景、だが、この場に居る職員にとっては既に見慣れている光景であった。

「カメラ、日本海から南西に向かい飛行中、このままの進路でいけば……」

「重慶、その次は敦煌か……。次といってもカメラが何のトラブルも無く重慶を攻略出来れば、という条件付きだが……」

そう一人ごちながらラダビノツド司令はモニター画面の空飛ぶ円

盤、先程日本海から出現した怪獣ガメラの姿を眺める。

突如硫黄島より出現してから瞬く間に横浜、佐渡島両ハイヴを殲滅し、その後はユーラシア大陸を飛び回ってBETAとハイヴを殲滅している人類の希望、と言っているのかは未だに分からないものの、それでも心の底ではそうであって欲しいという思いを抱いてしまう存在。

BETAとハイヴを敵とみなすかの怪獣が次に目指す目標は、中国大陸に建設された二つのハイヴ、H16重慶ハイヴとH14敦煌ハイヴであろう。規模は双方共にフェイズ3。つい先日殲滅したH15クラスノヤルスクハイヴとはほぼ同規模の大きさである。

当然ハイヴ内部に内包されているBETAの物量もまた膨大な数であり、仮に人類がこの規模のハイヴを攻略するとなれば、犠牲となる兵士の数は確実に数万を越える事は間違いないと予測されている。

だが、人類にとっては脅威であろう物量すらも、ガメラにとっては脅威たり得ない。現にガメラはこれまでもBETAの圧倒的な物量という「数の有利」を己の純粹にして圧倒的な「個」の力のみでねじ伏せ、焼き払ってきたのである。

故にハイヴに出現するBETAが今まで通り物量戦法を行っていくのみであったならば、まず間違いなくガメラは勝利するだろう。ハイヴはBETA諸共炎に包まれ、人類は再び勝利への道程へと一歩足を踏み進める事になる。……そう、今まで通りであったならば。

「……あの、超巨大未確認BETA、ですね……？」

「うむ……」

ただ一つの懸念、それは新たに判明した超大型未確認BETA。全長およそ1km以上というもはやBETAの中でも規格外としか言いようのない巨体を誇る地球上最大のBETA、別なる世界においては母艦級と呼称されているBETAであった。

クラスノヤルスクハイヴにて確認されたあの個体に関するデータは現状ガメラと交戦している映像以外存在しない。なにしろクラスノヤルスクは現状放棄されているとはいえ米国と並ぶ大国にして共産主義国家の盟主、ソ連領内に存在する都市だ。共産主義特有の秘密



主義であるあの大国の気性からいって、いかに国連軍とはいえどもそう簡単に自国の領地に立ち入らせてくれるとは考えられない。故に現状あのBETAの生態、戦力等のデータに関してはカメラとの交戦データを参考にする以外には無い。

その結果得られた情報は、あの巨大なBETAの表皮はカメラの火球でも完全に貫通するには至らない程の強度を持つ事、地中から出現したことから鑑みて主に地中深くで活動をしている事、そしてあのBETAは要塞級同様体内にBETAを収納しているという事の計三点であった。

特に体内に収納されているBETAに関しては、映像で万を越えるBETA、それも小型種だけではなく突撃級、要撃級、要塞級と言った大型種までもを出現させている。このことから国連軍副司令の香月夕呼は、あのBETAは恐らく侵攻地点までBETAを運搬する役割を持っているのではないか、これまで発見されていなかったのはあのBETAが地底深くを侵攻していたからであって、あのBETAはBETA大戦初期からこの地球に存在していた可能性があるのではないか、そしてあのBETAはカメラに殲滅されたあの一体のみではなく、この地球の底に同種の超大型BETAが存在する可能性がある、と己の見解を述べていた。

無論これに関しては幾分かの推測も存在するだろう。だが、恐らく彼女の見解は当たっているだろう、とラダビノツド司令は確信していた。

だとするならばクラスノヤルスクハイヴ以外にもあの超大型BETAが潜んでいる可能性がある。もしも潜んでいるとするのなら、今回のハイヴ攻略も一筋縄ではいかないだろう…。ラダビノツド司令は厳しい表情でモニターを睨みつける。

ただひたすら回転しながら飛行するカメラ、だが突如としてカメラは回転を停止すると甲羅に空いた穴から頭部と両腕を引き出した。

そして、まるでそれを待ち構えていたかのように雲を切り裂いて幾筋もの光の帯がカメラめがけて照射される。それは間違いなく光線属種によるレーザー照射。コレが照射されるという事はすなわち、ガ



ら。反応炉潰されたから慌てて駆け付けたとか…、そんな所なのかね…』

『さて、今回のハイヴ攻略ではあの超巨大BETAが姿を現さなかったことから推測するとも言いなくもないな。もしもオリジナルハイヴが我々の事を警戒してハイヴに護衛として送り込んだとするのならば重慶ハイヴに出現してもおかしくないはずだ。ならば…』

『…あれはたまたま偶然そこに出現しただけ、か…。ならいいんだけどな』

ガメラ、シロガネタケルとオリジナルガメラは脳内でそんな会話をする。

クラスノヤルスクハイヴで出現した母艦級、それが今回の重慶ハイヴでの戦闘では出現しなかったところを見ると、どうやらあの母艦級は重頭脳級が意図して送り込んだものではないようである。地中を移動していたところでクラスノヤルスクハイヴの反応炉破壊に気がつき、急ぎ駆け付けてきた…、そんなところなのかもしれない。

『…我らがこの時代で活動を開始してから既に9日…。BETAと反応炉は全て潰しているし、よしんば生き延びて我々の情報を巢に持ち帰ったBETAが居たとしても…、情報を整理し対抗策を練るには約19日が必要、ならばまだBETAは我々への対抗策を練れていないはずだ』

『ああ、確か夕呼先生の話しだとそうらしいけどな。最もこのペースでいけば19日経つ頃にはオリジナル以外の地球上のハイヴ全部ぶっ潰せるから多分問題は無いと思うけどな』

『ああ、だが…』

オリジナルガメラは唸り声を上げながら口籠ると、一拍置いて再度口を開いた。

『武、君の記憶には、もう一体超大型のBETAの存在があったはずだが…』

『…ああ、↑標的、通称超重光線級の事、か…』

オリジナルガメラの発した問い掛けを聞いたタケルは、かつての

ループにおける記憶を、そこで戦った、あるいは知ったとあるBETAの記憶を思い出す。

超重光線級、通称Γ標的。かつて武が初めてループした世界、オルタネイティヴ4が失敗し、オルタネイティヴ5発動によるG弾集中投下によって崩壊寸前となった世界において突如として出現した史上最大の巨体を誇る光線属種BETA。一説には超重光線級、要塞級、反応炉の三種のBETAをかけ合わせた結果誕生したとされている。その巨体は母艦級には劣るものの、既存のBETAとは一線を隔する巨体、そして超重光線級の数倍にも達するレーザーと何十何百という数の衝角による遠近共に隙のない規格外の戦闘能力を誇る正に最強のBETAと言ってもいい怪物であった。

戦いの末にとある一人の衛士によって殲滅され、タケルはそのデータと映像を見る事しか出来なかったのだが、正直に言えば信じられなかった。

ただレーザーの一撃のみで地上の戦術機部隊を薙ぎ払い、最大出力のレーザー照射ともなれば沿岸に浮かぶ艦隊すらも一撃で蒸発させる…、はつきり言って今まで戦っていたBETAとはケタが違いすぎる…。こんな物にただの一機で挑み、ましてや倒すなど当時の己では無理だ、と確信していた。ガメラとなった今でもそう思っている。

そんな怪物をただの一機で葬り去った人間が居る……。いつたいどんな衛士なのか、男なのか、女なのか、米国人なのか、日本人なのか……。当時自分はその人間に一度会ってみたいと思っていたし、当時を思い返している今でも、その衛士がいったい何者なのかという事をほんの少しばかり気にはなっている。

結局あの時は目的の人間のことは何も分からず、反応炉を道連れに自爆してループする羽目になったんだっけ…、とタケルは茫然と思いつ返していた。

前回の戦いでは結局あの化け物と戦う事は無かったものの今回のループでは出てこないとも限らない。

『つつつてもあの化け物が確認されたのは2002年頃、今は1998年だから四年も間がある、か……。なあガメラ、今の俺であの

レーザー耐えられるか?』

『いや、死ぬ事は無いだろうが無傷という訳にはいかないだろう。君の記憶の映像で見た限りでの感想だがな、今の君の耐熱性ではあの熱量は耐えられない。私がフェニックスと戦った時の姿にまで進化すればあの程度のレーザーは訳も無いが…』

『フェニックス…、ああイリスの事か。あの形態って確かレギオンの三年後だから…、軽く四年は寝なきやならねえって事かよ…。もう桜花作戦終わってるかオルタネイティヴ5発動してるっての…』

ガメラ、タケルは憂鬱そうに深々と大きな溜息を吐きだした。本人からすれば軽く溜息を吐いたようにしか思えないそれはガメラの口内に残留したプラズマ火球の熱を纏い熱風となつて焼け焦げた大地を吹き荒れる。これだけで小型BETAならば軽く100は消し炭になつていであろう。

『…ま、超重光線級はまだ出てこないだろうし、今はあのデカブツを警戒するだけでいいよな…。さて、次に行くか…』

『うむ、果たして次も順調にいく事か…』

そうして脳内会話を打ち切ったガメラは脚部のジェットを噴射して空高く舞い上がり、次なる目的地へと飛び去っていく。焦土と化した重慶の大地を背にして…。

1998年12月8日 H16重慶ハイヴ、陥落。なお、クラスノヤルスクハイヴにて確認された超大型BETAに関しては、今回は確認されず。

#### モニタールームSIDE

「カメラ移動開始。目標地点はH15敦煌ハイヴと予想されます」

「監視を続行しろ。…しかし存外早いな…。既に6のハイヴを陥落させているから慣れてきた、という事なのだろうか」

モニタールームにてガメラによる重慶ハイヴ殲滅を目の当たりにしたラダビノツド司令は、流星にもう何度も見た光景故にそこまで衝撃を受ける事は無かったものの、それでも今までの戦闘と比べてもあまりにも早いハイヴ陥落には驚きを隠せずにいる。

横浜、佐渡島での戦闘はまだ眠りから覚めて日が浅かったにもかかわらず目立って苦戦する事も無くガメラはBETAを殲滅できた。その後も次々とハイヴを殲滅していく中で、ガメラは間違いなくBETAとの戦闘に慣れてきている。

BETAの収納量からいえばこの重慶ハイヴはまず間違いなく佐渡島の2倍以上、クラスノヤルスクとほぼ同等と言ってもいいだろう。それを以前佐渡島を攻略した時よりも遥かに早くハイヴを殲滅してのけた、ということはガメラがより強くなっているか、あるいは戦闘に慣れてきていると見ていいだろう。

「願わくば、その力の矛先が我々の方に向かない事を祈るばかり、か……。まあいい。ところでピアティフ中尉。香月博士は……」

「相変わらず起きる気配はありませんね。一応留守電を入れてはおきました。果たして敦煌ハイヴ殲滅までに間に合うかどうか……」

「まあ来なかったら来なかったで仕方あるまい。例え機嫌を損ねたとしても録画映像でどうにか機嫌を取るしかないだろう。最もそれで本人が満足するかどうかは知らんが……」

ピアティフからの報告にそう返しながらラダビノツド司令は苦笑いを浮かべる。

ガメラによるハイヴ殲滅、その光景をモニタールームで見るのは最近の夕呼にとっては研究の合間の唯一の楽しみでもあった。本人いわく「あのジェノサイドシーンを見るたびに脳細胞が活性化してくる」等と言う何とも物騒な理由らしいが。そのシーンを見逃したともなれば夕呼は間違いなく機嫌を損ねるであろう。で、怒りの矛先は己に向かうかピアティフに向かうか、果ては全く関係のない誰かに……。考えただけで嫌な予想しか思い浮かばない。

一応ご機嫌とり及び資料として記録する為に録画はしてあるものの、それで彼女の機嫌が直るかという……。正直言えば微妙と言ってもいいだろう。

「……まあいい、それに関してはまた後々考えればいい話だろう。それで、ガメラの進路予測は？」

「はい、ガメラは重慶ハイヴから北北西の進路を飛行中、このままの

進路でいけば敦煌ハイヴへと到達する模様です」

「予測通りか、よし、そのまま監視を続行しろ」

「了解しました」

オペレーターの返答を聞いたラダビノツド司令は再度モニターへと視線を戻す。そこに映るのは両足から高出力のジェットを噴射しながら蒼穹を飛行するガメラの姿。そのどこか恐ろしげな、それでいて雄々しい姿にラダビノツド司令は眩しそうに目を細める。

「あの存在が、本当に救ってくれるのかもしれない…。我が故郷も、この星も…」

まるで独り言のように呟きながら故国インドから追われ、それでもなお故郷への帰還を夢見続ける男は大画面に映る「最後の希望」へと思いを馳せるのであった。

香月夕呼SIDE

そして、処変わって此処は香月夕呼専用の研究室。

「……ん、んん？……んあああ……。ちよつと寝すぎちゃったかしらねえ…」

背もたれを倒した椅子をベッド代わりに爆睡していた夕呼は、何の前触れも無く双眸をゆつくりと開くとあくびと共に大きく伸びをしながら椅子から起き上がった。起き上った夕呼はさながらゾンビのようにふらふら身体を揺らしながら研究室備え付けの洗面台へと移動、蛇口をひねって冷たい水を己の顔へとぶちまける。

顔にかかる水の冷たさに、寝起きで若干鈍くなっていた夕呼の意識は瞬時に覚醒する。夕呼はタオルで軽く顔の水滴をふき取ると再度大きく伸びをする。

「ん……。良く寝たわねえ。これだけ寝たのって何週間、いえ、何カ月ぶりかしら？ちよつと思いい出せないわね……。ってか今何時？」

夕呼は何気なしに壁に掛けられた時計へと視線を向ける。時計は午前の10時を過ぎており、もうすぐ11時になるかという時間帯であった。

「あらまあ時間からしてもう14時間以上寝ちやったのね私。やつ

ぱり疲れがたまっていたのもあるのかしらねえ……。でも久々にぐっすり寝たから頭がすっきりしていて調子がいいわね♪」

夕呼は実にご機嫌な様子で眩きながら無意識に鼻歌を歌い出す。実際、今の彼女はこれ以上ないほどにご機嫌だった。

己を悩ませた睡眠不足による疲れが解消したのもあるが、それ以上に量子電導脳構築の数式が完成したのがなによりの喜びであった。

長年彼女を悩ませ続けていた難問が解け、もはや00ユニット完成は成したも同然、オルタネイティブ4はもはや成ったも同然と言っ正しいだろう。

「さてと、後は量子電導脳の構築と移植する人格の手はずなだけで、それに関しては横浜ハイヴで発見された『素体』を使用すればいい話として……。ん？何？留守電？」

これからの方針についてブツブツ独り言を眩きながら考える夕呼、ふと彼女が己の作業用デスクへと視線を向けた時、己の電話機に留守電が入っている事に気がついた。

「一体どこのどなたかしらね、昂星さんかピアティフか、果ては司令かもしれないわね、っと」

一体何の用やら、と考えながら夕呼は着信ボタンを押す。と、電話機から己の専属秘書たるポーランド人女性の淡々とした声が聞こえてくる、が、そこから聞こえてくる音声を聞いた瞬間、夕呼の目の色が瞬時に変わった。

『香月副司令、日本海からカメラが出現しました。只今H16重慶ハイヴへ向けて飛行中。恐らくは如何ハイヴを殲滅するものと……』

「なんですと!?!」  
夕呼は先程までの余裕ありげな表情から一転してギョツとした目で電話機を睨みつける。

しかし音声は止まることなく流れ続ける。機械から流れ出てくる音声を聞いている夕呼は、段々身体をわなわなと小刻みに震わせ始めた。

『……。と、いう模様です。副司令も目が覚めましたらすぐにモニタールームにお越しください。戦闘経過につきましては一応モニ



タートルームの方で録画をしておりますので……」

「録画じゃなくて生じやなきや全然迫力ないってのよ!!」

夕呼は絶叫を上げながらデスクに両腕を叩きつける。その衝撃でデスクに乗せられていた書類の山が一瞬宙に浮くものの夕呼はそれを気にした様子も無く悔しげな表情で電話機を睨みつけている。留守電が来たのは午前7時20分頃……、己がぐっすり夢の中でおねんねしていた時間である。

「つくーまさか私が寝ている間にカメラが出現するなんてね、完全に予想外だったわ……ってちよつと待ちなさい。この時間にカメラがハイヴに向かったって事は……」

もうすでに重慶は陥落寸前かもしれない……。否、下手をすればもう陥落して次のハイヴに向かっているのでは……?そんな予測を立てた夕呼は血相を変えて研究室から飛び出していく。

「あくもく!!カメラが来たんだったら起こしなさいっての!!折角の楽しみだったのに……!!」

絶叫しながら白衣を翻し全速力で廊下を駆ける夕呼。その姿は文字通り韋駄天走り、個の姿を目撃した職員は皆、常日頃研究室に引きこもっている副指令が廊下を鬼気迫る表情で全力疾走している姿に思わずあつけにとられていたという……。

### モニタールームSIDE

「……カメラの火球が地上のBETA集団に被弾!地上のBETA損耗率70%!BETA勢光線属種のレーザーで応戦していますがカメラには効果なし!」

「相も変わらず圧倒的だな。まあ光線属種を除けば連中は空の上の敵に手出しできない空中からの爆撃をすれば奴らを圧倒できるというのは、既にBETA大戦初期で明らかになっている事だ。よくよく考えれば光線属種さえなければ存外簡単にBETAを一掃できたのかもしれないな……。まあ今さら言っても仕方がないが……」

その頃モニタールームではついに始まった敦煌ハイヴでのカメラ

対BETAの戦闘の映像を、モニタールーム内の全スタッフ及びラダビノツド司令が固唾を飲みながら観戦している。とはいえ現状は空中からの爆撃で地上のBETAを根こそぎ吹き飛ばしているガメラの圧倒的優勢であり、殆ど心配する余地はなさそうではあるが。

地上での活動を主とするBETAには空からの攻撃が有利、という意見は既にBETA大戦初期から出ていた。事実1973年に行われた中国軍によるカシユガル落下物回収作戦では、地上戦ではBETAの圧倒的物量に悩まされはしたものの、超高空からの戦略爆撃機による絨毯爆撃によって一旦は圧倒的優位に立っていた。結果的にその優位は光線属種の出現によって覆われてしまったが。

だが逆に言ってしまうえば光線属種を無力化してしまえばBETAは航空戦力によって容易く殲滅することが可能であるという事だ。現に地上のBETAはレーザーが通用しないガメラに対して文字通り手も足も出せないでいる。ガメラの表皮と甲羅がどれほどの耐熱性を誇るかは知らないが、いずれにしろガメラに対処するにはBETA自身も空を飛べるようになるかガメラの耐熱性を突破できるレベルのレーザーを発射できる新種でも生み出さない限り話にはならないだろう。

「そうとも限りません、司令。あの超大型BETAも存在しますし…」  
「…そういうえぼそうだったな。ムウ…、あのガメラの火球にすら耐えきる表皮だ。我等の持ちうる戦力で果たして突破できるかどうか…」  
ピアティフ中尉の言葉でラダビノツド司令は突如として出現したあの生物としても規格外の巨体を誇る超大型BETAを思い出し、厳しい表情で眉を顰める。

一撃で数百のBETAを消し炭にするガメラの火球にすら耐えきる表皮、あれを貫通出来るとすれば一体いかなる武器を用いるべきであろうか。

恐らく大和級戦艦の主砲による一撃でもあまりダメージは期待できまい、それこそ核レベルの威力を誇る爆弾でもなければ一撃で屠るのは不可能であろう。

唸りながら己の思考に没頭するラダビノツド司令。と、その時突然

背後の自動ドアが開く音が聞こえてきたため、反射的に背後へと振り向いた。が、次の瞬間ラダビノツド司令は驚愕のあまり啞然とする羽目になった。

「こ、香月博士!?!」

「ぜえ……ぜえ……、ど、どうにか、間にあつたみたい、ね……」

そこに居たのは息を切らしながら猫背でこちらを睨みつけるこの基地のナンバー2、そして現在研究室で就寝中のはずの香月夕呼副司令であった。どうやら研究室からモニタールームまで全力疾走してきたらしく顔は汗まみれ、まるで酸欠でも起こしているかのようにヒューヒューと喉から妙な呼吸音が漏れ出している。

「香月博士……た、確かピアティーフ中尉が研究室で休んでいると……」

「もー、とつくに、目が覚めましたよ。ゲホツゲホツ……、それで司令達、私をのけものにイベントを楽しんでるって知って、ゴホツゴホツ、あーもー成れない運動するもんじゃないわ……、ピアティーフ! タオルと水!!」

「は、ハイ!!」

咳をしながら近くにあつたパイプ椅子へと座り込んだ夕呼の怒鳴り声を聞き、ピアティーフは急いでモニタールームの隅へと走っていく。一方の夕呼は椅子の背もたれにもたれかかりながら呼吸を整え、目の前のモニターで繰り広げられる映像へと視線を送る。

「おー、やってるわねー。うんうんコレを見てると今までのイライラがすつきりしてくるのよねー。……で、司令? このハイヴはどこですか?」

「敦煌ハイヴだ。重慶は既に攻略されて焼け野原になってるよ」

「……ち、ちよつと遅かったわね……。まあいいわ」

忌々しげに舌打ちをしながら夕呼は不機嫌そうに脚と腕を組んで尊大にふんぞり返る。いつも通りの見慣れた態度ではあるが、何故か今日の夕呼の顔は血色も良く、先日までなかった生気が満ち満ちているような気がした。

「……香月副司令、随分と顔色が良さそうに見えるが……」

「まあぐつすりたつぷり14時間休ませていただきましたからね。お

かげで今までたまり切っていた疲労もすっかり消えました。：ついでに久しぶりに怒り狂ったせいか頭が冴えて冴えて仕方ありませんわ。たまには怒るのもいいものですね」

「そ、そうか…、うむ、それは何よりだ…」

一瞬じと目でこちらを睨みつけてくる夕呼にラダビノツド司令は少し引きながら、モニターの戦場へと視線を移す。現在カメラは地上戦へと移行、こちらでもその圧倒的巨体とパワー、そして火球で持つてBETAを集団単位で潰していく。

その光景は常々このモニタールームで目撃している光景、常に人類を蹂躪する側であるはずのBETAが逆に蹂躪されていくという実に稀有な場面…。BETAにとつては悲劇そのものなのであろう。連中に悲劇というものが分かれれば、の話ではあるが…。

「圧倒的だな。このままいけば……」

「ええ、遠からずこのハイヴも陥落するでしょうね。私の予想通り」

夕呼は幾分機嫌を直したのかいつも通りの余裕に満ちた笑みを浮かべながら目の前の蹂躪劇を眺めている。BETAにとつては悲劇でも、彼女にとつては極上の喜劇であるのだ。それも、何度見ても飽きない程の。

「……そういえば例の超大型BETAは？重慶では出現しなかったのでしょうか？」

「いや、重慶ハイヴでの戦闘では奴は出現しなかったようだ。こちらはまだ始まって一時間も経過していないからまだ不明ではあるが……」

「そうですか……」

ラダビノツド司令の返答を聞いた夕呼は何を考えているのか分からない、無表情を一瞬浮かべたのちに、ピアティフから受け取ったタオルで顔の汗をぬぐい、ミネラルウォーターで喉を潤しながらモニターに映る映像をジッと凝視していた。

その後戦闘は直ぐに決着した。いつも通りハイヴはBETA全てを引きずり出されて殲滅されたのち、カメラによって反応炉を破壊されて完全に機能を停止した。カメラはその後南シナ海付近へと飛行

しその海底深くへと水没、再度消息を絶つのだった。

1998年、H14敦煌ハイヴ陥落、コレによりオリジナルハイヴを除く中国領土内のハイヴは全て陥落した事となった。

## 第20話 氷原

それは、ただの夢だったのか…。

それとも……。

『……ん、ああ…なんだ？何だか眼が冴え…!?!』

ふと何の前触れも無く眼を開いた武。あの食堂での会話の後、みちに半ば無理矢理勧められて純夏共々あの何とも形容しがたい味のドリンクを飲まされ悶絶した後、その後は純夏と一緒に運動場にて運動をしたり基地の職員から借りた参考書等で勉強したりといつもと変わらない日常を過ごした後、自分達が過ごしている病室のベッドで眠りについたはずだった。

だが、目を覚ました武の目に飛び込んできたのは、あの真つ白な壁に覆われた病室ではなかった。

頭上に広がるのはどんよりとした暗雲、己が寝ているはずの寝室の天井ではない光景は、己が純夏と一緒に寝ているはずの寝室ではなく、一面白銀の氷で覆われた寒々しい銀世界であった。

『どこだよ……、(っ)……』

武は茫然とした表情で周囲を見回す。そこは全てが静止した世界。大地も、植物も、生物すらも全てが凍りつき、空は重苦しい暗い雲で覆われ、一寸先が見えない程の猛烈な吹雪が雹を伴って吹き荒れている。

見覚えのない光景、見覚えのない世界…。そして、この極寒の世界に居るのならば必ず感じるはずの寒さをほんの僅かも感じないという異和感…。まるで映画かテレビでも見ているかのように現実感が沸かない。

その瞬間武は確信した。此処は夢の世界、己がガメラに救われてから何度も見るようになったあの奇妙な夢の中であると…。

だが今まで見ていたのは己と純夏が平穏な日常を過ごしている世

界、BETAによる脅威も存在せず友人達と穏やかな日常を過ごす文字通り夢のような世界であったというのに、此処は人間どころかありとあらゆる生命が存在しない氷の世界、文字通り生命の時間そのものが停止した死の世界であったのだ。

一体なぜいつも見ていた夢からこんな夢に……。そんな事を茫然と考えながら吹雪の吹き荒れる世界を見回す武。……と、その時だった。

『グルアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオンンンンンン』  
『!!!』

『…!?!』

突如周囲に轟き渡る雷鳴の如き咆哮、聞き覚えのあるその猛々しい雄叫びに武は反射的に背後を振り向いた。

そこに立つのは見上げるほどに巨大な影。戦術機の数倍はあろうかという巨体は、吹雪に紛れて輪郭しか分からない。だが、武はその影を見た瞬間に、それが何なのか思い至った。例え輪郭しか分からないくても、咆哮だけであろうとも、己と大切な幼馴染をあの絶望の穴倉から救い出した人類の希望となってくれる怪獣を、武は確かに覚えていた…。

『ガメラ……!!』

武は影めがけてその名を、叫ぶ。瞬間、それに答えるかのように裂帛の咆哮が響き渡り、吹雪と雪霞を吹き飛ばしてその雄々しくも猛々しい巨体を露わにする。

それは間違いなく突如として武達の住む世界へと出現し、世界中を巡ってBETAとハイヴを殲滅し続けている巨大怪獣、ガメラであった。だが、その姿は武が見た姿とは明らかに異なっている。

甲羅の縁はまるで刃のように鋭く尖り、その頭部にもまるで鋸のような鶏冠が備わっている。頭部、体型は武の見たガメラの姿よりもスマートに、それでいてよりがっしりとした姿になっており、両腕には五本の指以外に鋭く飛び出た爪が一つずつ、両足の脛にも外向きで鋭い爪のような突起が突き出している。

より恐ろしく、より強大な姿のガメラは、足元の武には視線も向け





た。

一方ガメラは永久凍土の大地に降り注ぐ虹の豪雨の中、ただ沈黙したままその場に立ち続けている。まるで不動の岩山のように、何万年もの間そこに立ち続ける巨樹の如くその場から動こうとしない。そんなガメラにも虹の爆撃が次々と叩きつけられるがガメラは動じない。痛みも感じている様子すらも無い。ただ唸り声を上げながら虹の豪雨を降り注がせる雪霞の向こう側の相手を睨みつけている。相も変わらず虹色の光を放ちながらその全貌を見せない敵を……。

やがて虹の豪雨が止み、空から降り注ぐ死の爆撃は終わりを告げる。

氷の大地は先程とは完全に様相を一変させていた。凍りついた大地には無数のクレーターが空き、クレーターの底からは無数の煙が立ち上っている。あの爆撃の影響であろうか、吹雪も収まり、視界を遮っていた雪霞も段々と薄れ始めている。

爆撃が収まるまでガメラの足元に隠れていた武は恐る恐るガメラの太木のような脚から顔をのぞかせる。吹雪は途絶え、今まで視界を覆い隠していた雪と雹のカーテンが段々と消えていく。

やがて、雪霞が全て消え去った時、目の前に立つ「それ」が、ついに武の目の前にその姿を現した。

『……!?!』

雪霞から姿を現した「それ」の姿に、武は思わず息を飲んだ。

目の前に居たもの、それはガメラと同じ、否、ガメラ以上の巨体を誇る巨大な四足歩行のトカゲの如き「怪獣」だったのだ。まるでオトカゲかワニのような頭部の先端からは長大な槍のような角が突き出し、同様に即頭部にも一対の角が備わっており、額には燃えるように輝く真紅の寶石らしきものはめ込まれている。頑丈な鎧のようならうろこにおおわれた背部には無数の虹色に輝く棘が隙間なく生えており、その全長の半分ほどはあろうかという長大な尾にも剣山の如く連なっている。

怪獣の大きさは目測でも100メートルは遥かに超えている。下手をすれば200メートル近くはあるかもしれない。そんな巨大な



あの液体はありとあらゆるものを一瞬で凍りつかせる程低温な冷凍液なのだ。それもガメラの火球を一瞬で消してしまうほど強力な…。

凍りついて動かなくなった己の右腕を庇いながらガメラは目の前の怪獣へと怒りの視線を向ける。かく言う怪獣も背部に火球を受けた事によって傷を受けている。最もその頑丈な表皮によってそこまで大きなダメージにはなっていないのだが。

それでも傷を付けられた怪獣は激昂して怒りの咆哮を張り上げる。それと同時に怪獣の体表から白いガスのような気体が噴き出し始めた。

『あれは……、まさか……!!』

その気体を見て武の脳裏にある予感がよぎる。そしてその予感は、瞬時に的中する事となった。

怪獣の全身から噴き出した白い気体は、徐々に徐々に怪獣の身体を覆いつくしていくと、瞬時にその表皮を凍らせていく。やがて、白い気体が消え去った後には、全身をとげとげしい氷の鎧で覆い尽くした怪獣がその巨体を露わにしていた。

まるで白銀の甲冑を纏っているかのような姿へと変貌した怪獣は、ガメラへと殺意の籠った視線を向けながら身構える。一方のガメラは目の前の怪獣を見据えながらもチラリと凍りついた己の右腕へと視線を落とす。

と、ガメラは何の前触れも無く己の凍りついた腕めがけてプラズマ火球を発射した。予想外のガメラの行動に武は啞然とする、が、直ぐに武はガメラの意図を知る事となる。

火球は凍りついた右腕に命中、爆発を起こして右腕に張り付いた氷を粉微塵に吹き飛ばし、その熱でもって凍りついていた右腕を溶かして元へと戻す。若干の荒療治で己の腕を直したガメラは元に戻った右腕の調子を確かめるように掌を二、三回握りしめる。

一方の怪獣は突然のガメラの行動に啞然としていたらしく動かずにいたが、やがて相手が油断ならない相手だと理解したのかガメラ目掛けて咆哮を張り上げる。



しても夢にしてははつきりと己の記憶に残っているのが気がかりでならない。そして夢を見始めたのがガメラに救出されてからであるという事も…。

まさかこれもガメラに関係が…？でも一体何故自分だけ？同じく助けられた純夏は武の見た夢と同じような夢など見ていないとはつきり言っている。

考えれば考えるほど分からない事が次々と浮かんでくる。結局何時まで考えても分からなかった為に再びベッドに横になるが、見た夢の記憶が鮮明に残っているせいか眼が冴えて眠れず、純夏が起きるまで真つ白な天井を黙って見上げている事しか出来なかった。

「……で、また副指令と一緒に朝食をしたい、と？」

「そうなのよ。昨日ガメラが中国大陆に存在した重慶、敦煌二つのハイヴを殲滅した事を一緒に祝いましょう、ですって。…うう、中華、って事は辛いのが……」

「ぐ、軍曹さん…。辛い物が出るとはまだ限りませんし…」

ベッドから起床した武と純夏はいつも通りグラウンドで朝の鍛錬を行った後、まりもに連れられてPXへと向かっていた。理由はやはり、ガメラによって重慶、敦煌量ハイヴが殲滅された事を一緒に祝おうという基地副司令香月夕呼の提案であろう。最も先日の部屋での夕呼の様子からしてそれだけでない可能性もあるのだが…。

今日の朝食の内容は恐らくは中華料理、ラーメンとかチャーハンとかそんなところであろう。

中華料理は種類が豊富ではあるものの夕呼の事であるからまた前と同じく事前に注文している可能性が高い。…それも三人がたまげるとような碌でもないような代物を…。現在まりもが暗い顔をしているのもそのためである。

中華料理にはとにかく辛い料理が少なくない。マーボー豆腐などがその代表格であるが、仮にそれが出るとしたなら一体どれほどの辛さになっている事か…。辛い物が苦手なまりもからすれば戦々恐々

する以外にない。そんな彼女の後姿を武と純夏は気の毒そうに眺めていた。

そうこうしているうちにPX食堂に到着した三人。相変わらず朝食時と言う事で食堂の席は人で埋まっており、唯一三つの席が空いている中央の席では夕呼がニヤニヤと笑いながら三人が来るのを待ち構えている。テーブルには今のところ食器とお冷以外は何も乗せられていない。もう逃げられないと観念したように、まりもは重々しく溜息を吐きながら二人へと振り返る。その表情は今まさに絞首台へと送られる囚人か何かのような悲壮感で満ち溢れていた。

「……行きましようか」「は、はい……」「ちよつと、不安ですけどね……」  
戦々恐々士ながら三人は食堂のドアを開けて中へと入っていく。

食堂内で食事、談笑する衛士と基地スタッフ、そのテーブルに乗せられている料理はやはりというべきか全て中華料理で統一されている。餃子、シューマイ、チャーハンにラーメンといったオーソドックスなものとは勿論の事、マーボー豆腐、中華丼、天津丼等というものである。

香ばしい匂いが鼻孔をくすぐり否が応にも三人の食欲を刺激する。が、果たしてこれから食べられるものが己達の口に合うものなのか…、三人の不安もまた食欲と共に増大していく。

そして夕呼の座るテーブルへとようやく到着した三人を、夕呼はにこやかな笑顔で出迎えた。その表情は何時になく上機嫌そうでなんとなくだが肌の色もいつもより艶やかになっているような気がする。

「おはよう三人とも♪昨日はよく眠れたかしら？私はもう久しぶりにぐっすり眠れたもんだから最高に気分がすっきりしているわ♪」

「お、おはようございます副司令……。あはは、先日は純夏と一緒にいきなり帰ってしまつて申し訳なく……」

「ん〜？別にいいわよ私が良いって言ったんだし。それに私は怒るところか貴方に感謝しているのよ白銀？お陰で私の研究が完成したんだし♪」

「へ…？そ、それってどういう……」

夕呼の呟いた意味深な言葉に武が反射的に質問しようとする、夕

呼は武の言葉を遮るようにピンと立てた人差し指をつきつける。その表情は相も変わらず笑顔であり、特に威圧的なものでもないが、なんとなく逆らえない、あるいは逆らってはいけない雰囲気醸し出している。

「おっとそこまでよ。それ以上は此処では話せない極秘事項なの。いずれ貴方達二人にも知ってもらおう事だとは思うんだけどね……」

「は、はあ…、まあ黙れと言うなら黙りますけど……」

武の困惑気味の返答に夕呼は「うんうん、素直な子って好きよ?」と上機嫌そうににこにここと笑っている。何時になくご機嫌そうなた呼の姿に武と純夏は彼女の古い友人であるまりもへと視線を向ける。が、当のまりももこんなに夕呼が上機嫌なのには心当たりがないらしく困惑した様子で首を振っている。

「ま、それはともかくとして二人ともいつまでたつてるのよ。席空いてるから早く座つたら?」

夕呼に促されて三人はおずおずといつも通りの席に座る。まりもは夕呼の隣の席、武と純夏は夕呼の向かい側の席である。

三人が席に座ると夕呼はテーブルの端に置かれているメニューを取ると武と純夏へと差し出した。

「さーて今日の料理はもう知つてると思うけれど中華料理。まあ中華つて言つても山ほどあるからどれにすればいいのか分からないだろうし、三人ともこのメニューから選んで頂戴ね?あ、ちなみに私は合成フカヒレ定食を頼んだから♪」

「お、おおう…、朝っぱらから合成とはいえフカヒレとは豪華なものを……つてあれ?今日はあらかじめ頼んでないんですか?」

キムチ料理と焼き肉の時は三人から頼まれても居ないというのに勝手に注文していた夕呼の口から出た意外な言葉に、武だけでなく純夏、そしてまりもまでキョトンとしてしまう。そんな三人の視線に夕呼は優雅に微笑む。

「ん?ああそれね。さっきも言っただけど中華料理って種類が多すぎるから私としてもそう簡単に決められないのよねえ…。それにもしも貴方達が苦手な代物頼んで逆恨みされたら嫌じゃない?私だつて

「気が使えるのよ？」

優雅な頬笑みを浮かべながらそんな事を仰る副指令に、武、純夏、まりもの三人は「どの口が言うのやら……」と軽く溜息を吐きだしてから、夕呼の言葉に甘えてメニューを開く。

夕呼の言うとおりメニューには数十種類もの料理のメニューがズラツと並んでいる。定番ともいえるチャーハン、餃子、ラーメンなど以外にも、チンジャオロースー、ホイコーロー、マーボー豆腐といった中華の料理、それ以外にも武と純夏が聞いたことも無いような料理の名前が書かれており、どれを選べばいいのか分からずに目移りしてしまう。一方のまりもはなるべく辛くないような料理を探して目を皿のようにしてメニューをじろじろと舐めるように眺めている。そして既に注文を決めている夕呼はそんな三人を楽しげに笑いながら眺めているだけであつた。

やがてメニューを眺める事約一分、武は酢豚定食にシューマイ、純夏はチャーハンと餃子、まりもはさんざん悩んだ末にラーメンを頼む事となつた。

夕呼はその案外普通で何の面白みもない注文、特にまりもの注文したラーメンに関して若干つまらなそうな顔をしながらもウェイトレスを呼んで三人の注文を伝えてくれる。

ウェイトレスが席から離れると夕呼は手元にあるコップに入った水を一口飲むと、実に心地よさそうに軽く吐息を吐きだした。

「ふう…、やっぱりいいものね、肩にのしかかった重い荷物が下りるって言うのは。おかげで気分的にもだいぶ楽でいいわ」

コップの中の水を揺らしながらリラックスした表情をする夕呼。まりもはこの基地に来てからでは初めて目撃する彼女の表情に若干意外そうに眉を上げる。

己が国連軍横浜暫定基地に教官として招かれた頃から、夕呼にはほとんど落ちつける暇がなかったと言ってもいい。人類の命運を左右する計画の最高責任者に抜擢されたという重圧、オルタネイティブ5を強引にでも成立させようとする米国の圧力との戦い、遅々として進まぬ研究…、といった数々の要因によって今までの夕呼には余裕も気



を休める暇も無かったのだ。いかに他者からの妨害、困難、重圧に襲われようとも常に表面上は余裕と不敵な表情を見せ続ける……。心の内に幾つもの悩み、苦しみを抱えていようともそれを決して他人に漏らさず、感づかせない……。それが神宮寺まりもの知る香月夕呼という“女性”であった。

そんな彼女がほんの僅かであろうともリラックス出来ているというのならば、それは彼女の親友として喜ばしいことであるだろう。……今まで彼女のおもちゃにされた事は除いて、だが……。

「へ〜…、そう言えば副司令さんってBETAをやつつける兵器を作ってたんですね？もしかしてそれが完成したんですか!？」

「ま、そうね、と入っても完成したのは設計図なだけだね。昨日ようやく書き上がったところよ。それもこれも白銀、貴方のおかげよ？」

「へ？お、俺？」

自分のおかげだと言われて戸惑う武。自分のおかげだと言われても武自身は夕呼の研究を助けた覚えは無い……。いや、あるといえばある。例の夢の中で出てきた数式を夕呼に言われるがままに思い出して書き写して夕呼に渡した。その後夕呼の様子が何やらおかしくなって……。もしかしてその事か？

「俺のおかげって……。もしかして俺の夢に出てきたって言う意味不明の暗号の事ですか？」

「暗号じゃないわよ、あれは正真正銘の数式の断片よ。まあ全体のほんの一ピース程度の量しかなかったんだけれど私の理論を完成させるには十分な代物だったわ。ありがとね白銀♪」

「い、いやまあそんな……。大したことはしてませんし……」

夕呼に礼を言われて顔を赤らめて照れる武。少々性格が変わってはいえるものの夕呼は文字通り美人と言える素晴らしい容姿の女性である。そんな女性に礼を言われたのだから健全な男子である武としては照れざるを得ない。……無論隣に座っている幼馴染からすれば面白くない事であるのだが。純夏は面白くなさそうに横目で隣の浮気者を睨みながらそのだらしなく緩んでいるほっぺたを思いつき

振り上げる。

「くく!?ふへ!?!いい、いはいいいはひゅみは!!おはえいつはいはひひて!?!」

「知らない!!ふん、どうせ武ちゃんなんて副司令さんみたいなナイ斯巴デイなお姉さんが好みなんですよ!?!どーせ私なんて貧相なからだつきですよーだ!ふーん!」

突然頬を思いきり抓られて武は純夏に抗議するが、対する純夏も怒り心頭な様子でそっぽを向いてしまう。そんな純夏の心境も知らずに武は純夏へと抗議の声を上げる。そんな二人の様子を夕呼は実に楽しげに、まりもは若干引きつり気味な笑顔で眺めている。

「ククツ。いいわねえ若いつて言うのは。まあ私もまだ若いんだけど。いや、青春つていいものねえ。そうは思わないまりも?」

「……ねえ夕呼、もしかしてコレ狙ってたの?」

「ん?何の事?あれは単なる偶然よ?まあ鑑は嫉妬深いから多分イラツとくるかな、とは予想してたけど」

「……あつそ、もういいわ」

まりもは早々に夕呼との会話を打ち切ると視線を再び喧嘩する武と純夏へと戻す。

その様子はどう見ても夫婦同士、あるいは恋人同士の痴話喧嘩に見えない。武と純夏が自覚しているかどうかは不明ではあるものの、二人がお互いの事を大切に思っている事は間違いない。…まだ恋人と呼ぶには遠いかもしれないが。

最も出来る事ならば痴話喧嘩をやるなら別の場所でやってもらいたいものだ。こんなところで騒がれたら周りの迷惑にもなるであろうし、何より…。

「彼氏居ない歴〓年齢なこちらにとっては結構つらいのよね…」

「同情するわよまりも?」

「うっやい!!」

横から茶々を入れてくる腐れ縁の悪友に悪態を吐きながら、まりもは目の前の痴話喧嘩が終わるのを黙って待つのであった。

結局二人の口喧嘩が終わったのは注文した料理が運ばれてきた後、

互いの意識が料理へと向いた時に自動的に終了する事となった。合成食材とはいえ見てくれは本物と同じく食欲をそそる盛り付けがされている。味に関しては本物に劣るとはいえ待ちに待った食事である為に武と純夏は目を輝かせている。……一方のまりもは目の前に置かれているラーメンに顔を引き攣らせていた。

「……ねえ、夕呼」

「ん？どうしたのまりも？お腹すいてるでしょ？食べないの？」

「食べたいわよ、ぜひとも食べたいわよ。だけどねえ……」

相も変わらずにこやかな笑顔を浮かべる親友の姿に、ついにまりもの怒りが爆発した。

「なんなのよこの真っ赤なスープは!!明らかに辛子やら何やらがたんまり入ってる色じゃない!!こんなの食えるか!!」

「あれ？知らなかったまりも？今日はラーメンで注文すると『激辛豆板醤入り辛子味噌ラーメン』が出てくる事になってるんだけど？」

「嘘!?!なによそのトラップ!!って言うか詐欺じゃない!!」

まりもは涙目になりながら目の前の丼に入ったソレ、まるでマグマのように真っ赤なスープとそれによって染められたのか真っ赤に染まった具材と麺がたんまり乗せられたラーメン『らしき』料理、というよりラーメンを三日三晩トウガラシに漬けた結果何らかの突然変異を起こして完成したような物体を指差して絶叫する。

明らかに一口食べれば偉い事になるであろう事が見た目からして明らかなソレに、最初は己の料理を見て顔をほころばせていたものの、まりものラーメンを見た瞬間に顔を引き攣らせて絶句していた。最も料理が運ばれてきた時に何故か夕呼が明らかに何かを企んでいるかのような邪悪な頬笑みを浮かべていた為『あく、こりゃ何かあるな』と二人は予想していたんだが…。

「ん、でも食べられない事は無いんじゃない？うちの火渡なんてコレと超激辛マーボーを纏めて嬉しそうに平らげてたけど？しかも水無しで……」

「そりゃ火渡大尉は辛い料理大好きですから!!そんなの食べても平気でしょうけど!!と言うか夕呼、アンタまさかとは思うけど料理長と

かに金やら何やらを握らせて私の料理を激辛にするように頼んでるんじやあないんでしょねまさか!？」

烈火の如く怒り狂いトラの如き咆哮を張り上げるまりも。そんな彼女の怒りに夕呼は一瞬間を背けたが、やがてゆっくりと顔を戻すとニツコリと優しい笑顔を浮かべ……。

「申し訳ない、そうよ」

「夕呼オオオオオオオオオオオオ!!!」

ついに怒りを爆発させたまりも! その絶叫はPXどころか基地全体にまで響き渡ったそうな…。

## 第21章 深まる謎

「あ、そうそうすっかり忘れてたわ。二人共、食べながらでいいから聞いてもらえるかしら？」

「…ムグ？」「ふえ？どうかしたんですか副司令さん？」

あの後プチ切れたまりもと夕呼の口喧嘩は10分以上続き、終わる頃には折角の料理も冷めきってしまった。やむを得ず料理は再び温め直してもらい、4人はようやく朝食にありつく事となった。ちなみにまりもの激辛ラーメンに関しては料理を温め直す際にまりもがウエイトレスに必死に頼み込んで餡かけチャーハンに変更して貰っている。

そんなこんなで遅めの朝食となってしまった一行、特に朝早くトレーニングをしていた武と純夏は餓えた獣か何かのように料理を頬張っていた。一方のまりもは何かか激辛料理を回避できたことに歓喜の涙を流しながら餡かけチャーハンをかき込んでいる。そんな親友を何所か呆れた表情で眺めながら合成フカヒレスープを口に運んでいた夕呼は、ふと何かを思い出したように武と純夏へと声をかける。食事をしていた二人はキョトンとした表情で夕呼に視線を向けるが、夕呼はそれに構わず口を開いた。

「実は今貴方達が住んでる病室の代わりの部屋がようやく見つかってね、ここ最近ごたごたがあったから後回しになっちゃったんだけど、ちようど空いてる部屋が二つあるんだけれど…」

夕呼は一度口を閉じるとまるで値踏みでもするように武と純夏へと視線を巡らせると、ニマツと笑みを浮かべる。

「率直に聞くわよ、相部屋がいい？それとも個室？」

「へ？」「相部屋と個室って…、何ですか？」

夕呼の口から飛び出たセリフに、武と純夏は思わず揃ってキョトンとしてしまう。そんな二人の反応を夕呼はニヤニヤ面白そうに笑いながら眺め、対してまりもは餡かけチャーハンを口に運びながら、「また始まった…」とでも言いたそうな表情で夕呼に視線を送っている。そんな彼女の視線にも構わずに夕呼は話を続ける。



夕呼を嗜めるつもりが逆に茶化されてまりもは不貞腐れながら餡かけチャーハンをかき込み始める。唐突にやけ食いを始めたまりもは姿に武と純夏は一度顔を見合わせたか、やがて二人も黙って食事を再開するのだった。夕呼もまた三人の食事風景を眺めながらフカヒレスープを蓮華で掬って口に運んでいる。

「……ま、じっくり考えて頂戴ね。私としてはどっちでもいいことなんだけれど荷物運んだりとかいろいろ面倒な作業とかあるだろうし。ま、それはそれとして……」

夕呼はフカヒレスープの最後の一匙を口にすると、蓮華を置いて武と純夏に視線を向ける。

「白銀、鑑。食事が終わったらまた研究室に来てもらえるかしら？先日話が途中で終わっちゃったでしょ？その続きでも……」

「えっと……、それってあの南明日香村で起きたBETAの同士討ちの事ですよ？」

「……あれ？知ってたの？それとも誰かから聞いた？まあいいわ。そ、例の京都防衛戦の最中に奈良で起きた稀な事象についての話よ。まあそれもあるんだけど……」

夕呼は視線を武一人へと向けながら、何を考えているのか全く読みとれない表情で薄笑いを浮かべる。その笑顔に何か不気味なものを感じた武は体を硬直させるが、そんな武に構わず夕呼は話を続ける。

「……白銀、鑑から聞いたところによると貴方最近変な夢を見るみたいね？ちよつとそれについても調べたいのよ。貴方の夢の中に何故私やまりも、……おつと、そのそっくりさんだったかしら？まあいいわ。とにかく貴方の見た夢に関して色々調べたい事があるのよ」

「夢……？一体何の話よ夕呼」

「まりもには関係の無い話よ。あくまでこちらの話だしどうせまりもに話したとしても信じられないわよ」

「……ハイハイそうですか、なら聞きませんよ全く……。じゃあ私はこれから訓練兵への教導があるからこれで失礼させてもらおうわ」

夕呼のそっけない返答にまりもは若干不満そうにブツブツ呟きながら席から立ち上がると、そのままPXの出口へと歩いて行く。武と

純夏はその背中を黙って見送った。

つい一週間ほど前のガメラの横浜ハイヴ襲撃の影響で訓練兵の教導は一時中断されていたのだが、2日前から再開となり、教導館であるまりももまた忙しい日々を送っている。かつてと同じく勉強を見て貰ったりトレーニングを指導して貰うのは難しくなってくるであろう。武と純夏はその事に少しばかり寂しさを覚えていた。

「…なんか寂しくなっちゃいますね、私達、軍曹さんに勉強とかいろいろ教えて貰ってましたし…。」

「まあ暫く休暇が続いていたしね、訓練兵達にも休暇をあげた分びしばしやらなきゃならないでしょうから暫くは忙しくなるんじゃないかしら？どうしてもって言うのなら私の権限でどうにかしてあげても…。」

「だ、大丈夫ですよトレーニングも勉強も一人でできますし、神宮寺軍曹だって本業の方が大切でしょうから」

「あらそう？遠慮なんかしなくてもいいのに。ま、それはともかくとして二人共早く食事食べちゃいなさいな。残したら食堂のおばちゃんの雷が降るわよ？」

「…あ」「そ、そうですね、早く食べよ、武ちゃん」

夕呼に促された二人は食事を再開する。二人とも空腹であった事もあり、瞬く間に目の前の料理を平らげてしまった。

食事を終えて一息ついた武と純夏は、以前と同様に夕呼に連れられて彼女の研究室へと向かう事となった。道順そのものはなんとなく覚えてはいるものはいかんせん臨時とはいえそれなりに広い横浜基地内部、その奥の関係者以外立ち入り禁止のエリアに存在する夕呼の研究室までの道のりはそこそ長い為、気を抜いてしまえば迷子になってしまうかもしれない。帰り道はみちるに教えて貰ったものの、果たして迷わずに自分達の部屋までたどり着けるか…。

「…まあもしもの時は基地の人に道聞けばいいか…。」

「ん？何の事よ」

「いえ、副司令の研究室から病室まで結構離れますから無事辿り着けるかって心配になって…。前は伊隅大尉に送ってもらったんで



すけどね…」

「あー…、でもPXまでの道のりは分かるわよね？そこまで分かるんなら大丈夫じゃないの？どうしてもって言うなら案内を呼んであげてもいいけど？」

「あ…、いえ、そこまでしてもらわなくても…、あはは」

夕呼の提案に対して遠慮の言葉を述べる純夏、彼女の反応に夕呼は「そう」とだけ返すとそのまま背を向けて研究室へと脚を進める。武と純夏も彼女の後を追って廊下を歩いて行く。

PXからでて廊下を歩く事3、4分ばかり、ようやく三人は夕呼の研究室の前へと到着した。夕呼はドアの近くの機械へと己のIDカードを通してロックを解除、同時にドアがスライドされて研究室への入り口が開かれた。

「さ、遠慮せずにどうぞ。一応前よりは片づいているからそこそこ見栄えは良くなっているわよ？少なくとも前のように紙の山が崩れ落ちてくるような事は100%あり得ないようにはなっているわ、そこは保証してあげる」

そう笑いながら夕呼は武と純夏を己の研究室へと招き入れる。武と純夏は恐る恐ると言った感じで研究室へと足を踏み入れる。何せ二人とも以前研究室を訪れた際に頭上から降り注いできた紙の山に押しつぶされるといいう目にあつたのだ。幾ら夕呼が大丈夫だと言っても身体と理性は反射的に身構えてしまう。

が、二人の心配は杞憂に終わった。夕呼の言葉通りまるで森のように立ち並んでいた紙の山は研究室から姿を消しており、デスクの上に数十枚の紙の束が置かれるのみとなっている。そのおかげかまるで研究室が広くなったかのような印象を武と純夏は感じている。

「どう？大したものですよ？うちの部下達を総動員して丸一日で此処まで片付けたのよ。やっぱり大掃除には人海戦術が一番よねえ。速さが違うわ」

二人の驚き顔に夕呼は機嫌を良くしたのかニンマリと笑顔を浮かべている。ちなみにこの部屋掃除には、最近任官した新米の男性衛士二人もまた動員された。本来戦術機を駆ってBETAをなぎ倒すこ

とが仕事のはずなのに一番最初の仕事は部隊揃って副司令の部屋の片付け&掃除であった為、相当に不満たらたらであったようではあるが…。

現状夕呼直属の特殊部隊A-01にはそこまで急ぎの任務がない。というより日本国内及び近隣のハイヴをガメラが根こそぎ破壊してしまった為に本来戦うはずのBETAが居なくなってしまう為に、主任務であるBETA掃討、捕獲の任務が現状行えない状態にある。

故に現在は戦術機による戦術訓練等を交えながら、香月夕呼のボディーガード兼小間使いのような任務を行うのが主となっている。最も戦術機を駆って戦闘する事と比較するとよく言えば安全、悪く言えば退屈な任務が続く為に新入りだけではなく一部の隊員にも不満を漏らしている人間がいるとのことだ。

そんな衛士達の奮闘の結果ゴミ屋敷の如き有り様からきれいに整理整頓された部屋へと生まれ変わったそこを、武と純夏は興味深そうに見回している。と、純夏が突然何かを見つけた様子である一点へと視線を向ける。

「あれ？ねえ武ちゃん、あんなドアあったっけ？」

「ん？…ああ確かに。前は紙に埋もれて分からなかったけど…、あんなのあったんだ」

純夏の言葉に武が何気なく視線を純夏の指差す方向へと向ける。見ると、以前は気がつかなかったが本棚のすぐ近くに何やら壁と同じ色合いのドアがある。どうやら山ほど積まれていた紙束に埋もれて隠れていたものが、その紙束が根こそぎ処分されたおかげでようやく姿を現したもののらしい。

「ん？ああそこは私の仮眠室よ。って言っても今の今まで全く使ってなかったんだけどね。なにせ中で寝たくても色々道を塞いでて中に入れなかったしねえ」

片づいたから今日からそこで寝るつもりだけど、と付け加えながら夕呼は部屋の隅に置かれたコーヒーマーカーでコーヒを淹れる。心なしかその表情はご機嫌そうだ。

夕呼の作業用デスクの前に二つのパイプ椅子が置かれている。ど

うやら二人が来る事を想定してあらかじめ用意しておいたものらしい。とはいえこの部屋の主の許可なく勝手に座るわけにもいかない為に二人は椅子の傍で棒立ちしており、コーヒーを淹れ終えた夕呼の「あら、勝手に座ってもいいのに…」という言葉を聞いて二人は夕呼に「失礼します…」と一礼すると椅子へと腰掛けた。

二人が座るのを見て夕呼も己専用の椅子へと座り、淹れたばかりで湯気を漂わせるコーヒーを一口啜る。

「…フウ、合成品でもこのカフェインの苦みは堪らないわね。…：あ、二人はどうかしら？生憎ミルクも砂糖も無いんだけれど」

「あ、いえ、お構いなく…」「わ、私も…苦いの苦手ですから…」  
「フーン、ま、いいわ。さてと、で、きのう話忘れた事なんだけど…」

夕呼はデスクの引き出しを開けるとそこから一枚の資料用紙を取り出して、二人へと差し出す。武と純夏は用紙を受け取ると、その内容へと目を通した。

その用紙のタイトルは『奈良防衛戦におけるBETAの暴走、及びそれに関する研究結果』。文字通り1998年の京都防衛戦最中の奈良での戦線、そこで起きた異変に関して記されている。

その内容はみちるから聞いたものと同じ、突如一部のBETAが他のBETAへと攻撃を開始し、最後は互いに殺し合った末に自滅した、それが起きたのは南明日香村から半径3kmの範囲内であるという事、その後BETAの遺体が回収されて綿密に検査、研究が行われたものの何の異常も見受けられなかった事等が書かれている。

資料へと食い入るように目を通す二人、夕呼はそれを眺めながらコーヒーカップを傾ける。

「…詳細はそこに書かれている通りよ。BETAが突然同士討ちを始めて派遣された部隊は無傷で帰還した。その後BETAの死骸を調べたけれども何の異常も無かったことだけよ。…まあ二人ともすでに知っているみたいだけれども、ね」

「は、はい…、伊隅大尉から教えて貰って…。流石に驚きました」

「ふーん、伊隅がねえ…。ま、いいわ。正直この事件を始めて知った時は私も驚いたものよ。何しろ今の今までBETAが同士討ちをし

たなんて事例は聞いたことも無かったんだし。最もその原因はそこに書かれている通り全く分かっていないんだけどね」

そう言って夕呼は肩を竦める。元来BETAは同士討ちを行う事は無い。既に生命活動を停止して死骸と化している個体を除けば積極的に同胞を攻撃することはBETA大戦がはじまって以来一度たりとも確認されていない。

故に奈良防衛戦で起きた異変に関しては帝国、否、世界中の研究者達の頭を悩ませていた。一体BETAに何が起きたのか、何故一部のBETAのみが暴走したのか、等々…。

「二応色々と仮説は挙げられているんだけどね、どれもこれも決めに手に欠けているうえに証拠がないから確実なもの、とは言えないのよ。…恐らくBETAが暴走したあの土地、南明日香村付近に何かがあるというのだけは分かるんだけど、ね」

意味深な言葉を呟きながらコーヒを啜る夕呼。そんな彼女の説明を聞きながら資料へと視線を落とす武と純夏。

夕呼とみちるの話、そしてこの資料に書かれている内容から、BETA同士の同士討ちというものがいかに異常な事なのかはBETAに関する知識がそこまでない武と純夏にも理解できた。だが、それでも二人にはまだ理解できない事がある。

「えつと…副司令。BETA同士の同士討ちが本来あり得ないってことは分かりましたけど…コレとカメラがどう関係が…?」

資料から顔を上げた武はおおずと夕呼に問いかける。その隣では純夏も顔を上げて夕呼を無言で見ている。

どうにも二人にはBETAの同士討ちとカメラが結びつかない。奈良にカメラ、あるいは別の巨大生物が出現してBETAを殲滅したというのならばまだ分かるが、同士討ちではたんに一部のBETAに異常が起きただけでも言い切れない。

そんな二人の考えに気がついたのか夕呼はカップをテーブルへと下ろすと再び引き出しから一枚のプリント用紙を取り出す。

「実は南明日香村の元住民が、自宅からとある絵巻物を持ちだしていてね。そこには南明日香村に伝わるとある伝承について描かれて

いたものがあるのよ。そのコピーがこれなんだけれど……」

夕呼が差し出したその資料を受け取る武と純夏。最も二人は最初、夕呼の言葉に半信半疑の表情を浮かべていた。だが、そこにプリントされている絵を見た瞬間、二人は目を大きく見開く事となった。

「……これって……」

そこにプリントされていた絵、それは一頭の二足歩行の亀と、幾本もの尾羽が生え、虹色の二対の翼を広げたまるで鳳凰の如き姿をした鳥が相對しているものであった。随分と昔に描かれたものらしく大分色あせてはいるものの、その絵に描かれている二足歩行の亀の姿には武と純夏は覚えがあった。

そう、それは紛れもなく自分達を救い、日本帝国をBETAの脅威から救い出してくれたあの怪獣……。

「ガメラ、だよな……」「う、うん……、そっくりだよ、ね……」

二人の言葉通り、その絵に描かれている亀は細部に違いこそあるものの、間違いなくガメラであった。だがもしもこれがガメラだとするなら何故こんな古い絵に、そしてガメラと相對しているこの鳥のようなものは一体……。

プリント用紙を凝視する二人の姿を夕呼は冷静な表情で眺めている。

「……予想通りの反応ね。まあ無理も無いか。私だって最初見た時には驚いたわ。でも同時に一つの確信を得る事が出来た。……あの村、南明日香村にはガメラに繋がる「何か」がある、ってね。そしてその「何か」の影響でBETAが同士討ちを始めたんじゃないか、ってね」

まるで独り言でも言うかのように話す夕呼。武と純夏は彼女の話聞きながら、絵巻物のコピーを黙って眺めている。絵巻物の端には何やら文字らしきものが書かれている。一見すると漢字、あるいはガメラの背で発見されたというあのルーン文字にも見えるであろうその文体は武と純夏の知識にはないもので、当然二人には何と書いてあるのか理解できない。

「……副司令、この文字は、なんて書いてあるんですか？」

「分からないわ。今知り合いの学者に頼んで解読して貰っていると

ころよ。そう長くはかからないと思うけど、ね…」

武の質問にそう返すと夕呼は再びコーヒーカップに口をつける。武は彼女へとさらに問いかける。

「南明日香村に、南明日香村に一体何があるんですか…!？」

「それも現状では不明よ。近々私の部下達を調査の為に向かわせるつもりだからそれで何か掴めるかもしれないけどね。…まあ今はそれどころじゃないんだけどね」

「え？」

最後に夕呼がボソリと呟いたセリフに武はキョトンとしてしまう。そんな彼の反応に夕呼は何か思い至ったかのようにポン、と手を叩いた。

「ああ知らなかったかしら？ 実は横浜基地司令部ではね、現在ある横浜基地を新しい場所に移転しようって話が出ているのよ。既にその工事も始まっているし」

「い、移転？ それはまた急な話ですけど何ですか？」

いきなり寝耳に水な話に武は眉を顰める。隣の純夏もまた夕呼の口から飛び出した「基地移転」の話に驚いているのか目を丸くしている。

確かに此処はあくまで国連軍の暫定基地、いうなれば突貫工事で建設された仮設の基地だ。いざという時の防衛戦用に設備も整えられ、対BETA防衛作戦用の基地としての体裁は整ってはいるものの、それでも仮設基地である以上いずれは本格的な基地建設をするのだからとは予想していたがまさかこんな時に移転の話聞く事になるうとは二人とも予想していなかった。

純夏の質問に夕呼は顎に指を当てて少し考えるような素振りをする。

「細かい理由は色々あるんだけど…、一番の理由は私が「料理」をする為ね」

「りよ、料理？ 副司令さんが、ですか？」

「そつ、それも人類の命運を左右するとびっきりの、ね♪」

素っ頓狂な声を上げる純夏の反応に気を良くしたのか、夕呼はニヤ

ニヤと笑っている。一方の武は夕呼の言う「料理」とやは恐らく例の「研究」とやらの話だろうと薄々感づいては居た為にそこまで驚く事は無かった。

夕呼はニヤニヤと笑いながら二人に話を続ける。

「料理って言っても結構面倒な手順があつてね、必要なのはレシピ、材料、そして調理の為の調理場、要は台所なんだけれど…。悲しい事について最近までレシピが完成しないわ材料も無いわで弱り切っていたのよね。…まあ白銀のおかげで何とかなつただけれど、ね♪」  
「…それが例の数式ですか。俺には何がなんだかさっぱりでしたけど」

そうそう、と夕呼は頷きながら残ったコーヒーを飲み干す。

「レシピも出来た、材料もある、なら後は調理の為の台所が必要でしょ？まあ此処でも出来ない事は無いんだけどもやっぱりよりいい環境でより整備されている場所の方が一番でしょ？だから基地を移転新築する事にしたのよ」

「ま、まあそれは…：…そうなのか？」

「何で疑問形なの武ちゃん…」

武の返答に軽く突っ込みを入れる純夏。実際武も夕呼の説明に関してはそこまで理解できていなかった。

夕呼の言う「料理」というのが開発している対BETA兵器であるとしても、わざわざ基地を移転しなければならない程大規模なものなのだろうか？そもそもレシピと言うのがあの数式だということと台所が新設横浜基地（仮）であるのはまあ分かるが材料と言うのは一体何なのか？どうにも夕呼の説明は一部ぼかしてあつて分からない事が多すぎる。

最も己と純夏はガメラに救出された横浜ハイヴからの数少ない生存者、と言うだけのただの一般人であり、仮にも国連軍の副司令とこうして話を出来るだけでもすごい事なのだろうが…。武は軽く溜息を吐いた。

「ち、ちなみにその移転先と言うのは？」

「それは現在機密事項なので教えられません。でもまあ私が言わなく

てもそのうち分かるわよ。いいえ、存外直ぐに感付くかもしれないわね。何せ……、貴方達にとってある意味なじみのある場所ではあるんだから」

「なじみのある、ですか……？」

「ある意味、だけどね」

夕呼は意味深な視線を武と純夏に向けながらそう呟く。夕呼の返答に武と純夏は揃って首を傾げる。

己達にとってなじみのある場所……。そんな場所は自分達の住んでいた町と通っていた学校、あるいは幼いころ遊んでいた公園位なもの。確かにあそこは既に瓦礫の山になっていて人一人住んでは居ないようではあるが何故わざわざあんなところに……。

(……いや、ちよつとまでよ……)

だが、そこまで考えた瞬間に武の脳裏にある仮説が思い浮かぶ。一つだけ、ただ一つだけある。自分達になじみがあつて、国連軍副司令の彼女が興味を示すであろう場所が……。

頭に浮かんだその予想、武は恐る恐る夕呼へとその真偽を問おうと口を開く。

「も、もしかしてそこって……」

「ハイストップ、それ以上は駄目よ。うーんちよつとヒント出し過ぎたかしらね、まあいいわ。どうせ上の連中はもう知ってる事だしね」

が、口を開こうとした瞬間に夕呼に人差し指を突きつけられて黙らされる。いつか見たときのように、その視線には有無を言わさぬ迫力が宿っており、武は反射的に口を閉じてしまう。

どうやら己の予想は正しかったらしい。国連軍が新しく横浜基地を建設する場所、それは……。武は横に座る純夏へと視線を向ける。純夏もまた何所か不安げな表情でこちらをジッと見ている。その表情からすると、彼女もまた気がついたのだろうか……。

「……さて、と、ガメラに関する話はこれでお終いとしましようか。

次は白銀、貴方の番、ね」

夕呼は感情を伺わせない頬笑みを浮かべながら、武へと視線を向け



ると、彼女にとつての「本題」を切りだした。

「じゃあ、詳しく話してもらおうかしら？ 貴方が何時例の「夢」を見るようになったのかを、そしてその「夢」の内容について、ね」

???  
SIDE

その頃、横浜、否、日本から遥かに離れたとある場所にて……。

その何処ともしれない薄暗い部屋には何人も人間が集まり、部屋の中央のモニターにてある映像を凝視している。

その映像に写されているのはハイヴ、そして地上を這い回る無数のBETA達……。

それらが何の抵抗も出来ず、たった一つの巨大な力によって焼かれ、砕かれ、引き潰されている光景であった。

雲霞の如く迫るBETAを瞬く間に殲滅していく巨大なる生命体……。

その名はガメラ。そしてこの映像はガメラがH21佐渡島ハイヴを攻略している光景である。

既に8のハイヴを殲滅し、出現から僅か一週間足らずで全世界にその存在を知らしめた大怪獣、ガメラ。人類の天敵であるBETAとその巢窟であるハイヴを葬り続けるかの存在の雄姿は同胞を、祖国をBETAによって奪われた多くの人間達にとっては希望であり、さながら救世主の如き存在としても扱われている。

…だが、その逆もまた然り。かの存在を疎ましく思う人間もまた、世には存在しているのだ。

やがてハイヴが爆発を起こし、その火炎の中からガメラが姿を現し、何処へともなく飛び去っていく……。この瞬間に、映像は途切れた。

「……以上が日本に突如出現した巨大生物、ガメラの戦闘映像になります」

「戦闘……？ むしろ一方的な虐殺、と言った方が正しいような気がするがね」

部屋の中央に置かれた円卓に座っている一人の男が、皮肉交じりに吐き捨てるようにそう呟く。だが、誰もその台詞に反論するものは居ない。事実あれは虐殺だった。もはや戦闘ですらない。例えるならば象が蟻の群れを踏みつぶしていくかのような有り様であった。

元来ならば爽快な光景であろう、憎々しいBETAがなすすべもなく潰され、蹂躪されていくのだ。連中に苦渋を味あわされてきた人間からすればなんと清々しい光景であろう。

だが、この場にはそれがない。ただひたすらに重苦しい空気だけが漂っている。そう、それはまるで映像の蹂躪劇が、己達の望んだ事ではなかった”かのように…。

「つい先日は重慶、敦煌両ハイヴが陥落した。統一中華戦線の連中もさぞお喜びしている事だろうな」

「ソ連もまた何の損害も無くブラゴエスチエンスク、クラスノヤルスク両ハイヴが自国の領土から消えてくれたとほくそ笑んでいるようです。上層部の情報は未だに入ってきてませんが、大方あの怪物をプロパガンダにでも利用する腹積もりなのでしょうな…」

「横浜の女狐は今のところ動きなし…。ガメラを放置してハイヴの掃除でもさせる腹積もりか…。あの女、地球上のハイヴさえ無くなればオルタネイティヴ計画などどうでもいいとでも考えているのか…」

円卓に座る人間達は次々と口を開き始める。その論議には地球上のハイヴが殲滅されたという喜びは何処にもない。さながら「己の獲物をガメラを横取りされた”かのような言葉が飛び出している。

それから10数分ほど論議が続き、やがて円卓に座っていた人間の中でただ一人だけ沈黙を保っていた人間が口を開いた。

「…で、どうするか、だ…。『明星作戦』の件については白紙に戻り、『あれ』の実戦試験は未だに行えていない。このままガメラがハイヴを殲滅し続ければ第四どころか我が国の計画もまた白紙となりかねん…」

「…ならば、やるべき事は一つでしょう…?」

男は双眸を閉じて再度沈黙する。が、やがて双眸を見開くとモニター前に立つ人物へと視線を投げかけた。

「次のカメラの殲滅するハイヴは？」

「H17マンダレー及びH13ポールでしょう。その次は恐らく……」

「……H2、か……。……H17とH13はそのまま殲滅させる。狙うのならば……次だ」

「……よろしいのですか？ 大統領はカメラに関しては手を出すなど……」

「これもまた国家の為、ひいては我等の為でもある。……何か問題でも？」

「いえ……」

男の静かな、だが有無を言わせぬ口調にモニター前に立っていた彼は口を閉ざす。男は視線を手元の資料、そこに写されているカメラの写真へと落とす。

「全てはこの世界の安定の為、我が祖国の為、だ」

まるで己自身に言い聞かせるように、男はそう呟いた。

## 第22話 予知夢

「ふうん…、成程。白銀の言う事を整理すると…、白銀が例の『夢』を見始めたのはガメラに救出されてから、見ている内容はガメラが見たことも無い怪獣と戦っている場面、あるいはこの世界とは全く違う平和な世界で生活している白銀と鑑の日常風景、そしてその夢の内容を夢とは思えないレベルで記憶している…：…てな処かしら？」

「そのとおりです…。俺も何でこんな夢を見るようになったのか全く見当がつかなくて…。ひよっとしたらガメラに助けられた時とか BETA にぶん殴られた時とかに頭打ってそのせいなんじゃないか、なんて…」

「武ちゃん…」

夕呼から武に対する『夢』に関する質問は2、30分ほど続いた。武は己が見るようになった『夢』に関して分かる限りの事を話した。曰く、夢は昔から見ていたものではなく、ガメラに救出されてから突然見始めた者である事、夢は主に己と純夏が見たことも無い平和な世界で学友達と平穏な生活を営んでいる夢と、ガメラが己の知らない怪獣と戦っている夢の二つであるという事、そして何故かその夢の記憶は薄れることなくはつきりと武の脳に記憶されているという事、等々…。夕呼は武の話の黙って頷きながら幼馴染の話の聞いている。か心配そうな表情で武の顔を見ながら幼馴染の話の聞いている。

話が終わると夕呼は神妙な顔つきで何やら考え込む。デスクに置かれたコーヒーカップそこに並々と淹れられている合成コーヒーの漆黒の水面にただただジツと視線を向けながら、顎に手を当てて何かを考えている。

夕呼の沈黙は三分以上続いた。その間武と純夏は彼女に話しかける事も出来ず黙って夕呼の反応を待つしかなかった。が、やがて夕呼は顔を上げて武へ視線を向け直す。

「…ねえ白銀、確か貴方がガメラに救出されたときに重傷負ってたって言ってたわね？」

「は、はい…、兵士級が純夏に襲いかかろうとしたからそれを止めよう

として、そしたら兵士級に腹をぶん殴られて…」

「あ、あの時武ちゃんすごく痛そうにしてて、口から血まで吐いていたんです…」

「…成程、最低でも肋骨へし折れていたか、内臓の一つ二つは潰れていた、か…。それにもかかわらず救出された時にはなんともなかった………白銀」

「は、はい……」

突然鋭い視線を武に向けてくる夕呼、こちらを射抜くような視線に思わず武も身を固くしてしまう。夕呼はガチガチに固まっている武に構わずに口を開いた。

「もしかしてだけれど…、貴方の身体を治療したのはガメラなんじゃあないのかしら？ 貴方の見る夢はその副作用、なのかもしれないわね」

「……はい？」

夕呼の思わぬ発言に、武は思わず「何を言ってるんだこの人は」とでも言いたげな表情を浮かべてしまう。同じく夕呼の言葉を聞いていた純夏もまた同様の表情をしていた。だがそれも無理も無い。

どう考えてもあの巨大な怪物が重傷の武を治療するなど、幾らなんでも無理がありすぎる。というより、武自身もガメラに治療された記憶など欠片も無いし、ずっと彼の傍に居た純夏もガメラが武を治療しているところなどこれっぽっちも見えていない。

一方二人に奇異なものを見るような視線を向けられている夕呼はと言うと、こちらは二人の視線に居心地が悪そうに顔を顰めている。「そんな変人を見るような目で見るのはやめなさいっての！コレだつて殆ど私の推測なんだからしようがないでしょ!?!……一応根拠がないわけじゃないのよ根拠が」

「あ、そ、そうですか…」

夕呼の怒鳴り声に武と純夏は慌てて頷く。確かに仮にも国連軍基地の副指令を任されている夕呼が何の根拠もなしにそんな突拍子もない事を言うはずがないだろう。とはいえ武が無傷だったのはガメラが治療したから、等と言われてもそう簡単に信じられるはずがな

い。夕呼自身もそれは分かっているのか苦虫をかみつぶしたような顔つきで二人に説明を始める。

「まあ根拠と言っていないかどうかは分からないけど…、知ってると思うけど兵士級の筋力はゴリラ以上の代物でね、そんなのに殴られれば戦術機や機械化歩兵ならともかく、生身の人間だったら良くて内臓破裂、悪ければ一撃で即死しかねないレベルなのよ。それ以前に幾ら軽い怪我でも僅か数時間程度で人間の怪我が治癒する事なんてほぼありえないのよ。なのにアンタの傷は治癒している…。人間の自然治癒によるものじゃないのならば可能性は一つ…。何者かによつて治療されたか、それしかないわ」

「ま、まあそりゃそうなんでしょうね…。てかゴリラ並みの腕力つて…、良く生きてたな俺…」

「そうね、本当に幸運だわ、と武の言葉に対してぼやきながら夕呼は手元のコーヒーを啜る。

「…で、鑑はまず確実に治療なんてできない、とするともはや消去法でガメラが何かしたとしか思えないのよ。何かは知らないけど」

「…なんとなく分かった様な分からないような…。じゃ、じゃあの夢は…」

「ガメラが他の怪獣と戦っている夢は…、恐らくガメラの過去の記憶か何かと推測はできるけどもう一つの方は分からないわね…。いずれにしろ情報が足りないわ」

「そうですか…」

夕呼の返答に武は少しがっかりした様子で溜息を吐く。とはいえ今のところあの夢のせいでもうにかなつたという事は無い。不眠症になるわけでも体に異常が起きるわけでもないし、最悪放っておいても問題は無いかもしれない。

最も害の有る無しと己自身の気分は別問題ではあるのだが、当の夕呼自身も良く分からないのではどうしようもない。かくいう武自身も何故あれほどの重傷が突然治癒したのか皆目見当がつかない。ガメラが突然咆えた瞬間全身に走る激痛が瞬時に消え去り、そのまま意識を失ってしまったのだから分かるはずがない。まさかただ咆えた

だけで傷がいえるはずもないだろうし…。

「…まあいいわ。とりあえず白銀、今日からでいいから見た夢に関して私に報告に来なさいな。流石に毎日やれとは言わないから週一回は夢の内容をノートか何かに纏めて私の研究室に来る事、それでいい？」

「ほ、報告？！そ、そこまでするんで…」

「ごちやごちや言わないの！見ている夢の正体知りたいんでしようが！」

「は、はあ……」

夕呼の剣幕に押されて結局武は頷いてしまう。実際此処で拒否しようものなら夕呼に何をされるか分かったものではない。流石に基地を追い出される、等と言う事は無いと信じたいが今朝まりもが食わされそうになった激辛ラーメンを己達も食う羽目になるかもしれない。そればかりはご免こうむりたい。隣の純夏に視線を向けると彼女も夕呼の迫力に気おされたのか顔を引き攣らせている。

「…ん、じゃあとりあえずこれで話は終わり。PXまでの道は、分かるわよね？」

そう言つて夕呼は研究室の出入り口を顎で指し示す。用は済んだから出ていけ、という事なのだろうか。夕呼のそっけない態度よりもようやく開放されることへの安堵で武と純夏は大きく息を吐き出しながら椅子から立ち上がると夕呼へと頭を下げる。

「そ、それじゃあ失礼します」

「きよ、今日は武ちゃんの相談につき合ってくれて、ありがとう、ごさいます？」

「ハイハイ……。ああそうそう二人とも、明日は空いているかしら？」

「へ……ま、まあ特に予定とかはありませんけど……なあ純夏？」

「う、うん……、私も特にないけど……」

戸惑い気味な武と純夏の返答に対して、夕呼は満面の笑みで頷いた。

「そお♪実はね、明日ちょっと特別なイベントがあるかもしれないからそれに二人を招待しようと思ってね♪」

「い、イベント？また訳の分からない事を…。一体何があるっていうんです？」

夕呼の口から飛び出した「イベント」の言葉に武と純夏は揃って首を傾げる。

確かに横浜、佐渡島からハイヴは消滅し、日本帝国はBETAの脅威から解放された。だが、それまでに国連軍の受けた損害は決して小さいものではない。度重なるBETA侵攻からの防衛戦、そしてハイヴから次々と出現するBETAの間引き等によって横浜暫定基地の兵力は少なくない損害を受けている。現在はBETAの脅威が遠のいたのを好機とみて横浜基地は軍事力の再編に力を注いで入るもの、何がしかのイベント、お祭りをやるような余裕はそこまでないはずである。

そんな武と純夏の思考を知ってか知らずか夕呼は相変わらず笑みを絶やささない。

「ん？何その顔？心配しなくてもこのイベントには一銭もお金はかかってないわよ。それに趣味と実益も兼ねているし……ね」

「……??」

意味有りげな笑みを浮かべてこちらを眺める夕呼に首を傾げながら、武と純夏は再度一礼して研究室から外へと出て行った。

廊下に出た二人はとりあえずPXへ向かう事にする。武と純夏は先程の研究室での一見について雑談しながら己達の記憶を頼りに廊下を歩いて行く。

「あーあ…、結局何も分かんないままだったな。あの夢についても、突然身体が治った事についても…」

「ん、でも武ちゃん今のところ何ともないんでしょ？だったらきにしなきゃいいのに…」

「そりやそうなんだけどな…、にしても夢の日記を毎日付けて提出しろって…。何でそんなことしなくちゃならないのやら…。……まあ多分何がしか意味はあるんだろうけど…」

「分からないよね…。そう言えばあの子一体何してたんだろうな」。副司令さんの寝室からこつち覗いてたけど…」





「？」

「え？あ、は、はい…」

「わ、私は鑑純夏ですけど、お、おじさんは…？」

純夏の質問に謎の男は帽子のつばを持ち上げながら口の端を吊り上げる。その笑顔は何処となく夕呼のものと似ている、何を考えているのかを全くこちらに窺わせない不敵な表情であった。

「おっとこれは失礼、他人に名乗らせておいて己が名乗らないのは流石に失礼だな。私の名前は鎧衣左近。とある貿易商社の課長をしているものでね、こちらの基地にも色々と品を卸させて貰っているのだよ」

「は、はあ…、あ、俺は白銀武です。こちらの基地で純夏と一緒にお世話になっていきます」

「鑑純夏です。えっと、よろしくお願いします、課長さん」

「ハツハツハ、普通に鎧衣、あるいはおじさんと呼んでくれて構わないよ。フム、見た目からして君達の年齢は14、5と言ったところか。いや私にも君達と同じ年頃の子供がいてね、生憎私は仕事上世界を飛び回る身の上であるからあまり会う事が出来ずにいるんだが…」

鎧衣はにこやかな笑顔で笑いながら純夏に言葉を返す。が、その視線は武と純夏をまるで観察するかのようにジッと眺めている。最も、当の二人はそれには全く気がついていないのだが。

「へえ、お子さんがいらっしやるんですか。それって息子さんですか？」

「ああ、娘のような息子。…いや、息子のような娘だったかな？ううむ…どうも最近会っていないものだから性別がゴチャゴチャに…」

「あ、あの…、性別くらいは覚えておいてあげても…」

「フム、そうしたいの山々なのだが何分私も忙しい身でね。最後に会ったのは何時ごろか…、コラコラそんな白い目で見ないでくれ。冗談だ。ちゃんと性別は娘だと記憶しているよ」

じと目でこちらを睨みつける二人を両手でなだめながらも、鎧衣は相変わらず薄い笑みのままである。本音を覆い隠しているかのようなその表情は、何処となく得体のしれない雰囲気醸し出しており、

流石の武と純夏も警戒して一步後ろへと下がる。

図らずも二人に警戒心を抱かせてしまった事に鎧衣は失敗したと言いたげな表情で帽子の縁を撫でた。鎧衣からしてもこの二人に無用な警戒心を抱かれてしまうのはあまり本意ではない。

「そんなに警戒しないでくれ。私は君達に害をなす人間じゃあない。：まあとにかく、もしも私の娘に会ったのならば二人とも仲良くしてやってくれ。親の私がこう言うのもアレなのだがね、わが娘は少々マイペース気味な性格でね、だが恐らく君達となら仲良くなれる事だろう」

幾分か雰囲気や和らげながら鎧衣は二人にそう告げるとコートを翻して二人に背を向けると、一度二人へと顔を向ける。

「では、私は香月副指令に用事がある為失礼させてもらおう。：まあそのまえに白銀君、鑑ちゃん、実は君達二人に伝言を預かっているのだった」

「で、伝言？」

武と純夏は鎧衣の言葉に首を傾げる。当たり前だが二人とも鎧衣とは初対面である。何故か向こうは自分達の名前を知っていたものの自分達は彼の事など何も知らない。そんな見ず知らずの人間が一体自分達に何を伝えようというのだろうか：、武と純夏は再度身構えてしまう。

「その、一体誰からですか？」

「さるお方、としか言えないな。こらこらそんな警戒しないでくれ。本当にただの伝言だよ。それに私はただ頼まれただけでね、君達をどうこうするつもりは毛頭ないよ」

二人の警戒を解きながら鎧衣は柔らかい笑みを浮かべて、ゆっくりと『その言葉』を口に出した。

「『そなた達が生きていた事に感謝を。どうかそなた達の行く末に、幸あらん事を』以上だ」

「……………」

「では、これで失礼」

それだけ告げると鎧衣は二人に背を向けて通路の奥へと去っていく

く。武と純夏はあつけにとられた表情のまま、通路の奥へと消えていく。謎の人物の後姿をただ見送るしかなかった。

## 夕呼SIDE

一方武と純夏が去った研究室にて、ただ一人残った夕呼はカップに残ったコーヒーを黙って啜っていた。その口元には薄い頬笑みが浮かんでおり、心なしかご機嫌そうである。

「さて、と。社、どうだったかしら？あの二人は」

と、夕呼は何の前触れもなしに寝室のドアへ向かって言葉を投げかける。するとドアがゆっくりと開き、そこからまだ幼げな容姿の少女が姿を現した。

黒いワンピースのような服装は国連軍の制服とそっくりな意匠をしている。髪の毛は若干青みがかった銀髪であり、まるでウサギの耳のような装飾がついたカチューシャを身につけている。その表情は一切の感情が無い全くの無表情であり、少女が生きている人間ではなく等身大の蠟人形か何かのように思わせている。事実彼女は人形なのだろう、そうであるように「造られた」のが彼女であるのだろうから。

社霞、それがこの少女の名前。オルタネイティヴ3の成果にしてオルタネイティヴ4成功のためのピースの一つ。この基地においては歩く機密といっても過言ではない存在である。

夕呼の質問に霞は相も変らぬ無表情のまま二人の去って行った研究室の出入り口へと一度視線を向けると、再度夕呼へと向き直る。

「……………」

「だんまり、ね。まあいいわ。それじゃあ白銀の見た夢については？」

裕子の再度の質問に霞は黙って寝室へと戻っていく。が、すぐにドアを開けて夕呼の前に姿を現した。その胸には先程は持っていなかった一冊のスケッチブックが抱えられている。霞は黙って夕呼に近寄るとそのままスケッチブックを差し出す。夕呼は霞の態度に特

に気を悪くした様子もなく黙ってスケッチブックを受け取り、それをパラパラとめくり始める。

スケッチブックに書かれていたもの、それは少年と少女、白銀武と鑑純夏の絵、そしてカメのような怪獣、ガメラの絵であった。子供らしい稚拙な絵で、お世辞にも上手とは言えないもののそれぞれの絵はモデルとなつている人間の特徴を捉えて描かれている。

絵の内容は様々であり、武と純夏が手をつないでいる姿、ベッドで寝ている武を起こそうとしている純夏の姿、学校の教室らしき場所で授業を受けている武の姿等々、殆どが武と純夏を中心に描かれているものである。だがその中の内2枚は武と純夏の姿が描かれておらず、ガメラ、そして謎の怪獣らしきものが描かれているものがあつた。

一枚目は燃え盛る街らしき場所にてガメラと蝙蝠、あるいは翼竜ともとれるシルエットの怪獣が対峙している絵、もうひとつは真っ白な雪に包まれた世界にて、ガメラと背中に無数のとげをはやしたトカゲのような怪獣が向き合っている絵である。

もしこの場に武がいたのなら、そしてこの絵を見たとしたならば、彼は驚愕のあまりあいた口が塞がらなかつただろう。なぜならこのスケッチに書かれている絵はすべて、彼が夢で見た風景そのものであつただから…。

霞はただの少女ではない。その正体はソ連主導で行われたオルタネイティヴ第三計画、通称オルタネイティヴ3にて産み出された人工ESP能力発現体、いふなれば人工的に産み出された超能力者ともいふべき存在である。

オルタネイティヴ3とはそもそも、霞を始めとする人工ESP発現体を産み出し、彼ら彼女らの能力を用いてBETAとの意思疎通、情報入手をすることを目的とした計画であり、結果として能力者の94%を犠牲にして得たものとは、BETAにも思考が存在する、そしてBETAは人類を生命体とはみなしておらず、ありとあらゆる訴え、交信は不可能であるというたった二つの事実のみであつた。

霞は第三計画にて産み出された人工ESP発現体の第六世代、ソ連における正式名称はトリースタ・シエスチナ（第6世代300番）と

いう。彼女の能力はプロジェクトン（思考投影）とリーディング（思考読解）。それぞれ己の思考をイメージとして相手の思考へと投影する能力と、相手の思考をイメージとして、感情を色として読み取る能力。元々BETAとのコミュニケーション、思考読解の為の能力であるこれは人間にも有効であり、この能力を用いて白銀武の『夢』の記憶をリーディングし、そのイメージをスケッチブックに書き写したのだ。

「……成程、これが白銀武の観た夢、ね……。怪獣の記憶はともかくとして、『コレ』は詳しく調べる必要がありそうね。ただの夢なのか、あるいは……」

スケッチブックの内容、正確に言えばそこに描かれている武と純夏の日常の絵をパラパラ捲って眺めながら夕呼は楽しげな微笑みを浮かべる。と…、

「おやおや香月副司令、ノックもなく勝手に入ってしまったが……どうやらお邪魔でしたようですねえ……」

「……!!」

突如研究室に響いた声を聞いた瞬間、夕呼の顔から笑みが消える。その視線は声の聞こえた方向、研究室唯一の出入り口であるドアの方へと向けられている。

先程まで誰もいなかったはずのドアの前、そこには渋い色合いのコートと同じ色の帽子をかぶった年齢からして4、50代程の男が口元に薄笑いを浮かべながら立っている。それはほんの数分ほど前、武と純夏が廊下の帰り道ですれ違い、二人に何者かからの伝言を伝えた鎧衣左近その人であった。

何の気配も感じさせず、国連軍であろうともこの基地の副司令か司令、あるいは夕呼直属の部下以外のIDでは侵入できないはずの研究室内に突然出現した怪しげな雰囲気の人に、夕呼は憎々しげな表情で舌打ちをする。そんないかにも嫌そうな態度の彼女に対し、鎧衣は特に気分を悪くした様子もなく笑みを崩さない。その態度が余計に夕呼の逆鱗を逆なでする。

「…誰の許しがあつて人の部屋に勝手に入ってきてるのよ、鎧衣。」

何度も言ったはずよね……？私の研究室に不法侵入するなど……」

「これはこれは私としたことが……。一刻も早く副司令の見目麗しいご尊顔を拝したいが為についつい先走ってしまいました。何分空気が読めない性格なものですので……」

慇懃無礼な調子で鎧衣は夕呼へと軽く頭を下げる。そんな見え見えな形だけの謝罪に、夕呼は苦虫を何匹も噛み潰したかのような表情を浮かべながら、黙って霞に寝室に戻るよう合図を送る。夕呼の合図を受けた霞は相変わらず表情を変えぬまま寝室へと戻っていき、ドアを閉める。

唐突に姿をかくしてしまった霞に、鎧衣は飄々とした態度を崩すことなく肩をすくめる。

「おや、お嬢さんは隠れてしまいましたね？折角ニュージーランドからの土産の品を持ってきたというのに……」

「……要件は何よ、鎧衣」

「そうそう副司令もいかがですか？ニュージーランドの先住民族マオリ族が着けていた魔よけの仮面にして、部屋に飾っているだけで災厄を退け幸運を呼ぶという……」

「要件を言え、と言ってるのよ？私は」

有無を言わさない視線で鎧衣を睨みつける夕呼。この男は常々他者をイラつかせる言動、態度を取っている。下手に逆上して向こうのペースに乗せられるわけにはいかない。そうなれば向こうの思う壺である。夕呼はまるでナイフのような鋭い視線を鎧衣に向け、逸らさない。

鎧衣左近、本人は世界を股に掛ける貿易会社の課長などとはぎいてはいるがその正体は帝国情報省外務二課課長、端的に言うならば諜報員、スパイである。

ありとあらゆる組織にコネを持ち、数多くの事件の陰で暗躍しているがゆえに、「帝国の怪人」等という渾名で恐れられる人物。その実像を知るものならば一切油断できるような人間ではない。夕呼の視線を平然とした表情で受け止める鎧衣、だったが数秒で降参と言わんばかりに両腕を上げた。

「何、大した用事ではありませんよ。例の怪獣の件について副司令とお話をしようかと参っただけです。ついでに殿下からの伝言を横浜ハイヴからの生存者二人に伝えるという命も賜っているのですが」

「白銀と鑑に？殿下が一体何を…」

「何、そこまで大それたものではありませんよ。伝言といつてもどうか健やかに生きてほしい、という殿下の御言葉をそのまま二人に伝えただけです。名前以外は見ず知らずである彼ら二人を、殿下は常々案じておりましたからね」

「そ、…で、ガメラの件っていうのは？」

夕呼の質問に対して鎧衣は、どこに隠していたのか分厚い資料の束を取り出すと夕呼へと差し出す。夕呼は全文英語で書き記されたその資料を受け取るとパラパラと捲りながらそれを読み始める。

5分後、資料すべてに目を通し終えた夕呼はそれをデスクの上に乱暴に叩きつけると再度衣へと向き直る。その表情には先程はなかった不敵な笑み、目の前の鎧衣の浮かべているものと同様の笑みが浮かんでいる。

「…：フン、ずいぶん詳細に調べたものじゃない。まあどういう手段でこれだけの代物を手に入れたのかは知りもしないし知りたくもないけれど…」

「お褒めに預かり恐悦至極。ああそれは私からのお土産ですので副司令に差し上げます」

それはどうも、と夕呼は鎧衣の言葉を半分聞き流しながらクツクツと喉を鳴らして笑い声をあげる。

「…：にしても『明星作戦』ね…。随分とまあ綿密にプランが書かれているけど…、よっぽど『あの国』は自分の作った『おもちゃ』に自信があるみたいね」

「まあ結局ガメラにハイヴを殲滅させられて全ておじやんになってしまいましたかね。この計画が白紙になったのを聞いて『あの国』のお偉方は皆揃って鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていたとか何とか」

「あら、それは是非とも見たかったわね。本当に残念だわ♪」



鎧衣が侵入してきたときと打って変わって実に機嫌のよさそうな夕呼。最も視線は依然として鎧衣を油断なく見据えてはいるが。鎧衣はその視線を受けとめながらこちらもまた悠然とした態度で笑みを崩さない。

「まあそれはともかくとして、逆に言ってしまうえばこれでかの国は件の兵器の実験を行う機会を失ってしまったということです。さらにカメラが次々とハイヴを潰している以上、このままではハイヴという実験場すらも失いかねない、もつといえればオルタネイティブ計画そのものまで破綻しかねない。と、するなら……」

「…例の兵器をカメラに使う可能性もある、か……。……調べたところによるとその兵器、『五次元効果爆弾』、通称『G弾』の威力そのものは相当な代物らしいわね？ しかも核兵器のような汚染も無いというおまけつきで」

「…表向きは、ですが。実際のところは核と大して変わらぬレベルの汚染が残る可能性が高いとのことですよ」

鎧衣の返答に夕呼はまるで嘲るかのようにフン、と鼻を鳴らす。どうやら『連中』は人類の存亡云々よりも自国の威信のほうがはるかに大事らしい……。流石にBETAの被害に一切あつていない連中は違う、と夕呼は呆れながらもいろいろな意味で感心していた。

最も仮にもBETAの被害にあつていたとしてもこの態度が変わるかどうかは知る由もないが。どうも人類は種の存亡がかかった戦いにおいても人種、思想、国境を越えて団結する等ということはできないらしい。なんとも厄介なものだと夕呼は自嘲するかのようには笑みを零した。

「…ま、いいわ。それで、他の国はどのようなのよ？」

「ソ連はブラゴエスチエンスク、クラスノヤルスク両ハイヴが陥落したことを好機とみて領土回復の為に軍備を整えているとか。統一中華戦線も同様だとか。一部の人間はカメラを『救世主』だの何だのと持て囃して軍の士気高揚に利用しているようすな。特に統一中華戦線ではカメラを同じ亀の姿をした瑞獣である『玄武』、『靈亀』等と名付けてありがたがっているとか。先日訪れた時にはこんな

ものまでありましたから」

鎧衣はそう言つて懐から何やら亀のような木製の置物を取り出す。その甲羅には「玄武」という文字が刻まれており、裏面には何やら呪文のような文字が細かく彫られていた。よく見ると亀のの口には牙らしきものが生えている。どうやら本当にガメラをモデルにしたものらしい。夕呼はしげしげと置物を眺めながらそんなことを考える。

「……んで、他の国は？」

「欧州連合は特に動きなしですな。中東連合、アフリカ連合も同様ですね。あわよくばガメラにハイヴを殲滅させて失われた故国への帰還という漁夫の利でも得る考えなのでしょうが…。」

大体はこんなところでしょうか。殆どの国は現在のところガメラ放置の方針のようですな」

「…ま、どの国も自国領土は取り戻したいだろうし、「あの国」のよくな余裕は無いってことね」

「そうなりますな。まあ「かの国」が本当に例の新型兵器をガメラ相手に実験する気かは知りませんが…」

そう呟いて鎧衣は意味深な笑みを浮かべる。彼の言葉、それはすなわち新型兵器が完成へと向かっている、あるいは既に完成している可能性があると言外に告げていた。そのことを知ってか知らずか夕呼は涼しげな表情を崩さない。

「それで、そちらの計画の進行状況はいかがでしょうか博士？」

やがて鎧衣は何気なく、まるで世間話でもするような気軽さで夕呼にそう問いかける。彼を質問を聞いた瞬間、夕呼の表情は再び苦虫をかみつぶしたかのようなそれへと変わる。

「…新兵器云々の話のあとでそれを聞きに来る？ま、いいわ。レシピは完成食材も調達できた。後は調理場ができれば直ぐにでも、つてところかしら」

「成程…。了解しました、では殿下にもそのように」

夕呼の言葉の意味をすぐさま理解したのか、鎧衣は軽く頷くと、これで用は済んだとばかりに夕呼へと背を向ける。

「では、言いたいことも言い尽したことですしこれにて私はお暇さ

せていただきますでしょうか。まだまだ仕事が残っているものですから」「あつそ。こつちも色々と立て込んで忙しいのよ。とつとと帰らないな」

「これはこれにつれない言葉。…では、お言葉に甘えて私はこれで」鎧衣は夕呼に向かって深々と礼をすると研究室のドアからそのまま出て行った。鎧衣が居なくなつて夕呼一人、厳密には隣の寝室にいる霞もいれば二人だけとなつて静寂に包まれた研究室の中、夕呼は疲れ切つた様子で深々と溜息を吐きだした。

「…つたく、あいつはいつもいっつも碌にアポも取らずに…。ま、今はそれよりも…」

夕呼は鎧衣が出て行った出入り口のドアへと視線を向ける。この横浜暫定基地でもトップクラスに嚴重なロックをかけたはずであるのだが、あの飄々とした冴えない諜報員にあつさりと破られてしまった。無論これは鎧衣が常識はずれなだけであるのだが、元々負けず嫌いである夕呼からすればそんな程度では納得できるはずもない。

「ドアのロック、もう少し嚴重にしないとダメかしらねえ…」

ぽつりと呟かれる夕呼の独り言、それを聞いていたのは隣の部屋からこちらをうかがう社霞ただ一人だけであった。

白銀武SIDE

夢を見ていた。

今までに見ていたものとは全く違う、全く別の世界の夢を。

初めて「自分」が目を覚ましたのは己の家の一室だった。だが、そこはかつて己の住み、寝起きしていた部屋とは完全に様変わりしていた。

否、様変わりしていたのは己の部屋だけではない。家の周囲は瓦礫と化し、幼馴染の住む家には巨大な人型ロボットが倒れこんで完全に倒壊している。

まるで戦争か何かがあった後のような、そんな凄惨な世界…。かつて「己」が住んでいた平和な世界とは全く異なる世紀末な世界に「自分」は茫然としていた。

そして何気なく足を運んだ。『自分』が幼馴染とともに通っていた白陵高校もまた国連軍の基地へと様変わりしていた。

訳がわからない、理解できない、一体なぜ『自分』が此処にいるのか、一体この世界で何が起こったのか…。

その後基地の副司令である香月夕呼より、この世界が己の住む世界とは違う歴史をたどっていること、人類がBETAという地球外生命体と長きにわたる戦争を繰り返しているということを知ることとなる。

その後夕呼の配慮で訓練兵へと編入させられることとなった武。そこで出会った面々は、かつての世界で共に学び、共に笑いあつた友人達…。

御剣冥夜、榊千鶴、彩峰慧、珠瀬壬姫、そしてなぜか元の世界とは性別が逆転している鎧衣美琴…。恩師である神宮司まりももまた、『自分』達の教官としてこの世界に存在していた。

だが、この世界にはただ一つ、『鑑純夏』の姿だけが存在しなかった…。

「……」

武は何の前触れもなく目を覚ますと、ゆっくりと上体を起こす。頭は寝起きのはずなのにやけに冴えている。

また変な夢を見てしまった。しかも今度は今まで見たものとは全く違う、どちらかというところの世界とほぼ同じ世界の夢を…。

数少ないこの世界との違いは、横浜基地の場所が己の今いる場所とは違うこと、純夏の姿が影も形も無いこと、そして…。

「…2001年10月22日って…、今から三年後の未来じゃねえか…。一体どうなってやがるんだ…」

武は頭を抱えながら何気なしに隣のベッドへと視線を向ける。

隣で眠る純夏は武が起きていることも知らずに安らかな寝息を立てている。武はその姿に苦笑いを浮かべるとともに、同時にホツとし

た。

消えていると思ったのだ、何故かは知らないけれどあの夢を見た瞬間、純夏がこの世界から消え去ってしまったのではないかと…。

「…まさかと思うけど、あの夢って俗にいう未来予知ってやつじゃ？ いやいやいやいやんなわけねえだろ…」

とつさに浮かんだ己の観た夢が予知夢であるという予感、だが直ぐに武は笑って否定する。予知夢なんてそんなエスパーじゃあるまいし、と…。

ある意味それが的を射ているとも知らず、そして今自分が『真実』へ向けて歩き始めているとも知らずに…。

## 第23話 上映会

南シナ海深海、未だにBETAに侵されることなき深き暗黒の聖域で、守護神は眠りについていた。

一日で二つのハイヴを殲滅するという『作業』、さらにハイヴを守護する数十万のBETAの『掃除』は流石にカメラにとっても負担となる。いかに相手が雑魚だといってもそれが一度に何万も、さらにその軍勢が休む間もなく襲い来るのである。強靱な生命力をもつカメラであつてもさすがに疲労する。

無論油断は無い、手加減も無い。だが、それでも疲労困憊した状態であの雲霞のごとき大軍と戦おうものならほんの僅かな隙を突かれて思わぬ不覚を取りかねない。負けは無いにしても相応に苦戦して負わなくてもいい傷を負うことになるだろう。

故にカメラはハイヴの破壊は二回に留め、終われば海底にて丸一日眠り、疲労を癒す。疲労が癒え、眠りから覚醒するとハイヴへと襲撃を仕掛ける…、この繰り返しだ。

今回は重慶、敦煌両ハイヴを殲滅し、その疲労の回復の為にカメラは海底深くへと没していた。

丸一日の休眠、既に体の疲労は癒えている。ならばそろそろ目覚めの時…。

次の標的はビルマ領内に存在する今眠る場所から最も近いハイヴ、H17マンダレーハイヴと、インド領内に存在する、ヒマラヤから南進してきたBETAによつてはじめて建設されたハイヴ、H13ボパールハイヴ。この二つを殲滅すれば残るハイヴはあと半分、ユーラシア東部はほぼ人類の手に戻ることとなるだろう。

ボパールの規模はおよそフェイズ4、フェイズ5の一手手前だ。その内に棲むBETAの物量もまた他のハイヴを凌ぐに違いない。ならばその物量をも上回る“力”を持って蹂躪するのみ。

漆黒の帳に覆われた深淵の世界、そこに眠りし巨神の眼がゆっくりと開かれる…。

武、純夏SIDE

「ハッ、ハッ、ハッ、……、そ、そういえば、さ、た、たけるちゃ」  
「ハッ、ハッ……、な、なん、すみ、か、話なら、ジョギング終わって  
からに……ハッ、ハッ、ハッ」

「そ、そ、だね……ゼエ……ゼエ……や、やっぱり十周はきつい、よ  
お……」

早朝の横浜暫定基地グラウンド、そこで武と純夏はもはや日々の習慣と化している朝の自主トレを行っていた。鉄棒を使って懸垂、グラウンドを十周ジョギング等々、時折ここを訪れる教官や同じく朝練をしにやってくる衛士達のアドバイスを受けながら二人は毎朝体を鍛えている。武は幼馴染である純夏を今度こそ守れるように、純夏はもう武の足手纏いなどにならないというそれぞれの願いの為に。

そして現在二人はトレーニングの一環であるジョギングの真つ最中である。それなりに広い国連軍基地のグラウンドは十周するだけでもそれなりの運動にはなる。とはいえこの程度の運動ならば武と純夏は慣れている。何しろ二人ともかつて通った学校でそれなりに軍事教練および教育は受けていたのであるから。

1980年、日本帝国はユーラシア大陸における対BETA戦線での戦況、人員損耗をかんがみた結果徴兵制度を復活、その1年程前には教育法を改正し、衛士養成のための環境作りが開始されている。その後、度重なる徴兵年齢の引き下げ、本格的な衛士育成のための法改正が行われ、最終的に16歳以上の女子までもが徴兵対象に選定されることとなった。

その結果小学、中学では義務教育は必要最低限にまで切り捨てられ、優秀な衛士の育成のための教育、教練が主体となり、武と純夏も例外なくそれを受けていた。

故に二人とも毎朝の朝練が苦にならない程度の身体能力は持ち合わせているのだ。最も衛士訓練学校で専門の教練を受けている訓練兵に比べたら大幅に劣るであろうし、ましてや戦術機を乗り回すレベルには到底及ばないが。

そしてそんな日課としてやっているジョギングの最中、純夏が突然

武へ声を掛けてきた。が、流石にジョギング中にお喋りできるほど武の肺は丈夫ではないため、結局適当に返事をして会話を打ち切り、ジョギングを続行する。かく言う純夏も走りながら喋っていたせいか苦しそうな顔で喉から笛のような音を鳴らしており、話ができるような状態ではない。

それからグラウンドを三周周り、ようやくジョギングを終えた二人は肩で息をしながらグラウンドの端に座って休憩をしていた。

「ハア…ハア…：よし、今日のノルマ達成、つと…。…んで純夏、さつき走つてるとき一体何言おうとしたんだよ？」

「…ふえ？あ、あれね。…ねえ武ちゃん」

武の問いかけに純夏は息を弾ませながらゆっくりと口を開く。

「…ねえ、副司令さんが言つてたことなんだけど…。武ちゃんは個室と相部屋、どっちがいいの？」

「…ああ!?お、おまつ、いきなり何言つてやがるんだお前はああああ!!!」

「だってこういうこと早く決めたほうがいいじゃない。ちなみに私はどっちでも良いよ。武ちゃんの好きなように決めて？」

「俺に決めろつて、言われても、なあ…」

純夏の唐突な発言に武は赤らんだ顔を背けて頬を掻く。ジョギング中に一体何を聞きたいのかと気になつてはいたがまさか昨日副司令が言っていた部屋割についてだとは正直思わなかった。まあ確かにそれも重要といえば重要なのだが…。

武は考える、自分と純夏は今の今まで同じ病室で過ごしてきた、事実上の相部屋生活であったのだから今更相部屋でも文句は言わないだろう、だが相部屋になるということはお互いの着替えも何もかも同じ部屋でやることになる。ただでさえ病室生活では度々純夏の着替えをうっかり覗いてしまつたり、逆に自分の着替えを純夏に覗かれたり、その挙句に純夏の鉄拳を食らう羽目になつたりで存外生傷が絶えなかつたような…。

「……………個室にしよう」

「え？」



「個室にしよう、やっぱり着替えとかそういうのは別々のほうがいいしな。うん。俺ももう純夏の鉄拳は食らいたくないし、うん」

「ちよつと武ちゃん!!私の鉄拳ってどういうことよ!!それじゃ私が拳骨振り回す暴力女みたいじゃない!!」

「…違うのか?」

「違うよおおおお!!!んもー!武ちゃんの馬鹿—!!」

怒りの絶叫をグラウンドへと轟かせた純夏は顔を真っ赤にしてゼエゼエとまるで喘息にでもなったかのように息を荒くしながら肩を上下に動かしている。ただでさえランニングの後で息を整えている最中だったというのに大声を張り上げたせいで喉にいらぬ負荷がかかってしまったようである。一方すぐ隣で純夏の怒鳴り声を聞いていた武はうるさそうに顔を歪めながら耳を塞いでいた。

「……と、とにかく、部屋は個室ってことでいいな、純夏?」

「ゲホツゲホツ……、もういいよ、フンツ」

結局純夏は不機嫌そうに頬を膨らませて顔を背けてしまう。少々からかいすぎたか?と武は弱った表情で機嫌を損ねた幼馴染の横顔を眺めている。一方純夏は時折武へ向かってちらりと視線を投げかけるが直ぐに思い出したかのように視線をあらぬ方向へと逸らす。

その後二人の間にはなんとも言えない気まずい空気が流れ、ただただ無言の時間のみが過ぎ去っていく。と、突然二人の背後から何者かがこちらへと近付いてくる足音が聞こえてくる。訓練兵が朝練でもやりに来たのだろうか、と思った武は何気なく背後を振り向く。

「ああ、そこにいたのね二人共。日々の日課で朝練、ね。うんうん感心感心」

「あ、神宮司軍曹!おはようございます!」

「え?あーおはようございます軍曹さん!えっと、軍曹さんも朝練ですか?」

そこにいたのは二人の顔なじみである国連軍所属の教導官、神宮司よりも軍曹であった。

武と純夏はズボンについた土を払いながら地面から立ち上がるとまリモへと挨拶する。そんな二人の汗まみれながら元気そうな表情

にまりもは表情を綻ばせる。

「フフ、おはよう二人共。今日は朝練じゃなくて二人に用事があつてきたんだけど」

「え？」

「な、なんで俺達……、ああ香月副司令に頼まれて俺達を呼びに来たとか？」

まりもが自分達を来た理由を思い至った武の質問に、まりもは先程の笑顔から一転して苦虫をそれこそ百匹は噛み潰したかのような渋い表情になる。

「そうなのよ……、ゆう、香月副司令からの命令でね、貴方達をモニタールームまで至急連れて来いって。全く……、私もこれから教練やらの準備があるっていうのに……」

私は便利屋か何かか等とブツブツ文句を呟くまりもの姿に武と純夏は苦笑いを浮かべた。

どうもまりもは昔からの腐れ縁であるらしい夕呼にとって体の言い玩具にされているようだ。自分達を呼びに行かせるだけではなくまりもにとって大の苦手である激辛料理を出したりしてその反応を楽しんだりしている。一方のまりも昔から同じような目に遭っていたらしく、どうやらある程度は彼女に弄られることに慣れていようである。最も流石に限度はあるだろうが。

「……まあそういうわけだから、二人とも来てくれるかしら？ああ勿論シャワーを浴びて着替えてからでいいから」

「は、はあ……、じゃあ直ぐに。行くぞ純夏」

「う、うん……。私達まだ朝ご飯食べてないんだけどな……」

武に呼ばれて彼の後を追いかける純夏。そんな二人の後姿を見ながら、まりもは一人ため息をついた。

「全く……、夕呼はあの子たちに一体何をしようっていうのやら……」  
しよっちゆう自分を弄繰り回す腐れ縁の親友の不気味な笑顔を思い浮かべながらまりもは二人の後を追ってとぼとぼと歩き始めた。

その後武と純夏は現在自分達が寝起きしている病室へ戻り、シャ

ワーで汗を流して着替えると病室の外で待つていたまりもと一緒にモニタールームへと向かった。

「それにしても、香月副司令は俺達に何の用が…」

「それが私にも分からないのよ。モニタールームは国連軍士官でも矢鱈滅多らに入れるような場所じゃないし…、時々夕呼が何を考えているんだかわからなくなるわ…」

武と純夏、そしてまりもは談笑を交わしながらモニタールームへの道を歩いていった。まりも曰くそもそもモニタールームは本来は横浜暫定基地最寄りのハイヴである横浜ハイヴを監視するためのものがあったが、横浜、佐渡島両ハイヴがカメラによって殲滅されて以降は地球上のどこかに存在するであろうカメラの行動を監視するという役目変わったのだそうだ。

本来ならば基地内で保護されているだけの一般人どころか下級士官程度ではそう簡単に入れるような場所ではないが、今回は当基地のナンバー2である副司令、香月夕呼からの特別な許可が下りているために武と純夏の入室が認められているとのことだ。

「何で私達にそこまでしてくれるんでしょうか…」

「そこは私にも…、ただ副司令が貴方達のことを気に入っていることは確かだね。どこをどう気に入っているのかは知らないけど…」

まりもにも何故夕呼がこの二人に目をかけているのかはよく分からない。精々ハイヴからの数少ない生存者だから、程度の事しか分からない。とはいえあの悪友の事だからただ単にも珍しいからという理由だけというわけではない気がするが…。

一方武は夕呼が自分達に目をかける理由について、薄々と感付いてはいる。恐らくは自分が見たあの「夢」と「夢」で観たあの数式の為だろう。

どういうわけかは知らないがあの数式のおかげで夕呼の研究は大幅に進んでいるようであり、さらに彼女は武が観ている「夢」に関しても関心を抱いている。自分達に色々と便宜を図ってくれているのは恐らく「夢」について調査したいというのもあるのだろう。

「……つと、着いた着いた。その自動ドアを抜ければモニター

ルームよ」

と、唐突にまりもが足を止めて二人へと振り返る。彼女の背後には両開きの自動ドアが設置されている。この先にあるのが目的地のモニタールームであるとまりもは語った。

「残念だけれど私はここまでよ。出入りする許可は貰ってないしこれから訓練兵達の教導もあるし…、これで失礼させてもらうわね」

「あ、はい。案内してくれてありがとうございます、神宮司軍曹」

「また軍曹さんのお世話になっちゃって……、いつかお礼させてください！」

「フフ、どういたしまして二人共。それじゃ、私はもう行くからね」  
元気にお礼を言う二人にまりもはどこか嬉しそうな笑顔を見せながら元来た道へと戻って行った。遠ざかっていくまりもの背中を見送った武と純夏は、再び正面の自動ドアへと向き直る。夕呼が一体何のようなかは知らないがとりあえず中に入るしかないようである。二人は自動ドアへゆっくりと近寄った。

武と純夏が一歩足を踏み出した時、自動ドアは壁内部へと収納されてモニタールーム内部への入り口が開かれた。

モニタールームは学校の教室よりやや広い程度の広さであり、その名の通り正面には巨大なモニターターが幾つも設置されている。モニターターにはどことも知れない大海原の光景と、これまたどことも知れない荒野、そしてそこに建つ巨大な金属のような輝きを放つ何らかの建造物らしきものを映している。室内には何人ものスタッフがコンピュータを前にして何らかの作業を行っており、モニタールームのひとときわ高い場所では国連軍の軍服を着た壮年の軍人らしき人物と国連軍の制服の上に白衣を纏った女性、香月夕呼が並んで立っている。

夕呼は入り口の自動ドアが開かれた音で気がついたのか、武と純夏の方へと振り向くとにつこりと笑顔を浮かべる。

「いらっしやい二人共、そんなところでボーっと立ってないでこの特等席にいらっしやいな。朝食についてはこちらで用意するから心配しなくて大丈夫よ？」

輝くような笑顔を浮かべて二人に向かって手招きする夕呼、一方招かれていた武と純夏は一瞬躊躇するものの、いつまでもこんな場所にボーっと立っているわけにもいかないため、二人揃って夕呼と壮年の軍人が並んで立っている場所へと歩いていく。そして、こちらに歩いてくる二人の姿を夕呼はにこやかな笑顔で、軍人はどことなく重苦しい、沈痛な表情で迎える。

「ようこそそわが基地のモニタールームへ。もう既に聞いていたとは思うけど、ここは元々は横浜、佐渡島両ハイヴの監視の為に設けられた場所で、現在はガメラの監視を主任務としている施設よ。…と、そういう二人は司令とは初対面だっけ？」

背後の軍人らしき人物を示しながらの夕呼の問いかけに武と純夏はコクリと頷く。二人の反応を見た司令と呼ばれた軍人はチラリと夕呼へ視線を向けて軽くうなずくと武と澄香へと視線を戻す。

「初めまして、と言うべきか。自己紹介が大分遅れてしまったが私はこの基地の司令を務めさせてもらっているバウル・ラダビノツド、階級は准将だ。君達の名前は白銀武君と鑑純夏君、でよかつたかな？」

「は、はい。俺、じゃなかった、わ、私の名前は白銀武、年齢は15歳です！」

「私は、鑑純夏っていいですよ！年齢は武ちゃんと同じ15歳ですよ！」  
壮年の軍人、基地司令バウル・ラダビノツド准将の挨拶に続けて武と純夏も慌ててラダビノツド司令に挨拶をする。とはいえ目の前にいる人物が横浜暫定基地の最高責任者であるということに武も純夏も緊張を隠せずにおり、挨拶も少しばかり堅いものとなってしまう。ラダビノツド司令は二人の挨拶を聞くと重々しく頷く。

「うむ、君達の事情は香月博士から報告を受けている。…我々の力不足で君達の故郷がBETAに蹂躪され、あまつさえハイヴ建設までも阻止できなかった。いくら詫びても足りないとは分かっているが…すまなかつた」

ラダビノツド司令は表情を変え、ことなく武と純夏に向かって深々と頭を下げる。唐突に謝罪してきたラダビノツド司令に、武と純

夏は思わず仰天してしまう。まさか基地司令が自分達に頭を下げてくるとは二人共予想できておらず、二人とも声も出せずに唾然としている。一方夕呼は特に驚いた様子もなく、それでも両目を見開いているところを見るといきなり頭を下げるとは予想していなかったようではあるが、ラダビノツド司令と武と純夏に黙って視線を送っている。

「…せめてもの詫び、というわけでもないが、君達は横浜ハイヴからの数少ない生存者であり、当基地の客人ともいえる。行く当てが見つかるまで当基地に滞在してくれて構わない。…香月博士からの申し出もあつたしな」

「あ、はあ……、あ、ありがとうございます…」

「何だか……、もうここにきて一週間以上経っているから今更な気がするような、しないような……」

ラダビノツド司令は二人の言葉、特に武が最後にぼそりと呟いた小声が聞こえているのかいないのか、硬い表情のまま軽く頷くと二人から視線を外してモニターへと視線を向ける。

「それはそうと香月副司令、今日は俺達を此処に呼んで何かあるんですか？此処って確か一般人は立ち入り禁止のはずじゃあ…」

何やら話しかけづらい雰囲気の間から、夕呼へと話の矛先を切り替える武。そもそも何で彼女が自分達を此処に呼んだのかが分からない。昨日確かに夕呼がイベント云々言っていたものの詳しい説明を受けておらず、さらに此処まで案内してくれたまりも知らない様子であつたし、此処は夕呼本人に聞く以外にはない。

一方質問された夕呼はそんな武の質問を待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべる。

「あら、昨日言っただけでなかった？今日はイベントがあるって。このモニタールームがイベント会場になるからわざわざ二人を招待したんだけど」

「ふえ？イベントって……何だか全然そういう雰囲気じゃあないんですけれど…」

純夏の言うとおおり、モニタールームはなんの飾りつけもされておら

ず、職員も皆真剣な表情で作業をしておりとてもではないがこれから何らかのイベントが行われるようには見えない。が、夕呼に問いを投げかけても意味ありげな笑みを浮かべるだけで返答を期待できそうにない。そこで純夏は今度はこちらに背を向けてモニターを眺めるラダビノッド司令へと視線を移す。ラダビノッド司令はチラリと武と純夏に視線を向けると何やら複雑な表情でううむ…、と唸る。

「むう…、イベントか…。まああながち正解でも、間違いでもないといったところか…。確かに楽しみなイベントだろう、…香月博士からみれば、だが…」

「あら？でも今日のイベントは司令も楽しみにされておられるのでは？」

「…ノーコメントだ」

にこやかな表情で質問を投げかける夕呼に対して、ラダビノッド司令は重々しく溜息を吐きだす。武と純夏は何が何だか分からず互いに顔を見合わせる。が、次の瞬間けたたましく鳴り響くサイレンが二人の意識を無理やり引き戻した。

「…：センサーに反応あり!!海底より巨大な生物らしき反応が海面めがけて上昇中!!恐らくはガメラと思われるます!!」

「…きたか」

「ええ。さ、二人共こつちにおいでなさいな♪イベントが始まるわよ?」

「え、ええ!?イベントって何だか緊急事態っぽいんですけど…：…というかがメラ!?」

唐突に鳴り響くサイレンとスタッフの怒号、そして夕呼の嬉々とした声に武も純夏も動揺してしまう。いかにも緊急事態といった雰囲気、そしてスタッフの口から出たガメラの名前…、一体これのどこがイベントだということのかという疑問を抱きながら武は純夏と共に夕呼のそばへ走り寄る。

「ちよ、ちよちよちよつと副司令さん!?な、何だか凄く大変な事が起きてるみたいですけど!?!」

「そうっすよ!!」一体これのどこがイベント何すか!!ま、まさかBE

TA襲撃からの避難訓練とか防災訓練なんて落ちじやあ……」

「ハイハイ二人とも落ち着きなさいな。そんな何の面白みも無いものやらないわよ。今から面白いものが始まるんだから、黙ってみてなさいな」

「お、面白いものお？い、一体何言つて……」

困惑した様子の子の武の言葉は、目の前のモニターの映像を見た瞬間に途中で途切れることとなった。

モニターに映されているのは一面の大海原、陸地などはるか地平のかなたであろう青一色の世界。日の光を反射してキラキラと輝く水面には静かに波がたつだけであった。

だが、次の瞬間その平穏な光景は一変した。突然海面が大きく盛り上がり、まるで地面から間欠泉が吹き出るかのように爆発し、それと同時に海中から巨大な何か空へと舞い上がったのだ。突如として海中から飛び出した何か、その正体を見た瞬間武と純夏は驚愕のあまり目を剥いてしまう

それは、楕円形をした巨大な亀の甲羅らしき物体であり、本来両手両足があるであろう甲羅側面に空いた空洞からは青白い炎がジェット噴射のように噴出し、その巨体を中へと浮遊させている。武と純夏は、その甲羅に見覚えがあった、否、その正体を知っていた。

なぜならあれは、あの地獄で自分達の命を救い、街を救い、帝国を救ってくれた自分達にとっては救世主とも呼べる存在なのだから……!!

「……カメラ!!お、おい純夏!!」

「うん!武ちゃん間違いないよ!!本物のカメラさんだよ!!」

画面越しとはいえ横浜の廃墟で別れて以来二度目の再開となる最後の希望”と呼ばれた怪獣の姿に、武と純夏は興奮を隠せないようであった。そんな二人の姿を夕呼は楽しげに、ラダビノツド司令はどことなく穏やかな表情で眺めている。

「フフツ、二人共喜んでくれたみたいねえ。でもまだまだこれからよ、この上映会は♪」

二人の反応を面白がる夕呼、まるでこれから何が起きるのかを知つ



ているかのような口調でクツクツとほくそ笑んでいる

そうこうしているうちに海中から飛び出してしばらく空を漂っていたガメラの甲羅は段々と高速で回転を始め、ついには扇風機もかくやという速度で回転しながら空の彼方へと飛び去って行った。

「…あ、ガメラさんが…」

「問題ないわ。行き先も見当ついているし追尾もできるし…」

純夏の残念そうな声を遮るように夕呼は自信満々の笑みを浮かべながら指を弾く。すると、モニターの画面が切り替わり、どことも知れない空の彼方、一面雲に覆われた真っ白な雲海へと場面が転換される。そして、そこには雲海を切り裂き、青白い光を放ちながら回転して飛行する空飛ぶ円盤、ガメラの姿があった。画像が切り替わるのを視認した夕呼は武と純夏へと顔を向ける。

「ね？大丈夫だったでしょ？」

「は、はい。…も、もしかして今日のイベントっていうのは、ガメラを見せてくれることだったんですか!？」

「ん〜、少し惜しいわね。ただガメラの姿を見せるためだけじゃあないのよねえ。私が此処に貴方達を呼んだのは…」

夕呼は再度画面に視線を戻すと、飛行するガメラの姿を眺めながらニヤリと唇を釣り上げた。

「ガメラにハイヴが殲滅されるところを見せてあげようって思ったわけよ♪フフ、病みつきになるわよこれは♪」

そう、素敵な笑顔で笑う夕呼に、ラダビノツド司令はどこか疲れた表情で溜息を吐きだした。

## ガメラ SIDE

ビルマ領マンダレー管区マンダレー。かつてはヤンゴンに次ぐビルマ第二の都市であった場所。かつてビルマで栄えた王国の首都であり、壮麗な王宮、僧院が立ち並ぶ美しい街並み出会ったその都市は、いまやその面影すらも残さないほどに破壊された瓦礫の廃墟と化してしまっている。

夥しいまでの瓦礫の大地、その中央に建造された無機質かつ歪なる王宮、BETAの牙城たるH17、マンダレーハイヴ。

既にフェイズ2・5にまで成長したそこは、20万以上のBETAを内包する難攻不落の城郭として聳え立っている。その周囲にはまるで大地を覆い尽さんばかりの数のBETAが周囲を這い回っている。大型、小型、そして航空兵力最大の敵である光線属種までもがそこに混じっている。

それでもハイヴが内包するBETA全体からみれば数パーセント程度、この圧倒的な物量、圧倒的数による肉弾、肉壁こそが人類のハイヴ攻略を妨げる最大の要因と言ってもいい。

第二、第三世代の戦術機をもってしても容易に埋めることはかなわない物量という戦力差、レーザーによる対空砲火もまた脅威ではあろうが真なる脅威はまさしく“数”、人類最大最凶の兵器たる核をもつてしてもなお削り切れぬその圧倒的物量なのだ。

……そう、人類にとっては脅威であった。人類にとっては……。

突然光線級、重光線級が空へとその眼球に酷似したレーザー照射膜を持ち上げる。それは空の彼方に己が排除すべき“災害”を発見したということ。瞬時に標的へレーザーを照射するためにチャージが開始される。……しかし、遅すぎた。

レーザーが照射される寸前、何の前触れもなく空から6発の火球が大地を這い回るBETAめがけて降り注ぐ。無数に密集していたことが仇となり、火球は目標を過たずにBETAの軍勢のただ中に直撃、大隊、連隊規模のBETAを岩盤もろとも消し飛ばしていく。その中には無論、今まさに光線を放とうとしていた光線属種の姿があった。

火球の雨を逃れ、レーザーを空めがけて放つ光線属種も無論いた。光線属種のレーザーは、いかなる場合でも獲物を逃すことは無い。おおよそ大気圏内であるのなら何メートルもの上空にしようとも一撃のもとにいかなる飛翔物をも撃ち落とせるだろう。

だが、火球は止まらない。むしろレーザーの反撃に呼応するかのようにより大量の火球が大地を這うBETAに、そして鈍い輝きを放つ



数でこちらを潰すのならば、その数すらも容易く押しつぶす圧倒的な“力”でもって殲滅するのみー!!ガメラは高らかな轟咆と共に灼熱の火炎、プラズマ火球をBETAの軍勢めがけて叩きつける。これが、マンダレーにおけるガメラ対BETAの戦い、否、もはや戦いとは呼べぬ殲滅戦の始まりとなった…。

#### 横浜基地SIDE

「ガメラ、BETA第二陣へ攻撃開始。火球で前列の突撃級、要撃級を殲滅中、光線属種もレーザーでガメラに応戦していますがガメラには効果なし」

「よし、そのまま監視を続行しろ」

「了解しました」

その頃横浜暫定基地モニタールームでは、マンダレーハイヴにおいてBETAと交戦するガメラをモニター越しに監視していた。最も監視と言っても現場には国連軍どころか人一人存在しないためガラが何をしようとこちらはなにも干渉できない。故にただモニターで映されるガメラとBETAの交戦風景を眺めるしかない。

戦いは相も変わらず一方的であった。湧き出るBETAは次々と潰され、焼かれ、砕かれ、引き裂かれ、物言わぬ肉塊、あるいは肉片へと変わっていく。いかなるものをも焼き切り、貫くレーザーすらもガメラの強固な甲羅、皮膚を貫くどころかやけど一つ負わせることすらもかなわない。ガメラはただその巨体と怪力、そして主砲である火球をもって群がる敵を殲滅するのみ…。結果として万を超えるBETAの軍勢は瞬く間に炎に飲まれ、血と肉片

へと変わっていく…。その一部始終を武と純夏はただ眺めるだけであった。

灼熱の炎が立ち上る焦土で血を這う虫どもに暴虐の力を振るう巨獣…、さながら地獄で亡者を責めさいなむ悪鬼羅刹の如き姿に二人はただただ圧倒され、声も出せずにいる。一方夕呼は歓喜と恍惚に満ちた表情を浮かべ、ラダビノツド司令は硬い表情のままモニター内での

戦闘を見守っている。

第二陣のBETAは瞬時に全滅したものの、それからほとんど間をおかずに第三陣、第四陣の軍勢が姿を現す、が、それもまた瞬く間にガメラの圧倒的な力の前に殲滅させられるのみであった。

戦闘開始から一時間後、焦土の大地が広がるなか、ガメラはただ一人立ちつくしている。もう生き残っているBETAは存在しない。既にハイヴ内のBETAは一匹残らず殲滅されて枯渇しており、反応炉を守るものは何一つ存在しない。

ガメラは両足からジェットを吹き出し、空高く舞い上がると、モニメントめがけてプラズマ火球を発射する。半壊状態であったモニメントはその一撃で粉微塵に砕け散り、そこにぽっかりと空いた空洞へとガメラは身を投じる。

ガメラがハイヴ内へと姿を消して、茫然としていた武はハッと我に返るとすぐ横の夕呼へと視線を向ける。

「あ、あの、香月副司令……」

「黙ってなさいな白銀。これからクライマックスなんだから」

「え……!!?!」

武の質問を夕呼が遮った瞬間、それは起こった。

突如としてハイヴの縦坑から爆発とともに爆炎が噴き上がったのだ。それはさながら噴火する火山の如き光景であった。そして、その噴き上がる爆炎から飛び出す巨影が一つ。ガメラは爆炎噴き上がる縦坑から飛び出し、そのまま空の彼方へと去っていく。灼熱の炎と屍山血河の流れる大地をしり目にして…。

「……マンダレーハイヴ、反応炉破壊による陥落を確認。ガメラは北西に針路を取って飛行中」

「監視を続行、画面を切り替えろ」

「了解しました」

ラダビノッド司令の指示を受けたオペレーターはすぐさま画面を切り替える。

モニターからは先程の屍山血河の光景が消え再び白い雲に覆われた雲海の光景が映し出される。無論雲海を丸で泳ぐように飛行する

カメラの姿も…。

一方武と純夏はハイヴの爆発の場面に唾然として放心状態であったが、どうにか我に返った純夏は引きつった表情のまま夕呼へと視線を向ける。

「あの……副司令さん……」

「ん？どうしたの鑑？」

夕呼は相変わらずニコニコと笑顔を浮かべている。純夏はいかにもご機嫌な様子の夕呼に少々ドン引きしながらも、恐る恐る問いかける。

「も、もしかして副司令さんが見せたかったイベントって……、コレ、ですか？」

「そ、カメラがハイヴを殲滅するところを貴方達にも見せてあげようと思つてね♪どう？すつきりするでしょ？私なんか思わず昇天しちゃうところだったわ♪」

「はあ、まあ、すつきりするといえ、するようないような……」

ハイテンションな夕呼に少々引き気味な純夏、純夏に遅れて我に返った武もまたじと目で夕呼を眺めている。確かに己の故郷を、家族を奪ったBETAが何もできずに逆に殲滅されている光景は見ているだけで気分がいい。心の中のもやもやとした気分も晴れてすつきりするの二人も同じである。：が、流星に夕呼のようにハイテンションにはなれない。

チラリとラダビノツド司令に視線を送ると、彼もまた顔を引き攣らせながらどうにか笑顔を浮かべている。ひどく不自然ではあるが…。

「ほらほらこんな程度で唾然としないの。さっきのはオードブル、メインディッシュはこれからよ？」

夕呼はそう言つてモニターの一つを指し示す。見るとそこには巨大な世界地図が映されており、よくよく見ると地図のあちこちに赤い点が記されている。点にはH1、H2と言つた番号が振られており、全部で14存在していたがその内の一つ東南アジアに記されていたH17と記された点が消え去る。それを眺めながら夕呼はクスクスと笑い声を上げている。

「これは全世界に存在するハイヴのマップよ。この赤い点は全てハイヴを表したもので、先程消えた赤い点はH17マンダレーハイヴ、先程ガメラが攻略したハイヴよ」

「次にガメラが攻撃すると予想されるハイヴはH13ボパールハイヴ。インド領ボパールに建設されたハイヴで現在の規模はフェイズ4・5。先程のマンダレーとは規模も桁も違う」

「ふえ、フェイズ…?」

夕呼とラダビノツド司令が二人に代わる代わる説明をするが、その説明の中で知識のない単語が出たため武は首を傾げる。それを見た夕呼は思い至った様子でポンと手を叩く。

「ああそういえば知らなかったっけ?フェイズっていうのはハイヴの規模を示すものでハイヴの規模によってフェイズ1から6までの数字が割り振られているの。まあひよつとしたら6以上の規模もあるかもしれないけどね。ボパールはフェイズ4以上。そうねえ、横浜、佐渡島の2、3倍以上の規模と言ったところかしら…」

「…って事はそれだけ大量にBETAが居るってことですか!」

「まあそうなるわね。でも、案外大丈夫じゃないかしら?既にガメラはボパールに近いフェイズのハイヴを2つ3つ潰してるし」

「……そう簡単にいけばいいが、な…」

夕呼の楽観的な発現に、ラダビノツド司令は硬い表情を崩さない。その脳裏に浮かぶのはかつての己の記憶。己がまだ国連軍所属ではなく、インド戦線にて故国の同胞達とBETAと戦い抜き、敗れ去った苦渋の記憶…。

あの時の悪夢は未だに脳裏にこびりついて離れない。眠っている時も時折夢で見る。

故国を奪い、家族を奪い、仲間達を、戦友達を奪ったBETA…、その居城たるボパールハイヴ…、それをかの怪獣は打ち砕いてくれるのか…。己の、否、自分達の悪夢の象徴を粉微塵に砕いてくれるのだろうか…。

そんな淡い希望と不安を抱きながら、ラダビノツド司令はモニターを注視しつづける。そして……。

「ガメラ、ボパールハイヴ上空に到達!!光線属種の射程圏内です!!」  
「さあ…、始まるわよ?」

ガメラとBETAの第二戦、H13ボパールハイヴでの戦いが始  
まった…。



## 第24話 祖国復興

H13ボパールハイヴ上空、BETAの本拠地のほぼ真上をガメラはマツハの速度で飛行している。

既に光線属種のレーザー照射圏内に侵入している。いつレーザーが来ても可笑しくない状況だ。最もガメラにとってはレーザーごときもはや恐れるに足りないのだが。

目的地点へと到達したガメラは雲海を、その真下にあるであろうハイヴを見据えながら降下を開始する。と、何の前触れもなく幾筋もの閃光が雲海を切り裂いて次々とガメラへと突き刺さる。

光線属種のレーザー照射、マツハで飛行する物体すらも閃光の速度で確実に貫く必中の光の槍が次々とガメラの巨体へと照射される。だが、どのレーザーもガメラを貫くどころか傷一つつけることすらかなわず、ガメラの降下は止まらない。

6000メートル、5000メートル、4000メートル…。地上へ近づけば近づくほどレーザー照射の数は増していく。それに構わずガメラはジェットの出力を上げ、降下の速度をさらに上げる。

やがて、地上から3000メートルの地点を過ぎ、ついに雲の壁を突き破って地上の光景が姿を現す。それは先程のマンダレーでも、否、今の今まで殲滅しつづけてきたハイヴの存在していた地域で否が応でも見ることとなった光景…。一面に広がる草木も生えぬ凹凸一つ存在せぬ荒野とそこに建つハイヴモニュメント、そして、平坦な大地を覆い尽くすBETAの軍勢……。

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアオオオオオオオンンンンンン!!!』

生命一つ存在せぬ完全なる死の世界へ、その光景を作り出した異形共へとガメラは怒りの咆哮を張り上げると、頭部と両腕を甲羅へと引き込み、両腕からもジェットを噴射してUFOの如く回転しながら地面めがけて落下していく。地上から放たれるレーザーもモノともせず、瞬時に地上へと到達したガメラは低空で回転飛行をしたままBETAの群れめがけて突進する。

地上すれすれを独楽かネズミ花火のように縦横無尽に這い回るガメラ。ただ飛びまわるだけ、ガメラからすれば、あるいはこの戦闘を見ているものからすれば唯それだけであろうが、当のBETAにとっては竜巻や台風にすらも勝る最悪の天災に他ならない。

高速で回転し、マツハの速度で飛行する一万トンを超える重量の物体、そんなものが地上を、BETAの軍勢のど真ん中を飛びまわればどうなるか…、その結果は見るまでもなく明らかだ。

飛行する巨体に触れようものならたとえ大型種であつたとしても粉微塵の肉片と化し、音速の壁を突破して飛行する為にガメラの周囲にはその影響で暴風と衝撃波が発生し、それに高温のジェット噴射の火炎、熱風も混じり合つた結果、ガメラそのものが灼熱の竜巻と化して無数のBETAを薙ぎ払つていく。その結果BETAはガメラに接近することも遠ざかることもできずにただ焼かれ、砕かれ、薙ぎ払われてその数を減らしていくことしかできない。ガメラがただ通過するだけで数百数千のBETAが塵となる、まさに天災としか称しようのない現象が今この大地で繰り広げられているのだ。

そして、ガメラが地上を低空飛行し続けること三分足らず…、地上に存在していたBETAは尽く消え去つていた。地上に残されているのは焼け焦げた肉片のみ、それもまた荒野に吹きすさぶ風に運ばれ、ハイヴ周辺の大地は何も存在しない荒野へと様変わりする。

BETAの姿が消えた荒野へと舞い降りるガメラ。その巨体が地に着いた瞬間、地面がわずかに陥没し、大地が地震でも起きたかのように大きく揺れる。

ガメラは無人の荒野にただ一つ屹立する巨塔、ボパールハイヴモニュメントへと眼光を向けながら唸り声を上げる。一見すると完全に無防備、孤立無援に見えるモニュメント。地上でハイヴを守るはずのBETAは一掃され、あとはただ殲滅されるのを待つ状態にしか見えないだろう。

だが、それは大きな間違いだ。この静寂は、この無人の荒野は一時的なもの。直ぐにハイヴから湧き出る何千何万ものBETAによって再び埋め尽くされることだろうということを、ガメラは理解してい



ア!!!』

ガメラは脚部からジェットを噴射して空へと舞い上がり、プラズマ火球でもってモニュメントを粉碎、地下へと続く縦坑へと身を投じる。

そして、ハイヴ最下層大広間、ハイヴの心臓部である反応炉の下へと降下したガメラは反応炉へ向けて最大出力までチャージされたハイ・プラズマを発射、反応炉は爆発四散し大広間は灼熱の炎で包まれた…。

1998年12月10日、H17マンダレーハイヴ、H13ボパールハイヴ陥落。ボパールハイヴ殲滅後ガメラはインド洋西に向けて飛行、海洋へ落下して消息を絶った。

国連軍SIDE

「……………」

同じ頃、横浜基地モニタールームでは司令、副司令含めた幾人もの基地スタッフが戦いの一部始終を見守っていた。その中には当然武と純夏の姿もある。

モニターに映された炎上するハイヴモニュメント、大地から立ち上がる炎と煙…、これまでも何度も見たであろう光景であったが、それでも圧巻であることに変わりはない。

インドに唯一存在するBETAの居城、ボパールハイヴ。H1カシユガルオリジナルハイヴ、H2マシユハドハイヴと言ったBETA大戦初期に建設されたハイヴに比べれば規模は劣るものの、それでもフェイズ4という規模は並ではなく、少なくとも今までガメラが殲滅してきたハイヴに比べれば段違いの規模と言えるだろう。

過去、ハイヴを攻略するための作戦は行われた。だが完成直後のハイヴであったとしても尽くが失敗、人類は敗走を繰り返すこととなった。フェイズ1、2のハイヴでさえこれなのだ。フェイズ4のハイヴの攻略など夢のまた夢と言うのが現在の人類の総意ともいえた。

それをガメラは容易く攻略した。数の暴力を、光線属種による対空

防御を難なく打ち破り……。此処にいる武と純夏以外の人間にとっては幾度も見た光景……。それでもなお到底信じられない空想じみた、さながらおとぎ話のような光景に思えてならないのだ。ましてやはじめてこの光景を目撃した武と純夏は衝撃のあまりぽかんと口を開けたまま棒立ちしている。

「……H13ボパールハイヴ反応炉破壊を確認、ボパールハイヴ、陥落」

「……………」

「司令……？」

いつもならすぐさま返ってくるラダビノツド司令からの返事が来ないことにいぶかしげな表情を浮かべながら、オペレーターはラダビノツド司令の方へと振り向く。が、次の瞬間彼女は驚愕のあまり啞然とすることとなった。

ラダビノツド司令は、泣いていた。嗚咽は漏らしていなかったものの、その双眸からは一筋の涙が頬を伝い落ちていく。彫りの深い顔は震え、まるで泣き叫びたいのを我慢しているかのようにも見える。その場にいた誰もが今の今まで目にする事のなかった司令の表情に、涙に驚愕している。ラダビノツド司令とそこそこ付き合いのある夕呼ですらもこれには驚きを隠せずにいる。

「し、司令……？い、いかが、なされて……」

「……む、う、うむ、す、すまない。見苦しいところ見せてしまったな……」

オペレーターに恐る恐るといった様子で声を掛けられ、ラダビノツド司令は我に返った様子で服の袖で瞳からこぼれる涙を拭う。どうやらラダビノツド司令は無意識のうちに涙を流していたらしい。涙を拭いとったラダビノツド司令は再び視線をモニターに戻す。その表情には先程の涙は無いものの憧憬と歓喜の念が見て取れる。

一方夕呼はラダビノツド司令の横顔を目を丸くして眺めている。先程のラダビノツド司令の涙はそれほどまでに彼女にとって珍しいものだったのだろう。

「……意外でしたわ、司令も涙を流されることがあるのですね。鬼の

目にも涙、以上でしたわ」

「む、心外だな香月博士。私だつて人の子だ、笑いもすれば泣きもする。だが部下の手前で泣くような姿を見せるわけにはいかないからな。……今回は少々、なんだ、感情が高ぶつてな……」

「……成程、ま、気持はよくわかりますわ、司令」

夕呼にまるで涙一つ流さない男と思われていたことが不満なのかラダビノツド司令はぶぜんとした表情で顔を背ける。一方の夕呼は彼の言葉から何かを察したらしく一人納得したように頷いている。一方武と純夏はラダビノツド司令へと呆けた表情で視線を送っていた。

「はあ……、ですけど司令さんつて基地で一番偉い人なんですよね？ そんな人が泣いちやうつて少し意外です……」

「……まあ、君の言葉も一理ある。……だが、此処は少々特別な場所だからな。つい感傷に浸ってしまった」

純夏の無邪気な言葉に苦笑しながら、ラダビノツド司令は何かを懐かしむかのようにモニターに映された焦土と化した大地を眺める。荒れ果てた荒野、そこは立ち上がる煙と炎、そして焼け焦げたBETAの死体以外何もない。かつて人が住んでいた地とは思えない光景……。だが、ラダビノツド司令はその焼跡を見ながらある光景を思い返していた。

「……此処、ボパールは私の故郷でな……」

「……!!」

ラダビノツド司令の口から出た言葉、まるで独り言でも呟くかのようにはポツリと漏れ出たそれを聞きとつた武と純夏はハツとした表情で息をのむ。ラダビノツド司令は二人の反応に構わず話を続ける。

「私はこの街で、かつてこの地にあつた街に生まれ、育つた。故に此処をBETAに占領され、挙句奴らの巢を作られ、故郷から去らざるを得なかつた時には心から誓つたものだ。……必ず取り返す。私の、否、我らの故郷を、と……。結局果たせなかつたがね」

そう自嘲気味に笑うラダビノツド司令。かつて、彼が国連軍に所属する以前、彼はインド軍に所属しヒマラヤから南進するBETAを迎

え撃っていた。だが、その物量の前に敗退を繰り返し、ついには己の故郷からほうほうの体で逃げ延びる憂き目にあうこととなった。

その後、1992年7月に行われたインド亜大陸の勢力回復の為、ポパールハイヴを攻略する作戦、通称『スワラージ作戦』が実施され、ラダビノッド司令も己の同胞、戦友達と共に作戦に参加した。

しかし、航空宇宙兵力まで導入したこの作戦はあえなく失敗、ラダビノッド司令と共に戦った多くの戦友達は戦場に散り、自身はこうしてむぎむぎと生き延びる羽目になってしまった。

今はこうして国連軍の准将、横浜基地の司令などという肩書を得ているものの、己にとつてそんなものは何の意味も無い。故郷を取り戻せず、多くの戦友を失った己にそんな地位など不相応、そんなものより一刻も早くBETAを駆逐せねばという思いばかりが募っていた。

だが、ハイヴ攻略どころか逆に各地に次々とハイヴを建設されている今の状況に、心の中では半分諦めの気持ちがあった。もう故郷には帰れない、このまま人類はBETAと不毛な消耗戦を続ける以外にはないのだ、と…。

その絶望の象徴が、ポパールハイヴが燃えている。BETAの尽くが塵と消え、歪なオブジェの如き建造物は神の裁きを受けてバベルの塔の如くに崩れ落ちている。

夢ではない、現実であるとは分かっているもこれは夢ではないのだろうかという疑念が心の底から浮かんでくる。だがそれ以上に心に満ちるのは歓喜、そして希望…。

一度は諦めた故郷への凱旋と祖国の復興、それが叶うかもしれないという希望であった。

「だからだろうな、この光景を見た瞬間に心にわき上がるものがあった…。それで思わず、な…。フフ、まだまだ私も未熟ということか」

そう言いながら穏やかな表情でモニターを見るラダビノッド司令。その表情に武と純夏だけではなく、夕呼もまた何も言えずにいる。

そして、火山の噴火口の如く煙を噴き上げるハイヴモニュメントから、一つの影が煙を切り裂いて飛び出してくる。その影の正体はガメ

ラ。マンドレー、そしてポパール、それ以外にも8のハイヴを焼き  
払った大怪獣…。その姿を見た瞬間、ラダビノツド司令は無意識に敬  
礼をしていた。そして彼に釣られるかのように武、純夏、夕呼、そし  
てモニタールームにいた全てのスタッフが立ち上がり、姿勢を正して  
敬礼する。

目の前の「絶望」を打ち砕いてくれた守護神への敬意をこめて、己  
が故郷を取り戻してくれた感謝を込めて……。

「そ、それじゃ俺達はこれで…」

「し、失礼します司令さん、副司令さん」

「ハイハイ、また用があったら呼ぶから、ああそれと明日の朝食は楽  
しみにしておきなさいね♪」

「…香月博士、また君は激辛カレーなどをメニューに載せる気か？  
流石に故郷の料理をいじられるのは私も我慢がならないのだが…」

その後ガメラがポパールハイヴからインド洋沖に向けて飛行、その  
後海底深くに没して消息を絶った為、本日のガメラ監視任務はひと  
まらず終了となった。無論ガメラが沈んだ近辺の海域、そして今後ガメラ  
が攻め入る可能性のあるハイヴへの監視は続けてはいるが。

ハイヴでの戦闘が終了したときには、もう既に時刻は正午を回って  
いた。武と純夏はラダビノツド司令と夕呼に2、3挨拶をしたのちに  
食事を摂るためにモニタールームを後にし、室内にいたスタッフも昼  
食、休憩の為に一時その場を離れているため、結果的にモニタール  
ームにいるのは夕呼とラダビノツド司令、そして夕呼専属のオペレ  
ーターであるピアティフ臨時中尉のみとなった。

「フフ、あの二人には結構刺激になったでしょうね今回のイベント  
は♪観せた甲斐がありましたわ♪」

「やれやれ……、本当は一般人は入室禁止なのだがね…。まあ彼ら  
を君の研究室に入れていた時点で今更だろうが…」

ご機嫌な様子の夕呼にラダビノツド司令は呆れた表情をしている。



実質オルタネイティブ第四計画の最高責任者でありこの基地では司令以上の権威をもっているためにある程度は彼女の好き勝手にさせてはいるが、ある程度はモラルというものを守ってもらいたいものと今更ながら心の中で愚痴を呟く。最も彼女の事だから直接言ってもどこ吹く風であろう。それが分かっているからこそ司令は何も言わないのだが。

そんなラダビノツド司令の考えを察したのか夕呼はその悪戯が成功した子供のような笑顔を司令へと向けてくる。

「あら、司令も大分興奮しておられるようでしたけれど？最後には感極まって涙を流されておられましたし……」

「あ、あれは………む、あれに関してはあまりからかわないで頂けると嬉しいのだが……」

「フフツ、もうからかいませんわ。これつきりですよ。司令の気持ちには私もよく理解できますしね」

クスクスと笑う夕呼にラダビノツド司令はわずかに頬を赤く染めながら目を背ける。いかに相手がこの基地のナンバー2であるとはいえ仮にも女性に己の涙を見られたことは少なからず気恥ずかしかったようである。

「……まあそれはそれとして……問題はこれからですわね……」

夕呼は笑みを引つ込めると先程とは打って変わった真剣な表情でモニターへと視線を向ける。そこに映されているのはカメラが沈んだ海域と、カメラの次なる攻撃目標と考えられるH2スワラーズハイヴ、地球上で二番目に建設されたハイヴの映像……。

彼女の言葉に隠された真意を悟ったラダビノツド司令も、表情を引き締めてモニターへと視線を向ける。

「……どうやらアメリカの第五計画推進派が妙な動きをしているらしい。原因は間違いなく……」

「カメラ、というわけですか……。私の数式に関しては未だにアメリカに漏れていないと仮定して、ですが……。大方例の新兵器の実験場がこれ以上減ることに難色を示しているだけなのでしょう……」

「それ以上に世界を救うのはカメラではなくアメリカでなくてはな

らない、という自尊心もあるのだろう…。……己が国土をBETAに侵略されたことも無く、国を追われたことも無いからこそそんなものを抱けるんだろうが、な…」

ラダビノツド司令は皮肉気な笑みを浮かべながらそう毒づく。その横では夕呼もまたラダビノツド司令と似たような表情を浮かべている。両者共にアメリカに関してはいよい感情を抱いては居ない。日本人である夕呼は特にそうである。

元々日本とアメリカとの間には安保条約が結ばれていたが、BETAによる佐渡島ハイヴ建設、それに伴う長野県にてBETAが活動を一時停滞させている間にアメリカは帝国軍の度重なる命令不服従を理由として日米安保条約を破棄、在日米軍を即時撤退させた。

確かに帝国国防省は米軍から要請された核、あるいは最新開発された高性能爆弾、五次元効果爆弾通称『G弾』の使用に猛烈に反発していたものの、本音はもはや国内にハイヴを建設させられた日本はもうお終いだ、と判断したが故であろうと夕呼は、否、この国に生きる大半の人間は確信していた。

G弾の情報に関しては大まかながら夕呼は入手している。BETA由来の元素であるグレイ・イレブン。それを燃料として稼働する抗重力機関ムアコック・レヒテ機関。それを利用して製造されたのがG弾である。その威力は折り紙つきであり、しかも普通にムアコック・レヒテ機関を製造するよりもはるかに安価かつ省資源、そして運用も核と比べて容易であるがゆえにアメリカはG弾によるBETAおよびハイヴ殲滅を提案、進めようとしているのだ。

最も連中からすればBETAとハイヴの殲滅はついで、本当の目的はハイヴ殲滅後に手に入るBETA由来の資源、そしてBETA戦後の世界の覇権だろう。

それ故に自分達の都合など知った事かとはばかりにハイヴを蹴散らし続けるガメラは邪魔な存在…。ガメラを排除するために何らかの手段に訴えてくる可能性もあるだろう。

「とはいってもまだ何をすることも分かりませんし様子を見るしかありませんが…。万が一ガメラに何かあったとしてもこちらが表立つ

て動くわけにはいきませんし」

「うむ……。……歯痒いものだ。我が国を、わが故郷を救ってくれた恩人に報いることができないということは……」

「心中お察しいたしますわ、司令」

悔しげに唇をかみしめるラダビノツド司令。それに冷静な反応を返す夕呼。極東の防衛拠点の司令、副司令という立場上、ガメラとBETAの戦いに介入できないという悔しき、恩を受けた相手へと返礼できないことへの無念さがラダビノツド司令の心に宿る。

今はただ、海で眠りについている守護神に無事でいてほしいと、何事も無くあつてほしいと祈るしかない……。ラダビノツド司令はモニターに映される一面の大海原を眺めながら心の中でつぶやいた。

## 武SIDE

その夜、武は再び夢を見た。あの、今いる時代から三年後の未来と思われる世界の夢を……。

夢の中で武は、今まで住んでいた世界とは全く違う、地球外生命体とのいつ終わるともしれない戦争を繰り広げる世界の中で第207衛士訓練部隊の仲間達と共に衛士となるために教練に明け暮れる日々……。その間に様々な出来事があつた。

仲間達とどうにか乗り越えた総戦技評価演習、横浜基地への国連事務次官来訪時に起きたHSS T落下事件、噴火寸前の天元山の麓に不法滞在する老婆を救助したこと……。どれもかつての世界では体験することも無かった事であり、武は少なからず元の世界とのギャップを覚えざるを得なかった。だが、それらの体験を得るごとに、己が段々とこの世界へと、この世界で共に過ごす少女達と馴染んでいくのが分かった。

かつての世界の彼女達とはどこか違い、だが芯の部分は元の世界の彼女達とそのままな少女達との絆を深めていく日々……。

だが、そんな日常が嵐の前の静けさだということを、これから始まる終焉の序章だということを、武は嫌というほど思い知ることとなつ

た。

12月25日、突如武達衛士訓練部隊はラダビノツド司令より呼び出しを受けた。

…それは、横浜基地主導で行われていたオルタネイティヴ第四計画、通称オルタネイティヴ4の停止、そしてそれに代わるオルタネイティヴ第五計画、通称オルタネイティヴ5への計画移行の伝達。当初訳が分からなかった武はラダビノツド司令へと食いかかったが、結局「訓練兵であり正規の軍人ではない」「軍隊とはそういうものだ」という理由で詳しく知らされることは無かった。

そして、ようやく正式に国連軍の衛士として任官、少尉の地位に就いた時、ようやくオルタネイティヴ第五計画、その全貌を知ることとなった。

オルタネイティヴ5、それは横浜ハイヴを殲滅した五次元効果爆弾、通称G弾の集中投下による世界中のハイヴ殲滅と、全人類から選抜された10万人を地球から脱出させ、他星系へと移住させるという計画…。事実上の人類の敗北宣言ともとれる計画であった。

結果、武はこの世界で共に戦い、愛し合った一人の女性を宇宙へと送り出し、己は地球へと残る…。最後まで、命尽きるまで戦うために…。

たとえその先が滅亡と言う救いようのない地獄が待っているようにとも、己が永劫の輪廻へと囚われることになったとしても…。

「……」

夢が終わった瞬間、武は眼を覚まし、上体を起こす。起きたばかりだというのにやけに眼が冴えている。

…やはりあの夢、己の今いる時代から少し先の未来…、によく似た世界の夢を見たせいだろうか。あの夢の光景は未だに己の脳裏にこびりついて残っている。

「オルタネイティヴ、計画……」

武は夢に出てきたその言葉を呟いた。夢に出てきたのは第四計画、

第五計画とのことだったが、それならば第一、第二、第三もあるのだろうか……。いや、それ以前に……。

「もしかして、香月副司令のしている研究って……」

脳裏に浮かぶのはあの12月25日の時、自棄酒を呷りながら呟いていた愚痴：『戦術機のようなデカブツを作れるのに何で半導体150億個を手のひらサイズにできないのよ』、『それでも世界は繋がっている』……夢の中では全く意味が分からなかった言葉、いや、実際は今でも全然意味が分からないのだがこれがもしかしたら……。

「……」

ベッドの上で思い悩む武。そんな彼をしり目に、隣のベッドで純夏が安らかな寝息を立てていた。

武が起きてから数分後、純夏はようやく起床し、二人は日課のトレーニングを終え、案の定迎えに来たまりもに連れられてPXで朝食を摂ることとなった。朝食の内容はやはりというべきかなんというべきかカレー一色であった。それも洋風ではなくインド風の……。

どうやら今日のカレーはラダビノツド司令及び基地内のインド出身の職員、衛士からあれこれ要望が出されて作られたものらしい。なんでもこの食堂の料理長だけでは手が回らないために一部職員、衛士もまた調理場に入っているのだとか。「だって普通のカレーはともかくインドカレーなんておばちゃん専門外だしねえ」と夕呼は笑いながら語っていた。

ちなみにカレーに関してだが、夕呼の事だからとんでもない地獄レベルの辛さのものをを出してくるんじゃないだろうかと誰もが予想して身構えていたが、出てきたのはいたって普通の辛さのカレー。確かに辛くはあるが十分おいしく食べられるレベルであり、武と純夏、そして辛いものが苦手なまりもは拍子抜けしてしまった。これも夕呼曰く、「ラダビノツド司令に念を押されちゃってねえ……、絶対に激辛カレー作るなって」とのことだ。3人とも心の中で司令に感謝の言葉を述べたのは言うまでも無い。

その後四人は談笑しながら朝食を楽しんでいた。が、ただ一人武だけは時折目を彷徨わせたり食事の手を止めてボーっとしたりしていた。何やら様子のおかしい武に純夏は心配そうな表情を浮かべている。

「ね、ねえ武ちゃん、なんか様子おかしいよ？今日のトレーニングもたまに何だか上の空だったし…」

「ん、あ、ああ…。まあ、なんつうか、少々夢見が悪くて、な。ハハ…」

「ん？何？また変な夢見たの？折角だからお姉さんがカウンセリングしてあげようかしら？ん？」

武の言葉に反応したのか夕呼が興味深々と言った表情で身を乗り出してくる。その横ではまりもが夕呼をじと目で睨んでいるが。「アタ本来の仕事どうした」とでも言いたいのだろうか。

突然話に割り込んできた夕呼に武も少しばかり引いてしまうが、やがておずおずと頷いた。

「は、はい…。それに、個人的に副司令にお伺いしたいこともありますので…。できれば二人だけで内密に……」

「……フーン？彼女がいるけどお姉さんがあんまりにも綺麗だからこっそり誘惑して摘み食いしちやおうってわけ？んもう駄目よ浮気は♪」

「!?た、武ちゃん!!それどういうこと!!」

「!?ご、誤解だ純夏!!本当に香月副司令と話をするだけなんだ!!つーか副司令も純夏が誤解するような変なこと言わないでくださいマジで!!」

夕呼の余計な一言に激昂して殴りかかろうとする純夏を武は必死で宥めながら当事者である夕呼に文句を述べる。そんな二人の様子が夕呼は実に楽しそうに大笑いしながら眺めていた。まりもはどうしたものかと困った表情をしているが…。

「クッククック、まあいいじゃないのよ。あんまりに不景気な顔をしているものだからつい、ね。分かったわ。じゃあ食事の後に、ね」

「は、はい……。ありがとうございます副司令」

ニヤニヤと猫のような笑みを浮かべる夕呼に若干不安を感じながらも武は礼を言って食事を再開した。合成食材で作られたカレーではあるが、その味は普通のカレーと大差ない。此処までの味へと仕上げてくれた厨房の人達に心の中で感謝しながら武は口にカレーを運ぶのだった。

隣で此方を睨みつける純夏の冷たい視線が非常に恐ろしかったが…。

食後、どうやつてもついてこようとする純夏をどうにかして説き伏せ、武は夕呼と共に彼女の研究室に向かった。

「さて、と…、じゃあ早速話してもらおうかしら？あなたがどんな夢を見たのか、を」

いつも腰かけている椅子に座った夕呼は向かい合わせに此方を見る武へとそう促す。夕呼に促された武は話すべきかどうか迷うように視線を彷徨わせていたが、やがて覚悟を決めた様子でゆっくりと口を開く。

「はい…、実は、昨日見た夢なんですけれども…」

そして武は全てを話した。例の平穏な世界で過ごしていた、自分が別の世界に転移したこと、その世界は今のこの世界と同じ、BETAとの戦いを繰り広げている世界であり、現在から3年後の2001年の未来であること。

その世界の香月夕呼と出会い、彼女の便宜で訓練兵へと就任した事。

訓練兵の間にはかつての世界で共に学んだクラスメイト達が居た事、だが、その中には鑑純夏の姿だけが無かった事。

…そして、己が行き着いた結末も…。

「…その後、オルタネイティヴ4って計画が破棄されて、地球から一〇〇〇〇〇人の人類を逃がしてG弾でBETAとハイヴを殲滅するっていうオルタネイティヴ5って計画に移行されて……。俺は、地球に残ってBETAと戦うことになったんです……」

「……」

そこまで話した武は疲れたように軽く息を吐きだした。自分の覚えていた限りの事は全て話した。後は夕呼がどう判断するかである。武はじつと夕呼の反応をうかがう。

一方夕呼は最初の微笑みが嘘だったかのように現在は真剣な表情を浮かべて何事かを考えているが、その表情からは何を考えているのかは全く読み取ることにはできない。

両者の間に流れる沈黙、やがて武はその沈黙に耐えきれなくなり口を開く。

「…副司令、あの、もしかしてあれって俺の、この世界の未来の話なんじゃあ…。三年後にオルタネイティヴ5とか言うのが発動されて宇宙に逃がした10万人の人類以外全滅するっていうのがこの世界の未来なんじゃあつて…。アハハハハんなわけ無いっすよね！予知なんてバカバカしい……」

心の中にわき上がる不安と焦燥、それをごまかすために馬鹿笑いする武だったが、途中で夕呼がそれを押しとどめるようにぴんと立てた人差し指をつきだしてくる。夕呼の有無を言わさない視線に武は思わず口を閉じてしまう。武が口を閉じるや否や夕呼は呆れた様子で溜息をついた。

「…全く、まさかこんな早くにオルタネイティヴ計画について知っちゃうなんてね…。少々予想外だったわ。ま、いずれは勘付くとは思っちゃあいたけど…。まあいいわ」

「ふ、副司令…?」

まるで頭痛を抑えるように額に手を当てながらブツブツと何やら呟く夕呼。武は恐る恐ると夕呼に声をかける。と、夕呼は直ぐに視線を武に寄越してくる。

「白銀、アンタはあの夢がこの世界の未来、とか言ったわよね？それは何故？」

「はあ？いや、そんなの部屋にあったカレンダーに書かれた年が2001年だったから…」

「それだけ？」



「……それだけ、です」

武の返答に対して夕呼は何も答ええない。ただ無言で武の顔をジツと見ているだけであった。何も言わずに此方を見る夕呼に、武も流石に不安を覚えてくる。

武は思い切って、あの夢を見てから覚えていた疑問を夕呼へとぶつける。

「……副司令、教えてください……!!オルタネイティヴ4って一体何なんですか!?!俺の夢に出てきた数式と、何か関係があるんですか!?!」

恐らくは夢の世界の夕呼が研究していたであろう計画、『オルタネイティヴ4』。いくら夢を思い返したとしても名前以外はさっぱり分からない。ただ、それが夕呼の研究しているものであり、あの数式はそのために必要なものであった事だけは理解できる。

決死の覚悟で夕呼に質問をぶつける武、だが、その質問に対する夕呼の返答はそっけないものであった。

「それに関しては今は教える事が出来ないわ。……まあ、教えなくてもそっちの夢で何時かは掴んじやうかもしれないけれど、今は教える事が出来ない」

「そう、ですか……」

夕呼の反応に武はそれだけ呟いた。元より教えてもらえらるゝとは期待していない。幾ら色々とその基地での便宜を図ってもらっているとはいえ所詮自分は一般人、軍の、それも上層部の人間しか知り得ないような機密をそうホイホイ教えて貰えるはずがないのだ。

それでも少しばかり落胆を覚えて肩を落とす武に、夕呼はジツと視線を送っている。

「話は分かったわ。でも、少しスケールが大きすぎるわね……。とりあえず此方で色々と分析してみるから悪いけどアンタは部屋に戻っててもらえるかしら? 結果が出たら教えるから」

「は、ハイ……」

夕呼の言葉に武は黙って従う。何であれ彼女はこの基地のナンバー2、ただの居候である己がこうやって話ができるだけでもかなりラッキーなことなのだ。そんな彼女の機嫌を損ねるような事をしよ

うものなら本格的にこの基地から純夏共々叩きだされかねない。

元より機密事項であればそう簡単に教えて貰えるとは思っていない。ならばここは大人しく引き下がるしかないだろう。武は椅子から立ち上がると失礼します、と頭を下げてそのまま出入り口のドアまで歩いていく。

「白銀」

と、突然背後から夕呼に声を掛けられ武は後ろを振り向く。そこにはいつになく神妙な顔をした夕呼が此方を見ている。一体何なんだと身構える武に向かって、夕呼は口を開いた。

「今回の夢、特にオルタネイティヴ計画については、鑑には黙っておきなさい。本来ならアンタみたいな一般人が知っていること自体が異常な事なんだから。もしも鑑の身を守りたいなら、そうしなさい」

「……はい」

武は夕呼の言葉に黙ってうなずくと、そのまま自動ドアを通りぬけて外へと出る。

「……結局、分からずじまい、か……」

薄暗い廊下を歩きながら武は呟く。夕呼は結局オルタネイティヴ4について語ってくれなかった。予想していたとはいえ今回はほぼ収穫なしと言っている。

夢でラダビノッド司令は言っていた。『諸君らはまだ訓練生、だからこれ以上知らせることはできない』と。もしもこれ以上知りたければ国連軍の衛士となる以外にはないかもしれない。だが夕呼は、『その内夢で掴む』とも言っていたが……。

「はあ………ったく分からねえなあ……」

重々しく溜息を吐きだしながら、武はとぼとぼと己と純夏の部屋である病室へと歩くのであった。

夕呼SIDE

「……オルタネイティヴ5、10万人を地球から脱出させてのちに

G弾使用して最終決戦、か…。あながちただの夢、と馬鹿に出来ないわね…」

武が居なくなつた研究室で夕呼は一人ポツリと呟いた。

オルタネイティヴ計画は基本的に極秘裏のものとされており、国連軍でも上層部、あるいはオルタネイティヴ計画に関わる人間以外が知ることはあり得ない。

だが白銀武はそれを知っていた。それも「夢」等と言う他の人間が聞けばまず確実に信じないであろうもので。

だが夕呼には武の語つた言葉が真実であると知っている。それを明かせる「証人」もいる。

「予知夢、ではないわね…。だとするなら白銀の観ている夢と言うのは、やっぱり…」

武は己の観た夢がこの世界の未来ではないのか、と不安がつてはいたが夕呼はそれは違うのでは、という確信を抱いている。

白銀の夢の内容を考察する限り、未だに攻略されていないハイヴ、そもそも「存在しないことになつていた」鑑純夏、そして何より既に理論に辿り着いているはずの香月夕呼が未だに理論へと辿り着けていないという事実…。

無論3年の時間の開きで世界も変化するだろう。夢であるために大分整合性が取れていない部分もあるだろう。しかしそれでも相当な矛盾があるのは確かだ。ならば武の観た「夢」の世界はこの世界の未来ではなく…。

「…フフ、これは意外なところで理論が実証されちゃうかもしれないわね。本当にいい拾いモノをしたものだわ」

クスクスと心なしか笑みを浮かべる夕呼。その笑みの意味を理解できる者は、隣の寝室から研究室を覗く一人の少女のみであろうか…。

## 第25話 消滅

インド洋深海、4000メートル以上の深度に存在する光届かぬ闇の世界。そのすさまじい水圧から生身の人間どころかこの深海に適した生物以外の何物をも立ち入らせない一寸先も見えぬ常夜の聖域、守護神ガメラはそこで寝息を立てていた。

戦いの疲れを癒し、次なる戦いへ向けての力を蓄えるため、ガメラは丸一日眠り続ける。

もはや地上に残されているハイヴはフェイズ3以上の巨大さを誇るものばかり、そして次に攻めるのは地球上でオリジナルハイヴに次ぐ巨大さを誇るであろうH2マシユハドハイヴ。ハイヴを守るBE TAの物量も今まで以上の規模であることは想像に難くない。

あの母艦級もまた出現する可能性がある以上、気を引き締めていくに越したことは無い。

ガメラの安息の時間、夢の中をまどろむ時間は刻一刻と過ぎ去っていく……。

処変わり此処はガメラの、正確にはガメラであるシロガネタケルの心象風景の内部。相も変わらず枯れ果てた桜の木以外何もない一面の荒野に、シロガネタケルとオリジナルガメラは居た。タケルは桜の木に寄りかかり、オリジナルガメラはその隣に寄り添うように立っているといういつものポジションで。

「んー……、相変わらずの殺風景、だな」

『既に10のハイヴを陥落させても変化無しか……。やはりオリジナルハイヴを含むすべてのハイヴを殲滅せねばならないようだな』

「……だろうなあ……。全く先が長いな」

タケルは大きく伸びをしながら頭上に広がる茜色の空を眺める。見事な夕焼け空ではあるがこれはあくまで己の心象風景、外の世界までもが夕方なわけではない。ひよつとすれば朝なのかもしれないし既に夜中なのかもしれない。最も、どっちにしてもタケルには関係の

無い事であるが。

「そう言えば俺つてもう10もハイヴを潰したんだよなあ…。ぶつ潰したBETAは…。もう億はいくんじゃねえのかなあ…。数えてないからわかんねえけど。これで少しは歴史も変わったのかなあ…」

『いや、君の記憶では確か横浜ハイヴ以外のハイヴは破壊されていなかったはずだからハイヴが10陥落したというのはかなり歴史に影響を与えていると思うぞ？むしろ影響が無い方がおかしいと思うが…』

そりやそうか、とオリジナルガメラの言葉に笑いながら、タケルは枯れ木へと寄りかかる。花どころか葉一つつけておらず、寄りかかっただけで今にもへし折れそうなほど頼りない桜の木。無論此処はタケル、ガメラの心象世界であり折れる事は無いし、よしんば折れて転んだとしてもタケルは掠り傷一つ負うことは無いのだが。

「…にしても、だ。人間だった時はたった一つのハイヴ潰すどころか攻めてくるBETAの群れ相手に四苦八苦して立って言うのに、今となっちゃあもう蟻かゴキブリ潰すように楽勝だもんなあ…。：前のループで俺達が命かけて戦ってたのって何だったんだって思うよ、いやマジで」

『そう自分を卑下しないことだ。君が、否、君達が居たからこそかつての世界でオリジナルハイヴを落とすという偉業を成す事が出来た。君達だけではない、多くの名も無き人間が命を賭したからこそBETAの侵攻をあそこまで押し留め、あの勝利への道標を作り出すこととなった。決して無駄な犠牲などでは無い』

「…ま、そもそもBETA大戦があそこまで泥沼化したのは俺達人間が内ゲバしてたせいもあるんだがな。…：本当の敵が何なのか分かっていない馬鹿がトップ握ってるせいで…。全く嫌になる…」

タケルはそう呟いて不愉快に顔を歪める。思えば人類の諍いはBETA大戦中も収まる事は無かった。狭霧大尉率いる戦略研究会が中心となって起こした12.5事件然り、横浜基地へのHSS T落下事件を始めとするオルタネイティヴ5派の暗躍然り、さらに聞いた話ではユーコン基地では戦術機開発の裏でソ連とアメリカ、そして難

民解放戦線及びキリスト教恭順派率いるテロリスト集団との間で暗闘があつたと聞く。

こんな人類の存亡の時に一体何をやってるんだと、タケルは幾度も悪態をついた。愛国心もあるだろう、己の国を守りたいという気持ちもわかる、だが、だからこそ今日の前に迫る危機、BETAという敵を真っ先に滅ぼさなければならぬのではないのか、そのためにも人類は国を越え、人種を越え、思想宗教を越えて団結しなければならぬのではないのか。こんな馬鹿馬鹿しい内ゲバなどやってる暇はないだろうが。そんな事を幾度思つた事か知れない。

「…まあ今はそれほど無いにしても、昔はよくイラついたもんだよ。…自分自身焦っていたっていうのもあるけどさ」

『無理もない。君は既に“終わり”を知り、それを直に体験している。その終わりを防ぐため、迎えさせぬと心に決めていたのならば、人間達の内輪揉めは歯痒かつた事だろう。…分からないわけではない』

オリジナルガメラの言葉にタケルは無言のままであつた。

そもそもオリジナルハイヴがカシユガルに落ちた時、中華人民共和国だけでなく国連軍、それでも同じ共産圏の国家であるソ連軍と合同でオリジナルハイヴを攻めて早々にBETAを殲滅し、ハイヴを落としていたのならこんな不毛な泥沼戦争は起きずに済んだのだ。そして無用の犠牲も生まれる事も無かつた。

げに真の敵は人の欲の深さか、タケルは疲れた表情で深々と溜息を吐く。まあ今更の話なのだが…。

「しっかし…、こつちも楽勝だと何だか敵と戦ってるって感じがしなくなつてくるよな…。なんつうかこつち、むしろ作業とかさ、仕事行つて定時に帰つて寝る、みたいなの？」

『…ふむ、君の言う喩えが私にはよく理解できないが…。油断はするべきではない。あの巨大なBETAの如き難敵が出てこないとも限らないし、次のハイヴは地球で二番目に建造された、いわば世界で二番目に巨大なハイヴ。そう容易く攻略はできないだろう』

「分かつてる分かつてる。だからこつちとして休息してるんじゃないか

よ…」

小言染みた事を云ってくるオリジナルガメラにタケルは適当に相槌を打ちながら剥き出しの地べたへと寝転がる。空は赤い、血でも塗られているかのように赤い。雲一つ存在しない空はまるで、かつての世界で死んでいった人間の血で染め抜かれているかのようなであった。

「そう言えば前から聞きたかったんだけれど…、お前イリスとの戦いの後に大量発生したギャオスハイパーと戦いに行っただろ？…あの戦い、どうなったんだ？」

空を眺めながらタケルは何気なくそんな問いかけをオリジナルガメラに投げかける。実際タケルは心の中で気にはなっていた。

かつて元の世界でタケルが観た映画、『ガメラ3』はガメラはイリスを屠り、日本へと接近してくる無数のギャオスの群れへと向かっていくという展開で終わっていた。その後ガメラがどうなったのか、ギャオスの群れがどうなったのか、ガメラは勝ったのか、負けたのか…、それらは映画の続編が作られなかったことから結局描写される事は無かった。

だからタケルは気になった。当の本人ならば知っているはずだ。あの戦いで勝利したのか、敗北したのか…。あの絶望的な戦いの顛末を知りたかった。

一方オリジナルガメラはタケルの唐突な質問にしばらく沈黙していたが、やがてゆっくりと返答する。

『…いきなり何を聞くかと思えば…。そう言えば君は知らなかったか？…まあいい。戦いは勝った。満身創痍だった上に新種のギャオスまで出てきたがどうか全滅させる事が出来た。…最もそのあと私は力尽きて死んでしまったがな』

「…へえ、やっぱり、勝った、のか…。でも、死んだって…」

『腕一本を失って、おまけに腹に穴が空いてたものでな。人間の援護があったとはいえ流石にあの数相手はかなり骨が折れた。万全だったならどうにかなったのだろうか、な』

確かにあのとときガメラはイリスとの戦いで酷い傷を負っていた。右腕は千切れ、腹の甲羅はイリスの手甲で貫かれて風穴があいてい

る、そんな状態で数百数千、あるいは数万ものギャオスハイパーと戦闘して勝てるかと聞かれれば、誰であっても首を横に振らざるをえない。ラストの描写から人類との共闘もあつたと推測されるだろうがそれでも厳しいだろう。結果的に勝利したとはいえガメラ本人もその時の傷で力尽きたのはタケルにも納得できる。

オリジナルガメラの返答を聞いたタケルはしばらくの間黙って空を眺めていたが、やがて地面から上体を起こすとおそおそといった様子でオリジナルガメラの方へと顔を向ける。

「……その、よければ、だけどき……、どういう戦いでどうやって勝ったか教えてくれない、か……？」

歯切れの悪い言葉でオリジナルガメラにそう尋ねるタケル、あの映画の続きについて知りたいというほんの好奇心で聞いては見たが、よくよく考えればオリジナルガメラからすれば結果的に自分が死んだ時の話であり、どうやって死んだのかを聞かれていい気持はしないはずだ。オリジナルガメラの事だから怒る事は無くとも多少不機嫌にはなるだろう。タケルは質問をした瞬間に少し軽率だったか、と心の中で今更ながら後悔する。

が、そんなタケルの内心に反してオリジナルガメラは特に怒った様子も無くいたって平静な態度でタケルを眺めている。

『私とギャオスとの戦い、か……、フム、大して面白くも無いし、少々長くなるが……聞きたいか？タケル』

叱責か、あるいは無視かのどちらかを予想していたタケルはオリジナルガメラからの問い掛けに意外そうな表情で驚いた。が、直ぐにココクと首を上下に動かして返事を返すと、オリジナルガメラはグルル……と喉を鳴らすような唸り声を上げる。

『……まあいい。まだ目覚めるまで少し時間はあるし、少しばかり語るとうかがうか……』

そう呟くとオリジナルガメラはタケルを相手に、かつての己の最後の戦いの話を始めたのだった。



武は再び夢を見ていた。

あの、オルタネイティヴ5、『バビロン作戦』の結果、崩壊しきった地球での夢を…。

バビロン作戦、世界中のハイヴめがけてG弾を落とすオルタネイティヴ5の骨子たる軍事作戦。結果として地球の地上からBETAとハイヴは消滅した。少なくともBETAの脅威を一時的とはいえ退け、ユーラシア大陸を人類の手に取り戻すことに成功した…。

だが、その代償は決して安いものではなかった。五次元効果爆弾とG弾の影響による重力変差により発生した大津波により、大陸の大半は海へと飲み込まれ、残された大陸にも干上がった海から吹き荒れる塩の嵐が襲いかかり、死の大陸と化していく…。

残された国はアメリカ、日本、カナダ、フランス…。地球上に残された大陸、居住地、食料をめぐる再度争いを始める人類達…。

だが、そんな人類をあざ笑うかの如く、再び災いは襲いかかる…。G弾によって絶滅したと思われたBETA…。それが再び姿を現したのだ…。

再び始まる人類とBETAの種の存亡を賭けた戦い。その戦いの中で、『武』は…。

「…で、結局夢の中の白銀はBETAとの戦いに敗れて死んでしまいました、めでたしめでたし、ってことでいいのね？ 今日見た夢の内容は」

「…全然めでたくないっすよ副司令…。こつちからすれば朝っぱらから憂鬱な気分させられるし…、本当に碌な気分じゃない…。」

夕呼のからかい混じりの言葉に武は苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべ、そんな武の反応に夕呼は可笑しそうにニヤニヤと笑っている。

その日の朝、再び純夏と共に夕呼にモニタールームへと呼び出された武は夕呼と二人きりになった折に今朝見た夢の内容を夕呼へと包み隠さず話した。オルタネイティヴ5の発動後、10万人の人類が逃

げ延びたのち、G弾一斉投下の影響で崩壊した地球でのその後の話、思い出すだけでも鬱な気分になる記憶であったが覚えている限りの事を夕呼に打ち明けた。

その後夕呼にからかわれ、不機嫌そうに顔を顰める武。夕呼はニヤニヤ笑いをやめずに不貞腐れる武を宥める。

「まあまあ白銀、そう怒るんじゃないわよ。アンタにとっちゃあ本気かもしれないけれど他の人間からすれば眉唾ものなんだから。何せ夢なんだし」

「まあ、そりゃあ、そうですね……」

確かに夢で観た事を他人に話したとしてもまともに信じてもらえないはずはない。精々嘲笑か憐憫の表情を見ることになるのが関の山だ。最もそんな話をまともに聞いている夕呼も夕呼で変り者なのだろうが…。

「ま、いいわ。さてと、それでその夢が未来への予知夢ってアンタは不安なんだけれど……、これは私の予想だけれど、少なくともアンタの観た夢は“この世界の”未来の光景では無いと思うのよ」

「…へ？あ、はあ、まあ副司令ならそう言うとは思ってましたけれど一体何故？」

何故か夕呼が呟いた“この世界”という言葉が気になったものの、武本人は己の夢が未来の光景であるという事を否定されたことを特に驚く事は無かった。一応否定の理由を聞いてみると夕呼は武に向けて意味深な笑みを向ける。

「ふ〜ん？じゃあ白銀、逆に聞くけどアンタの夢の中にガメラって出てきた？あるいはガメラに関する情報その他は無かったかしら？」

「……あーそ、そういえば……」

夕呼の問いかけを聞いた瞬間、武はハッと思いだす。確かに夕呼の言うとおり、武が観た夢にはガメラの姿どころかガメラの名前そのものすら出てきていなかった。しかもガメラ出現時に殲滅されたはずの佐渡島ハイヴ、鉄源ハイヴ等のハイヴが残っており、横浜ハイヴが殲滅されたのもガメラによるものではなく1999年に行われた明星作戦なるもので落とされたG弾によってとされていた。

武の表情に夕呼は満足げな表情を浮かべている。

「やっぱりね。アンタの話を聞いている限りガメラが夢に出てきたなんて話は一度も聞かなかった。もしアンタの観た夢が未来の光景だとしたなら仮にその時期ガメラが死んでいたとしてもその情報、痕跡が残っていないきやあおかしい筈よ？今となつてはガメラの存在は世界中に知られているんだから」

夕呼の言うとおりに、今やガメラの名は日本どころか世界中の人間の知るところとなつている。出現してから2週間も経たないうちに10のハイヴを殲滅し、東アジアを解放した巨大な怪獣…、ある人間は畏怖と恐怖を、またある人間は尊崇と敬意をかの怪獣へと抱き、善意であれ悪意であれ世界中の人々の注目はガメラへと集まつている。

そんな怪獣が、たとえハイヴ攻略の途中で死んだとしても簡単に消え去るようなものであろうか、答えは否だ。仮にも単体でハイヴを殲滅できる戦力をもっているガメラの記憶、記録が高々2、3年でそう簡単に消え去るはずがない。

ならば考えられる事は一つ、あの夢の世界にはそもそも…。

「ガメラが、存在しない…？」

「でしようね。恐らくアンタの夢の世界ではガメラそのものが出現しておらず、G弾で吹き飛ばされた横浜ハイヴ以外はほぼそのまま…、いえ、あれから年月経つてるところをみるとさらに増加している可能性もあるわね…」

「じゃ、じゃあ横浜ハイヴにとらわれていた俺と純夏は…？」

「さあ？殺されたか実験台にでもなつたんじやないの？何か情報とかなかつた？」

「……そういえば、確か…」

武の脳裏に浮かぶのは夢の中に出てきた斯衛軍所属の女性、月詠真那中尉から言われた言葉…。

『死人が何故ここにいる』

彼女の言葉曰くあの世界の己は向こうでは死んでいるとのことらしい。どこまで信憑性があるかは分からないが、もしも己が死んでいるとするならば、一緒にハイヴへと囚われていた純夏もまた…。

「でも、でもどうせ夢ですよね!?この世界じゃ俺達生きてるしハイヴだって10もつぶれていますからあの未来になるなんてことはほぼあり得ないし!」

頼むからそうだと言ってくれと言わんばかりに顔を引き攣らせながら叫ぶ武、あんな希望など一欠けらも存在しない世界がこの世界の未来などと認めたくない、言外にそう言っているかのようでもあった。

多分ねえ、と夕呼は武の上ずった声を聞きながら気の無い返事を返す。

「でもひよつとしたら近い未来にはなるかもしれないわよ?オルタネイティヴ5を推進している連中が無理矢理計画を進めようとしてくるかもしれない。ガメラが戦いの途中で力尽きでそれつきりハイヴが攻略されなくなるかもしれない……、ま、どんな事であれ絶対はあり得ないのよ。99.9%はあり得ても100%はあり得ない……つてところね」

「そんな……」

武の楽観的な言葉を打ち砕くかのような夕呼の言葉に武はぐうの音も出せない。確かに夕呼の言うことも分かる。もしかしたら再度BETAが日本へと侵攻してきて自分と純夏はまたBETAの手によつて命の危機に晒されるかもしれない。その時ガメラが再び助けしてくれるとも限らないし、その後世界がどうなるかなど見通せるはずがない。

下手をしたらあの「夢」は「現実」と化すかもしれないのだ。あの死の世界を、滅びゆく故郷を思い出した瞬間、武の背筋に冷たいものが走る。

表情を暗くしてうつむく武に夕呼はやれやれと肩を竦める。

「そんなに落ち込むんじゃないわよ。まだそうなるとは確定したわけじゃないんだし何よりこの私がそんな未来にさせるわけ無いでしょ?……さて、それじゃあそろそろモニタールームに戻りましょうかね?アンタの彼女もそろそろ焼き餅焼いているだろうし」

「……はあ」

夕呼のやけに明るい声に武もおおずと頷いた。確かにやけに焼き餅焼き、なのかどうかは知らないが純夏は自分が夕呼と長々と話をしていることやけに機嫌を悪くする。果たして夕呼の言う通り単に焼き餅を焼いているのか、それとも…。

「……ま、考えても仕方ないか、な」

そう呟いて武は夕呼の後を追ってモニタールームへと向かった。

タケル、ガメラSIDE

「……ん？そろそろか」

『そのようだな、目覚めの時が来た』

オリジナルガメラの話が終わるや否や、タケルとオリジナルガメラの居る荒野の景色が段々と薄らぎ始める。もはや何度も見慣れた現象、現実世界の肉体が目覚める時の兆候に間違いない。

「……さて、次はマシユハドハイヴ、か。これは少々骨が折れるかもな」

『今までよりも敵の数は多い。油断せずに行くぞ、タケル』

「おう、たっぷり寝たから運動変わりにひと暴れと行こうか」

タケルとオリジナルガメラがそう言葉を交わした瞬間、二人は周囲に広がる荒野もろとも白く塗りつぶされ、消え去った。

そして同時に、深海で眠り続けていたガメラの双眸が開かれる。目覚めたガメラは頭部を持ち上げて頭上を、光すらも見えない暗黒の天井へと視線を向ける。

ガメラは唸り声を上げるとそのまま体を浮上させる。目指すは地上、目的地はBETA大戦初期、カシユガルオリジナルハイヴの次に建設されたハイヴ、H2マシユハドハイヴ…。

モニタールームSIDE

「……監視ポイントのレーダーに反応あり！海底から段々と海上めがけて浮上してきます！恐らくはガメラかと…」

「来たか…」

オペレーターの報告にラダビノツド司令は表情を引き締める。その隣でモニターを眺める武と純夏も少なからず緊張の面持ちを浮かべている。余裕のある表情をしているのは夕呼のみである。

余談ではあるが武が心配していた純夏からの叱責は今回は特になかった。ただ、純夏が武へと不満げな視線を向けてはいたが。流石に基地司令の居る前では自重したのだろうか、と武は密かに胸をなでおろしていた。

「さて、と…。今回は恐らくはマシユハド、今回も二つ纏めて潰すとすると最寄りのH9アンバールハイヴもつてことになるんだろうけど…、そう簡単にいくかどうか…」

「え？結構楽勝に行くんじゃないんですか？前なんか難なくハイヴ潰してたじゃないですか？」

「いや、確かにマシユハドハイヴの殲滅は可能だろう。确实とは言わんが。だが、ハイヴの規模がポパールと比べると桁違いでな…」

武の投げかけた疑問に夕呼に代わってラダビノツド司令が答える  
と、視線を一面の大海原が映されたモニターから世界中のハイヴの分  
布図へと視線を向ける。既に殲滅されたポ

パールハイヴを示すH13の番号はそこには無く、ユーラシア大陸の西方部分にはH1からH12までの番号が振られている。そしてラダビノツド司令の視線が向いているのはイラン国内に点滅するH2の文字。

「君達も知っているとは思うがこのH1、H2という番号はそれぞれハイヴが建設された順につけられている。日本流に訳すなら甲1、甲2といったところか…。地球上に初めて建設されたハイヴであるカシユガルハイヴをH1として、H2、H3といった順番でカウントされる。ちなみに此処横浜に建設されたハイヴはH22。22番目に建設されたハイヴということだ」

ラダビノツド司令の説明に武と純夏は黙って頷く。司令はそのまま話を続ける。

「現在カメラが向かうと考えられているのはこのH2マシユハドハイヴ。名前からも分かる通り地球上で2番目に建設されたハイヴ。

その規模はおよそフェイズ5だ。地球上で2番目に建設されたハイヴであるからその規模は横浜、否、ボパールと比べても桁外れに巨大だ。内包するBETAの物量も少なく見積もってボパールの倍はありとみてもよからう」

「……………」

ラダビノツド司令の言葉に武と純夏も息を飲んだ。二人共ボパールハイヴでのガメラとBETAの戦闘を目撃している。ボパールどころかそこよりも規模の小さいマンダレーですらもBETAは圧倒的な物量を誇っていた。文字通り大地を覆い尽すほどの圧倒的、否、それすらも通り越して異常なまでの物量には武と純夏も圧倒されていた。今回はその倍以上…。二人共驚きのあまり唾然としている。

「最もガメラがそう簡単に不覚を取るはずは無い。今までの戦歴からみて今回も殲滅できる可能性は十分あり得るだろう。が、なにぶん体力的にも限界はある。恐らくはマシユハドハイヴ一つを潰すのが限度か、というのが私の見解だ」

「ま、敵は雑魚でも数が数だからねえ。流星にガメラもしんどいでしょう、つていう見解なわけよ。とはいってももう残ってるハイヴはどれもこれもそんなものばかりなんだけどね」

夕呼の言葉通り、現状地球上に残存しているハイヴはどれもフェイズ4越えのものばかり。如何に敵が単体では雑魚であったとしてもそれが何万何十万もの群れで押し寄せてくるのだから流星のガメラでもたまったものではないだろう。負けはしないだろうが流星に少なからず消耗することは避けられないだろうからこれからハイヴ殲滅のペースも落ちていくだろう、それがラダビノツド司令及び夕呼の予想であった。

「…ガメラ深度100メートルの地点から浮上速度上昇！海面まで残り90、50、10……、ガメラ海面に出ます!!」

「さて、いよいよショーの時間ね♪」

正面のモニター、そこに映された一面の大海原を割って出現する巨大な黒い影、ガメラの姿に夕呼は童女のような無邪気な笑顔を、ラダビノツド司令と武、純夏は一様に表情を引き締めて正面のメインモニ

ターへと視線を集中させた。

これから始まる戦いを、一瞬たりとも見逃さないとしてもいうかのよう……。

???  
SIDE

同じ頃、アメリカ某所、一般に市販されている地図には載せられてはいないとある軍事施設。

一見すると民間の施設にすら見えるその一室、学校の教室ほどの広さをもつその一室のモニターには、海上へと飛び出す一体の巨大な怪獣の姿が映されている。

「…カメラ、インド洋沖より再び出現、そのまま飛行を開始」

オペレーターらしきアメリカ軍制服を纏った一人の青年が淡々とした声音で状況を口にする。この一室には彼以外にも十数名のオペレーターが端末に向かい作業をしている。そして、部屋の奥では一人の浅黒く日に焼けた肌の壮年の佐官らしき地位の軍人がジツとモニターを睨みつけて立っている。

「…進路は」

「距離的にはH2マシユハドハイヴと思われます。この速度でいけばあと20数分ほどで到着する模様と考えられます」

「……そうか」

オペレーターの報告にただそれだけ言ってその男は両腕を組んのまま黙りこくる。そんな彼の反応にオペレーターはどことなく不安げ無表情で一度彼へと振り返るが、やがて思い直した様子で端末へと向かい、それと同時に背後の彼へと声をかける。

「あの……、大佐、どうしても、やらなければならぬのでしょ……」

「……」

オペレーターに大佐と呼ばれた男はオペレーターの声が聞こえたのか聞こえていないのかモニターから視線を外さぬまま沈黙を返す。そんな彼の反応に構わずオペレーターは続ける。



「私には、私には理解できません…。あの怪獣は我が国に何ら不利益をもたらしたわけでも、被害を及ぼしたわけでもない。むしろBETAの脅威を取り除いてくれているというのに、それを何で…」

「…上からの命令だ。俺達はただ黙って従えばいいだけだ」

オペレーターの問題掛けに、大佐の言葉はあまりにも素っ気ない。まるでどうでもいいかのように切って捨てる。その口調には一切の感情も籠っていない。

「…!!ですが大佐!!ガメラが解放した国には貴方の故郷も…!!」

「…作戦は予定通り実行する。ガメラが目標地点に到達したときが、狙い目だ」

「大佐…!!」

激昂して叫ぶオペレーターの声を聞き流しながら、大佐は仰ぎ見るようにモニターを、そこに映されているガメラの姿を見やる。そして、その姿を眺めながらまるで独り言でも呟くようにポツリと一言、口を開く

「軍人というのは、いつだって国の為に動くものだ。…それが、たとえ胸糞悪いものであっても、な」

その表情は相変わらず無表情、だが、どことなく苦々しげな感情をほんの僅かに、声に滲ませていた。

### 横浜基地SIDE

ガメラ出現から約2時間が経過、ガメラはH2マシユハドハイヴへと到達し、ハイヴを守護するBETAの軍勢との戦闘を繰り広げている。

戦況は一進一退、以前どちらが優位とは言えない状況ではある。

無論ガメラの火力、戦闘力は圧倒的だ。ハイヴから湧き出る何千、何万ものBETAをその巨体、火球を用いて一息に薙ぎ倒しており、その影響でハイヴの周囲は既に炎に覆われた焼け野原と化している。だが、ハイヴから湧き出るBETAはそんなことはもはや知った事ではないといわんばかりに次から次へと出現し、その物量にものを言わ

せてガメラを押し潰さんと迫ってくる。それをガメラは一掃する……、その繰り返し。

「……飽きないわねえBETAも。もう5回は同じ事やってるわよ？ 一体どれくらい死んだのかしらねえ」

そう呟きながら夕呼は手に持ったサンドイッチを口に運ぶ。その隣では武と純夏もモニターの映像を眺めながら夕呼と同じくサンドイッチを食べている。三人の近くには折り畳み式の机が置かれ、その上にはサンドイッチが盛りつけられた皿が置かれている。これは今回の戦闘が長期戦になるであろうと判断したラダビノツド司令が朝食として用意したものである。

一方ラダビノツド司令は紙コップに入ったコーヒーを啜りながら厳しい表情でモニターを見ている。歴戦の軍人である彼にとって、今日の目の状況は到底樂觀視できるような状況ではない。

「連中に飽きるという概念があるかどうかはわからんが……。とはいえこれはこれでいい状況とはいえんな……。万一この大群に時間稼ぎをされている隙に他のハイヴから増援が送られてくるような事があれば……。あるいはそれを意図してやっているのかもしれない」

「で、でもガメラさん今までだって何十万のBETAをやっつけていたじゃないですか!!き、きつと今回だって……」

「ああ、このハイヴのみの軍勢ならば可能性は充分あるだろう。だが、この近隣のハイヴ、例えば……カシュガルからの増援が押し寄せてきたら、多数のBETAとの戦闘で消耗したガメラに勝機があるかと言われれば……」

既にガメラは二十万以上ものBETAを灰燼に帰している。横浜や佐渡島といったレベルのハイヴならば既に空になっただけである。数々のBETAを屠っているのだ。にもかかわらずBETAの軍勢は衰える事を知らない。無論今のガメラはフェイズ3以上のハイヴを二つ陥落させるほどの体力と力をもつ。そう簡単にスタミナ切れはしないだろうがマシユハドハイヴ内のBETAを一掃する前に近隣のハイヴからBETAの増援が来ようものなら……。

ラダビノツド司令の言わんとしている事を理解した武と純夏の表

情が一瞬で蒼褪める。

「そ、そんな……、な、何かガメラが勝つ方法とかは!？」

武の切羽詰まった声、ガメラの、自分達の命を救った恩人がBETAに敗北するかもしれないという言葉に反応して食ってかかる武に、ラダビノッド司令は特に咎める事もせず、コーヒーを一口啜りながら、視線をモニターへと戻す。

「手段はある。それは……本丸であるマシユハドハイヴ、その最深部に存在する『反応炉』を破壊することだ。あれはBETAが活動の為に必要なエネルギーを供給するリアクターの一種、あれを破壊されればマシユハドハイヴはその機能を失い『陥落する』。そうすればBETAはハイヴを捨てて他の近隣のハイヴへと逃げ延びざるを得まい。逆転の可能性は十分あり得る」

通常BETAは、己の巢であるハイヴを中心として行動している。ハイヴの深奥に存在する反応炉はBETAのエネルギーであるG元素を生成、供給する機能を持ち、これが破壊されたならばそのハイヴの機能は事実上停止、すなわち『死ぬ』事となる。機能を停止したハイヴにBETAがいつまでも固執するはずがない。すぐさま別の場所にハイヴを建設するか、既に存在するハイヴへと逃げ延びるかの二択であろう。

最も今の今まで人類がハイヴを殲滅したという話は全く無い為、殆ど推測でしかないのだが、BETAの修正を考えれば十分にあり得る話であろう。

「……最もガメラは今のところ全ての戦闘で必ずBETAを一掃してからハイヴに攻め込んでいる。……果たして今回はどう出るか……」

「今まではBETAを一掃してからハイヴを殲滅していましたがね。果たして今回はどうなる事か……」

そんな事を言いながらも楽しげに口を釣り上げる夕呼。相も変わらず画面は爆発と地響きが響き渡り、無数のBETAが肉片、あるいは消し炭と化して宙へと舞い踊る地獄絵図……。その中で繰り広げられるBETAとガメラの戦いをモニタールームにいる面々はただ見守り続けた。

## ガメラSIDE

一方その頃ガメラは、いつまで経っても全く減る気配の無いBETAの群れとの戦闘にいい加減うんざりし始めていた。

『グルオオオオオオオオオオオオアアアアアアアアアアア!!』

裂帛の咆哮と共に放たれる火球がBETAを纏めて吹き飛ばし、まるで波のように押し寄せる群れへと風穴をあける。が、直ぐに別の一団が隙間へと入り込んで穴を埋めてしまう。一体何度目撃したであろうその光景にガメラは心の中で悪態をついた。

『クソッ! 相変わらず数ばかりはアホみたいに多いな!! もうこれで何体目だ!?!』

『おおよそだが先程ので合計60万體以上はいったはずだ。先日陥落させたポールハイヴの収容BETA数は既に越えているな』

『…流星は地球第二のハイヴ、BETAの収容量も半端じゃないってことか…』

ガメラ、シロガネタケルは脳内でオリジナルガメラと会話しながらも目の前に群がるBETAを次々と蹴散らしていく。

もう既にフェイズ1、2どころか3、4のハイヴでも空になっても可笑しくない数のBETAを叩き潰しているはずなのに一向にBETAの数が減る様子が無い。やはりH2、地球上で2番目に建設されたハイヴであるからその規模もまた桁外れということだろうか、ガメラは苦々しげに唸り声を上げる。

『…仕方がねえ…。こうなったら本丸を直接攻める!! 反応炉を吹き飛ばして内部のBETAを一匹残らず引きずり出して叩くぞ!!』

『…やむを得んか。このまま戦っても我らはじり貪、下手に時間を稼がれては連中がいかなる手段を講じてくるかわかったものではないからな』

本来ならばBETAは可能な限り全滅させてしまいたい。万が一一体でも生き残らせてハイヴに帰還されでもしたらガメラの情報がオリジナルハイヴにまで伝わりかねない。無論その程度で負ける気はしないが万が一、ということもある。

しかしこのままハイヴからあふれる雑魚共を相手にしていても正直言つて埒が明かないのは事実。このまま無駄に体力を消耗するよりもハイヴの中核である反応炉を吹き飛ばし、ハイヴ内部から追い出されたBETAを叩き潰していくのが得策であるとガメラは判断した。

ガメラはジェットを噴射して空高く舞い上がるとハイヴモニUMENTめがけてプラズマ火球を3発発射する。連続で放たれた火球は逸れる事無くモニUMENTへと衝突、爆発とともに金属の建造物を粉微塵に吹き飛ばした。

ガメラは咆哮を上げながら破壊されたモニUMENTにぽつかりと開けられた穴目掛けて身を投じる。途中光線属種がレーザーで応戦してきたがそんなものでガメラの進撃を止められはしない。

穴から主縦坑へと侵入したガメラはそのままジェットで最深部の大広間へと降下していく。が、流星にフェイズ5の規模を誇るハイヴ、ジェットを吹かしているというのに中々最深部までたどり着かない。だが、幾度もハイヴを撃滅したガメラには分かる。この先には間違いなく反応炉が、それが存在する大広間があると…。

降下から約3分、ついにガメラの目は青白く点滅する物体を視認した。

…間違いないッ!!

ガメラは降下しながら口内でチャージされていたプラズマ火球、ハイ・プラズマを眼下の反応炉めがけて発射した。

それと時を同じくして……。

「ガメラ、ハイヴモニUMENTを破壊!!ハイヴ反応炉へと攻撃を仕掛けます!!」

アメリカ某所の基地の一室にてオペレーターの声が響き渡る。彼の視線は背後に立つ大佐へと向けられている。否、彼だけでは無い。室内にいるすべての人間の視線が彼へと向けられていた。まるで、彼の次の言葉を待つように…。

壁に寄りかかり腕を組んでいた大佐は、オペレーターの報告を聞く



1998年12月12日、マシユハドハイヴに二発のG弾が投下、マシユハドハイヴ、陥落。同時にハイヴ周囲に重大な重力偏重が発生。

ガメラ、G弾投下と共に消息不明。G弾の影響で消滅した可能性あり。

## エピローグ 舞台は移り…

その瞬間のモニタールームはまるで時間が静止したかのような静けさであった。いつもならばガメラによるハイヴ殲滅が完了した瞬間、スタッフ一同歓声を上げるなり万歳三唱するなりして大いに賑わうであろう瞬間、普段ならばスタッフのそのような態度を窘めるなり眉根をひそめるであろうラダビノツド司令もまたそれを黙認し、夕呼は炎上するハイヴを見ながら悦に浸る……、それが常日頃この場における日常的な光景であったはず。

だが今回は違う、その場にいた全員がモニターを、そこで起きている光景を見て愕然とし、声も出せず指一本動かす事も出来ずにいたのだ。それはラダビノツド司令、夕呼、そしてこの場に招かれている武と純夏もまた同じであった。

否、ただ一人武はわずかに他とは違う表情を浮かべている。そこに浮かんでいるのは恐怖、あるいは怯え。まるで己の記憶の奥に刻まれた恐怖、その記憶にある光景を現実に見ているかのように怯えた表情で体をわずかに震わせていたのだ。

遡る事僅か10数分ほど前、ガメラは相も変わらずマシユハドハイヴからわきだす無尽蔵ともいえるBETAを次から次へと蹴散らし続けていた、が、いい加減にうっとおしくなってきたのか、あるいは早急に決着をつけるためかガメラは突如空中へと飛翔してハイヴモニュメントを破壊、その内部へと飛び込んだ。

恐らくはハイヴ最深部に存在する反応炉を破壊するつもりなのだろう、これで此処も攻略か…、モニタールームのスタッフ全員にそんな空気が広がる。

その瞬間だった。スタッフの一人がハイヴめがけて高速で落下する二つの物体を発見、不審に思いながらもラダビノツド司令と夕呼へと報告しようとした、が……。

突然空から降下した二つの物体がハイヴの十数メートル上空で突如として炸裂、幕臣地点から巨大なフィールドが半円状に広がってい



き大地を、そしてそこを這う残存したBETAを次々と飲み込んでいく。フィールドに飲み込まれたBETAは一瞬のうちに、それこそまるで最初からそこに存在しなかったかのように消滅していく。それは爆発した物体の真下にあったモニュメントも例外ではなく、まるで砂上の楼閣か、はたまた蜃気楼のごとく微小な粒子と化して消滅していく…。

やがてフィールドが半径10kmにまで達した瞬間、フィールドは突如として消失、マシユハドハイヴが存在していたそこは、見渡す限りの荒野、文字通り生物や植物どころかBETAすらも存在しない荒野へと変貌していた。ただ、ハイヴが存在した名残りとして、地面に転々と空いた穴と、その何倍もの大きさを誇る巨大な空洞のみがそこに残されているのみであった。

あまりにも突然の出来事にモニタールームの空気は凍りついた。が、数秒後、モニタールームは一瞬でハチの巣をつついたような騒ぎとなった。

「お、おい!! 一体何が起きたって言うんだ!!」

「わ、私にも分かりませんよそんなの!! ただ突然降ってきた落下物が爆発して…」

「そんなことは分かっている!! 聞きたいのはその落下物が何なのかとカメラがどうなったかってことだ!!」

「そんなことまだ調べてないんだから知りようも無いじゃないですか!!」

室内ではそのような言葉が飛び交い、モニタールームは混乱の極みに達していた。それは無理もあるまい。カメラによるハイヴ陥落が確かかと思った矢先に突如として空から降下してきた爆弾、らしき物体が炸裂、そのまま地上のBETAをハイヴモニュメントもろとも消滅させた…、瓢箪から駒、等というレベルでは無い。

あの爆弾らしき降下物体は何なのか、もしも仮にあれが兵器とするなら一体何なのか、そして爆弾直下にいたであろうカメラは一体どうなったのか…、等々の言動があちこちで飛び交っている。

「静粛に!! 諸君、落ち着け!! このようなときこそ冷静さを保ち事にあ

たれ!!まずは現在のマシユハドハイヴ周辺の状況確認だ!!急げ!!」

大声が飛び交うモニタールームにラダビノツド司令の怒鳴り声が木霊する。このまま騒いでいても罫が明かない、まずは一体何が起きたのか、あの爆弾らしきものが落ちた爆心地がどうなっているのかの情報をかき集めるのが先決だ、ラダビノツド司令はそう判断してスタツフへと大声で指示を飛ばす。最初うろたえていたオペレーター達もやがて僅かながら冷静さを取り戻して手元の端末へと向かい始める。それ以外のスタツフも急いで己の持ち場へと戻り始めていた。

騒ぎが収まり、ラダビノツド司令は安堵の溜息を吐きだした。そんなラダビノツド司令を冷やかすかのように夕呼は軽く口笛を吹く。

「流石は司令、お見事な手腕ですわ」

「この程度で見事といわれてもな。それはそうと香月博士、まさかと思うがあれは…」

「ええ、間違いなくG弾でしょうね」

夕呼は瞬時に表情を引き締めると、モニターへと鋭い視線を向ける。まるで己の長年の怨敵を睨みつけるかのように…。

G弾、正式名称五次元効果爆弾。BETA由来の元素であるG元素、その一種であるグレイ・イレブンを燃料として稼働する重力制御機関、ムアコック・レヒテ機関を利用した新型の爆弾であり、ムアコック・レヒテ機関内のグレイ・イレブンをあえて制御させずに暴走させることによって核兵器以上の破壊力を誇る兵器として運用する思想の下に製造された兵器、いふなれば制御装置が存在しない簡易ムアコック・レヒテ機関とも言うべき代物である。

ムアコック・レヒテ機関の臨界制御解放後、爆心地を中心に多重乱数重力効果域、すなわちラザフォード場はグレイ・イレブン反応消失まで展開を続ける。このラザフォード場の境界面に接触した物体は重力変差によってスパゲッティ化を引き起こし、崩壊する。それだけではなくラザフォード場内部ではナノレベルで重力が無秩序な方向に同時発生、ありとあらゆる質量を持つ物体は原子・分子レベルで壊滅、分解されてしまう。

しかもラザフォード場はG弾降下と同時に展開されるため、光線属

種のレーザーによる迎撃すらも寄せ付けない。まさに迎撃不可能と  
いってもいい兵器であるのだ。

最もいい点ばかりではなく、G弾を投下された被爆跡地では半永久  
的な重力異常が発生し、植生の回復する事のない不毛の大地と化すと  
いう欠点もあり、さらにG弾をもしも複数使用した場合には地球環  
境、否、地球そのものにいかなる影響を及ぼすか分からない。

元々この兵器はアサバスカに降下したBETAの落着ユニットを  
殲滅した際にその残骸から入手したG元素を用いてアメリカがムア  
コック・レヒテ機関開発の技術をスピンオフした結果の産物であり、  
アメリカが推進しようとしているオルタネイティヴ5、それはこのG  
弾を用いた地球上の全ハイヴ殲滅計画である。

当然夕呼とラダビノッド司令もそれについては承知している。無  
論G弾の性能とリスクについても全てではないにしろ大まかな事は  
知っている。だからこそオルタネイティヴ5は危険であると判断し  
ており、オルタネイティヴ4を推し進めているのだが。

先程モニター越しに映されたエフェクト、あれがもしもG弾による  
ものだとすれば…。

「……アメリカめ…、一体何が目的で…」

「そこまでは何とも…、とはいえ、おおよその予想はつきませんが」

隣で目を見開いてモニターを凝視する武へとチラリと視線を向け  
ながら、夕呼はポツリと呟いた。

鎧衣から入手した『明星作戦』の概要書、そして今回のG弾投下、そ  
れから察するにアメリカがマシユハドへとG弾を投下した理由は恐  
らく二つ。

G弾の威力実験、そしてガメラの排除であろう。

元来は日本の横浜、あるいは佐渡島に投下するはずだったG弾で  
あったがその二つは既にガメラによって殲滅されている。それだけ  
ではなくこの短期間の間に東ユーラシアのハイヴは全てガメラに  
よって殲滅させられてしまっているのだ。このままではガメラに  
よって全てのハイヴは殲滅され、G弾の実験どころかG弾の存在理由  
そのものが失われかねない。元々G弾はハイヴを殲滅するための決

戦兵器という触れ込みで開発されたものの、その威力と汚染のリスクを一部では危険視されていた。もしもガメラによつてハイヴ全てを破壊されようものなら、アメリカどころか世界中で『G弾脅威論』、あるいは『G弾不要論』が巻き起こりかねない。

そうなればオルタネイティヴ5は事実上凍結、廃案とされることは間違いない。一部の反オルタネイティヴ4派にとつてはオルタネイティヴ4自体も廃案になる可能性があるため痛くもかゆくもないかもしれないが、アメリカのオルタネイティヴ5推進派からすれば痛いなどというレベルでは済まない。

こうなつたら残された手は一つ、G弾の実験にかこつけてガメラを消してしまうことだ。

無論他国に通告も無しでG弾を使った以上何らかの批難やらを受ける可能性は無きにしも非ず、むしろガメラによる本土回復を期待していたであろう欧州連合やソ連からは非難轟々となるであろうがそんなものはG弾で脅しつけてしまえばどうとでもなる。

ガメラさえ居なくなればオルタネイティヴ計画が廃止される恐れは無くなり、今のところ完成の目処が立たないオルタネイティヴ4への牽制にもつながる、まさにオルタネイティヴ5からすれば一石二鳥にもなる話なのだ。

「てなところでしようよ、ねえ、白銀？」

「……」

「た、武ちゃん？」

話を振られた武は、何も答えずにモニターに広がる一面の荒野を睨みつける。

それはまさしく己が夢で観たもの、オルタネイティヴ5が実行され、世界が大変動を起こして崩壊した世界、そこに広がる光景にひどく酷似していた。

そして目にしたG弾の炸裂する光景、それはあの時の、移民船が宇宙へ飛び立ち人類がBETAと最後の戦いを挑む時の光景を思い出させて…。

唇を血が滲むほど噛みしめ、武は反射的に夕呼へと視線を向ける。

「……副司令、ガメラは!? ガメラはどうなつて……」

掴みかかろうとするかのように夕呼へ詰め寄る武、そんな彼を夕呼は無言で制しながら夕呼は視線を武からモニターへと戻す。

「……まだ分からないわ。でもG弾は質量のある物質であれば何であれナノレベルにまで破壊する現状存在しうる兵器の中でもトップクラスともいうべき破壊力を持ち合わせている。普通に考えたらたとえガメラでも生きてはいない、そう考えるでしょうね……」

「……!!そ、それじゃあ……」

「でもね」

武の叫びを遮りながら、夕呼は再び武へと顔を向ける。その表情は自信に満ちた、そしてどこことなく武を安心させるかのような微笑みが浮かんでいる。

「あの怪物が、ただでさえ非常識の塊であるあの怪物が高々BETAの技術使つて造つただけの爆弾二発で死ぬと思うかしら? 10のハイヴを二週間足らずで薙ぎ払つたあの化け物がそんな程度でくたばるタマかしら? 私はあえてノー、というわ。」

あんな程度でガメラは死なない、必ず生きているに違いない、少なくとも私はそう信じている、それだけは言っておくわ」

「副司令……」 「副司令さん……」

「だから、アンタ達も信じなさいな。仮にも天才だ何だと持て囃された私が言う言葉よ? いくらかは信憑性があるでしょ?」

「……はい」「そう、ですよね……。ガメラさんは、そう簡単に負けたりしないですもんね!」

二人の反応に夕呼は満足げに「そうそう、それでいいのよ」と笑顔で返すと、先程とは表情を一変、獲物を品定めする肉食獣か何かのような凄惨な表情を浮かべながらモニターの、正確にはモニターの横に映された世界地図へと視線を向ける。彼女の視線が向けられる先はBETA大戦ぼつ発以降、一度たりともBETAの進行を受けなかった大陸、そしてG弾の製造国であり、今回の事件の黒幕である超大国、アメリカ合衆国……。

「にしてもまあ、アメリカさんも随分と余計な事をしてくれたもの

ねえ……。はてさてこれから連中はどう動く事か……」

「恐らくは我々への牽制だろうな。まあ最初は他国からの批判の牽制だろうが……。此処まで大規模なデモンストレーションをしたのだ、あしらうことも難儀ではあるまい」

ラダビノツド司令の言葉に、夕呼も黙って頷いた。BETAの居城であるハイヴを殲滅した兵器、それだけでも十分であろうがそこにガメラすらも屠った兵器という箔が付いたのならば、よしんばソ連や欧州連合が非難を浴びせてきたとしても黙らせることが可能であろう。それどころか上手くいけば今のオルタネイティブ計画を強引に第五計画に移行する事も出来るかもしれない。空想的な絵にかいた餅である00ユニットよりも現実に威力を示したG弾を選ぶであろう……。少なくともアメリカはそう考えているようだ。

「…随分と能天気な事、もう既に第四計画は始まっているつていうのに、ですよね司令?」

「うむ、今は天狗になっっているだろうがもし知ったらどうという顔をする事、か…。最も知らせる気はないがな」

「ええ、精々私の楽しみを台無しにしてくれた落し前は、たつぷりとつけさせてもらいますわ♪フフフフフフ……」

まさに魔女といった表情で笑う夕呼、そんな彼女を横目で見ながらラダビノツド司令は、今回に限ってはアメリカに対して全く同情の念を抱かなかつた。

「そもそも魔女の逆鱗に触れたのはアメリカ自身、それに、己の故郷を救ってくれた恩人を害され、ラダビノツド司令の腸もまた盛大に煮えくり返っていたのだから……」

#### 合衆国SIDE

「それで、作戦の結果はどうなった?簡潔にでいい、説明を」

此処はアメリカ中央情報局、通称CIAのバージニア州マクレーンに置かれた本部。アメリカ合衆国が対外諜報戦の為に設けた情報機関であり、オルタネイティブ第四計画に対する予備計画、オルタネイティブ5その急進派の中核とも言える場所。

そのとある一室にてCIA局員の報告を促す一人の男、CIA現長官にしてオルタネイティブ5急進派の代表、ジョージ・J・ケーシー長官は眼前に立つ部下へと発言を促すような視線を送っている。まだ若さの残る局員は長官の視線にうろたえながらも粛々と言葉を紡ぎ始める。

「…マシユハドハイヴはモニュメントは消滅、地上に展開していたBETAは全滅、ハイヴ内部、及び地下へと潜っていたBETAに関してはいまだ不明ですが恐らく全滅したものと…」

「そうか。……ガメラの方はどうなった？」

局員はケーシー長官の口から放たれた言葉に一瞬迷うかのよう口ごもったが、直ぐに恐る恐るといった様子で返答を返す。

「が、ガメラに関してましては現状不明とのことです。遺体どころか血液等の痕跡も未発見ですが脱出した様子も無いことからG弾の影響で消滅したものかと…」

「フム、まあいいだろう。大体は成功、というわけか…」

部下の報告にケーシー長官は特に喜んだ様子も気分を害した様子もなく平静な態度で返す。まるでこの結果そのものが予期できたものであるとでもいうかのような態度であった。

「ですが、マシユハドハイヴ周辺にはG弾の影響と思われる深刻な重力変差が起きているとか…。マシユハドハイヴ中心から数十キロの植生はほぼ全滅、半永久的に死の土地となる、と予想されています」  
「そうか……、やはりまだ試作品、未だに改良の余地は多く残されている、か…」

部下が付け加えた言葉に長官はあごに手を当てて考える。

G元素は未知の元素、研究はある程度進んではいるもののそれでもまだ未知の部分が多い。今回の投下実験で示されたG弾のリスクも既に開発段階である程度は推測できていたものではあったが、未だに有効な解決策は練れずにいる。

今回の投下実験ではそれが如実に示された。これをどうにかしない限り反対派の意見も完全には抑え込めまい、ケーシー長官はそう考える。

「とにかく、G弾をそのまま使用するのはいささか問題があるかと…」

「分かっている。エリア51の連中には私から念を押しておく。どれだけ金がかかってもかまわんからG弾をより安全性の高い兵器とするように、とな」

「ハ、ですがG元素は未だに未知の部分が多い物質、果たして改良がどこまで成し得るか…」

部下の自信なげな言動に、長官はわずかに眉をひそめるが、何も言わずに聞き流す。表向きではあるがG弾は核兵器とは違い、クリーンな兵器という題目で通している。故に完全にとはいかないまでもリスクは減らしておくに越したことは無い。最も上層部の連中は恐らくそんなものに構わず量産しろなどと無茶を言ってくるのだろうか。

「で、マシユハドハイヴの反応炉は？」

「それが…：ガメラが死に際に発射した火球によって反応炉は破壊され、G元素に關しましてももはや残さず焼き払われているもの…」

「…まあいい。所詮はついでだ。始めから期待はしていなかった」  
そこまで部下への質問を終えたケーシー長官は背もたれにもたれながら軽く溜息を吐いた。そこには目的を果たした、やるべき事をなしたという達成感はない。元より己はオルタネイティヴ5派ではあるもののあくまで優先すべきはアメリカの国益と人類の勝利、G弾はその手段でしかないのだ。

現状横浜で進められているオルタネイティヴ4に関する情報はそこまで入ってきてはいない。今のところあの女狐は理論の実証とOユニットの開発までには至っていないようである。無論それが全て真実だと鵜呑みにする気は毛頭ないし、監視と情報収集は継続しているが…。

何にせよこれで国際世論の一部はオルタネイティヴ5へと靡くことになるだろう。いまだ実現の見通しの立たない第四計画よりも、確かな実証を出した第五計画を推進すべきだという人間も少なから



ず出てくる事は間違いない。もはやカメラが消えた以上再び人類の勝利の為にはオルタネイティブ計画を進める以外術は無くなった。

全ては思い通りに進んでいる…、その筈だというのに…。

（何故だ…、何故胸騒ぎがする…。まるで、引いてはいけない引き金を引いてしまったかのような…）

ケーシー長官の心の奥では、何故か妙な不安がわき上がっていた。それはずっと前から、あの時カメラに対してG弾を使うと決定を下した時からずっと胸の奥でくすぶり続けていたものであり、例えるならば開けてはならないパンドラの箱を開いてしまったかのような、そんな不安感が常々彼を苛んでいたのだ。

「…長官？」

「…なんでもない、報告ご苦労だった。下がっていい」

僅かに頭痛を覚えて頭を押さえる上司に部下は心配そうに声をかける、が、ケーシー長官は素っ気なく返答を返して部下に部屋から出るように命じる。

部下が出て行き一人きりになった部屋で、長官は軽く眼がしらを揉む。何が何なのかは分からない、だが、既に賽は投げられた。投げられてしまったのだ。

故にもう後には引けない、このまま我々は進むしかないのだ。長官は己自身にそう言い聞かせる。

後に、己のその決意を、文字通り死ぬほど後悔することになるとは知らずに…。

己の下した決断が、己の為した事実が、己の祖国を、国民を存亡の窮地にまで経たせることになろうとは、彼はこの時、考えもしなかった…。

とある時代、その一地方にて……。

「……あ、流れ星……」

雪に覆われた銀世界で、一人のまだ幼げな少女が夜空に輝く一筋のそれを見つめる。流れる星を見た少女は反射的に両手を組んで、祈りを捧げる。空に輝くその星に、願いを込めて……。

「……お父さんが、無事でありますように……、お仕事がうまくいきますように……」

少女は真摯な祈りを捧げる……。その祈りが届かないものであると、心の中では知りながら……。

そして、空から流れ落ちた星は、ある大地へと落ちる。流れ星の落ちた場所、そこに、“彼”は立っていた。

全身に傷を負い、生々しい緑色の血でその巨体を濡らしながらも、荒涼とした吹雪の吹きすさぶ大地にかの守護神は立っていた。

『グルアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオンンンン!!』

何の因果か、いかなる運命の悪戯か、“彼”は別なる時へと送られていた。今までいた場所とは異なる世界、異なる空気……。だが、それでも彼は感じていた……。元いた世界で幾度たりとも打倒した“奴ら”の気配を……。

“BETA……!!”

此処がいかなる場所であれ、BETAは屠る、そうせねばならない……!!

過去の世界へ降り立った守護神、ガメラはこの世界にて初めて、宣戦布告の咆哮を張り上げた。

荒涼とした大地をガメラは歩を進める。目指す場所はこの大地より北……。

H5 ミンスクハイヴ……。

1978年、己の居た世界よりも過去の大地にて、ガメラは行動を開始した…。

そして、そこから離れた地、未だにBETAの支配の及ばぬ大地、ガメラの降臨に呼応するかのように、永き眠りについていた　「何か」が目覚めようとしていた―。

ガメラの降臨と「それ」の復活…、それらが一体この世界に何をもたらすのか…。知る者は今、この時代には存在しない…。

## 第二章 I s c h w a r z e s m a r k e n | 大 怪獣空中決戦

### プロローグ D e r A n f a n g

人類に敵対的な異星起源生命体、BETA。人類とかの存在との生命の存続を掛けた戦いは、1967年の第一次月面戦争の頃にまで遡る。

圧倒的な物量差と月面という地球からの補給を受ける事が最も困難な場所での戦い等の幾多の人類にとって不利な条件が重なり続け、結果的に人類は月面基地を放棄、月面でのBETAとの初戦闘は敗北という結果に終わった。

しかし、BETAとの戦いはまだ始まりに過ぎなかった。1973年、中華人民共和国新疆ウイグル自治区カシュガルにBETA降着ユニット、後にオリジナルハイヴと呼ばれる物体が月面より飛来。ついに地球におけるBETAと人類との戦争が始まった。

大戦初期はBETAの物量差も関係ない航空爆撃機による絨毯爆撃により人類は優位を保っていた。対空兵力と航空兵力を持たないBETAは航空機を撃墜する事も爆撃を防ぐ事も出来ず、ただ一方的に蹂躪されるのみであった。

この時は人類も、この戦いは直ぐに決着がつく、BETAなど大したことがないと楽観視していた。少なくとも地球上で戦う分には人類の勝利は疑い様がない、と。

が、その勝利への確信は二週間後、新種のBETA光線属種の出現によって突如として崩れ去る事となった。

380 km離れた高度一万m先の飛翔体を的確に捕捉可能、そして一度狙われたならばほぼ100%命中する脅威の命中率を誇るレーザーという武器の前に、人類の航空戦力は一瞬で無力化され、制空権は完全にBETAに奪われる結果となってしまう。

新たな戦力である光線属種、そしてその圧倒的物量で人類を一蹴

したBETAは、ついにカシユガルハイヴから他の地への侵攻を開始した。

倒せども倒せども湧き出るその圧倒的な物量、そしてレーザーによる航空兵力の無力化により、BETAの侵攻を食い止めようと試みた人類軍は次々と敗退、敗走を繰り返し、ついにはBETAによって故郷を、故国をも蹂躪され、食い荒らされる事となった。

そしてBETAは蹂躪、征服した地へとまるで記念碑を建てるかのように己らの拠点である“ハイヴ”を建造していった。

ハイヴ、それはカシユガルへと落下した“オリジナルハイヴ”から始まるBETAの地球侵略の為に前線基地であり、エネルギー補給のための拠点でもある場所、故に人類にとってBETAとの戦いに勝利するためにも必ずや攻略せねばならない場所であった。

だが、ハイヴを守護するBETAの無限とも言うべき肉の城壁、鳥一匹すらも逃しはしないレーザーによる絶対防空能力により、人類は未だにハイヴを何一つ落とす事が出来ずにいる。それ以前に地球外生命体に侵略されつつあるという危機的状況の中、それでもなお国家の利益を追求し一致団結してBETAと戦う事が出来ずにおり、結果として人類はBETAの拠点を落とすどころか逆に奴らの侵攻を止めることすらできずにただただ無駄に犠牲を増やし、国土を蹂躪される憂き目に遭っている。

光線属種によって無力化された航空兵力の補填、そしてハイヴ攻略の為に決戦兵器として開発された戦略歩行戦闘機、通称戦術機もまた、この大戦の行く末を覆すほどの決定的な戦力とはなりえず、BETAの勢力は中東、ソ連西端にまで達し、現在その勢力は欧州へと徐々に徐々に接近しつつあった。

1978年、ソ連領ベラルーシ州、ミンスク。

極寒の吹雪が吹き荒れ、視界が閉ざされるほどの豪雪が降り注ぐそこは、現在人類の存亡をかけた戦場と化していた。

パレオロゴス作戦。1976年に建設されたミンスクハイヴ攻略

の為に北大西洋条約機構（NATO）軍及びワルシャワ条約機構（WTO）軍の合同で行われた人類初のハイヴ攻略を目指した軍事作戦。そもそもミンスクはソ連と欧州を結ぶモスクワ街道の中心に位置する地域であり、この場所にハイヴを築かれるという事はBETAの手が欧州の、それも人口密集地域にまで及ぶということを意味している。

それを危惧したNATO、WTO両軍司令部は東欧州戦線安定化を図るためにミンスクハイヴ排除に向けた一大軍事作戦を立案。西欧州、ウラル以東へと対比させた兵力を再結集させた後に攻勢を開始した。

約二カ月間の戦闘の末、NATO、WTO両軍は各国主力軍の30%近くを損耗しながらもミンスクハイヴ周辺を包囲、作戦の総仕上げであるハイヴの突入を開始した。だが、ソ連空挺軍によるハイヴ強襲降下等幾つもの突入作戦が実行されたものの、そのいずれもが失敗。

膨大な犠牲が出たことを重く見たNATO軍は戦術核によるハイヴモニユメントの破壊、及びBETAの一掃を提案する。が、アサバスカ落着ユニットの残骸よりG元素を入手したアメリカ同様にミンスクハイヴ内のG元素の入手をもくろむソ連首脳部が強硬に抵抗し、結果的に断念。その後ソ連軍第43戦術機甲師団、ヴォールグ連隊がハイヴの突入へと成功するものの、約三時間半で連隊はほぼ壊滅。その後、ハイヴ内から出現した大量のBETAによって戦線は押し返され、今や連合軍の命運は、風前の灯となりつつあった…。

「はあっはあっはあっ……」

「急げ！奴らは既にそこまで来てる！！このままだとBETA共の歯糞にされるぞ！！」

「りよ、了解です…！！」

吹きすさぶ豪雪の中、一人の兵士が息を切らしながら雪原を駆けている。彼だけではない。同じようなBDUを纏った10数名程度の兵士達が必死の表情で雪原を駆けていた。

一番後ろには彼らを指揮する隊長らしき壮年の男が己の前方を走

る兵士達に向かつて叱咤の怒鳴り声を飛ばしている。

彼らはW T O軍に派遣されたポーランド軍の歩兵部隊。包囲網の一角の要塞陣地の守りを担っていた部隊ではあったのだが、包囲網は壊滅、B E T Aと交戦をしていた戦車部隊に戦術機甲部隊も残らずB E T Aの大群へと飲み込まれてしまった。

もはや生き残っているのは彼らのみ。あのままあの場所にいたとしても貧弱な歩兵器しか扱えない己達ではただ無駄にB E T Aに引き潰され、喰われるのみだ。

既に司令部からの退避命令も出ていたことが幸いし、彼らは合流地点へとひたすらに走っていた。背後から迫るB E T Aの追手を振り切りながら…。

その中の兵士の一人、まだ十代程であろう年若い青年兵は、己にとつてただ一つの命綱ともいえるA K—47（カラシニコフ）を、握りつぶさんばかりに握りしめながら必死に雪原を走る。

顔に叩きつけられる雪に、青年兵は思わず目を閉じたいくなる衝動に駆られる。だが、彼は必死に思いとどまる。もし瞼を閉じればあの光景が脳裡へと鮮明に蘇ってくるだろう。

あの地獄が、そう、もはや地獄としか称しようもない凄惨な戦場の光景が。

元々自分達部隊が配置されたのは後方だった。当然だ、戦術機や戦車のように中型、大型B E T Aに碌に対処できない自分達歩兵等前線に出たとしてもお荷物以外の何物でもない。もしも出番があるとするなら此処にまでB E T Aが侵攻してきたときのみ…、だから自分達が連中とやり合うことなどあるまい…。あのときはそんな軽い気持ちであった。

…：…：そう、突如ハイヴから大量に出現したB E T Aによって包囲網が食い破られ、後方へと後退するという決定が出される時までは…。それから、地獄の撤退戦が始まった…。迫りくるB E T A相手に迫撃砲、重機関砲、手榴弾、拳銃はカラシニコフやら拳銃やらまで使つて迎撃し、ひたすら逃げる…。だが、ただでさえ限りある上に戦術機と比較すれば貧弱極まりない装備で無尽蔵ともいえる物量のB E T

Aを抑えきれぬはずもない。前線でBETAを抑え込んでいた人間は勿論の事、己と同じ部隊の連中も、ついさつきまで冗談を言い合っていた自分と同年の新兵達も次々と弾が尽き、傷を負い、抵抗も出来ぬままBETAによって八つ裂きにされ、潰され、喰われていった。今も己の網膜には死んでいく仲間達の姿が焼きつき、鼓膜には戦友達の助けを求める絶叫が、人間の体がBETAに咀嚼されていく生々しい音がこびり付いて離れない…。自分もそうなる、自分も同じように連中に惨たらしく殺されて奴らに喰われる…。自分だけじゃない、今生き延びている連中も、自分達を叱咤している隊長も、みんな、みんな、ただ血と内臓の詰まった肉袋となつて奴らの餌に……!!!

「……………!!」

青年兵は唇を噛みしめる。あまりに強くかみしめた結果唇を噛みきつて血が滲むがそんなものはもはや気にならない。

冗談じゃない…!!こんなところで死んでなるものか!!青年兵の心に僅かに残されていた、人間に限らずあらゆる生物が本能的に持ちうるであろう“生きたい”という根源的な生存本能が心の奥底で湧き上がる。

絶対に、絶対に生き延びる…!!そして、BETA共をぶつ殺してあいつらの仇を…。

絶対にこのクソツタレな地獄から生き延びる、そしてBETAを倒すという誓いを心に刻みこむ彼、だったが……。

「ヒッ、ギャアアアアアアアア!!」「た、助けてく……アアアアアアアアア!!」「き、貴様ら逃げるな……あ、ガアアアアアアアアアアアアアア!!」

突如として背後から響き渡る絶叫、そしてまるで果実が潰されるような音と何かを噛み砕き、咀嚼する音…、それを聞いてしまった瞬間、青年兵は思わず足を止めてしまう。

この音は、未だに耳にこびり付いて離れないこの音は……!!

青年兵は恐る恐る背後を振り向く、その瞬間……!!

「……………!!」

彼は声にならない絶叫を張り上げた。その表情は恐怖で歪んで凍



りつき、目は大きく見開かれたまま瞬きすらできず、目の前で再び繰り広げられる“地獄絵図”を凝視することとなった。

つい先程まで自分と同じく雪原を走っていた兵士達が半狂乱になりながら小銃やら拳銃やらを乱射していた。……いつの間にかその場に出現していたBETA共へと。

何故ここに、いつの間に追いつかれた、そんな疑問が青年兵の脳裏を一瞬よぎるがそんなものは目の前で繰り広げられる光景の前に直ぐに消えうせる。

兵士達の絶叫、次々と鳴り響く銃声、そして体に突き刺さる銃弾を意にも介さず兵士達へと掴みかかり、首を、腕を、足を、上半身を、まるで粘土か何かのように引き千切るBETA……。

そのたびに響き渡る絶叫、悲鳴、そして助けを求める声……、あの時、あの撤退前に見た光景、未だに網膜に焼きついて離れない凄惨な光景、さつきふりはらったはずのじごくえず……。

「あ、ああ……あ……」

青年兵は地面へとへたり込む。もはや彼は限界だった。精神的にも、身体的にも、再び目撃することとなったこの凄惨極まりない光景は、未だ前線に出たばかりのひよつ子である彼の精神の許容量をはるかに超えていた。

股間が生温かい、どうやら失禁したようだ。何かが転がってきて足に当たる、ああ、コレハダレカノアタマカ……？

「あ……ああ……、た、たす、け……」

誰かが此方に手を伸ばしてくる。ああ、見知った顔だ。自分達を率いていた隊長だったな。あまりにも顔が血まみれで分からなかった……。頭の端で彼はそう、まるで他人事のようにぼんやりと考えた。己に向かつて震えながらも延ばされる手、それは突然力なく地面に落ちた。力尽きて落ちたのではない、文字通り地面に落下したのだ。千切れた腕の先端からは血が流れ、純白の雪を深紅に染めていく。

腕から先は、無い。よく見ればBETAが数匹密集して何かを貪り食っている。ああ、ひよつとしたらあれなのだろうな……。

青年兵は手元にあるカラシニコフを構えて発砲するどころか、もは



の前に聳え立っていたのだ。さらにその二本の柱に支えられて何か巨大な岩山の如きゴツゴツとした堅牢なモノが聳え立っている。その真下には踏みつぶされた夥しいBETAの死骸…。

間違いない、BETAは突然出現したコイツによって潰されたのだ。だが、これは一体…。

茫然と目の前に立つ其れを見上げる青年兵。だが、まじまじとそれを眺めていた彼はふとある事に気がついた。

「あれは……血か？」

よく見るとその巨大な何かの彼方此方には大小様々な傷が付いており、そこから緑色の液体らしきものが滲みだしている。それだけではない、その巨大な何かは時折体をゆすりながら唸り声のようなものを上げているのだ。

もしかするとこれは生物、だとするならあの流れる緑の液体はあの生物の血、という事なのだろうか…。

だがこんな巨大な生物、BETA以外には見た事が無い。ならこいつもBETAなのか？無数の傷も攻撃によつて受けたものと仮定すれば説明もつく。しかし……。

「本当に、BETAなのか……？」

ならばなぜこいつはBETAを踏みつぶした？本来同士討ちをすることは決していない筈だというのに……。青年兵は釈然としない面持ちで目の前の巨獣を見上げている、と……。

「……!?な、なんだ!」

突如として彼の周囲、否、怪獣の周囲に猛烈な突風が発生する。まるで怪獣へと集まるかのように吹き荒れる突風に、青年兵は地面に這いつくばって耐えるしかなかった。

その時、ふと視線が巨大な足と足の間、怪獣の向こう側に広がる雪原へと向けられ、青年兵は瞬時に青褪めた。

その先に広がる雪原、それを覆い尽くすかのように広がり蠢く何か。彼にはそれが何か分かった。何故ならそれは、従軍して幾度となく彼にこの世の地獄を見せてきた存在なのだから……。

「BETA…、ウソだろ……何なんだあの数は……」



まったことで青年兵は恐る恐る体を起こした。そして眼前の光景を目にした瞬間、彼は驚愕のあまり目を見開いた。

BETAが、居ない。あれだけ群れをなして押し寄せていたBETAが影も形もない。ただ黒く焼け焦げた大地とそこから立ち上る煙、そして先程の爆発の影響か、空全体を覆っていた黒雲は一部が抉れ、そこから太陽が顔を覗かせている。いつの間にやら吹雪も収まっていた。

『グルアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオンンンンンンン!!!』

呆けた表情で目の前の焼け野原を眺める青年兵をしり目に、怪獣は前へと一歩踏み出すとまるで勝利の雄たけびを上げるかのように高らかな咆哮を張り上げる。と、次の瞬間怪獣の両足から猛烈な勢いで爆風が噴出し始める。

「……!?!」

瞬時に青年兵は両腕で顔を庇う。それと同時に再び周囲は猛烈な熱風に見舞われる。そして熱風がやみ、青年兵が両腕をどけると、目の前には何も存在しなかった。あの巨大な生物の姿は影も形もない。唯一眼前に広がる焼け焦げた大地、そして雪が残らず消し飛ばされて剥き出しとなった地べたのみがその生物が確かにそこにいたという証明であった。

「あれは……、一体……」

地面から立ち上がりながら茫然と立ち尽くす青年兵。先程まで怪獣が立っていた場所へと足を進める。そこには何も無い。先程の爆風で吹き飛ばされたのかBETAの死骸も戦友達の遺体も何も残されてはいない。ただ雪の下にあった剥き出しの土がそこにあるだけであった。

「生き延びた、んだよな……」

立ち止まったその場に膝をつきながら、青年兵は独り言のようにそう呟く。

生き延びた、生き延びてしまった。部隊の中でただ一人、自分一人が生き延びてしまった。他の仲間、皆死んでしまったというのに

…。青年兵の頬を涙が伝い地面に落ちる。

地べたに這いつくばり、一人静かに慟哭する青年兵。だったが、ふと地面に叩きつけた右手が硬い何かに触れた。

ふと視線を手元に落とす青年兵は、右手をどけてその下にあるものを確かめる。

それは、かぎ状の形状をした赤い石。片方の丸く膨らんだ先端にはまるでひもを通すために開けられたかのような穴が開いており、どう考えても自然にできたものとは考えられない。

青年兵は黙って石を拾い上げると、それを空へと翳した。雲の切れ目から差し込む陽光に照らされ、石は赤く鈍い輝きを放つ。

「…俺に、まだ生きろって、ことなのか…」

青年兵の言葉に答えるものは、荒涼とした荒野には誰もいなかった。

その後彼は友軍の兵士の手によって無事救出され、歩兵部隊唯一の“生存者”として生き残った。そして同じ頃、戦線の指揮を取っていたNATO、WTO連合軍司令部にはにわかには信じがたい報告が入っていた。

ミンスクハイヴ、突如内部より爆発炎上。内部に残留していたBETAは全滅、それ以外の外部へ展開していたBETAもまたその殆どが空から降り注ぐ火球に焼かれて謎の消滅をした、と…。

数十万の兵力をもつてしても落とす事が叶わなかったハイヴの突如の陥落、その一報は上層部だけではなく前線で戦う兵士達にまでも波及した。上から下まで大騒ぎする事態の中、ただ一人、あの地獄の戦場からただ一人生還したあの青年兵だけは右手にあの赤い石を握りしめながら冷静さを保っていた。

あの怪獣だ、あの怪獣がやったのだ、と心の中で確信を抱きながら…。

これから世界はどう動いていくのかは分からない。あの怪獣が何だったのか、そもそもなぜBETAを攻撃したのかも全く分からない

い。ただ、一つだけ分かる事はある。

自分は、自分達は救われたのだ、ということに……。

そう、確かに彼は、否、彼をも含む多くの人間は救われた。ミンスクハイヴの陥落によってポーランド崩壊の危機は遠のき、ひとまずの平穩を得る事が出来た。

だが、誰も知らなかった、知ることはなかった。この変化が人類に、そしてこの星に多いなる歪みを、災いを引き起こすことになるという事を、今この場に、この世界に生きている誰もが知ることはなかったのだ……。

バタフライ効果というものがある。遠くの蝶の羽ばたきが、遙か遠くの場合において嵐を、竜巻を引き起こす事がある、すなわちほんの些細な小さな出来事が、後々にとつともなく巨大な現象を引き起こす引き金になるという理論である。

とつともなく小さな揺らぎに、幾つもの偶然が重なった結果、強大な揺らぎを世界へと巻き起こす……、荒唐無稽なようदैて、現実により得てしまうであろう話……。

ならばそれが小さな現象ではなく、より巨大な現象であるならばどうなるだろうか。

未知の巨大怪獣の出現、そしてミンスクハイヴの崩壊……。蝶の羽ばたきとは比べ物にならない程巨大な揺らぎ……。それは竜巻という局地的な現象すら超え、世界の歴史、人類の、そしてこの星の命運そのものにまで影響を与える巨大な渦となりうるのだ……。

そして、"それ"はすでに脈動を始めていた。

この世界には本来存在しないモノ、本来ならば誕生する前にBET Aにより容易く潰されていたはずのモノ……。

人の目につかぬ、暗鬱とした穴倉の中で、永い永い時の中で"それ

“は目覚めの時を待ち続けていた。

全ては“奴”を殺す為に―。

この世の生命全てを貪り尽くす為に―。

そして今、その時がやってきた…。

こうして、狂いに狂った運命の針は回り始める。

暗い暗い闇の中、そこに眠る幾つもの“卵”が揺れ、ひび割れ、”

奴ら”がそのおぞましい姿をこの世にさらけ出す。

『ギイ……、ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

全ての文明を滅ぼす為に、全ての生命を食らう為に創り出された”

禍の影”は、この混迷の世界で今高らかに産声を上げた…。



# 第1話 Der Ausbruch des Kr ieges—開戦—

『うう……、畜生……、体が痛い、力が抜ける……、飛んでるだけで骨が折れ、いやもう粉々になる。つーかもう飛んでるのも辛い……』

『我慢したまえ、そもそも私は早々に海に潜って回復するように勧めたはずだ。それを君は無理をしてハイヴ殲滅などやらかすなど……、重傷を負いながら戦闘をしたのだ、自業自得だろう？』

『そ、そりゃ、そうだけど……』

ミンスクハイヴを殲滅後、巨大怪獣、ガメラは円盤のように回転しながら吹雪吹き荒れる天空を飛行していた。だが、その身に負った甚大なダメージは未だに癒されてはおらず、時折空で危なげにふらつき、挙句転落しそうになっている。

無理もない。既に重傷を負っているみにも拘らず何万もの数のBETA、そしてフェイス2とはいえハイヴの殲滅を行ったのだ。この世の生命体の中でも屈指の頑健さを誇る怪獣の体といえども何とも無い方がおかしい。現在のガメラの体力とダメージは限界を越えている。本当ならばすぐにでも休眠に入って体を癒さなければならぬレベルである。

『畜生……、あのG弾間違いないくアメリカだろうけど、まさかあんなときに撃ってくるなんて……』

『……君の記憶で観てはいたが予想以上の威力ではあるな、だが同時にあれは危険だ。成程、地球が瀕死となるも無理もない話だ』

『ん、まああれは副作用で重力異常起こさせるから当然っちゃ当然なんだが……』

元々G弾はありとあらゆる質量をもつ物質をナノレベルにまで分解する兵器、事実上この兵器で破壊できない物質はこの地球上には存在しないと言える。直撃では無いにしてもそんなものを喰らって生きていくだけでもガメラの生命力、というより頑丈さはずば抜けてい

ると言えるだろう。

だがそれだけの破壊力を誇るがゆえに高いリスクも持っている。爆心地では長期的に重力異常が発生し、半永久的に植生は全滅する。そして万が一にもG弾を集中使用してしまおうものならば、地球そのものの重力までもに異常が発生しかねないのだ。

現にオルタネイティヴ4が失敗した後に発動したオルタネイティヴ5、G弾集中使用による世界中のハイヴ殲滅を目的とするバビロン作戦の後、地球は重力異常の影響で世界中で大津波が発生し多くの大陸が飲み込まれ、海洋は消失、かつて海であった場所は塩の大地と化すこととなり、地球はほぼ死の星と化してしまった。

そんなものを喰らってさらにハイヴでの戦闘まで行った結果ガメラの体は満身創痍、甲羅はひび割れ牙もへし折れ、全身の大小の傷からは濃緑の血が流れ落ちていく。これ以上の戦闘はもはや不可能、今直ぐにでも休息を必要とする状態にまでなっていた。

『しかし、アメリカもなに考えてやがるんだ!!よりによって陥落しかけのハイヴにG弾落としやがって!!』というか明らかに俺を狙ってただろうがアレ!!』

『大方我々にハイヴを殲滅されては例のオルタネイティヴ5とやらが実行できなくなる、とでも考えたのであろう。…やれやれ、それが結果的に自分の、否、己達の故国の首を絞める事になるとまだ気がつかんのか……』

『……戻った時はあの国に一度殴りこみかけたほうがいいかもな……。ついでにG弾も粉微塵に吹っ飛ばす!!』

『後者は賛成だが前者は反対だ。無益な殺生はするものではない。後悔することになるぞ、私のように』

最後に含むような一言を添えてタケルを窘めるオリジナルガメラ。最も彼とてタケルの気持ち分からないわけではない、否、寧ろ良く分かるのだ。

G弾をガメラへと投下した張本人、それは間違いなくアメリカだろう。と、いうよりもタケルもオリジナルガメラもG弾の製造元でありオルタネイティヴ5提唱国でもある以外に犯人の姿が思い浮かばな

い。

大方目的はオリジナルガメラの言った通り己が第五計画の邪魔になったからわざわざG弾持ってきてマシユハドハイヴもろとも消し飛ばそうとしたのだろう。最もその目論見から外れて自分はこうして生きているのだが。

『しかし……一体何がどうなってるんだ……？こんな場所今まで見たこともないし、なによりハイヴの数が少ないなんて……』

『ああ、我々が今まで攻略したハイヴが存在しない。否、建立された痕跡どころかBETAが侵攻した痕跡すらもない。まるで、未だにBETAがそこに侵攻していないかのような』

『……訳が分からん……。まさか過去の世界にタイムスリップしたなんて落ちじゃあないだろうな……、オイ……』

ガメラはグルル……と悩ましげに唸り声を上げる。確かにG元素は未知の元素、重力だけではなく並行世界にまで干渉するというとつもない代物だ。ならば過去に遡る、時間にまで干渉するG元素があったとしてもおかしくはないだろう。仮にそうだとするならば原因はG弾の炸裂かはたまた反応炉のG元素が何らかの反応を起こしたか……。

『……くっこそ、体がガタガタで彼方此方痛くて考えもまとまらねえ……。が、ガメラ、もう潜ってもいいか？眠ってもかまわないか!』  
『……少々待ってくれ、……。フム、この辺りならば深度も十分、そう簡単には発見されまい。タケル、そろそろ潜ってもいいぞ?』

『……やつとか、ようやく休める……』

ガメラは水面すれすれでジェット噴射と回転を停止、そのまま海面へと着水、海の底へと沈んでいく。

全身の傷の痛みが冷たい水に触れるとともに段々と和らいでいく。ガメラは心地良さそうに瞳を細めながら、深い深い、光の届かない海底へと沈んでいく。海の中を沈みながらガメラは脳内でオリジナルガメラとの会話を続ける。

『それで、俺はどれだけ眠ればいい?』

『……何しろG弾による損傷とマナの現象が著しいから……。進化

“をする時間もいれるとなると……、大体4、5年は必要とみてもいいだろう”

『長いな……、寝てる間にBETA共がハイヴを次々と建築するんじゃないのか……?』

『仕方があるまい。この体で奴らと戦いを挑んでも死にに逝くようなものだ。此処は臥薪嘗胆で体を治すしかあるまい』

『……ま、仕方がないな。こうなったらとつと治すためにぐっすり寝るしかないか……』

オリジナルガメラに窘められたガメラ、タケルは不承不承といった様子でグルル……と唸り声を上げながら海の底へ底へと沈んでいく。

やがてガメラの巨体は漆黒の海底へ、底も見通せない、一条の光も届かない暗黒の世界へと沈み、消えていった。

1978年、原因不明の爆発によってミンスクハイヴは爆発炎上、ハイヴ内部に残存していたBETAは全滅し、陸上にて戦闘を行っていたBETAもまたハイヴ爆発と同時に撤退を開始、NATO、WTO連合軍はこれを追撃して9割以上を殲滅。生き残りのBETAは世界中に散らばるハイヴへと逃げ延びたと仮定される。

全くの偶然、否、幸運によってどうにか勝利し、ミンスクを奪還した連合軍ではあったがそこには喜びの声はない。

無理もない。ハイヴが陥落したのも、BETAが殲滅されたのも己達の功績などでは無い。突如引き起こされた正体不明の爆発によるもの、いわば単なる偶然によって掴み取ったものであったのだから。

あの爆発の原因は未だに不明、何らかの新兵器によるものか、あるいはどこかの部隊が突入に成功し、自爆した結果なのか……。方々から意見が出されたものの直ぐに立ち消えとなった。

だが、前線にいた兵士、あるいはBETAの襲撃から生き延びた兵士達からの証言によると、聞いたこともない巨大な咆哮らしき轟音が聞こえた、見たこともない巨大な生物らしきものがBETAを薙ぎ

払っていた等々の報告、証言が方々から出されていた。実際その時期、マツハに近い速度で飛行する飛行物体と思われる円盤らしき何かを空を飛行している姿を何十人も兵士が目撃したという報告が出ていた。

しかし、結局それらは要塞級等の巨大BETAを見間違えた、長時間戦場にいた事による精神的疲労が原因となった幻覚、幻聴ではないかということに落ち着き、次第に忘れ去られていった。

兎にも角にもこうして一先ずの危機を乗り切った欧州ではあったが、ただ一つこの線化に不満を持つ国が存在した。共産主義国家の盟主たる大国、ソ連であった。

元々ソ連の目的はミンスク奪還だけではなく、ハイヴ内に存在するであろうBETA固有の物質、G元素の奪取もまた視野に入っていた。それ故に散々連合軍から要請されていたハイヴへの核攻撃を渋っていたのだ。既に自由主義国の盟主であるアメリカはアサバスカに着陸したBETAユニットの残骸からG元素を回収している、ならば自分もまたそれに乗り遅れてはならない、米国に対抗するためにも、そして自分達が主導する「第三計画」の実現のためにもG元素を手にしなければ……ソ連の上層部はそのような獲らぬ狸の皮算用をしていたのである。

だが結果はご覧のあり様、早々に戦略核を集中投下してハイヴモニメントと地表のBETAを一掃していたのならばまだ話は変わったのかもしれないが、欲を張って切り札を出し渋った結果、ハイヴ内へと突入したソ連第43戦術機甲師団「ヴォールグ」連隊は全滅、ハイヴに展開されていた前線もBETAの大群によって食い破られて崩壊、敗戦一步手前まで追いつめられる羽目になった。

最終的にハイヴはBETAもろとも謎の大爆発によって消し飛んだものの、結果的にG元素を生産、貯蔵していた反応炉は粉微塵に吹き飛ばされ、結局ソ連は本来想定していた量のG元素は手に入らず、精々残骸からスズメの涙程度の量を回収するに留まる事となった。

結局ソ連の第二の目的、G元素の奪取に関してはほぼ失敗に終わったものの、第一の目的、ミンスクハイヴの攻略とモスクワ街道の奪還

による欧州およびソ連へのBETAによる脅威の排除に関しては辛くも成功した。これによって欧州本土へのBETAの侵攻はそしされることとなり、国土をBETAによって蹂躪されるという憂き目にあわずに済んだのである。

この結果に欧州連合首脳の面々は皆揃って胸を撫で下ろしていたが、誰もが心の底から安堵しているわけではなかった。

確かにミンスクハイヴは陥落した、ヨーロッパはひとまずの危機を脱することはできただろう。だが、それはあくまでも一時的なモノ、言うなれば死刑執行の日時が伸びただけの事に過ぎない。

1978年現在、地球上にはH1カシユガルハイヴからH7スルグートハイヴまでの七つのハイヴが存在している。現在H5ミンスクハイヴが崩壊したため6に減ったもののそれでも樂觀を許せるような状況ではない。

現在でもBETAの侵攻は続いている。このままいけば第8第9のハイヴが建設され、再び欧州がBETAの危機にさらされる可能性も十分にあり得る。だからこそ一切気を緩める事は許されない。この地球上から地球外からの侵略者たちを一匹残らず排除するまで一切の気を抜く事は許されないのだ。

だからこそ此処で稼げた時間は貴重ともいえる。ミンスクハイヴの消滅によって欧州からBETAの脅威が遠のいた今こそ、軍備の復興、再編成をし次のBETA侵攻に備えるべき、それは東西問わず欧州首脳の一一致した見解であった。

そして、結果的に彼らの予測は的中する事となった。

BETAの進軍速度は全くと言っていいほど衰えず、それどころかまるで己の巢を一つ潰された鬱憤と数多くの同胞を殺された恨みを晴らすかの如く怒涛の勢いで攻勢を仕掛けてきたのだ。

1981年、H4ヴェリスクハイヴから進撃したBETAはソ連領を迂回、北欧へとなだれ込みフィンランド領ラップ州ロヴァニエミにハイヴを建設開始した。

BETAの脅威はこれだけには留まらなかった。1982年、H3ウラリスクハイヴ、H4ヴェリスクハイヴから出現したBETAの軍

勢が西進を開始。軍勢の進撃進路にあるのは……既に陥落して巨大なクレーターへとなり果てたかつてのBETAの牙城、ミンスクハイヴ跡地。

現在ソ連主導でG元素研究の為の基地の建設が進められているそこに、BETAの大群が迫ってきたのだ。

無論このことを予期していないソ連では無い。BETAに帰巢本能というものがあるか否かは不明ではあるが、元々此処はBETAの巢であった場所、連中が奪い返しに攻めてくる可能性は0では無いとして、それでなくても極秘研究の為の施設を建設していたがゆえに基地には戦術機甲部隊を含めて師団規模の軍が置かれていた。

しかし、結局BETAの物量とレーザーという対空兵器の前に、防衛軍は一週間ともたずに全滅、ミンスクハイヴは再びBETAの掌中に戻る事となってしまった。

もしも再びミンスクハイヴに反応炉が建設されたなら、再び欧州大陸はBETAの脅威にさらされる事となる……。そして真つ先にその被害を受けるのは現在ソ連と同じく社会主義国家であるポーランド人民共和国、そして同じく社会主義国家であり冷戦の果てに分断された国家の東側、ドイツ民主共和国、通称東ドイツ。

もはや躊躇している場合ではない……!!ポーランドと東ドイツはすぐさまハイヴ制圧の軍を編成、ポーランド、ソ連国境へと送りこんだ。言うまでもない、完全にハイヴが完成する前に再びBETAを殲滅するためである。本来冷戦によって対立関係にある西側諸国もまた国連軍と共に攻略作戦の為の準備を進めている。

既に一部のBETAがポーランド国境付近にまで進出してきている以上もう一刻の猶予もないのだ。直ぐにでも奴らを排除しなくては……!!それがWTO加盟国の、否、欧州に存在する全国家の総意であったのだ。

こうしてポーランドの、否、欧州そのものの命運をかけたBETAからのミンスクハイヴ奪還作戦、第二次パレオロゴス作戦が幕を開けた――。

1983年、ソ連領ベラルーシ州…。

BETA大戦中幾度も投下された戦術核の影響によって視界を遮るほどに吹きすさぶ豪雪と暴風、その中を突っ切って飛行する黒影が8機…。規律正しく隊列を組みながら飛行する人型のそれは光線属種の出現によって無力化された航空兵力を穴埋めするために産み出されたBETAに対抗するための人類の刃、戦術歩行戦闘機、通称戦術機の機影に他ならない。

機体名はMig21 バラライカ。ソ連がアメリカにて開発された初の戦術機F-4ファントムをライセンス生産した機体を近接戦闘用に改良した第一世代戦術機であり、ソ連国内のみならず、ポーランド、東ドイツといったワルシャワ条約機構加盟国でもライセンス生産されて運用されている機体である。

国内にハイヴを抱えている関係上、BETAとの近接密集戦闘を重視するソ連の運用思想によって機体そのものの軽量化、それによる運動能力向上、そしてセンサーマストを防御するためのワイヤーカッターの追加、等々の改修がバラライカには施されている。それでも所詮は第一世代機であり、1982年アメリカ海軍に配備された世界初の第二世代機『F-14トムキャット』等の最新鋭機には機体性能で大きく劣ってしまっており、現在ソ連ではバラライカに代わる次世代機の開発に躍起になっているとのことだ。ポーランドと東ドイツの両軍は政治上の理由、そして予算の都合等によって相も変わらずバラライカを運用しつづけるしかないのだが…。

吹雪の空を跳躍ユニットを吹かし飛行する戦術機、その右肩にはドイツ民主共和国、すなわち東ドイツ国旗を模したのエンブレムが、左肩には666の、所謂『黙示録の獣の数字』が刻印されている。

右肩のマークはこれらの機体が東ドイツ国家人民軍から派遣された部隊のものである事を証明するものである。そして左肩に描かれた数字は、その戦術機が国家人民軍のとある部隊に所属していることを証明する印であった。



666、国家人民軍所属の部隊でその不吉極まりない番号が使われている部隊はただ一つしか存在しない。東ドイツ陸軍第666戦術機中隊、通称「黒の宣告（シュヴァルツエスマーケン）」。東ドイツ最強と謳われる戦術機中隊であり、航空爆撃機、ミサイル等にとって最大の脅威、障害となる光線属種BETAをいち早く殲滅し、航空戦力を使用可能とする「光線級呐喊（レーザーヤークト）」を主任務としている。

しかし、光線属種呐喊は戦術機の担う任務の中でも死と隣り合わせといっても過言ではない危険な任務、それを最優先任務として常に最前線へと投入される黒の宣告中隊の損耗率は他の国家人民軍所属の戦術機部隊と比較しても高く、本来中隊が12機編成であるところが現在はわずか8機のみで編成となってしまっている。

だが、否、だからこそ、そのような過酷な任務を、死と隣り合わせの修羅場を潜り抜けてきたが故に黒の宣告中隊の衛士としての力量は他の衛士達と比べてもずば抜けたものとなっており、これこそが彼らを「東ドイツ最強」と言わしめている要因でもあるのだ。

そんな「光線属種狩りの専門家の集団」とも言うべき部隊が、現在最大の激戦地となっているベラルーシ地方へと派遣されたのは当然の成り行きともいえた。

暴風と豪雪が吹きすさぶ荒天を飛行する左肩に666の数字が刻まれた戦術機8機、その中の一機に搭乗する赤い髪と鋭い目つき、そしてどことなく荒んだ雰囲気の特徴的な青年は、網膜投射によって映し出されている一寸先も見えない吹雪の世界をどこか忌々しげな、そして少なからず緊張した面持ちで眺めている。

テオドル・エーベルバッハ、それがこの衛士の名前である。階級は少尉であり何の因果か黒の宣告中隊の一員として所属している衛士の一人である。年齢はまだ18歳と若いものの、中隊に任される過酷な任務の数々を生き延びているだけあって衛士として優れた力量を持っている。

最もテオドル本人からすれば何が悲しくて何度も死ぬような任務をこなさねばならんのか、と心の底では悪態をついていた。そもそ

も己自身、好き好んで陸軍にはいったわけではない。それ以外に食っていく方法が無かったから消去法で陸軍、そして衛士になったにすぎないのだ。一体何を基準にこんな危険極まりない任務をやらされる中隊に配属させられたのかは知らないが、大方中隊長が「日くつき」であるから自分のような国家反逆者の面倒を見させるには丁度いいと判断されたのだろう。テオドールはそう考えながら代わり映えのしない吹雪の空を眺めている。

（最も、此処なら国家保安省（シユタージ）の連中も手を出してこない、東ドイツよりかはマシ、か…）

そうぼやきながらテオドールはチラリと己の背後へと、正確には己の後ろから付いてきているであろうバラライカの一機へと、そこに搭乗している一人の少女へと視線を向ける。

少女の名前はカティア・ヴァルトハイム。数週間前、戦場で孤立していた国連軍派遣部隊の救助に赴いた折に救出した分断されたドイツのもう片方、西ドイツからやってきた少女。救出されたのちに東ドイツへの亡命、そして黒の宣告中隊への編入を志願し、結果中隊長のゴリ押し染みた尽力によって亡命申請及び中隊への編入は認可され、現在に至るといふわけだ。ついでにテオドールに教育係を押しつけて…。

彼女の操縦技術については特に問題はない。寧ろ本来ならば機種転換には丸一日かかるF-4ファントムからバラライカへの機種転換を僅か3時間で成し遂げるほどの腕前を持っている。戦場での活躍に関しては戦場で追々慣れていけば問題ないだろう。

問題があるとすれば彼女の思考、思った事を直ぐに口に出してしまふという悪癖だろう。言論統制思想統制が完全になされ、ガチガチの社会主義国家である東ドイツとは正反対に民主主義国家である西ドイツで育てられたカティアはやれ東西ドイツの融和だの東ドイツの思想は間違ってるだのと幾度も爆弾発言を繰り返してきた。最近は大いぶましになったものの配属された当初は幾度となく地雷を踏みぬく、どころか積極的に踏みに行くカティアのせいでどれほど心臓が止まると思った事か知れない。

最も今テオドール達が居る場所はベラルーシ、東ドイツからポーランドをまたいだ場所であるため、此処ならばよほどの発言をしない限り問題はない筈である。カティアも此処に配属されてからは己の空気を読まない発言のせいで幾度となく痛い目に遭っているため少しは自重する事だろうし今は彼女に関して気にする必要はないだろう。

……否、気にする余裕はない、と言った方がいいだろうか。

『もうすぐチェックポイントに到達する。旅行気分は此処までだ、気を引き締めろ』

『『了解!』』『……了解』

そんな彼の思考を遮るかのように網膜に衛士強化装備を纏った女性の姿が映し出される。流れるような金髪と氷細工の如く伶俐な美貌、街中を歩けば100人全てが振りかえるであろう美女である。

彼女の名前はアイリスディーナ・ベルンハルト。黒の宣告中隊を率いる中隊長であり、階級は大尉。歴戦の衛士を指揮するだけあり彼女もまた卓越した戦術機の操縦技術を誇っている。その実力は国家人民軍の中でも随一と言えるだろう。また、操縦技術だけではなく戦場の大局を正確に見通せる確かな戦略眼も持っており、まさに才色兼備文武両道という言葉がふさわしい女傑と言えるだろう。事実彼女の確な指示のおかげで幾多の窮地を乗り越えてこれたのは事実、己が此処まで生き残れたのも彼女のおかげであると言えなくもないだろう。

しかし、彼女の国家人民軍での評価は芳しくない。当のテオドールもまた上司であるはずの彼女に対して憎悪にも近い感情を抱いている。それは、アイリスディーナにはとあるうわさが付きまといっているからである。

アイリスディーナは実の兄を密告して今の地位を得た――。

このうわさに対して彼女は肯定も否定もしていない。故にテオドールは彼女の事を信用していないのだ。何時か己も、そしてカティアもまた彼女の手で“奴ら”に引き渡されるのではないか、と……。最も過剰に警戒しているのは己か、あるいは政治将校のグレーテル位しかないようで、他の連中は彼女の事を信頼しているようではあるが

…。

『そういえば、ミンスクと言えばこんな話を知っているかヴァルター？』

『ふむ、何でしょうか大尉？』

唐突にアイリスディーナは己の副官であるヴァルター・クリューガー中尉へと声をかける。ヴァルターは特に驚いた様子もなくいつも通りの調子で返事を返す。

『例のパレオロゴスでのミンスクハイヴ爆発の時の話なのだがな、ハイヴを吹き飛ばしたのは二本脚の馬鹿でかい亀だった、という話だ』

『ほう、亀ですか』

『ああ亀だ、そのでかい亀が火を吹いて暴れまわったからミンスクハイヴは落ちた、と証言した兵士が居たらしい』

『ほうほう、火を吹く二本脚の亀とは珍しい。BETAでないとしたならばUMAでしょうか？それで、そのあとどうなったので？』

どことなくワザとらしく驚きの声を上げながらヴァルターはアイリスディーナに問いかけると、アイリスディーナはニヤリと悪戯を思い浮かべたかのような笑顔を浮かべる。

『その話を聞いた連中は口々にこう言ったそうだな、『もう既にエイプリルフールは過ぎてるぞ』とな』

アイリスディーナの口から飛び出したなんとも言えないジョークに中隊のメンバーは各々苦笑したり含み笑いを浮かべている。彼女は作戦前によく自国のお国柄やらをネタにしたジョークを口にする。無論衛士達の緊張や恐怖を緩和するためではあるのだが、テオドールは笑わなかった、否、笑えなかった。

『まあそういうわけで、今回もサクツと片付けて帰るぞ。もしもの時には亀が来て助けてくれるかもしれないぞ？』

『そういう下らない冗談はやめて貰えないかしら、同志大尉。ヨーロッパの命運がかかった作戦の前に不謹慎よ』

アイリスディーナの言葉に割り込んでくる声の一つ、角縁眼鏡をかけた神経質そうな女性衛士、政治将校グレーテル・イエツケルン中尉

の不愉快そうな表情が表示される。

政治将校とは東ドイツ国防省政治総本部から派遣される将校であり、おもに衛士達の政治的忠誠心の保持、防諜、政治宣伝並びに反共思想の取り締まりを任務としている。

東ドイツの指揮系統は一つではなく、さらに政治将校による第二の指揮系統が存在する。それだけではなく政治将校には部隊の人事権、指揮官の罷免権といった強大な権限が与えられ、政治将校はそれを利用して部隊への政治的指導を行うのだ。無論彼らへの反抗は一切許されず、下手に反発しようものならこれ幸いと粛清の対象にされかねないのだ。

権限だけではない。グレーテルの搭乗する機体は他の中隊メンバーのバラライカとは全く違う。MiG-23チボラシユカ。ソ連にて1980年に実戦配備された最新鋭の戦術機。バラライカに軌道格闘能力付与の為にさらなる改良、再設計を施した機体ではあるが、無理な改造の結果整備性が悪化、結果としてバラライカよりも稼働率が低下する事となってしまう。とはいえそれでもバラライカよりは性能は全体的に上であることに代わりはないが。

元来この機体は東ドイツの秘密警察組織、国家保安省(シュタージ)配属の武装警察軍にのみ配備される予定ではあったが、ミンスクハイヴ奪還の為という理由で国家人民軍所属の衛士達にも限定的に配備される事となった。最もその殆どは政治将校向けであり、実質政治将校専用機ともいえるのだが。

グレーテルの横槍にアイリスデイナーはやれやれと言いたげな表情で溜息を吐きだした。

『そこまで言うならば同志中尉、同志中尉だけでなく我々にもチボラシユカを配備してもらいたいものだ。少なくとも上層部に進言することぐらいはできるだろう？ 全く、バラライカとあれを機種転換するだけでどれだけ違うことか……』

『……!! そんなことは承知しているし既に言ってるわよ！ だけとただでさえ余剰機体に余裕がないうえに武装警察軍の連中がギヤアギヤアうるさくて中々機種転換に応じようとしなのよ!! 私一人で

どうこう出来るわけ無いじゃない!!』

『……まあ、それもそうか。まあ期待はしてなかったが…』

グレーテルの怒声にアイリスディーナはやれやれと肩を竦めている。

如何に政治将校とはいえ所詮グレーテルは中尉階級、上層部の人間に彼女の要請が伝わるかと問われれば微妙と言わざるを得ない。否、よしんば伝わって受け入れられたとしてもそう簡単にはいかないだろうが…。

『……と、おしやべりはこれで終わりだ。チェックポイントに到達、死にたくなければ気を引き締めろ!!』

アイリスディーナの表情が瞬時に引き締まる。見ると雪原の彼方から幾つもの爆音と煙、そして暗天へと延びる幾条もの閃光が視認してきた。あれは間違いなく光線属種のレーザー照射、すぐ目の前だ。彼方には地平を埋め尽くして蠢く無数の何か、確認するまでもない、BETAの軍勢だ。テオドルは緊張のあまり唾を飲む。

この無数のBETAを掻き分けて光線属種を排除する、それがテオドル達の任務。当然一瞬の油断が、否、たとえ油断していなくとも死にかねない危険極まりない任務、幾度もこなしたものとはいえ、一切慣れるという事はない。

既に地上の戦場も視認できるような距離に達している。地上では既にBETAと軍の乱戦が始まっている。戦車は絶え間なく砲弾を撃ち続け、歩兵は塹壕から顔を出して小銃をBETA目掛けて乱射している。無論雲霞のぶるときBETAの群れからすれば微々たるダメージでしかなく、あつという間に押し潰されていくのであるが…。

地上からの支援要請はある。既に視界には幾つもの支援要請サインが表示されている。だが、無視する。無視せざるを得ないのだ。ただでさえ光線呐喊という己の命のかかった危険な任務を行うというのに、他の部隊の救援を行う余裕など微塵もない。故に支援要請は全て黙殺せざるを得ない。このせいで黒の宣告中隊は東ドイツ最強という名声以外に、『死神中隊』『選別中隊』等という陰口まで囁かれている始末だ。恐らく中隊長であるアイリスディーナの噂も少なから

ず関係しているのだろうか…。

『テオドールさん……』

網膜に表示される少女の顔、亜麻色の髪と同じ色の瞳をしたまだ幼げな少女。その可愛らしい顔は悲痛に歪んでいる。地上で助けを求める兵士達を見捨てる事に心を痛めているかのように、否、事実心を痛めているのだろう。彼女は未だに“割りきれていない”のだから。

この少女がカティア・ヴァルトハイム少尉。テオドールがアイリス・デーナから世話を“押し付けられた”西から来た少女。普段明るかった表情が今は見る影もない。東ドイツの实情、そして戦場の悲惨さをいやというほど味わったが故だろうか…。テオドールは恐らく両方だろうな、と心の中で結論付けていた。

『総員傾聴!!』

と、アイリス・デーナの号令が達する。テオドール、そしてカティアは改めて表情を引き締める。

『間もなく敵と接触する!!以後重金属連の影響で通信が不確かになるが各機陣形を維持!!あと少しでお待ちかねの狩りの時間だ!!』

『……了解』

何がお待ちかねだ、と心の中で毒づきながらテオドールは頭を切り替える。

此処から先は地獄の一丁目、一步間違えれば即死の世界、己の力量と運の身が頼りの戦場だ。余計な事を考えている余裕など欠片もない。

(こんなところで、死んでたまるか…!!)

歯を食いしばり、前を見据えるテオドールの目の前には、無限とも言うべき物量のBETAの集団が溢れんばかりの物量で此方めがけて押し寄せようとしていた。

それから少し遡って……。ベラルーシ州バラナビチに建設されたワルシャワ条約機構軍軍事要塞。

ポーランド軍の軍服を纏った一人の兵士が雪の降りしきる中外へ出てジツと彼方を見据えている。兵士は顔立ちを見る限りまだ若い。精々20代の後半と見える若さだろう。だが、その茶色い髪の毛には所々に目立って白髪が生えている。彼は胸元のネックレス、その先端の赤い鉤状の石を指先で撫でながら何を考えているのかうかがわせない表情で基地の彼方を、そこに広がるであろう戦場をジツと見据えている。

と、背後から誰かが此方へと歩みよる足音が聞こえてくる。兵士は特に驚いた様子もなく背後へと視線を向ける。

そこにいたのは戦術機を駆る衛士専用のパイロットスーツ、衛士強化装備を纏った一人の女性であった。ウエーブのかかった肩までの長さの銀髪が特徴的な端正な容貌は無表情であり何を考えているのかを全く伺わせない。

女性衛士は兵士のすぐ後ろで足を止めた。

「……随分と浮かない顔をしてるのね」

「……ん、ああ、何だお前か」

「何だとはご挨拶ね」

銀髪の女性衛士は軽く肩をすくめる。そんな彼女の反応に青年兵は軽く笑みを浮かべると再び正面へと向き直った。

「こんな寒いのに外に出るなんて…、何？何かの精神鍛錬？それとも感覚がマヒしてしまってるのかしら？」

「んなわけあるか。……ちよつとした気分転換だ」

「そう、まあ個人の趣味にどうこう言う気はないけれど…」

女性衛士は興味を無くしたのか視線を兵士と同じく雪原へと向け直す。兵士は女性衛士へと一度視線を向けるとまるで独り言でも呟くかのように口を開く。

「……出撃か？」

「ええ、東ドイツの連中と共同で、ですって。…ミンスクの奪還なんてできると思ってるのかしら」

「……知らん、奇跡でも起きればどうにかなるんじゃないやねえか？」

「貴方を助けた例の巨大怪獣とやらの事？……あまり私以外には話



さない方がいいわよ、それ？頭おかしい人間だと思われるから」

「そりやお互い様だろうが」

違くないわね、と女性衛士は口元に薄い笑みを浮かべる。兵士は胸元の赤い石を撫でながら、まるで墨汁で塗りたくったかのような漆黒の空を見上げる。

「今日は、吹雪くだらうなあ、シルヴィア」

「……そうね」

かつてパレオロゴス作戦で唯一生き延びた生存者、フレデリック・コルベ軍曹の言葉にポーランド陸軍衛士、シルヴィア・クシャシンスカ少尉は独り言のように返事を返した。

## 第2話 Kategorie―窮地―

ソ連領ベラルーシ州の中心都市、ミンスク。

後の歴史でソ連解体の後に生まれる国家のひとつ、ベラルーシの首都となるはずのその都市はかつて100万の人々が住まう大都市であり、かつて幾多の戦禍に飲まれながらも、幾度も他の国家の支配下に置かれようとも幾度もその地の人々の手によって復興されてきた波乱の歴史を持つ街である。

だが、今やミンスクには、否、かつてミンスクという街があったその場所にはもはやその面影は、かつて街があったという痕跡そのものすらも殆ど残されていない。既にそれらは全てかつて来襲したBETAによつて根こそぎ蹂躪され、跡形もなくなっていたのだから。

かつてのスターリン様式の建造物が立ち並んでいた都市があった場所は、BETAの手によつて金属質の鈍い輝きを放つ歪な形をしたオブジェのような巨大な建造物が聳え立つ荒野と化した。ハイヴ、その名の通りBETA共の「巢」であり前線基地でもあるその建造物はかのパレオゴス作戦の折に起きたあの原因不明の大爆発によつて灰燼に帰した。

後にソ連はミンスクハイヴ跡地にBETAが地面を掘り進めた結果出来た巨大な地下茎を利用した軍事基地の建設を開始した。だが、建設開始から四年後、再度襲来したBETAの大群によつてミンスクハイヴは、厳密にはハイヴに建設中の軍事基地は奪い返され、再びBETAによるハイヴ建設を許す事となつてしまった。

無論、最終的には予期せぬ偶然によるものとはいえ折角奪還した都市を奪い返されて黙っているソ連では無い。まだ完全にハイヴが完成していない今こそ好機と再度ミンスク侵攻の為の兵力を集め、さらにワルシャワ条約機構、国連に働きかけて欧州各国との合同で再度ミンスクハイヴ攻略の為の軍を編成した。BETAの自国への侵攻を目前としていた東西欧州各国はこれに同意、東ドイツ、ポーランドを中心としたワルシャワ条約機構軍はミンスクハイヴの存在するベラルーシ州へと出兵、西欧諸国はアメリカと連携してミンスクは兵の為

の準備を着々と重ねていた。

ミンスクから南西、ミンスク県とブレスト県の境に位置する都市、バラナビチ。かつて人々の集う都市であり、ベラルーシ州の交通の要所であったそこは既にBETAと人類の血で血を洗う戦場と化していた。

吹き荒れる吹雪をモノともせずに進進する方を越えるBETAの群れ、それを迎え撃つべく建設されたコンクリートで固められた要塞陣地にて迫りくるBETAを迎撃するワルシャワ条約機構軍の兵士達。

戦車砲、野戦砲、あるいは手榴弾に自動小銃まで、ありとあらゆる火器から放たれる弾丸が雨霰とBETAの大群へと突き刺さる。効果はある。弾丸は逸れることなくBETAの群れへと直撃している。幾体かのBETAは毒々しい血を流して純白の大地へと倒れ伏している。

だが、止まらない。その程度では津波の如きBETAの進軍を止める事は出来はしない。たとえ一匹二匹、否、十匹二十匹倒れようがその死骸を乗り越えて何百何千ものBETAの巨体がさながら肉の壁の如くに襲いかかってくる。

一体一体倒したとしてもきりが無い、纏めて吹き飛ばすのならばミサイル、あるいは航空機による爆撃しかないのであるが、光線属種のレーザーがある以上航空兵力は使い物にならないと言っている。レーザーを減衰させる効力を持つALMをもつても撃墜される危険性があるのだ。

航空兵力を使用可能にする方法はただ一つ、光線級呐喊（レーザーヤークト）、BETA大群内に潜む光線属種BETAを発見、撃破する方法以外にはない。これは歩兵でも戦車でも、戦闘用車両でも行うことはできない。

戦術歩行戦闘機、通称戦術機。光線属種によって無力化された航空兵力の穴を埋めるために産み出された機械の巨人以外にはこの任務を為し得ることはできない。戦術機のみが為し得る三次元軌道と高

い機動性、そして各種兵装を扱える汎用性こそがこの任務には不可欠、だが、たとえ戦術機であったとしてもレーザーヤークトの任務は過酷である事に代わりはない。常に第一線で活躍してきたベテランの戦術機パイロット、通称衛士でさえも僅かな油断、そして運によってはあっけなくBETAの餌食となる、それほどまでに危険な任務なのだ。このような任務をこなせる部隊はポーランド、東ドイツ両軍を見回してもそうはいないであろう。

そして、そんな困難極まりないレーザーヤークトをこなす数少ない戦術機部隊の一つ、それが……。

『総員傾注!!これより我等はBETAの軍勢に突入する!!陣形を崩すな!!死ぬぞ!!』

『『『了解!!』』』』

BETAと人類の泥沼の総力戦が繰り広げられる地上、その上空を飛行する8機の戦術機、左肩に666の数字と角の生えた髑髏がマーキングされたMig-21バラライカ7機とMig-23チボラシユカ1機。

東ドイツ最強の呼び名も高い戦術機中隊。第666戦術機中隊、通称『黒の宣告（シユヴァルツエスマーケン）』中隊。今まで幾度ものレーザーヤークト他多くの対BETA戦をこなしてきた歴戦の部隊。無論それに比例して損耗率も高く、元来は12機編成であったはずの部隊も今や8機にまで減少している。中隊長であるアイリスディーナは幾度も中隊への補充衛士を要請しているものの軍にもそこまで余裕があるわけでもない為、中々申し出は受け入れられていない。

レーザーヤークトというただでさえ危険な任務に貴重な衛士と戦術機を浪費したくないのか、あるいはアイリスディーナが『曰くつき』であるが故か……。

それでも此処まで生き延びてきたのは現在のメンバーの卓越した操縦技術と運、そしてアイリスディーナの指揮官として卓越した能力があるが故であろう。

その黒の宣告中隊メンバーの一人、シユヴァルツ07ことテオドル・エーベルバツハは眼前に広がるBETA一色に染まった

大地を、此処に送られて以来幾度となく目撃してきたその光景に思わず眉をひそめる。

(……相変わらず減る様子が無い……。一体どうやったらこれだけの量を生産できるのやら……)

この戦場に送られてから早三ヶ月、相変わらずBETAの群れを蹴散らして光線級を排除する日々が続いておりいい加減テオドルも辟易としてきている。

ミンスクハイヴとそこに巢食うBETAの排除、そして欧州とソ連を結ぶ経路であるミンスクの奪還を目的としたこの第二次パレオロゴス作戦ではあったが、BETAの物量が壁となって未だにハイヴ突入どころか接近すらも出来ずにいる有様である。

既にミンスクハイヴ最深度では新たな反応炉の建設が完了しているらしく、ハイヴからは次々と万を超える数のBETAが湧き出してくる。無限とも言うべき数のBETAの物量に連合軍は中々ハイヴへ進攻できずにおり、核を持って纏めて吹き飛ばそうにもミンスクハイヴ周辺には光線級だけではなくさらに巨大、かつ高出力のレーザーを武器とする重光線級も多数配備されているが故に空からの攻撃は事実上無力化されている。

戦術機部隊によるレーザーヤークトも幾度となく行われてはいるのだが、ただでさえ損耗率が高い任務である上に、倒しても倒しても光線級は次々と出現するために殺しても殺しても終わりが見えない。さらに通常の光線級よりも高い耐久力を持ち、戦術機以上の巨体を誇る重光線級、通常防衛線ではめったに遭遇しないであろうこの強敵もまたハイヴ最寄りのこの戦場では頻繁に出現するのだ。これが既に難易度の高い任務であるレーザーヤークトの危険度をさらに跳ね上げている。

テオドル自身、己の面倒を見ている新入り衛士、シユヴァルツ08カティア・ヴァルトハイム共々一体何回死にかけた事か思い出せない。中隊にかつていたメンバーも、レーザーヤークトの最中に戦死している。あるものはじゅうこうせんきゅうのレーザーで機体ごと焼き切られ、あるものは突撃級の突進に巻き込まれ、またあるものは要

撃級のダイヤモンドよりも硬い前腕でコックピットごと殴り潰されミンチにされた。

カティアが編入した後、幾度かの出撃を繰り返してはいるものの今ところは戦死者はいない。もしも次に誰か一人でも戦死者が出ようものなら中隊の陣形を維持する事が出来なくなるし、よしんば補充兵が来たとしても中隊の動きに慣れさせるのにどれほどかかるか…。否、それ以前にその兵士が国家保安省のまわし者である可能性もあろうのだ。

国家保安省、通称シユタージは東ドイツが“誇る”東欧最大の秘密警察組織である。国民の10人に一人、とも言われるほど多数の情報提供者を保有し、東ドイツ国内の思想、言論を統制、監視している。無論国家の政策、社会主義への批判等の“反社会的”な言動をしようものなら情報提供者の手で密告されたのちに捕縛され、その後は拷問という名の尋問の末、処刑、あるいは苛烈な拷問の末に衰弱死するか、国家保安省への忠誠を誓って国家保安省の“犬”になるかのいずれかの道を歩まされる事となるのだ。

今回の作戦には国家保安省は関わっていない。国家保安省には国人民軍から独立した直属の軍隊である武装警察軍が存在するものの、国内での戦闘ならばともかく今回のような他国への派兵に関しては“表立つては”行われていない。あくまで表向きは、であるが…。そのお陰で第666中隊含む東ドイツ派遣軍は国家保安省の脅威を心配することなく任務に当たる事が出来ている。とはいえ何処に情報提供者がいるか分からず、さらに政治将校の監視の目もあるために不用意な発言が出来ないのは変わらないのだが、何の前触れもなく連中に連行されたり尋問されることはない為に精神的には気楽でいられる。

最も、この状況で気楽でいられれば、の話であるが。ミンスクハイヴ奪還作戦開始から早くも三カ月、ハイヴ奪還どころか今にもポーランド目掛けて襲いかかりそうなBETAの侵攻を止めるのが精いっぱい状況だ。西側の欧州連合、国連軍も度々軍を送ってはくるもののそれでもこの戦況を突破するには到底足りない。

噂によればソ連の上層部が国連、引いてはアメリカの介入によって  
ミンスクハイヴ内部のBETA固有の資源が奪取される、あるいは破  
壊されるのを警戒したからだと言われているがこんな状況ではそん  
な事を言っている場合じゃないだろうが、とテオドールは忌々しげに  
舌打ちする。

もはや何度目か分からないレーザーヤークトの出撃、どんな事が  
あっても、どんな事をしてでも生き延びるとは決めたもののこれでは  
命がいくつあっても足りはしない。最近では寝ている間も夢の中で  
BETA共と殺し合っている始末だ。あの「記憶」を思い出すのに  
比べれば幾分かはマシではあるが、出来れば夢など見ずにぐっすり眠  
りたいと幾度思ったかしかない。

『同志大尉、友軍からの救援要請が入っていますがいかがでしたしま  
すか？』

と、モニターに壮年の男性衛士の顔が、テオドールを除けばこの中  
隊における唯一の男性衛士でありアイリスデイーナの副官である  
シュヴァルツ03、ヴァルター・クリューガーが映し出される。見る  
とモニターには他の部隊からの救援を要請する信号が映し出されて  
いる。人道的な観点から言えば本来ならばそれに応じるべきなのだ  
ろう、そう、人道的な観点から言えば。

ヴァルターの問い掛けにアイリスデイーナは表情を崩さずに返答  
する。

『いつもどおりに応じておけ、ヴァルター。我らにはやらなければ  
ならない任務がある』

『了解』

アイリスデイーナの応答にヴァルターがただ一言呟くと彼の映像  
が瞬時に消える。いつもどおりに応じる、その言葉の意味はただ一  
つ、任務遂行を優先するために救援要請を断る、すなわち友軍を見捨  
てるという事に他ならない。

大して珍しい事ではない、寧ろいつもの事、日常的な事だった。中  
隊の任務はレーザーヤークト、他軍への救援ではないのだ。万が一救  
援などを行おうものならその分時間と弾薬が無駄になり本来の任務

に支障をきたす。

だからこそ彼らには「犠牲となってもらう」のだ。それで結果的に中隊の評判が落ちようが関係ない。全てはこの戦いに勝利するため、より多くの命を救うためであるとアイリスディーナは常々言っていた。

実際「東ドイツ最強」の異名を持ちながらも「黒の宣告」中隊にはやれ「死神中隊」だの「選別中隊」だのとの陰口が絶えない。アイリスディーナへの例の噂の件もあって他の部隊からは忌み嫌われている。テオドルも中隊に入隊した頃の初戦では流石に友軍を見捨てる事に少なからず葛藤はあったものの、今となっては完全に割り切れるようになっていいる。それは同じ中隊に所属するメンバーも同じだろう。

…つい最近入隊した新入りを除いて、だが。

『…テオドルさん』

モニターに映される少女の顔、つい最近西ドイツから亡命してきた少女、カティア・ヴァルトハイム。その表情は悲しみと憤りが入り混じった、どこか納得のいかないような色を浮かべている。

「…任務優先だ。さっさと慣れろ」

『……………』

テオドルの素っ気ない返事にカティアは口を噤む。未だに甘さが抜け切れていないのはまだ出撃回数が少ないが故だ。この戦争がいつまで続くかは知った事ではないが恐らくこれから何回何十回もの出撃をする事となるのだろう。そして、それと同時に何十何百の友軍を見捨てる事となるのだろう。そうしているうちにカティアも直ぐに「慣れていく」ことだろう。己と、否、この中隊の面々と同じく、救援要請を無表情で切り捨てるように…。

『……………チッ』

何をいまさら、己がまさにそうであろうが。こいつがそうだったとしてもそれがどうした。いや、寧ろこの世界で、東ドイツで無事に生き延びていくにはそうなるしかないというのに……。

『総員傾注！目標まであと2000!!500メートル手前でラン



ディング地点を確保しつつ陣形を敷く!!喜べ!!お待ちかねの光線級狩りの時間だ!!だが浮かれすぎて気を抜いたらお陀仏だぞ!!』

と、唐突にモニターに投影されたアイリスディーナの顔と号令にテオドールは我に返り気を引き締める。カティアも同様に表情を引き締めている。此処からが正念場、無駄口など叩いている暇はない。ほんの一瞬の油断が命取りとなる。テオドールは唾を飲み込みながら眼前に広がるBETAの群れを瞬きせずに見据える。

光線属種はいくつかの群れに分かれてBETA群に紛れ込んでいく。戦術機と同等の巨体を持つ重光線級はともかくとして、通常の光線級は全高三メートル、戦車級と同じレベルの大きさしかなく他のBETAの群れに混ざってしまふとそれに紛れて視認が困難となってしまう。熱源感知、そして光線級がレーザーを発射する際に放出する熱と重金属雲が混ざり合い発生する積乱雲、通称光線属種積乱雲(レーザークラウド)で大まかな位置は特定できるため発見そのものは難しくはないものの、光線属種が潜むのは何万という数のBETAのど真ん中、そこに辿り着くためには光線属種を守るBETAの群れを近接戦闘で蹴散らしていくしかない。

失敗は許されないし一秒の遅れも許されない。ほんの僅かでも光線属種の殲滅が遅れようものなら四方八方から押し寄せるBETAに中隊は押し潰される、最悪の場合最後尾で控えているであろう最大級のBETA、要塞級までもが出張ってきかねないのだ。その前に迅速、確実に全ての光線属種を始末し、BETAの群れから脱出しなければならぬ。

これこそがレーザーヤークトが困難な任務とされる所以、一個中隊であっても全滅の危険性がある任務をたった8機でやろうというのだ、いかに此方の一機が最新鋭機であるチボラシユカであるとしても自殺行為としか言いようがないであろう。

(せめて政治将校様だけじゃなくて此方にもその最新鋭機をまわしてもらいたいもんだよ…、ったく)

心の中で愚痴りながら眼前に控えるBETAの群れ、グロテスク極まりない肉塊としか言いようのない化け物共を睨み、体に走る震えを

抑える。

『キャニスター弾を二回制射!! 吹き飛ばせエ!!』

『『了解!!』』』

アイリスデイーナの号令と共に眼前に群れるBETAめがけて8門の銃口からキャニスター弾が絶え間なく放たれ連鎖爆発を起こして眼前のBETAを次々と吹き飛ばしていく。

そして数秒後、煙が晴れたそこにはBETAは影も形もなく、ただ黒く炭化した死骸らしき物体があちらこちらへと転がっているのみであった。BETAと共に雪も吹き飛ばされ、茶色い地べたが剥き出しとなった広場にBETAの死骸を影にしながら降り立った中隊8機は布陣を完了させる。

『総員傾注!!』

再度アイリスデイーナの声が響き渡る。いよいよか、テオドールは手元のグリップを握りしめる。

『これより中隊は光線属種掃討を開始する!! 全英は突撃路を啓開、後方は背後を守りつつ射撃援護!! 異星起源種共に『黒の宣告』を下してやれっ!! 第666戦術機中隊、突撃にい、移れえええええええええええ!!』

『『了解!!』』』

アイリスデイーナの号令と共に、『黒の宣告』中隊は目の前に蠢く肉の壁、その果てに在るであろう標的へと向かって一気呵成に突撃を開始した—!!

ポーランド人民軍SIDE

一方その頃戦場から10kmほど離れた地点に存在するバラナビチワルシヤワ条約機構軍軍事要塞にて、12機の戦術機の機影が出撃の合図を待って吹雪の中に佇んでいた。機種は東ドイツ軍のものと同じMiG-21バラライカであるのだから、右肩に記されているマークは東ドイツの国旗ではなく、その隣国であり同じワルシヤワ条約機構軍の一員であるポーランド民主共和国の国旗が印されている。言うまでもなくポーランド人民軍所属の戦術機部隊であり、東ドイツ国家

人民軍同様にミンスクハイヴ攻略の為に派兵された戦力である。

ベラルーシ州とポーランドは国境を接して隣同士、万が一この作戦が失敗しようものならば次は間違いなくポーランドがBETAの餌食となる。故にベラルーシには東ドイツ以上の兵力を派兵しており、この戦術機中隊もまたその派兵部隊の一つ。

出撃の時を待ち吹雪のなか立ち並ぶ12機のバラライカ、ポーランド人民軍衛士シルヴィア・クシャシンスカ少尉はそのバラライカの内の一機のコクピット内で網膜投射で映される外の光景を何の感慨も無く眺めていた。

『相変わらずやな天気だな、シルヴィア』

『そうね、こつちまで鬱になりそうだね』

そんな時、唐突にヘッドセットから聞こえてくる声にシルヴィアは驚いた様子もなく応じる。声の主は戦術機部隊の出撃中に軍事基地警護を担当する戦車部隊の一員であるフレデリック・コルベ軍曹。今回の戦車大隊の任務は基地に接近してくるであろうBETAの排除。戦術機に比べれば火力に勝る半面機動力に劣る戦車部隊は戦術機の後方支援、あるいは要塞陣地の防衛任務が主となる場合が多い。フレデリックからすればシルヴィア同様衛士となつて前線でBETAを心行くまで吹き飛ばしたいのが本音なのだろうが生憎戦術機適性が無く戦車兵になるしかなかったため、こうして留守番か露払いの役割を担う事しかできずにいるのだが。

『はあ…、うらやましい。俺もお前みたいに戦術機乗り回してBETAを薙ぎ倒したいよ…。で、お前の今回の任務は確か東ドイツの連中と共同でBETAの殲滅、か？』

『厳密にはレーザーヤークトを終えて帰還する東ドイツの戦術機部隊の帰り道を作る露払いよ。救援部隊は、…：貴方も噂に聞いた事があるでしょ？第666戦術機中隊、通称黒の宣告中隊よ』

そう皮肉気に笑うシルヴィアの言葉にフレデリックは合点がいった様子で『ああ』と声を上げる。

『黒の宣告中隊…：、ああ、東ドイツ最強だの選別部隊だのと評判のあれか』

『ええ、今まで何度もレーザーヤークトを成功させてきた歴戦の部隊なんだとか。…まあその分評判も悪いらしいけどね』

東ドイツ最強の戦術機部隊にして必要ともあれば見方すらも犠牲にする死神部隊…、黒の宣告中隊の異名と悪評はポーランド人民軍にまでも知れ渡っていた。最も自分達には関係ないと考えているのかシルヴィアもフレデリックは特に恨み事や陰口を述べるのでもなくふざけて笑うのみであったが。

『ん、それは知ってる。で、連中の任務は今回もレーザーヤークト、か。なんともしんどそうだな』

『死人が出るのも時間の問題かもしれないわね、まあこれまでも出ているみたいだけでも。それじゃあそろそろ通信切るわよ同志軍曹？』

『おう、同志少尉。貴官に幸運があらん事を』

『同志軍曹にも』

フレデリックとの通信が切れるや否や、それを待っていたかのようにはヘッドセットから別の人間の声が響いてくる。これもまた彼女がよく知っている人間、自分達を指揮する戦術機部隊の中隊長の声である。

『総員傾注！これより我等は友邦たる東ドイツ戦術機部隊援護の為に攻撃する！！任務は戦術機部隊の退路の確保ではあるがいつBETA共が此方を狙ってくるか分からん！決して油断するなよ！！』

『『了解っ！！』』……了解』

中隊長の号令と共に、立ち並ぶバラライカの跳躍ユニットからロケットが噴射し12機のバラライカは一斉に曇天へと舞い上がる。目指すは戦場、敵はBETA…。

「死にはしない、絶対に死なないわ…。あれを、あいつを見つけるまでは」

操縦桿を握り潰さんばかりに握りしめながらシルヴィアは操縦席の中でそんな言葉を呟いていた。

黒の宣告中隊がBETA集団に突入してから60秒、未だに光線属種は殲滅しきれず中隊とBETAとの激闘は今もなお続いていた。

『タイムリミットまであと2分を切っている!!急げ!!』

アイリスデイーナの叱咤の声が中隊に響く。当の本人は副官であるヴァルターと共に眼前に迫りくる戦車級、要撃級の群れへと36m機関砲を連射し掃討している最中であり到底他のメンバーを助けに行ける状況ではない。そして、それは彼女以外のメンバーも同様であつた。

『シュヴァルツ02、残弾あと6割……く、予想以上にBETAが多い……』

モニターに投射されるアジア系の顔立ちをした女性、シュヴァルツ02ベトナム系ドイツ人ファム・ティ・ラン中尉は顔を歪めながら眼前に迫る戦車級、要撃級へとキャニスター弾をばら撒く。要撃級はその巨体とダイヤモンドをも上回る硬度の両腕が、戦車級はその圧倒的なまでの物量と戦術機すらも容易く噛み砕く強靱な顎が脅威であり、決して無視できるような敵ではない。事実BETA戦における衛士の死者の中で最も多いのは戦車級に取りつかれて戦術機ごと喰い殺された事だというのは衛士の間での常識である。

レーザーヤークトは既に佳境に入っている。BETA群の光線属種の群れのほとんどは殲滅したものの、最後の群れがよりにもよってBETA群の奥深くに潜んでおり、結果中隊は敵陣の奥深くへと踏み込む事となってしまったのだ。こうなってしまうと周囲は見渡す限りBETAの群れ、味方の援護は期待出来ないうえに最後尾に控えているであろう要塞級との遭遇の可能性すらもあり得るのだ。如何に歴戦の部隊である『黒の宣告』中隊であつたとしても死を覚悟せざるを得ないほどの状況である。

『シュヴァルツ04、此方も残弾6割をきる!!同志大尉!!このままじゃじり貧よ!!』

シュヴァルツ04、『黒の宣告』中隊専属政治将校グレーテル・イエツケルン中尉は怒号を上げながらも目の前の要撃級を機関砲で

ハチの巢にする。が、すぐさまその死体をおしのけて新たな要撃級が、その背後には無数の戦車級が砂糖へと群がる蟻のように迫ってきている。

如何に彼女の搭乗している機体が他の中隊メンバーよりも性能の高いチボラシユカとはいえ、流石に周囲一帯をBETAに包囲された状況は辛いものがある。弾丸の数も有限であり近接戦闘をするにしても数が多すぎる。特にグレイテルの衛士としての実力は精鋭揃いの中隊の中ではひときわ劣る。それでも数々の修羅場を乗り越えているだけあって並みの衛士よりは高い技量を持つてはいるのだが。

『シユヴァルツ05！こちらにも光線級らしき姿は見当たりません!!クツソ!!こいつら次から次へと!!』

『シユヴァルツ06、此方も06と同様です！36mmの残弾はあと四割!!』

中隊どころか国家人民軍全体からみても珍しい近接長刀をBETA目掛けて振りおろすバラライカとそれをフォローするかのよう周囲にまわりつくBETAを排除するもう一機のバラライカ。シユヴァルツ05アネット・ホーゼンフェルトとシユヴァルツ06イソグヒルト・ブニコフスキーが駆る機体であり、此方も群がるBETA相手に手が離せない様子であった。

『しゅ、シユヴァルツ07！こつちも敵が多すぎて…!!』

『…シユヴァルツ08、残弾残り4割。近接戦闘に切り替える』

シユヴァルツ07カティア・ヴァルトハイムとシユヴァルツ08テオドル・エーベルバッハは押し寄せるBETAを蹴散らしながら目標である光線級へと接近する。

既に両者の機体の突撃砲の残弾も残り僅か、跳躍ユニットの推進剤も脱出を考慮するのならば残量は少々心許ない。故に迅速に光線級を発見、撃滅せねばならない。既に連中の居場所は割れている。ならばあとは接近して直接叩くのみ—!!

『…くーんっ…!!』

カティアの駆るバラライカは片腕に装備した多目的追加装甲（シエルツェン）で要撃級の攻撃を防ぎつつ、36mm機関砲で反撃する。

仕留めた瞬間次の要撃級が出現しその巨大なサソリの鋏の如き両腕を振り上げて襲い掛ってくる。

もはやこれ以上こいつらを相手にしてはいられない。早々に光線級の群れを探し出して殲滅しなければ此方が推進剤、弾薬が0になつて喰い殺される羽目になる。

(どこだ…!!何処に居やがる…!!)

片手に持った短刀を振るい己に貼りつこうとする戦車級を斬り捨てながらテオドールは左右へと忙しく視線を動かし続ける。もう位置は此処だと掴めているのだ、ならば必ず何処かに居るはずだ、それもこの直ぐ近くに…!!

テオドールは神経を研ぎ澄ませ、BETAとBETAの間、その汚らしい腐肉のような蠢く肉塊の間を注視する。光線級の体色は青みがかつた緑、血のように真っ赤な体色の戦車級と白色の要撃級の群れの中でなら確実に目立つはず…。BETAを掻き分け斬り捨て撃ち殺しながらテオドールは両目を動かし探し続ける。

と、次の瞬間、戦車級の集団で真赤に染め上げられていた大地の上に青緑色の何かが蠢いているのをテオドールは確かに見て取った。

『…!!テオドールさん!!』

「分かつてる!!ようやくベングだ!!」

同じく気がついたのか己の名を叫ぶカティアを無視し、テオドールはそいつへと、ようやく発見した光線級の集団目掛けてバラライカを疾走させる。接近する此方に気がついたのか光線級が己に向かってくるバラライカへとその目玉のようなレーザー照射器官を向けてくる。だが、遅い…!!

「これで、ラストだああああああ!!!」

120mm滑空砲に装填されたキャニスター散弾、僅か2発残されていたそれをテオドールは全弾目の前のBETAへと発射する。散弾はそのままその場に密集していた光線級の群れへと飛散、ばら撒かれた弾薬はその場にいた光線級の体を引き裂き、爆発させて瞬時に絶命させる。一瞬立ち上る煙、それが晴れるとその場にいたはずの光線級は一匹残らずミンチ同然の肉片と化していた。

「…よし、シュヴァルツ08、最後の光線級集団を殲滅完了!!」

『こちらシュヴァルツ01、光線級集団の殲滅を確認した。よくやったなエーベルバツハ少尉』

光線級殲滅の報告と同時にモニターに投射されるアイリスディーナからねぎらいの言葉を投げかけられる。その言葉をテオドールは無表情のまま黙って受け止める。国家保安省に己の兄を密告した…、アイリスディーナに関するその噂に現在は多少なりとも疑念を抱きつつはあるものの、それでも気を許しているわけではない。もし油断しようものならばいつカティア諸共密告されるか知れたものではない。

『同志大尉!!任務が完了したのならとっとと引き上げるわよ!!もう残弾も残り少ないしいつまでもこいつらの相手をしてもらえないわ!!』

と、モニターに幾分か焦燥気味のグレーテルの顔が映し出された。見るとグレーテルは未だに己めがけて接近してくる戦車級へと機関砲をばら撒いている。他のメンバーも未だに衰えないBETAの物量にそろそろ限界なようである。アイリスディーナも領いた。

『ああ、総員傾注!!任務は完了した!!これより脱出を開始する!!気を抜くな!!帰るまでが遠足だ!!脱出中にBETAに食い殺されるなどという間拔けな死にざまをさらすなよ!!』

『『了解!!』』「りょうか…?!」

他の隊員に続いて応答しようとするテオドール、だが、次の瞬間に発生した異変に彼は思わず口を閉ざすことになった。

何の前触れもなく地響きと振動が、まるで地震でも起きたかのような振動が己と己の乗る戦術機を揺さぶりだしたのだ。テオドールは思わず周囲を見回すが周りには散らばるBETAの肉片とそれを踏みつけ迫るBETAのみ。なら、この振動の発生源は…。

『…この振動、まさか!!総員空中に避難しろ!!』

『え!?べ、ベルンハルト大尉それって…:…きやあああああああ!!!!』

「!?か、カティア!?」



突然悲鳴を上げるカティア、そして爆発する地面とそこから間欠泉の如く噴出してくる何か。その何かの正体に気がついた瞬間、テオドールの表情が絶望に染まっていく。

「…BETA…!!こんな時に地下から奇襲だと…!!」

それは紛れもなく新たなBETAの集団。それも最前線にしか存在しないはずの突撃級を中心とした集団である。何の前触れもなく出現した新たな異形の集団によって再び大地はBETAの支配する領域へと変貌していく。

『エーベルバツハ少尉!!ヴァルトハイム少尉は!!』

「群れに分断された!!クソツ!このままじゃ…」

アイリスデイナーの切羽詰まったような声音にテオドールは奥歯が碎けるほどに歯を食い縛る。先程のBETAの出現でカティアと分断されてしまった。カティアのバラライカの弾薬も推進剤ももう残り少ない。このままこの場に放置しておけば間違いなくあの化け物共に飲み込まれ、押し潰されることは間違いない。

どうする…?このままカティアを見捨てるか、それとも…。

『同志大尉!!早急に脱出するわよ!!同志少尉もさっさと空中に離脱しろ!!』

カティアを救うべきか否か悩むテオドールの耳に、グレーテルの若干ヒステリックな金切り声が入ってくる。こんなときにも空気の読めない政治将校にテオドールは忌々しげに舌打ちする。

「…同志中尉、ですがヴァルトハイム少尉が…」

『この状況で他人の心配をしている場合か!!このままでは貴様もある娘と一緒に共倒れだ!!唯でさえ隊員数に余裕が無い中隊の人員数をさらに削るつもりか!!』

「で、ですが…」

グレーテルの言いたい事も分かる。今カティアを救出しようとしても救出どころか下手をすればテオドールまでもが戦死しかねない。もしもそうなれば中隊は熟練の衛士をまた一人失う事となり、大きな痛手を被る事となる。

ならば此処は新入りのカティア・ヴァルトハイムを犠牲にするのが

得策、元より西側からの亡命者という事で国家保安省からも睨まれている爆弾のような存在だ。此処で消えてしまった方が自分達にとつて身の安全にも繋がるだろう。グレーテルはそう言いたいのだろう。確かに彼女の言いたい事も分かるしそれが正しいというのも理解できる。だが…。

(でも、そんな事をしたら、俺は……)

テオドールの脳裏に浮かぶ光景、それは己がまだ衛士になる以前の事。家族と共に西側に亡命を試み、失敗し、養父と養母、そして妹を失ったあの時の光景を…。

『テオドールさん!!行ってください!!』

「なッ!？」

苦悶に顔を歪めるテオドールの耳に飛び込んでくるカティアの叫び声。表示されているモニターの彼女は眉根を寄せて表情を歪ませている。銃撃音と振動から彼女が周囲のBETAを排除している最中だというのが嫌でも分かる。

『私なら大丈夫ですから!!必ず皆さんに追いつきますから!!早く行ってください!!』

「馬鹿な事ほざいてんじゃねえ!!てめえこそこんなところで死にたいのか!!」

『お願いです!!逃げてください!!テオドールさんが死んだら、私つ…!!』

懇願するような表情で必死に訴えるカティア。その表情は、何故かあの時の、己に向かって必死に手を伸ばそうとする妹の表情にも似て…。

(畜生っ…!!どうすればいいんだよ!!俺は…!!)

悔しげに操縦桿を握りしめるテオドール。彼はただただ今も昔も変わらない己の無力さに憤りを覚えるしかなかった。

### 第3話 Re t t u n g ー救出ー

第666戦術機部隊が地底からの突然のBETA襲撃に窮地に陥っている頃その数km手前にて、ポーランド人民軍第401戦術機部隊、通称『蝙蝠(ニエトペーゼ)』中隊は迫りくるBETAの集団を捌きながら目的地へ向けて進んでいた。

あまり時間はない。つい先程の連絡で第666戦術機中隊がレーザーヤークトに成功したという報告が入った。ならば程なく面制圧爆撃が行われるはずだ。その前に早急に中隊の退路を確保、自分達も戦域から脱出しなければならない。

『ニエトペーゼ01より総員に伝達、どうやら東ドイツ第666戦術機中隊はレーザーヤークトに成功した模様、が、その後地中から出現したBETAの急襲を受けて難儀しているとのことだ。…これより連中の救出に向かう! 雑魚共は放っておいて先に進むぞ!』

第401戦術機部隊を率いる壮年の男性、ニエトペーゼ01ヤン・コシチュシニコ大尉の号令に中隊のメンバーは了解、と応答するとBETAの始末もそこに各々が操縦するバラライカをBETAの攻撃の届かない上空へと飛翔させる。

その中の一人ニエトペーゼ05シルヴィア・クシャシンスカはバラライカを飛ばしながらも弾薬、跳躍ユニット内の推進剤残量を確認する。

(36mmは…、まだ7割以上残っている。推進剤も十分、か…。…何事もなければどうにか無事帰還できそう、かしら…)

先程のBETAとの交戦で大分弾薬を消費してしまっただけはいるものの、この後の「メインイベント」に使用するには十分な量が残っている。推進剤も往復するだけならば十分足りるだろう。

最もそれでも楽観視できないのがBETA戦なのだが。BETAの行動パターンは単純なように見えて予想がつかない。一見戦況が有利に進んでいるように見えても予想外な行動でそれを覆してくるのがBETAなのである。そう、例えば…。

『……総員傾注! 諸君に少々悪い知らせだ。レーザーヤークト成功

後に突如地中から突撃級相当数を含むBETAの大群が出現、第66戦術機中隊は分断されたらしい。これより退路確保と別任務でBETAの中で孤立している中隊隊員の救出任務の為にわが中隊から二名人員を送ることとする』

(…これだものね)

コシチュシユコ大尉の号令にシルヴィアは疲れた表情で深々と息を吐き出す。

レーザーヤークトには成功したものの今度は地中から出現したBETAとの乱戦に突入、ベラルーシはミンスクハイヴが存在するからなのかハイヴ近辺のこの辺りではそのような突発的なBETAの襲撃がしばしば起きている。この為に本来ならば最前列に居る突撃級やら最後尾にいる要塞級が何の前触れもなく出現する事もあったり、挙句ようやく駆逐したはずの光線属種までもが再出現することだつてありえるのだ。熱源探知を見たところどうやら光線属種はいないようであるがそれでも多数のBETAを捌きながらの救出任務は骨が折れる。

『ニエトペーゼ04、05、そのBETAに喰われかかっている東ドイツの衛士の救出を頼む。東ドイツに貸しを作ってこい』

『了解！』

「了解。…全く、世話の焼ける東ドイツ最強さんね」

コシチュシユコ大尉の命令にニエトペーゼ04は張りのある声で、シルヴィアは最後に小声で一言呟きながらも応答する。一体どれほどのBETAが地面から湧き出てきたかは知る由もないが最悪手持ちの弾薬では足りなくなる可能性がある。近接戦闘もできないわけではないが出来得る限り避けたいところだ。とんだ貧乏くじをひかされたシルヴィアはばれないようにこっさり舌打ちをする

「やれやれ、少し面倒だけれど、これも仕事かしらね」

そう呟きながらシルヴィアは軽く溜息を吐いた。

カティアSIDE

「くっ、このっ！近寄るなあ!!」

雪崩のごとく押し寄せるBETAの群れの真ただ中、たった一人残されたカティアは次から次へと迫りくる戦車級へと弾丸を撃ち込んでいく。一頭一頭確実に排除できてはいる、が、BETAは次から次へと姿を現しきりが無い。前後左右をBETAに囲まれた状況の中でカティアは額に冷や汗を流す。

「…絶対、絶命でしようか…」

己の置かれた危機的状况にカティアは苦しげに表情を歪める。弾丸も残り少なく、推進剤の残量も心許ない。今は接近してくる戦車級に近接短刀を振るって排除しながらどうか持ちこたえてはいるもののいずれ短刀も強度に限界が来てへし折れるだろう。そうなったらこの無数のBETA相手に持ちこたえられるか…。

ふと己が無数のBETAに囲まれ、喰われるところを想像してしまうカティア。その瞬間、まるで背中に氷が押し付けられたかのように背筋に寒気が走り、操縦桿を握る掌には汗がにじみ出てくる。

「……………!!」

必死に恐怖を押し殺して迫りくるBETAへと弾丸を撃ち込み続けるカティア。こんなところで死ぬわけにはいかない…！自分には、自分にはまだ東ドイツでやるべき事があるんだから…!!心の奥底で叫びながらカティアは今にも恐怖で泣き出しそうな己を叱咤する。…が、現実は無常である。彼女の決意とは裏腹に、ついに突撃砲内の弾丸は底をついてしまう。

「……………そ、そんな!!」

慌てて次弾を装填しようとするカティア、が、予備の弾丸は先程のレーザーヤークトで全て使い切ってしまったっており、先程撃ち尽くしたものが正真正銘最後の弾装であったのだ。

やむを得ず突撃砲を投げ捨てて短刀を構えるカティアのバラライカ、だが、数が多すぎる。闘士級や戦車級のような小型種だけでは無い。要撃級や突撃級といった大型種までいる。この群れのただ中を短刀一本で切り抜けられるのか…、カティアの表情に段々と絶望の色が浮かび上がってくる。

「お父さん……………、テオドル、さん……………」

自分から断った以上もはや味方からの救援は期待できない。此処までなのか、折角助けて貰った命も、父のやりたかった事を成し遂げるといふ誓いも、もうこれまでなのか…。

カティアは歯を震わせながら砂糖に群がる蟻のように己に襲いかかるBETAの大津波をただ茫然と眺めるしかなかった。

脳裏に浮かぶのは最後に見た父の顔と己を助けてくれたテオドルの顔、それでもまだ抗おうとカティアは操縦桿を必死に握りしめる。

と、その時、突然突撃砲の射撃音と共にカティアのバラライカに取りつこうとしていた戦車級が毒々しい血を撒き散らしながら吹き飛ばされる。目の前のBETAだけではない、カティアの周囲を取り巻いていたBETAが次々と血を撒き散らしながら唯の肉塊へと変貌していく。

「…え？」

もうお終いかと覚悟して居た瞬間に突如差しのべられた天の手にカティアは茫然と視線を真上に向ける。彼女の視線の先にあったもの、それは紛れもなく己が搭乗する機体と同じMig-21バラライカ。だが、よく見ると機体色が東ドイツのものと異なり、それに何より左肩には『黒の宣告』中隊のトレードマークである666の数字が無い。

「テオドルさん達、じゃない…？」

助かったということへの現実感のなさにカティアはただ一言それだけを呟く。と、突如網膜投射されたモニターに銀髪で無表情な女性の姿が映し出される。見覚えのない顔と東ドイツのものとは細部が異なる衛士強化装備からみて己を助けてくれたバラライカ二機の内どれか一機に搭乗する衛士なのであろうとカティアは茫然と思った。

『こちらポーランド人民軍第401戦術機中隊、ニエトペーゼ所属のシルヴィア・クシャシンスカ。そのバラライカの衛士、もしも生存しているなら応答を願いたい』

若干棒読み気味で無機質な、まるで台本でも読んでいるかのような声がヘッドセットから響いてくる。それにハッと我に返ったカティ

アは慌てて返答を返す。

「ひ、東ドイツ国家人民軍所属、第666戦術機中隊『黒の宣告』所属、カティア・ヴァルトハイムです!!」

「…了解したわ。ならまた連中が来ないうちに脱出するわよ。推進剤は残り何割?」

「残り三割です!」

「…どうにか此処を突っ切れそう、か…。なら長居は無用ね。ニエトペーゼ04、遭難者の保護を完了した!直ちにこの場を脱出する!!」

『了解!!』

こうしてカティアはどうかこの危機的な状況を脱することができたのだった。が、機体の損傷、推進剤の消耗具合から彼女は中隊と合流する事が出来ず、ポーランド人民軍へと一時的に保護される事となるのであった。

第666戦術機中隊『黒の宣告』SIDE

それから少し遡り、カティアと分断された他の黒の宣告中隊メンバーは残り少ない弾丸で迫りくるBETAを撃退していた。が、もはや弾丸も残り少なく、命綱である多目的追加装甲も既に光線級のレーザーで撃ち抜かれて使い物にならなくなって放棄している。

グレーテルの言うとおりのままここに居れば中隊は全滅しかねない。ここは分断されたカティアを見捨てて脱出するのが最善手だろう。だが…。

『総員傾注!これより我等はBETAの群れを突破して撤退する!全員高度を取れ!!光線属種が居ない今狙い撃ちにされる心配はない!』

「…な!?ど、同志大尉!!」

アイリスデイナーの号令に思わずテオドールは眼を剥いた。画面に映るアイリスデイナーの表情はいつもと変わらない。彼女が任務遂行の為ならば自軍を見捨てるという主義であることは重々承知していたものの、これまで自軍の衛士をBETAの群れの中に置き去りにするという事も、見捨てるという事もなかった。無論既に死亡した

者や大破した機体などは別ではあったが、少なくとも彼女は今日まで自軍の衛士が危機に陥ったならば可能な限り救出しようとしていた。彼女なりの仲間意識や良心か、あるいは貴重な衛士や戦術機を失いたくはないからなのか、その理由は不明ではあるが少なくともそれに關してはテオドールも認めてはいた。

そのアイリスディーナがカティアを見捨てろという。確かにカティアは自分を置いて逃げろとは言ったがまさかその事を真に受けて…。

そんなテオドールの心中を察したのか、アイリスディーナは表情を僅かに崩すと口元に微かな笑みを浮かべる。

『そんな顔をするな。ヴァルトハイム少尉ならば大丈夫だエーベルバッツハ少尉。少しは私を信じろ』

「信じろだど?! BETAに囲まれたあの状況で一人で脱出できると本気でそう思っているのかアンタは!! 唯でさえ弾丸や推進剤も枯渇しかけている状況で……」

『そんなことは分かっている。だが心配するな。そろそろ彼らが来る頃だからな』

逆上して己に食ってかかるテオドールをアイリスディーナはやりわりと宥めながら彼の怒鳴り声を遮る。明らかにその表情は救出を諦めて部下を見捨てようとしている色は見受けられない。

「……彼ら? 一体何処のどいつが……」

『こちらポーランド人民軍所属第401戦術機中隊、ニエトペーゼ! 貴官らは東ドイツ国家人民軍所属第666戦術機中隊で間違いないか!』

なおも口を開こうとするテオドールだったが、その言葉は最後まで紡がれなかった。突然彼の言葉を遮るかのように何者かの声が響き、同時に背後から耳慣れた轟音、明らかに戦術機の跳躍ユニットが発するものであるジェット音が複数聞こえてくる。弾かれたかのようにジェット音が聞こえる方向へと振り向くテオドールは、次の瞬間驚きのあまり目を剥く事となった。

背後から聞こえたジェット音の正体、それは隊列を組み飛行する1



0機の戦術機部隊であった。機体は全てテオドール達が駆るものと  
同じバラライカ、だが、機体色が東ドイツのものと若干異なり、何よ  
り右肩の国旗のペイントが東ドイツのものではなく隣国のポーラン  
ドの国旗がペイントされている。

突如乱入してきた10機のバラライカは群がるBETAへ次々と  
弾丸の雨を撃ち込んでいく。砂糖に群がる蟻の如く“黒の宣告”中  
隊へと群がっていたBETAは横合いからの攻撃に対処もできず、吹  
き荒れる36mm弾丸の豪雨にただ無防備に身をさらす事しかでき  
なかつた

「ポーランド人民軍の、戦術機部隊…？な、何でこんなタイミングに  
…」

困惑のあまり茫然と目の前の光景を眺めるしかないテオドール。  
一方アイリスデイーナは突如出現したポーランド人民軍に対して特  
に動揺した様子はなく、淀みなく何者かの問い掛けに対して返答を返  
す。

『噂をすれば、か…。こちらドイツ民主共和国国家人民軍所属第6  
66戦術機中隊“黒の宣告”中隊に間違いない。私が中隊長を務め  
るアイリスデイーナ・ベルンハルトだ』

アイリスデイーナはまるで肩の荷が下りたかのような安堵の表情  
を浮かべている。どうやら彼女はこの援軍が来るといふ事を事前に  
知っていたようであり、所属部隊名と己の名前を淀みなく答えてい  
る。彼女が返事を返すや否や、援軍の隊長と思われる人物の応答が再  
びヘッドセットから響いてくる。

『了解した。既に退路は確保してある。貴官らはすぐさま脱出せ  
よ。取り残された衛士に関しては既にわが隊の二機が救出に向かっ  
ているから心配しなくてもいい』

『助かる。この借りはいつか必ず返させていただきます』  
『気にするな、これも仕事だ』

通信はそこで切られると、隊長機らしい一機のバラライカ、アイリ  
スデイーナの駆るものと同じく頭部に大型のセンサーマストが備え  
られたPF型もまた突撃砲を構えてBETAの群れへと向かってい

く。それを見届けるや否やアイリスデイーナは轟くような声で部下達に号令を出す。

『総員傾注!!これより我等はこの戦域より撤退する!!同胞たるポーランドの援護を無駄にするな!!急げ!!』

『『了解!!』『りよ、了解!!』』

残った跳躍ユニットを吹かしてBETAの手が届かぬ高度へと飛翔する七機のバラライカは、そのまま飛行して戦域を離脱していく。光線属種を掃討した以上、飛行する戦術機を攻撃できるBETAは今のところ存在しない。無論増援でまた出現する可能性も無きにしても非ずだがそうなっても例のポーランドの連中が面倒を見てくれるだろう。気がかりなカティアもあの中隊のメンバーが救出してくれるとの事であり、手放して喜ぶわけにもいかないもののどうか危機的状況は回避できたといつていいのかもしれない。

今日もどうにか生き延びた…、安堵のあまり全身に疲労がどつと押し掛かり、背もたれへと体を横たえて深々と息を吐き出すテオドル。と、唐突にモニターにアイリスデイーナの顔が表示される。その表情には穏やかな笑みが浮かんでいる。

『だから言っただろうテオドル、大丈夫だと』

そう語る彼女の表情は、どこことなく悪戯が成功した子供のようであった。

ベラルーシ州ブレスト、ハンツアヴィチワルシャワ条約機構軍軍事基地。

現在東ドイツ国家人民軍がミンスクハイヴ攻略の為の基地として利用しているそこに、レーザーヤークトの任務を無事終えて生還した

「黒の宣告」中隊もまた帰投していた。

衛士達が搭乗する戦術機の整備、修理を一手に担う専用格納庫、その一角に横一列に整列する「黒の宣告」中隊一同へと、アイリスデイーナは視線を送っている。全員任務を終えた直後であるため衛士強化装備のままである。

「全員揃ったか。ならば任務が終わって疲れているところを悪いが諸君らに知らせがある」

「ただ一人を除いて」中隊全員がそろっている事を確認したアイリスデイーナは口を開くや否やそう切り出した。彼女の声に中隊のメンバー数人は体を強張らせる。特にテオドールはこの場に居ない中隊メンバー、カティアの面倒を任されていたが為に内心では少なからず緊張を覚えていた。アイリスデイーナは構わずに言葉を続ける。

「たった今バラナヴィチワルシヤワ条約機構軍事要塞より連絡が入った。カティア・ヴァルトハイム同志少尉は無事ポーランド人民軍の手によって保護されたとのことだ。主立った外傷は特に無いとのことらしい」

アイリスデイーナの言葉に隊員達の間から安堵の声上がる。テオドールもまたその一人であった。如何に増援が来たとはいえ相手は千を超えるBETAの群れ、如何に万全の中隊であり光線属種もないとはいえまともに相手をすれば押し潰されかねない。もしも中隊もろともカティアが押し潰されたら、否、それ以前に救出前に既にカティアが死んでいたとしたなら…、そんな予感が幾度も脳裏に浮かんでいたのである。

「静粛に、同志の無事を喜びたい気持ちは分かるが落ち着け。さて、先程も言った通りカティア・ヴァルトハイム少尉は無事だ。本来ならすぐにでも迎えに行きたいところだが生憎と戦況がそれを許さない。折を見てバラナヴィチにまで迎えに行きましょう。その時になったら再度連絡をする」

アイリスデイーナはそこまで語ると一度口を閉じ、目の前に並ぶ隊員達へと視線を巡らせる。

「さて、何か質問はあるか？答えられる事、及び私が知っている事に關しては答えるが」

アイリスデイーナの言葉に一同に一瞬沈黙が走る。が、数秒後、列の中からおぼおぼと手を上げる者がいた。手の主はアネット・ホーゼンフェルト少尉。普段は明朗快活なその表情は現在は不安げに歪んでいた。

「ホーゼンフェルト少尉か。いいだろう、言ってみろ」

「はい、あ、あの……カティアは、カティアは本当に大丈夫なんですか？もし、もしもですよ、ポーランド人民軍の基地に、その、奴らの犬がいたら……」

アイリスデイーナに促されて発言したアネットの言葉に一瞬テオドールの背筋が凍りついた。アネットの言う奴ら、シユタージに対しての警戒が完全に頭から抜けていた。

東ドイツとポーランドは同盟国、当然シユタージ専属の情報提供者がポーランドの基地内部に潜んでいたとしても可笑しくない。此処はベラルーシ、流石に不穏な事を話した瞬間にシユタージの連中が押し寄せてくる、等という事はまずあり得ないだろうが万一この戦争が終結して東ドイツに帰国した瞬間、後ろに手が回るなどという事になりかねないためこの場では不用意な事は話せない。

だが、最近はそのようではなくなったもののカティアはとにかくそういう『不用意な発言』が多い。中隊に編入した時などには何度グレーテルから政治的指導を受けた事か知れない。

もしもポーランド基地にシユタージの犬、情報提供者がいたら？あるいは連中のスパイがいたなら？カティアどころか下手をしたら自分達にまでも連中の手が及びかねない。

その事を認識した瞬間、テオドールの脳裏によみがえるのは、かつて己がシユタージによって連日連夜受けた拷問の数々、夢に出ずとも体に、心の奥底に刻み込まれたシユタージへの恐怖……。思わず床に崩れ落ちてしまいそうになる己自身を必死に抑えこむ。

一方アネットの質問を聞いていたアイリスデイーナは、まるでシユタージが恐ろしくもないかのように表情を変えず平然としている。

「成程……同志少尉の心配も分からないでもない。連中の手はどこに伸びているか分かったものではないからな。だが……シユタージに関しては問題ないだろう」

何でもなさそうに返答を返すアイリスデイーナ。そんな彼女に対して中隊のメンバー、副官のヴァルター、ファム、政治将校のグレーテルを除く三人は唾然としている。そんな彼女達の顔を面白そうに

眺めながらアイリスデイーナは話を続ける。

「元来シュタージはポーランド、ソ連領内等のワルシャワ条約機構加盟国では原則主だって活動できない。地元の治安維持組織の連中ともめ事を起こすのは連中としても出来得る限り避けたい事案だからな。万が一他国との、特にソ連とポーランドとの関係に摩擦が生じようものなら連中も浅い傷では済まないだろうからな」

「加えて連中はかつてポーランドで揉め事を起こしたせいで痛い目を見ている。あの時には危うく外交問題になりかけた事もあったからな。そう簡単にポーランドの、ましてや戦場のど真ん中にある基地にスパイを潜り込ませることなどできまい」

アイリスデイーナの言葉を引き継ぐかのようにグレーテルも眼鏡のブリッジを押さえながらそう語る。

東ドイツの秘密警察、諜報組織である国家保安省、通称シュタージは最大で190万人、大よそ国民の10人に一人というレベルの膨大な数の情報提供者を抱えており、その監視網はかのドイツ第三帝国のゲシュタポ、ソ連のKGBすらも凌駕しているとされている。

実際史実においてベルリンの壁崩壊に端を発する東ドイツ崩壊後、シュタージが記録、保管していた反体制分子とされた詳細な個人情報記録が一般市民にも閲覧可能になったのだが、その結果己の親、兄弟、親友がシュタージの情報提供者であったという事実を知り、その結果として家庭崩壊、極度の人間不信に陥り、挙句精神病を患う者も居たという。

彼らの監視の目は隣国の西ドイツにも伸びており、多くのスパイが“亡命”を装い西ドイツ国内へと送りこまれていたという。

このように国内、及び西側諸国へと様々な監視の目を張り巡らせているシュタージであるが、流石に同じワルシャワ条約機構加盟国にしてその主要国であるソ連、そして実質ソ連の属国とも言えるポーランドへの監視は相応に甘いものとなっている。

二国との信頼だの友情だのといったようなモノなどでは無い。現在の東ドイツは西側からの物流は表向きシャットアウトしており、東側諸国、特にソ連からの援助によって成り立っている。バラライカを

始め戦術機、兵器の殆どがソ連製であるのもこれが理由である。

万が一にも外交問題を起こしてソ連、あるいはポーランドを怒らせてこれらの物流、援助が絶たれた場合、東ドイツは崩壊する事は無いにしても経済、軍事面において手痛い打撃を受ける事となる。そしてそれはソ連のKGB、ポーランドの諜報機関との繋がりのあるシュタージもまた同じである。故にシュタージもそう簡単には両国に手を出せない。万が一亡命者がポーランドに逃げ込んだ場合でも相応の手続きを取らなければ捜査、尋問は行つてはならないという協定が両国間には結ばれている。最もそれは表向きで裏ではスパイを少なからず送り込んでいるというのが暗黙の了解であるのだが…。

ここはベラルーシ、東ドイツからかなり距離があるうえにBETAとの戦場真つただ中。シュタージのスパイも潜んでいる可能性はあるだろうが少なくとも即捕縛される事は無い。国内専用のシュタージ専属部隊、武装警察軍も今回は動くに動けないだろう。

「他に質問は？……なさそうだな。今回の出撃ご苦労だった。またいつ出撃があつてもいいように体をよく休めておくように。以上、解散！」

アイリスデイーナの号令と共に、その日のミーティングは終わりを告げた。

## カティアSIDE

一方その頃、バラナビチにあるポーランド軍専用軍事基地では。

「…名前、カティア・ヴァルトハイム。階級は少尉。現在東ドイツ国家人民軍所属第666戦術機中隊に所属。元は西ドイツ出身かつ国連軍から派遣された部隊に所属していたが部隊は全滅、貴官もBETAによつて殺害されそうになったところを第666戦術機中隊に救出され、その後東ドイツに亡命申請をした、と…。此処まではいいか？」

「は、はい、間違いありません」

基地内の医務室にてカティアは、ベッドに横たわつたまま傍らの椅

子に座るポーランド人民軍所属の政治将校が次々と出す質問に答えていた。内容は東ドイツの時と殆ど変らない。名前、所属、出身地、階級等々…、出される質問に素直に答えていくだけでいい。

全ての質問を終えた政治将校は役目は終わったとばかりに黙りこむ。と、壁にもたれかかり黙りこくっていた壮年の男、東ドイツ軍を救出した部隊である第401戦術機部隊中隊長、ヤン・コシチュシニコ大尉が初めて口を開く。

「それにしてもよくもまあ…、西ドイツから東ドイツに亡命したいなどと考えたものだ。同じ社会主義国家の同胞を悪く言うつもりはないのだがあの国は西ドイツからの亡命者は即スパイと疑ってかかる風潮でな…、知らないわけじゃないだろう？」

「……………」

コシチュシニコ大尉の呆れたような口調にカティアは俯いて口を閉ざしていた。彼の言う事は事実だった。戦場で救出され、第666戦術機中隊に編入された当初、否、今になっても自分が東ドイツの人間に信頼されていないという事が嫌というほど理解していた。

東ドイツの人間にとって資本主義陣営の西ドイツはBETAと同様の仇敵と見做されているのだ。無論国家の印象操作、プロパガンダによるものであるのだが自分のような西ドイツからの亡命者は即座に密告され、シユタージに連行されても文句の言えない立場であるのは間違いないのだ。亡命した当初の己は、そんなことも碌に理解せずに自分勝手なことばかり言って…。カティアの表情が段々と沈んだものへと変わっていく。

カティアの様子の変化に気がついたのかコシチュシニコ大尉はばつの悪い表情でチラリと政治将校へと視線を向ける。が、政治将校はまるで自分でどうにかしろ、と言わんばかりに軽く肩をすくめるのみで一言も口を開かない。薄情な「同志」の態度にコシチュシニコ大尉は重々しく溜息を吐きだした。

「…………ま、いい。貴官の事に関しては既にハンツァヴィチ基地に連絡を送っている。いずれ迎えが来てくれるだろうからそれまではわが軍の保護下に入ってもらおう。…………ああちなみに心配しなくても

シユタージの連中は此処には居ない。よしんば居ても引き渡すような事はしないから安心していい」

「…はい、ありがとうございます」

「もし動けるようになったのなら我が軍の作業の手伝いをしてもらえれば有難い。生憎此方も人手不足でな、ただ飯食らいを置いておく余裕はないんだ」

「も、勿論です！よろしくお願いします！」

カティアはコシチュシユコ大尉と政治将校に向けて頭を下げる。彼女の返答にコシチュシユコ大尉と政治将校は一度顔を見合わせる。とたがいに頷いた。

「よし、なら暫くは此処で休んでいるといい。俺達はこれからミーティングがあるから席を外させてもらおうから貴官の世話は別の奴に任せることにする。…入っていいぞ」

コシチュシユコ大尉が背後のドアに向かって声をかけるとドアがゆっくり開き、ポーランド人民軍専用のBDUを纏った男性の兵士が姿を現す。見たところ年齢はまだ20代程であろうがその茶色い頭髪には所々に白髪が目立っている。見た眼よりも大分年齢が上なのだろうか、とカティアは頭の隅で考える。

だが、彼女の眼が兵士の身につけているあるものを見た瞬間、カティアの目はそれに釘付けになった。それは彼の首から下げられている黒い紐のネックレス、その先端に付けられている鉤状の赤い小さな石であった。その石を見た瞬間、何故かカティアはその石から目が離せなくなっていた。何故なのかは自分でも分からない。だが、どうしてもその赤い石が無意識に気になって仕方が無いのだ

兵士はドアを閉めると姿勢を正して敬礼をする。

「戦車大隊第400野戦猟兵中隊所属、フレデリック・コルベであります！」

兵士の名乗り声を聞いた瞬間、カティアはハッと我に返る。が、誰もその事を見咎める者はいない。実際赤い石に釘づけになっていたのはほんの一瞬の出来事だったのかもしれない。ならば目の前の政治将校やコシチュシユコ大尉に怪しまれないというのも分からない



でもないが……。カティアは心の中で首をかしげる。

「うむ、忙しい中すまないな。ヴァルトハイム少尉、彼の名前はフレデリック・コルベ軍曹。当基地の戦車部隊に所属している者だ。同志軍曹、彼女は東ドイツのヴァルトハイム少尉。暫く彼女の面倒を見て貰いたい」

「……へ？い、いやですけど俺には戦車の点検や整備が……」

コシチュシニコ大尉の突然のセリフに兵士、フレデリックは困惑を隠せない。確かに戦術機部隊に比べれば戦車大隊はまだ手が空いていると言えなくもないのだがそれでも此方には此方のやるべき仕事があるのだ。が、そんな彼の反論に対して政治将校は有無を言わせぬ視線を向ける。

「他の人間にやらせる。問題無い。……何か問題でも？」

「……いえ、特にありません。喜んでやらせていただきます同志大尉、同志中尉」

上の命令、特に政治将校からの命令に逆らえば冗談抜きで首が飛びかねない。フレデリックは顔を引き攣らせながら再度敬礼する。彼の返事に政治将校は黙って頷くと椅子から立ち上がって廊下へと出ていく。彼の背中を目で追いながらコシチュシニコ大尉はフレデリックの肩を軽く叩き、「ま、頑張ってくれ」とまるで他人事のように声をかけると政治将校の後に続いて出て行った。彼らの背中を追いながら、フレデリックは重々しく溜息を吐きだした。

「……はあ、まったくまた面倒な仕事押しつけやがって……。こういうのは衛生兵の仕事だろうが……」

「……あ、あの……」

白髪交じりの髪を掻きながらぼやくフレデリックにカティアは恐る恐るといった風に声をかける。そこでカティアの存在に気がついたフレデリックは彼女へと視線を向ける。そこに居たのは己を不安げに眺める何処となく小動物染みた雰囲気はまだ年端もいかない少女の姿。東ドイツとポーランドという国の違いはあれど、目の前の少女は己よりも階級が上、ならば此処は敬語で話した方がよからうかとフレデリックは考える。

「えーと…、ヴァルトハイム少尉、でよろしいでしょうか？」

「あ、あの、敬語はいいです…。私、どう見ても軍曹より年下ですので、敬語を使われてもどうにも違和感が…」

「へ？…あー、まあ、それもそうか…」

フレデリックはフム、と顎に手を当てながら少し考えると何を思ったのか左手をカティアに差し出した。突然のフレデリックの行為にカティアは思わず啞然としてしまい、とっさに反応を返せない。

「…えっと…」

「何ポカンとしてるんだよ、握手だ握手。まあ、お仲間が迎えに繰る短い間の付き合いになるだろうけど、とりあえずよろしく頼むわ」

「……………はい！」

フレデリックの言葉にカティアは顔を綻ばせて彼の手を握り返す。先程と打って変わって元気のいい反応にフレデリックも苦笑するしかなかった。

その時、フレデリックのペンダントの石が何かに反応するかのよう  
に赤く輝いたのだが、両者共にそれに気がつく事はなかった。

## 第4話 I S O l i e r u n g ー 孤 立 ー

ベラルーシ州ブレスト ハンツアヴィチワルシヤワ条約機構軍基地にて。

「……………」

基地内部に存在する『黒の宣告』中隊専用のミーティングルーム。ここでは中隊メンバーであるアネットが落ち着きなさそうな表情で何かをブツブツ呟きながら部屋の中を行ったり来たりと歩きまわっており、彼女の同僚であるテオドルとイングヒルトは片や呆れた表情で、片や苦笑いを浮かべながら彼女の姿を眺めていた。

「…おいアネット、いつまで檻の中の熊のようにうろろしてやがるんだ」

「うっさい！しょうがないじゃんカティアの事が心配なんだから！！アンタも少しは心配したらどうなのよテオドル」

「してもしょうがないだろうが。ポーランドの基地に保護されている以上俺達にできる事は何も無い。幸いシュタージの連中が手を出せないっていう中隊長と政治将校のお墨付きがあるんだ、此処は待つしかねえだろ」

「エーベルバッハ少尉の言うとおりですよアネット、此処は信じて待つしかありませんって」

「……………むう」

何処か冷淡なテオドルに反発していたアネットであったが、流石に親友であるイングヒルトの言葉もあつては素直に従うほかない。アネットも二人と同じく近くにあったパイプ椅子へと腰を下ろす。

「でも…、やっぱり心配だよ。幾らシュタージがいなくてもポーランドの連中がカティアをどうするか分かったもんじやないし…」

「……………この過保護が」

「ああ!?!テオドル今何て言った!!今何て言ったのよ!!」

「あ、アネット落ち着いて！エーベルバッハ少尉もいちいち煽らないでください!!」

テオドールの煽りに激昂するアネット、そんな彼女を必死に宥めるイングヒルト。

現在この一室には彼ら三人しかいない。残るメンバー、中隊長アイリスデイーナと副官のヴァルター、次席指揮官のファムと政治将校のグレーテルはこれからのBETAとの戦いについてか、ポーランド基地に保護されているカティアをいつ迎えに行くかを協議しているのかこの場には居ない。どちらにせよアイリスデイーナの命令が無い事には戦術機で出撃することはできない以上、自分達で勝手にカティアを迎えに行く事は出来ない。

ならば此処は待つしかない。カティアも社会主義国家で妙な事を言えばどうなるかは身に染みているはず、ならばポーランドの基地でも多少は言動を慎んではくれるだろう。

あと懸念するべきはポーランドの基地に突然BETAが襲撃してくる事だけであるが…。

(…もし、あいつがどさくさに紛れて戦死してくれば…)

突如として頭を過る思考、もしもカティアがBETAに襲われ戦死すれば、もう己はあんな面倒な荷物を背負う必要はなくなる。たださえ彼女は西側からの亡命者という、明らかに己にとってマイナスとも言える要素を持っているのだ。だがそれだけでは無い。彼女の父親はかつて東ドイツの英雄とも言われた將軍、にも拘らず何らかの理由によって記録上から抹殺された人間なのだ。抹殺された理由は不明だが、まず確実に東ドイツの体制に反抗した罪か何かであろう。

此処が本国から離れた基地である故に今のところはシュタージに連行されずに済んでいるものの、もしもこの戦争が終わり、東ドイツへと帰国したならば、まず間違いなくカティアはシュタージからの尋問を受ける事になる。そしてもしもカティアが不用意な事を喋ろうものならば、連中の矛先は自分達666中隊に…。

その考えが浮かんだ瞬間、脳裏にフラッシュバックされるのはかつてシュタージによって受けた数々の苛烈な拷問、尋問…。己の体に文字通り刻み込まれた痛みと恐怖に無意識に手が震えてくる。テオドールは両手を強く握り、震えと恐怖を無理矢理抑え込むと深々と息

を吐き出した。

もうシユタージなどとは関わりたくもない、だが、もしもカティアとこれ以上かかわれば自分は再び奴らの手によって尋問という名の拷問、果てには処刑されて命を失う羽目になりかねない。

ならば寧ろ戦死してくれば好都合、人員は足りなくなるだろうがそれもいずれ補充されて……。

『テオドールさん……』

「……………」

そこまで考えた瞬間に、テオドールの脳裏をよぎるのは記憶に残るカティアの笑顔、そしてそれと重なるように浮かび上がる己の義妹、レイズの笑顔と己に向かつて手をさしのばす最後の姿……。

その刹那胸に浮かぶのは、「本当にそれでいいのか」という考え。本当にカティアを見捨てても構わないのかと……。

「……………ール、テオドール！ちよつと聞こえてるの!!」

「……!?あ、ああ何だアネットかよ……、いきなり耳元で怒鳴るなうるせえだろうが……」

突然のアネットの怒鳴り声に我に返るテオドール、見るとアネットが眉を吊り上げた怒り顔で、イングヒルトはそれとは真逆の心配そうな表情でテオドールを眺めている。

「一体どうしたつていうのよボーつとして?……もしかしてアンタもカティアの事が……」

「んなわけあるか!!……………で、一体何の用だよアネット?何か言いたい事があるんならさつさと見えよ」

己の呆けた顔を二人に見られた事に舌打ちしながらテオドールはアネットにそう促す。するとアネットの表情が何処か困ったような様子に変化し、暫く視線を左右にさまよわせた後にチラリと隣に立つイングヒルトへと視線を送る。此方に視線を送られたイングヒルトは一瞬ムツとした表情を浮かべるが、やがて諦めるように溜息を吐くと気まずそう無表情で口を開いた。

「あ、あのですね、イエツケルン中尉がエーベルバッハ少尉に用事があるって……」

「……何？」

イングヒルトの言葉にテオドールが反射的にドアへと視線を向けると、そこには己に向けて突き刺さるような鋭い視線を向けてくる政治将校、グレーテルの姿があった。

「…それで、同志中尉、この俺に一体どういう用件で…？」

「フン、もう言うまでもないだろう？ 貴様が保護者として面倒を見ている西側からの亡命者について、だ」

あの後テオドールはグレーテルに連行され、雪の降りしきる基地の外へと出ていた。基地内部にはシュタージが仕掛けた盗聴器がある。本国に比べれば仕掛けられている数は少ないものの何処で聞かれているか知れたものではない。内密の話ならば基地の外で、二人だけであるというのが監視国家である東ドイツの常識であった。

そして、基地の外に連れ出されたテオドールに向かって投げかけられた言葉、それはやはりというべきか今この基地に居ない中隊の衛士、カティア・ヴァルトハイムについてであった。

「私が貴様に言いたい事は一つだ、カティア・ヴァルトハイムの素性について貴様が知っている事、一つ残らず話せ。他言はしないでおいとやる」

有無を言わさぬ口調で此方を問い詰めてくるグレーテル。眼鏡の奥の眼光は此方を鋭く見据えている。一切の嘘は許さない、というグレーテルの意思が嫌がおうにも眼光から伝わってくる。

とはいえここで本当の事を話すわけにもいかない。もしも自分の知りうるカティアの訴状を洗いざらい吐こうものなら政治将校である彼女はまず間違いなく上層部にその事を報告する。もしも軍上層部にカティアの素性がばれようものなら、まず間違いなくカティアは連行され尋問を受ける。政治将校の行う尋問がどれほどのものかは知らないが、恐らくシュタージのものと大差ないのだろう。

心の内によみがえる不快さ、忌々しさに思わず舌打ちしそうになるのを抑えながらテオドールは無表情で淡々と返事を返す。

「……知りません。俺は同志大尉の命令であいつの面倒を見ているだけです」

「あの娘の救出には貴様も立ち会ったのだろうか？彼女の搭乗していた戦術機の内部に素性に関する何かは無かったのか？」

「それらしきものは何も発見できませんでした。分かったのはあいつが西側の衛士で前々から東ドイツに憧れていた、ということだけで……」

頭の中で何度も暗唱していた通りに、もしもグレーテルにカティアの事について問い詰められた時の為に考えておいた解答がつつらと流れるようにテオドールの口から出てくる。少なくとも半分は嘘を言っていない。実際カティアの所持していたペンダント以外にカティア自身の身元を証明する物は戦術機のコックピット内部にも何一つ存在しなかった。

テオドールの返答を聞き終えたグレーテルはなおも鋭い眼光をテオドールに向けている。テオドールも彼女の眼光を受けとめながら此方も逆に睨み返す。雪風が吹く中睨みあう二人……であったがやがてグレーテルは呆れたかのようにフン、と鼻息を鳴らした。

「……フン、まあいい。本人が戻ってきたときに問い詰めればいいだけの話か……。今回はそういう事にしておいてやる」

「ありがとうございます、同志中尉」

「……同志大尉に聞いても適当にはぐらかされるし、貴様もこの有様か……。まあどの道武装警察軍も此処までは来ないか……。あの噂が本当だとするなら尚更……」

「噂？」

グレーテルが小声でぼそりと呟いた言葉に思わず反応するテオドール。彼の反応にグレーテルは失言したと言わんばかりに顔を顰める。そんな彼女の内心を知ってか知らずか返答を求めるように黙って此方に視線を向けてくるテオドール。グレーテルは暫く視線を反らして沈黙していたが、やがて「……あまり人に言うんじゃないぞ……」と前置きして口を開いた。

「……殺人事件があった、とのことらしい」

「殺人事件？」

「ああ、どこの誰がやったかは知らないが国境警備のシユタージの職員を全員惨殺した事件があったらしい。当然被害者は全員武装していたらしいが一人も生存者はいなかった、とのことだ。……いいか、あくまで噂だぞ？ひよつとしたらシユタージが流したデマの可能性もあり得る」

皮肉気に肩を竦めながら語るグレーテル。テオドールは彼女の話に黙って耳を傾けている。

シユタージの人間が何人死んだところで己にとってはどうでもいい、寧ろ己の両親と義妹を奪ったシユタージによくぞ一矢報いてくれたという称賛の言葉が浮かんでくる。政治将校を目の前に言うつもりは毛頭ないが。

だがグレーテルの言うとおり、これはもしかしたらシユタージの罠かもしれない。あえてありもしない事件をでっち上げ、それに対する反応から反体制の人間をあぶりだす魂胆があるのかもしれない…、テオドールは表情を引き締める。

「…まあただの噂にしては武装警察軍が直々に調査したりと怪しい点があるのだが…、ま、本国から離れた戦地に居る我々にとっては関係の無い話だ」

そう言うところグレーテルはテオドールへと再び視線を戻す。

「…が、もしも貴様が同志大尉と組んであのガギを反社会的な理由でかくまっているというのなら、話は別だ。密告者から奴らに漏れようものなら隊の存続にすら関わりかねん。出来得る限り禍根は絶っておかねばならん」

「…同志大尉？同志大尉とカティアが一体何の関係があるって言うんです？」

グレーテルが口走ったアイリスデイーナの名前に再度反応するテオドール。再度の失言にグレーテルは頭痛を覚えたかのように額を抑えてテオドールから目を反らす。テオドールは構わずグレーテルに食ってかかる。

「答えてください！こっちはあいつの保護者押し付けられてるんだ



！何も知らないままにいるのは我慢できない！」

「貴様……、ツチ、まあいい。どうせいつ死ぬか分からない身だ、駄賃代りに教えてやるか……」

テオドールの勢いに根負けしたグレーテルは悪態をつきながらも口を開き、語り始めた。

カティア S I D E

「……此処が食堂、この通路を右に行くと兵士達の居住スペースがある」

「は、はい……」

「そしてそこを曲がればトイレがある。覚えておけよ？途中で忘れて漏らすなんてことは……」

「く!!も、漏らしません!!私、お漏らしなんて赤ちゃんの頃から一度もした事ありませんから!!」

同じ頃、バラナビチ基地に保護されているカティアは、どうにか歩けるようになるまで回復したためフレデリックに基地の内部を案内されていた。途中すれ違う人間はしばしばカティアへと視線を送ってくるが直ぐに興味を無くしたかのように歩き去っていく。

カティアはフレデリックから説明を受けながら基地のあちらこちらに興味深そうな視線を向けていた、が、先程フレデリックが投げかけた冗談に思わず顔を真赤にしながら大声で反論してしまう。まさか怒鳴られるとは思わなかったフレデリックは思わず眼を丸くして啞然としていたもののやがて表情にはどこか意地悪げな笑顔が浮かんでくる。突如ニヤニヤと笑いだしたフレデリックにカティアは思わず背後に後ずさった。

「うう、な、なんですか……」

「はっはくん?そうかそうかお前さん、実は漏らした事があるな?それもガキの頃なんかじゃなくてつい最近に……」

「し、してません!!お漏らしなんてしてません!!決して、初陣の時に怖くてお漏らししたなんてことは……」

「おうおう成程、初陣の時に、ねえ……」

顔を真赤にして吼えるカティアにどこ吹く風な態度をとりながらフレデリックはクツクツと含み笑いを浮かべながら歩を進める。速足で歩くフレデリックを追いかけながらもあれこれ文句を言うカティアであつたが、やがて諦めたのか文句を言うのに疲れたのか口を閉ざして黙りこむ。流石にフレデリックも少々からかいすぎたと思ひ、苦笑いを浮かべる

「あー…、その、なんだ、すまん、少し言いすぎた」

「…別にいいですよ、どうせ私は赤ちゃんみたいにお漏らしするみつともない衛士ですもんね、フンツ」

「……」

リスのように頬を膨らませてそっぽを向くカティアにフレデリックはやれやれと肩をすくめる。間違ひなく怒っているのだろうがその姿は寧ろ可愛らしさすら覚えて笑みすら浮かんでくる。が、流石に笑いでもしたら今度こそカティアの機嫌は最悪なレベルにまで悪化する事だろうことが予想できたため、どうにかこらえる。

それからしばらくはお互い黙って廊下を歩いていた。時折部屋の説明や通りすがつた知り合いとの挨拶でフレデリックが喋る事はあつたもののそれ以外では両者ともに一言も口を開かなかつた。とはいえこのままだんまりでいるわけにもいかない、何か話さなければならぬが一体どうするべきか…。歩きながら考えるフレデリックとカティアであつたがふとカティアの視線がフレデリックの胸元で揺れる赤い石のネックレスへと向けられる。

「そういえば、気になつてたんですけれどそのネックレス…」

「ん？…ああこれか」

己のネックレスを指摘されたフレデリックは赤い石を指で軽く撫でながらどこか寂しげな微笑を浮かべる。

「これは、まあ幸運のお守りみたいなものだな」

「お守り、ですか？」

「ああ、五年前に九死に一生を得た時にこれを見つけてな、それ以来肌身離さず身につけているんだよ」

何処か昔を懐かしむ表情で語るフレデリック。その表情はどこと

なく悲しみや悔恨、何かを後悔しているかのような色が窺えた。彼の表情の変化を見た瞬間、カティアはハツとする。もしかしてあのネットワークスは戦死した友人か恋人の形見なんじゃあ…、余計な質問をしたせいで彼のトラウマを刺激してしまったのでは、と顔を青ざめてしまう。

「あ、あの…：すいません、フレデリックさん…」

「？いやなんで謝るんだお前？別に謝るような事してねえじゃ…」

「だ、だってそのネットワークス、フレデリックさんの恋人の形見なんでしょ!」

「…：はあ!」

カティアの発言にフレデリックは思わず啞然とする。本人からすれば全く予想もしていなかった発言に暫く言葉も出せずにいる。が、そんな彼に構わずカティアは早口で捲し立てる。

「だ、だってフレデリックさんネットワークス見て悲しそうな顔してましたから…、それ大切な人からもらったものじゃないかって…」

「チゲえよ!!人の話し聞いてやがったのかお前は!!これは拾った石!彼女の形見でも何でもないわ!!つーか俺は生まれてこのかた女と付き合ったことなんざ一度たりともないわ!!」

カティアの言葉にフレデリックは顔を真赤に染めながら絶叫する。突然怒り出したフレデリックにカティアは謝るのをやめてポカンとしてしまう。

「…：え?そ、そうだったん、ですか?」

「そうだ!!…：ったく、何でいちいちこんな事説明しなきゃならねえんだ畜生が…」

と、忌々しそうにブツブツ呟きながら歩くフレデリックの後姿を、カティアは呆けた表情で眺めていたが、直ぐにハツと我に返ると小走りで彼を追いかけるのだった。

その後、基地の内部をほぼ見て回った二人は、最後に基地の屋上へと向かう事になった。

基地の屋上は当然のことながら屋外であり、外は吹雪が吹き荒れる真ただ中である。そんな場所に好き好んでいく人間は殆どおらず、精々いるとするならば一人になりたい人間か、誰かと内緒で話をしようとする人間だけであろう。

階段を上り屋上へと通じるドアの前に到着したフレデリックとカティア、鉄のドアを開けた瞬間、そこから雪と風が室内へと吹き込んでくる。フレデリックはそれに構わず屋上へと足を踏み出し、カティアもそのあとへと続いて屋上に出る。

「此処が屋上……と、どうやら先客がいるようだな」

「え……あ、あの人は!!」

フレデリックの視線の先、そこに居たのは屋上の柵にもたれかかって雪雲に覆われた暗い空を見上げる豊かな銀髪の女性、ポーランド人民軍所属の衛士であり、カティアの命の恩人であるシルヴィア・クシャシンスカ少尉であった。

相も変わらずの無表情で吹雪く空を見上げていたシルヴィアは、屋上に現れた二人に気がついたのかフレデリックとカティアへと視線を送ってくる。

「あら、誰かと思ったらフレデリック、また屋上で吹雪でも浴びに来たのかしら?」

「チゲえよシルヴィア、て言うかお前も人の事言えねえだろうが……。今日はちよっとこのお嬢ちゃんに基地を案内してやってるところなんだよ」

「あ……お久しぶりです!!先日は助けていただいて本当にありがとうございます!!」

フレデリックの言葉を遮るようにカティアは大きな声で礼を言いながら勢いよく頭を下げる。目の前に居るのは己にとっては命の恩人、彼女が救出してくれなければ自分はこの場でこうして生きてはいなかったのだ、到底感謝してもしきれない。

一方のシルヴィアはカティアの大声でようやく彼女の存在に気がついたかのように、眉一つ動かさぬまま視線のみをカティアへと向ける。

「ん？ああ、そう言えば貴女……………誰だったかしら？」

「…………ええ!？」

あまりにもあんまりな反応にカティアは眼を剥いて唾然とする。幾らなんでも命がけの任務で救出した人間の顔を忘れているとは思わなかった。というか僅か数日前の事なのだから名前はともかくとして顔は覚えていると思うのだが…。釈然としない思いを抱きながらカティアは再度大声を上げて己の名を名乗った。

「か、カティア・ヴァルトハイム！東ドイツ国家人民軍所属第666戦術機中隊所属の衛士です!!つい昨日少尉に救助していただいたこの基地に保護されました!」

「…………ああ、そんなこともあったわね。すっかり記憶から消えていたわ」

カティアの大声にうるさそうに顔を顰めていたシルヴィアはようやく思い出したと言いたげに相槌を打つ。最もその顔はいかにもどうでも良さそうではあったが。

「ん？なんだお前、こいつと知り合いなのか？」

「その子を救出したのが私達の部隊だっただけよ。お礼言うなら私じゃなくてももう一人の方に言っただけなら？存外喜ぶんじゃないの？」

「…………え？あ…………」

シルヴィアの言葉にカティアはポカンとした表情を浮かべる。彼女はすっかり忘れていたが、己を救出してくれたポーランド人民軍所属の戦術機は“二機”であった。すなわちシルヴィア以外にもう一人、自分を救出してくれた衛士が居たのである。もつともそのもう一人の衛士についてはシルヴィアと違い名前、顔どころか男か女すらも分からないのだが…………。

「…………もしかして助けて貰った事知らなかったのかしら？これじゃあ彼が可哀想ね…………」

「う、うう…………、す、すみません…………」

「私に謝られても困るのよね…。ま、どうでもいいわね」

そう肩をすくめるとシルヴィアは二人に背を向けて、屋上への出入

り口であるドアへ向かって歩いていく。

「ん？何だもう戻るのか？」

「もう冷えてきたしね。貴方もさっさとその子を持って戻った方がいいわよ？『パレオロゴス唯一の生存者』さん？」

一瞬立ち止まりフレデリックに向けて意味深な言葉と笑みを投げかけると、シルヴィアはそのまま屋上から出て行った。ドアによって遮られるまで、カティアは呆気にとられた様子で彼女の背中を見つめていた。

「…なんだか、素っ気ない人ですね」

「…悪い奴じゃないんだがな、まあ、昔のトラウマのせいで人寄せ付けねえ性格になっちゃまっているんだけどな…」

「トラウマ…、それってやっぱりBETAの…」

「いいや違う。……んー…、どうすつかなく。…俺が話したって絶対言うんじゃねえぞ？」

そう前置きするとフレデリックはまるで周りに人がいない事確かめるかのように視線を左右に彷徨わせるとカティアに顔を近づけて小声で話し始める。

「今から四年も前の話だが、あいつはとある任務に出てな、その時に親友二人が死んでるんだよ。それからだよなあ、あいつがあんな性格になっちゃったのは。……まあ半分人伝に聞いたものだがな」

「……!!」

親友が死んだ、という言葉にカティアはギョツと目を見開く。任務中に己の仲間が、戦友が死ぬ…、軍人、衛士という職業についている者にとってはもはや珍しくもなんともないであろう事実…。シルヴィアがそれを味わっていたという事実にかティアは背筋が凍りつくような感覚を覚える。

フレデリックは構わず話を続ける。

「二人だけ生き延びた負い目、って奴かねえ。昔は内気だけど可愛らしい奴だったってのに今じゃあの様だ。人とも積極的に関わろうともしねえ…まあ多分、根っここの部分は変わってねえと思うんだけどな、多分だが」

「そ、その任務って、やっぱりBETAの……」

突出して国境に侵入してきたBETAの討伐、あるいは自分達の部隊と同じくレーザーヤークトか……。そんなカティアの問い掛けに対してフレデリックは首を振って否定する。

「いや、全く関係が無い。後で聞いた話だがとある村で住民が全員失踪するって事件が起きたんだ。連絡もとれねえってことであいつが調査隊の一員として派遣されたわけなんだがな。」

少なくともBETAは有りえねえ、その村はベラルーシとの国境線から離れていたし、何より当時既にミンスクハイヴは一度陥落していたんだ。奴らの仕業である筈がねえ」

「じゃ、じゃあ一体……」

「だから知らねえって。戻ってきてからのあいつもあの事件に関しては何も話さねえし、無理に聞こうとすると冗談抜きで殺されそうになるしな。……ただ」

フレデリックは一度言葉を切ると一瞬話すべきか躊躇するように視線を彷徨わせると再度口を開く。

「ただ、あいついつも言ってるんだよな、『鳥を探している』ってな」

「鳥、ですか……鳥ってあの……」

「おう、空を飛ぶ鳥で間違いないと思うぜ？で、どんな鳥を探しているのかって聞いても『……直に見れば分かる』って返事しかしねえしな。正直分からん」

そこまで話すとフレデリックは何処か疲れた様子で大きく息を吐き出した。

「……ま、あいつについて俺が知っている事は以上だ。……絶対に誰にも、特にシルヴィアには絶対話すんじゃねえぞ？俺が話したってことだけは特に、な！」

「は、はい……分かりました……」

じと目で此方を睨みつけながら念を押してくるフレデリックに、カティアは緊張した面持ちで頷いた。フレデリックは軽く吐息を吐くと小声で「戻るか」と、カティアに呼びかけると屋上の出入り口へ向

かつて速足で歩いていく。カティアも彼の後ろから小走りで付いていく。まだ屋外に出てから数分程度しか経過していないのにもかかわらず、雪風に晒されていたカティアの全身は冷え切っていた。基地内に入ると、暖房が入っていないにもかかわらず気温が僅かに暖かくなったように感じてしまう。

「あ、そういえばフレデリックさん、さつきシルヴィアさんが言っていた『パレオロゴス唯一の生還者』って…」

と、唐突にシルヴィアが去り際に告げた言葉を思い出したカティア、だが、そのセリフを口にした瞬間、フレデリックの表情は先程とは一転して暗いものへと変化していく。

まるで何かを後悔するかのような、悼んでいるかのような苦しげな表情に流石のカティアも口を閉ざす。

「え、えつと、フレデリックさん、私、何か失礼な事を…」

「……………悪い、そのあだ名はもう言わないでくれるか。こっちからすればあまり良い思い出もねえもんだからな」

「は、はい…………」

カティアの返答を聞くや否や、フレデリックは再び歩き始める。その右手は胸元で鈍く輝くペンダントに添えられ、人差し指と親指で赤い石をなぞるように撫でている。やはりあの石には何かがある、フレデリックしか知らないであろう何かが。それこそが彼にとつてのトラウマであり、心の傷であるのだろう。

ならばこれ以上は聞かない、そうカティアは心に決める。如何に口が軽くても流石に誰かを傷つけるような事だけは…………。

「……………なんだ？俺のペンダントじろじろ見やがって…。…………やらないぞ?」

「ふえ!?ち、ちがいますよ!!欲しくありませんよ!!ちよつと考え事してただけです!!」

じと目で此方を睨みつけるフレデリックにカティアは必死な表情で反論する。そんな彼女をじーっと眺めていたフレデリックであったが、やがてやれやれと呆れた表情で肩を竦める。

「冗談だつての。まあそんなことよりもさつきと病室に戻って



……!?!」

そこまで言葉を紡いだ瞬間、突如として基地中に響き渡るほどの警報が鳴り響き始める。

鳴り響く警報にフレデリックだけでは無くカティアも驚愕の表情を浮かべる。二人ともその警報は幾度も聞いていた。当然だろう、なぜならこの警報は……。

「コード991…!!BETA襲撃だ…!!」

何の前触れもない敵襲にフレデリックはただただ茫然と眩くしかなかった。

## 第5話 K r i s e e ー危機ー

警報が鳴り響く基地の廊下を駆けるフレデリックとカティア。コード991、紛れもなくBETAが基地近辺へと出現、基地へと襲撃してきた事を知らせるもののは分かるがあまりにも突然すぎる。誰かに聞こうにも基地に響く喧騒と悲鳴、廊下を走り回る兵士達の姿を見ればともではないがそんな状況ではない事が分かる。

とりあえずまずはカティアを病室に連れて行こうとフレデリックはカティアと共に病室へ向かおうとした。

「ああ、同志軍曹にヴァルトハイム少尉！何処に居るかと思ったら此処に居たか!!」

と、突然背後から何者かに呼び止められ、二人は反射的に後ろを振り向く。そこに居たのは保護されたカティアの尋問を担当した政治将校、彼は文字通り額に汗をかきながら二人に向かって歩みよってくる。

「ど、同志中尉！この状況は一体何が……」

「警報を聞いただろう？BETAの集団がこの基地から10km先に出現した。数はおよそ三万。：奴らめどうやら地下から侵攻してきたようだ……」

政治将校は忌々しげな表情で舌打ちする。先の戦いからまだ一週間も経過していない状況でのBETAの襲撃、未だに部隊の損耗が癒えていない状況でのこの襲撃はBETAが狙ってやったのではないかと考えてしまう。最も連中にそれだけの思考能力があるかどうかは不明ではあるのだが…。

地面から奇襲してきたという事実に関してはこの地においてはそこまで珍しい事ではない。このベラルーシの大地にはミンスクハイヴが建設されたのち、BETAによって掘り抜かれた幾つものトンネルがまるで蟻の巣の如く張り巡らされている。その長さは仮にパレオロゴス作戦当時と同じ状態であったとするならばおよそ半径4km、現在はBETAによる掘削でさらに広範囲に、それこそこの基地の目と鼻の先にまで掘り進められている可能性とてあり得るのだ。



「ま、待つてください!!私も、私も一緒に戦わせてください!!もう体もすつかり良くなりましたし戦術機さえあれば……!!」

安全な場所に待機するように、と告げようとした政治将校の言葉を遮って、カティアは自分も戦列に参戦させるように頼みこむ。自分の命を救ってくれたポーランド人民軍の人達の力になりたい、衛士が不足しているというのならばせめて自分がその代りになりたい。

その思いを込めて政治将校をジツと視線を向ける。

が、彼女の要求に対して政治将校は力なく首を左右に振る。

「……その気持ちは嬉しいが無理だ。貴官の戦術機は損耗が激しく出撃できる状態では無いし、予備の戦術機の余裕もない。第一、万が一貴官が戦死してしまった場合、貴官を戦場に送って死なせたなどというような事が国家人民軍側に知られでもしたら我らの責任となる。東ドイツの、特に国家保安省の連中がいかなることを要求してくるか……」

「……!!」

政治将校の言葉にカティアはハツとして口を閉ざす。確かにその通りだ。

もしも己がポーランド人民軍の戦いに加わって戦死しようものなら東ドイツ国家人民軍、果ては国家保安省に難癖をつけられかねない。かつては西ドイツ軍に所属していたとしても現在の自分は亡命して東ドイツ国家人民軍所属となっている。そんな東ドイツ軍人の自分が同盟国とはいえ多国籍軍の戦場で死んだとなつては下手をすれば東ドイツとポーランドの外交問題にまで発展しかねない。高々一衛士、しかも西ドイツから亡命し手から日が浅い小娘である為にそこまで大ごとにはならないだろうが、いずれにせよポーランドの人々に迷惑がかかる事だけは確かである。

「……」

でも、だとしてもこのまま黙って安全な場所にこもっているだけ、という選択は彼女にはできない。シルヴィアはただ仕事をこなしただけと言ってはいたがそれでも自分の命を助けてくれたことには変わりないのだ。命の恩人が戦っているのに自分だけ何もしないで観

ている、というような無責任な真似は出来ない。

カティアは葛藤を顔に滲ませながら顔を俯かせる。フレデリックは横目で彼女を黙って眺めていたが、やがて政治将校へと向き直るとおぼろげと口を開いた。

「…同志中尉、でしたら少尉には格納庫にて戦術機、兵器の整備等の作業を手伝っていただくのはどうでしょうか？幸いそちらも幾ら人手があっても困る事はありませんし戦術機の衛士であるのなら体力もそこそこあるでしょうから邪魔にはならないかと…」

「むう…、いや、軍の将校に下働きさせるのもそれはそれで問題はあ  
るが、ふむ…、ヴァルトハイム少尉、貴官の意見は？」

フレデリックの意見に政治将校は難しそうに眉をひそめながらチラリとカティアに視線を向ける。カティアは必死な表情で「雑用でもかまいません!!」と頭を下げてくる。政治将校はあきれ果てた表情で深々と溜息を吐きだした。

「…仕方が無い、いいだろう。だが此方には此方のルールがある。郷に入ったからには郷に従ってもらおうぞ。そしてもう一つ、よしんば貴官が何らかの理由で負傷、あるいは死亡したとしてもこちらは一切の責任は取らない!!いいな!!」

「はい!!」  
カティアの元気そうな返答を聞いた政治将校はフレデリックへと再度向き直る。

「…格納庫に連れて行ってやれ。あとはすべて任せる」

「了解しました、同志中尉」

フレデリックの返答に政治将校は無言で頷くとその場から歩き去った。彼の後姿を見送りながら、フレデリックは軽く肩をすくめる。

「あの人も悪い人間じゃあないんだがねえ…。ま、どうでもいい話か。んじゃあ行くこうか少尉殿」

「は、はいっ!!」

フレデリックに促されたカティアは急いで彼の後をついていく。もはや一刻の猶予もない、BETAの大軍勢は確実に此方に接近しつ

つあった…。

『黒の宣告』中隊SIDE

同じ頃、東ドイツ軍が駐留するハンツアヴィチ基地では、バラナビチ基地のポーランド人民軍の要請により急遽戦術機2個中隊を派遣する事となった。その2個派遣中隊のうちの一つ、第666戦術機中隊『黒の宣告』中隊のメンバーは戦術機格納庫に集合し、出撃の時を待っていた。

「全員揃ったようだな。さて、既に聞いていると思うがこれより我等中隊は第502戦術機中隊と合同でバラナビチ基地への救援に向かう事となった。目的は言わずもがな、基地に接近するBETAの撃滅であるが、我等中隊はBETAの集団に紛れ込んでいる可能性のある光線属種の殲滅を主に行う事となった。ぶっちゃけるのならばいつものレーザーヤークトと同じと考えてもいいだろう」

既に衛士強化装備を着込み出撃準備の完了した中隊メンバーは、アイリスディーナの言葉に黙って耳を傾けている。その表情は皆一様に緊張に満ちている。

今回の任務はポーランド人民軍の派遣部隊が駐留するバラナビチ基地の防衛、何の前触れもなく出現したBETAの軍勢からバラナビチ基地を護り抜く事が目的である。最もBETAは殆ど後退、撤退するという事が無い以上防衛するためにはBETAを殲滅する以外に方法は無い。その殲滅の集団に関してはいつものBETA戦どおり、航空戦力を無力化する光線属種殲滅の後に航空機からの爆撃、ミサイルによって一気に叩き潰すという戦法のみである。

第666戦術機中隊含む東ドイツ派遣軍が担当するのはやはりとすべきかこの光線属種の殲滅、レーザーヤークトである。何度もこなしているとはいえ一瞬の気の緩みが命取りとなるこの作戦、成功率は歴戦の部隊である彼ら彼女らでも五分五分、否、それ未満といってもいい。ましてや現在中隊はカティアが居ない為隊員一人が減って7人、陣形を組める最低人数を下回っている。より慎重に作戦を遂行しなければ中隊全滅もあり得る。

そんな状況である為この場のメンバー全員が緊張するのも無理は無い。しかもバラナビチ基地には中隊の新入りであるカティアが保護されている。万が一にも基地が陥落しようものならカティアも犠牲となる可能性もありうる。

だからこそ直ぐにでもバラナビチへと向かい、BETAを殲滅してカティアを迎えに行かなければならない、アイリスディーナはその場にいる中隊のメンバーにそう語る。

「現状ヴァルトハイム少尉は新入りとはいえ貴重な戦力だ。彼女を失えば中隊にとっても少なくない痛手となりうる。出来る事ならわが隊の人員を一部割いて救出に向かわせたところだが……」

そこまで話したアイリスディーナはチラリと隣に控えるグレーテルへと視線を送る。それに対してグレーテルは不機嫌そうな表情を崩さずに逆にアイリスディーナをにらみ返してくる。アイリスディーナは苦笑いを浮かべながら再び隊へと視線を戻す。

「……生憎此方も兵力に余裕が無い。故に迅速にレーザーヤークトを完遂し、ヴァルトハイム少尉を迎えに行く以外には無い。これは時間との戦いだ、その点だけは覚悟しておけよ？」

そこまで話すとアイリスディーナは眼前に並ぶメンバーへと視線を巡らせる。そのメンバーの中の一人、テオドールはアイリスディーナの視線を受けとめながら、昨日グレーテルと交わした会話の内容を、アイリスディーナの五年前の過去についてを思い返していた。

『月光の夜（モントリヒナハト）事件、五年前に国家人民軍の高級将校が中心となった反体制派による現体制へのクーデター未遂事件だ。同志大尉は兄でありこの事件の首謀者の一人であるユルゲン・ベルンハルトと共にそれに参加していた。そして、同志大尉は兄を密告した結果、肅清を逃れて生き延びる事が出来た。……ちなみに事件に関しては我々と国家保安省の手によって隠蔽されている。いいな、貴様も他言無用だぞ』

『クーデター未遂事件……!?!』

昨日、グレーテルがテオドールに明かした真実、アイリスディーナ・ベルンハルトの過去にテオドールは驚愕するしかなかった。だが、それと同時にようやく確信を得る事が出来た。

高級将校によるクーデター未遂事件、それにアイリスディーナが兄と共に関わっていた…。そして恐らくはカティアの父親も…。

カティアが東ドイツに亡命した目的、それは己の父親の消息を探る為であった。父親の名前はアルフレート・シュトラハヴィッツ。国家人民軍所属の中将であり、過去のウクライナ撤退戦において多大な功績を残した名将である。だが、彼の名前は突如として消えた。燦然たる武功を残しているにも拘らず、参戦していても可笑しくないはずのパレオロゴス作戦には参戦した痕跡すら残されておらず、過去の新聞を除けばアルフレート・シュトラハヴィッツという人間の名前は、何処にも残されていなかったのだ。まるで、最初からそんな人間は「存在しない」かのように。

グレーテル曰く、かつてスターリンと並びソ連の建国者レーニンの後継者の一人であったレフ・トロツキーという人間が居たのだが、彼の評判、権力を恐れたスターリンによってトロツキーは暗殺され、それだけにとどまらず彼の家族、友人、知人に至るまで尽くが粛清され、トロツキーに関する全ての文章、資料、写真は処分されたという。文字通り『歴史上から』存在を抹殺されたのだ。

それを聞いた瞬間にテオドールは悟った。このアルフレート・シュトラハヴィッツという男もまたそうなのだと。何かは知らないが党あるいは国家保安省にとって都合の悪い人物であったが為に消されたのだと…。

そして恐らく関わっていたのはグレーテルの言っていた五年前のクーデター未遂事件…。歴史から消される程であったのだから恐らくは中心人物であったとみて間違いは無いだろう。

『で、でもだったら尚更、同志大尉が自分だけ生き残るために…』

『貴様、本気であるの女が兄を国家保安省に密告するような人間だと思うのか!?己の身の保身の為ならば肉親すらも売り飛ばす下種だとも!?!だとしたら貴様の人間不信も相当なものだな!それともその



目が腐り果てているのか!?!』

グレーテルの怒声にテオドールは思わず怯んでしまう。そこそこ付き合っても長く、少なからず彼女からの嫌味やら小言やらを貰っているテオドールであったが、此処まで激昂するグレーテルは滅多に見た事が無い。

唾然とするテオドールに構わずグレーテルはまるでマシンガンか何かのように捲し立てる。

『あの女の性格ならば国家保安省に身内を売るくらいなら共に死を選ぶはずだ! そうしなかつたのはほぼ間違いなく、誰か』の指示によって、十中八九兄の手によって生きるように指示されたからに決まっている!! 兄に何らかの遺志を託されてあえて肉親を売る真似をした! そんな女が国家保安省を、否、現体制を恨んでいないはずが無い!!』

『…そ、その証拠は…』

『同志大尉が今まで仲間を国家保安省に売るような真似をしたところを見た事があつたか?』

グレーテルの反論にテオドールも口を噤んでしまう。

彼女の言う通りであった。この第666戦術機中隊に入隊してから今日に至るまで、アイリスデイーナは一度たりとも中隊のメンバーを密告した事が無い。少なくとも中隊の誰かが政治将校や国家保安省の手に引き渡されるところは見つかった。寧ろ部下の不用意な発言や行動を庇い、時には文字通り命を賭けて中隊の危機を救ってくれたこともあつた。

これまでの国家保安省に肉親を売り渡した外道というアイリスデイーナの人物像がテオドールの中でガラガラと崩れ始めていた。グレーテルの言う事は辻褄がある。仮にも現政権を覆そうというクーデターに参加をしていたのだ。余程の事をしなければ生き残ることなど不可能だろう。かといってグレーテルの言うとおり日頃の態度が本物だとするのならばアイリスデイーナが進んで兄を売ることは考えられない。

ならば考えられる事は一つ、誰かの命令、指示によって自身の兄を

密告したという事のみ……。

『そんな疑惑だらけの、国家に反旗を翻す恐れのある女が東ドイツ最強の戦術機中隊を率いている……、これが単なる偶然だと貴様は思うか？』

グレーテルの言葉にテオドールは何も返答する事が出来ない。確かに可笑しい。如何に許されたとはいえ過去にクーデター未遂事件に身内とともに参加した人間をいかに有能とはいえ大尉という地位に、しかも一中隊を率いる権限を与えるものだろうか。

あり得ない、特に言論弾圧が厳しく、体制への反逆者には一切の情けも容赦もない東ドイツでは特に……。ならば彼女をその地位へとつけた人間が居るといふ事だ、それも、相当な地位を持った人間に間違いない。

『……ちなみに、クーデターの首謀者は……』

テオドールは恐る恐るといった口調で問いかける。と、グレーテルは一度苦々しげに顔を顰めるが、もはや此処まで話してしまったのなら構わないだろうと悟ったのか再び口を開く。

『……元第一戦車軍団指揮官、アルフレート・シュトラハヴィッツ中将だ。ウクライナ撤退戦で多大な功績を残し、英雄とほめたたえられた男だ。と、言っても貴様は知らないだろうがな。シュトラハヴィッツ中将の名前は、公式の記録から完全に消されている。……以前話したトロツキー同様に』

『……！！』

グレーテルからの返答を聞いた瞬間、テオドールは一瞬心臓が停止したかのような感覚を覚えた。カティアの父親がクーデターの首謀者、薄々予感はしていたもののやはり衝撃的な事実である事は間違いなかった。

もし、カティアの素性が、経歴が明らかとなったのなら、東ドイツに亡命した目的が知れようものなら……。

間違いなくカティアはグレーテルの手によって捕えられる。いや、下手をすれば彼女の教育係である自分やカティアを中隊に引き入れたアイリスディーナですらも……。テオドールは背筋が凍る思いで

あつた。

最後にグレーテルが『もし同志大尉について何か気が付いたら私に知らせろ』等と言っていたが、その時のテオドールの耳には届いていなかった。

(アイリスディーナが反体制派の一人で、カティアの父親がクーデターの中心人物……、だからあいつを中隊に編入させたのか……)

昨日のグレーテルとのやり取りを回想しながら、テオドールはアイリスディーナをジッと凝視する。一方のアイリスディーナはその視線に気がついた様子もなく今回の出撃と作戦の詳細について語っている。そんな彼女の姿を、テオドールは忸怩たる思いを抱きながら眺めている。

(あいつも俺と同じ、国家保安省に、東ドイツの国家体制に家族を奪われた人間の一人だったんだ……、だけど、けどあいつは俺と違って……)

「……い、おい同志少尉！聞こえているのかテオドール・エーベルバッツハ!!」

「……!?は、はい!!申し訳ありません同志大尉!!」

思考に埋没していたテオドールは、突如響いてきたアイリスディーナの怒鳴り声で我に返ると反射的に背筋を棒のように伸ばす。アイリスディーナは鋭い視線でテオドールを睨みつけている。見ると自分以外の隊員もテオドールに視線を集中させている。気付かなかつたが大分長い時間呆けてしまったようである。

「フン、出撃前に呆けるとは少々気が抜けていると見えるな。これは任務後に政治的指導が必要なようだな……?」

グレーテルはそんな嫌味を口にしながら苦々しげに此方を睨みつける。テオドールも自分の思考に埋没し、アイリスディーナの話を聞いていなかったのは事実である為、特に反論することなく頭を下げて謝罪する。

アイリスディーナは呆れた様子で溜息をついた。

「……まあいい、作戦その他についてはホーゼンフェルト少尉かブ  
ロニコフスキー少尉にでも聞いておけ。幾らヴァルトハイム少尉が  
心配でもあまりそれにばかり気を取られるな。…まあ、戦場に出れば  
否でもそんな考えは消えるだろうが、な」

アイリスデイーナの冗談を含んだ忠告を聞いたテオドールは、黙つ  
て敬礼を返す。アイリスデイーナはテオドールから視線を外すと眼  
前に並ぶ隊員達へと視線を巡らせると、凜とした声で号令を放った。

「以上だ。今回の作戦は友邦ポーランドの危機だけでは無い！バラ  
ナビチが陥落すれば次は我等の基地へとBETA群が押し寄せてくる  
！失敗は許されん、この任務に全霊を尽くせ！幸運を祈る（フィール・  
グリツク）！！」

### ポーランド人民軍SIDE

同時刻、ポーランド人民軍所属の戦術機部隊は既に全機吹雪吹き荒  
れる雪原の戦場へと出撃していた。そこには当然シルヴィアが所属  
するニエトパーゼ中隊の12機もまた含まれていた。

『総員傾注！敵BETA群に接敵後速やかに要撃級、戦車級の群れ  
を叩く！既に確認しているとは思うがBETA群に光線属種が混  
ざっている！高度を上げると狙い撃たれるぞ！』

『了解！！』

中隊長コシチュシニコ大尉の号令に返答を返しながら、シルヴィア  
は網膜投射で映しだされた地形モニターへと目をやる。彼の言うと  
おりモニターには光線属種の存在を裏付ける赤い熱量分布が視認で  
きる。見たところ固まって密集しているようではあるがこれでは航  
空兵力とミサイルによる爆撃でBETAを一掃することは不可能だ。

ならば此処はレーザーヤークトで光線属種を一掃し、航空兵力を使  
用可能にするのが得策のはず…、シルヴィアはそんな疑問を抱きなが  
らコシチュシニコ大尉へと回線をつなぐ。

「同志大尉、質問の許可を」

『何だ？手短に頼むぞ』

「光線属種が居るのなら何故レーザーヤークトを行わないのですか？既に重金属雲が十分に広がっているのですから早急に光線属種を叩いて航空兵力を使用可能にするのが上策ではないかと思うのですが…」

シルヴィアの質問にコシチュシニコ大尉は一瞬眉根を寄せるとぶぜんとした表情で返答する。

『…兵力が足りん。今の戦術機数ではレーザーヤークトの為の戦力が割けん。…それに、レーザーヤークトはあとからやってくる専門家に任せればいい』

「……成程、了解しました」

シルヴィアは表情を変えぬままに頷く。確かに今のポーランド人民軍の戦力ではレーザーヤークトを行うには少々厳しい。精々が前線の敵戦力を削り取って抑え込み、援軍を待つ事しか出来まい。とはいえ援軍はあの東ドイツ、如何に同盟国とはいえ手放しで信頼できるような相手ではないのだが…。

『……おしやべりは此処までだ。さあ貴様ら、パーティーの時間だ!!盛大にお客様方をもてなしてやれ!!』

「了解!!」

コシチュシニコ大尉の号令、そしてもはや数百メートルの距離にまで接近しつつあるBETAの大軍勢。津波の如く迫りくるそれを、シルヴィアは冷静に見据えながら瞬時に頭を切り替える。

今はただ目の前の虫けら共を駆逐するのみ、それ以外は考えない。ただこの地獄から生き延びる事のみを考える。シルヴィアは軽く唇を湿らせる。

『目標確認!!総員武装展開!!射撃、開始!!』

「……生き残るわよ、今日も」

コシチュシニコ大尉の号令と共にバラライカ12機が構えた突撃砲12門から一斉に発射された36mm弾が地面を埋め尽くすほどのBETAの群れ目掛けて降り注いだ…!!

そして同じ頃、第401戦術機中隊がBETAと戦闘を開始した地点から10kmほど離れた地点では、何十台もの戦車、ソ連によって製造されたT-62Mがその長大な砲塔を一方向に向けて吹雪の中を佇んでいる。

その何十台もの戦車の中に、フレデリックは三人の部下と共に居た。フレデリックはモニターに映された外の風景、吹雪の吹き荒れる雪原を眺めながら首から下げたネックレスの赤い石を指で撫でている。それはまるで心の内に沸き起こる恐怖心を無理にでも抑え込もうとしているかのようでもあった。

「軍曹、俺達生き残れますかね…」

「……はつきり言うなら突撃級避けられなきやお陀仏だ。戦車級に取りつかれたならピストルの準備をしろ、それだけだ。まあ、運が良けりやあ生き残れるだろうさ」

「あの、コルベ軍曹、ちょっと弱気過ぎなんじゃあ……」

戦車の装填手を務める兵士がフレデリックの言葉に頬を引き攣らせる。残る二人も声には出さないが同様の表情を浮かべている。そんな彼らに対してフレデリックは硬い表情を変える様子は無い。

「弱気じゃねえ、慎重と言え。これから俺達はBETAと真正面からやり合う羽目になるんだ。戦車は火力はあるが戦術機ほど機動性が無いからどうやったって死ぬ確率が高くなるのは当たり前だ。…まあ貧乏くじ引いたと腹くくるしかねえわな」

「貧乏くじって……、……戦車作った人間に謝るセリフですよそれ？」

「事実だ、仕方が無い……つと、来やがったぜ……？気を引き締めろよお前ら」

「……!?りよ、了解!!」

モニター画面に映し出されるのは雪原に巻き上がる一面の雪煙、そしてガタガタと振動する戦車の車体。もはや目と鼻の先にまでBETAの大集団が接近してきているという事に他ならない状況に搭乗員はそろって表情を緊張で歪ませる。フレデリックは赤い石を指で摘まむとまるで祈りを捧げるかのように軽く掲げる。

「……頼むぜ、今日も生き残らせてくれ……。俺も、こいつらも……」  
赤石を指で握りしめながらフレデリックは小声で、されど祈るようにそう呟いた。

そしてその頃カティアは、バラナビチ基地内の兵器格納庫にて兵器、兵装の点検、整備の手伝いを行っていた。

搭乗していた戦術機は破損がひどく出撃はできず、それ以上に預かっている東ドイツの衛士を無断で出撃させることなどできない為に戦場に赴く事は出来なかったものの、それでも人手は幾らあっても困るわけではなく、この格納庫での整備任務に当たる事となったのである。

幸いカティアも西ドイツで戦術機や武器の整備、修理に関してはそこそこ学んでいた為に足手纏いになる事は無く、作業も苦もなくこなしている。最も本人の心境からすれば衛士であるにもかかわらず戦場にも出ずに武器、兵器の整備、修理を行う現状にはほんの少し不満を抱いている。自分を救ってくれた恩人にばかり戦わせるのは彼らに対して申し訳が立たない、そんな考えが時折頭に浮かんでしまう。

「コラ!!一人何黄昏てんの!!こちとらいつBETAが来るか分からないって時に余裕ぶっこいてんな!!」

「……ふえ!?も、申し訳ありません!!直ぐに作業に戻ります!!」

唐突に背後から響く怒鳴り声にカティアは即座に我に戻るとすぐさま作業に戻る。声の主はカティアと同年代であろう整備兵の少女であり、腰に手を当てながら不機嫌そうにカティアの後姿を睨みつけている。

「全く、コルベ軍曹が暫く預かってくれとか言うもんだから仕事やらしてるけれど……、いい!此処は東ドイツと違うの!まして今は緊急事態!!そんな時に上の空で作業するな!銃が暴発やら弾詰まりやら起こしたらどうすんのよ!!」

「は、はい!!すいません!!あの……フレデ……コルベ軍曹の事を考

えたらなんだか申し訳なくて…、自分衛士なのに戦場にもいけないで情けないなって……」

顔を俯かせながら己の心情を吐露するカティア、そんな彼女をじと目で睨みつける整備兵の少女であったが、やがて呆れた様子で深々と溜息を吐きだした。

「全く……、何言うのかと思ったらそんなつまらない事で悩んでたのアンタ……?」

「……!? つ、つまらないって…!!」

「コルベ軍曹なら大丈夫だって。あの人『奇跡の生還者』なんだから」

「奇跡……? えっと、なんですかそれ?」

女性整備兵の口から飛び出した言葉にカティアは思わず首をかしげる。『奇跡』と随分と大仰な単語ではあるがカティアから見たフレデリックはどう見ても自分より年上の普通の兵士といった感じであり奇跡とかそういう類の代物には無縁そうに見えた。

カティアの反応に女性整備兵は一瞬きよとんと首を傾げた。

「あれ? 知らないの? まあ軍曹そういう事自分から話そうとしないから無理もないかな……。五年前の第一次パレオロゴス作戦知ってるよね? 軍曹はね、その第一次パレオロゴス作戦のポーランド人民軍派遣部隊唯一の生還者だったんだよ」

「……え!? そ、そうなんですか!? ……そう言えばクシャシンスカ少尉もパレオロゴス唯一の生存者って……」

女性整備士のセリフにカティアはシルヴィアが去り際に言ったセリフを思い出す。『パレオロゴス唯一の生存者』、確かにそう言っていたがそれは文字どおり彼が第一次パレオロゴス作戦におけるポーランド人民軍唯一の生存者であった事を意味していたのだ。

カティアには第一次パレオロゴス作戦がいかなる戦いであったかはよく分からない。ただ、地獄のような戦場であった、ハイヴの爆発という『奇跡』が起きなければ作戦は間違いなく失敗していた、という事だけは幾度か聞いた事がある。何にせよ過酷な戦場であったことは確かであり、そこから生き延びたフレデリックは相当な実力と強



運を備えていたといってもいいだろう。

呆けるカティアに対して女性整備兵は髪の毛を搔きながら話を続ける。

「まあ軍曹本人はそういう事自分で話したからないんだけど、ね。自分一人だけ生き延びちやっただけ目つてのもあるんだろぅけど…、本人曰く自慢できるたぐいの話じゃないってことらしいから……」

「……………」

何処か遠くを見るような表情で語る女性整備兵を、カティアは黙って眺めていた。…と、

「貴様ら!!いま非常事態だという事を忘れていいのか!!作業が終わったのなら次の作業に取り掛かれ!!」

「〜!?!りよ、了解しました直ちに!!ほ、ほらアンタも!!」

「は、はい!!直ぐに!!」

背後から轟く上官からの怒鳴り声に女性整備兵とカティアは揃って飛び跳ねんばかりに驚き、すぐさま敬礼を行う。やがて敬礼を解いて深々と息を吐き出した女性整備兵はギロリと隣のカティアへと恨みがましい視線を向ける。

「…………ま、そういうわけだからアンタの心配する必要は無いってこと。分かったら次の作業に取り掛かりなさいな!時間無いのよこつちは……」

「…………は……」

カティアの返答を聞くや否や女性整備兵は肩を怒らせながらその場から歩き去っていく。整備の仕事は山ほどある、現状基地の職員に暇な人間などいやしないのだ。カティアも手を止めていた作業に再び取り掛かる。

あの整備兵の言っていた事も一理ある。第一次パレオロゴス作戦に派遣された部隊の中でただ一人生存した、それが本当だとするのなら今回のBETA迎撃作戦でも生きて戻ってこれるかもしれない。

(でも、なんなんでしょう、この不安は…………)

だが、何故かはわからないが胸騒ぎがする。理由は分からない、だが、心の底で微かな不安が湧き上がってくるのだ。

「テオドールさん……」

カティアはポツリとテオドールの名を、ハンツァヴィチ基地に居るであろう命の恩人である彼の名を呟く。その一言は、誰にも聞こえる事も、聞かれる事もなかった。

## 第6話 K r i e g d e r A b r e i b u n g —消耗戦—

バラナビチ基地から10キロ先の地点に広がる吹雪吹き荒れる雪原。

本来一面の銀世界であり、生命の息吹も感じさせぬほどの静けさに満ちていたであろうそこは、今や爆音と共に幾条もの噴煙が立ち上り、毒々しい紫色の血と肉片が大地を染め尽された戦場と化している。

敵は基地へと迫りくるBETAの大集団その数は大型小型含めおよそ三万以上、それを迎え撃つのは基地に駐留するポーランド人民軍派遣軍所属の戦術機部隊、規模はおよそ二個中隊規模。

部隊の任務は基地へ向けて猛進するBETAの大群を可能な限り殲滅する事、流石に二個中隊、24機程度のバラライカだけで三万ものBETAを相手にする事等できない。ましてや群れの中には航空兵力を無力化する光線級までいるのだ。航空兵力や核兵器によつて一掃する等という手段はとれない。それ故に戦術機、戦車といった地上兵器によつて攻略する以外には無いのだ。

本来ならば戦術機部隊によるレーザーヤークトによつて光線級を排除してからの航空爆撃による群れの一掃こそが定石であるのだが、あいにくとポーランド人民軍にはレーザーヤークトに割けるだけの戦術機が無い。故に戦術機部隊は全軍を持ってBETAを足止め、援軍を要請した東ドイツ国家人民軍の到着までの事実上の時間稼ぎを担う事となったのだ。

最もただでさえ数に違いがありすぎるうえに武器弾薬に限りがある戦術機部隊のみで三万ものBETA群を足止めできるはずもなく、結果的に何百体ものBETAを素通りさせる結果となっている。それでもポーランドの戦術機部隊はどうかBETAを排除し、その数を一匹でも多く削り取ろうと銃弾をばら撒き、短刀、長刀を振り回しながら果敢にBETAの大軍勢へと向かっていくのだ。

『ニエトペーゼ08、弾丸5割きました!!畜生!こいつら次から次へと…!!』

『ニエトペーゼ10、此方も弾丸残り5割です!!…ああクソ!!近寄るんじやねえ化け物共!!』

その戦術機部隊を構成する戦術機中隊の一つ、第401戦術機中隊『蝙蝠(ニエトペーゼ)』中隊もまた、無限とも思える巨蟲の群れへと攻撃を仕掛けていた。

跳躍ユニット、ジェットユニットを駆使して出来得る限り地に足をつけず地面すれすれを飛行しながら群がるBETA目掛けて弾丸を撃ち込む12機のバラライカ。大地には数え切れないほどの戦車級、闘士級が群れをなして這い回っており、文字通り足の踏み場もない。万が一地面のBETAを踏みつぶして降下したとしても直ぐに戦車級に取りつかれ、戦術機はスクラップ、中の衛士は奴らに喰われるという事はもはや火を見るよりも明らかだ。

だからと言ってあまり高く空を飛ぶわけにもいかない。何故なら…。

『く、クソツ!!このサソリもどき共が!!こんなの相手なんざしてられっか!!』

『!?お、おい!!待てニエトペーゼ11!!あまり高く飛ぶな!!』

コシチュシユコ大尉の忠告を無視して地上を這うBETAの手の届かない上空へと飛翔するバラライカ。搭乗していた衛士はひとまず危機を逃れられた事にホッと安堵の溜息を洩らす。…その行動がどれほど危険な事なのかも忘れて…。

『は、ハハ…、し、死ぬかと思っただけどほんの少し高度上げりやあこんな蟲共恐ろしくもなんと…』『高度を下げろおおおおおお!!』…へ?ちゆうたいちよ…』

コシチュシユコ大尉の必死の絶叫に一瞬キョトンとするニエトペーゼ11。だが、その言葉は最後まで紡がれる事は無かった。

何の前触れもなくBETAの群れの中から放たれる一条の閃光、それが空中を浮遊するバラライカの胸部を、衛士搭乗ユニットが備えられているそこを寸分違わず貫いたのだ。

閃光が一瞬で消えさると、残されていたのは胴体部に巨大な空洞を抉られたまま空中に浮遊するバラライカのみであった。

搭乗ユニットを衛士もろとも失ったバラライカはそのまま空中から落下、地面に激突と同時に爆発炎上した。その一部始終を目撃していたコシチュシユコ大尉は苦々しげに表情を歪め、それ以外の隊員の表情からは血の気が引いている。

バラライカを貫いた光線の正体、それはまぎれもなく光線級によるレーザー照射に他ならない。数千メートル以上の超高空を飛ぶ爆撃機を撃ち落とす精密性、戦艦の装甲すらも溶解、蒸発させるほどの貫通力を誇るBETAの持ちうる最強にして唯一の対空砲火。

如何に戦術機が高機動であるとはいえ、光速で発射される閃光の槍にはなすすべなく貫かれる以外には無い。唯一の救いは、バラライカに搭乗していた衛士はほんのわずかな痛みも感じる事無く、否、己が死んだ事にすらも気づかず、逝けた事のみであろう。

『……チッ！総員傾注!!見ての通りだ!!もしレーザーで腹にでかい穴開けられたくなかったら空に飛ぶな!!』

『……!!りよ、了解!!』

コシチュシユコ大尉の怒鳴り声に残る衛士達はBETAと応戦しながら上擦った声で返答を返す。もはやこの世界、この戦場で見慣れたものであるとはいえ、今まで己の隣で戦っていた戦友がレーザーに撃ち抜かれなすすべなく死んでいく姿は見ていて気分がいいものではない。

(もつとも、そんなものはもう飽きるほど見てるんだけど、ね…)

シルヴィアは冷静かつ冷徹にそんなことを考えながら眼前に迫る要撃級の人間の頭部に酷似した尾節へと弾丸を叩きこむ。既に同胞の死ぬところを幾度となく見ているシルヴィアにとって、先程の戦友の死に眉をひそめる事はあっても動揺することはもはや無い。

決していい気分ではないのであるが…。

「安心なさいな、仇はちゃんと取ってあげるから」

まるで先程死んだ衛士への弔辞の如くそう呟いたシルヴィアは崩れ落ちる要撃級には目もくれず、その背後から押し寄せる戦車級の群

れを迎え撃とうと、主腕と補助腕に構えた二丁の突撃砲の銃口を向けた。

そして場所は変わって此処は基地から数キロ離れた雪原。此処もまた基地めがけて猛進するBETAの集団と基地を護らんと迫りくるBETAの軍勢を食い止めんと砲撃を雨霰と叩きこむ戦車の軍勢がさながら鉄の壁の如く立ちはだかっている。

鉄の壁の如く立ち並ぶ戦車に向け、此方も壁か、さながら津波の如く迫りくるBETAの集団。戦術機部隊によってある程度削られているとはいえそれでも機動力の低い戦車部隊にとって脅威であることには変わらない。

だからこそ戦車部隊は主砲、備え付けの機関銃等を用いて近寄るBETAを次々と排除していく。砲弾は着弾と共に爆発し、複数体のBETAを巻き込み吹き飛ばしていくが、それによって生まれた空白は再び押し寄せてくるBETAの集団によって瞬時に修復されていく。幾ら潰してもきりが無い状況に、戦車部隊の兵士達の間には焦燥の雰囲気漂っていた。

「くっ…、こいつら次から次へと…。隊長！このままじゃあ…。」

「…落ち着け！…だが確かにこのまま撃ち合ってもこつちがじり貧であることには間違いねえな…。このまま少しずつ後退しながら砲撃続行!!突撃級は足を狙い、要撃級はあの気色悪い尾っぽを狙え!!小型種共は密集してるところをまとめて吹き飛ばせ!!いいな!!」

「了解!!」

(…と、言ってももう弾も残り少ない…。それは他の連中も同じだろうがな。さて、どうするか…)

その戦車部隊の戦車の一機、そこに三人の部下達と搭乗するフレデリックは檄を飛ばしながらもこの状況を如何にするべきかと思考を巡らせていた。主砲の弾も機関銃の弾丸も有限である以上、遅かれ早かれ弾切れを起こす。そうなったらどうするか、日本のカミカゼよろしくBETA共目掛けて特攻でもするか?フレデリックはがらでも

無くそんな自虐的な事を考えてしまう。それほどまでにこの状況は圧倒的に不利であった。

(やっぱり頼みの綱は東ドイツの援軍、か…)  
フレデリックの脳裏をよぎるのはこの基地に保護されてきた東ドイツの衛士の少女、かつて居た西ドイツから亡命してきたという奇特な少女の顔…。

この状況を覆すには爆撃機、ミサイルによる面制圧爆撃以外には無い。だが、BETAの集団には光線属種が紛れ込んでいる以上、航空兵力は無力化される。航空兵力を使用可能にする手段は現状ただ一つ、レーザーヤークトによって光線属種を排除する以外には無い。しかしポーランド人民軍の戦術機部隊の現状の兵力ではレーザーヤークトを行う事は困難と言っている。ならば此処は幾度もレーザーヤークトを行い、それを成功させてきた実績を持つ東ドイツ軍の援軍に頼るよりほかは無いだろう。他国に頼るしか手段が無いというのはあまりにも情けない話ではあるが…。

「…ま、背に腹は代えられねえ、か…!!こうなったら踏んばるぞ!!どうにか弾が切れるまで持ちこたえろ!!」

「も、もし弾が切れたら!?」

「その時は逃げる!!全速力でだ!!どの道此処でBETA止めなきや俺達はお陀仏だ!!死にたくなかったら気合い入れろ!!」

「二りよ、了解!!」

フレデリックの怒鳴り声に部下達も大声を張り上げる。眼前に迫りくるのは突撃級、その前方に展開された甲殻はダイヤモンドを越える硬度を持ち、並みの砲弾など弾き返してしまうだろう。狙うべきは脚部、時速100km以上の速度で侵攻する突撃級の、常に稼働しつづけるその部位に砲撃を叩きこむのは至難の業であるが、奴らの足を止めるにはこれ以外に方法は無い。

「軍曹！砲弾装填完了しました!!」

「よし、狙いをつけてギリギリまで引きつけろ!!…撃てえ!!」

号令と共に轟く轟音、砲弾は突撃級の脚部へと命中、爆発と同時に巨体を支える脚部が二本粉々に吹き飛ばされる。巨体を走行させる

要となっていた脚部の片方を失った事で突撃級は勢い余って急停止、地響きとともに地面に倒れ込む。

倒れ込んだ突撃級は起きあがろうと残った足でじたばたともがいているものの、左右三対合計六本の足の内、片方の足2本を破壊されてしまった以上、立ち上がることは不可能といつてもいい。よしんば立ち上がってもその足では先程の驚異的なスピードで走行することは不可能であろう。

まだ生きてはいるもののこれで実質突撃級は止められた。だが、戦車兵達の表情に安ども歓喜の表情も無い。地面でもがく突撃級の背後から、さらに複数体のBETAが姿を現したからだ。

突撃級と同じ大型種である要撃級、そしてその周囲を護衛するかのように取り巻く戦車級が数十頭…。動きの遅い戦車にとって、すばやく集団で襲いかかる戦車級は最も恐るべき天敵である。フレデリックは緊張で息を呑む。

(こりゃ、あのとときみたいに奇跡でも起きなきゃ、駄目かね…)

モニターに映るBETAの大集団を凝視しながら、フレデリックの右手は無意識にネックレスの赤い石をギュツと握りしめる。あの時、五年前のパレオロゴス作戦の時にただ一人生き延びたあの戦場で、突如現れて自分を救ってくれたあの巨獣…。

また、来てくれるのか…。もし来てくれれば、あるいは……。そんな希望的観測を思わず彼は抱いてしまう。

「…まったく、奇跡が起きるんなら、起きてほしいもんだよ……」

ポツリと一言、誰にも聞こえないほどの小声で呟くフレデリック。そんな彼の思いと裏腹に、BETAの新たな群れが彼らめがけて迫ろうとしていた…。

同時刻、バラナビチワルシャワ条約機構軍軍事基地では、前線から次から次へと送られてくる負傷者で溢れかえっていた。

軍医は勿論、看護師や手の空いている整備兵までもが治療に駆り出されている。それほどまでに手が足りない。それほどまでに負傷者が膨大なのだ。



切り傷、打ち身などといった軽傷の人間など一人もいない。腕を失った者、足を千切られた者、開いた傷口から内臓が飛び出ている者等々、一刻も早く治療をせねば命を失うであろう重症患者のみがこの場に集められているのだ。

居間区画には到底おさまりきらず、基地の廊下は負傷者のうめき声、悲鳴、すすり泣く声で溢れかえり、地獄の如き様相を呈していた。その地獄の真ただ中、カティア・ヴァルトハイムもまた負傷兵の救護に当たっていた。

医務室や倉庫から必死に薬品、包帯等を運び、時には衛生兵に呼ばれて負傷者の看護もする。

カティアが目にするのはもはやいつ死んでも可笑しくない程の傷を負った人間達、否、中には人間としての姿も留めていない肉塊同然の者もいた。彼らを運んだり、包帯を取り換えたりしていたカティアのBDUは、既に兵士達の返り血によって殆どの部分が真赤に染まっている。だが、今のカティアにはそんなことに構っている暇も、精神的余裕もありはしない。眼前に広がる地獄、致命傷を負いながらも死ぬ事が出来ずにうめき苦しむ兵士達の姿に衝撃を受けていたのもあるが、それ以上に己もまたこの中の一人となるのではなからうか、という不安が心の奥底から沸々とわき上がってきたのである。

「……酷い。こんな……」

「これでもまだましな方ですよ。BETA戦では生き残るところか体の一部が残っているだけでも珍しいんです。……それは歩兵も衛士も変わりません」

包帯を取り換えながら悲嘆と恐怖が入り混じった表情を浮かべるカティアに対し、そばで兵士の治療をする軍医は淡々と無表情で答える。痛みを訴える声や悲鳴を聞いても動じることなく淡々と治療をこなしていく軍医はどこことなく職人のようである。恐らくはこのような光景など数え切れないほど見ているのだろう。カティアなどよりもずっと……。

重傷者の治療を終えた軍医は一度廊下を見回す。未だに治療が終わっていない患者、治療すらしていない患者が襲い来る激痛に呻き、

すすり泣いている。ある者は腹から腸がはみ出、ある者は顔が半分潰れ、またある者は両手両足がもぎ取られただるま同然の姿をさらしている。

そんな人間が何十人も、苦しみながらも救いを求めている。そんな彼らに対して軍医は………黙って背を向けて歩きだした。まだ助けを求める人間は山ほどいるというのに仕事は終わった、と言わんばかりの軍医のその姿にカティアは眼を見開いた。

「……!?ま、待つてください!!まだそこに……!!」

「……もう無理です、助かりません。彼等に施せる薬は自決用の青酸カリのみです」

「……!!」

彼の容赦なくバツサリと切り捨てるかのような返答にカティアは一瞬口ごもる。軍医は彼女に構わず言葉を続ける。

「……残っている患者はもう持ちません。治療を施したとしても無駄な苦しみを強いるだけです。それよりもまだ生存の可能性のある患者を優先する方が効率的です。多くの命を救うため、やむを得ない事です」

「で、ですけど……!!」

「失礼ながら少尉の所属されている戦術機部隊も、同じような事をされていると聞きました……」

なおも反論しようとしたカティアは、軍医の口から飛び出した棘のあるセリフに再度閉口してしまふ。彼の言うとおり、己の所属する戦術機中隊『黒の宣告』は、レーザーヤークト遂行の為に救援を求める友軍を見捨てる事が多く、そのせいで自軍の兵士達からも忌み嫌われている。

より多くを救うため、人類の勝利の為——。そのようなお題目を謳ってはいるものでも見殺しにしている事は事実、多くを生かすために致命傷を負った患者を見捨てる目の前の軍医と何の違いがあるのか……。カティアは肩を震わせながら顔を俯かせる。

「何かを犠牲にして、より多くの命を助ける……それは別に貴方達の部隊だけの事じゃない、この世界の戦場ではごく当たり前の話なので

すよ。全てを救う事等無理な話、それが現実というものなのですよ」  
「……」

まるで此方をフォローするかののように語る軍医の言葉を、カティアは黙って聞いている。

軍医はそんな彼女を一瞥すると、今度はまるで独り言でも呟くかのようにポツリと呟いた。

「…それに、もし防衛線が突破されれば、今度は我々がこうなるかもしれないのですから……。最もその時には死体も残らないかもしれないけどね……」

「……!!」

軍医の言葉にカティアは体を震わせる。そう、今この基地には三万を超えるBETAの軍勢が迫りつつある。もしも奴らがこの基地に辿り着くものなら、自分、そしてこの基地の人間は皆間違いなく奴らの餌食となる事だろう。

(…どうすれば、いいんでしょうか…、私は……)

一人心の底で思い悩むカティア。そんな彼女の意味とは無関係に、自体は刻一刻と進んでいくのだった。

## 第666戦術機中隊SIDE

同時刻、東ドイツ国家人民軍所属第666戦術機中隊『黒の宣告』所属のバラライカ6機とチボラシユカー機は、BETAの侵攻を受けているバラナビチへと向かって飛行していた。今回の任務は現在BETAの攻撃を受けているバラナビチ基地への救援、正確に言うのなら進撃するBETA群に潜む光線属種の殲滅である。なお、『黒の宣告』中隊と出撃した第502戦術機中隊は中隊とは別行動をとって現在BETA群内にて孤立状態のポーランド人民軍所属戦術機部隊の援護へと向かっている。

『もうすぐ目的地に到達する。我らの任務はいつも通りのレーザーヤークト、BETAの集団から光線属種を探し出して叩き潰す、それだけだ。……何か質問はあるか?』

バラライカに搭乗する部下達に事務的な口調でそう言うアイリス  
デイナーの表情は、いつも通りの冷静さを保っている。彼女から投げ  
かけられた言葉に、暫くその場に沈黙が流れる。が、やがておずおず  
といった様子でアネットが『あの……』と声を上げた。

『…何だ？ホーゼンフェルト少尉？質問があるなら言ってみろ』

『はい、あの……、バラナビチ基地に保護されているカティア……、  
ヴァルトハイム少尉に関してはどうするのでしょうか……』

質問の内容はこの場に居ない隊員、カティア・ヴァルトハイムに関  
する事。現在ポーランド人民軍に保護されている彼女は、BETAの  
軍勢の通り道であるバラナビチ基地に居る。もしもBETAが基地  
にまで到達しようものなら彼女も基地ごと押し潰されることは間違  
いない。

それはこの場に居る誰もが分かっている。無論、テオドルも。顔  
には出さないようにしてはいるものの内心少なからず焦りを覚えて  
いるのだ。他はどうかは知らないものの、少なくともアネットとイン  
グヒルトの二人はカティアの事を心配しているようではあった。

その質問にアイリスデイナーは一瞬沈黙すると、先程と変わらぬ口  
調で返答する。

『無論、任務終了次第迎えに行く。その為にも早急に任務を成功さ  
せる必要がある。文字通り時間との勝負になるぞ、覚悟しておけ』

『……りよ、了解!!』

アイリスデイナーの言葉を聞いたアネットは一瞬表情を明るくす  
るとすぐさま表情を引き締める。イングヒルトもどことなく安心し  
た笑顔を浮かべている。

だが、気を抜いてはいられない。今回のレーザーヤークトは何時も  
のモノとは違う。人員が一人少ない影響でいつも通りの陣形が取れ  
ない上に、時間も限られている。

難易度だけで言うのならば通常のレーザーヤークトよりも跳ね上  
がっていると言ってもいいだろう。ほんの僅かの気の緩みが死、否、  
部隊の全滅にすらも繋がるだろう。

だが、それでも怯むわけにはいかない。此処で逃げればまず間違い

なくポーランド人民軍は全滅し、バラナビチ基地は壊滅する。そうなれば間違いなくカティアの命は無い。それどころか今度はBETAの群れが東ドイツ軍基地にまで雪崩れ込む可能性とてあり得るのだ。ならばここで群れを殲滅する、その為にもレーザーヤークトは必ず成功させる：!!テオドールは操縦桿を強く握りしめた。

目の前には既に数え切れないほどのBETAの群れが視認できている。毎度のことながらあの群れに突入するとなると全身に震えが走る。しかもその何千何万もの群れを掻き分けて光線属種を探し出して殲滅するのが任務なのだ、それをたった七人でやろうというのだからどれだけ無謀な事か：、テオドールは苦笑いを浮かべる。

『総員傾注!!これより我等はBETA群へと突入する!!我らの同胞であるポーランド人民軍を蹂躪せんとする地球外生物共に黒の宣告を下してやれ!!第666戦術機中隊、突撃に、移れえええええええ!!!』

『『了解!!!』』

アイリスデイーナの号令と共にBETAの群れへと突入する第666戦術機中隊。この戦いで誰が生き残れるのか、はたまた誰も生き残る事が出来ないのか：、それは誰にも分からない。

それでも生きる、生きるために足掻いて見せる。そして……、あの甘ちゃんを迎えに行つて思い切り弄つてやろう、その決意を胸にテオドールは群がるBETAへと立ち向かつていった。

ポーランド人民軍SIDE

BETA群突入から凡そ10分足らず：、ポーランド人民軍所属第401戦術機中隊『ニエトペーゼ』とBETA軍との戦闘は未だに終わりを見せていなかった。突入当初は12機だったはずの戦術機は9機に減り、残る機体も主腕の欠損、跳躍ユニットの破損等大なり小なりダメージを負っており無傷な機体は一機も存在しない。

一方のBETAはもはや1000近くは屠っているにも拘らず次から次へと湧き出てくる。これでは倒しても倒してもきりが無い。このままではいずれ弾丸も推進剤も底をつくか、否、それよりも先に

BETAの物量に押し負けて食い殺されるかのどちらかであろう。

『…総員、残弾は残り何割だ…』

『二エトパーゼ02、残弾二割』

『03、同じく残弾二割です…』

『こちら04！残弾残り…ゼロです！！近接戦闘に切り替えます！！』

「05、残弾一割……絶体絶命、ね…」

コシチュシニコ大尉の言葉に返答を返しながら、シルヴィアは苦々に表情を歪める。

もう予備弾装もすべて使い果たした、推進剤も残り少ない。本来ならば早急に撤退するべき状況である。それは己だけでなく中隊長である大尉も自軍に所属する政治将校も分かっている事だろうし、今直ぐにでも撤退したいところだろう。

しかし、目の前のBETA共がそれを許さない。群がる連中が壁となって此方の退路を塞いでくる。思考能力があるかどうかも分からないBETAのことであり、恐らく意識しての行動ではないのだろうがそれでも邪魔である事に代わりは無い。

かといって光線属種の存在もあり、空を飛ぶわけにもいかない。下手に飛ばば連中の良い的だ。

進む事も退く事も出来ず、このまま嬲り殺しにされるであろう、それが今現在の自軍の状況なのであろう。

(…せめて、せめて援軍が来てくれれば…。あるいは光線属種が掃討されていけば…)

シルヴィアはそんな事を思いながらギリギリと奥歯を噛みしめる。つくづくレーザーヤークトを行えなかったことが悔やまれてならない。それさえ達成できていれば制空権を一時的とはいえ奪い返せて此処まで苦戦することは無かったであろうに…。

こうなったら何処かの軍が援軍に来てくれる事を待つのみであったが、それもいつになる事か分かったものではない。下手をすれば自分達が全滅した頃、等という笑えない事態になりかねない。

「……冗談じゃないわ、まだ、まだ復讐を、約束を果たせていないっ

ていうのに…!!」

絞り出すかのような怒声と共に、眼前の戦車級めがけて近接専用の短刀を振り下ろすシルヴィア。そうこうしている間にも周囲には小型種の群れで囲まれ、その後ろには要撃級が控えている。

流石に絶体絶命か…。己に貼りつこうとする小型級を切りはらいながらシルヴィアは苦々しげに顔を歪める。こうなったら跳躍ユニットを暴走させて自爆するか…、そんな己らしくもない考えまで頭をよぎる。

が、その時であった。突然どこからともなく放たれた弾丸が周囲に群がるBETA共を一掃したのだ。群がっていた小型種はひき肉の如くその身を碎かれ、大型種である要撃級も尾節と頭部を弾丸で穿たれて沈黙する。

瞬時にニエトペーゼ中隊が戦闘を行っていたそこは、BETA共の死骸が散らばる広場のような空間へと変化する。今にも殺されるかと思っていたシルヴィアを含む中隊の隊員達はしばし呆然としていたものの、此方のすぐ近くへと降下してくる戦術機12機の機影を見た瞬間、ハッと我に返る。

戦術機の機種は己達ポーランド人民軍が運用するものと同じMiG-21バラライカに間違いない。だが、左肩の国旗と機体色が自国のモノとは違う。

その機体の肩にペイントされている国旗は同盟国のドイツ民主主義人民共和国、通称東ドイツのもの、ならばこれらの戦術機は東ドイツ国家人民軍所属の…。

『こちら東ドイツ国家人民軍所属第502戦術機中隊。貴官らの援護及び救出に来了。此処は我らに任せて早急に貴官らは撤退されよ』

『……!!東ドイツの援軍!!有難い!!』

何の前触れもなく現れた同胞からの援軍に、コシチユシユコ大尉は思わず安堵の声を上げる。

この絶体絶命とも言える危機の中での友邦の軍の参戦、もはや自爆しかないと考えていたシルヴィア、そして中隊のメンバー達にとつては青天の霹靂ともいえ、ただただ啞然とする以外にはなかった。

『既に我等と同じく派遣された第666戦術機中隊がレーザーヤークトに向かっている。完了次第そちらにも連絡がいくはずだ。…最もそう簡単にはいくまいがな』

『了解した、救援感謝する。…どうか武運を』

第502戦術機中隊の中隊長らしき人間からの通信に返答したコシチュシニコ大尉は部下達へと再度通信を繋ぐ。

『総員傾注!!これより我等はBETA群を脱出してバラナビチ基地へと帰投する!!友邦たる東ドイツが作り出してくれた唯一の好機だ!!一機足りとも脱落するなよ!!』

『『りよ、了解っ!!』』

中隊長の怒鳴り声に我に返った中隊所属の衛士達は一斉に上擦った声を上げると跳躍ユニットを吹かして機体を浮上させる。

正直度の機体も推進剤の量はギリギリ、最短距離を通過してどうにか基地までたどり着けるか否か、というレベルでしかない。下手をすれば途中で推進剤が切れてBETAの群れの真ただ中に垂直落下、等という笑えない事態になりかねないだろう。

(それでも、どうにかなりそう、かしらね…)

推進剤の残量を横目で気にしながら、シルヴィアは疲れ切った表情で深々と溜息を吐く。

無事基地に辿り着くまで気は抜けないものの、どうにか命は繋げた事に心の中で安堵を覚えるのであった。



## 第7話 Trennung―別れ

ポーランド人民軍によるバラナビチ基地へと侵攻するBETA群への迎撃作戦。それが開始してからもう一時間が経過しようとしていた。たった一時間、と考える人間もいるかもしれない。もう一時間も経過したのか、と考える者もいるだろう。

だが、その一時間の間に多くの命が失われた。ある者は戦車ごと突撃級に引きつぶされ、ある者は光線級のレーザーで戦術機もろとも撃ち抜かれ、またあるものは戦車級の集団によつて五体をもぎ取られ…。

体が9割でも残っていた者は幸いだろう。殆どは残っていたとしても指の一欠けら、大抵のものは遺体すらも残されていない。誰もかれもが己の事に、生きている人間の事に精一杯で死体の事に構っていないような余裕は無いのだ。

そんな地獄の戦場で、ポーランド人民軍は押されていた。そもそも物量が桁違いなうえに航空兵力は使えない、しかもポーランド人民軍が保有する戦術機の中で稼働可能なモノは精々2個中隊規模でありレーザーヤークトを行うには数が足りない。

だからこそBETAの殲滅もままならず足止めで精一杯、そしてもはやその足止めすらもままならなくなっている状態であり、このままいけば遠からず基地へのBETAの侵入を許してしまうであろう状況であった。

現在戦線は、ポーランドとの同盟国である東ドイツ国家人民軍所属の戦術機部隊の参戦によりある程度は持ち直しつつあった。が、参戦した部隊は精々二個中隊規模、危機が去ったとは到底言い難い状況であった。

この状況を一変させる手段は一つ、戦術機で敵陣深く侵入し光線属種を排除するレーザーヤークトのみ。そして、それを行えるであろう部隊はただ一つ、第666戦術機中隊『黒の宣告』所属の7機のみ…。

光線属種殲滅の為にBETA群へと突入した第666戦術機中隊7機は目の前に群がるBETAを切り払い、撃ち抜いてどうにか突破口を開きながら光線属種を探す。

大まかな位置はモニターの熱源表示によって分かるものの光線級は全高2メートル程度しかない小型のBETAであるため、大型種である要撃級、突撃級の影に隠れたり、小型種の戦車級の群れの中に紛れ込んだりしており、発見するのは容易ではない。

だがそれでも、手段が無いわけではないのだ。少なからず危険を伴うものの…。

眼前に群がる戦車級を短刀で排除しながら中隊メンバーの一人、テオドールは考える。この手段は少なからず、否、かなり危険な賭けではある。下手をすれば己がお陀仏となりかねないだろう。

(…このまま…いつら潰して探しても埒が明かねえ…。…なら！)

テオドールは表情を引き締めると跳躍ユニットを吹かして機体を僅かに上昇させる。機体の高度は丁度要撃級の攻撃が命中しないであろう高度、突然のテオドールの自殺行為としか思えない行動に中隊のメンバーは皆揃って仰天する。

『!?な、何をしている同志少尉!! 貴様みすみすレーザーの餌食になって…』

「少し黙っててください同志中尉!! こっちにも考えがあるんだ!!」

案の定さまざまいい剣幕で此方に食ってかかるグレイテルの言葉を遮りながら、テオドールはジッと「その瞬間」を待つ。

そして、それは直ぐにおとずれた。

突然眼前のBETAの群れから要撃級を始めとする大型種が横へと移動を開始したのだ。まるで「何か」の通り道から体をどけるかのように次々と移動していくBETAの集団、それを目撃した瞬間、テオドールの脳裏に電流が走った。

「……そこか!!」

テオドールは瞬時に機体を旋回させ、多目的追加装甲を前面に構えるとそのまま一気にジェットを噴射、BETAが居なくなつた結果出現した一本道へと飛び込んで行く。

突き進む先にあるもの…、それはまぎれもなく自分達が掃討すべき標的、光線級BETA。その巨大な目玉に似たレーザー照射器官は煌々と光を放っており既に発射間際といった具合だ。距離が遠い、此処からでは弾丸も届かないだろう。接近しようにももはやレーザーは発射寸前になっている。射程距離に入る前にレーザーは照射され戦術機が蒸発する事は想像に難くない。

「…そう簡単に死んでたまるかよ…!!」

テオドールの搭乗するバラライカはコックピットの存在する前面を多目的追加装甲で隠しながら光線級めがけて突撃する。瞬間、前面に展開された多目的追加装甲から何かがバーナーで焼き切られているかのような嫌な音が響いてくる。光線級のレーザーが盾へと照射されているのだ。

一撃で爆撃機すらも撃ち落とす精度と貫通力を誇る閃光の槍、如何に多目的追加装甲に対レーザー用の蒸散剤が散布されており、重金属雲の影響でレーザーの出力が落ちているといっても精々もって数秒程度であろう。

だが、テオドールにとってはたった数秒で充分であった。既にレーザーを照射している光線級は突撃砲の射程距離範囲内に入っている。

「…貫つた!!」

此方めがけてレーザーを照射する光線級の姿を視認したテオドールは間髪いれずに36mmチーリングンの引き金を引く。

レーザー照射中で動けない光線級は放たれた弾丸2発を受けてモノ言わぬ肉塊と化す。どうかにか一体の光線級を葬ったテオドールであったが、彼は油断せず左右へと視線を配る。

案の定BETAの群れに隠れて二体の光線級が此方へ顔を向けていた。無論、発見するや否や36mm弾で始末をする。

「これで…全部か？」

光線級を合計三体仕留めたテオドールはなおも視線を巡らせる。まだBETAの群れに紛れて光線級が混じっているかもしれない。もし仕留めそこなっていたのなら此方の胴体に風穴があく羽目になる。が、あまりのんびりしているわけにもいかない。

既に周囲のBETAの群れが此方に大挙して押し寄せようとしている。もはや光線級のレーザーで同志討ちになる心配もない故に遠慮なく此方を喰らおうと迫ってきていた。

「…チツ、此処はひとまず上に逃げて…?!？」

前後左右、文字通り全方位から迫りくるBETAの群れに、テオドールは流石に相手をしてもらえないと戦術機を空中へと浮上させようとした、が、その瞬間複数の銃声が響き渡り、テオドール搭乗のバラライカへと群がろうとしていたBETAを次々と吹き飛ばしたのだ。

『…全くなんとも無茶な真似をしてくれたものだな、エーベルバツハ少尉。だが、上出来だ』

何事かと視線を上げたテオドールの目の前に現れたのは、さながら伝説の一角獣の如きシルエットの大型センサーユニット付随の頭部が特徴的なMiG-21PFバラライカ改、『黒の宣告』中隊長アイリスディーナ・ベルンハルト大尉の搭乗機である。彼女の機体の背後にはテオドール以外のメンバーが搭乗する戦術機計五機が並んでいる。突然の味方の救援に流石のテオドールも啞然としてしまう。

「あ…ど、同志大尉…」

『話はこの数だけは揃っている虫けら共を掃除してからだ。まだ光線級は残っている、気合いを入れて行けよ』

そうやってモニターのアイリスディーナは微笑を浮かべる。その笑顔にテオドールは思わず顔を赤らめてそっぽを向いてしまう。

そんな彼の反応にアイリスディーナは面白そうにクツクツと一度笑い声を上げると直ぐに表情を引き締める。

『総員傾注、同志少尉の無茶な突撃のおかげでこの辺りの光線級は殲滅できた。が、未だ完全に殲滅できたわけではない。早急に群れを突破して残った光線属種を始末するぞ!!』

『『了解!!』』』

アイリスディーナの言うとおり、テオドールが殲滅した光線級は僅か三体。空に浮かぶ光線属種積乱雲と網膜投射の熱源モニターの状況から言っても、まだ群れの中に光線級が紛れ込んでいる可能性が高

い。ならば早々に残りも始末せざるを得ないだろう。最も先程の無茶な行動は流石にもうできないだろうが…。

テオドールは中央に二つの穴が開いた多目的追加装甲に目をやりながら疲れたように息を吐き出した。と、唐突に網膜投射のモニターにグレーテルの顔が映し出される。その表情はひたすらに、ただひたすらに不機嫌そうであり、今にも此方に向かって小言やら説教やらを飛ばしてきそうな雰囲気である。

が、予想に反してグレーテルはじと目でテオドールを睨みつけながら、忌々しげに軽く舌打ちをするのみであった。

『…帰ったらヴァルトハイム共々政治的指導をしてやる。覚悟しておけ』

「…此処から無事帰れたら、ですけどね」

蚊の鳴くような小声でそう呟くグレーテルに、テオドールもそう冗談めかしながら返答する。テオドールの返答に一瞬眉を歪めたグレーテルの映像はすぐに消えて視界はBETAの群がる雪原の光景へと戻される。

まだBETAは山ほどいる。己達はその中に隠れた光線級を再度探して潰していかなくてはならない。先程のような手はもはや使えない以上、今度こそ慎重かつ迅速に行動していかなくてはならない。

「…もう少しだけ、待ってる…」

テオドールはバラナビチ基地で待っているであろうカティアの姿を思い返し、手汗が滲む掌で操縦桿を強く握りしめる。

戦いは、まだ終わらない。

バラナビチ基地SIDE

その頃BETAの通り道に位置しているバラナビチ基地では、既に東ドイツ軍の援軍がBETAと交戦を開始した事、それと共に自軍の戦術機部隊が後退を開始した事を告げる方が入ってきていた。

「…報告！東ドイツ軍からの援軍が到着、現在二手に分かれてBETA群と交戦中とのことです！」

「そうか…、派遣された軍の規模は？」

「約二個中隊規模とのことですよ!!」

部下からの報告を受ける軍医は目の前の患者を治療する手を止めずに、ただ眉を僅かに顰める。二個戦術機中隊…、他国への援軍という意味合いでは妥当な数なのかもしれないがこの状況を一変させるに至るかどうかといえ…、難しいと言わざるを得ない。

医療担当とはいえ己も軍人である、兵力の差による戦況の有利不利というものに関してはよく分かっているつもりだ。これが人間対人間ならば兵器、兵の錬度の差、あるいは作戦等によつて覆すことも可能だろうが相手は人外の、人の思考の範囲外に存在する化け物の集団であり対人戦の常識は通用しない。

せめて光線級さえどうにかなれば…、と内心苦々しく思いながらも彼は眼前で血を流し痛みにも呻く兵士への治療の手を休める事は無い。此方もまた別の意味で一刻を争う状態であるのだから。

一方軍医の補佐をしていたカティアは兵士からの報告を聞いた瞬間驚きのあまり作業の手を止めて兵士へと視線を向けた。

「…!!?す、すみません!派遣された部隊の番号については分からないでしょうか!」

「ば、番号?た、確か第502中隊と第666中隊、だと思ったが…」  
「…第666…!!テオドールさん達が…」

兵士の返答を聞いたカティアはほんの僅かな時間茫然としてしまふ。

テオドール達が、己の所属する中隊のメンバーが援軍としてきてくれた…、その事実だけでカティアの胸は熱くなる思いであった。が、それと同時に不安も湧き上がってくる。

今の第666戦術機中隊はカティアが抜けた為に人員が一人足りず、いつも通りの陣形を敷く事が難しくなっている。それ故に今回のレーザーヤークトでは今まで通りの戦術は行えない。如何に中隊のメンバーの錬度が高く、アイリスディーナが優れた指揮官であったとしても苦戦は避けられないだろう。

攻めて自分が参戦できれば…、そんな考えが頭をよぎりカティアは

ギリリと奥歯を噛みしめる。と…。

「…よし、とりあえずこれでいい…。少尉!! 次の患者の治療をします!! 一人でも多く人を救いたいというのならそんなところで呆けていないでください!!」

「……!は、はい!!」

軍医の怒鳴り声に我に返ったカティアは包帯や薬を抱えて急いで彼の後についていく。

どの道戦術機が使い物にならない以上、向こうを助ける事等できるはずが無い。

ならば自分は、今ここで自分のできる事をするしかない…。カティアは表情を硬く引き締めた。

一方その頃最前線にて基地へと向かうBETAを食い止めんと展開されている戦車大隊は、もはや壊滅も時間の問題となりつつあった。

既に主砲どころか補助武器の機関銃の弾も無くなり、一機、また一機と脱落していく戦車が続々と出てきている。ある戦車は突撃級に踏みつぶされ、ある戦車は要撃級の剛腕に叩きのめされ鉄くずとなり、またある戦車は無数の戦車級に取りつかれ、装甲を食い破られた挙句に乗員は一人残らず戦車級に生きてまま食い殺されるという悲惨な結末を迎える事となった。

無理もない、戦車には戦術機ほどの機動力も無く、立体軌道もできない。出来る事は動く砲台としてBETAの集団へと砲弾を叩きこむ程度であり、撃つ弾が無くなれば後退するしかない。ほんの数秒でも後退が遅れば、即座にBETAの餌食となる。

以上の事から戦車部隊の損耗率は戦術機部隊以上とも言われており、その証拠に最初40台存在していた戦車部隊であったが、現在ではもはや5台を残して全滅している。一方BETAの数と勢いは未だに衰える様子もなく、戦車部隊めがけて猛進してきている。もはやだれが見ても負け戦、そうとしか思えない状況であった。

「…チツ、クソ…、まだ来やがるってのか…。 ……おい、戦車の残り砲弾数は」

その生き残っている戦車の内の一台、フレデリック・コルベとその部下三人が搭乗するT-62Mは迫りくるBETAを迎撃しつつ後退していた。本来濃い緑色をしていたはずの機体は取りついてきたBETAの返り血によつてか毒々しい紫色になっている。

周囲に他の戦車の姿は無い。既に退避したのかあるいはBETAに踏みつぶされたのかは分からないし知る気もない。というよりそんな余裕すらもありはしない。此方も今にも殺されそうな状況であるのだから。

フレデリックの問い掛けに部下の一人は躊躇い気味に口を開く。

「……砲弾0です。機関銃の弾も切れました。も、もうこれ以上の戦闘続行は…!!」

「……なら逃げるぞ!!弾もない以上此処で逃げても上の人間は文句言わねえだろ!!」

「りよ、了解!!」

上官からの怒鳴り声に部下は急ぎ戦車を走らせる。無断での敵前逃亡は軍隊では重罪、特に社会主義国家ではほぼ確実に銃殺刑確定ではあるものの、撃つべき弾もない状況で撤退しないのはただの自殺行為であり無謀としか言いようがない。

それに上層部からは危機的状況においては特別に撤退を許可する旨の命令も受けている。ならば此処で逃げてでも軍法会議にかけられる事は無い、よしんば掛けられてもそこまできつい罰にはならないだろう。

振動で体を揺らしながら、フレデリックはそのような事を考える。

「ぐ、軍曹基地からの指令です!!只今増援の東ドイツ軍によるレーザーヤークトが完了!!今そちらの救援に向かっているからただちにその場から退避せよとのことですよ!!」

「遅い!!こっちはもうとつくに逃げてるわ!!今更そんな指令だすんじゃないねえ!!」

通信係の部下の報告にフレデリックは反射的に怒鳴り声を上げる。



もう既に戦車のほとんどは全滅しており、そんな状況で撤退命令を出されてもどうしようもない。確かに基地防衛という緊急事態ゆえにそう簡単に撤退させるわけにはいかない理由も分かるがそれにしただって遅いと言わざるを得ない。

レーザーヤークト成功は確かにめでたいのだろう。これで何の気兼ねもなく航空兵力を使う事が出来る。最もその前に自分達が死ぬ危険性があるのだが。

「…早急に此処から逃げ出さなけりや……………!?!」

と、突如走行していた戦車が動きが急停止してしまった。突然の事態にフレデリックは思わず目を見開いて部下達へと視線を巡らせる。てつきり部下が何かへまをやらかしたんじゃないだろうかと勘繰ったのだが、三人とも必死な表情で首を横に振っている。

「ならガス欠か?と燃料メーターを確認したもののまだ燃料は充分にある。」

まさかこんな所で何処か故障したんじゃないだろうな、とフレデリックが考え始めたその時…。

突如戦車の天井からガリガリと何かをひっかく、あるいは削るような音が響き始める。

その音を聞いた瞬間戦車内に居た四人の表情が一瞬で青ざめた。当然だろう、何故ならそれは彼らにとってはまさに死刑宣告といつてもいい代物であったのだから…。

その音の正体は戦車級がその巨大な顎で装甲を齧る音、そして戦車が突如停止したのも戦車級によるものに違いあるまい。

フレデリックは一度口にたまった唾を飲み込むとそつと手元にカラシニコフを引き寄せる。その後ろでは三人の部下がすぐそこまで迫ってきている死の恐怖で震えている。

「ぐ、軍曹……」

「震えている暇はねえぞ、死にたくなかったら腹をくくれ」

フレデリックは一度首のお守りを指で撫でるとゆっくりとカラシニコフを持ち上げる。

直ぐそこまで迫る死神の顎に、あくまで抵抗せんとするかのよう

…。

## 第666戦術機中隊SIDE

一発の弾丸が今にもレーザーを放とうとする光線級の頭部を撃ち抜いた。

紫色の体液と肉片を撒き散らしながら仰向けに倒れる光線級の死骸を眺めながら、テオドールはホツと息を吐き出した。

モニターの反応を見る限りこれが最後の光線級のはずだ。無論BETAが増援を送ってくるなり要塞級の体内に格納されているなりされているのならば話は別であるが今のところBETAの増援は確認されてはおらず、要塞級もこの群れには存在していない以上これが最後とみて間違いは無い筈だ。

安堵の息を吐き出しながらもテオドールは左右に油断なく眼を配る。確かに光線級は排除したものの周りにはBETAが山ほどいる。警戒を怠ろうものなら即座に地獄逝きであろう。

「…光線級、排除完了」

『ご苦労だった。……総員傾注!! たった今エーベルバツハ少尉が最後の光線級を排除した、これより我等は戦線を離脱する!!』

『『了解!!』』』

アイリスディーナの号令と同時に七機の戦術機はBETAの群がる地上から飛翔して離脱を開始する。光線級の脅威の無い今ならば普段よりも高い高度を飛翔したとしても問題は無い。地上から100mほどの上空で、テオドールはようやく一仕事終える事が出来たために深々と安堵の溜息を吐きだした。

『さて、任務で疲れてすぐさま帰還してベッドに潜り込みたいであろう諸君たちには申し訳ないが……次の任務の要請が入った』

が、そのいい気分も突如として響いてきたアイリスディーナの台詞の前に粉微塵に碎かれる。ようやく一仕事終えたというのにまだ何かあるというのか、そんな不満を込めてテオドールは顔を顰める。が、アイリスディーナは特に気付いた様子もなく話を続ける。

『大した任務、というわけではないがな。ポーランド人民軍の戦車部隊が全滅寸前とのことで救援要請を出してきた。これより我らで彼らの救援に向かう。レーザーヤークトに比べれば気楽な任務だろうが……気は抜くなよ?』

『『了解』』』

「……了解、はあ……」

テオドールは重々しく息を吐き出しながらぐりと肩を落とした。もはや弾丸も推進剤も余裕がないというのに今度は戦車部隊の救出任務……此方は早々にカティアを連れて基地に帰りたいたいということにとんだ災難だ、と忌々しげに舌打ちする。

だがやむを得ない。アイリスデイナーは己の上官、上官の命令は如何に理不尽でも絶対だ。上官反逆は下手をしなくても銃殺刑。最もこれまでの経験からして他はともかくとして流石にアイリスデイナーはそこまでの事ははしないであろうが……

(……しかし、あのお漏らし娘が果たして待っていられるか、ねえ……) 戦術機で重苦しい雲の下を飛行しながら、テオドールはそんな馬鹿馬鹿しい事を考える。

まるで、これから始まる戦いの為に少しでも緊張を和らげるかのよう……。

### ポーランド人民軍戦車部隊SIDE

そして、その頃フレデリック達の所属する戦車部隊、否、この場合はフレデリック達4人というべきであろうか、彼らは今まさに死と隣り合わせともいえる状況へと追い込まれていた。

「クソがつ!!こつちに近寄るなサソリ野郎!!……おい!!ボサツとしてないでテメエらも手を貸せ!!」

「りよ、了解!!ちくしよおおおお!!こんなところで死んでたまるかよおおおお!!」

「お、おい!!今度はこつちからも戦車級が装甲を齧る音が……」

「一々そんなものにビビってんじやねえ!!死にたくなかったら撃ち

まくれ!!」

フレデリックと彼の部下達は戦車の車体に空いた穴から侵入してこようとする戦車級へとアサルトライフルや拳銃の弾丸を次々と叩きこんでいく。銃弾が肉体に突き刺さるたびに戦車級からは紫色の、まるで鉄錆と硫黄が混ぜ合わさったかのような刺激臭が漂う血液が噴出して戦車内部とフレデリック達へと容赦なく振りかかる。強烈なおおいに思わず鼻を塞ぎたくなる衝動に駆られるものの、こんな場所でこんな状況でそんな事をしていられる余裕はない。フレデリックは眼前の化け物の大きく開いた口へと容赦なく弾丸を叩きこんでいく。

やがて生命活動を停止した戦車級は崩れ落ちて車体から滑り落ちる。しかしすぐさま別の戦車級が穴の隙間から姿を現す。それだけではない。今度は別の個所から装甲を食い破ろうとする咀嚼音が響いてくる。それも一つだけではなく二つ、三つ……。

もはやこの戦車はただの鉄の棺桶であった。此処に居ては自分達はいずれこの化け物共に一瞬で骨も残さず食い殺されるであろう。早急に此処から逃げ出さなければ己達の命は無い。だが、恐らく戦車の周囲はBETA共によって包囲されている。そんな中をどうやって突っ切れというのか……。フレデリックは唇を噛みしめる。

(今度こそ……終わるか……)

首飾りの赤い石を、強く強く、それこそ指先が白くなるほどに握りしめながら彼は今度こそ己と部下の死を覚悟する。もはや己達は助からない、それこそ奇跡でも起きない限り……。

(奇跡と言えば……、どうせなら、最後にもう一度、 “あいつ” に会ってみたかったな……)

フレデリックの脳裏をよぎる光景、それは5年前、あの仲間達が全員死んでいったあの地獄の中でただ一人生き残ったあの時……。そして、自分の事を助けてくれたあの巨大な怪獣の事……。

あれ以来一度も姿を見せず、あれは幻覚なのではと考えてしまったことも何度かあった。

でも、それでもあれは現実なのだ。最後は信じ、そしていつか再び

あの怪獣に会いたいと心の中で思い続け、それまで死ねないと今日まで生き続けてきた。

その誓いも此処で儂く潰えてしまおう、それがフレデリックの残す数少ない心残りの一つであった。

だが、たとえ死ぬとしてもただでは死なない。せめて一匹でも多くこの化け物共を道連れにしてやる、フレデリックは弾装を入れ替えるとライフルの銃口を戦車級へと向ける。

そして、ついに戦車級が穴を押し広げて戦車の内部へと侵入を開始した、その時…。

空を引き裂くような轟音が連続して響き渡り、それと同時にこちらへ身を乗り出していた戦車級が突如として戦車の天井もろとも木っ端微塵に砕け散ったのである。

「……あ、あれは……」

何事かとフレデリックは天井が吹き飛ばされて出来た巨大な空洞から空を見上げる。重苦しい漆黒の雲に覆われた空、そこから数機の巨大な人型が地上へ向けて降りてくる。

そのシルエットの正体に、フレデリック達は直ぐに気付く。それは自国においても使用されている戦術歩行戦闘機、M i g - 2 1 バラライカに間違いない。まさか基地の連中が自分達の救出に来てくれたのか？一瞬そう考えたフレデリックであったが直ぐにその予想は否定される事となった。

着地の際に巻き上がった雪煙が消えて姿を現した七機のバラライカ、否、厳密には一機だけ明らかにバラライカとは違うシルエットの機体も存在するが、それらの機体のカラーリングはポーランド人民軍に配備されているものとは異なっている。さらに右肩にペイントされている国旗はポーランドのものではなく、東ドイツ国家人民軍所属を示すもの。左肩には部隊章なのだろうか666の文字を冠した角の生えた鬮髯らしき絵がペイントされている。

「この機体は…、確かあの嬢ちゃんが所属しているっていう……」

その部隊章に心当たりのあったフレデリックは思わず息を飲む。何故ならそれは確か自軍がつい最近保護した女性衛士が所属してい

ると言っていた部隊の部隊章そのものであったのだから。

部隊名は第666戦術機中隊、通称『黒の宣告』中隊。巷ではやれ『選別中隊』だの『死神中隊』だのとあだ名をつけられて嫌われているものの、『幾つものレーザーヤークトを成功させ続けてきた東ドイツ最強の戦術機中隊』という一点で評判の高い部隊である事はフレデリックもよく知っていた。実のところあのカティアとかいう少女がその中隊の隊員であることにはフレデリック自身も最初は疑いの目を持っていたものだった。

そんな腕利きの部隊がこんな絶体絶命の状況で救助に来てくれた、もはや偶然とは思えないこの状況にただただ唾然とするしかない。が、いつまでもこんな処でボーっとしているわけにはいかない。

「……よし!!お前ら今のうちに逃げるぞ!!BETA共が東ドイツの連中に引きつけられているうちに此処から脱出する!!だが武器と弾は最低限持つておけ、少なくとも戦車級一頭は片付けられる量をな!!」

「「りよ、了解!!」」

フレデリックはアサルトライフルと弾丸をありつたけ掴み取ると大きく穴のあいた戦車の天井から外へと這い出る。その後ろから部下達が続く。

外に出た瞬間、全身に叩きつけるかのように吹雪と雪が襲いかかってくる。フレデリックはゴーグルを装備すると全身に襲いかかる冷気と霰と雹が叩きつけられる痛み在眉をひそめながらも小走りで雪原を走りだす。

吹き荒れる吹雪の中、時折何やら人間大の影やら何かが蠢くような音やらが聞こえてくるがそれらは無視する。それが何なのかはもはや見ずとも分かるしそんなものに気を取られている暇すらもない。

ひたすら前を向いて走るフレデリック達の背後からは銃撃音と爆発音、そして何か果物が潰されるかのような音が響いてくる。このままここに居れば自分達も流れ弾を喰らいかねない、早急に脱出しなければ…。

せめて無事生き延びてくれよ、と心の中で呟きながら雪原を走るフ

レデリック、が……。

「う、うわあああああああああああああ?!?!?!」

「!?!」

突如として背後から響き渡った部下の絶叫に反射的に足を止め、振り向いてしまう。

そして、振り向いた彼の目に飛び込んできたものは、いつの間に出現したのか此方めがけて接近してくる二体の戦車級と、恐らく雪に足をとられたのか転倒して動けずにいる部下の一人と彼を護ろうと戦車級に銃撃を加える部下二人の姿であった。

部下達は脱出時に持ちだしたアサルトライフルを構えて戦車級めがけて弾丸を雨霰と撃ち込んでいく。銃弾に構わず接近する戦車級であったがやがて一体は全身に穿たれた銃痕から紫色の血を噴き出して地面へと倒れ込む。が、もう一体は身体を穿つ銃弾などものともしない様子で三人に向かって迫っていく。

「……チッ!!」

フレデリックは軽く舌打ちしながら自身もアサルトライフルの銃口を戦車級に向ける。

銃口から連続で発射された銃弾が次々と戦車級に突き刺さり、紫色の血と赤黒い肉片が周囲へと飛び散っていく。

横からの銃撃に戦車級は動きをいったん停止するとまるでのっぺらぼうか何かのような眼も鼻も口も存在しない赤い頭部をフレデリックへと向ける。此方へと頭を向けた戦車級にフレデリックは銃口を向けながらニヤリと笑みを浮かべる。

「ド・ヴィゼーニヤ(さよならだ)」

小声と共に放たれた銃弾が、戦車級の頭部をズタズタに引き裂いていく。やがて頭部を原形をとどめないレベルにまで破壊された戦車級は一瞬身体をふらつかせると、地面に突っ伏すかのように倒れ伏した。戦車級の死を確認したフレデリックは深々と溜息を吐きだした。そんな彼の姿に、部下達は信じられなさそうに眼を丸くして凝視している。

「ぐ、軍曹……」

「はあ……、はあ……、つたく、少しはしやんとしやがれ……。一々俺に世話焼かせないでくれよ全く……。まあいい、とつと弾を補充して此処をいど……」

「軍曹おおおおお!!後ろ、後ろに!!」

「……ああ?お前ら一体何を……」

部下達の焦った表情に怪訝な顔をしながら背後へと振り向くフレデリック。その視線の先に居たのは……。

「……ああ?」

此方に向けてゾウの鼻の如き触腕を振りかざす闘士級BETAの姿であった。

バラナビチ基地SIDE

「……報告です、東ドイツ派遣軍の活躍で敵BETA集団の光線属種の殲滅に成功、もうすぐ我が軍による爆撃が行われるとのことです!!この戦い、我々の勝利です!!」

「……そうか、了解した……」

兵士からもたらされた報告に軍医は目の前の患者を治療しながら相槌を打った。が、彼のそんな淡々とした反応とは逆に、基地からはざわざわとどよめきが湧き上がり始めていた。

「……勝った」「俺達、勝ったんだ……」「今日も、今日もどうにか生き延びたんだ……」

口々に声を上げ始める周囲の兵士達と患者達、そんな姿を横目で見ながら軍医は溜息を吐きつつ患者の傷に包帯を巻いていく。そんな軍医の素っ気ない態度に彼の補佐をしていたカティアは訝しげに眉をひそめる。

「あ、あの……、せつかく勝ったのに嬉しくないんですか……?もう基地から危機は去ったっていうのに……」

「こんなものは勝利でも何でもありませんよ。大元であるミンスクハイヴを潰さない限り、この戦いは終わらない、戦いが終わらなければ勝利でも何でもない。だったら喜べるはずがないでしょう?」



「……!!す、すみません……」

「……いえ。ああ、その包帯をとってください少尉」

カティアの謝罪に淡々と返答する軍医、彼に包帯を渡しながらカティアはほんの一瞬でも舞い上がってしまった己を恥じる。

彼の言うとおりまだ戦争は終わっていない。この戦争が終わるのはミンスクハイヴが陥落するか、あるいは派遣軍が全滅して戦闘続行不可能になるかのいずれかしかあり得ない。

そして現状では後者の可能性の方が高い。今回の襲撃でポーランド人民軍は相当な痛手を被った。もしも再度襲撃があらうものなら果たして防衛しきれるかどうか、そして、借りに基地が突破されたとしたら次に標的となるのは……。

カティアは未来に待ち受けているであろう己達の末路を思い、恐怖で体を震わせる。

作戦は成功した、とのことだが味方がどれほどの損耗を受けているか、等という知らせは聞いていない。もし、もしも中隊の誰かが墜ちていたら、そしてそれがアイリスディーナやテオドルであったのなら……。

心を過る不吉な予想、カティアは無理矢理それを抑え込んでだけが人の治療に専念する。

「……失礼します!!当基地所属の第401戦術機中隊が帰還しました!また、東ドイツ国家人民軍派遣部隊所属の二個中隊も戦車部隊の隊員を救出したとのことで当基地に……」

「……!?て、テオドルさん達が……!!……あ、すみません」

兵士からの報告に凶らずも大声を上げてしまったカティアは、すぐさま口を閉じて治療を続ける軍医に謝罪する。が、軍医は特に気にした様子もなく、一旦手を止めるとカティアの方へと顔を向ける。

「……気にはしていません。ですが、そうですね……、もう私一人でどうにかなりそうですので少尉は中隊の方々と合流なされてはいかがでしょうか?……おい、少尉の案内を頼む」

「ハッ!了解しました!!」

「……え!?で、でもこれだけの人をたった一人で……」

未だにけが人は100人近く居る。中にはもはや死体同然の治療しても手遅れであろう患者もいるがそれを除いたとしても彼一人で全員診きるのは難しいと言わざるを得ない。

そう視線で訴えるカティアに軍医は淡々と言葉を紡ぐ。

「…失礼ですが、これ以上素人に手伝っていたただく事はありません。

此処は我ら医者者の戦場、少尉には少尉の戦場があるはずですが…」

「……!!」

軍医の台詞にそれ以上言葉を継げずに押し黙るカティア。彼は話は終わったとばかりに患者へと向き直り治療を再開する。カティアはその姿を黙ってみているしかなかった。が、いつまでもそこに居るわけにはいかない。

「少尉、こちらです」

「……はい、お願いします」

兵士の後についていくカティア。彼女は後ろを振り返る事無くその場を立ち去って行った。

兵士の案内によって戦術機格納庫に到着したカティア。そこには既に基地への帰還が完了した戦術機が並んで整備兵達による修理を受けている。

だが、その数は出撃前に並んでいた数から半分近く減少している。残っている機体もまた腕部、脚部の喪失、跳躍ユニットの破損等の重度の損傷が目立ち、無傷の機体は何一つ残っていない。

無論帰還できただけでもマシな方だ。此処に機体の無い者の末路はもはや言うまでもないのだから。

格納庫のあちこちに強化装備を纏った衛士達の姿が見える。どの人間の表情も疲労と無気力に満ちており、床に座り込んだり壁にもたれかかったりして動こうとしない。

そんな中でカティアは見知った顔を見つける。長い豊かな銀髪が特徴的な強化装備の女性、第401戦術機中隊『ニエトパーゼ』所属の衛士、シルヴィア・クシャシンスカ少尉であった。そのすぐ近くには中隊長のコシチュシユコ大尉、カティアの尋問を担当した政治将校

も居る。三人とも大した怪我は無いようではあるがどの表情も疲労で満ちている。

「皆さん…!!無事だったんですね!!」

カティアが声を上げると三人はゆっくりと顔を上げてカティアに視線を向ける。

「ああ……、誰かと思ったたら東ドイツ軍の少尉じゃないの……。どうやら無事生き残れたようね、ま、戦闘参加していないなら当然だけど」  
「あ、はい……。皆さんは、えっと……」

カティアはそこまで言うのと口を閉ざして視線を彷徨わせる。シルヴィアはどうでも良さそうに視線を反らし、コシチュシユコ大尉は暗い表情のまま沈黙している。政治将校も二人同様にしばらく沈黙していたが、やがて沈痛な面持ちでゆっくりと口を開いた。

「……三人、殉職した。二人レーザー、一人は要撃級に、な……。もしも援軍が遅れていたのなら……。我々もこの場にはいなかったかもしれないな……」

「……………」

二の句が継げない。勿論カティアとて衛士だ、BETAとの戦闘によつて誰もが死ぬ可能性がある事も、少なからず犠牲が出る事もいやというほど知っている。だが、それでも言葉が出ない。自分を救ってくれた部隊の人達に、少なからず犠牲が出た事に…。

「……この程度の犠牲、BETA戦ではよくあることだ。貴官の気にする事ではない……」

「そう、ですよね……」

カティアは肩を落として顔を俯かせる。分かっている、分かっているのだが納得できない。そんなやるせない思いがカティアの心に渦巻いている。

顔を俯かせて押し黙るカティア、この基地において部外者な己に、この戦いで碌に役に立たなかった己には彼らにかけられる言葉が無い。故にカティアはただただ黙って立ちすくむ事しかできなかった。一方の三人ももう話す事がないのか、あるいはその気力もないのか黙りこんでいる。

四人の間に再度沈黙が漂い始めた、が、その時…。

「…カティア!!」「ヴァルトハイム少尉!!」

突如として耳に聞きなれた声が聴こえてくる。カティアはハツと顔を上げると声の聞こえた方向へと顔を向け、瞬時に大きく眼を見開いた。

「…え?あ、アネットさん!?イングヒルトさん!?ファム中尉にテオドールさんも!!」

「無事そうでよかったわカティアちゃん。…ほらテオドール君も何か言っただけなら」

「…………漏らしてねえだろうな、お前」

「も、漏らしてません!!それが久しぶりに会った人間に対する態度ですかテオドールさん!!最低ですっ!!」

そこに居たのは己と同じ第666戦術機中隊のメンバーであり己の先輩であるアネット・ホーゼンフェルト少尉とイングヒルト・ブロニコフスキー少尉であった。その背後にはファム・テイラン中尉、そしてそっぽを向いて此方を見ようともしない中隊で数少ない男性衛士、テオドール・エーベルバッハ少尉がいる。が、何故か残るメンバー三人、中隊長アイリスディーナ・ベルンハルト大尉と副官ヴァルター・クリューガー中尉、そして中隊付きの政治将校グレーテル・イエツケルン中尉の姿がどこにも見当たらなかった。

一先ずテオドールのぶしつけな発言への怒りを収めたカティアはファムへと視線を向ける。

「えつと、あの、ベルンハルト大尉とクリューガー中尉、イエツケルン中尉は?」

「同志大尉たちなら第502戦術機中隊の隊長と一緒に基地の責任者と話をしに行ってるわよ。今回の戦闘の事とカティアちゃん、貴方の事で、でしょうね」

ファムの返答にカティアも納得する。仮にも自分はこの基地に保護されていた身だ。上司であるアイリスディーナが中隊を代表して礼を言いに行くのも当然かもしれない。ついでに自分を連れて帰ることについて色々と話をしているのかもしれない。

カティアがそんな事を考えていると、いつの間に此方に気がついたのかコシチュシユコ大尉がファム達に向かつて歩みよって来る。

「貴官らが第666戦術機中隊の。ポーランド人民軍第401戦術機中隊長のヤン・コシチュシユコ大尉という。貴官らのお噂はかねがね」

「国家人民軍第666戦術機中隊所属ファム・デイ・ラン中尉です。どうせ碌な噂じゃないでしょう？まあそれはともかく、ヴァルトハイム少尉を保護してくださった事、中隊長に代わってお礼申し上げますわ」

「いやいや、こちらこそ窮地を助けていただき感謝している。そちらの中隊長にあったのなら改めて礼を言うでしょう」

互いに笑顔で握手するファムとコシチュシユコ大尉。とはいえ両者共に油断なく相手を見据えており、さらに政治将校は笑顔もなくファム達をジツと観察するかのように眺めている。一方のシルヴィアは関心なさそうに顔を俯かせている。

何だかんだあるものにぎやかに会話する衛士達、であったが……。

「……しっかりしてください軍曹!! やつと、やつと基地に到着したんですから……!!」

「おい、おい誰か!! 軍医を呼んできてくれ!! 早く!!」

「早く、早くしてくれ!! このままじゃ軍曹の命が!!」

「……え?」

突如として格納庫に響き渡る誰かの怒声。必死な大声で医者を呼んでくれと叫ぶ兵士達が三人、否、もう一人いる。

一人の兵士が背中に誰かを背負っている。まるで背中に背負われたリユツクのおおぶさっているその誰かは、時折苦しげに呻きながら体を揺すっている。

その背負われている人間の顔を見た瞬間、カティアの表情が信じられないものを見たかのように凍りついた。

なぜならその顔は、己がよく知っている人間の顔であったのだから……。

「……フレデリックさん!!」

それはこの基地に保護された自分の世話を命じられ、この基地の案内をしてくれた戦車兵、フレデリック・コルベであった。その姿を見た瞬間、カティアは脱兎のごとく駆けだした。背後からテオドル達が何事か叫んでいるものそんなものを気にしていられない。

カティアは兵士に背負われたフレデリックに駆け寄るとその体に触れないよう注意しつつ彼に必死に声をかける。

「フレデリックさん!!フレデリックさん!!しっかりしてください!!」

「なッ!!何だよアンタは!!軍曹の知り合いだったら頼むから軍医呼んできてくれ!!そうでなかったら邪魔だからどいてくれ!!こっちは一刻を争うんだ!!」

フレデリックに近寄るカティアに兵士はいらただしげに声を荒げる。此方は一刻を争う状態なのだ、頼むから邪魔をするな。鬼気迫る勢いにさしものカティアも怯んで後ずさりする。が……。

「……おい、あんまり、女いじめるな……。それも、こんな、年端もいかねえガキに、よお……」

「ぐ、軍曹?」

「フレデリックさん!!」

突如として意識が戻ったのか、弱弱しげな声で部下を窘めるフレデリック、あまりに突然の事に彼の部下達とカティアは仰天してしまう。そんな彼女達の反応にフレデリックは身体を襲う激痛に耐えながら苦笑する。

「ハ……、それより、いつまでおぶってんだお前ら……。早く俺を、寝かせてくれ……。毛布とかそういうのはいらん、床でいい、から……」

「へ……、は、ハイッ!!」

部下達は急いで床にフレデリックを横たえる。とはいえ流石にそのまま横たえるわけにもいかずに己の着ているジャケットを脱ぐとそれをせめてもの布団変わりに床に敷いてその上にフレデリックの体を横たえる。

改めて見たフレデリックの体の状態、それは酷いものであった。胸

部が何か巨大な鈍器で殴られたかのように深々と陥没しており、砕けた肋骨が数本皮膚と服を突き破って外に飛び出してしまっている。ひよっとしたら内臓も潰れているかもしれない。またその顔色はまるで紙のように真っ白になっており、息苦しそうにゼエゼエと呼吸をしながら時折せき込んで血を吐いてしまう。

致命傷…、もはやだれが見てもそうとしか思えないほどの重傷、寧ろ此処まで生きている方が奇跡と言えるだろう。暗い、今にも泣き出しそうな表情を浮かべるカティアに、フレデリックは安心させるように笑みを浮かべる。

「何……ちつと……、ドジ踏んじまってな……背後の闘士級に、気がつかねえで……ガハツ!!」

「フレデリックさん!!」

せき込んで大量の血を吐くフレデリックにカティアは悲鳴を上げる。これほどの重傷ではもはや話すことすらも苦痛だろう。だが、フレデリックは笑みを崩さぬまま途切れ途切れに話を続ける。

「これで、良いんだよ……、あの時、死んでたはずの、命だ……、寧ろ、生き過ぎたほうだ、よ……」

「そ、そんな……」

「ごねん、まえの……パレ、オロゴスで……俺は、一度、死にかけて……。だけど……生き残った……俺、だけ……仲間……全員……死んだ、のに……」

話を続けるうちにフレデリックの表情が段々と歪んでくる。まるで過去に起きた悲劇を嘆くかのように、そして何かを後悔するかのよう……。その今にも泣き出しそうな表情に、カティアと部下の三人はただただ黙りこむ事しかできなかった。

「……同志軍曹」

と、唐突に頭上から何者かの声が聞こえてくる。思わずカティアが頭上を見上げると、そこにはシルヴィアが腕を組み、いつも通りの無表情でフレデリックを見下ろしていた。よく見ると他にもコシチュシユコ大尉と政治将校、そして666中隊のメンバー4人も此方に集まっている。

シルヴィアは瀕死のフレデリックを見下ろしながらフン、と嘲るように鼻を鳴らした。

「……ずいぶんな、様ね」

「まあ、な…、悪いが、先、逝くわ……。なあ……。シルヴィア……」

「……何？」

フレデリックはシルヴィアに向かって先程とは打って変わって穏やかな笑みを向けると、ただ一言、言葉を紡いだ。

「お前は……悪くねえ、よ……」

「……その言葉、そっくりそのまま返させてもらおうわよ。冥土に、持って行きなさい……」

それだけ告げるとシルヴィアは背を向け、そのまま格納庫から歩き去っていく。その時カティアはシルヴィアの目じりに何か光るものを見たような気がした。が、次の瞬間フレデリックが激しくせき込み始めた為に弾かれるようにそちらに向き直る。

「フレデリックさん!! しっかり、しっかりしてください!! 今、今軍医を呼んで……」

「もう、いい!! 俺は…助からねえ!! だから、お前に、お前に一つ、言う事が……!!」

死に賭けだというのにどこにそんな力があるのか、フレデリックは握り潰さんばかりの握力で軍医を呼びに駆けだそうとするカティアの腕を掴んで押し留める。カティアは最初その腕を振りほどこうとしていたものの、直ぐに諦めた様子で再び床に座り込んだ。その姿にフレデリックは安堵するかのように大きく息を吐き出すと、カティアに、その周りに居る人間達に語り聞かせるかのように口を開く。

「カティア…、お前ら…、人間って、いうのは、いつか、別れがくるもんだ…。いつだって、突然に……。こんな、ふうに……。ゲホッ!! ゴホッ!!」

「軍曹……。もう、もう喋らないでください!!」

文字通り血を吐きながら語る彼を部下は悲鳴交じりの声で止めようとする。が、フレデリックは部下の言葉を無視して言葉を続ける。

「それは、お前たちだって、例外じゃねえ…。だから……。俺で、俺



で慣れておけ……」

「フレデリック、さん……」

「軍曹……」

「同志軍曹……」

「……」

フレデリックの言葉に、周りの人間は押し黙る。そしてカティアは瞳から涙をこぼしそうになりながら、フレデリックの告げた言葉を噛みしめる。

別れ…、己もこれから先多くの人間と別れていくことになるのだろう。幼いころに父と別れたあの時のように…。それは仲間の死によるものかもしれないし己の死によるものかもしれない。

それでもいつかは別れの時が来る。今所属している中隊の仲間たちとの別れも、5日突然に……。だから自分が死ぬのを見てその時に備えておけ、とフレデリックは言いたいのだ。

分かっている、こんな泥沼の戦いの繰り広げられている戦場では己も仲間達も、今まで知り合った人たちもいつ死ぬか分からない状況であることも、常々それを覚悟しておくことが常識である事も分かっている。

それでもカティアは、この理不尽な現実を受け入れられない。たった一日知りあったただけだったとしても、その人がこうもあっさりと死んでいくこの残酷な現実が……。

悔しそうに拳を握り締めて震えるカティア、そんな彼女にフレデリックは腕をブルブルと震わせながら彼女に何かを差し出した。

「カティア……、これを……」

「……!!こ、これ……!!」

フレデリックがカティアに差し出したもの、それは彼がお守りと言って大事にしていたあの赤い石のペンダントであった。唐突に差し出されたそれに、カティアは思わず茫然としてしまうが、フレデリックは手を震わせながらペンダントを彼女へと差し出している。

「貰って……くれ……。どうせ…俺は、死ぬから、な……。もう、持っている、も、意味は、ねえ、から……」

「で、でも、こんな大事な物……。私なんかじゃなくて、せめて、せめて家族とか恋人とか……………」

「俺に…………もうそんなのは…………いねえ、よ…………。いいから…………黙つて、受け取れ…………。何故かな…………これは…………お前が持つべきだって…………感じちまつてな…………。構いませんよね？同志…………中尉？」

そう政治将校に視線を向けて問いかけるフレデリック。政治将校は暫く沈黙していたがやがて重々しくコクリと頷いた。カティアは暫く躊躇していたもののやがておずおずとペンダントを受け取るとそれを己の首にかける。それを見届けたフレデリックは咳き込みながらも満足げに笑みを浮かべる。

「…ハハ…………ったく、最初から…………素直に、受け取っておけつての…………ま、いい…………。おい…………お前ら…………」

「…………はい」

フレデリックの呼びかけに部下の三人は返事を返す。三人とも己の上官がもうすぐ逝ってしまう、それが分かっているが故か覇気も無く蚊の鳴くような声であった。本当ならば直ぐにでも叱りつけたところであつたが、生憎今の己には時間が無い、故に早々に要件を伝えなければ…………。フレデリックは荒い息を吐き出しながら一言、唯の一言彼らに言葉を送る。

「…………生きろ、何が、あつてもな…………」

「…………!!」

静かな、しかしはつきりと耳に届いたその言葉に三人の部下は驚愕したように眼を見開いた。が、直ぐに姿勢を正して敬礼し、「…了解」と絞り出すような声を出す。

フレデリックは次にカティアの背後で此方を見つめる第666中隊のメンバー、その中の一人であるテオドールへと視線を向ける。

「すまなかつた、な…………わざわざ、助けて、くれてよ…………。まあ…………俺は、こんな、様だが…………。…………あの子を、頼む…………」

「…………」

フレデリックの言葉にテオドールは言われるまでも無いと言わんばかりに黙つて頷く。そんな彼の姿に苦笑いしながら、フレデリック

は安心したかのように大きく息を吐き出す。

悔いは無い。何一つ。

どうせ5年前に死ぬはずだった命、それが運命の悪戯か神の采配か知らないがこうして5年も生き延び、BETA共と戦う事が出来たのだ。まあハイヴのつぶれるところが観れなかったのは残念ではあったが流石にそれはぜいたくというものだろう。後は彼らに任せるしかない。

徐々に意識が遠くなり、瞼が重くなる中フレデリックは満足げに笑う。

「ああ……でも……一つ、あるとすりゃあ………」

もう一度、あいつに遭いたかった……。

その時彼の脳裏に浮かんだもの、それは5年前に迫りくるBETAを一掃したあの巨大な怪獣の姿。傷だらけでありながらも己を護ろうとするかのように二本の足で大地を踏みしめ立つ雄大なる巨獣の姿……。

それが彼、パレオロゴス作戦唯一の生還者であるフレデリック・コルベ軍曹の最後の言葉、最後に思い浮かべたとなったのだった。

声が聞こえた。そんな気がした。

深い深い海の底、進化の為に眠りにについている守護神は、うつすらと瞳を開ける。

何者かが叫ぶ声が、祈るかのような声が聞こえた気がする。少なくとも、己の知る人間ではない誰かの……。

名も知らぬ、顔も分からぬ、見ず知らずのだれかの絶唱、だが、それは眠れる守護神の心に、魂に深く深く響き渡る……。

世界を、己の国を、そこに住む人々を護ってほしい……。襲い来る脅威を滅してほしい……。そんな願いが……。

『グルルルル……』

巨体の蠢きと共に周囲の水も大きくかき乱される。その体表には長き眠りの間にこびり付いた海藻、フジツボにびっしりと覆われており、一見すると海底に埋まっていた巨岩が動いているかのような様相である。

暗黒の世界の中、永い眠りより覚めた巨神は頭上へと視線を向ける。闇の世界を抜け、青き海を抜け、その先に広がっているであろう紺碧の空を、あるいはこの星のものではない生命によって蹂躪されつつある地上へとその鋭い射抜かんばかりの眼光を送る。

『グルアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオンンンンンンン!!!』

目覚めの時は来たー。長き眠り果て、傷を癒し進化を遂げた星の守護神は深き闇の世界で高らかに咆哮を張り上げる。

咆哮の音圧で震える海底、振動する暗黒の世界を逃げ惑う無数の深海魚、それはさながら、漆黒の夜空に広がる星星の如き光景であった……。

## 第8話 Das Wachen―目覚め―

そこは茜色の空に照らされた荒野の丘、丘の上に立つのは枯れ果てた桜の並木、そのうちの一本に寄りかかる一人の青年と一頭の直立した亀のような生物のみ。青年の名前はシロガネタケル、亀のような生物の名前はガメラ。そう、此処はガメラと化したシロガネタケルが眠るときに彼の精神が送られる精神世界。この光景は彼の心に焼きついた世界そのものである。

彼はかなりの長い間、外の時間で言えばもう5年以上もこの世界で過ごしている。その理由は単純、受けた傷が予想以上に深かったが故、そして彼が『進化』する為でもある。

あの時G弾の直撃を受けた際、ガメラは致命傷こそ負わなかったもののそれでも戦闘をする事が困難なレベルの重傷を負っていた。にも拘らずミンスクハイヴへと強襲、これを撃滅するという無理を重ねてしまったが故にただでさえ甚大ダメージを負っていたその巨体には致命的なまでの負荷が加わる事となってしまうのだ。

このままでは命にかかわると判断したガメラはハイヴを殲滅するや否や即座に海へと飛び込み人の目の届かぬ深海にて長い眠りについた。

その身に負った傷を癒す為に、そして何より、これから激化するであろう戦闘に対応する為の進化を行う為にも。

ガメラは眠りについての間により戦闘へと特化した形態へと身体を作り替え、進化させていく事が出来る。この形態進化にかかる期間は、その進化の程度にもよるが本来ならば一年程度で十分であった。だが、アメリカの撃ち込んだG弾による身体の内部にまで達するであろう損傷、そしてその直後に休む間もなく行われたハイヴ強襲によって受けたダメージの回復に予想以上の時間がかかり、それがガメラの進化を大幅に遅らせる事となってしまった。

結果として五年、身体の完治に二年、進化に三年も費やしてしまった。その間地上では相も変わらずBETAの侵攻がやむ気配はなかった。ミンスクハイヴが破壊された結果、ヨーロッパへの侵攻は一

時停滞したものの、それもほんの一時の事であった。ミンスクハイヴ陥落の三年後、ヴェリスクハイヴから出現したBETA群は北部へ進攻、フィンランドの都市ロヴァニエミを占領し新たなハイヴを建設、さらにその翌年には折角奪還したはずのミンスクに再度BETAが侵攻、再びハイヴが建設される事となってしまった。

それから一年、現状ハイヴがどうなってるか、BETAがどこまで侵攻しているかは不明であるもののいずれにせよ折角破壊したはずのミンスクハイヴが再びBETAの掌中に落ちてしまった事だけは確かであった。

また振り出しに戻ってしまった、否、ハイヴが一つ増設されたからさらに一歩後退か……。いずれにせよあまり良い状況とは言えない事態にガメラ、シロガネタケルは歯噛みする。

故に彼は精神世界で焦れながらもただただ黙って回復と進化を待ち続けた。

ただ一つ救いがあるとするならば、精神世界には彼の話し相手となるオリジナルガメラが居た、という事であろうか。己の身の上を語れる話し相手が居るのと居ないのでは心の余裕というものが大分違ってくる。幸い精神世界では空腹になる事も無い為丸々五年間ゆっくりと何不自由なく休息する事が出来た。

そうして、5年の歳月はあつと言う間に過ぎ去り……………。

「……………ん、もう終わった、か……………」

その日、枯れ木にもたれかかって眠っていたタケルは何かを感じ取ったかのようにうつすらと瞳を開ける。それを合図とするかのように周囲の光景が段々と霞がかかっていくかのように白く染まっていく。タケルはこの光景を幾度となく見た事があった。これは何時も、現実世界の『己』が目覚ます時に決まって目撃する光景。これはすなわち己の傷が癒え、進化も終わったとのことと他ならない。タケルのそばに立つオリジナルガメラもまた眼前の光景を眺めながら唸り声を上げる。

『うむ、傷も癒え、進化も完了した。少々時間がかかったが……………』

「丸々5年、だったもんなあ……………。折角潰したハイヴもまた造り直

されたみたいだし……。また潰すのは手間だなあ……」

そう言いながらタケルは身体を大きく伸ばして欠伸した。わざわざ重傷の身体に鞭打って潰したハイヴが自分が寝ている間に再び建設されてしまったのみならず、さらに新しいハイヴまでも建設されたのだからタケルからすれば余計な仕事が二つ増えたようで堪ったものではない。

『しかし、進化は完了した。これで少しはハイヴの攻略も楽になるだろう』

「だな、それにこれももし過去だとするなら……。オリジナルハイヴの規模もまだ小さい、十分潰せる可能性がある……!」

そうタケルは晴れやかな笑みを浮かべる。この世界が己が目覚めた時代よりも過去の世界だとするのなら、まだオリジナルハイヴはそこまで巨大化しておらず、ハイヴの数も前の世界より圧倒的に少ない筈。ならばこの世界のハイヴ全てを潰す事等『今のガメラ』からすれば容易いことだろう。

ここでハイヴを全て潰せばBETAと人類との終わりなき戦争も終わる、これから先犠牲となる多くの人々を救う事が出来る筈だ。そう浮かれるタケルであったが、一方のオリジナルガメラは何処か難しそうな表情でグルル…、と唸り声を上げている。

「……何だよガメラ、やけに不満そうだけど……。お前は嬉しくないのか?」

『いや、無論この地球からBETAが排除されるということは喜ばしい事だ。だが……。そう簡単にいくのかどうか、と思っただけ』

「……はあ?そりやどいう……。……」

オリジナルガメラの意味ありげな言葉に眉をひそめるタケルであったが段々と風景と共に白く染まっていく己の身体にその問い掛けは途中から途切れてしまう。それと同時にタケルは己の思考を切り替える。これから戦場へと向かう、かつて衛士だった頃に戦術機を出撃させる時と同じ心持へと……。

そして、光届かぬ海底で、かの守護神は眼を覚ました。長年にわた  
り眠り続けた結果、その巨体には無数の堆積物が積み重なり、さなが  
ら海底に盛り上がった一つの岩山の如き様相となっていた。ガメラ  
は巨体を揺らし、堆積物を振り落としながらその巨体を起きあがらせ  
る。

光届かぬ海の底、黒一色の世界でそれは、まるで一つの巨大な山が  
出現したかのようにであった。そして巨影は己の真上、そこに広がる黒  
一色の世界とその先にあるであろう蒼穹の空を見据えるとまるで幾  
千幾万の年月を経た巨木の如く太い四肢を振るって巨体を海底から  
浮かびあがらせる。

『グルアアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オ!!!』

光!無き深海に響き渡るガメラの咆哮、それは『彼』自身の復活の歓  
喜の声であり、怨敵への逆襲の誓いであった――。

## 第666戦術機中隊SIDE

時は遡り、此処はソ連領ベラルーシに存在するハンツァヴィチ基  
地。東ドイツ軍がミンスクハイヴ攻略の為に建設した軍事基地、その  
屋上に一人の女性衛士が物憂げな表情で目の前に広がる雪原をただ  
黙って眺めている。その右手は首からぶら下げられたペンダント、そ  
の先端の鉤型の赤い石をギュツと握りしめている。

女性衛士の名前はカティア・ヴァルトハイム。階級は少尉。元西ド  
イツ軍の衛士であり、現在は東ドイツ軍所属第666戦術機中隊『黒  
の宣告』中隊の一員である。

カティアの視線の先、そこにあるのは今回の作戦の攻略目標である  
ミンスクハイヴ、そして以前己が保護されたポーランド人民軍所属基  
地、バラナビチ軍事基地。その方角を視線を反らすことなく見つめな  
がら、カティアはあの基地で出会い、そして別れたとある兵士の事を  
思い返していた。

「……フレデリックさん……」



今わの際に彼から託されたペンダントを握りしめながらカティアはポツリとその名を呟く。彼が最後に己に向けた言葉を思い出しながら。

『人間って、いうのは、いつか、別れが来るもんだ……………、いつだって、突然に…………』

『それは、お前達だって、例外じゃねえ…、だから…………、俺で、俺で慣れておけ…………』

「…………慣れておけて…………、それでも、それでも辛いです、私…………」  
幾ら短い間であつたとはいえ、知り合い、語り合った人間が死んで逝く姿は決して見ていていいものではない。確かにこの時代、BETAと人間とのいつ終わるとも分からぬ戦争の中、己もいつ中隊の仲間達と別れる事になるか分からない。ましてや己が所属するのは東ドイツ国家人民軍、下手な事を言おうものなら政治将校や国家保安省所属の情報提供者にいつ密告されるか分からない環境であり、BETA以上に厄介な状況といえるだろう。

ならば彼の言う事も正論だ。他者が、己以外の誰かが、仲間が目の前で死んでいくという事に慣れなければ、こんな地獄のような世界ではやっていけないだろう。それは頭で理解している。

理解している、だが、それでもまだ心のどこかで納得できない自分が居る。

もしもテオドルやアイリスディーナが目の前で命を落としたら…………、果たして自分は自分を保てるのだろうか…………。カティアは表情を歪めて唇を噛みしめる。と、唐突に背後から鉄製のドアが開く音が聞こえてくる。

「…………また此処か。いつも好きだな、お前。寒くねえの?」

「…………テオドルさん」

屋上に現れたのは同じ中隊のメンバーにしてカティアの命の恩人、テオドル・エーベルバッハ。彼は寒そうに若干体を震わせながらカティアに向かって歩みよって来る。カティアはテオドルに一瞥すると再び視線を雪原の果てへと向け直す。そんなカティアの横にテオドルも並んで立った。

「……お前、本当にいつも此処に居るな。あのバラナビチ基地から帰還して……ほぼ一カ月、か……。まだあの軍曹の事、受け入れられてないのかよ」

「……はい、恥ずかしいですけど、まだ……」

俯きながら呟くカティアにテオドールは白い息を吐き出した。

「……あの軍曹の言うとおり、慣れとかないとこれから辛いぞ、お前」

「……分かって、ます、分かってますけど……!!」

テオドールの言葉にカティアは言葉を震わせる。その両手は赤い石を思い切り握りしめており、指先は気温の低さからか白くなっている。

「でも、でももしテオドールさんが、ベルンハルト大尉がフレデリックさんと同じように……!!傷ついて、死んでしまったらと考えたら……」

「……そう簡単に死んでたまるか。そんなこと言うならお前がもつと腕磨け……」

「で、でも私、東ドイツの事や皆さんの事、よく知りもせずに空気の読めない事を言つて……!!もし、もし私のせいで中隊の皆さんが国家保安省に捕えられたら……!!」

「だったら少しは口慎めばいいだろうが……。何だかお前最近心配性になって無いか？まあ前のようにあれこれベラベラ喋られるよりかはずっといいんだろうが……」

呆れた様子で肩を竦めるテオドールに対し、カティアは顔を俯かせたまま黙り込む。

テオドールの言うとおり、最近のカティアは最初に中隊に配属された時よりも口数は少なくなっている。常日頃中隊の隊員たちと接する時にはいつものように明るい表情を見せたりするものの、「二つのドイツが一つになる」「この国のやり方は間違ってる」等々の一歩間違えれば東ドイツの体制への非難ともとれるであろう言葉はめつきり口にしなくなった。それが社会主義国家においては自身を、あるいはテオドール達を破滅へと突き落としかねないという事が嫌というほ

ど理解できたこともあるが、そしてバラナビチ基地における体験が少なからず影響していたのだ。

このBETAとの人類の存亡をかけた戦いの最中に、同じ人類を恐れるというのとは何ともナンセンス極まりない事なのであるが、そのナンセンスな状況が当たり前なのが東ドイツという国家、己の故郷なのである。未だに土を踏んではないものの、己が今まで憧れていた国がそういうものであると、カティアは嫌というほど実感していた。

「……それはそうと、テオドールさんのほうも、その……」

「………リイズの事か。お前もあいつがスパイだと疑ってるのか？」

「……!?いい、いえ!!そ、そんなわけじゃあ……」

「……いや、いい。…つたく、どいつもこいつも……」

テオドールは忌々しげに舌打ちしながら手摺に寄り掛かる。

つい先週、中隊に新しく衛士が入隊した。これだけならばまだいい。元より第666中隊の人員数は8人、中隊の定員である12人を大きく下回っているのだから新たな人員の補充はめでたいことに違いない。

問題はその補充された人員の素性である。リイズ・ホーエンシュタイン。かつてテオドールと共に国家保安省に捕えられ、生き別れとなった義理の妹である。テオドール自身も国家保安省から釈放後、必死にその行方を追ったが、結局手がかり一つ掴む事が出来ずもう死亡したと心の中で決めつけていた。

……その、死んだと思っていた義妹が生きていた。しかも自身の中隊に編入する形という思いがけない再会で……

偶然というには出来過ぎている。そう、さながら何者かの手によって仕組まれたかのように……

アイリスディーナを含む中隊のメンバーは皆リイズが国家保安省からの情報提供者である、との疑いの目を向けている。それはカティアもまた例外ではない。幾らカティアでもこの再開はいささか出来過ぎている、何かがおかしいと否応なしに感じてしまうのだ。

テオドールも、もしかしたらリイズが国家保安省の情報提供者なの

ではないか、と心の底では疑念を抱いている。アイリスディーナとグレーテルを含む中隊のメンバーからは何度も忠告を受けているが、リーズが情報提供者かもしれない、否、その可能性が高いという事等言われなくても分かっている。

だが、だがそれでも彼女はまぎれもなくリーズ、かつて生き別れた己の妹なのだ。たとえ血の繋がりが無かったとしても己の大切な肉親であることには変わらない。その肉親をスパイだと、国家保安省の手先だと疑わなくてはならないことに、テオドールは心の底で立ちを覚えていた。

肉親に疑いの目を向けねばならない己自身に…。

そして、そうせざるを得ないような社会と制度を構築した国家保安省と東ドイツという国家に対して……。

「……テオドールさん、その、ごめんなさい……。」

「……いや、いい……。気持ちとは分からないわけでもないしな。こんな作戦でもなければ、あいつも即尋問にかけられていただろうし……」  
そう呟きながらテオドールは空を仰ぐ。

現在ベラルーシにはワルシャワ条約機構軍以外に国連軍、欧州連合軍、そしてアメリカ軍が一步遅れる形で集結し、ミンスクハイヴ攻略の為の一大反攻作戦へと乗り出している。

元来ならば最初から4軍合同による攻略作戦を行うはずであったのだが、BETAに奪われたとはいえ己の領土、ましてかつてG元素研究施設を建設していたミンスクへと他国の軍が展開する事に対してソ連の上層部が難色を示し、加えてパレオロゴス作戦、そして北欧に新たに建設されたロヴァニエミハイヴから出現するBETAの漸減作戦による損失の回復に予想以上の時間がかかったが故に此処まで遅れる事となってしまった。

無論この事に対するワルシャワ条約機構軍の不満、反発は大きく、西側もまた社会主義国家であるワルシャワ条約機構軍、特にその代表とも言える東ドイツに対して強い敵意を抱いている。

事実合同作戦の初日、作戦終了後にテオドール達は西ドイツ軍の将兵に絡まれ、やれ共産主義者（あか）だの犯罪国家だのと散々な罵り

を受ける事となった。無論テオドールを始め666中隊の皆は良い思いはしなかったが、それ以上に自分達東ドイツが世界中からどのように見られているのかというのを嫌というほど思い知る事となった。

アイリスデイーナもこの事に関しては重々承知しており、「だからこそ、彼らの信頼を取り戻すために我々は此処で戦っているんだ」とテオドールとカティアに告げていた。

もつとも、それでも二人は未だに不安を拭うことができずにいるのだが…。

「……そろそろ戻るぞ。いい加減冷えて仕方が無い」

「……はい」

話は終わりとばかりに背を向けてドアに向かって歩き出すテオドール。その後ろ姿にカティアは気まずい表情を浮かべながら小走りについていく。

その時彼女の胸元のペンダント、そこに吊るされた赤い石がほんの微かに光を放っていた事に、カティアを含めだれも気付く者はいなかった。

その後中隊専用のミーティングルームに到着するまで、二人は無言であった。無論盗聴器が山ほど仕掛けられている基地の内部で不用意な事を喋るわけにもいかないのもあったが、それ以上に両者の間に流れる重苦しい空気、そのせいで話すべき言葉が何一つ浮かばないのだ。

暫く歩き続け、二人はミーティングルームのドアの前に到着する。テオドールはドアを開け、室内に足を踏み入れようとした。が、その時突如として部屋から何者かが飛び出してきて、テオドールの身体へと思い切り衝突した。

「うおっ!!?…って、またお前かリーズ!!」

「えへへ♪お兄ちゃん捕まえた!んもーカティアちゃんと一緒にどこ行つたの?探してもいないから心配したんだよ!!」

そう言いながらテオドールに抱きつき、不満そうに頬を膨らませるのは金色の髪の毛を水色と白のストライプのリボンでツインテール

に結わえた少女、テオドールの義妹にして第666戦術機中隊の新入りメンバー、リイズ・ホーエンシュタインであった。

国家保安省に捕えられ、既に尋問によって死んだと思われていたが、本人曰く3年前に国家保安省から解放された後、衛士訓練学校に入学し、卒業後東欧派遣軍へと送られたとのことらしい。最もアイリスデイーナとグレーテル曰く、国家保安省ならばその程度の情報操作はお手のものであり、未だに信用ならないとのことだ。

二人曰く、リイズは国家保安省の情報提供者、あるいは国家保安省の洗脳、教育を受けた秘密工作員の可能性があるとのこと。そもそも血のつながりが無いとはいえ肉親が同じ部隊に編入すること自体、軍隊ではあり得ない事なのだ。如何に別部隊の派遣とはいえ出来過ぎているとしか思えない。間違いなく何者かの意図が働いているとアイリスデイーナは睨んでいるのだ。

故にアイリスデイーナはテオドールに一つの命令を出した。リイズ・ホーエンシュタインを監視し、その真意を探る事…。もしスパイで無かったのならばそれでよし、スパイだったのならば尋問し、それ相応の処置を取ることだ。

正直テオドールは気が乗らなかった。当然である。己の妹をスパイかどうか判明するまで監視する等誰が好き好んでやりたがるとうのか。が、テオドールにも少なからず不安があるのは事実であり、出来るのならば妹の潔白を証明したいという思いもあつた為、結局引き受ける事となったのである。

現在のところ、リイズの言動や行動に不審な点は見当たらない。これがかもし演技だとするのならば相当なものだと言わざるを得ない。確かにリイズはかつて学校の演劇部に所属してはいたが、それでも「此処まで完璧に演技できる」とは思えない。ましてや、己と再会した時に流したあの涙が嘘なわけが……。

心の中でそんなことを考えながら、己の胸に顔をうずめるリイズの背中を撫でるテオドール、で、あつたが……。

「……あ、あの、テオドールさん、リイズさん、そ、そろそろ部屋に入らないと、その、ど、同志中尉が……」

「……貴様ら、随分と見せつけてくれるなあ、ええ？これは二人共政治的指導が必要か？ああ？」

「……………あ」

突如聞こえてきたカティアの遠慮がちな声と、グレーテルのどすの利いた低い声に二人はそちらへと顔を向けた。そこには顔を引き攣らせたカティアと額に青筋を浮き上がらせて鬼の形相を浮かべるグレーテル、その他中隊の面々がジーンとこちらを眺めていた。

「……………おおおおおおお!?も、申し訳ありません同志中尉!!ほ、ほらいズ離れる邪魔だ!!同志中尉にどやされちまう!!」

「うえ!?ちよ、ちよっとお兄ちゃんそんな乱暴にしないでよおく!!」  
抗議の声を上げるリイズを無理矢理引きはがしながらテオドールは慌ててグレーテルへと敬礼する。そんな彼をグレーテルは冷たい視線で、アイリスディーナは反対に面白そうに眺めている。

「ククツ、まあいい。とりあえず二人共入れ。こんな廊下で話をするわけにもいかんしな」

「は、ハイ……………」  
「了解、しました……………同志大尉」

アイリスディーナの若干からかい気味な口調にテオドールは顔を赤らめ、リイズは不承不承といった様子で応じながらミーティングルームへと入室した。

ミーティングルームには、既にテオドール達以外の中隊員が勢揃いしている。部屋の奥には壇とプロジェクターが設置されており、プロジェクターの前にはアイリスディーナとヴァルター、グレーテルの三人が立っている。

「全員揃ったな?ならばブリーフィングを始めるとしようか」

目の前に並ぶ中隊の衛士達を見回しながら、アイリスディーナはそう宣言して、隣に立つヴァルターへと目配せする。ヴァルターは無言で頷くとプロジェクターを起動させる。起動したプロジェクターにベラルーシ州の、その中心であり攻略対象であるハイヴの存在するミンスク地方の作戦図が表示された。

「ミンスクハイヴにて新たなBETA梯団の形成を確認した。数はおおよそ4万。我々ワルシャワ条約機構軍はこれを旧ストウプツイ市跡で真正面から受け止め、遅滞させる」

「俺達が予備兵力……？なんでまた……」

ヴァルターの言葉にテオドールは僅かに眉を上げる。確かにこの戦場に来て以来何万ものBETAを相手にする事等日常茶飯事といてもいい状況であったが、予備兵力として運用された事は今まで無かった。予備兵力は基本的に主力の危機、あるいは戦火拡張の好機でもない限り投入される事は無い。確かにそのような事態に投入されて活躍すれば中隊の名は売れるだろうが、それでも相当な博打である事に代わりは無い。

ヴァルターはプロジェクターの図を指し示しながら話を続ける。

「国連軍の作戦案は、旧ストウプツイ市跡において、両翼をアメリカ軍と欧州連合軍、中央に我等ワルシャワ条約機構軍を配置、中央の我が軍がBETA群を遅滞させている間にAL弾を撃ち込み重金属雲を展開、光線属種を飽和砲撃で滅滅しつつアメリカ軍と欧州連合軍が側面から攻撃、包囲網を完成させた後に面制圧でBETAを殲滅する、というものだ」

「通称、アクティヴ・デイフェンス。西側陣営が編み出した対BETA戦ドクトリンだ」

アクティヴ・デイフェンス。欧州連合とアメリカがかつての第一次パレオロゴス作戦の戦訓をもとに考案した対BETA戦基本戦術。元々NATO軍がワルシャワ条約機構軍の侵攻に対抗するために考案した「エアランドバトル」という戦術を対BETA用のものへと改良したもの。

BETA群は侵攻の際に各々の種の進撃速度の差から種ごとに前衛、中衛、後衛へと自然に梯団が形成される。アクティヴ・デイフェンスの要はそれらBETA梯団へと同時に多方から攻撃を行う事によって各集団を遅延、分断し、その間隙に地上部隊の軌道打撃によって各個撃破していくという戦術構想である。

この戦術の利点としては、BETAの攻勢に対して柔軟な包囲殲滅



が可能な点と、機動力に優れた戦力が用意されているのならば要塞陣地を構築するなどして防衛線を作り出す必要性が無くなるという点である。逆を言えば機動力に優れた戦力を用意、整備することができない場合には到底行う事が出来ない戦術でもあり、社会主義国家の集団であるワルシャワ条約機構軍のみでは到底実行できない戦術でもある。

「……と、これがアクティヴ・ディフェンスという戦術だ。ざっくりと話したがまあ簡単にいえばBETAを包囲して袋叩きにする、程度に覚えておけばいい。……何か質問は？」

説明を終えたアイリス・ディーナは中隊のメンバーを見回してそう投げかける。と、テオドールの隣に座っていたカティアがおずおずと片手を上げた。

「……何かな、ヴァルトハイム少尉」

「……はい、あの、この戦術はあくまでハイヴから攻めてきたBETAを殲滅する為のもの、ですよ？でしたら、最終目標のミンスクハイヴ奪還は……」

まだ先になるのだろうか、カティアの語った言葉から彼女の言いたい事を読み取ったアイリス・ディーナは片手で顎を軽く撫でながらフム、と頷いた。

「……なるほど、言いたい事は分かる。結論から言うのならハイヴ奪還はまだ先だ。アクティヴ・ディフェンスはあくまでハイヴから出現したBETAを間引く為のもの、そして最終的にハイヴ奪還へとつなげる為のものだ。遺憾な事だがハイヴ攻略はまた先の事になりそうだな」

「そう、ですか……」

アイリス・ディーナの素っ気ない言葉にカティアは気落ちした様子で椅子に腰を落とした。テオドールは彼女を横目で眺めながらやれやれと言いたげに溜息を吐きだした。

「気を落とすな。ローマは一日にして成らず、という言葉があるようにそう易々とハイヴは攻略できない。まあ以前のパレオロゴスよろしくハイヴが爆発する、というのなら話は別なのだろうが、そんな

ことがそうしよつちゅうあるはずもない。

我々は我々の為し得る事を為し、そして……最終的に勝利へとつなげる、それしかない」

「……はい」

アイリスデイーナのまるで慰めるかのような言葉にカティアは顔を俯けながらも頷いた。

彼女の言うとおりで。幾度となく人類の反撃を受けとめ、跳ね返し続けてきたハイヴをそう簡単に落とせるはずがない。そんなことは言われなくても分かっている。

現に自分達は未だに完成したかどうかすらも分からないハイヴの攻略にすらこうして手古摺っている始末だ。アイリスデイーナの言うとおりで何らかの奇跡でも起きない限り僅か一日で勝利、等という事はほぼあり得ないだろう。

それでも、それでもカティアは一刻も早くハイヴを落としたい、この戦いを終わらせたいと強く願っているのだ。これ以上フレデリックのような犠牲者を出さない為にも……、一日も早く……。カティアは胸元の赤い石をギュツと握りしめる。

「決戦は明日になる。機体の整備は完全に仕上げておけ。その後ゆっくり休んで疲れを取っておくように。……以上、解散!!」

アイリスデイーナの号令と共にブリーフィングは終了する。が、その場に居る隊員達の表情には気の緩みは一切ない。

決戦、文字通りの意味合いではあるがこの場に居る全員はこのベラルーシの地で日常茶飯事と言っているほどに大多数のBETA群との決戦とやらを経験している。中隊中実力が現状最下位ともいえるグレートルですらも実戦経験でいえば並大抵の衛士とは比べ物にならない、熟練と言つていいレベルであろう。

そんな彼らですらも一瞬の気の緩みが命取りとなる、それが戦場、それが対BETA戦というものなのだ。故に彼らは気を引き締める。明日の決戦に勝利し、再び生きて帰る為にも。

それはカティアもまた同じ、明日の作戦に全力を尽くす気持ちは皆と同じである。だが、心の中で彼女は密かに願っていた。

どうか奇跡が起きるなら起きてほしい。神様でも悪魔でもいい、ハイヴとBETAを消し去ってこの戦いを終わらせてほしい、と…。

どうせ届かない願いだと半ばあきらめながらも、この戦いの中で多くの人間の死を見てきた彼女はそう願わずには居られなかった。

だがカティアは、いや、この場に居る誰もが予想できなかったであろう。その願いが明日、本当に叶ってしまう事になるのを…。

「……あれ？」

ふとカティアは己が無意識に握りしめていた赤い石へと視線を落とす。が、手の中の石には何の変化もない。どう見ても何の変哲もない石にしか見えない。

「何だかさつき、石が暖かくなつたような……、疲れてるのかな…」

カティアは納得いかなさそうに首を傾げながら、テオドール達の後について戦術機格納庫まで歩いて行くのだった。

…。  
フィンランドに建設されたハイヴ、H8ロヴァニエミハイヴにて

北欧圏においてはじめて建設を許させてしまったBETAの巣窟は未だにフェイズ2程度の規模ではあったが、それでもその物量によって幾度も押し寄せるフィンランド軍、そして国連軍の軍勢を押し返してきた鉄壁の要塞である。

建設されてからはや2年、未だロヴァニエミハイヴに人類は攻略どころか内部への侵入すらも出来ずにおり、ハイヴから次々と湧き出て押し寄せてくる何万ものBETAの集団をどうにか間引いて連中の進行を遅らせるのが関の山であった。

もはやフィンランドの国土の大半はBETAに喰い尽されて跡形もない。現状なんとか持ちこたえているものの兵力の損耗は激しく長くは持たない。





飛行機の主翼の如き形状へと変化する。

そして、さながら巨大なウミガメ、あるいは甲羅を背負った飛行機の如き姿へと変貌したガメラは後脚から噴射されるジェットでまるでロケットの如く地上から空へと飛翔した。

目指す場所はミンスクハイヴ。

滅ぼし損ねた蟲共の巢を、今度こそ完全に滅ぼしつくす……!!

その意志は咆哮となり、まるで鳴り響く雷の如く曇天の空へと鳴り響いた…。

## 第9話 Adventー降臨ー

ベラルーシ州旧ストウプツイ市跡。かつては風光明媚な街並みが並び、多くの人々が暮らしていたであろうそこは、今やミンスクハイヴから出現したBETAの侵攻によって瓦礫の山が積み重なる廃墟と化している。

その廃墟と化した街の南西方向、そこに第666戦術機中隊が所属するワルシャワ条約機構軍、欧州連合軍、アメリカ軍の三軍が布陣している。

ワルシャワ条約機構軍は中央、右翼には欧州連合軍、左翼にはアメリカ軍が配置され、押し寄せてくるBETAを今か今かと待ち構えている。

今回の作戦はハイヴからあふれ出てくるBETAの漸減、要するに間引きである。ハイヴから絶え間なく出現するBETAを叩かない事にはハイヴ攻略どころか近づくことすらも出来ないが故の作戦である、が、あまり漸減作戦に兵力を消耗しようものならば肝心のハイヴ攻略にも支障をきたす。

それ故に今回の戦闘では被害を最小に抑える為に国連軍主導による新たな戦術が行われる事となった。

戦術名は『アクティヴ・デیفエンス』。

おおざっぱに説明するならばBETA梯団の縦深に同時かつ多方面からの攻撃を仕掛ける事によってBETA梯団の進軍速度を遅延、さらに梯団をいくつかの集団へと分断した後、その間隙に地上部隊と戦術機部隊を持ってBETA集団を各個撃破していくという戦術である。

懸念材料である光線属種のレーザーに関してはAL弾の砲撃による重金属雲の展開、地勢の利用によって被弾のリスクを下げている。もう一つの懸念は重金属雲内部での通信障害であるが、これに関しても中継用の通信車両を各地に展開する事によって克服している。

無論ハイヴ内部での戦闘では使用できないが、地上でのBETA梯団からの防衛線においては効果的な戦術である。BETA攻勢のた

びに確実に包囲殲滅していくことにより、より確実にBETAの総数を減らし、侵攻頻度を下げ、結果的にハイヴ攻略へとつなげる事となるのだ。

そして今回の戦闘は、その考案された戦術の実践もまた兼ねている。論理上確立されたのなら後は実戦においてその有用性を証明するのみ、それが国連軍上層部の判断なのであった。

既に軍の配置は完了している、後は敵集団が押し寄せてくる事を待つのみ……。彼らはただひたすらに沈黙し、BETA梯団の出現を待ち続ける。

そして3月10日午前7時……、ミンスクハイヴから突出したBETA梯団と連合軍がついに激突した……。

#### 第666戦術機中隊SIDE

戦闘開始から約10分経過した。戦況は圧倒的に此方側が有利、アクティヴ・ライフエンスのプラン通り、BETA梯団は地上部隊の砲兵による面制圧、多数の戦術機と攻撃ヘリによる連続した側面攻撃を受けて前衛と後衛に分断され、その中間にBETAの密度が極度に少ない空間が造られ始めている。

無論少なくない損害は被っている、だがそれでも地上部隊は迅速な動きでBETAに対する包囲網を形成しつつあった。

その頃テオドールを始めとする第666戦術機中隊は、予備兵力とこのことでワルシャワ条約機構軍の最後尾にて全軍待機を命じられていた。

予備兵力が投入されるのは自軍の劣勢、あるいは戦果拡張の好機のみに限られている。すなわち現状は全く用は無く、ただ網膜上の戦況ウインド越しに欧州連合、アメリカ両軍がBETAを淡々と処理していく様を眺めている事しかできない。

『……まさか本当にBETA相手に包囲網を完成させてしまうなんて……』

「連中と俺達の戦術の違い、って奴か……」



ヘッドセットから響いてくるアネットの声に対してテオドールは何処か納得したかのようにポツリと呟く。

己達東側諸国と西側諸国では戦力の質、対BETAドクトリンに違いがありすぎる。

BETAとの近接戦闘を主とする己達に対し、西側諸国の戦術は大規模な機動戦、西側諸国がF-4系列の戦術機ではなくより軽量かつ機動性に優れたF-5系列の戦術機を用いているのもF-5系列の機体がアクティヴ・ディフェンスに適しているからに他ならない。

それ以上に度肝を抜いたのはアメリカ軍の所有する最新鋭の第二世代戦術機、F-14トムキャット、そしてその専用装備であるフェニックスミサイル。

トムキャットそのものの機体性能もさることながら、戦術機一個中隊のみで突撃級集団を一撃で殲滅するという信じがたい威力を誇るフェニックスミサイル。流石は戦術機発祥の国にして世界最大の軍事力を誇るだけであると、心の底でアメリカという国家に対する畏怖を覚える事となった。

それと同時に、不安も湧き上がってきた。西側にとって、己達は本当に協力する価値があるのかという不安が。

かつてのパレオロゴス作戦での苦戦の要因は、西側と東側の戦術の齟齬もあつたと聞いている。ならば今回の作戦、否、これから先西側と共同で作戦を進めていく上で同じような状況が起きないと断言できるだろうか。それにこのままこの作戦が成功しようものならば、仮にも『東ドイツ最強の戦術機中隊』という題目を掲げている己達の活躍の場はほとんどないまま終わりとなることはほぼ間違いない。そうなったらどうなるのか……、若干の不安の籠った視線で網膜に投射されたアイリスデイナーナへと視線を向ける。が、何故かアイリスデイナーナは己とは違い平静な表情を崩していなかった。

『……ところで諸君ら、人生万事塞翁が馬、という諺を知っているか？』

「……はあ。」

唐突にそんな事を言い出したアイリスデイナーナに思わずテオドール

ルはそう返してしまおう。他のメンバーもまた何を言っているのか分からないと言いたげな表情を浮かべている。

またいつものジョークか何かか、とも考えたがアイリスディーナの表情は到って平静、寧ろ若干厳しげにも見えてしまうくらいである。

『東洋の諺でな、意味は、人生何が起るか分からない、ということだ』

『はあ……、で、それが何か?』

唐突に彼女の口から飛び出してきた言葉にテオドールは頭に?印を浮かべながら聞き返す。が、アイリスディーナは特に笑みを浮かべる事もなく、感情を窺わせない声でただ一言、返答を返した。

『何、深い意味は無い。ただ今はこの言葉を覚えておいてくれればいい』

その時の彼女の表情には、どことなく深い憂いが見て取れた。

西ドイツ軍第51戦術機甲大隊 『フツケバイン』 SIDE

『距離2000に新たなBETA群! 要撃級と戦車級が主力だ! 手前のBETAの残骸を盾に迎え撃つぞ!!』

「フツケバイン23、了解」

同じ頃、ストウプツイ市跡北東では、西ドイツ軍所属の戦術機甲大隊、『フツケバイン』とBETA群との戦闘が繰り広げられていた。雪と瓦礫に覆われていた地面はBETAの残骸と肉片によって陰惨な情景をさらしており、さらに度重なる砲撃と重金屬雲の影響で降り注ぐ細かい金属片の影響によって視界は段々と悪化している。

が、任務である以上此処のBETAを根こそぎ撃破して進撃しなければならぬ故、文句を言っている暇は無い。戦車部隊の曲射撃で連中の足が止まっている隙をつき、要撃級の集団へと劣化ウラン芯弾の弾幕を雨霰と叩きこむ。

西ドイツ軍の、というより現状欧州連合の主力戦術機であるF-5Gトーンードは原型であるF-5フリーダムファイターよりも砲撃関連の性能が向上しているために立ちふさがるBETAを次々と血の海に沈めている。

そのBETAを血祭りに上げる戦術機の一機、フツケバイン23キルケ・シユタインホフ少尉が搭乗するトーネードは迫る要撃級を沈黙させると周囲に他に動く敵影が存在しない事を確認すると疲れたように息を吐き出しながら軽く額の汗を拭う。

任務はほぼ成功、そういつてもいいだろう。まだまだBETAは残ってはいるものとりあえず一息つけそうだ。損害に關しても推進剤の残量が残り三割を切っている事と弾丸が残り少ないという事さえ除けばほぼ無い。後は指示を待つて予備兵力に任せて後退、推進剤と弾丸を補給するだけだろう。キルケは緊張をほぐすように肩を軽く回す。

ふと、そんな事をしていっているうちに何故か以前口論を繰り広げた東ドイツの衛士達の事が頭に思い浮かんできた。

先の戦いで突撃級の群れめがけて戦術機9機で肉弾戦を挑むという無謀極まりない戦いをした揚句に、その尻拭いの為に自分達の部隊が少なからず損害を出す羽目になったあの東ドイツ最強とかいう戦術機中隊の事を…。

(これでいい、これでいいのよ…!!あの共産主義者共のようなカミカゼ同然の特攻作戦なんかやらなくても……)

キルケとて、彼ら東側諸国が戦線を保っていたという事は知っている。彼らが命懸けでミンスクハイヴから出現するBETAの侵攻を抑え込んでいたからこそこうして己達がこの戦場に立っているという事も理解してはいるし、東ドイツの人間が共産主義者であるという点さえ除けば己達と同じドイツ人であるという事も認めている。

だが、その共産主義者という一点がキルケに東ドイツに対する嫌悪を産み出していた。

一党独裁、思想統制、赤軍の元締めである犯罪国家…。西側の人間の共産主義国家に対する認識というのは大体がこう言うものであり、仮にこの事実を脇に置いて手を結んだとしても、待っているのはかの『第一次パレオロゴス作戦』の二の舞、作戦、戦力の違いによる共倒れの未来しかない。今回の作戦における第666戦術機中隊の突撃級呐喊でそれが嫌というほど理解できた。

もう少し連中の思想だったのならばそもそもこんな作戦行わなくてもよかつたかもしれないのに……、キルケは若干苛立ちを覚えて舌打ちする。

『やるじゃねえかシユタインホフ！一丁前に機体制御も身につけやがって、流石は“英雄”の孫、つったところか？』

唐突にモニターに一人の男性衛士の顔が表示される。第51戦術機甲大隊『フツケバイン』大隊長、ヨアヒム・バルク少佐である。唐突な上官の登場に、キルケは特に驚いた様子もなく、ただ、バルクの口にした“英雄の孫”という言葉に対して眉根を寄せた。

「……少佐、確かに祖父は第二次世界大戦の英雄ですし、私も尊敬しています。ですが私は私自身の力で此処に来たつもりですし、血は関係ありません。たとえ上官であつたとしても、それだけは譲るつもりはありません」

『ハッハッハ!!そう怒るなシユタインホフ……ま、これからもその血統を生かして頑張れよ……だからそう睨むな、本気で怖いぞ?』  
笑いながら此方を茶化す上司にキルケは呆れて溜息を吐く。

大方己をだしに他の衛士達のささくれ立った心を解そうとでも考へての発言なのだろうが、ネタにされる自分の身にもなつてほしいものだ。

『よし、一時フランスの連中に任せて帰投するぞ。総員、いいな?』  
「りょうか……!?」

返答しようとした瞬間、突如としてキルケは周囲の異変に気がつく。

BETAの遺骸が、まるで生き返つたかのように振動している。いや、遺骸だけでは無い。森が、大地が、そして自分の搭乗する戦術機そのものまでもが小刻みに振動している……。

「この、振動……ま、まさか……!?」  
『こ、こちらHQ！西部より新たなBETA梯団が出現!!数およそ5万!!光線級も複数体含まれている模様!!』

『んだと!?……クソツ!!包囲網の外側から!!』  
焦りの滲むCP将校の声とバルクの怒声がヘッドセットから響き

渡る。が、今のキルケにはそんな事を気にしている余裕はなかった。包囲網外からのBETA梯団の出現、それはすなわちBETA包囲網の、アクティヴ・ディフェンスそのものの崩壊すらも意味していたのだから…。

キルケは戦況ウインドウに映し出される、BETAを意味する無数の赤い点滅をただ青褪めた表情で観ている事しかできなかった。

#### 第666戦術機中隊 テオドールSIDE

新たなBETA梯団の出現、それは当然のことながらワルシヤワ条約機構軍に、その指揮下にある第666戦術機中隊にも伝わっていた。

戦況ウインドウには、文字通り何処からともなく出現したBETA群を示す幾つもの赤い光点が包囲網を構成している欧州連合軍めがけて迫っているのが視認できる。

それを迎え撃つのは恐らく己の祖国の隣国であり、元は自分達の国と同じ国家であったはずが分断される運命となったもう一つのドイツ、西ドイツ所属の戦術機部隊、『フツケバイン』…。テオドールはふと彼らの事を思い返す。

一昨日その衛士と主義主張の違いやらで派手に言い争いをしたものの、元は同じドイツの人間であることもあって流石にこの状況下では少なからず安否が気になってしまう。

それと同時にBETAへの恐れも覚えていた。西側が乾坤一擲で臨んだ作戦が、綿密に練られていたはずの作戦が、こうも容易く瓦解してしまう様を目撃してしまつてはそれもやむをえぬ事であろう。

前者はともかく、後者は中隊の人間すべての総意であろう。皆が皆茫然とした表情を浮かべている。例外は相も変わらぬ硬い表情のヴァルター、そしてBETA襲撃前と変わらない表情を浮かべる中隊長のアイリスディーナだけであった。

「……同志大尉、まさか、こうなる事を知つて……」

『此処はBETAの巢であるミンスクハイヴ、その目と鼻の先だ。作戦中に増援が来る事も、奇襲が来る事も充分考えられる。……言つ

たろう？人生何が起きるか分からない、と』

こんな予想外は欲しくなかったが、な、と最後につけたしながらアイリスデイナーは言う。彼女の言うとおり、この戦いの場所はソ連ベラルーシ州、BETAの巣窟であるミンスクハイヴが存在する場所、すなわち敵のホームグラウンドでの戦いなのだ。

ならば何処から敵が出てきても不思議ではない。作戦の最中に横槍を入れる形でBETA群が出現しても何らおかしい事ではないのだ。テオドールはその事をいやというほど思い知る事となった。

『そもそもアクティヴ・ディフェンスは対ワルシャワ条約機構軍、すなわち対人類戦、それも防衛戦用に構築された防衛理論を改良したものだ。確かに対BETA戦の最適解の一つではあるがそれも絶対というわけではない。そもそもBETAの侵攻モデルも戦術も未だに解析されていない上に連中には士気の低下というものが存在しないという点もあるのだが、まあそんなことは今はどうでもいいだろう』強引に話を終わらせたアイリスデイナーは今度はグレーテルへと話の矛先を向ける。

『同志中尉、此処で我々がやるべき行動は、もう既に分かっているな？』

『……ま、まさか同志大尉!!この状況でレーザーヤークトを!』

『この状況だからこそ、だ。面制圧が光線級に封じられた以上これ以外に状況を打破する手段は無い。それに……レーザーヤークトは我等の十八番だろうか?』

そう言つて自信ありげな笑みを浮かべるアイリスデイナー。が、党から派遣された政治将校であるグレーテルはそんなアイリスデイナーの発言に対して信じられないと言わんばかりに目を大きく見開いている。当然グレーテルはアイリスデイナーの発言に対して反発する。

『わ、我々の任務は予備兵力としての待機だ!!それにたとえレーザーヤークトを実行するとしても、既に重金属雲濃度が低下して……』

『地上の支援砲撃を利用すれば光線級の誘導は可能だ。さらに、

ジヨリーロジャーズご自慢の第二世代機、その武装であるフェニックスミサイルを利用する。これで成功率はだいぶ違うはずだ』

『……に、西側の手を借りろってどういうの!?!』

『逆だ。我々が西側に手を貸してやるのだ。悪い話ではない、と思うのだがな』

『そ、そんなの単なる屁理屈……』

反論の尽くをアイリスディーナに論破され、グレーテルはついに言葉が尽きたかのように押し黙ってしまう。ただその表情はまるで親の仇でも見るかのように憎々しげであったが。それに構わずアイリスディーナは声を上げる。

『我々は常により多くの命を救う事を優先してきた。今回救うべきは欧州連合の命だ。それはこの場に居る全員が分かっている事だろう?』

『……』

そのような事は言われずともテオドールには分かっている。いや、新入りであるリーズ以外のこの場に居る中隊の人間ならば誰もがそれが正しいと理解しているだろう。

万一此処で欧州連合軍が全滅しようものなら今度は自分達ワルシヤワ条約機構軍にBETA群の攻撃の矛先が向けられる事となる。そうなればワルシヤワ条約機構軍は崩壊、下手をすればこの第二次パレオロゴス作戦そのものが崩壊しかねない。

だからこそこの局面において状況打破の為にレーザーヤクトを行うというアイリスディーナの考えは理に叶っている。それは分かる。が……。

『此方国連軍司令部より第666戦術機中隊指揮官へ。貴隊の状況を確認したい』

と、唐突に網膜に国連軍のオペレーターのウィンドが立ち上がる。それに対してアイリスディーナは驚く事もなく応答しようとする。

『此方第666戦術機中隊指揮官、アイリスディーナ……』

『その通信に応答の必要はない!!勝手な詮索はやめて貰おうか!!』

『…貴軍司令部が第666戦術機中隊の出撃を拒否した理由を確認』

しようとしただけだ』

アイリスディーナの応答を遮るようにワルシャワ条約機構軍作戦本部付政治将校の怒声が響き渡る。どうやら戦線崩壊の危機に国連軍司令部がワルシャワ条約機構軍司令部に第666戦術機中隊の出撃を要請、それを政治将校が拒否、埒が明かなくなった国連軍司令部が中隊指揮官のアイリスディーナに直接交渉しようと通信してきた、といったところだろうか。

(こんなときに西も東も関係ないだろうに……)

ヘッドセットから聞こえてくるアイリスディーナとグレーテル、そして政治将校の言い争いをテオドールは半ば苛立ちながら聞いていた。

どうやら政治将校からすれば作戦の成否や己の命よりも政治将校としてのメンツの方がはるかに大事らしい。そうでなければこのような他人の足を引っ張るような自殺行為も同然な事をしないだろう。ましてや今回は己自身が死ぬかもしれないというのに、だ。

テオドールは憎々しげに舌打ちをする。

時間は刻一刻と過ぎていく。それと同じくBETAも段々ところらに接近してくる。

……もはや一刻の猶予もないこの状況の中、第666戦術機中隊は未だ動けずにあつた。

ポーランド人民軍SIDE

『悪い予感が当たりやがった……』

『……ですね』

その頃、第666戦術機中隊同様予備兵力として後方に送られていたポーランド人民軍所属第401戦術機中隊もまた、突然のBETA襲来による惨劇を察知していた。幸い襲撃地点からいくばくか距離が離れている為に今のところは此方に被害は及んでいないものの、それもいつまで持つかは分からない。

とはいえこの状況を予測していたわけではなかった。此処はBETAの本拠の目と鼻の先、唐突なBETA出現は十分あり得る話であ



り中隊長ヤン・コシチュシユコ大尉も少なからずこの展開が起きる可能性は予知していた。そして、そうなった場合己達中隊が取るべき道も……。

『……それで、どうしますか？ 国連軍から要請が来ていますが……』

『……出るしかねえだろ。此処で全滅するなんざあもつての外、国連軍との心中なんざあ上の人間も望んじやいねえだろ。それに……』

『それに？』

中隊付き政治将校の問い掛けにコシチュシユコ大尉はニヤリと笑みを浮かべる。その笑顔に嫌な予感がしたのか政治将校は顔を顰める。

『……西側の連中の危機を救って貸しを作る、つてのも面白くねえか？ なあ同志中尉？』

『……』

コシチュシユコ大尉の言葉に対して政治将校は予想は出来ていたのかただただ呆れた様子であった。が、やがてやれやれと言わんばかりに大きく息を吐きだすと、彼に返答を返す。

『……そう仰ると思ひまして、既に上に話を通しておきました。許可は既にいただいておりますので出撃するのですしたら、いつでも』

『……ハハッ、流石は同志中尉！ 話が分かるねえ！』

『我が国には政治将校と諜報組織のゴタゴタはありませんのでね、どこぞの国と違って。……それはともかく出撃するのでしたら早く命令を。皆待ちわびていますよ？』

『ハイハイ………、総員傾注!!』

政治将校からのお墨付きをもらったコシチュシユコ大尉は先程とは一転してまるで雷が轟くかのような大声を張り上げる。その号令をヘッドセット越しで聞いていた中隊衛士達も、聞きなれたとはいえその威勢に思わず身体が引き締まるような感覚を覚えた。

『これより我等は国連軍救出の為BETA群に向け呐喊する!! 重金属雲濃度が低下している現状レーザー照射を受ける危険性が高い!! 可能な限り低空飛行で接近する!! 西側の連中にきっちり貸しを作らせてやれ!!』

『『『了解!!』』』』

(やれやれ…。また救出作戦、か…)

中隊衛士の一人、シルヴィア・クシャシンスカ少尉は号令を聞きながら心の内では冷めたようにそんな事を呟いていた。

確か前にも一度救出の為に出撃した事があった。確か東ドイツの第666戦術機中隊の人間だった…。と頭の片隅でぼんやりと思いつく。

果たして今頃どうしている事か。大方他の中隊の連中、共々後方に控えているのだろうか…。

そんな事を考えながらシルヴィアは跳躍ユニットのロケットモーターを吹かして低空すれすれで戦場を移動する。重金屬雲濃度が低下し、レーザーの威力減衰が期待できない現状、レーザーで狙い撃ちにされない為には低空飛行か歩行移動でもしなければならぬ。

面倒ではあるが幸いというべきか、シルヴィア含む第401戦術機中隊『ニエトパーゼ』のメンバーは少なからずそう言う事には慣れていた。

直ぐに救援要請の出されていた地点へと中隊は到着する。そこでBEETAと交戦している機体はトーネードADVとミラージュ2000、ともにF-5系列の戦術機であり1、2年前に配備が開始された準新型機である。トーネードADVはイギリス、ミラージュ2000はフランスにおいて主に採用されている機体である。

(東ドイツの次はイギリス人とフランス人、か…)

シルヴィアは心の中で何気なしに呟く。社会主義陣営の国家で生まれ育ったとはいえ、シルヴィアに西側への嫌悪感はそのまで無い。とはいえ、まさか西側諸国を助ける事になるとは思ってもみなかったのは本音であるが。

『こちらポーランド人民軍所属第401戦術機中隊『ニエトパーゼ』!!援護する!!』

『こちらイギリス軍第11王立戦術機甲大隊『アックスブリッジ』!!救援感謝する!!』

『礼はこの蟲共ぶち殺して生き延びてから頼む!総員、まずは突撃

級の足を止めるぞ!! 奴らのケツにありつただけの弾をぶち込んでやれ!!

『『『『了解!!』』』』

(ま、いいわ。私は私の仕事をするだけだから)

中隊長の命令と同時に戦術機ユニットを吹かして跳躍、怒り狂い猛進する猛牛の群れの如き突撃級の集団へと突撃砲の120mmによる射撃を開始した。

#### 第666戦術機中隊SIDE

『……結局、ポーランドの連中に一番乗りの手柄を取られてしまったか……。まあこれのお陰で同志中尉と同志少佐が心変わりしたわけであるし、いいというべきか悪いというべきか……』

『……うるさいわねっ!! 仕方がないでしょ!! こっちにも立場があるんだから!! て言うか何度も何度も言わないで!! もしかして嫌味!?!』

何度目か知れないアイリスディーナのぼやきにグレーテルは反射的に怒り交じりの大声を張り上げた。

そんな状況下でも彼女達の戦術機はBETAの間隙を縫いながら的確な射撃と多目的追加装甲付属のブレードを利用して次々と立ちふさがるBETAを屠り去っている。後から続く5機のバラライカもその後が続いている。残る二機、シュヴァルツ06イングヒルト・ブロニコフスキーとシュヴァルツ08カティア・ヴァルトハイムは後方での待機を命じられている。

結論から言うと、第666戦術機中隊はレーザーヤークトへと出撃する事ができた。

遡る事5分程前、あのままアイリスディーナとグレーテル、司令部付きの政治将校の口論が続くかと思われたのだがその最中に思わぬ報告が寄せられた。

ポーランド人民軍所属戦術機部隊予備が欧州連合軍救援に出撃したのだ。同じ社会主義国家でありワルシャワ条約機構軍所属であるポーランドの出撃にさしもの司令部付きの政治将校も黙らざるを得なくなってしまうた。

逆にアイリスデイーナはここぞとばかりにグレーテルを説得する。このままポーランドに手柄を総取りされるつもりか、ここでやらなければ寧ろ東ドイツにとつて損害になる、等々…。最終的にテオドールの叱責もあり、グレーテルも腹をくくることになり、どうにかレーザーヤークトに出撃する事が出来たのである。ちなみに司令部付き政治将校は何か言いたそうにしていたものの、結局黙ってウインドウを閉じてしまい、それ以降何も言ってこなかった。

それでもポーランドの連中に一番乗りは奪われる事となつてしまったが、それもこれから挽回できる。

『速度を緩めるな!! 幸い光線級は一か所に固まっている。進行方向のBETAの動きに注意しろ!!』

『……!! 同志大尉、後方に要塞級の一団らしき敵影が!!』

『うろたえるな!! 此処がハイヴの目と鼻の先なら要塞程度見飽きてるだろう!! まずは目の前の突撃級の足を止める!! 奴らの相手はその後だ!!』

後方に控える要塞級に気付いてうろたえるファムに檄を飛ばしながらアイリスデイーナはヴァルターと共に突撃級の群れへと肉薄、接触前に上空へと跳躍して突撃回避、装甲の存在しない突撃級の胴体後尾へと多目的追加装甲のブレードを叩きつけた。

最前列の突撃級が転倒した事により後方の突撃級集団の列が乱れ、一時的に突進が停止する。時間にすればほんの僅か、だが数え切れなほほど光線級を狩ってきた第666からすればこの僅かな隙でも十分すぎる。動きを止めた突撃級の主脚を、後続の4機のバラライカの突撃砲が寸分違わず撃ち抜き破壊していく。数10秒後にはその場に居た全ての突撃級は完全にその動きを止めていた。

第666戦術機中隊にとつては何でもない動作、であったが火力至上主義のアメリカ軍からすればあまりにも常識離れしていたようであり、オーブンにされた回線からはやれクレイジーだのナチの技術がつかわれているのだといった驚きの言葉が漏れていた。

それに苦笑を洩らしながらテオドールは、自分達の培った技が西側にも充分通じると言う事を、アイリスデイーナの西側に自分達の対B

E T A 戦技術を売り込もうという戦略が正しかったという事が証明されたことに、心からの高揚を感じていた。

『いいぞ、このままいけば予定通りに辿り着ける。だがその前に目の前のデカブツをどうにかするぞ!!』

『『『了解!!』』』』

アイリスデイナーの言葉通り、光線級の一団はすぐそこに居る。だが、奴らを護衛するかのように最大の脅威の要塞級の群れもまた、そこに屯している。光線級を叩くには、まず奴らから何とかしなければならぬ。

正念場はここからか……!! テオドールは歯を食い縛った。

ワルシヤワ条約機構軍司令部 S I D E

「……よろしかったのかな? 同志少佐。あれだけ強硬に反対していたというのに」

「……ポーランドの連中が出てしまったのならば致し方があるまい。尻込みして出遅れた臆病者というレッテルを貼られるより遙かにマシだ」

その頃ワルシヤワ条約機構軍司令部、東ドイツ国家人民軍司令部専用の通信車両内部にて、初老の将校と眼鏡をかけた神経質そうな将校が互いに会話を交わしていた。

初老の将校の名はホルツァー・ハンニバル少佐、そして眼鏡の将校は司令部付き政治将校ツヴァイクレ少佐、つい先程中隊出撃に関してアイリスデイナー、グレーテルと言い争っていた政治将校である。

彼からすれば西側への協力支援等対立関係にある国家保安省との政争で不利となりかねない要素である以上願い下げであったのだが、社会主義の同胞とも言えるポーランドの戦術機部隊が西側の救援に向かつてしまった現状、このまま中隊を待機させていては世界中に東ドイツは臆病者の集まりという汚名をさらしかねず、かえって自分達の立場を危機に追い込む羽目になりかねない。ならば多少のリスクを覚悟で第 6 6 6 戦術機中隊を出撃させ、西側に恩義を着せる方が得であるとの考えに至ったのだ。まあ最悪の場合は自分は知らぬ存ぜ

ぬで通そうとの算段は持っているが…。

「まあいい、此処は彼らを信頼して任せてみようじゃないか。彼らならばなんとかしてくれるかもしれないしな」

「同志少佐は随分と彼らの事を買っておられるようですね？」

「彼らの腕は信頼に値する。きっと西側の衛士達にも引けはとらんはずだ」

そうにこやかに笑うハンニバル少佐にツヴァイクレ少佐はジロリと一瞬視線を向けるとやがて疲れたように息を吐き出しながら眼前の戦況モニターに視線を向ける。

現状戦況は拮抗している。若干此方が有利といったところか。しかしいずれにせよレーザーヤークトの成否が戦況を左右するのには変わりない。ハンニバル少佐もまた厳しい表情でモニターを見守る。……と、唐突に何処からか通信が入った。

「はい、此方東ドイツ国家人民軍………!? つ、ツヴァイクレ少佐!! ハンニバル少佐!! 先程緊急回線から報告が……」

「なんだ、この忙しい時に。下らん用件なら後にして……」

「ろ、ロヴァニエミハイヴが、ロヴァニエミハイヴが陥落しました!!」

「……何?」「何だと……?」

唐突な、あまりにも唐突な通信兵の言葉に少佐二人は言葉を失った。一体何を言っているのだこいつは、と言わんばかりの表情で通信兵を眺めている。

数秒の沈黙ののち、馬鹿げた冗談を言うなどツヴァイクレ少佐は通信兵を叱責しようとした。

だが、何気なく戦況モニターに視線を戻した瞬間彼の表情は真っ青に青褪める事となった。

同時に嫌というほど思い知ることとなった。ハイヴ攻略戦が如何に今までの常識が通用しない戦いであるかという事を…。

『おおおおおおおおお!!!』

テオドールの絶叫と共に振り下ろされたナイフが、最後の光線級の胴体を刺し貫いた。瞬間、眼球のような照射器官を点滅させていた光線級は沈黙する。周囲に生き残っているBETAはいないようである。

テオドールは緊張が解けた影響でコックピットに倒れるようにもたれかかる。恐らくこれまでのBETA戦の中で最も神経を張り詰めたであろう戦いであつたらう。少しばかり休んでも罰は当たらないはずだ。

最も、此処までこれたのは己だけの力では無い。中隊の仲間達、特に……。

「テオドールさん……」

両目を涙でうるませながら此方を見るカティア、彼女が必死に西ドイツの連中を説得して援護に駆けつけてくれなければ、恐らく自分達は要塞級の時点で詰んでいただろう。

だからこそ彼女に感謝する。カティアの勇気が、信念が自分達を救ったのだから……。

……まあ気恥ずかしいから素直に礼を言うつもりはないが。

『それより、お前今日何回漏らしたんだ？笑ってやるから言ってみろ……』

「!!??!!んもくテオドールさん最低です!!」

『……こんなときに馬鹿な会話を、て言うかナチュラルにセクハラしてるんじゃないわよ……』

『仕方がないだろう？ヴァルトハイムのお漏らしは中隊では有名なのだからな』

「べ、ベルンハルト大尉までく!!!!」

呆れた様子のキルケに対して面白そうに茶化すアイリスディーナ、それに対して顔を真赤にして絶叫するカティア……。

『それよりも、サツサと此処から撤退するぞ、もうすぐ面制圧が始まる。巻き込まれて死んだのでは死んでも死にきれないだろう?』

「……あ、はい!直ぐに……!?!」

カティアが戦術機を跳躍させようとした、その時、突如として地面が、そして戦術機が小刻みな振動を刻み始めていた。それだけではない、土煙と金属粉で煙る視界の中、カティアは確かに目撃したのだ。空へと延びる幾筋もの光の槍を……!!

「あ、あれは……まさか……」

カティアの全身に震えが走り、顔が真つ青に染まっていく。彼女の頭にこの状況で考え得る限り最悪の予想がよぎり、そして、それは今、現実になろうとしていた。

『あ、あれはまさか………レーザー?!』

『ぼ、馬鹿な………これだけ潰したというのにまだ来ると言うのか?!』

『ふ、ふざけるな!!もう推進剤も弾丸も底をついているぞ!!』

カティアだけでは無い、その場に居る衛士達全員もそれに気が付き、先程まで勝利を喜んでいた誰もかれもがパニックに陥っている。あのアイリスディーナですらもその表情には戦慄で歪んでいる。

と、網膜にワルシャワ条約機構軍司令部のウィンドウが開かれ、そこにハンニバル少佐と司令部付き政治将校の顔が映し出された。どちらの顔も恐怖に歪んでおり勝利の喜びなど欠片も見いだせない。

『緊急事態だベルンハルト大尉!!今そこに新たにハイヴから出現したBETA梯団が向かっている!!数はおよそ………10万を超えている!!』

『!?!』

『じゅ、10万だと?!』

司令部からの絶望的な報告に第666中隊は、否、その場に居た全ての人間が愕然とする。

先程の掃討したBETAですら精々5万程度だというのに、その倍ものBETAが此方めがけて押し寄せてくる……。もはやアクティヴ・ディフェンスも使えず、弾丸も推進剤も残り少ないこの状況で……。

『今直ぐそこから撤退しろ!!もはや戦闘できる状態じゃないだろう!!』

『で、ですが、このままでは作戦が……』



『……国連軍から通達があつた。作戦は中止、早急に撤退せよ、と……』  
政治将校が文字通り絞り出すような声で呟く、死刑宣告とも言える言葉にカティアの目の前が暗くなる。

此処まで来たというのに、BETAを倒し、もしかしたらハイヴ攻略にまた一步届くかもしれないと思つた矢先に……。

既に一直線で此方へ向かつてくる土煙が目視できる。果たして此方に到達するのは何秒か、それとも何十秒後か、それは分からない。ただ、分かる事は一つ。……この戦いが、己達の負けだという事、それだけであつた。

『……まで、か……』

ウインドウに映されるアイリスデイーナの表情、そこには紛れもない絶望の色が浮かんでいる。恐らく中隊の誰もが見た事がないであろうその表情に、だが、それも無理は無いと誰もが悟つてしまう。

突撃級、要撃級、そして要塞級すらも乗り越えて成し遂げたと思つていたレーザーヤークト、だがそれから殆ど間も置かずに10万を超える、そして今度は光線級どころか重光線級すらも擁するBETAの大集団が出現したのだ。

もはや弾丸も推進剤も殆ど残っていない。それはジョリー口ジャースもフツケバインも、否、この戦場に居る全ての戦術機部隊も同じであろう。

完全に打つ手なし、詰みとしか言いようのない状況……。たとえ諦めたとしても誰も攻める事は無いだろう。

此処まで来たのに、ようやく西と東のドイツが手を結んで此処までこれたというのに、それすらもBETAに粉微塵に碎かれてしまうと言うのか……。

カティアの心に絶望が溢れていき、そして無意識のうちに両手を祈りの形に組み合わせていた。

(神様、もしいるならお願いします。私の命はどうなってもいいから、だから皆を助けてください……)

万策尽きた今、カティアにできる事はもはや祈る事しかない。だ

が、心の中でカティアは分かっていた。この世界はとても残酷で、己のちっぽけな祈りなど決して届かない事を。

大切な人たちの命も、大切な街も、何もかも容赦なく奪い去ってしまおうという事を。

それでも彼女は祈るしかない。この絶望しかない状況で、誰でもいいから救いの手を差し伸べてほしいと…。

そしてその祈りは、聞き届けられた。

「……っう!?」

瞬間、カティアは右手に感じた痛みにも似た熱に思わず顔を歪めた。その痛みに彼女は思わず握りしめた右手を広げ、反射的に視線を落とす。

「……え?なに、これ……」

カティアは大きく眼を見開いて、茫然とそんな言葉を呟いた。右手にあったモノ、それはフレデリックから死に際に渡されたあの赤い石のペンダントである。だが、まるで冷えた溶岩のような暗赤色をしているそれが、今ではまるで燃え盛るマグマ、あるいは太陽の如く深紅の光を放ちながら輝いている。光だけでは無い。石はまるで燃え盛る炎か何かのように熱い。

強化装備の防護皮膜で護られているはずの手が火傷しそうになるほどの熱にカティアはただ発光する石を眺める事しかできない。

『……ヴァルトハイム少尉、ヴァルトハイム少尉! どうした、何があった?』

「……あーべ、ベルンハルト大尉!! い、いえ、少し疲れて目眩がしただけで……!?!」

カティアの表情で何かあったと感じたのかアイリスディーナが少し心配そうに声をかけてくる。が、カティアはいらない心配をさせまいと必死に笑顔を浮かべる、が、その直後、何気なく空へと視線を向けた瞬間、直ぐにその表情は驚愕のものへと変貌してしまう。

それは、重金属雲の名残である漆黒の雲を引き裂いて降り注ぐ三つの火の玉…。

まるで小さな太陽の如き熱量を秘めたそれは、BETA群の這い回

る地上へと段々と落下していき……………。

地面に衝突と同時に、爆ぜた……………!!

「キャアアアアアアアアア!!」

『ぐうう!? な、何だこれは!! 一体何がどうなっている!?!』

三つの火球の爆発によって発生する爆音と閃光にその場に居る兵士達はパニックに陥っている。それは、アイリスディーナを含めた第666中隊もまた同じであった。

本来ならばBETA戦の最中に目を閉じる事等論外だろう、致命的といつてもいい。だが、そうせざるを得ないほどの強烈な閃光が彼女達へと襲いかかったのだ。

やがて数十秒、あるいは数分ほど経過した頃だろうか、カティアは恐る恐る腕をどけるとゆっくりと瞳を開いていく。爆音の余韻は未だに響いてはいるものの、どうやらあの閃光だけはおさまっているようだ。

そして、完全に目を開いた彼女の網膜に飛び込んできたもの、そこにあつたものは……………地獄であった。

「……………え?」

その光景にカティアはただ啞然とする。口と目をまん丸に見開いて眼前の地獄を凝視する。

そこは、辺り一面炎に包まれていた。雪、そしてBETAの群れとその屍で覆われていた地面は今や深紅に燃え盛る炎に覆われて、まるで一面火焰の大海にでもなったかの如き様相へと変貌していた。

空には無数の火の粉が舞い、時折空気中の重金属へと引火して小さな爆発が幾度も発生している。

そして、今の今まで大地を覆い尽して自分達めがけて迫ってきていたBETAの大軍勢は……………消滅していた。

地面には黒く炭化した遺骸の一部が残るのみ、小型、大型問わず全てのBETAが一頭残らず死滅していたのだ。そして残された遺骸すらも炎に飲まれて跡形もなく消滅していく。

想像を絶する光景に言葉も出ないカティア、否、カティアだけでは無い。第666戦術機中隊を含むこの場に居る全ての兵士達、戦闘を





ど運用されていないであろう数々の戦術機、それを目撃した瞬間ガメラの心の中の予感はず信へと変わった。

この時代は己の居た時代よりも前の時代、恐らくBETA大戦初期の時代なのだ。

とはいえ正確な時代に関しては分からない。かの『パレオロゴス作戦』の前なのか、後なのか……。まさかこの時代の人間に聞くわけにもいかない為己の中で推測するしかない。

悩みながら唸り声を上げて巨体を前へと進めるガメラ。と、その瞬間、ガメラの巨体めがけて幾筋もの閃光が照射された。

『グウウウ……』

それは光線属種のレーザー照射、自身に連続して照射される光線に対して、ガメラはうつとおしげに顔を歪める。

既にBETA群とは約1kmにまで距離を縮めている。後数秒もしないうちに最前列の突撃級と激突することになるだろう。ガメラは腰を低くして構え、口内から炎を迸らせる。

そしてBETA梯団との距離があと数百メートルの距離にまで迫った時、ガメラの口が大きく開かれ、そこから灼熱の炎が突撃級の集団目掛けて放射された：！！

それは何時ものプラズマ火球では無い。まるで火炎放射機から放射されるかのような灼熱の炎の渦、それがBETAの集団に向けて放射されたのだ。炎の渦は一瞬のうちに突撃級の群れを飲みこみ、さらにガメラが首を左右に振り回すたびに軌道を変えて軌道上に居たBETAを無差別に焼き尽くしていく。

炎に包まれたBETAは瞬時に炭化してその生命活動を停止する。さらにガメラの撒き散らす炎は後方のBETAにまで飛び火していき、さらにその炎がより後方のBETAへと……。といった具合に文字通り燎原の火の如く燃え広がっていく。

ガメラの新たなる技の一つ、火炎放射。火球として発射される熱エネルギーを火焰へと変換して敵へと放射する攻撃である。破壊力そのものは火球よりも劣るものの広範囲に火炎を撒き散らす性質である為に多対一、特に今回のようなBETAとの戦闘に向いている。

炎そのものの温度は5000℃を越えており、よしんばBETAであつても耐えられるものは殆ど存在しない。小型、中型はもとより大型のBETAすらも残らず灰に出来るだけの威力は持っているのだ。

ガメラの口内から絶えず放出される炎は、僅か数秒の間にBETAの集団を包み込み、焼き尽くしていく。さらにその炎が次から次へと押し寄せるBETAへと燃え移つてより戦火を拡大させていく…。しかもBETAは基本的に撤退、後退以外の行動をとらない、否、取る事が出来ないと言つた方が正しいだろうか。対抗策を練れると言つてもそれを分析、考案するのはオリジナルハイヴの上位存在、この場に居るBETAはその命令に従つて行動するだけの意志を持たない機械に過ぎない。

故にエネルギー切れによる退却等を除けば後退することは一切ない。本来ならば士気の低下等に関係なく戦闘できるという長所であるはずのそれが、この場では完全に裏目に出ってしまったのだ。文字通り飛んで火に居る夏の蟲、あるいは笛に誘われ川へと身を投げるネズミの如き光景であつた。

これこそがガメラが眠りにについている間に考え出した対BETA用の戦術の一つ。数が多く此方にまっすぐ突撃してくる相手にはこちらが炎の壁を作つてあとはそこに敵が勝手に突っ込んで自滅してくれるのを待つ…。

これだけで大抵のBETAは勝手に死んでくれる。後方でのレーザー投射が役目の光線属種や、あるいはその巨体と質量から燃えづらひであろう要塞級、母艦級には効果が薄いだろうがそれ以外が相手ならばこんがり黒焦げに焼いてくれる事は間違いない。残っているBETAは己の火炎放射で掃除すればいいだけの話である

…そして、戦闘開始から3分程経過した時、既に戦場の様相は一変していた。

大地は炎に包まれて、そこには生きている生物は何一つとして居はしない。草木一本残らない炎が燃え盛る大地に残っているものと言え、まるで巨大な石炭のように真っ黒で歪な塊のみである。

それはかつてBETAであつたもの、その遺骸が炭化したなれの果

てであった。とはいえこうして形が残っているモノは極少数であり、大半は高温の炎に飲まれて残骸すら残さずに姿を消してしまっている。大地を猛然と進んでいた数万ものBETAの姿は、もう跡形もなくなっている。

残っているのは後方に居たおかげでどうにか生き延びた要塞級と重光線級、そして光線級が少々、といったところ。戦術機部隊であるのならばこれでもまだ脅威であろう、が、ガメラにとってみれば何の脅威にもなりはしない。

相も変わらずレーザーの雨はガメラに降り注いでいるもののガメラはそれに対してうっとおしそうに顔を歪めるのみであり、掠り傷ほどのダメージも負っていない。

『グルオオオオオオオオオオオ!!!』

ガメラは咆哮を上げて前進しながらお返しとばかりにプラズマ火球を三発連続でBETA群目掛けて発射する。

火球は三発とも寸分違わずBETA群へと直撃、そのまま爆散して周囲のBETAを纏めて吹き飛ばす。密集していたが故にただの一発で100単位のBETAが吹き飛ばされていく。迎撃せんと放たれる重光線級のレーザーも、火球を砕く事もかき消す事も出来ずに空を切るのみであり、かといってその巨体故の鈍重さが災いとなって回避する事も出来ず、周囲のBETA諸共粉微塵に吹き飛ばされる以外になかった。要塞級の頑強な装甲もまた火球の熱量と破壊力の前には殆ど意味をなさず、寧ろ逆にその巨体が転倒した挙句に周囲のBETAを押しつぶし、逆に味方側の被害を拡大させる事となってしまう。

甚大な被害を受けた上に列も乱れて進軍もままならないBETAの集団に、ガメラは歓喜とも怒りともとれる咆哮を張り上げながら猛然と突進する。その巨体にはなおも無数のレーザーが突き刺さるもののガメラは意にも介さず足元に散らばる肉片を次々と踏みつぶし、青紫色の血しぶきを浴びながら前進する。

そしてかろうじて生き残っていたBETA目掛けて、その鋭い爪を振り下ろした:!!



『グルアアアアアアアアアアアア!!』

巨岩すらも容易く抉り取る鋭さを持つ巨爪は、容赦なく重光線級と要塞級の強固な甲殻を引き裂いていく。さらに肘に生えたまるでガメラの剥き出しの牙のように鋭い突起、エルボークローが要塞級の頭部めがけて振り下ろされる。全身を強固な外殻に覆われた要塞級、その中でも最も硬度が高く36mm弾程度ならば容易く弾き飛ばすであろうその部位を、ガメラの肘に生えた長大な刃はまるで豆腐でも刺し貫くかのように容易く刺し貫き、切り裂いていく。

頭部から紫色の体液を撒き散らして地面に倒れ伏す要塞級、それを踏みつぶしながらガメラは次から次へとBETAをその爪で、牙で、口から放たれる火球と火炎で蹴散らしていく。

それはもはや戦闘とは言えない、一方的な殺戮、あるいは虐殺とも言える代物であった。BETAの中でも脅威と言える重光線級と要塞級が瞬く間に物言わぬ肉塊へと変化していく様は、見ている者からすればあまりにも現実離れしており、かつ、恐怖すらも抱かせた。

戦闘開始から3分、決着はついた。辺りはBETAの軀と血で溢れ、それが炎で焙られて周囲に異臭を漂わせている。

その屍の山の中で、ガメラは勝利の咆哮をとどろかせている。その雄たけびは戦場全域に雷鳴の如く響き渡り、それを聞いた人間の誰もが身体を震わせ、凍りついたように動けなくなっていた。

『グウウウウウウ……』

咆哮をやめたガメラはゆっくりと首をミンスクハイヴの方角へと向ける。と、突如脚部を甲羅へと引き込んでその空洞からまるでジェット機か戦術機の跳躍ユニットのように猛烈なジェットを噴射し始め、それと同時に左右に広げられた両腕の形状が骨格ごと変形していき、瞬く間に翼かうミガメのヒレのような長大で平たい形状へと変化する。

飛行形態へと変形したガメラは脚部のジェットで巨体を空へと飛行させ、一直線にハイヴへ向けて飛んでいく。マツハ2の速度で空を飛ぶガメラ、彼は一分もしないうちに目的の標的へと到着する。

ミンスクハイヴモニユメント、5年前に間違いなく破壊したはずの

そこには、既に新たなモニュメントが築かれつつある。まだまだ小さく精々10メートル程度の高さではあるものの、その内部構造に関しては分からない。既に製造されていたハイヴを利用している為にさらに巨大化をしている可能性もありうる。

だがもはやこれ以上建設される事は無い、何故なら、今から再び破壊されるのだから…。

『グルオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

ガメラはモニュメントめがけてプラズマ火球を二発叩きこむ。火球は逸れることなくモニュメントを直撃、天井部で爆発を起こし、大きな穴を作り出した。

モニュメントを破壊したガメラはそのまま大穴へと急降下していく。この最下層にはハイヴの中核たる反応炉、それが安置されているメインホールが存在する。それさえ破壊すればこのハイヴの活動は停止してBETAの基地としての役割を果たさなくなる。

今度こそミンスクハイヴを完全に停止させる為、ガメラはジェットの出力を上げて飛行速度をさらに加速させる。

ガメラが縦坑へと降下して十数秒、ついにミンスクハイヴの底、そしてそこに青白い輝きを放つ楕円形の物体を視認できた。ならばガメラがやる事は、一つ。

『グオオオオオオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアア!!!!』

口内から迸る紅蓮の火炎、通常の火球をさらにチャージし威力を上乗せしたプラズマ火球、ハイ・プラズマが眼下のメインホール、そこに安置されている反応炉めがけて発射された。

通常より一回り巨大な火球はそのまま反応炉めがけて落下、そして着弾と同時に大爆発を引き起こした。

爆炎はメインホール一面を覆い尽くし、降下しているガメラにまで達する、が、ガメラは炎を浴びても平然としたまま、炎に包まれたメインホールへと降下する。

灼熱の火炎に包まれたそこには、BETAの姿は影も形もない。先程殲滅した一団で最後だったのか、はたまたこのハイヴの別の場所に居るのかは不明であるが、もはや反応炉を潰した以上、此処に戻って



## 第10話 Omen―前兆―

3月10日午後1時、国連軍ワルシャワ条約機構軍合同によるBETA漸減作戦は、否、ミンスクハイヴ攻略を最終目標とする第二次パレオロゴス作戦は突如として終結した。

理由は簡潔、ミンスクハイヴそのものが消滅してしまったからである。それも、国連軍ワルシャワ条約機構軍のどちらでもない、第三者の手によって……。

第三者、それは巨大な二足で直立した亀のような姿をした、さらに脚部からジェットを噴射して空まで飛行するというまさに怪獣しか表現しようのない未確認巨大生物であった。

巨大生物はその巨体と口から吐き出す炎を武器に地上に群がるBETAを一掃し、さらにハイヴモニュメントを破壊して内部へと侵入、同時にハイヴ最深部に存在する反応炉を完膚なきまでに破壊、ミンスクハイヴを陥落させたのだ。出現からハイヴ殲滅、そこまで片付けるのに一時間もかかっていない。

だが、巨大生物が破壊したのはミンスクハイヴだけでは無い。それ以前に北欧フィンランドに存在するH8ロヴァニエミハイヴまでも、その圧倒的なまでの暴力でもって陥落させていたのだ。その時間、凡そ3時間前後程度だったという。

戦いが終わり、巨大生物が空の彼方へと去っていくのを見届けて、後に残されたのは所々で巨大生物の吐いた炎の残り火が燃える焼け焦げた大地と、そこで辛くも生き残った作戦に参加していた連合軍の戦術機とそれに搭乗する衛士達……。彼らは目の前で起きた出来事をただ黙って眺めている事しかできなかった。

巨大生物とBETA悌団の戦い、否、もはや戦いとも言えない虐殺を……。

そして己達が滅ぼすはずだったBETAの居城、ミンスクハイヴが呆気なく崩れ去る場面を……。

長きにわたる戦いは終わった、ミンスクハイヴを殲滅するという目標は達成した、どう考えても、誰が見ても勝利としか言いようのない

結果である。

だが、誰も歓喜の声を上げようとしないう、戦場に立つ兵士達の顔にも、モニター越しで戦況を見守っていた指揮官達にも笑顔が無い。あるのは何が起きたのか分からないような茫然とした表情、あるいは何か恐ろしいものでも見たかのような戦慄を浮かべた表情のみであった。誰一人として例外は無い。

これがもしも人類の手でハイヴを陥落させたというのならば、こうはならない。

その場に居る全ての人間、東側も西側も、資本主義陣営も共産主義陣営も問わず全ての人間が歓喜に沸き、喜びの涙を流し、高らかな勝利の唄と歓声を張り上げた事だろう。その後基地で東西両陣営入り乱れての勝利の宴が開かれ、勝利の美酒を味わいながら戦友達と肩を組み、笑いあい、冗談を交わし合いながら互いの戦功を讃えあい、思想や人種、国をも越えた友情を築きあげたことだろう。

それが、無い。何故なら陥落させたのは彼らでは無いのだから。何の予兆もなく、予測もなく突如として出現した巨大生物の手によって、BETAは尽く屠られ、ハイヴもまた殲滅されてしまったのだ。己の手では無く、さながら突如として出現した台風、竜巻の如き存在によって根こそぎ吹き飛ばされた、言うなれば全くの偶然で完全に漁夫の利を得るような形となってしまったのである。喜びに沸けるはずもない。

それどころか逆に、彼らの心には恐怖が芽生えていた。10万ものBETAを容易く焼き払い、さらに二つのハイヴをただ一頭で陥落させるほどの圧倒的戦力を持つ巨大生物……。

あれは何なのか、BETAの一種なのか、人類の敵となる存在か、あるいは味方となる存在か……。仮にあれが自分達に牙をむいてきたというのならば、果たして倒せるのか。

どうみても巨大な亀の化け物としか見えない姿、意志疎通が出来るかと問われたならば100人が100人否と答えるだろう。だが奴はたった一頭でハイヴを殲滅できる怪物なのだ。加えて先程の戦闘では光線属種のレーザーを何十何百も受けているにも拘らず、全くダ

メージを受けている様子がなかった。それほどの強度の表皮を有している以上、戦術機が携帯する火器では傷を負わせることすら難しい、否、もはや不可能といつてもいいかもしれない。

こんな化け物相手に、どうすればいいと言うんだ……。それはこの虐殺を目撃したすべての人間の抱いた共通の思い、無論それを直ぐ近くで目撃する羽目になった第666戦術機中隊もまた同じ考えであった。

ほとんどの人間は目の前の惨状に啞然としており、あのアイリスデイナーですら何が起きたのか分からないと言いたげな表情で固まってしまっている。

だが誰もそれを非難も笑いもしない。如何なる歴戦の衛士であったとしても先程までの光景を目撃したなら誰もがこうなるであろうことが皆分かっていたからだ。それほどまでに目の前で起きた事があまりにも理解の範疇外であったのだ。

そんな中、どうにかテオドールは正気に戻ると、自身の気持ちを落ち着かせる為に一度深呼吸を行う。それでも脳裏には、あの光景が未だにこびり付いている。容赦なく口から吐き出す炎とその巨体でBETAを蹂躪していく怪獣の姿……。つい数分前まで繰り広げられていたその光景を思い返した瞬間テオドールの背筋に悪寒が走る。それと同時に、今の今まで己達がさらされていた危機が、10万のBETA梯団が消えたことに対する深い安堵が心の奥底から沸き上がってくる。もしもあの怪獣が現れなければ、今頃己達はこうして生きてはいなかったであろう、それは間違いない。

何故背後の自分達は襲おうとしなかったのか、それは今のところ分からない。あの怪物の目的はBETAであり、人間など歯牙にもかけぬ存在だったのかもしれない。だが、もしも……。という不安は消す事が出来なかった。

もしもあの化け物が自分達に牙をむいたら……。

もしもあの化け物が最初からBETAでなく己達を狙っていたなら……。

自分達は勝てるか、いや、それ以前に生き残れるか……。考えるだ

けでも憂鬱になって来る。

『カティア……』

鬱屈とした気分を晴らそうと己の妹分の後輩に声をかけるが、応答は無い。まだ茫然として居やがるのがあいつは、と思つて彼女のモニターに視線を向ける。が、次の瞬間、テオドールは網膜に投射されたカティアを見て、思わず閉口してしまった。

網膜に投影されたモニターに映されたカティア、彼女は顔と目を伏せ、まるで祈りを捧げるかのように両手を組んでいた。そして、その組まれた両手の中ではあの赤い石が未だ仄かに赤い光を放っていた。

こうして第2次パレオロゴス作戦は国連、ワルシャワ条約機構連合軍の勝利に終わった。

ミンスクハイヴは陥落し、欧州への危機は退けられ、今一時の平穩を得る事となったのだ。間違いなく大金星といえるであろう戦果である。

ただし、ハイヴを陥落させたのが両軍ではない全く未知の存在の手によつて、であることを除けばであるが…。

いずれにせよ、これで欧州におけるBETAとの大戦はひとまず終わりを迎えたのである。そう、人類とBETAとの戦いは……。

その後司令部からの帰還命令により戦場から帰還した連合軍の兵士達は、戦場での疲れを癒し、汗を流す間もなく、先程と同様に戦慄と驚愕の渦に包まれる事となった。

ソ連領アルハンゲリスク州ヴェリスク。

そこには地球で四番目に建造されたハイヴにして、現在ソ連に建設されている四つのハイヴの一つ、ヴェリスクハイヴが存在している。

1976年に建設されてから7年、ハイヴの規模はフェイズ3にまで巨大化し、ハイヴを中心に半径30km圏内は植生が全滅した不毛の荒野と化してしまっている。

茶色の地面が剥き出しとなったそこに、空から舞う雪が積み重なつて一面の銀世界、文字通り生きるものも動くものも何一つ存在しない

死の世界へと姿を変えている。

ただただ白に彩られた世界で唯一動くものと言えば、ハイヴ周辺をまるで守衛か何かのように這い回るBETAと空からはらりと降り注ぐ白い粉雪程度のものであろう。

既に最後のハイヴ攻略作戦が行われてから幾年経過したことだろうか。結局ハイヴもBETAも排除できぬまま現在にいたっている。

ソ連からすれば領土奪還の為に是が非でも攻略したいであろうに、未だ近づく事も出来ずにいる現状、今ではさらに二つのハイヴを建設された拳句に国土の大半をBETAによって奪われ、本来敵対するはずのアメリカに縋りついてアラスカへの移住計画を始めている始末。もはや国土の奪還を半ば諦めている、そう捉えられても仕方がないであろう状況である。

もはやハイヴ攻略など夢のまた夢、ヴェリスクの地を人類が踏める日などもはや来ない。たとえ口には出さなくともそれが上下問わずソ連の人間達の総意であったことだろう。

……そう、これまではそう思っていたのだ。まさかハイヴが陥落するはずがないと、誰もが……。

1983年3月10日……、H4ヴェリスクハイヴ。

未だ深い雪に大地が覆われ、平野一面が純白の絨毯で覆われた極寒の大地と化しているであろうそこは……、現在全く正反対の一面が紅蓮に燃える炎の絨毯が敷き詰められた焦熱地獄と化していた。

『グルアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオンンンンンンンンンンン!!!』

空を火の粉が舞い、地上に落ちる雪は地上の炎で溶かされ蒸発していく。地表の雪もまた地獄の業火に晒されて跡形もなくなっており、その下の剥き出しの地面を焦がし、炎は空へと燃え上がっていく。

そこには何一つ生きていないものはいない。そう、それはBETAも例外ではない。地上を這い回っていたものも、異変に気が付き地上に出現したのも、一切の区別なく炎は焼き払っていった。後に残るのはかつてBETAだったものの灰か炭の如き黒い塊のみ。

これぞまさにこの世に具現化した地獄、生命を拒絶し死者のみを受け入れる灼熱の世界、その中心で、ありとあらゆる命が生きていけな



いであろう世界の中心で、一つの巨大な影が高らかな咆哮を張り上げている。

その強靱な皮膚と甲羅は周囲の炎をもともせず、涼風か何かのよう受け流し、巨獣は地獄に屹立している。それも当然、この灼熱の大地はこの巨獣が産み出したもの、この炎は彼のその口から吐き出したものなのだから。

巨獣の名はガメラ、この地上に舞い降りた地球の守護神、そして今この地上におけるBETAの天敵とも言える存在である。

その頑強な巨体には光線属種のレーザーも意味を為さず、唯体表の温度を僅かに上昇させるのみ、突撃級の突撃も、要撃級の両腕での打撃も、要塞級の衝角による一撃も、この怪物の表皮を突き破る事が出来ずにいる。

ガメラは己を傷つける事すら出来ずに地上を這い回る蟲共を、逆にその巨体を持って踏みつぶし、爪で引き裂き、そして大きく裂けた口から放つ火炎放射でもって雪で覆われた大地諸共に焼き払っていった。

ヴェリスクハイヴの規模はフェイズ3、無論14年後の1998年の頃に比べれば規模は大幅に小さいものの、それでも数十万ものBETAをハイヴ内部に抱えており、人類ではハイヴの外へと這い出てくるBETAを駆除することで精一杯であった。

それが今や、一匹残らず炎の中で燃える灰と化している。ガメラが火炎放射を吐き出すたびにまるで巨大な箒で掃かれたかのように地上から数百のBETAが消えていく。如何にガメラに接近しようにも火炎放射によって出来た炎の城壁によって尽く消し炭と化し、よしんばそれを潜り抜けて近づいたとしてもその巨大な足で踏みつぶされ、強靱な顎で喰いちぎられる……、数でいえばBETAの圧倒的な有利にも拘らずそれすらも上回る圧倒的な力の前に尽く潰されていく……、もはやだれが見たとしてもBETAに勝ち目は無い、ヴェリスクハイヴは陥落すると思わせるであろう光景であった。

しかしBETAの進撃は止まらない。何千何万の同胞が消し炭になろうとも、押し潰され、引き裂かれ、物言わぬ肉の破片となろうと

も次から次へとハイヴから出現し、ガメラの喉笛に食らいつこうと突撃する。

彼らに後退という言葉も、撤退という文字も無いし、そのような事は出来ない。彼らBETAは感情を持たない機械、ただ己の補給基地であるハイヴを護るか、あるいは資源を、新たなハイヴを建設する場所を求めて、他の地へと進撃する以外に思考は無い。

それは人類との戦いにおいては士気の低下が存在しない、恐怖するという事がないという利点に繋がっているのだが、目の前の規格外の存在、星の怒りが形となった天災そのものというべきガメラの前では完全に欠点として露呈することとなってしまっている。

感情も知性も持たず、ただ目標めがけて数の暴力で襲いかかる…、これは逆に言ってしまうえば眼前に畏がらうと障害物があるうとも迷うことなく飛び込んでいってしまうという欠点でもあるのだ。

それ故に眼前に炎が迫ろうともガメラの巨大な足が頭上から振り下ろされようともなんの躊躇いも無く突撃し、無残にその身を散らせていく。炎に焼かれ、身体を潰され、大小区別なく物言わぬ肉塊へと変貌していく。やがて、地上全てが炎に包まれ、雪原に溢れかえっていたBETAが全滅するのに時間はかからなかった。

ガメラ飛来から1時間足らず、既に地上にはBETAは一匹も残っておらず、ハイヴからも出現する気配がない。既にハイヴ内部に存在していたBETAも枯渇しているのだろう、此処まで来るのに、人類ならばどれほどの犠牲と時間を費やすことになるのか、想像もできないだろう。

もはや邪魔者は居なくなつた、ならば最後の仕上げをするのみ…。ガメラは脚部のジェットを噴射して空高く舞い上がると口から発射する火球の一撃でヴェリスクハイヴモニメントを破壊、その真下に開けられている大空洞を剥き出しにする。

本来ならばモニメント上部には上空からの敵の撃墜の為に数多くの光線属種BETAが配置されていたが、既にガメラに残らず黒焦げにされていて何処にも生存していない。最も、いたとしてもレーザーすら耐えきる耐熱性を持つ表皮のガメラにどれほどの痛手を負

わせられたかは疑問であるが。

大空洞めがけて身を投じるガメラ、人類からは縦坑と呼ばれているハイヴのメインホールへと続く大穴を、ガメラは速度を緩めず急降下していく。

そして降下する事一分ならず、直ぐに目標を発見した。ハイヴ最深部にして心臓部、BETAのエネルギーを生産し、上位存在からの命令をBETAに伝達する頭脳級BETA、この時期反応炉と呼ばれるにまで到達したのだ。

ほんの豆粒ほどだがメインホールの中央に鎮座された反応炉を視認した瞬間、カメラは待つてましたとばかりに口内から高出力の火球を反応炉めがけて発射する。火球はそのまま地面めがけて落下、着弾と同時に爆発、反応炉を粉微塵に吹き飛ばした上に余波で地下空洞全体を覆い尽さんばかりの炎を撒き散らす。

爆炎に覆われ赤一色に染まる地下空間、その直ぐ真上をガメラはジェット噴射を利用したホバリングで浮遊しながら黙って見下ろしている。

炎に包まれたそこには、もはやBETAは一匹も残されていない。既に全てのBETAは先程の戦闘で殺しつくしており、よしんば生き残りが居たとしても、この炎の中では生きていられないだろう。

これで終わった、そう判断したカメラは脚部のジェットの出力を上げて縦坑の上部へと方向を転換、先程とは逆に地上めがけて上昇を開始した。やがて地上へと脱出したカメラは速度を緩めることなく空高く舞い上がっていく。

向かう先は己が休息する場所である海、それも出来得る事なら己の姿が目につかない深海が望ましい。まだ余力は残っているものの、それでも休むに越したことは無い。既にハイヴを3つ潰せた以上此処でよしとするべきだ。

極寒の空を飛行するカメラは低いうなり声を上げる。

此処は間違いないかつて己の目覚めた時代の過去、ならばこれはある意味ラッキーとも言えるかもしれない。この時代ならばまだハイ

ヴは7、8程度しかない。既に三つ潰した以上残りはオリジナルハイヴを含めて4、しかもオリジナルハイヴはまだ成長しきつておらず、内包しているBETAの総数も1998年の頃よりも少ない筈……!!

勝てる、とガメラは、彼の中のシロガネタケルは確信した。この進化した姿ならきつと勝てる。この時代にハイヴを潰してしまえば、これから先死んでいくであろう人達はきつと生き延びられる……!月面のハイヴが心配であるが最悪それも破壊すればいいだけの話だ。

唯一の懸念はと言えばガメラが宇宙空間でも行動できるか否かのみであろう。ならば、きつと上手くいくはずだ。……だが。

(……何だ?きつきから感じるこの胸騒ぎは)

ずつと彼は何か違和感を感じていた。そう、それは何か確信があったものではない。あえて言うなら虫の知らせ、直観のようなものであった。それも、かつて人間だった頃の己のものではなく、ガメラ“としての己の中の……”

一体それが何なのか、今のタケルには分からなかった。そして、その違和感も自身の寢床たる海の真ん中へ到達したときに、直ぐに消え去った。

(……何でもいい、この時代で全てのハイヴを破壊すれば、BETAを全滅させられれば、戦いは終わる……みんなも、生き残れるんだから……)

深き深き母なる海の底へと身を没していきながら、ガメラは心の底でそう呟く。ガメラは再度の眠りにつく、再び戦いに出る為の英気を養う為に。

1983年3月10日、ソ連アルハンゲリスク州H4ヴェリスクハイヴ、陥落。

僅か一日でハイヴ3つが陥落するという奇跡、それは瞬時に世界中を駆け巡った。

……最も、それに対する驚愕、畏怖はあれども喝采、歓喜は数える程でしかなかったが……。何しろ3つのハイヴを陥落させた張本人は人類ではなく……。

この海底深くに眠りにつく大怪獣、カメラであったのだから。

## 第666戦術機中隊SIDE

「此処がワルシャワ、なんですね!!……想像していたより近代的、というか見慣れた街並みなんですね?」

「此処は中央市街地、大戦中一度爆撃で吹き飛ばされて更地になったところをソ連流の都市計画で再建築した地区だ。だからポーランドの歴史的建造物は、此処にはそこまで多くないな」

「そ、そうですか……、少しがっかりです……」

「あんまりはしゃぐなカティア。観光に来たわけじゃねえんだぞ」

「まあいいじゃないかテオドール。今の今まで戦争していたのだから今回くらいはしゃげばいい。かくいう私も時間があればこの街をじっくり見て回りたいと思っているのだからな」

第二次パレオロゴス作戦終結から、3日、アイリスディーナ、カティア、テオドールの三人はポーランドの首都、ワルシャワを訪れていた。ワルシャワ、ポーランド人民共和国首都という肩書のみでなくポーランドに置いて製造業、鉄鋼業等が盛んな工業都市であるとともに、ワルシャワ大学といった高等教育機関が集中し、歌劇場、ワルシャワ交響楽団も擁する経済、文化的に見てもポーランドの中心とも言える都市である。

歴史的建造物が数々残されている街としても有名であり、特にワルシャワ北部の旧市街及び新市街の街並みは壁に入った輝の一本に至るまで再現されているとまで言われている。

これら文化的、歴史的にも価値の高い史跡が多いことからBETA大戦以前は東側からだけでなく西側からも観光客が多く訪れる社会主義国家でも有数の観光都市であった。無論BETA大戦勃発後は客足も遠のいてしまったのだが。

ちなみにアイリスディーナ達のいる場所は中心市街地。第二次世界大戦時にナチスドイツによって破壊され、戦後ソ連の主導の下共産主義的街建設が行われており、歴史的史跡は殆どないと言ってもいい。精々出来る事と言えばそこらの店で食べ歩くなり買い物したりする程度であろう。

だがそんなことは今は関係ない。彼らは此処に観光に来たわけではないのだ。

2日前に終結した第二次パレオロゴス作戦、それについての会合が此処で行われるのだ。無論参加するのはアイリスディーナのみであるが。

「……貴様たちはこの街のみとはいえ観光できるんだ、一方の私は会議で缶詰……、全くうらやましい限りだ」

「あ、あはは……」

「いや、まあ、その………すいません大尉」

「ふん、謝る必要はない。これも中隊長としての役目だしな。それに……」

三人は人々が往来する道を暫く歩いていくと、一つの巨大なビルの前で立ち止まる。

そこにはロングの黒髪に眼鏡が特徴的な神経質そうな女性、第66戦術機中隊付き政治将校、グレーテル・イエツケルンが腕を組んで待っていた。どこか不満そうに眉をひそめている彼女の姿にアイリスディーナは苦笑を浮かべた。

「休日がないのは、向こうも同じだしな」

「テオドルきーン!!こっちですこっち!早く来てくださーい!」

「ああ、ハイハイわかったから少し待て。………つたく、幾ら国家保安省の連中がいなくても気は緩めすぎだろうが……」

結局二人はアイリスディーナと別れて街中を散策する事となった。流石に国家保安省の人間がいらないとはいえポーランドの治安組織に目をつけられたらそれはそれで面倒である為、カティアとテオドルは一緒に行動する事となった。

「全く………子供かお前は。幾ら初めて来た街だから……」

「だって私、ポーランドに派兵されてから一度もワルシャワに行った事無くて……。ベルリンもそうなんですけどいつか行ってみた

いって思っていたんです」

「……あつそ」

カティアの言葉に適当に相槌を打ちながらテオドールは街を見回した。

街並みは故郷東ドイツのベルリンと大差ない。ベルリン同様ソ連の都市計画で再建設された為であろう。道には人が行き交い、談笑したりシヨツピングを楽しんでいる。

聞いた話によれば目と鼻の先とも言える距離に戦場がある関係上、ポーランドは国家総動員体制で第二次パレオロゴス作戦に臨んでおり、国民の生活も相当切り詰められていたという話であったが、見たところそんな感じには見受けられない。

人類の力で無いとはいえミンスクハイヴとロヴァニエミハイヴ、そしてヴェリスクハイヴという3つのハイヴが消滅し、眼前の脅威が無くなったが故であろうか。

テオドールはあの巨大生物を、結果的にとはいえ己達の危機を救ったあの怪獣の姿を思い返す。

あの戦い、あの局面、もしもあの怪獣がBETAを殲滅していなかったとしたなら自分達は全滅し、作戦は失敗していた。そうなれば仮に直ぐでなかったとしてもポーランドはBETAの侵攻を受け、このワルシャワも完全な廃墟と化していたかもしれない。最もそうなっていたとしたなら己達は既に死んでいる為関係ないかもしれないが……。

その事には感謝の念は僅かながらある。如何に人外の存在であったとしても、本人にその気がなかったとしても命を助けられたのは事実なのであるから。

だがそれ以上にテオドールの心にはあの怪獣への畏怖が、恐怖が色濃く残っていた。

見る者を圧倒するほどの巨体、雷鳴と間違わんばかりの咆哮、そして、万のBETAすらものともせず粉砕する圧倒的なまでの暴力……。

思い返すだけでもテオドールの背筋には凍りつくような寒気が走

る。もしもあの化け物の標的がBETAではなく自分達であったのなら……、まず間違いなく全滅すると、それだけは確信を持って言えた。

「……なあ、カティア」

「はい？何ですかテオドルさん」

隣で街並みを見回しながらはしゃぐカティアに、テオドルは何気なく声をかける。此方へと視線を向け直したカティアにテオドルは視線を前に向けたまま独り言を呟くかのように質問する。

「…お前、あの怪獣どう思う？」

「あの怪獣、って、あのBETAの大群やつつけてミンスクハイヴを陥落させた…？」

「そ、あの亀みたいなあいつだ。どう思う？怖いと思うか？」

そう、隣の妹分に視線を向けながら問いかけるテオドル、一方カティアはそんな彼の質問に一瞬キョトンとした表情を浮かべていたが、直ぐに何時ものような柔らかな笑顔を浮かべた。

「いいえ？全然怖くありませんでしたよ？」

「……は？いやいやお前、ちよつとは考えなかったのかよ？あの化け物がこつちに攻撃してきたらって、もし俺達めがけて炎吐いてきたらって考えなかったのかよ？」

「うーん……、自分でも不思議だと思っんですけど、そんなこと考えもしませんでしたねー…」

「……いや、なんでさ」

「なんでって言われても、上手くは言えませんが……」

そこまで言うとかティアは胸元に下げられたペンダントを掌でもち上げ、クスリとほほ笑む。

『きつと大丈夫だ』って、このペンダントを握っていたらそう思えたんです。フフツ、不思議ですよね？」

一方のアイリスデイナーは、第二次パレオロゴス作戦後のミンスク



ハイヴ、そして例の巨大生物に関して、政治将校であるグレーテルを含む東ドイツ派遣軍将校達との会議を行っていた。

「……殲滅されたミンスクハイヴにはソ連から調査隊が送られるらしい。十中八九内部に残された資源の回収の為だろう。ま、あれだけ派手に吹き飛ばされては、殆ど期待も出来ないだろうが」

「一方あの正体不明の巨大生物はヴェリスクハイヴ殲滅後に地中海沖で消息を絶った。恐らくは海底に潜ったのだろうが詳細は不明、調査をしようにも予算も時期も余裕がない」

現在判明している二つの情報、殲滅されたミンスクハイヴの処置とそれを為した巨大生物の行方について語り終えると、派遣軍付き政治将校であるツヴァイクレ少佐はやれやれと溜息を吐きながらソファアにもたれかかる。彼の報告をその場に居る将校達、アイリス・デーナ・ベルンハルト大尉、グレーテル・イエツケルン中尉、ホルツァー・ハンニバル少佐、マライ・ハイゼンベルク中尉の四人は黙って聞いていた。

数分間の重苦しい沈黙の中、ハンニバル少佐は重々しく溜息を吐きながら口を開いた。

「結局今回の作戦は、我等にとって旨みはあまりなし、か……。いや、作戦目標であるミンスクハイヴ殲滅自体には成功し、さらにハイヴがおまけで2つ砕かれたのだから喜ぶべき、なんだろうが……」

「結果的に見れば第三者に手柄を横取りされたようなものですからね……。しかもそれが他国の軍ではなく、意志疎通すらもできそうになり未知の生命体なら、なおさら……」

少佐の後に続けてマライ中尉もそう口にする。本来ならばハイヴ攻略戦に置いて第666戦術機中隊の、ひいては東ドイツ国家人民軍の活躍を宣伝し、国内における国家保安省との抗争での優位を勝ち取る手はずであった。よしんば作戦が失敗したとしても第666戦術機中隊が作戦の中核となり『奮闘した』という事実さえあればそれもいい。事実、最後のBETAの大群出現まではまさに彼らの、というよりもアイリス・デーナの計算通りに事は進んでいた。よしんば作戦が失敗してハイヴを落とせなかったとしても、『中隊の名を挙げる』

という目的そのものは達成できた、はずであった…。

が、最後の最後でとんでもないどんでん返し起きた。突如出現した巨大生物によってミンスクハイヴはBETA諸共根こそぎ殲滅させられ、さらにこの生物はミンスク以外にもロヴァニエミ、ヴェリスクの二つのハイヴを陥落させてしまったのだ。

当然話題のほとんどはその巨大生物へと向かってしまい、第666中隊の活躍、というよりも連合軍の戦場での活躍、アクティヴデイツフエンスの成果といった、本来話題に上がるべきものにはだれも見向きもなくなってしまったのだ。これには広告、宣伝を得意とする政治将校達も頭を抱えざるを得なかった。

無論悪い事ばかりではなく、ハイヴ3つが殲滅されたことによってBETAによる欧州侵攻が無くなった事、これはハンニバル少佐の言うとおりでたいことだろう。最も逆にあの怪物が欧州へと侵攻してくる可能性もあり得ないわけでもないのだが……。

「……まあいい。どの道国家保安省の連中は今のところはギヤアギヤア言うまい。連中は今例の事件で忙しいらしいからな」

「……例の猟奇殺人事件ですね？少佐」

グレーテルの問い掛けにツヴァイクレ少佐は黙って頷きながらコーヒーをすすする。

この場に居る誰もが知っている事ではあるが、最近東ドイツ国内において奇怪な殺人事件が起きていると聞いている。

この殺人事件の奇妙なところは、犯行現場が東ドイツと西ドイツの国境付近である事、そこで国外逃亡を企てる亡命者、そしてそれを捕縛する任務を負った国家保安省職員が次々と無差別に殺害されているという事、そして何より、その遺体が見るも無残なまでに損壊されているという事である。まるで、何らかの猛獣に喰い荒されたかのよう……。

亡命者だけならばともかく自身の組織の構成員までもが犠牲になっただけとなればこれ以上看過できないとして、国家保安省でも大規模な捜査活動が行われようとしているらしい。あの秘密主義の組織の事であるから何処までが本当であるかは不明であるが。

「既に国家保安省の職員にも10数名以上の犠牲者が出ていて、もはやこれ以上放置してはおけん状態になっているらしい。まあ我々には関係のない話だが」

「……ですね。それで同志少佐、今回の作戦の結果については……」  
「ありのまま伝えるしかあるまい。幸いというべきかあの化け物に関する映像資料は山ほどある。それを突き付ければ文句も言うまいよ」

まあその必要もあるまいがね、とツヴァイクレ少佐は自嘲するかのようにに笑みを浮かべる。確かに少佐の言うとおり、あの怪物の出現については既にヨーロッパ中に広がっており、党上層部にもその情報が既に耳に入っているても可笑しくは無い。ならば下手に取り繕うよりもありのまま伝えてしまった方がいいだろう。

「……了解しました。では本国にはそのように」

「ああ、全く折角ワルシャワまで来たというのに観光もできずに帰る事になるうとは……、政治将校とは実に面倒な身分だよ」

「……聞かなかつた事しておくよ、ツヴァイクレ少佐」

自身の立場を愚痴るツヴァイクレ少佐にハンニバルは苦笑いを浮かべていた。

会議が終わるとツヴァイクレ少佐、ハンニバル少佐、ハイゼンベルク中尉は早々に部屋を出て行ってしまい、部屋にはアイリスデーナとグレーテルの二人のみが残っていた。

「……どうするつもり、同志大尉？」

「何がだ？」

「今回の作戦、その顛末についてよ」

眼鏡越しに鋭い眼光を向けてくるグレーテルに対して、アイリスデーナは軽く肩をすくめた。

「それこそ先程同志少佐が言った通りだ。ありのまま伝えればいい。我々がハイヴを潰そうとした瞬間に未知の巨大生物が出現して先に潰されました、と」

「それはそうだけど……、それならこれからどうするの？た

だでさえ中隊には爆弾を幾つも抱えてるっていうのに……」

グレーテルの言うとおりに、第666戦術機中隊には幾つもの『隙』が存在している。

まずは西側からの亡命者であるカティア、そして死んだとされていたテオドルの義妹、リイズ。カティアに関しては現状保留にしているものの、それでも国家保安省が放置しておくとは考えられない。そしてリイズ、彼女には国家保安省から送り込まれたスパイであるという疑惑もある。

アイリスディーナとグレーテルは十中八九リイズがスパイであるとの確信を抱いている。今回の作戦では表立っての追及は出来ずにいたものの、いつまでも放置しておける問題では無い。

如何に国家保安省が現在忙しいとはいえ、僅かな隙でも見逃してくれるほど甘い連中では無い事は嫌でも分かっているが故に……。

「……リイズ・ホーエンシュタインに関しては監視を続行、不審な点が見つかり次第尋問を行えばいい。幸い時間は出来たからな」

「……尋問を行うのは私なのよ？全く……」

アイリスディーナの言葉に疲れたように溜息を吐き出すグレーテルだったが、数秒後「ああそういえば」と何かを思い出したように顔を上げる。

「確かポーランド人民軍から中隊に衛士が一人、研修の為に加入してくるらしいわよ？」

「ポーランドから？珍しい事もあるものだな」

「……あの作戦でのレーザーヤークトが評価されたからだそうよ。ま、要は中隊内部を探りたいって腹なんでしょうよ」

「そうか……まあある意味実力を評価されているという事だから悪い気はしないわけではないが……」

そう呟きながらアイリスディーナは窓から外を眺める。

空はネズミ色をした重々しい雲に覆われた曇り空、そこから白い粉雪が地上へはらはらと舞う様に落ちてきている。

雪が降りしきる中、人々は寒さに体を縮めながら道を行き交っている。つい先程まで隣国でBETAとの戦争が起きていたとは思えない

いような光景を、アイリスディーナはジッと眺めている。

「……まあ、護れただけでも良しとするべき、か……」

「……？何か言った？」

「いいや、ただの独り言だ」

そう言つて笑うアイリスディーナの横顔を、グレーテルは首を傾げながら眺めていた。

その頃、東ドイツでは……

「ツツツツハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ」

生い茂るスギ林の中、降りしきる雪を掻き分け、厚く降り積もった雪に足を取られながら一人の兵士が必死の表情で息を切らしながら走っていた。

その表情は恐怖と焦燥に歪み、長時間走っている影響か口から息を吐くたびに喉から笛を鳴らすようなヒュー、ヒューという音まで鳴っている。

だがそれでも兵士は足を止めるわけにはいかなかった。もしも一瞬でも足を止めようものなら、もしもこの場で倒れようものなら、自分の命が無くなるという事がよく分かっていたのだから……。

そう、兵士は逃げていた。何から？それは兵士自身にも分からな  
い。

ただ一つ分かるのは、*“そいつ”*は兵士を殺そうとしている事、殺して喰おうとしている事のみである。

そう、奴は自分を喰うつもりなのだ、己の同志達と同じように  
……。

その光景を思い出した瞬間、兵士は地面に膝をついて胃袋で消化さ  
れていた食物を一気に地面に嘔吐してしまう。直ぐ背後から*“それ  
”*が迫ってきているかもしれないという時に背を丸め、ゲエゲエと地  
面に胃液と共に吐しゃ物を吐き散らかす。

無理も無い、何故なら彼は見てしまったのだ。

自分の同僚達が無残に殺されるところを。

その死体の肉が、骨が、*“それ”*に食まれ、砕かれ、咀嚼され、喰われていくところを……。

「……!!!」

兵士は反射的に立ち上がる。此処でとどまっていたは次は自分が喰われるだろう。

幸い今のところ *“奴”* は追ってきていないようではあるが、油断はできない。

急ぎ基地へ戻らなければ、そしてベルリンの本部に救援を要請して……。兵士は雪に足を取られながらも必死に立ち上がりひたすら雪道を走る、走る、走る……。視界を遮る木々をかき分け、息を切らしながら必死に走り続ける。

やがて、木々の間から何かの建造物のような影と何かの明かりのよな光を見た瞬間、兵士の表情に希望が宿る。

よかった、あと少しだ、流星に基地に入ってしまったえばあの化け物も手出しできないだろう。戻ったらとにかく事情を説明して、直ぐに武装警察軍に連絡を取って……。

ようやくつかんだ文字通り希望の光を目の前にして兵士は腕を、足を、必死に稼働させる。やがて木々の間を抜け、開けた土地へと出る兵士。息を切らしながらも歓喜の表情を浮かべる兵士の目の前にあったのは……。

……破壊された基地、倒壊した建物、そして……骸と化した己の同志達と、それを喰らう異形の怪物たちの姿であった。

「………え？」

先程も見た地獄が眼前に広がっているのを見て、兵士は思わず尻もちをつく。呆けて、ただ呆けて眼前に広がる阿鼻叫喚の世界を眺めている。

何故、何故こいつらが此処に居る？何故ナカマタチガコイツラニク

ワレテイル？

口をパクパクさせながら兵士は目の前で喰われる同志達の姿をまざまざと見せつけられる。逃げねばならない、早く立たなければ、その頭が告げても身体が動かない。眼前のあまりにも非現実的な光景に、つかみかけた希望が粉微塵に打ち砕かれた事へのショックで身体が微塵も動こうとしない。

と、仲間の死体を貪っていた化け物が、ふと此方に視線を向けて近寄って来る。

兵士は茫然とそれを眺める。大きく裂けた口が、そこに並ぶサメのように鋭い牙が、己に近づいてくるのもまるで他人事のようなのである。

「は、ハハ………」

兵士は笑う、身体をカタカタ震わせながら笑う。直ぐそこまで迫る死の顎に、そこから漂う鼻孔をつく血生臭いにおいに兵士は、何もできなかつた、何も出来ずにいた。

せめて、夢なら早く覚めてくれ。

それが彼が、最後に呟いた言葉であった。

これは、後に起きる悲劇の序章。

この事件が後に、東ドイツという国家そのものを滅亡の縁へと追いやることになろうとは、誰も、世界中のだれもが考える事は無かつた……。

## 第11話 B i z a r r e ー 猫 奇 ー

冷戦によって母体である国家共々東西に分離したドイツ首都、ベルリン。

その東ドイツ側、東ベルリンの一角にそのビルは存在している。

まるで見るものを威圧するかのような威容を誇る高層ビル、そここそが東ドイツという国家を、そこに住まう国民を恐怖と密告で統制する秘密警察組織、国家保安省、通称シュタージの本部ビルであった。

シュタージ、国家保安省とは東ドイツの秘密警察、諜報機関であり、徹底的な監視体制を敷いて東ドイツの言論を統制、さらに隣国の西ドイツにまで多数のスパイを送り込んでおり、東西両ドイツの国民から恐れられていた。

実際史実に置いて、シュタージのスパイである夫婦二人が西ドイツへと亡命、当時の西ドイツ首相の秘書官にまで上り詰めるという事件が起きており、さらに国内には多数の情報提供者を配置、その数は対人口比でいえばかつてのドイツ第三帝国のゲシュタポ、そしてソ連のKGBをも凌ぐものであったと言われている。

この世界の国家保安省もまた、組織の内容については史実とほぼ同じといってもいい。

違うのはこの国家保安省には国家人民軍とは別に直属の軍隊として、武装警察軍を所持しているという事である。その主な役割は亡命者狩り、政治犯への対処、さらには戦術機による対BETA戦もまた任務に含まれている。

ソ連との間に結ばれた太いパイプを持つ国家保安省はMiG-23チボラシユカ等のソ連で生産される最新鋭の兵器、戦術機を部隊に配備する事が出来ている。結果的に第二次パレオログス作戦の戦力増強の意味合いもあってチボラシユカを始めとする戦術機、戦車は国家人民軍にも配備される事となったが、それでも配備数においては武装警察軍が圧倒的に多い。

その諜報の目は国家人民軍内部にまで張り巡らされており、ほんの僅かでも自分の組織にとって不利益となり得るであろう情報であれ



ば即座に伝わってしまう。それゆえ国家保安省は国家人民軍の兵士達にとっては恐怖と嫌悪の的であり、政治将校ですらも彼らを毛嫌いして敵視しているものは多い。

本来の流れでいけば、パレオロゴス作戦の失敗とその後に起きるポーランド崩壊、それによる難民の流入により、難民統制の為に国家保安省の持つ権限はより強大なものになるはずであった。しかしガメラの乱入によるミンスクハイヴの一度目の崩壊、そして今回の口ヴァニエミ、ミンスク、ヴェリスクの3つのハイヴの崩壊によるBE TA戦線の後退、そしてポーランドの健在という結果により、東ドイツには殆ど難民が流れ込んで来なかった。この為党上層部は国家保安省による国内監視強化は現状必要無しと判断、国家保安省の権限は今のところ特に強化はされていない。

とはいえ未だに東ドイツのあちらこちらに情報提供者を送り込み、密告を推奨している国家保安省は国民にとっての恐怖の的であることはかわらず、東ドイツが恐怖と密告による統制である事は今もなお変わってはならず、第二次パレオロゴス作戦の成功もまた、国家保安省の立場を揺るがす事は全くと言っていいほどにないであろう。

……そう、揺るがす事は無いのだ、外で何が起ころうとも。

本当に国家保安省が揺らぎ、倒壊するとなれば、それは「外」ではなく「内」からとなるのである。

そして、崩壊の序曲はもう既に、始まっていた。

国家保安省本部ビル、その一室にて。

薄暗く、過度な調度品が一切置かれていないそこに、黒を基調とした国家保安省の制服を纏った一人の職員が、同じく国家保安省の制服を纏った高圧的な雰囲気的女性、その背後にまるで彼女の護衛か何かのように控える国家保安省職員へと緊張の面持ちで手元の資料を見ながら何かを報告している。

この女性の名前はベアトリクス・ブレーム。国家保安省直屬軍である武装警察軍に所属しており、階級は少佐。武装警察軍指揮下の戦術

機大隊、『ヴェアヴォルフ』を指揮する大隊長であり、彼女自身も卓越した戦術機操縦技術を誇る衛士である。

本来は戦術機大隊を率いて国境を越えようとする亡命者を狩る事を任務とする彼女が此処に居る理由、それは此処最近発生している猟奇殺人事件の捜査の為である。

東ドイツと西ドイツとの境目、東から西への亡命者の警備の為に国家保安省が特に嚴重に目を光らせているそこで猟奇殺人事件が発生したのである。

最初は数人の亡命者が犠牲となった。死体は破損がひどく、腕や足が丸々欠損しているのもあれば、上半身が丸々無くなっているものも、果ては腕の一本、あるいは脚一本しか発見できない遺体もあった。遺体の異常さに啞然とする者も居たものの、どうせ野犬が何かに襲われたのだろうとその時は誰も気に留めなかった。

だが、事件はそれで終わらなかった。その後も幾人もの亡命者が犠牲となり、ついには国境を警備する国家保安省の兵士達にまで犠牲者が出始めたのである。

事此処に居たってようやく国家保安省は重い腰を上げた。亡命者が何人犠牲になろうとも知った事ではないが、自分達の組織の人間が殺されたのならば放置しておくわけにはいかない。何よりこのような事件が表ざたになろうものならば国家保安省の名に傷がつく可能性もあり得るのだ。

国家保安省は直ちに国境付近に調査チームを極秘で派遣、現地での調査を開始した。

しかし、無駄であった。まるで彼らのやり方をあざ笑うかのように犠牲者は段々と数を増やしていった。さらにどこから情報が漏れたのか一部の政治将校、兵士達の間で今回の事件に関連するであろう噂がささやかれ始めたのだ。犠牲者が少ないうちはある程度隠蔽する事も出来たであろうがこのまま増えなければそれすらもままならなくなる。

この事態を重く見た国家保安省上層部は虎の子である武装警察軍を調査に加える事を決定、代表として戦術機甲大隊『ヴェアヴォルフ』

大隊長のベアトリクスが派遣される事となったわけである。

兵士の報告に黙って耳を傾けるベアトリクス、その妖艶な美貌はまるで石像のように無表情であり普段浮かべている余裕に満ちた笑みは欠片も見いだせない。

「……………以上です。また国境付近で三名の警備兵が……………、やはりと  
いうべきかいつもと同じ手口です。遺体の殆どが欠損、というより、  
もはや原型そのものを留めていないものも……………」

「……………もういい、わかった。後はよく見ておく、下がっていい」

「……………ハイ」

そう言つて手を振るベアトリクスに兵士は一度敬礼するとそのままドアから出て行く。ドアがしまる音が部屋に響くと同時にベアトリクスは疲れたような溜息を吐きだしながら手元の資料を持ち上げる。

「……………これでもう被害者は50人を超えたわね…。我々の方の損害に限定すれば20人以上、か……………」

「由々しき問題です少佐。此方の犠牲者も増え続けている以上放置してはけません。直ちに出撃を……………」

資料をパラパラとめくりながらぼやくベアトリクスに傍に立っていた女性兵士、ベアトリクスの副官である部下が興奮した様子で捲し立てる。己の同胞達がただ殺されるのみならずその遺体までも無残に辱められたのだ、完全に国家保安省を舐め切っている、あるいは歯牙にもかけていないとしか言いようがないこの犯行に彼女も怒りを隠し切れていないのだ。が、そんな副官の怒声に対してベアトリクスは落ち着いた様子で片手をあげながら副官を抑える。

「……………落ち着きなさいな。私だって同志が殺されて腸が煮えくり返る思いよ?とはいえ敵の正体がかめぬ以上軽々しく動けないわ。まして、相手が人間かどうか分からない以上、ね」

「……………少佐もやはり、この事件は人間が起こしたものではないと……………」

副官は神妙な顔つきでベアトリクスに問いかけると、ベアトリクスは『さあね』と暈し気味に返事を返して、再度資料に視線を落とす。

「……仮に人間だったとしても、幾らなんでも不自然すぎるわ。遺体の損壊は既に写真で見せて貰ったけど……あれは殺されたというより……」

そこまで呟いたベアトリクスは不意に口を閉じる。まるでその先を言葉にする事をためらっているかのよう。事実そうなのだろう。これはあくまで己の憶測、写真から見た遺体の状況から判断しただけの憶測にすぎないのだ。決めつけるのは早すぎる。

ベアトリクスは椅子の背もたれに凭れかかりながら指で瞼越しに両目をマツサーズする。此処までずっと書類やら何やらを読んだり眺めたりしていたせいかい加減目に疲れがたまってきている。

たかが猟奇殺人事件、精々一週間かそこで片がつくだろうと軽く考えて調査を引き受けた結果がこの様だ。未だ犯人は手がかり一つ掴む事も出来ず、2週間近くも時を無駄にしている。本来の職務である大隊指揮と亡命者狩りは部下に一任しているもの、これ以上長引けば大隊の訓練や士気にも影響が出る、早急に片付けねばならないというのに……。

忌々しげに舌打ちするベアトリクス。どうにかこの鬱屈した気分を発散したいと頭を悩ませる。と、ふいに脳裏にある人間の、そして彼女が率いているとある中隊の名前が浮かび上がり、何気なく背後の副官へと言葉を投げかける。

「……そう言えばポーランドに派遣された第666戦術機中隊について、何か変わった事でもあったかしら？ 確か巨大生物とやらの乱入のお陰で無事ハイヴは潰せたらしいけど」

「特に今のところは何も。中隊は現在ポーランド首都ワルシャワに逗留しているらしいですが、どうやら向こうではハイヴを殲滅した巨大生物の話題で持ち切りらしく、それ以上の事に関しましては……」

「……例の西からの亡命者に関しては？」

「そちらも今のところは何も。特に変わったところは無いという話ですが此方も例の巨大生物の話題に紛れて……」

「そう、まあいいわ。どの道このごたごたを始末しない限り尋問どころじゃないんだから。はあ……全く直ぐに片が付くかと思いきや

思いのほか長引くわね……。これは本気で戦術機を出すことを提案するべきかしら……」

副官の返答を聞きながらベアトリクスは重々しく溜息を吐きだす。実を言えば既に上層部に調査の為に戦術機を動かす事を打診していた。しかしながらその要請は既に却下されていたのだ。

ベラルーシ派兵の為に予算をつぎ込んだ結果、そのしわ寄せで国家保安省の予算額は相対的に減らされていた、そんな中でただでさえ動かすだけでも費用のかかる戦術機等そう簡単に使えない、ましてやたかが殺人事件の捜査に使用する等正気の沙汰ではないと突っぱねられる羽目になったのだ。この決定にはさしものベアトリクスも内心舌打ちしていた。

ここまで職員が、しかも嚴重な警備体制にあるはずの国境線警備の人間が殺されているというのに予算も何もあつたものでもないだろう。何処で誰が聞いているか分からない為口に出して文句は言うまいが。

「……全く、少し喉が渴いてきたわ。悪いけど紅茶を淹れて貰えない？」

「はい、ただ今……？」

此処はティータイムでもして少し頭を整理でもしようとベアトリクスは副官に紅茶を準備するように命じる。副官は彼女の言葉に従ってティーセットを用意しようとする、と、突然扉の向こう側からバタバタと何者かが走って来る音が聞こえてくる。副官だけでなくベアトリクスも何事かと扉の方を眺めていると扉が勢いよく開かれてそこから一人の国家保安省職員が息を切らせながら部屋へと入って来る。余程急いでいたのか職員はゼエゼエと呼吸を乱しながらもどうにか背筋を伸ばして切れ切れながら言葉を紡いだ。

「ど、同志少佐、き、き、緊急事態です!!また、また犠牲者が……」  
「……なんですって!!それで、犠牲者は!!どこで誰が襲われたというの!!」

突然飛び込んできた兵士に啞然としていたベアトリクスであったが、兵士の口から飛び出してきた言葉に一瞬で表情が変わった。椅子

から立ち上がると兵士に掴みかからんばかりの勢いで次々と質問を捲し立てる。兵士は一瞬唾然としたもののやがておずおずと、呼吸を落ち着かせながら口を開く。

「……そ、その……国境、16号基地が……」

「16番基地!!その人間が襲われたのか!!」

鬼気迫る表情で叫ぶベアトリクスに、兵士は一瞬ためらうかのよう  
に口を閉ざすが、やがて覚悟を決めたかのように、されどまるで腫れ  
物に触るかのように恐る恐ると口を開く。

「いえ……違います……。16番基地が、16番基地そのものが、壊滅しました……!!基地の人間は全滅、生存者0、です……!!」

「………は、あ?」

「……基地が、壊滅……?」

兵士のまるで悲鳴のような絶叫にベアトリクスは思わずあつけにとられる。その背後で事の次第を見守っていた副官も、信じられないような顔つきで兵士へと視線を向けている。

そして爆弾発言をした当の兵士はそんな彼女達の様子に逆に恐怖を覚えたのかガタガタと身体を震わせている。しかし、今やベアトリクスの意識はそんな小男には向けられていない。

国家保安省所属の基地の壊滅……、にわかには信じがたい話だ。一瞬目の前の男の嘘ではないかと疑ってしまっただが見たところ嘘をついている様子は無い。そもそもそんな理由がない。

ならば彼の言っている事は事実だと考えてしかるべきだろう。しかしもし事実だとしたならばこれは由々しき事態だ。一人二人の犠牲どころか基地そのものに襲撃を仕掛けてくるなど、もはやこれは単なる猟奇殺人事件と片付けていい代物ではなくなった。

もはやこんなところに引きこもっている場合ではない——!!ベアトリクスは壁にかかったコートを引つ掴むと空きっぱなしのドアへと歩いていく。

「直ぐに現場に向かう!!案内しろ!!」

「……!?しよ、少佐自らですか!?それは……」

「ガタガタぬかすな!!もうこれ以上放置できる案件では無い!!この

まま放っておいたら……」

またさらなる犠牲者が産み出される、いや、それどころか国家保安省そのものが……。ベアトリクスは心のうちでそんな確信を抱きながら奥歯をギリリと噛み締めた。

カティアS I D E

夢を見ていた、あまりにも現実離れた夢を……。

『……あれ？……、は……』

唐突に目を覚ましたカティア、だがカティアが目を覚ました場所は己達中隊が逗留している宿泊施設の一室では無かった。

そこは、一言で言うのなら煉獄、あるいは焦熱地獄。周囲に瓦礫が散らばり、あちらこちらから火の手が上がっている、さながら爆撃機の空襲の被害でも受けているかのような凄惨な光景であった。

空は太陽どころか星すらも見えないほどに黒く、時折雲らしき黒い物体が蠢くような妙な動きを見せている。そして地上に散らばるのは人間の死体、死体、死体……。

『……なに、これ……』

カティアは茫然と、無意識にそう呟く。この光景は何だ。まさかいつの間にかB E T Aがワルシャワに攻めてきたのか、いや、でも確かにミンスクのハイヴは殲滅されたはず……。

無意識にカティアの右手が頬に伸び、その肉を思い切りつねり上げる。が、痛みは無い。本来痛みを感じるはずだというのにカティアはまったく痛みを感じないのだ。

『……まさか、夢、なの……？』

ポツリと呟く彼女の言葉に答えるものは誰も居ない。眼前に広がる光景は夢と呼ぶにはあまりにもリアルにすぎる光景、だが、カティアは段々と目の前に広がる破壊された町が、己の知っているものともまるでかけ離れているという事に気付き始めた。

既に瓦礫と化しているものが大半だが、眼前の建物はどれも己の滞在しているワルシャワのものとは大きく異なっている。さらに言うなら己の記憶の中にあるどの建造物の形とも一致しない。あえて言

うのならば以前本で観た事があるギリシャ、ローマといったかつての文明の古代遺跡の復元図、それに似ている。

あまりにも現実感のない光景、今まで自分の居た街とは全くかけ離れたそこに何故自分があるのか……。どう考えてもこれは夢だとは思えない。

『でも、何で私こんな夢を……。』

しかしそれでも疑問は残る。何故自分はこんな夢を見ているのか。自分はこんな場所など見たこともないし、来た事もない。夢に理由を求めるのはおかしいかもしれないが何故か気になって仕方がない。腕を組み、眉根を寄せて考え込むカティア、であったが…。

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

『……!?!』

突如として頭上から響き渡る絶叫の様な鳴き声と突風、そして頭上にかかった巨大な黒い影にカティアはハツとして頭上を見上げた。

頭上から自分めがけて降りてくるもの、それは巨大な、あまりにも巨大な翼を持った影であった。

巨影の翼が羽ばたくたびに周囲に突風が吹き荒れる。本来ならば人間一人軽々と吹き飛ばせるであろう暴風であるが、幸い夢である為かカティアには影響は無い。

だが、此方めがけて降りてくる巨大な影にカティアは反射的にその場から飛びのいて逃れる。次の瞬間、巨体が地面を踏みしめる轟音と共に周囲に揺れが発生する。

立ち上る砂埃とガタガタと揺れる地面。だが、今のカティアにとってそんなことはどうでもよかった。元より揺れも風圧の影響も受けていないのもあるが、なによりも己のすぐ目の前に存在する、"それ"を見て目が離せなくなってしまったのだから。

それはシルエットだけ見れば巨大な鳥のような姿をしていた、が、その姿は現実の鳥とは全くと言っていいほどにかけ離れた、あまりにも恐ろしく、おぞましい姿であった。

全身には羽毛がなく、滑りのある赤黒い表皮で覆われており、翼はまるで蝙蝠のような皮膜が貼られている。翼に備わっている指と後



ろ足には長く鋭い爪が生えており、触れただけでどんなものでも切り裂いてしまいそうな威圧感を醸し出している。

そして、その頭部、まるで矢印のような形状をした頭部には本来鳥に備わっているはずのくちばしは無く、代わりに耳まで裂けた巨大な口には本来鳥類には無いはずのサメのような牙がずらりと並んでいる。

その姿はまるで伝承や絵物語に出てくるワイバーン、あるいは有翼の悪魔の如きであり、カティアは眼前の化け物の姿に声も出ずに硬直するしかなかった。

化け物は地面に降り立つと、地面に転がる人間の死体へと目を落とすと、一度ベロリと舌なめずりをした後に勢いよく喰らい付いた。

『……………!?!?』

文字通り人間の死骸を喰らう化け物の姿にカティアは思わず口を抑える。幸いというべきか化け物にはカティアの姿が見えていないようであり、精々距離にして3メートル程度しか離れていないにも拘らず全く気付いた様子もなく人間の死骸を貪り食っている。

ゴリツ、グチャツと肉を喰らい、骨を噛み砕く音がカティアの耳へと入って来る。かつて人であった者の血肉を啜り、満悦の唸り声を上げる化け物の姿が網膜に侵入してくる。

カティアとて衛士、BETAに喰われた人間の死骸、兵士達がBETAに為すすべなく殺されていく姿は既に何度も目撃している。が、こんな真近で、人間が化け物に喰われていく様を見たことなど一度たりとてなかった。

眼前の凄惨な場面にガタガタと身体を震わせるカティア、だが、この程度はまだ序の口であるという事を、次の瞬間思い知る事となった。

『ギャア！ギャアアアアアア!!』

『ギユオオ!!ギユアアア!!』

『……………え?』

突如として頭上から響く目の前の化け物と同じ鳴き声に、カティアは恐る恐る頭上を見上げ、そして愕然とした。そこに居たのは目の前

で人間を食う化け物と同じモノ、それが一頭どころではない、二頭、三頭と次々と空に広がる黒雲から地上に向かって降りてくるのだ。見ると化け物たちは此処だけでは無い、この燃え上がる街全域に次々と降りてきているのだ。その数はもはや10頭20頭等というレベルでは無い。

その瞬間、カティアは気がついた。あの黒い雲のようなものはあの化け物たちが群れをなして密集しているものであると。気付くと同時にカティアの全身に震えが走る。

あれはもはや何万何十万とも言える膨大な数、いや、もはや数える事すら不可能なレベルであろう。目の前の化け物と同じモノが何万羽も居る……、もはや街一つ喰い尽してもまだ足りない規模であろう。

そしてカティアは確信する、この街の惨状はあの化け物の群れが作り出したものだ。街を破壊し、人を喰らい、地上を火の海へと変貌させる……、まさにこの世の終わりとも言える光景にカティアはただただ戦慄する以外になかった。

空に響き渡る甲高い化け物の鳴き声、もはや街に生きている人間など一人も残ってはいないであろう。ただ一人残されているのは夢の住人である己と、空を舞い、地上の屍を食うこの化け物たちだけである。

もはや見ていられないとカティアは瞳を閉じて耳を塞ぐ。こうなったらこのまま何も見ず、聞かずに夢がさめるまでやり過ぎしかない。仮にも東ドイツ最強の戦術機部隊の衛士にあらざる行動ではあるが、眼前に居るのはBETAとは異なる全く未知の怪物、故にカティアの心の奥底に眠る恐怖心が無意識にその行動をとらせてしまったのである。

そして、カティアの目が覚めるその時まで、文字通りの悪夢は続く……そう思われた。

だが次の瞬間、まるで化け物たちの喧騒を引き裂くかの如く、突如空から爆弾が炸裂したかのような轟音が響き渡った。突然の事にカティアは弾かれるように上空を見上げる。見ると先程まで食事して

いた化け物も何事かと言わんばかりに空を見上げていた。空が燃えている。否、厳密には次々と連鎖的に爆発を起こしている。

化け物の群れである黒い雲が次々と爆ぜ、炎上し、大地へと墜落していく。

炎を纏い、炎上しながら大地に落ちる化け物の肉片。遠目から見ればそれは炎の雨のような恐ろしくも幻想的な光景であっただろう。だがその真下に居るカティアはそんな事を気にしている余裕はない。

『グギヤアアアア!』

カティアのすぐそばにいた化け物はすぐさま飛んで逃げようとしたが、その前に振ってきた同じ化け物の燃える死骸に押しつぶされる。生々しく響く肉が押し潰される音と断末魔の悲鳴、反射的に飛びあがったカティアはそそくさとその場から離脱する。

『な、な、な、何なんですかこれ!? 一体何がどうなって……』

半泣きで燃える路地を駆けるカティア、だがふと何気なく空へと視線を向けた瞬間、空を見上げたまま身体を硬直させる事となった。

赤と黒の二色に分かれた空、そこに翼のようなものを広げた巨大な何かが飛行している。

その巨大な何かはぐんぐんと地上めがけて降下していき、やがて……。

『ズウウウウウウウウウウ……!!』

巨大な地響きとともに地面へと落下した。同時に周囲には巨大な揺れが発生し、同時に倒壊寸前だった建物が轟音を立てて崩れていく。

その中でカティアが立っていられたのは単に夢の中であつたから。もしこれが現実だったならば激しい揺れの中で立つことすらままならないであろう。

激しく揺れる大地と、立ち上がる土埃、その合間から彼女はそこに降りてきたモノの正体を目撃した。

まるで長い年月を経た大木の如く太い脚、堅牢な岩盤の如く頑健で硬質な甲羅、そして……。

『グルアアアアアアアオオオオオオオオオオオオンンンン!!』  
空に轟く猛々しい咆哮、それはあの時、ミンスクの地において自分達の窮地を救ったあの、巨大な怪獣のものであった……。

「……あれ?」

ふと眼を覚ましたカティア、そこはワルシヤワに存在する国家人民軍用に宛がわれた宿泊施設、そこにある自分専用の部屋のベッドの上であった。

燃える街並みも、転がる人間の死体も、そして空を舞う巨大な化物の群れもそこには存在しない、夜の暗がりには覆われた静かな部屋のままであった。

「なんで、あんな夢……」

やはり夢であったという事に安堵すると同時に何故あんなにも鮮明な夢を見てしまったのか分からずに首を傾げるカティア、その指は無意識に首に下げられたペンダントに触れた、のだが……。

「……?熱い?どうしたんだろう……」

どういうわけかペンダントの石から熱を感じた。まるで石そのものから熱を発しているかのような……。

「気のせい、ですよね」

が、カティアはさほど気にも留めなかった。大方自分と布団の温度で暖かくなっていただけなのだろうと考えなおし、再びベッドへと潜り込んだ。

だが、あの夢の光景は未だにまぶたに焼き付いており、目を閉じても眠る事は出来なかった。

ベアトリクスSIDE

東ドイツと西ドイツの国境付近、深い針葉樹林の森林地帯に覆い隠されたそこに国家保安省所属の国境警備隊専用基地は存在している。

この基地の存在については公には伏せられており、国内外に出回っている地図にも載せられているものは殆どない。無論理由は亡命者

に場所を知られない為であり、何も知らずにこの国境を越えようとする亡命者を捉える為の罠でもある。

それ故に基地は発見されにくい針葉樹林内に建設されている。周囲にはカムフラージュ用の樹木があちらこちらに設置され、さらに森林には見えないところに監視カメラや罠が設置されている。無論発見されたのならばすぐさま基地から職員が出て、亡命者を捕縛、あるいは射殺するのは言うまでもないだろう。

16番基地はその一つ、本来ならば同じ国家保安省職員以外誰もその所在を知らないであろう文字通りの秘密基地、万に一つも見つかる事のない場所、のはずであった……。

その基地が無残にも破壊されていた。窓は割れ、天井のアンテナは破壊され、コンクリート製の建物の壁にはぽっかりと大穴が開けられている。

そして基地に常駐していた職員は……、一人残らず殺され、物言わぬ肉片と化していた。

その殺戮は徹底しており、飼育されている軍用犬にまで及んでいる。首が無いもの、上半身丸々喪失しているもの、あるいはその逆に下半身が挟られているかのように無くなっている者もあり、中には腕のみ、足のみしか残されていない遺体も多い。

その惨劇の舞台であるそこへと、ベアトリクス率いる調査班は来訪した。ジープを降りるなり眼前に飛び込んでくる惨状に、さしもの泣く子も黙る国家保安省の人間、その中でも幾多の汚れ仕事を経験してきたベアトリクスでさえも表情を歪めざるを得ない。

何の計画性もない、隠蔽する気などまるでないと言わんばかりの虐殺の現場に、彼女の部下達は凍りつき、ある者は地面に膝まづいて嘔吐してしまっている。が、ベアトリクスはすぐさま表情を引き締める。現場に足を踏み入れ、遺体と破壊された建物、物品の検分を開始する。部下達も上司が仕事をしている以上動かないわけにもいかず、しぶしぶと言わんばかりに現場の調査を開始した。

そのまま現場の写真を撮影、どうにか原形をとどめている遺体の収容等を行う事約10分、ベアトリクスが突然声を上げて副官を呼ぶ。

何事かと作業の手を止めて歩いていくと、ベアトリクスは地面にしゃがみ込んで遺体の腕をジツと眺めている。肘の半ばあたりから千切れて血塗れの腕、既に血は固まっているとはいえ見ていて気持ちのいいものではない。

「…同志少佐、何か……」

「ちよつと見なさい、これを」

ベアトリクスが指で指し示す場所に視線を向けると、腕には何かが突き刺さったかのような傷跡が深々と刻まれている。それも一つだけでなく連続して幾つも存在している

「これは……何かで刺した、痕、でしょうか……」

「よく見なさい。これ、何かに噛みつかれた歯型に見えない？」

ベアトリクスの言葉に副官は改めて遺体についた傷跡を観察する。確かに、この傷跡はよくよく見れば動物に噛みつかれた噛み傷のものとよく似てはいる。人間が刃物などで傷つけるにしてはあまりにも不自然すぎる傷ではあるが、噛み痕だとするのならば合点がいく。

副官の反応にベアトリクスは険しい表情のままに頷いた。

「……やっぱり私の予測は正しかったわ。此処の遺体は全部殺されたんじゃない、何かに襲われて喰われたのよ」

「く、喰われた!?……い、いえ、確かにその可能性は無きにしも非ずですが、では少佐は今回の事件の犯人は人間ではないと？」

「人間にしては不自然、というよりありえない点しか存在しなかったわ。そもそも仮に遺恨による犯行であったとしても此処まで必要以上に遺体を損壊して、逃げられるという時点でおかしい。第一偽装工作をするにしてももつとまともな上手い手段を使うはずよ。」

これは何らかの人外による、そう、例えば猛獣か、あるいはBETAによる食害行為と見る方が自然よ？」

BETAの名前に副官は背筋が凍る思いがした。確かにBETAならば種類にもよるが基地を破壊してこれだけの人間を殺害する事も造作もないだろう。だが、今現在国内にBETAが侵入した、あるいはBETAらしき存在を目撃したなどという報告は届いていない。そもそもBETAは既に第二次パレオロゴス作戦に置いてミンスク

ハイヴ諸共殲滅されているはずである。

また、仮に猛獣だとしても東ドイツはおろかヨーロッパにこれほどの数の武装した人間を食い殺せる猛獣が生息しているとは考えられない。それ以前にたとえトラやライオンといった猛獣がいたとしても人間のみならまだしも此処まで基地を破壊する事が出来る筈がない。

「で、ですがBETAは既にミンスクで殲滅されたはず、此処には存在するはずがありません!!仮に猛獣であったとしても基地を此処まで損壊させるほどの力を持つ獣など…」

「そうね、それは私も気になっているところよ」

副官の言葉に領きながらベアトリクスは破壊された基地の、正確には切断された壁の巨大な破片へと歩いていく。基地の天井部のものであり、まるで元からそういう形状であったかのような錯覚さえも抱かせる。それを撫でながらベアトリクスは険しい顔を崩さない。

「見なさいなこの切断面。仮にもコンクリートを此処まで滑らかに切断するなんて猛獣どころか人間の加工技術でも出来るかどうか……。これは絶対にただの獣害事件じゃない。もしかしたらBETAすらも上回るかもしれない脅威だと考えてもいいいわね……」

尊敬すべき上司の言葉に副官は黙っている事しかできない。

その後の調査は何事もなく進み、ある程度の遺体の回収と現地の調査も終わり、調査班の人間達は本部帰還のための片付けに入ろうとしていた。が、ベアトリクスは逆に、車両から次々と資材を下ろしており、どう見ても帰還する準備をしているとは思えない。妙な行動を取る上司に部下達も首をかしげざるを得ない。

「……あの、少佐……」

「何をしているの？遺体と現場の撮影、本部への報告が終わったのなら野営の準備をするわよ？」

「は？野営？少佐、一体何を……」

部下の困惑の言葉にベアトリクスは一度手を止めるとそちらへと振り向く。その顔には何を言ってるんだこいつらは、とでも言いたげ

な表情が浮かんでいる。

「決まってるでしょう？ 張り込むのよ、此処に」



## 第12話 A l p t r a u m 悪夢

『……て、……けて……』

『お……い、だ……か』

「……え？」

“彼女”は不意に目を覚ました。そこは辺り一面黒く塗りつぶされた空間、何も見えない、光らしきものは何もない。だが、不思議な事に自分の姿だけははっきりと見えている。手、足、身体、全てが日光の下にいるかのようにはっきりと目視出来ている。だというのに周囲はまるでインクをぶちまけたかのような漆黒の空間。

何も見えない、だが何故だろうか、微かな声が、誰かが呼んでいるかのような声が聞こえてくる。それはこの黒い世界の奥の奥から……。

「……」

意を決して“彼女”は暗闇の奥へと足を踏み出す。一寸先も見通せない中、聞こえてくる声に従って奥へ奥へと進んでいく。一步一步進んでいくたびに、声はだんだんと大きく、そしてよりはっきりとしたものとなっていく。

『たすけて……、たすけて……』

『お願い……、誰か……』

微かに此方に聞こえる声、それは声の質から女性、それも助けを求めめる声である事が分かった。何故かその声に胸騒ぎを覚えた。“彼女”は暗闇の中をゆっくりゆっくりと歩いていく。

歩いてても歩いてても暗闇しか存在しない世界の中、ふと真っ黒な世界以外の“何か”を見つけた。黒一色の世界で光などないはずなのに、何故かそれははっきりと見えた。そう、まるで自分の身体と同じように……。

そして何より……先程から聞こえてくる声の元は地面に転がっている“それ”から聞こえるようであったのだ。

「……!!」

意を決して「彼女」は早歩きでそれへと向かっていく。なんにせよこの声の正体を確かめるのが先だ。此処が何処だか分からない以上何か手掛かりを得るためにも先に進む以外にない。一步一步、「彼女」は地面に転がるそれへと近づいていく。

そして、地面に転がる「それ」のすぐ近くに辿り着くと……。

「ヒッ!？」

「彼女」は表情を引き攣らせて思わず悲鳴を上げてしまう。それも当然、何故なら地面に転がっていたのは一人の女性の首と胴体であつたのだ。首は胴体から切り離されて切断部からは真っ赤な血がまるで沸き水のように次々と噴き出している。

だが、その首は眼を見開き、口をパクパクと動かしながら「彼女」をジツと凝視している。あり得ない、生きていられるはずがない。首を切られて生きられる人間などいるはずがない。

だが、それ以上に「彼女」が驚愕した事、それはその生首の顔が己の知っているものの顔であつた事だつた。

「カー、ヤ……」

『シル、ヴィ……、いたい、いた、いよ……、たすけて……たすけて……』

目の前の光景にただ身体を震わせる「彼女」に、生首は涙を流しながら、此方に向かつて哀願してくる。か細い声で此方に訴えてくる生首に、「彼女」は怯えながら一步一步後ずさっていく。が、突如として背中が何か壁のようなものにぶつかり、それ以上背後に下がれなくなる。

「彼女」は上へと顔を持ち上げる。恐る恐るといった感じて己の頭の上を見上げた、見上げてしまった。

「ヒイツ!？」

瞬間「彼女」は両目を見開き地べたに尻もちをついた。身体をガタガタと震わせながら上を見上げ、涙をボロボロとこぼし始める。

何かがいる、己の目の前に何かがいる。暗い影に包まれてその全貌は全く分からない。

だが、その影が何かを口にくわえているのは分かる。口からは赤い



に煽るシルヴィア。思い返すのは先程まで見ていたあの悪夢の事。

実を言うならばあの悪夢を見たのはこれが初めてではない。そう、今から四年前、あの事件以来似たような夢を何度も見ていた。

だが、最近ではぱったりとそれらを見なくなっていた。原因はやはりミンスクでのBETAとの殺し合いであろうか。一瞬でも気が抜けない戦場、津波の如く襲い来るBETAとの死闘、それは肉体だけではなく精神、心にも多大な負担と疲労を強いるものであり、たとえベテラン級の衛士であったとしてもベッドに倒れ込むと同時に瞬時に爆睡してしまう。

それはシルヴィアもまた同じであり、連日続くBETAとの戦いで、悪夢すらも見る余裕がないほど精神は擦り減らされていたのだ。逆にいえばBETAとの生きるか死ぬかの戦争のお陰で悪夢を見ずに済んだ、とも言えるのだが……。

それでもBETAとの戦闘が終わってここ数日は夢すらも見る事がなかった。それが今日また見るようになったのは……。

「……あの異動の件、かしらね……」

とつぎに脳裏に浮かぶ一つの可能性にシルヴィアは皮肉気な笑みを浮かべる。流石にあり得ない、馬鹿馬鹿しいと内心呟きながら。

だが、その笑顔もすぐ消えて元の能面のような無表情へと戻る。シルヴィアはふと壁に掛けられた写真の入った小さな額へと手を伸ばす。その写真に写っているのは三人のまだ少女といってもいい笑顔を浮かべた女性達、その中にいる照れ顔で、されど楽しそうな笑顔を浮かべる銀髪の少女……。

「……………」

あの頃から随分自分も変わり果てたものだ、と内心思いながら彼女は写真の中の少女を、正確には銀髪の少女、5年前のシルヴィア以外の二人の少女の顔をジッと見つめる。

「イレナ、カーヤ、待っていて……」

必ず約束は果たして見せるから……。

額を握りつぶさんばかりに強く握りしめながら、シルヴィアは心の中でそう誓った。

## 国家保安省 S I D E

西ドイツ国境付近に存在する国家保安省所属の監視基地のひとつ、否、もはや跡地というべきであろうか。何者かの襲撃によって廃墟同然となったそこから10メートルほど離れた地点に、ベアトリクス達は野営の準備をしていた。無論、今回の事件の「犯人」を捉える為である。

野営地を設置した頃には既に日は傾き、同時に気温も段々と下がり冷たい風が流れ始めている。

寒々しい大気の中で、ベアトリクスは身体を僅かに震わせながら白い息を吐きだす。

未だに犯人が何者なのか、犯行の動機が何なのか、そもそも犯人とは言うものの人間の手による犯行なのかはベアトリクスにも分からない。

こうして犯行現場に貼りこんではいるものの、此処に再び犯人が現れるかは全くもって分からないのだ。精々本部の一室に引きこもっているよりかはマシ程度の事であり、下手をすれば無駄足に終わる可能性もある。

それでも、僅かでもかまわないからこの事件の手がかりを掴まなければならぬ、ベアトリクスの中にはそんな思いがあった。何故かはわからない、だがこの基地に来てからというものにとつともない胸騒ぎがベアトリクスの心に沸き起こっていたのだ。

それは長年国家保安省に置いて汚れ仕事を請け負ってきたが故の勘か、あるいは単なる気のせいか、それは彼女自身も分からない。分からないが……それを差し引いても仕事である以上やらざるをえない。

### 「同志少佐」

己の背後から一緒に連れてきた部下の声が聞こえてきたのでそちらへと視線を向ける。そこには基地に設置させた監視カメラ等の映像の分析を命じておいた己の部下が此方に敬礼しながら立っている。

「基地内監視カメラの映像分析ですが、一部破損が見られるものもあつてまだ時間がかかりそうです。ですが、どうやら何かに襲われたという事は確かなようです」

「何か、ね……。その何かというのは一体何なのかしら？」

「そ、それは……。その……」

ベアトリクスから逆に問われて言葉に詰まる部下、だが、それは返答する答えが無いというよりもどう返答したらいいのか分からないといった風情であつた。ベアトリクスはそんな部下の真意に気付いて眉をひそめる。

「どうしたの？ 言いたい事があるのなら言いなさいな」

「は……。音声越しに、はつきりとは聞こえなかったのですが……『鳥』という声が最後に入っていました……」

「鳥？ 鳥つて言うとおの空を飛ぶ……」

「その鳥で間違いないかと」

部下の言葉にベアトリクスは顎に手を当てて考える。

現在確認されているBETAには鳥の姿をしたBETAは確認されていない。そもそもBETAに飛行可能な能力を持つものは現状存在しないのだ。万が一そんなものが出てこようものならそれこそ現在の防衛政策を一から練り直さなくてはならなくなる。

ならば普通の鳥か、とも考えたがそれもすぐさま否定される。この東ドイツに生息している鳥類に、どうかこの世界に現在存在しているであろう鳥類に人間を好き好んで襲うような代物は存在しない。死肉を貪るようなものはいるだろうが生きている人間を餌と見做して襲いかかるものは皆無といつてもいいだろう。

ならばこの言葉の意味は？ ただの妄想か、あるいは虚言か。いずれにせよ情報が足りなさすぎる。

「……ならそれに関しては本部に帰るまでお預けといったところかしら」

「そうなります、ね」

返事を返した部下はベアトリクスのすぐ後ろから、同じく廃墟同然の基地を見上げる。

壁には大きく穴が開けられ、窓ガラスも無残に割れている。内部から火の手が上がったことを裏付けるかのように壁面は焦げて黒く染まっている。

「……にしてもまあ、派手にぶっ壊してくれたものねえ……」

「はい、これだけの規模の破壊、人的被害共に単独犯とは考えられません。間違いなく複数犯、それも相当な武装をした組織的犯罪に違いないと……」

「人間じゃないかもしれないわよ？ 犯人は」

言葉を遮るように放たれたベアトリクス of の台詞に部下も思わず閉口する。その声色と此方に向けた表情には、欠片も冗談は込められておらず、あくまで真剣であった。

「……人間じゃないと言いましても……、此処までの大破壊を行える生物は東ドイツを含めてヨーロッパには生息していませんし、可能性のあるBETAもまた此処まで進出してきてはいません。それこそ幽霊や化け物でもない……」

「ありえるわよ？ 私達は職業柄人に恨みを幾つ買っているか分かったものじゃあないし、仮に怨霊がいたとすれば私なんてどれだけとり憑かれている事やら……。案外犯人は幽霊だったりするかもしれないわよ？」

「やめてくださいよ少佐……、冗談が過ぎます」

ベアトリクスの放つ皮肉に部下は寒気を覚えたかのように身体を震わせる。そんな彼女の姿にベアトリクスは薄い笑みを浮かべる。

幽霊など単なる冗談に過ぎない、もしそんなものがあるならばベアトリクスなど何千回呪い殺されているか知れたものではない。最も呪われようが何をされようが己のしてきたことを悔いるつもりはベアトリクスには無いのだが……。

「……犯人は、現れるでしょうか？」

「さあ？ 下手をすれば骨折り損のくたびれ儲けかもしれないわよ？ まあ部屋に引きこもって上層部からの叱責を受けるよりはマシだとは思うけど？」

「……確かに」

ベアトリクスという言葉に部下は肩を竦める。

今回の事件に関して是国家保安省の上層部も相当に慌ただしくなっている。何しろ東ドイツの治安維持の要、それも東ドイツと西ドイツとの国境を警備している国家保安省の職員が軒並み殺されているのだ。東ドイツには国家保安省以外にも警察機構は存在するが、身内で起きた事件の解決と犯人の捕縛を他の部署の人間にやられたとあっては評判と面子を重んじる国家保安省にとっては沽券にかかわる。だからこそなんとしてでも自分達の手で事件を解決しようと躍りになっているのだ。

正直ベアトリクスから見れば下らない見栄の張り合いとしか思えず、心の内では馬鹿馬鹿しいと失笑している。決して口には出したりはしないが。

「……そろそろ冷えてきたわね、テントに戻るわよ」

「はい、了解しました……」

日も段々と沈み、いい加減に寒さも増してきたためにベアトリクスは部下に呼び掛けてテントに戻ろうとする。上官の命に従い部下も一緒にテントへと向かおうとした。……が、その時……。

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

突如として周囲にまるで金属同士を擦り合わせるかのような音が響き渡る。何の前触れもなく鳴り響くその奇怪な音に部下はびくりと体を震わせながら静止し、ベアトリクスは聞いた次の瞬間に腰のホルスターから拳銃を抜き放ち、周囲を警戒する。

その音はどこことなく生物の鳴き声のようにも思えた、だが、こんな音質の鳴き声を上げる生き物等二人は知らない。二人は辺りを警戒して視線を巡らせる。

と、テントの設置してある場所から同行してきた国家保安省職員二名が此方に向けて走って来る。あの鳴き声とも何ともつかぬ絶叫を此方も聞いたのだろう。

「しよ、少佐！先程の音は一体……!!」

「分からない……周囲の警戒を!!何かがおかし……!!?」

瞬間、猛烈な突風が吹き荒れて反射的にベアトリクスは腕で顔を覆



う、が、その時彼女は確かに、ほんの一瞬だが目撃した。

己の頭上を悠々と飛行していく巨大な影、翼長3メートルはあるであろう巨大な翼をはばたかせ、彼方へと飛び去っていく鳥のような姿をした何かを……。

その「何か」はベアトリクス達に気がついた様子もなくそのまま何処かへと飛び去っていく、そしてあまりにも予想外な出来事にさしものベアトリクスも硬直して暫く動けずにいた。

が、直ぐに我に返ると直ぐに周囲に集まっていた部下達へと号令を飛ばす。

「……!!総員、直ちに準備しろ!!私はあるの正体不明の影を追跡する!!」

「……………!?は、ハッ!!」

ベアトリクスと同じく呆けていた部下は彼女の怒号に一瞬で我に返り、急いで車へと向かって装備を整える。それを待つ間もなくベアトリクスは空を飛び去って行った影を追って鬱蒼と広がる森林の中へと飛び込んでいく。

ベアトリクス達の搭乗してきた黒塗りの軍用ジープは、平地での追跡には向いているものものこうも木々の密集している森林地帯では思うように速度を出す事が出来ない。さらに車の場合エンジン音などで標的に気付かれる可能性とてあり得る。故に速度が遅くなるとはいえベアトリクス達は徒歩で移動する以外にはない。

ジープに積まれていたライフル、閃光弾等の武器を手にした国家保安省職員達は急いでベアトリクスの後を追って走り始めた。

既に空にはあの巨大な翼を広げた何かの姿は何処にもない。一足先に追跡しているベアトリクスの後姿を焦りながら探索する職員達。もしも上官を先行させた揚句に見失ったなどという事になろうものならば減棒や始末書どころの騒ぎでは無い。下手をすれば不要と判断されて国家保安省から叩きだされるか、あるいは適当な罪をかぶせられて銃殺か……、国家保安省は無能と見做した者は同志であったとしても容赦しないのだ。

幸いベアトリクスの姿は直ぐに発見できた。木々の間から見える



鳴き声、何らかの動物の吼え叫ぶ声であった。その怪現象にベアトリクス表情は強張り、彼女の周囲の兵士達もギョツとした表情で悲鳴と鳴き声の聞こえた方向へと視線を向けた。

もはや疑いようはない、先程の影も鳴き声も幻覚や幻聴では無い。それだけではない、奴は、奴は間違いない、人を襲っている。

「……いくぞ!!もたもたするな!!」

「二りよ、了解!!」

脱兎のごとく駆けだすベアトリクスに続いて部下達も急いで走りだす。

先程絶叫の聞こえた方角へと雪を踏みしめて走るベアトリクス。だが、一歩一歩と近づくとつれ、まるで錆びた鉄のような匂いが鼻孔に漂ってくる。

ベアトリクスは頬を歪める。この匂いは幾度となく嗅いだ。戦場で、拷問で、尋問で。

間違はなく血の匂い、それも、ベアトリクスの想像が正しければ……。

やがて、森の中を走っていた彼女達は、開けた広場へと到着する。が、その瞬間彼女達の足が止まった。まるで彼女達自身の身体が凍りついてしまったかのように動かない、いや、動けなかったのだ、眼前の光景を見たあまりの衝撃に……。

雪が降り積もり白銀にきらめく広場、だが、その中央の部分はまるで赤い万階の花々が咲き誇っているかのように深紅に染まっている。その中央には地面に横たわる人影とそれに押し掛かるように覆いかぶさる「ナニカ」が居た。

それは、シルエツトだけで観るならばまるで鳥のような形態をしている。だが、それ以外は現実に存在するありとあらゆる鳥とは全く持つて似ても似つかない姿をしていた。

まず全身に羽毛がない。血が冷えて固まったかのような赤黒い表皮が全身を覆っており、翼の形状に進化した前脚にはまるで蝙蝠の翼のような皮膜で巨大な翼が形成されている。

その頭部もまた完全に鳥とはかけ離れている、頭頂部は平べったい

矢印のような形状をしており、鳥ならば本来保有するはずのくちばしがない。代りに耳まで大きく裂けた口にはまるでサメのように鋭い牙が隙間なく備わっている。

その姿はまるで伝承に出てくるワイバーン、あるいは悪魔といったもいとおぞましい姿であった。

そいつは地面に転がっている人間を後ろ足で押さえつけながら、その大きく裂けた顎を開いて人間の腕へと齧り付き、力任せに引きちぎった、その瞬間、死体だと思っていたそれが僅かに呻き声をあげた。どうやらまだ息があつたようである。が、それもあと数分、いやこれほどの出血量ではあと数秒も持たないだろう。

化け物は喰いちぎった腕を口内に放り込み、まるで味わうかのように咀嚼する。バキツ、グチャツ、と肉を食み、骨を噛み砕く音が辺りへと木霊する。

木陰に隠れ、その「食事」の光景を凝視するベアトリクス達、「それ」は木陰に隠れる彼女達に気がついていないのか、あるいは目の前のごちそうに夢中になっているのか一心不乱に哀れな犠牲者へと喰らい付いていく。

「しよ、少佐……、あ、あの制服、は……」

「……我慢なさい。あれじゃあもうどの道助からないわ。もし気付かれたら次は私達よ」

後ろから聞こえる部下の震える声をベアトリクスはそう言つて切り捨てる。

ベアトリクスとて気が付いている、あの服装はまぎれもなく自分達の同志である国家保安省専用のもの、それもこの国境警備を任されている職員に支給されているものだ。

とはいえもう救出するには遅すぎる。かろうじて息はあるのだろうがもう助からない。精々その苦しみが早く終わる事を祈る事しかできない。

「……少佐、あれは一体……」

「……知るわけ無いでしょう？見てくれは鳥、というより翼竜のプラノドンかしらね、それによく似てはいるけど……。どうやらあれ

が今回の事件の“犯人”で間違いないようね……」

「BETA、でしょうか……」

「それも分からない。BETAかもしれないし別の何かかもしれない。いずれにしろ人を喰う以上我々にとって益をもたらす存在でない事は確かよ」

目の前の光景に怯える部下に対してベアトリクスは冷静に返答する。最も冷静なのは外面のみ、内面はこれ以上ないほどに緊張しきっていた。

視線はかつての同志だったものを貪り食う化け物から一瞬たりとも離さず、両手に抱えられたライフルの引き金には人差し指がかけられている。額からは冷や汗が流れ落ち、心臓の鼓動も早鐘を打っている。

もしも万が一見つかるものならば次は確実に自分達が餌食となる。化け物の大きさは2m近く、そして何より空を飛べる。己の今所持っている武器はこのアサルトライフルと拳銃、ナイフ程度しかない。対人戦ならばともかくとして猛獣、それも人を喰らう未知の生物相手にはかなり心もとないともいえるだろう。

「……カトリクス、直ちに車まで戻って本部に連絡を。これは此処にいる人間だけじゃあ手に負えないわ」

「少佐は、少佐はどうなされるのです？」

「此処であれを見張る。心配しなくてもあと二人いるのだから問題ない。急ぎなさい！」

「は、はっ！」

ベアトリクスの命を受けて彼女の副官は急いでその場から立ち去ろうとしたが、唐突に彼女の身体は硬直した。その視線はあの化け物の方を向いており、表情は恐怖で歪んでいる。己の部下の異変にベアトリクスは訝しげな表情を浮かべながら視線を食事をする化け物へと戻した。

「……!!」

瞬間、彼女の表情も凍りついた。何故なら今化け物の餌にされている兵士が此方を向いてまるで助けを求めるかのように手を伸ばして

きているのだ。

両目は飛び出さんばかりに開かれ、口は血反吐を零しながらもパクパクと動き、此方に何かを訴えかけようとしているかのようだ。

助けてほしい、楽にしてほしい、どちらかは分からない。だが、いずれにしろ今この状況ではまずい。

これで方に一つ化け物が自分達に気がつこうものならば今度は自分達が標的になる。あの大きさだ、弾丸の一発や二発では怯むまい。殺傷どころか逆上させて己達にまで犠牲が出かねない。一同に緊張が走る。

が、彼女達の不安は一瞬で消えうせた。何故ならあの化け物が、此方々を向く兵士の頭へと齧り付き、たった一噛みで頭蓋骨ごと噛み砕いてしまったからである。

此方に視線を向けたまま、鮮血、脳漿、骨片を撒き散らしながら碎け散る男の頭部、間近で目撃したその光景に流石のベアトリクスも気色悪そうに眉を顰める。

化け物は気がついた様子はない。ただ目の前のご馳走で腹を満たしながらご満悦の様子である。

安堵の息を吐きだし、されども一瞬の警戒も解かずにベアトリクスは背後の部下に視線を向ける。

「……急ぐぞ、此処でもたもたしていたら私達もあの死体と同じになる。早く本部、あるいは周辺基地から増援を……」

そこまで口にした瞬間、ベアトリクスの背筋に何か薄ら寒いものが、まるで何者かに見られているかのような感覚を覚えた。反射的に背後を向くベアトリクスであったが、振り向いた瞬間、彼女の表情が一瞬で青ざめる。

あの化け物が此方に視線を向けている。血で赤く染まった口を動かし肉を咀嚼しながら、口元から鮮血を滴らせながら此方を凝視している。まるでガラス玉のように無機質で、感情を窺わせない瞳でベアトリクス達へと視線を合わせている。

ベアトリクスは困惑する。何故、何故あいつはこっちを見ている!? 餌に夢中になっただけははずじゃあ……!! 何の前触れもなく化け物が

此方の存在に気がついた事に困惑するベアトリクス、しかし、今はそんな事を気にしている暇はない。

化け物は自分達を眺めながら舌なめずりをしている。その姿にベアトリクスは背筋に怖気が走る。

職業柄幾多の修羅場を潜り抜けているベアトリクスは、相手の殺気、敵意、憎悪というものには慣れ切っている。元より国家保安省というものは他者から憎悪され、嫌悪される職業である。そういうものに慣れなければとてもではないが務まらない。

だが、こいつは違う。この化け物は自分達を敵と見做していない。敵意も、憎悪も感じない。

その血塗られた口がゆつくりと開かれ、化け物の喉から低いうなり声が響いてくる。それは大きく裂けた口も相まって、まるで笑っているかのようなであった。

それは恐らく間違いないだろう。何せ目の前の化け物からすれば、ごちそうを貪り食っていたところにさらに4つも新鮮で美味そうな餌が出てきたのであるから。

そう、奴が抱いているのは殺意では無い、新たな餌を見つけた歓喜、新鮮な肉を腹に詰め込めることが出来る事への狂的な喜びだったのだ。

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「……………!!総員引け!!基地跡にまで後退するぞ!!」

「……………!?で、ですが……………」

「喰われたくなければ言うとおりにしろ!!」

「!?りよ、了解!!」

歓喜の滲む化け物の絶叫、それを聞いた瞬間ベアトリクスの背筋に電流が走る。長年修羅場で生きていた間に磨かれた直観とも言うべきもの、第六感とでも言うべきものが彼女へと告げていた。

こいつは危険だ、急いで逃げるべきだ、と……………。

渋る部下を怒鳴り飛ばして反転して森の奥へと走るベアトリクス。背後から聞こえる息遣いと足音、それだけで部下達が付いてきていると判断して必死に駆ける。そして、そのさらに背後で絶叫と共に何か

が羽ばたくような音と、背中へと押し付けてくるかのような強風を感じる…。

それでも必死に走る。万に一つ足を止めたのならば直ぐにでもあの場開けものの餌食になる事が目に見えている。

眼前の木々が入り組んだ森林、そこならばあの化け物は飛んで此方を追っては来れないはず……。

ベアトリクスは息も絶え絶えに木と木の間を飛び込んだ。部下達もその後には続き……、

『ギャアアアアア!!ギョオオオオオオオオオオ!!ギョアアアアアアアアアア!!』

あの化け物のけたたましい絶叫が聞こえるや否や先程よりも一際強烈な暴風が背中に叩きつけられる。前方によるめき倒れそうになりながら、ベアトリクスは背後を恐る恐る振り返る。

そこにはあの化け物の姿はない。どうやら木に激突する事を避けて上空へと上昇したらしい。この場はどうか逃れられたものの、それでも危機はまだ完全に去っていない事に嘆息せざるを得ない。

「……総員、欠員は無いな。何よりだ」

「ど、同志少佐も……。あの、少佐、これからどうすれば……」

「一旦基地に留めてある車に戻り、付近の基地に連絡を取る。あれを捕獲するにしろ射殺するにしろ数も武器も足りない。……気は進まんがまずは体勢を立て直さない事にはどうしようもない。いいか、移動中は一つに固まって移動する。空を飛んでいる以上奴は何処から襲ってくるか分からん、死にたくなければ離れるなよ!!」

「りよ、りようか……あ、ああああああああ!!」

瞬間、部下の一人が喉も張り裂けんばかりの絶叫を張り上げた。そして、絶叫と共に周囲に突風が吹き荒れる。

もはや確かめるまでもない、ベアトリクス達は己の頭上を見上げた。

そこにはあの化け物が居た。巨大な蝙蝠のような翼を広げ、鋭い爪を広げた前足を構えて此方へと降りてきている。

予期せぬ襲撃にベアトリクス達は咄嗟に動けない。羽ばたきと共に



に発生する暴風が彼女達の身体の自由を奪いとってしまったている。

そしてそれが、新たな犠牲者を生む事となった。

「あ、い、いやあああああああ!!! た、助けて!! 誰か、誰かアアアアア!!!」

「!? ヘルガ!! ヘルガアア!!!」

「ど、同志少佐!!! ヘルガが!! ヘルガが化け物に!!」

「同志中尉……!! クツ!! あの化け物を撃ち落とすぞ!! 急げ!!」

その巨大な爪に掴まれ、部下の一人が空へと連れ去られる。その様にベアトリクスは焦りと驚愕を抑えながら再び空へと舞い上がっていかうとする化け物へとライフルの銃口を向け、即座に発砲する。

だが、化け物は部下を離そうともせず空高くへと上昇していく。狙いが定まっていないのか、化け物の皮膚が弾丸を通していないのかわからないが、ダメージを受けている様子はない。化け物はあざ笑うように鳴きながら空高く舞い上がり飛び去って行った。同時に連れ去られていく女性兵士の泣き叫ぶ声も……。

「……くっ!! 追うぞ!! もう間に合わんかもしれんが……」

「「りよ、了解!!」」

化け物が飛び去っていく方角へ向かって走るベアトリクス達。だが、空を飛ぶ化け物の速度には追いつけない。息を切らしながら追うものの、見る見るうちに距離を離されていく。

追走劇は10分ほど続いただろうか、突如として化け物が降下を始める。それを目撃したベアトリクス達は息も絶え絶えながら全力で走りだす。

如何に鍛えているとはいえ銃器を背負った状態で全力疾走するのは相当に体力を消耗する。それでもどうか体力を振り絞って駆ける。

同じ国家保安省の職員としての情も多少はあるが、彼女は仮にも事件の捜査チームの一人だ、万に一つあの化け物に殺されようものならば上から何を言われ、どう責任を取らされるか分かったものではない。

やがて森を抜け、到着した場所は……。

「……………こは、なんとまあ偶然というべきか……………」

そこは己達が調査の為に来た基地の跡地であった。事実そこにはジープと自分達が組み立てていたテントや機材が放置されている。

運がいいのか悪いのか全く分からない偶然に舌打ちしながらベアトリクスはあの化け物と部下を探して視線を巡らせる。と、突如頭上より……………。

グチャツ、ボリツ……………。

ギヤアツ、ギヤアツ……………!!

「……………え」

頭上から響く音と鳴き声に思わず上を向くベアトリクスと部下達、そして、それを見た瞬間に凍りついた。

基地の屋上、一部崩壊し崩れたそこにあの化け物が居た。それも一羽だけでは無い。

三羽、三羽いる。先程森で発見した化け物とは別の化け物が、先程の化け物と一緒に何かを貪り食っている。

まるで死骸を貪るハイエナのように、屋上にある何か、それを奪い合い、喰いちぎり、果ては虫の脚を引きちぎるがことく足やら腕やらを食いちぎっていく。

……………もう確かめるまでもない、あれは……………。

「ヘル、ガ……………」

「……………」

「そ、んな……………」

部下達は一様にショックを受けた様子である者は口を抑え、ある者は地面へと崩れ落ち、またある者は恐怖で目を見開き身体を震わせている。

無理もない、あの化け物たちが喰っている者は……………まぎれもなく自分達部隊の一人であったのだから……………。

彼女のあまりにも酷い死に様に、国家保安省職員である彼女達は恐怖と旋律を隠せない。

一方のベアトリクスも少なからずショックは受けていた。が、彼女の視線は既に屋上とは別の方向を向いている。

「……笑えないわよ、これは流石に」

ベアトリクスは眉を顰めてギリリと歯を食いしばる。

「……」羽だけじゃあ、無いと思っただけ……」

ベアトリクスは震えながら茫然と呟く。目の前に広がるあまりにもおぞましい悪夢のような光景に……。

沈みゆく赤い夕陽、そのまるで血のように赤く染められた空を……  
空を飛ぶ影が9つ、我が物顔で舞っていたのだから……。

## 第13話 Stasi—国家保安省—

ソビエト社会主義共和国連邦、ハンテイ・マンシ自治管区。かつてその最大の都市であった街、スルグート。

1950年から60年代にかけて石油、天然ガスの油田が発見されて以来都市として発展しつづけていた400年近くの歴史を誇るロシア有数の古都、だがその古より続いた都も既に、BETAの魔の手に落ちて生きるものの存在しない廃墟へと、否、もはや何も存在しない荒涼とした雪原へと変貌していた。

かつて歴史ある建物が立ち並んでいた都市には金属色に輝く巨大建造物、BETAの根城であるハイヴが建立され、その周囲には己達の巢を防御するために数千、数万ものBETAが監視の目を光らせている。空からの爆撃、ミサイルによる制圧を行おうにも光線級、重光線級による対空砲火がそれを許さない。

難攻不落、その一言が相応しいであろう鉄壁の要塞、それこそがBETAの居城たるハイヴなのである。人類の戦力を持ってこの要塞を攻略出来た事は現状皆無、航空機に代わって対BETA用に製造された戦術機をもつてしても、未だにハイヴの深奥にまで到ったケースは存在しない。

人類には現状攻略不能なBETAの巣窟、ハイヴを陥落させる手段を人類が手にするには、今の時代から数えて15年後の未来、アメリカによるG弾開発まで待たなくてはならない。……そして真に人類が勝利を手にする瞬間を目撃するにはそれからあと3年……。

すなわち現状の人類の戦力ではハイヴ一つも攻略する手段は存在しない。世界すら滅ぼせると豪語された核兵器すらも、着弾する前に光線属種に撃ち落とされ、仮に着弾したとしてもBETAの物量の前では焼け石に水でしかない。

出来る事と言えばハイヴから湧き出てくるBETAをこれ以上別の場所へと進出させない為に間引く事くらいなもの、それでも精々が時間稼ぎ程度にしかならず、一つ一つ、確実にハイヴを増加させられ

る結果となっており、人類は終始劣勢の状態であったのだ。  
……そんな鉄壁の城塞が今、落城の時を迎えていた……。

BETAによって均されて、一面凹凸物の存在しない平面と化した大地、本来なら積雪による純白の絨毯が敷き詰められているであろう荒野……。

そこが今、赤く赤く燃えている。純白の雪を蒸発させるほどの炎が、大地一面を隙間なく覆い尽して燃え盛っている。

地上を這い回っていた数万ものBETAは既に何処にもいない。何故ならその全てが炎に焼かれ、遺骸すらも灰となって殆ど残されていない。名残といえるのは原型をとどめぬほどに焼かれ、まるで炭の塊のような有様へとなり果てた死体とすらも言えない残骸のみ。

そこにはもう生命の息吹は存在しない。厳密にはBETAは生物と言える存在ではないのだが、少なくともこの地上で蠢く者は、虫一つとして存在しない。

一体何が起きたのか、ただの天災か、それとも人類の反抗による結果か……。

否、どちらも否である。

この地獄の光景を作り上げたのは地球の荒ぶる天災でも、人類軍による反攻作戦によるものでもない。

その原因はこの地の底、スルグートハイヴの奥深くに潜んでいた。

『グルルルルル……』

そこはスルグートハイヴの最深部、BETAのエネルギー源にして通信装置、そしてハイヴの心臓部とも言うべき反応炉こと頭脳級BETAが配置されているメインホール。だが、そこには既に反応炉は存在しない。

そこは地上部以上に灼熱の炎が燃え盛る、文字通り地獄の釜と化していたのだから……。

反応炉、否、かつて反応炉と呼ばれていたものの残骸は炭のように

黒く崩れ、やがて炎と共に空に舞っていく。

その炎の赤と闇の黒の二色に彩られた空間の中に、巨大な影が屹立している。

全高80メートル以上はあるであろう巨体、背中にはまるで巨大な岩盤か何かのような巨大な甲羅を背負っており、二足歩行である事を除けばそれは亀に酷似している。

無論、それはこの地球上で進化の果てに誕生した生命体では無い。それは地球という星の意思が産み出した地球の守護神、ガメラ。本来の歴史ならばこの地上に、この世界線には存在しないであろう怪獣である。

地球の生態系と地球の生命の守護を目的とするガメラにとって、外宇宙からの侵略者であり地球の自然を破壊しようとするBETAは不倶戴天の敵に他ならない。

この時代に降り立って早5年、大分ブランクは開いてしまったもののそれでもハイヴの殲滅は順調に行えている。第二形態へと進化しより強く、より強固になったこの身には人類にとっては脅威であるBETAの牙も爪もレーザーも掠り傷一つ負わせることはできない。

既に殲滅したハイヴはスルグートを入れて4つ、残りはあと半分、カシユガルに存在するオリジナルハイヴを除けばその他のハイヴの規模の差等精々ドングリの背比べ程度でしかない。

このまま順調にいけば難なく地球上からBETAを一掃する事が出来るだろう。ガメラの目的も容易く達成できるはずだ。

そう、その筈なのだ……。

『……………』

ガメラは勝利の雄たけびを上げることなくハイヴの巨大な縦穴を、正確にはそのはるか上方に存在するであろう空をジッと睨みつける。

それはまるで、此処ではないどこか、そこにいるであろう仇敵を思い返しているかのようであった。

BETAか？否、そんなガメラの手によって容易く葬られている蟲どもでは無い、これはガメラの中にある記憶、この世界に降り立つ前の、かつての世界で戦っていた時の記憶……。

その記憶と本能がガメラへと告げている。『奴がいる』と。

考えられない話では無かった。己と言う存在はこの世界にとつては異物、イレギュラーとも言える存在だ。その己の存在に引きつけられてこの世界にある程度の「歪み」が起きる事は想定できた。

しかしそれでも、ガメラは少なからず楽観視していた。何せ良くも悪くも地球上はBETAによつて蹂躪されている。ならば『奴ら』はまだ産まれる前にBETAの手により潰されているのではないかと、たとえ産まれたとしても光線属種のレーザーによつてまだ小型のころに殲滅されるであろうとも考えていた。

しかし、今BETA戦線はガメラがハイヴを殲滅している結果として大幅に後退している。本来BETAによつて蹂躪されているであろう土地がBETAに蹂躪されることなく無傷で残っている。それはすなわち破壊されるはずの「卵」が残っているという事でもあるのだ。

ガメラは喉の奥で唸り声を上げる。もしも奴らが既に目覚めているのなら、そして既に人間を襲い、成長してその数を増やしているというのなら、放っておくわけにはいかない。

あれはBETAとは違う、この世界の人類の戦術は通じない。現在の人類の主力である戦術機では成長しきつたあれを倒すことは困難と言わざるを得ない。ガメラは己の中にあるかつての戦士としての記憶と知識で分析する。

……いずれにせよまずはハイヴを殲滅する。まだ余力がある以上それを使いハイヴを残り二つ叩き潰す。「奴」を探し出すのはそれからで十分だろう。ガメラはそう結論付けると両腕を翼のように広げ、後ろ足からジェットを噴射してメインホールから飛び立った。

目指す先はカザフスタン州エキバストウズ、そこに建造されているH6エキバストウズハイヴ。その次はカザフスタン州ウラリスクに存在する地球上で第三に建造されたハイヴ、H3ウラリスクハイヴだ。これで一気にオリジナルハイヴへと王手をかける。不安要素の排除はその後だ。

吹き荒ぶ吹雪を切り裂いて飛行するガメラの巨体、向かう先はエキ

バストウズハイヴ。だが、ガメラの目に映っているものはもはやハイヴなどでは無い。

その目に映るのは、その脳裏をよぎるのはかつての敵……。

かつて古代文明が増加した人類を粛清するという狂った思想の下に産み出した凶器の落とし子……。

あらゆる生命体の遺伝子を持ち、ただ一頭いるのみで無限に増え続け、無限に進化をし続ける完全なる生命体……。

この世のありとあらゆる生命を喰らい尽す為に生れてきた文字通りの殺人兵器。

『ギャオス……』

空高く舞いながら、ガメラは心のうちでその名を呟く。

かつての己の仇敵の名を。

この世界に存在するかもしれないBETA以上の脅威となりえるそれを。

1983年3月13日、H7スルグートハイヴ陥落。

その5時間後にはH6エキバストウズハイヴ、それからさらに6時間後には地球第三のハイヴ、H3ウラリスクハイヴが陥落した。

再び地球上に存在するハイヴを3つ陥落させたガメラは、そのまま地中海沖へ向けて飛行し、その後海底へと没して消息を絶った。

残るハイヴはH2マシユハドハイヴと始まりのハイヴ、H1カシユガルオリジナルハイヴ……。

BETAへと事実上の王手とも言うべき状況に辿り着いた人類、最もその立役者は人類ではなく現在海底で眠りにつくガメラであったのだが。

そして今、ガメラは眠り力を蓄える。

来るべき敵との戦いに備えて……。

ベアトリクスSIDE

「……成程、捜査を敢行した結果新たに別の基地スタッフ一人が殉



職、そして捜査員の一人が殉職した、と……」

「……今回の捜査員殉職の責任は私にあります。同志長官、いかなる罰でも受ける覚悟です」

ベルリン、リヒテンブルクに存在する国家保安省本部ビル、それ自体が東ドイツ国民にとつての恐怖の象徴ともいえるその建物の最上階の一室にて、ベアトリクス・ブレーメ少佐は直立不動の姿勢で椅子に腰かけた一人の男と会話を交わしている。

あの基地跡での化け物共との遭遇の後、どうにか残ったメンバーと共にその場を脱出したベアトリクスは、すぐさま近隣の基地に増援の要請の為に向かった。

しかし、結局そこには例の怪物たちの姿は残っておらず、残されていたのは凄惨な事件の現場と無残にも食い散らかされた部下の死体のみであった。

幸いどうにかあの化け物の写真及び画像を監視カメラ等から入手できたベアトリクスは、すぐさま本部へと帰還して画像を解析、己の上官へと提出したのである。

彼女の眼前でベアトリクスの話を聞きながら報告書に目を通す男がベアトリクスのボス、他のシュタージのメンバーとは対照的な純白の軍服を纏いまるで石膏で作られた胸像か何かのように無表情を浮かべるこの男こそが東ドイツを恐怖で統べるシュタージの長、エーリヒ・シュミット上級大将である。

一通りの説明を終えていかなる罰も受けると目を伏せて沈黙するベアトリクスに対して、シュミットは報告書に落としていた視線をベアトリクスへと持ち上げる。

「いや、今回の件に関しては他と比べてもイレギュラーな案件であるという事はこの報告書を見ずとも知っている。彼女の件については残念なことになってしまったがそれに関しては今回は不問としよう。それよりも……」

シュミットは報告書をテーブルに放り投げる。そこにはベアトリクス達が遭遇したあの化け物の姿が映された写真がクリップで挟まれている。遠距離から撮影されたもの、至近距离から撮影されたもの

もどれも全体像をはつきりとらえたものではないが現状これが今回の事件の犯人へとつながる重要は証拠の一つなのは間違いない。

「……この事件の犯人と思しきこの化け物をどうするか、だ。私も長い事この仕事に携わってきたがこんな化け物を見た事がない。同志少佐、君はどう思う？この化け物はBETAの一種なのか、それとも全く別の生物なのか」

「……結論から申し上げるのならば、違うのではないかと。今日に至るまでBETAに飛行能力を持つ種族は存在せず、形状も明らかに今日まで確認できるBETAのどの種族のものとも異なっています。

無論つい最近産まれた新種である可能性も否定できませんがその場合だと今までの戦闘でその姿が確認できていない事の理由が説明できません。

それに何より……あの化け物は人間を喰っていました」

「……それが？」

ベアトリクスは己の部下が捕食されるところを、あるいは基地の兵士が化け物に生きたまま食い荒らされている場面を思い出したのか一瞬表情を歪めた。が、直ぐに表情を元に戻すと説明を続ける。

「BETAは基本的に人間を捕食しません。現状何をエネルギーとしているかは不明ですが過去の戦闘を見る限りBETAは人間を含む地球上の生物を殺傷する事はあっても捕食する事はありませんでした。少なくとも捕食対象と認識していないと考えられます。

ですがあの化け物は違う。あれは間違いなく人間を餌と認識し、捕食していました。ですのであれはBETAでは無い、全く未知の生命体であると考えられます」

ベアトリクスの推理を聞いたシュミットは一度顎に手を当てて考えるような仕草を取る。が、直ぐに納得した様子で再度視線をベアトリクスへと向ける。

「……よく分かった。確かに君の言う事も筋が通っている。実際はより調査しなければ判らんだろうが。

で、それを踏まえたいうえで聞きたいのだが、君はこの化け物……いや、未確認生物と言うべきなのか、これをどうするべきだと考えるの

かね」

「言うまでもありません。早急に絶滅させるべきと考えます」

シュミットの問いが終わるか否かというタイミングでベアトリクスは真顔のままそう返答する。阿吽の呼吸の如きその返答にシュミットも思わず肩を竦める。が、ベアトリクスは構わず捲し立てる。

「知っての通りあの生物による此方の被害は甚大です。既に基地も襲われ多数の人員に犠牲者が出た以上躊躇する理由は有りません。保護の選択肢もあり得ません。既に人間の味を覚えている以上殺処分以外の選択肢は存在しえません。それにより、あの生物は12羽存在します」

ベアトリクスはあの基地での光景を思い出す。沈みゆく太陽の中で、同胞の遺体を無残に貪る三羽の化け物と、夕陽の中を舞う9つの影……。無意識に両手に力がこもる。

「もしもあの12羽の中に番がいたなら、そしてそれが複数いたとするならば、あの化け物共は繁殖している可能性があり得る、今後さらに脅威が増大していく可能性もあり得ます。ですので今のうちに奴らを殲滅するべきです。そのためにも同志長官、どうか戦術機使用の許可を」

「……………」

ベアトリクスの強い言葉に対してシュミットはまるでそう言う事が分かっていたかのように無表情でベアトリクスを観察している。

「あの飛行能力に対抗するには此方も空中での戦闘が可能な兵器を使用せざるをえません。万一の場合戦闘中に空中へと逃げられる可能性も考えられます。さらにその体の大きさから考えても並みの対人用兵器でも傷をつけるのは難しいと考えられます。ですので空中での戦闘も可能かつ十分な火力を持つ戦術機ならばあの怪物を確実に殲滅できます。ですのでどうか……………」

「……………話は分かった。確かに知る限りの情報をまとめるのならば君の言うとおり戦術機を使用した方がこの事件も早く片付くだろう。確かにこの事件はあまり長引かせるわけにもいかない。人的被害もさることながら、碌に成果も出せないまま他の組織、特に国家人民軍

の介入を招くのはこちらとしても望むべきものではないしな」

ベアトリクスのお話を遮るようにシュミットは言葉を紡ぐ。一見すると承諾したかのように聞こえる言葉であったがベアトリクスは厳しい表情を崩さない。事実、次のシュミットの言葉で彼女の要請は事実上却下される事になった。

「が、しかし、これだけの証拠で戦術機使用の許可を出すわけにはいかない。何しろ私の一存によって国家保安省は動くわけではないし、何より戦術機は動かすだけでも金が飛ぶからね」

「……では、さらなる証拠が必要、と？」

「まあそういうことだ。よりはつきりとした映像か写真、あるいは組織サンプル、欲を言うならば生け捕りにした個体か死骸が欲しいところだ。それを此方に持ってきてくれるのならばよりスムーズにいくだろう」

「……………」

何を無茶な、とベアトリクスは心の中で舌打ちする。

ただでさえ巨体なうえに飛行能力まで持つという、通常の歩兵の装備ですらも相手に出来るか怪しい存在を捕獲、あるいは殺傷しろなどと無茶としか言いようがない。

押し黙るベアトリクスにシュミットは機嫌を悪くした様子もなく肩をすくめた。

「君の不満も分かるがね、どうにか承諾してはくれんかね。しつこいだろうが何度も言っているだろう？ 戦術機を動かすのには相応に金がかかる、それに最近上や軍部がうるさい事も君は知っているはずだ。『武装警察軍にもう戦術機は不要だ』とね」

忌々しげに呟くシュミットにベアトリクスも内心同意する。

シュタージが独自に保有する軍隊、第二の国家人民軍とも呼ばれる武装警察軍、それにも当然戦術機部隊が存在する。

亡命する衛士や軍人を捕縛するという名目の元、ソ連から送られてくる最新鋭の装備で固めた精鋭部隊、唯でさえ予算や装備を横取りされているという事から周囲からの不満の多い部隊ではあったが、近頃『武装警察軍の戦術機部隊不要論』という話題が持ちあがってきてい

るのだ。

そもそも第二次パレオロゴス作戦時、戦場は東ドイツ国内では無くベラルーシ州であり、基本国内でしか活動を許されていない武装警察軍には活躍の舞台は無く、そんなものにこれ以上予算を割く必要性はない、寧ろ武装警察軍に積極的に配備されているM i g - 23チボラシユカ等の新型兵器を最前線の国家人民軍に配備するべきであり、武装警察軍はバラライカ程度で十分であるという話まで出ていた。

結局チボラシユカに関しては政治将校に優先配備、他は追々と言う感じでどうにか妥協案を引き出せたものの、そうこうしているうちに例の巨大怪獣の襲撃によってミンスクハイヴは陥落、他のハイヴも軒並み陥落させられてしまった結果、もはや完全に欧州戦線は過去のもの、B E T Aの危機は遠くへと去って行ってしまったのである。

そのため現在東欧諸国では軍備増強をいったん停止してB E T Aから受けた傷を癒す為の復興作業が始まろうとしている。ハイヴというB E T Aの前線基地が壊滅し、B E T Aの脅威が遠のいた現状、軍備整備よりもインフラの復興、国民の生活の安定を取り戻す事が急務なのだ。

無論東欧諸国の大半はB E T Aの侵略による被害、そしてその防衛のための軍事費増大によって国力に余裕がない為B E T Aの被害を受けていないであろう同じワルシャワ条約機構加盟国、すなわちポーランドや東ドイツからの支援を受けることになるであろうが。

当然後々東欧諸国に政治的な意味での影響力を持てるであろうその機会を東ドイツが逃すはずもなく、上層部は支援を承諾、しかし元より東ドイツは元々軍事費捻出のために国民生活を相当切り詰めていたが為に経済的にそこまで余裕があるわけではない。だからこそ今度は無駄な軍事費、あるいはもはや不要と判断された部門の費用を削る為に頭を悩ませる羽目になったのである。

そしてそのやり玉に挙げられたのが武装警察軍である。もはやB E T Aの危機が無くなった以上対B E T A用の戦術機等対人専門の武装警察軍には不要、寧ろ過剰武装であるという意見が東ドイツ国内で次々と沸き上がったのである。それも一般民衆や軍部だけでなく、

党内の上層部からも。

そんな状況下でたかが殺人事件ごときで戦術機を出す等と言う真似をしようものなら予算の無駄遣いだの過剰防衛だのと連中をさらに勢いづかせることになり、流石に解体は無いにしても下手をすれば武装警察軍戦術機部隊は規模縮小と言う憂き目に遭いかねない。

そうなれば自慢のヴェアヴォルフ大隊を此処まで育て上げてきた彼女の苦労も水の泡だ。ならばそう簡単には戦術機は使えない、文字通り奥の手とも言っていないだろう。

しかしそれでもこれ以上犠牲者を出すわけにはいかない。亡命者ならばまだ良いとしても、シユタージの職員及び基地にこれ以上の被害が出すわけにはいかないのだ。

そんな思いも込めて若干厳しい眼光を上司に向けるベアトリクス、一方その眼光を受けとめるシユミットは涼しい表情のままだ。

「まあ戦術機は無理だとしても、戦闘ヘリくらいは用意できるだろう。悪いがそれでどうかしてくれ」

「……了解しました。出来得る限りこれ以上の犠牲者が出ないように国家、そして党の為に尽力いたします」

内心舌打ちをしたいのを我慢しながらベアトリクスはそう呟くとそのままシユミットに一礼して部屋から出て行った。彼女の後姿を眺めながらシユミットは不満げに眉を歪めながら鼻を鳴らす。

「……フン、まあ腹立たしい気持ちは分からなくはないがな。此方としても面倒事を幾つも持ちこまれてそれを処理しなければならんからたまったものでは無いよ。……やれやれ、どうしてこうなったのやら……」

シユミットは机に放られた資料を眺めながら不満げにそうぼやくのだった。

長官室から出たベアトリクスは若干肩を怒らせながら廊下を歩く。

予想できたこととはいえ結局戦術機使用の許可は与えられる事はなかった。戦闘ヘリは用意してくれるようではあるが、それでもどれ

ほど効力があるか……。

（ヘリ以外の兵器は戦車、装甲車……駄目ね、空に逃げられたら元も子もない。やはり戦術機がないとすれば地上に落ちた瞬間に仕留めるしかない、か……）

シユミットからの条件であるが生け捕りに関しては現状困難、肉食かつ飛行できるといふ事以外にあの生物の生態も習性も碌に分かっていないというのに捕獲作戦は難しいと言わざるを得ない。

ならば狙うは殺処分となるのだが、これも言うほど簡単ではない。あの化け物は空を飛行している。地上からの砲撃ではそう簡単に届かないだろうし簡単に避けられてしまうだろう。ヘリに搭載可能な兵器をもつてしても命中させられるかどうかは微妙なところだろう。

ならば方法は一つ、地上に降りている間に仕留めるしかない。しかしどうやって地上に下ろすか……。

戦術機無しという状況でどうやってあの化け物を仕留めるか頭を巡らせるベアトリクス、と……。

「おやおやいかなされました同志少佐？そのように眉を寄せていては折角の美貌が台無しですよ？」

突如背後から聞こえた気障つたらしい声にふいに思考を中断させられる。ベアトリクスは不快そうに眉を顰めると後ろを振り返る。そこにいたのは同じく黒を基調とした国家保安省の制服を纏った、赤毛の何処か俳優染みた容貌の男。最もベアトリクスからすればその甘いマスクが浮かべる笑みも、どこぞの詐欺師が浮かべる胡散臭いものには見ええない。

実際この男の性根は詐欺師同然のものだろう、否、下手をすればそれ以下であろうか。

ハインツ・アクスマン中佐。『褐色の獣』の異名を取る武装警察軍の作戦参謀。武装警察軍編入以前は亡命者狩りで名を鳴らしており、現在でも己の邪魔になる人間やほんの少しでも『隙』を見せた人間を密告して己の手柄としているのもつばらの噂だ。

「これはこれは同志中佐。貴方こそどうしたのです？私に何かご用

でも」

「いやなに、たまたま長官室から出てくる少佐のお姿を拝見したので何かあったのかと思ひましてね。例の事件について何か進展でもあったのかと思ひまして……」

「ええ、まあ進展と言えれば進展でしょうね。喜ばしい事かどうかは分かりませんが」

慇懃無礼な態度で此方を探るような視線を向けてくるアクスマン。そんな彼に対してベアトリクスも薄笑いを浮かべながら応じる。この男ほど信用できない相手はいない。俗にタヌキやらキツネやらと呼ばれる人間がいるのならばこの男ほどその名に相応しいものはないだろう。

本来の歴史ではシュタージはソ連の支配下にあることをよしとする『モスクワ派』とソ連とは袂を分かち東欧諸国との連携を強める事を重視する『ベルリン派』の二つの派閥に分かれて派閥争いが行われていた。ベアトリクスとシュミットはモスクワ派、アクスマンはベルリン派に所属していた。

無論ガメラの手によるハイヴ殲滅によってこれらの派閥は現状シュタージには存在しない。とはいえこの二人の関係は決して良いわけではない。元より隙を見せればいつ背中を刺されるか分からないのがシュタージと言う組織である。密告が流行っているのは何も軍やベルリン市内だけではないのだ。

事実この男はこうして何気ない会話を交わしながらもベアトリクスから何らかの情報を取り取ろうとしているのは間違いない。他人の粗探しは何よりも得意な男、文字通り死肉をあさるハイエナのような性根であることは間違いないだろう。

「……ふむ、左様ですか。よろしければそれを教えていただいても私でよければなんなりと力を貸しますのです」

「生憎と守秘義務がありますので。知りたければ今から同志長官にでも伺ってはいかがでしょうか？全部あの方に話しましたので」

「いえいえまさか！そのような恐れ多いことはできませんよ！」

ベアトリクスの嫌味にアクスマンは芝居がかった仕草で大仰に手



を振る。無論演技である事は丸わかりだが。

例の化け物の件についてはどうせすぐにはれるだろう。今この場で話しても何の支障もない。とはいえ話してやる義理もないのだが。

「しかし、同志少佐もお忙しい事です。此処最近武装警察軍の戦術機部隊の風当たりは激しさを増しているというのにそれでも例の事件調査の仕事をしていらつしやるとは……。感服いたします」

「あらあらこれはお世辞とは言え嬉しいですわ同志中佐。ですが中佐もお忙しい事でしょう？自ら率先して武装警察軍の予算を削り、それを恵まれない国へと寄付しようという慈善事業の先鞭を切っておられるのですから、本当に感涙いたしますわ」

「ハッハッハ！これはこれは一本取られましたなあ！いやいや私のしている事等本当に大したものではありませんよ！」

互いに笑顔で嫌味をぶつけ合うベアトリクスとアクスマン、はたから見れば関わり合いたくないであろう光景である。

何の因果かベアトリクスは武装警察軍に置ける戦術機維持派、アクスマンは戦術機削減派という派閥で対立関係にある。意外かもしれないがシユタージ内部でも戦術機部隊を削減すべきと言う意見が少なからず上がっている。

主に戦車部隊等の戦術機部隊よりも予算、装備での優先度が低い部隊からの声であるがアクスマンもまた現在その派閥に所属して動いている。

もともとアクスマンはどこぞの童話の蝙蝠の如く敵方である戦術機維持派にもコネを持つている為、万一削減派が落ち目となれば何らかの手段を用いて此方に鞍替えしてくるであろうことは見えている。所詮は強い者に寄って生きる寄生虫やら虎の威を借る狐のような男であるが、そんな人間性故に此処までの地位に昇りつめたともいえるだろう。

「それでは私がありますのでこれで」

「ああそうですか、これはお引き留めして申し訳ありませんでした」

「いえいえ、……では」

ベアトリクスは軽く会釈をするとそのままアクスマンと別れて己

の執務室へと向かう。

面倒くさい人間と話して疲れたのかベアトリクスは深々と溜息を吐きだす。

戻ったら部下に茶でも淹れてもらおうかとも考えながら廊下を歩く。どの道こうしてうじうじ悩んだところで解決法も見つかるまい。一度気分をリフレッシュさせた方が効率的だろう。

そうして歩いているうちにいつの間にか己の執務室へと到着した。ベアトリクスが重々しくドアを開くと部屋には数人の己の部下が待っていた。

「同志少佐……！同志長官はなんと？」

すぐさま駆け寄って来るのは己の副官。その後ろに控える部下二人の己の言葉を待っている。皆ベアトリクスの言葉に何らかの期待を持っており、感じである。

そんな彼女達の様子にベアトリクスは若干罪悪感を覚えながらも首を横に振る。

「……戦術機使用は認められない、とのこと。せめて奴の組織サンブルか身体の一部、生け捕りにするか殺傷した死骸を持ってこなければ説得できない、とのことらしいわ」

「なッ……」

ベアトリクスの返答にその場にいた人間すべてが絶句する。事実上戦術機無しで化け物を駆除しろと言われていたようなものであるから当然と言えば当然だろう。ベアトリクスは立ち尽くす部下達の間を通過してデスクに腰を下ろす。

「……一応へりくらはつけてくれるらしいけど、それでも厳しい事に代わりはないわね。かなりきつい大仕事になるわよ」

「しかし……、それでもやり遂げなければなりません。今まで死んでいった同志達の仇を討つためにも、あの化け物は早急に始末せねば……!!」

最初動揺していた副官達も、気合いの入った表情を浮かべている。余程己の同僚を殺された事が堪えたのだろう。己の部下達の様子にベアトリクスは満足そうにうすら笑いを浮かべる。

「……ああそう言えば今思い出したけれど例の666の方の調査はどうかしら？何か変わった事でもあったかしら？」

「そちらは特には……、強いて言うのならポーランド人民軍から衛士が一人派遣された程度でしょうか……」

「ふん、そう。まあ今はどうでもいいわ」

部下の報告を聞き終えたとベアトリクスは思考はすぐさまあの化け物への対処の方へと移って行った。

元来ならば己のかつての親友であり現在の宿敵とも言うべき人間の率いる中隊の情報に関しては一つ一つ細かく聞き、決して忘れる事はなかったが、今はそんな事等どうでもいいほどの事態となっているのだから……。

???  
S I D E

グチャ、バキツ、ボリツ……。

暗闇の中で何かを喰らい、砕き、食べる音が響く。

光の届かないその空間で、  
“奴ら”は巣穴に引きこんだ餌を必死に食っている。

そいつらは腹を減らしていた。ただただ飢えた腹を満たしたかった。

獲物はいる。巣穴から出れば小さい弱い餌が何匹も何匹も何匹も……。

一匹一匹の肉の量は少ないがそれは数で補えばいい。

喰らい、貪り、満たし、そしてまた喰らい……。

ただただ本能のままに喰らい喰らい喰らい続ける。

それが“奴ら”だ。それが“奴ら”の生きる意味だ。

腹が減るならただただ喰らう。それがたとえ兄弟同胞であっても喰らう。

純粋な、ただただ純粋で原始的な欲求のままそいつらは暗闇から鎌首をもたげる。

さあ、“狩りの時間だ”。



## 第14話 T r a u m — 夢 —

『あれ……う？どこなんでしょう、ここ……』

ふとカティアが目覚めた場所、そこは茜色の空が広がる一面の荒野であった。

草木は一本も生えていない、文字通り何も存在しない荒涼とした大地。

そこは雪こそ降っていないものの、カティア達第666戦術機中隊が戦術機を駆り飛びまわっていたあのベラルーシの大地のようであった。

ただ一つ違うのはそこはベラルーシのような一面の平地ではなく緩やかだが丘のような傾斜があつた事であろうか。

『でも、おかしいです。私は確か基地の部屋で寝ていたはずじゃ……』

カティアは困惑のままに周囲を見回している。

そう、確かに彼女はつい先程までポーランド内の東ドイツ専用に使われた基地、その一室で就寝していたはずなのだ。ワルシャワをテオドールと一緒に歩きまわり、そのままアイリスディーナと共に基地に帰還して部屋に戻ってベッドに横たわった……、そこまでの記憶は残っているのだ。

ならば此処は何処なのだ、少なくともこんな場所は基地の周囲には存在しない。基地の周囲は雪が降り注いで一面銀世界となっているにもかかわらず、此処には雪らしきものは欠片も存在していない。恐らく此処は基地から、いや、ひよつとしたらポーランドからも遠く離れた何処か別の場所なのではなからうか。ならば何故自分は此処にいるのか？カティアの頭が混乱する。

夢遊病で寝ている間に来た、それはあり得ない。カティアに夢遊病の気は無いしそもそもたとえ夢遊病であつたとしても精々基地の中

をうろつく程度で遠くまで行けるはずがない。

だとしたなら後一つ考えられるのは何者かに連れてこられた、と言う事のみである。

しかしそれなら誰が、一体、何の目的で……？

『……まさか、シユタージ……!?!』

カティアの脳裏にまず浮かび上がったのは、常々テオドール達が、否、『黒の宣告』中隊の皆が話題にしているであろう東ドイツの秘密警察組織、ありとあらゆる場所に情報提供者を配置し、不用意な行動、発言をしようものならば即座に捕縛され、尋問、拷問の末に処刑されると恐れられている国家保安省、通称シユタージであった。

西側からの亡命者であり、さらにこれはテオドール、アイリス、デイナーといった限られた人間しか知らない事であるが、自分はこの『月光の夜』事件に東ドイツの体制に反旗を翻そうとした首謀者であり、かつかつて東ドイツに置いて英雄とまで呼ばれた將軍、アルフレート・シユトラハヴィッツ中將の忘れ形見でもあるのだ。

シユタージからすれば何が何でも捕えたいであろう人間の一人と言っても過言ではない。こんな事を云うのもなんだが、己は『黒の宣告』中隊のアキレス腱とも言うべき存在なのだ、下手をすれば基地に乗り込んででも確保に動く可能性があり得てしまう。

『でも……、じゃあ何で私はこんなところに……。普通なら収容所とか牢屋のはずじゃあ……』

だがそれでも疑問は残る。そもそも自分達が今いる場所はポーランド、東ドイツでは無い。シユタージのホームグラウンドである東ドイツ国内ならばともかく、国外かつ同盟国であるポーランドにはシユタージの工作員は殆ど居ないはずであるとアイリスデイナーは言っていた。

たどえいたとしても仮にも一国の治安維持組織であるシユタージが他国の基地に無断で潜入して捕縛する等と言う誘拐紛いの事をするはずがない。そんな事をすればまず間違いなく外交問題となりシユタージからしてもリスクが大きすぎる。

それに何より、そもそも自分がシユタージに連れてこられたのなら

ば普通は収容所か牢屋の中に押し込まれているはずだ。こんな殺風景な平原に置き去りにされる等あり得ない。

『でも、だったら何で私こんなところに……』

しかしそうなるとますます分からない。シユタージの仕業で無いとしたならば一体何故自分は此処にいるのか……。まさか超能力でテレポートしたなどと言うわけではあるまいし……。

『もしかして、此処って夢の中、なんじゃあ……』

ふと頭をよぎるそんな考え、今自分のいる此処は夢の中、つまり自分は単に夢を見ているだけなのではないかとカティアは思う。

確かにそれなら納得はいく。この世界が夢だというのなら自分基地からこんな荒野に突然移動しているという事実も現実の自分が寝ている合間に見ている夢だとするならば十分説明が付く。尻もちをついている土の感触や、頬を撫でる風の感触がやけにリアルである事がやけに気になるが、とりあえずカティアはそう己を納得させる。とはいえそうなるとまた別の疑問が頭に浮かぶのだが。

『……でもそうなると此処から出るにはどうすればいいんでしょうか……。つねつても何も起きませんし、此処で寝れば夢もさめるのでしょうか……』

ためしに己のほつぺたを抓っても何の感覚もない。痛みどころか己の頬に触れているという感覚すらない。それも此処が夢だからなのかかもしれないがそれならどうすれば夢から覚める事が出来るのか。『とりあえず、此処にいても仕方ありませんね……。先に進んでみましょう……』

カティアはよいしょと腰を上げると取るもとりあえず丘の方角へと進み始めた。地面には砂利は無いのか裸足の足が痛む事もない。自分以外に誰も居ない荒涼とした丘を、カティアは一步一步登り始めた。

歩き始めて約20分程、未だに荒涼とした大地は続く。幸い夢だからか、特に喉の渇きも空腹も、疲労すらも覚える事はなかった。とはいえ全く変わり映えのない景色の連続に、カティア自身段々と飽きを感じ始めていた。

『何処まで続くんだろ……。まさかずっとこの一本道とか……。？』  
脳裏に浮かぶのは嫌な、でも実際にあり得そうなそんな想像……。  
もしも想像通りにこの丘に終わりがなかったのなら、ただこの荒涼とした大地のみが広がる一本道のみだとしたなら、自分はいつまで歩き続けねばならないのか、とうかそもそも何時夢が覚めるのか、そして何より、こうして丘を登っていくこと自体が正しい道なのか……。カティアの頭に次から次へと不安やら疑念やらが浮かんでくる。

もつとも今更元来た場所に戻るわけにもいかない。そこでじつと待っていたとしてもそのまま夢から覚めるといふ保証すらないのだ。特に疲れも何もないのだからこのまま歩き続けるしかないだろう。疲れた表情で重々しく溜息を吐きながらカティアは再び足を進める。  
やがて再び歩き続ける事約10分……。

『……あれ？』  
その途中でカティアは足を止めて首を傾げる。彼女の視線の先にあったのはこの荒れ果てた大地にしつかりと根をおろしている木。それも一本だけでは無い。緩やかな斜面の道に沿って、まるで並木のように等間隔で何本もの木が植わっているのだ。木には葉も花も何もない、文字通り枯れ果てているようにしか見えない貧相なものであったが、それでも殺風景な場所に突如現れたそれに対して、カティアは少しばかり驚きを覚えていた。

『これは……ゴールが近いってことかな……。？』  
カティアは直感的にそう思う。このままいけばこの場所から出られる、あるいはただの行き止まりか……。いずれにせよ何処かへと辿りつけるかもしれない。

そう確信したカティアは元気を振り絞り、若干速足で歩きだした。丘の端に沿って植えられている枯れた並木、何の種類かはカティアには分からないがまるで血のような色をした夕日を浴びて佇むその姿は、さながら人のよう、あるいは彷徨える幽鬼か何かのようであった。

『……………』



そのものがなしい光景にカティアは何も言えない。改めて此処は一体何処なのか、と考えてしまう。

夢の世界で此処がどこかと考えたところでどうしようもないのだが、何故か妙に現実感がある。普通の夢とは何かが違う、具体的に何がとは言えないが妙に違和感を感じるのだ。

そんな事に首を傾げながらもカティアは緩やかな傾斜を登っていく。一定間隔に枯れ木の並ぶ代わり映えのしない光景を横目に、カティアは先へ先へと進んでいく。

そしてまた進み続けて数分、ついに並木道と坂道は途絶えて斜面の存在しない平らな平地らしき場所へとカティアは到着する。

そこは先程と同じく草一本ない土がむき出しの荒野、ではなかった。その広場らしき場所の中央には大きな木が一本立っている。空には紅く輝く太陽が昇り、その影響で空は一面血のように赤い色へと染められている。

此処からはるか果てまで見渡せる大地は、見渡す限り荒野だ。先程の並木道と、此処に生えている枯れ木のようなものは何一つ存在しない。文字通り草木一本はえない不毛の、死の世界だ。

ここまでならついさつきまで見慣れた世界だ。驚くに値しない。寧ろ此処まで登ったのに出口も何もない事にカティアが落胆するだけであつただらう。

だが……、

『あ……、あれって……人、と……亀、なのかな……、二本脚で立っていてすごく大きいけど……』

カティアは丘に立つ一本の枯れ木を、正確にはその根元にいるものを眺めながら戸惑っていた。

そこにいたのは、枯れ木の根元に寄りかかって眠る一人の人間の男性、そしてその横に佇む二足歩行の背中に甲羅を背負った人間大の大きさの化け物であつたのだ。

男性はまるで軍隊の制服か何かのような詰襟の白い服を着ており、その顔立ちは上官のファムのような東洋人の特徴を有している。目を閉じたまま横たわり、微かに胸が上下に動いているところを見ると

どうやら眠っているようだ。

そしてその傍らでそんな彼を見守るように見下ろす人間大の化け物、と言つていいのかどうか分からないが生物は、第一印象からすれば二足歩行の亀といった風貌をしている。

だが、細部は現実の亀とは異なり攻撃的で刺々しい。両手両足には鋭い爪が備わり、肘からはまるで第六の指のように鋭い爪が覗いている。口元には下顎から一對の巨大な牙が口外から剥き出しになって伸びており、その恐ろしげな風貌も相まってその生物の凶暴さを引き立たせている。

このようにどう見てもただの生物とは思えない、寧ろただの化け物としか思えない怪物ではあるが、何故かカティアはあれは何だという疑問を抱きこすれ不思議と恐怖心は沸き上がってこなかった。

それは常日頃BETAという異形の化け物共と生死を賭けた戦いを繰り返していたが故に慣れてしまったのもあるかもしれないが、それ以上に、彼女はその生物に見覚えがあったのだ。

『そうだ……、あの化け物……、はちよつと失礼かな……、えーと、亀、さん？つて確か……、あの第二次パレオロゴス作戦で私達を助けてくれた……』

カティアはすぐさま思い出した。あの、BETAからミンスクを奪還する戦争でハイヴから出現した万を超えるBETAを一瞬のうちに殲滅し、おまけとばかりにハイヴを叩き潰して結果的に自分達部隊を、東西連合軍の危機を救った怪獣。目の前にいる生物はそれにそっくりなのだ。無論大きさはあの怪獣とは比べ物にならないほど小さいが、直立した牙の生えた亀と言うシルエットはあの怪獣とほぼ同じであった。

何故こんなところにあの怪獣がいるのか、と言うよりそもそも大きさが違うからあの怪獣とは別種なのか、そしてその怪獣の近くでぐつぐつと眠っているあの人は一体何者なのか、それに何より自分はこの夢の中から脱出できるのか？カティアの脳裏に次から次へと疑問が浮かび上がっては消えていく。

とはいえいつまでもこんなところにいるわけにもいかない。今の

ところあの生物は此方には気が付いておらず、今からもと来た方向へと逃げだせれば無事に逃げきれぬだろう。

だが戻ればまた先程の何も無い場所に行くだけであり、このままこの夢の世界にとどまったままになる可能性とてあり得る。今のところ現実に戻る可能性を知っていいそうなのはあの生物と寝ている青年だけなのだ。どうせ聞くならばその寝ている青年に聞きたいところだがそのすぐそばには牙をむき出しにした大亀がいる。

下手に行つて襲いかかられはしないか、噛みつかれたり引つかれたりすれば痛いどころでは済まないだろう……。カティアは用心しながらも足音を出さぬようゆっくりゆっくりと後ろに下がる。

……が。次の瞬間……。

『グルル………？』

『………へ？』

何気なく、本当に何気なくなのだろう、ほんの僅かに顔を上げた怪獣の視線とカティアの視線が交差し、両者は一瞬硬直した。カティアは静止したまま目を見開き、口をぽかんと大きく開けている。身体はまるで石になったかのように動かない。先程まで後ろへ下がろうと動かしていた脚も今では地面にへばりついていて動かさぬように動かさずにいる。

一方怪獣も思いもしない侵入者に驚いているのか眼を見開いてカティアを黙って見ていた、が、直ぐに目つきを鋭いものへと変えるとまるで威嚇するかのように喉から唸り声を上げる。怪獣の雰囲気の変化にカティアの身体はびくりと痙攣するが、それでも本能なのかはたまたま恐怖によるものか身体はピクリとも動かさない。声を出そうにも舌が顎に貼りついてしまったかのように動かさず喉からは苦しいな吐息が漏れるのみだ。

カティアを威嚇するように、かつまるで観察するかのように睨みつけながら眺める怪獣、その怪獣の視線がふと彼女の胸元、正確にはそこに輝く赤い石へと向けられる。

『グウウ……』

その石を見て何かを感じたのか怪獣は低く唸ると足元に寝転がっ

ている男性を軽く足のつま先でつつき始める。青年はうつとおしうに体をよじるが起きる様子はない。怪獣は再度青年を小突くが青年は嫌そうに顔を歪めて唸り声を上げる。

『……んん、ンだよ純夏……、まだいいだろ、だって今日は日曜で……グホオ!?!』

のんきに寝言を呟く青年であったが、いい加減我慢が出来なくなった怪獣に腹部を思い切り踏みつけられ、その激痛に悲鳴を上げながら飛び起きる羽目になってしまった。

青年は苦しげにせき込みながら暫く四つん這いとなっていた。あんな太い脚で思い切り踏まれたならば骨が1・2本へし折れるなり内臓が破裂するなりしそうではあるが、見たところ青年にそんな感じはない。やはりここが夢であるからであろうか、そしてあの怪獣と青年はこの夢の世界の住人だからであろうか、とカティアは硬直しながら考える。

『ゲホッ！ゲホッ!!な、何しやがるんだガメラ!!いきなり気持ちよく寝ている俺を踏みつけやがって!!現実だったら冗談抜きで死んでたぞ、クソツ!!』

『グルル』

『……いくら呼んでも俺が起きなかつたから強硬手段?あのなあ、次目覚めるまでまだ時間あるだろうが!!その間くらいゆっくり寝かせてくれたっていいじゃねえか!!それともなんだ、まさかもう奴らが目を覚ましたのか?』

『グル、グルルルル』

『……は?客?いや何言ってるんだよガメラ。此処は俺とお前の精神世界、俺達以外誰も居ないし誰も入ってこれないだろう、が、あ……?』

眼前の怪獣を怒鳴りつけながら何やら話していた青年は、面倒くさそうに視線をカティアへと向けてくる、が、カティアの姿を視界にとらえた瞬間、段々と声が小さくなっていきその表情も段々と呆けたものへと変わっていく。その様子はまるで幽霊か何かを見たようであり、先程までの荒れていた雰囲気は完全に消え去っている。

一方カティアは此方にポカンとした様子で凝視してくる青年の姿にほんの僅かだが身体の硬直が解けつつあった。この夢の中に怪獣と一緒にいた上に会話までしていた以上ただの人間とは思えないが、とりあえず自分と同じ人の容姿をしており怪獣と違って話は通じそうな人間であることへの安ど感が心の中から沸き上がってきた。

暫くカティアを見て呆けていた青年は、ハッと我に返ると表情を引き締めてカティアへと疑わしげな視線を向けてくる。彼のその視線を、カティアは黙って受け止める。

青年はカティアをジツと観察していた、が、先程の怪獣同様、彼女の胸元に下げられたペンダントの赤い石を見た瞬間、驚いたような表情へと変わる。

『その、勾玉は……』

『え？ん、これ？』

青年の口にした言葉にカティアはうろたえながら首から下げられたペンダントを持ち上げる。鉤状に加工された石は、まるで炎の中で燃える石炭か何かのように赤く輝いており、何よりまるで石の内側から熱が発せられているかのように熱くなっている。

石の変化に驚きの表情を浮かべるカティアを青年は黙って眺めていたが、ややあつて軽く一つ咳払いをして、カティアの意識を此方へと向け直させる。

『……まあ、その、立ち話もなんだし……』

青年は先程まで己の眠っていた枯れ木の根元へと腕を差し出しながら途切れ途切れにこちを開く。

『とりあえず、此処に座らないか？生憎とお茶もなにも出せないけど、さ……』

『は、はあ……』

どう見ても戸惑いを隠せない様子の青年の姿にこちらでも戸惑いながら、カティアはおずおずと首を縦に振るのだった。